

Fate/EXTRA 汝、復讐の徒よ

キングフロスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——まだ、消えたくない。消えられない。こんな所で終われない。

月の聖杯戦争。その選定の場で、諦めの悪い強き意思を見初めた者が、もし……剣を携えた男装の少女でなく、赤い外装に身を包んだ武人でもなく、妖艶な半獣の女性でもなかったら。

もしも、紅蓮の炎を纏いし復讐者だったなら——

これはifのEXTRAの物語。

# 目次

プロローグ 始まりの時	1
プロローグ2 そして聖杯戦争へ	16
第一章 『awakening/progrmized heave n』	
私は無知なひよこです	23
そうして私は打ちひしがれる	32
私には覚悟が足りない	45
S・S・F	57
ゼロという最弱の称号	68
対戦相手は	76
他サーヴァントとの初遭遇	87
トリガーを取得せよ	98
サーヴァント・アヴェンジャー	109
遠坂凛と間桐慎二	120
王者の風格	131
迷える仔羊は教会へ往く	142
霊基再臨への道	154
黄金色の瞳	165
トレジャーハント(という名の略奪)	177
嗚呼、それでこそ復讐者	187
暗躍?する慎二。奔走するはくのん。	198
決戦場への片道切符	210
猶予期間最終日、突入	221

とれじやーはんたー・はくのん

記憶の中の友情

真名看破：ライダー

Moon nightmarer in the Despair

第一回戦決戦 開幕の刻、来たれり

竜の魔女と偉大なる海賊

穿つは復讐の業火

虚栄に満ちた勝利

## 第二章 『arousal／border alliance』

始まる第二回戦

謎を追う者

蒼崎橙子の気まぐれ

老騎士ダン・ブラックモア

毒と迷路のスパイラル

あなたは星の導きを信じますか？

忍び寄るは毒の影

満ちる殺意／毒

騎士の矜持

星を詠む者

月明かりの下に出でて

真名看破：アーチャー

第二回戦決戦 開幕の刻、来たれり

森の賢人、無貌の王

毒の名医

236

249

259

271

275

286

297

311

321

332

343

357

369

383

395

405

416

429

441

455

467

479

491

たとえ、腕をもがれようとも

秘めたる憧憬の果て

幕間 『dead end (overture)』

“死”との遭遇

第三章 『disillusion/coma baby』

不思議の国の少女(ありす)

あたし(ありす)とあたし(アリス)?

怪物退治の手掛かり

ヴォーパルの剣を求めて

怪物退治とお茶会への誘い

私の名前は

おとぎの国の住人?

狂い始めるお茶会

真名看破:キヤスター

第三回戦決戦 開幕の刻、来たれり

砂糖菓子少女は歌い、竜の魔女は嗤う

夢の終わり

彼女たちの戦い

招かれざる復讐者

第四章 『hiding/meet Fate for your

s』

謎の美少女JK、現る

漆黒の瞳を持つ女

『岸波 白野』とは?

午後は優雅なお茶会を

502

513

525

540

552

568

581

593

609

621

635

645

653

666

681

693

714

727

738

749

761

希望の糸を、手綱へと	773
新たなる共犯者	787
傍迷惑な神父からのありがた迷惑な試練	801
真名開示：アヴェンジャー	814
マトリクス：アヴェンジャー	828
強者への挑戦	831
運命／宿命の邂逅	842
悪竜現象	852
邪竜よ、その心臓を捧げよ	861
真名看破：■■■■■	873

## プロローグ 始まりの時

気が付けば、目覚めはいつも唐突だった。夢を見た感触もない。知らぬ間に、いや、いつものように自然に通学路を歩いている。

ただ、いつもと違うとするなら、頭痛が酷いという事だろうか。少し前から、日増しに頭痛は強さを増していき、そして今日。頭痛はついに警鐘のごとく脳に鳴り響いた。

その日。あまりに強い痺れに、平時より二分だけ早く目が覚めてしまいうくらいには、身体への影響があった。

朝の通学路に行く。時刻は午前七時半、まだ余裕を持てる登校だ。雲一つない晴天。なのに季節ははつきりとしらない、曖昧なもの。暑くもなければ寒くもない。

今が何月の何日なのかを考えようとするが、狙ったかのように目眩で全てが真っ白になる。気を抜けば昏倒して、朝のベッドに戻っているかもしれない――

なんて、そんな事は有り得ないのだろうが。倒れたなら、次に目を覚ました時にまず視界に入るのは、保健室の天井か、病院の天井か。はたまた『知らない天井が目に映った』という決まり文句を呟かなければならないかもしれない。

急ぎ足のクラスメート達は、我関せずとばかりに先へと駆けて、あるいは歩いていく。それはそれで冷たいとも思わないでもないが、実際に倒れた訳でもなし。ぼーっとしている人間に声を掛けるような物好きは、そうは居ないだろう。

そう、いつも通りの登校風景。お喋りで賑わう通学路。何一つ変化がない。何一つ変化はない。

深く考えると、また目眩で視界が真っ白になりかける。

今日は、校門の前は登校する生徒達で混み合っている。どうやら登校してきた生徒達が呼び止められているらしい。

何が起こっているのかと言えば、校門には黒い学生服が一人。生徒会長である、友人でもある柳洞一成の姿が見える。どうやら彼が生徒達を呼び止めているようだ。

そして、この初体験は、既に分かっている。一成は視線に気が付くと、人波をかき分けてこちらにやってくる。

「おはよう！ 今朝も気持ちのいい晴天でたいへん結構！」

黒い学生服に似合い、黒い短髪と眼鏡がよく映える男子生徒。他の一般生徒は黄土色の制服を着用しているが、彼ら『生徒会』のメンバーは、黒い学生服の着用を義務付けられていた。

ちなみに、控えめに言っても、イケメンの部類に入る彼は、その真面目で勤勉な性格と人当たりも良い事から、多くの生徒達からも慕われている。

「ん？ どうした、そんなに驚いた顔をして。先週の朝礼で発表しただろう、今日から学内風紀強化月間に入ると」

そんなつもりもなかったが、顔に出ていたのだろうか。彼は初めて開示する情報のように、丁寧なチュートリアルを口にした。

知っていた。知っている。この展開は知っていた。もう、幾度となく知っている。

瞬間。思考したと同時に、頭痛がする。目眩で、一日の開始に戻されるようになる。その強制退出に、意識をかみ殺して堪えた。

「では、まずは生徒証の確認だな。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

おまえは誰だ、という質問。決まっている。いつもは目眩で曖昧にされる質問に、はつきりと回答する。

「これでいい？」

ポケットの中から生徒証を取り出し、突き出すように、顔写真と名前の入っている表を面にして一成に見せる。

彼は提示された生徒証を軽く眺めると、爽やかな笑顔で、

「よろしい。天災はいつ起こるか分からんものだ。有事の際、身分証明が確かだと皆が助かる」



確認が取れたので生徒証をポケットに突っ込むように押し込む。しかし、それにしても、どうにも吐き気がする。気分が悪いのは自分の体調不良とかではなく、吐き気がするのは、自分以外の全てだ。

この世界そのものが、同じすぎて気持ちが悪い。

だが、それとはお構いなしに、今度は一成による身だしなみチェックが入る。

「それでは制服へ移ろう。……襟よし！ 裾よし！ ソックスも……よし！」

気前よく確認の声を上げる彼の言葉が、今は無性に気分を悪くする。退いてほしい。その繰り返しをやめてほしい。黒い制服を押しつけて先に進む。

乱暴に押しつけられた彼は、

「次は鞆の中身だが……、……うむ。ノート、教科書、筆箱、以上！ 違反物のカケラも見つからん。爪もきっちり揃えられているし、頭髪も問題はない……と。うむ、実に素晴らしい。どこから見ても文句のつけようのない、完璧な月海原学園の生徒の姿だ！」

誰もいない虚空に向かって、高らかに独り言を言っている。

頭痛がする。悪寒をのむ。確信がある。

ここは違う。ここは、決して自分の知る学校じゃない……！

行かないと。早く目覚めないと。何もかも手遅れになる。何故――

――理由は分からない。けど、漠然とした中で、その確信だけはあった。

目覚めは――一体、誰の為に――

焦燥感と頭痛は増すばかりだ。けれど、このおかしな状況の突破口を見つけれないまま、結局、夕方になってしまった。授業も隣人の言葉も、全く頭に入ってこなかった。いや、そんなどうでもいい事より、この状況を脱する事こそがもっと大事な事だ。

視界は相変わらずノイズに覆われている。

違和感。空疎間。空虚感。

誰か説明して欲しい。教えて欲しい。この感覚の正体を。でも、その答えを周りにいる他者からは得られない。それだけは確実に言える。

どこかに……あるのだろうか。この感覚に答えを与えられる鍵のようなもの——

教室には数える程しか生徒が残っていない。ここに得るべきものは最早ない。自分も早く行かなければ。

教室を出ようと、扉に手を掛けた所で、背後から声を掛けられる。まだ残っていた女生徒のようだ。

「ねえ。岸波さんもおかしいと思わない？ いつも居た子どもほとんど休みになっていくのよね。ねえ、この学校ってちよつとヘンじゃない？」

後ろを振り返り、女生徒の顔を見るが、もうノイズにまみれてどんな顔か判別も認識も出来ない。時間が無い。いちいち受け答えしている時間が惜しい。

彼女の問いに答える事なく、手に掛けていた扉を開いて廊下へと出る。どこに行くべきか。どこに行かなければならないか。

廊下は普段の夕方にしては、恐ろしいくらいひっそりと静まり返っており、分かる範囲に人は居ないようだった。

ひとまず、何でもいいから情報が欲しい。ここは二階の廊下で、教室を出てすぐ右手には一階と三階へ繋がる階段と、そこを過ぎると図書室があった。ちなみに、自分のクラスは2—Aの教室だ。

まずは図書室へと向かう。この時間なら、まだ図書委員や勉強している生徒が少なからず居るはずだ。

何か無いかと期待を込めて、吐き気を堪えて図書室の扉を開く。教室で言えば二部屋分の広さを持つ図書室であるが、中はたくさんの本とそれらを収納する本棚。読書や勉強に使う机と椅子、そして本の貸し借りを受け付けるカウンターがあるのみ。

そう。人間は誰一人として居なかった。無駄に広い空間は、人気無

く空虚感で覆い尽くされている。

ここじゃない。違う場所に行かないと。

焦り図書室を後にすると、階段横の掲示板がふと目についた。普段何気なくスルーしているそれ。何故か、今は無性に見なければ、という焦燥感に駆られたのだ。そこに、大事な何かがあるような気がして

---

視界はノイズで邪魔されて、間近に行かなければ文字を読む事すら難しい。急ぎ掲示板の前まで走ると、目を見開く勢いで内容に目を通していく。

『月海原学園新聞 最終号』

「怪奇 視界を覆うノイズ」

学園内に残った生徒達にお知らせです。

予選期間は、もうすぐ終わります。

はやく真実を見つけだして、きちんとお家に帰りましょう。

さもないと――

一生、何処にも帰れません』

その文面に、背筋が凍るような寒気を感じた。意味不明な内容のはずなのに、何故か、それを無意識下に受け入れている自分がいる。決してデタラメなどではない、この掲示板に貼られた新聞は真に忠告……いや、警告を発しているのだ、と。

焦りばかりが募っていく。早く糸口を掴まないと、本当に手遅れになってしまう。上と下、どちらに行くかを考えて、直感的に一階に行く。三階には縁も無ければ行った機会もほぼ無い。それなら、まだ違和感の強い一階の方に行くべきだろう。

そうと決めると迷わずに階段を駆け下りる。普段ならはしたないと一成あたりから注意を受けるだろうが、そんな気を回すほど余裕は無かった。

そして、

「!!」

一階に下りた瞬間、強烈な違和感に襲われた。階段の右手へと歩いていく誰か。紅い服を纏った生徒——そんな目立った格好を忘れるはずもない。同じクラスで転校生の、レオだ。

彼が視界に入った瞬間に、締め付けられるような威圧感に挫けそうになる。普段のレオからは感じた事のない、圧迫されそうなほどのプレッシャー。やはり、何かがおかしい。

そして、彼を追っていく生徒の姿があった。あれは……同じクラスの——

そうだ、この学校を支配する違和感。レオからだけではない、思い起こせば、様々な空虚感があつたはずだ。

思い出せ。居るはずもない人間、消えていく生徒。剥がれていく世界観。

目を背けるな。真実は何か。

目を　　るな。お前の知る世界は何なのか。

目を背けるな。ここに居る、その意味を。

追おう。この目覚めを、裏切らないために——。意味の無かった事にしないためにも——。

彼らが消えていった廊下へ、自分もレオを追っていた彼と同じように走る。一年生の教室があるその廊下、そしてその先は行き止まりとなっていたはず。

そして案の定、すぐに廊下の先で、レオと、同じクラスの男子生徒の姿が目に入ってきた。何やら会話しているらしく、意図せず気配を殺して様子を窺ってしまう。

紅い制服……おそらくは改造、あるいはオリジナルのものである。その制服には金髪がよく似合っており、彼は後ろの男子生徒に背を向けたまま、壁に手を当てて話しかけていた。

「本当によく出来ていますね。デイトールだけじゃなく、ここは空気でさえリアルだ。ともすれば、現実より現実らしい。ねえ……貴方達はどう思います?」

貴方達？ 一瞬気づかれたかと思ひ、ドキリとする。思わず口を両手で覆い、意味が有るのかも分からないのに今更ながら息を潜めて。が、レオは自分を無視して、振り返り彼と話し始めた。むしろ、こちらに気づいてなどいないのでは……？

「こんにちは。こうして話をするのは初めてですね」  
敵意など全く感じさせない笑顔を彼に向けるレオ。だが——その背後には、もつと別の何か潜んでいる。さっきの恐ろしい程の重圧……それが関係している。何故か、そう思った。

「この生活も悪くはありませんでした。見聞の限りではありましたが、学校というものに僕は来た事がなかった。そういう意味ではなかなか面白い体験が出来ましたよ」

レオの言葉に、自分だけでなく、男子生徒でさえも意味が分かっていないようだが、構わずレオは続けた。

「……でも、それもここまでです。この場所は、僕のいるべきところではない。寄り道はしよせん寄り道。いずれは本来の道へと戻る時がくる。それが今……。少し楽しみすぎましたね。こんなにも遅れてしまうなんて」

それだけ言うと、レオは踵を返し、こちらに背を向けた。

「さようなら。——いや、違いますね。お別れを言うのは間違いだ。今の僕は理由もないのに、また、貴方に会える気がしている。だから、ここは、『また今度』と言うべきでしょう」

ますます訳が分からないレオの言葉。困惑する暇も無く、レオは別れを、いや、再会の約束を告げる。

「では、先に行きますね。貴方達に幸運を」

そう言ったレオは、一瞬、確かに、こちらに視線を向けた。彼だけでなく自分に対しても、だ。

やはり、自分が覗き見ていたのはバレていたらしい。そんな事を考えているうちに、壁に向かったレオは——その場から消えてしまった。否、壁へと向けて消えていったように見受けられる。

そして、もう一人の男子生徒も、レオと同様に壁に手をかけ、消えてしまった。

彼らが消える瞬間、ジジッと、視界のノイズが強くなり、脳幹に衝撃が走った。これは一体……どうということだ？

ここが、この違和感の終着点、という事なのだろうか……。

自分以外誰も居なくなった廊下の先で、自分もまた、彼ら同様に吸い寄せられるように壁に手をかける。

そうだ、ここが終着への出発点。真実を、この違和感の元を——。真実に目を凝らさなければならぬ。

決意した瞬間に、場の空気がガラリと変わった。コンクリートの壁だった場所に姿を現した扉。それは入り口。それはこの世のモノに非ず。この入り口から行けるのは、ありえない世界に違いない。

けれど、行かなければならない。偽りの日常に別れを告げ、自らがあるべき場所へと足を踏み出す——

異界の入り口——

扉の先は、その表現がびつたり場所だった。一見、ただの用具室にしか見えないが、それにしても張り詰める空気は冷たく異質だ。そして何より、それを裏付けるかのように、目の前には、つるりとした肌の人形。それも、自分と同じくらいの大きさを持つソレが、静かに自分に体を向けて立ち尽くしていた。

これは、この先で、自分の剣となり、盾となるもの……。どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。

何かが分かった訳ではないが、何をすればいいのかだけは示された。この先に、少なくとも違和感の手がかりがあるのだろう。

——奇妙な人形の従者と共に、とにかく、先へ進む事にしよう。

道の先は暗く、果てしない闇が広がっている。幸い、足元は光る通路であったおかげで、なんとか先に進んでいた。

なんとも奇妙な感覚だ。空中を歩いているような、浮遊感のような感覚に囚われる。確かに地に足はついていて、というのに。

少し進むと、周りの風景に変化が現れる。今度は電子データの中に居るかのような錯覚を起こさせる景色の数々。それらが自分よりも速く周囲を通り越していく。

そして、再び景色が変わる。今度は半透明な足場と壁に覆われて、変調もない景色に覆われた少し狭い廊下。

最早あの学校の面影など、微塵も残っていないかった。床も壁も、空気、気配、全てが違っていた。

いつ物陰から怪物が現れてもおかしくない異様な空間。この場所を形容するには、ダンジョンの語がぴったりだろう。

少し開けた空間へ出ると、再びあの声が聞こえてくる。入り口で聞いた、あの声だ。

『ようこそ、新たなマスター候補よ。君が答えを知りたいのなら、まずはゴールを目指すがいい。さあ、足を進めたまえ』

怪しさが拭えないが、今はこの声に従う他ない。言葉通り、歩を進める事にしよう。

それからすぐの小部屋へ到着すると、その部屋の中心に四角いキューブらしきものが目に映る。半透明で、そのキューブの中心が光りを放ち輝いていた。

『目の前に光の箱があるだろうか？ それはアイテムフォルダと呼ばれるものだ。試練を受ける者達への餞別として、君に贈ろう。触れて、開けてみたまえ』

言葉のままに、そのキューブに手をそつと添えてみる。すると、ロックの解除が外れたかのように、キューブはバラけると中で光り輝いていたものが手元へと流れるように入ってくる。

『それはエーテルと呼ばれるマナの塊、その欠片だ。それを使えば、傷ついた君の人形を回復させられる』

エーテル……？ マナ……？ 回復……？

不可思議な単語と、物騒な言葉に頭を傾げながらも、次の通路へと足を向ける。しかし、そこには何やら浮かぶ球体が無作為に飛び回

り、行く手を阻んでいるらしかった。

『それは敵性プログラム……エネミーだ。君に敵対行動をとるように出来ている。触れるとすぐに戦闘になるだろう』

「!!?」

とうとう、物騒だと訝しんでいた事が現実となる。エネミー、つまりは敵。倒さなければ、先へは進めないという事。しかし、どうやって……。

『……といっても、実際に闘うのは君ではない。先程与えた人形だ。君はあまりに非力だからね。別に君が闘うなどという心配は必要あるまい』

馬鹿にされている気がしないでもないが、しかしその言葉は事実。だからこそ、それを代行する者としてこの人形が居るのだから。

『人形が攻撃を受け続け、もし壊れるような事があれば……君を守る者はもういない。すなわち、死だ。注意したまえ。なに、怖がる事はない。人形が勝手に闘い、倒されるのではない。君が人形に指示を出し、人形が指示通りに行動するだけだ。さあ、やってみたまえ』

簡単に言ってくれるが、こちとらただの学生で、戦闘に関してはド素人なのだ。何をどうするなんて、全く分からない。

『……ふむ。仕方ない。しばらくは私の言葉通りにやってみたまえ』  
そうして、お手本を掲示されながら、エネミーの討伐、如いてはダンジョンの先を進む事になった。

簡単に言えば、戦闘で指示を出すのはおおよそ三つ。攻撃、防御、突破である。分かりやすく言うと、アタック、ガード、ブレイクと言い換えられる。それらを状況に応じて指示を出してやればいいとの事らしい。

うむ、実に簡単だ。これなら素人でもある程度は立ち回れるだろう。

気がつけば、周りの風景にも変化があった。さつきまでの虚無かのような真つ黒な世界は消え、代わりに海の底にでも居るかのような、



深い深い青が周りを囲んでいる。いわば、海だ。水が入ってこないのは、この不思議な半透明の床と壁のおかげだろうか。

時折、恐竜の骨のような、化石のようなものが漂っており、深海と相まって不気味に映って見える。

出来れば早くこんな場所からおさらばして、目的地、終着点へと辿り着きたいものである。

何度かのエネミーを倒し、ようやく終着点、『最後の間』らしきものが見えてくる。渦潮のようなものに覆われたそこに、意を決し足を踏み入れて、中へと進入する。不思議と、渦潮は触れても何も感触はなく、すんなりと通り過ぎる事に成功する。

さあ、これでようやく答えを得られる時が来た。この違和感の正体を、ノイズや目眩の原因を――。

そして、辿り着いた。

壁に出現した扉を抜け、長い長い通路を辿った先の先……。そこは、息苦しさすら感じる荘厳な空間。今は失われた、聖霊の宿る場所。ここがゴール。そう思えた。

ふと目を周囲に向けてみれば、そこに、誰か倒れていた。顔を確認すると――先程レオを追っていた男子生徒だ！

声を掛けてみるが、返事は無い。ゆすり起こそうと体に触れ、気付く。

――冷たい。

思わず、先程の言葉を思い出した。

『すなわち、死だ』

よくよく見れば、彼のすぐ側には自分と同じ人形が、膝をついて倒れているではないか。それと彼の冷たさが意味する事とは、つまり――

目の前の事実に関節の軋む音を立てながら、彼の傍らに崩れていた人形が、カタカタと音を立てて立ち上がる。

「ギシリ。」  
「関節の軋む音を立てながら、彼の傍らに崩れていた人形が、カタカタと音を立てて立ち上がる。何度かエネミーと闘った今なら分かる。あれは、敵だ。」

人形は、大きく体を振ったかと思うと、そのままこちらに突進してきた。

「く!?!」

突然の突撃に、当然ながら怯んでしまう。焦り、人形に指示を出すのが、焦りのせいで読み違えてしまう。

敵の攻撃をガードするように指示を出したら、その瞬間に敵はガードを突破するための勢いよい回し蹴りを放ち、こちらがガードを崩すように指示を飛ばせば、大振りの隙を狙って、攻撃を放つ前に敵から攻撃されてしまい……。

どの指示も、悉く弾かれてしまう。そうこうするうちに、こちらの人形はどんどんボロボロになっていく。それが余計に焦りを募らせ、敵の動きを読み違えるといった悪循環に陥ってしまう。

そして――

「――あ、」

人形は、敵の大きな蹴りを受けたのを最後に、ガタンと床に崩れて落ちてしまった。負けた。闘える者は居らず、残された自分に待つのは死――。

絶望に支配され、思わずその場に人形と同じく崩れ落ちてしまう。終わった。何もかも。全て。もう何も残されていない。ここで、このまま死を待つばかり……。

『……ふむ、君も駄目か』

倒れ伏す身に、遠くから声が聞こえた。

『そろそろ刻限だ。君を最後の候補とし、その落選をもって、今回の予選を終了しよう。――さらばだ。安らかに消滅したまえ』

声はそう言い放った。残念そうに、かつ、祈りを捧げるように。この結末が覆らないと断言しているかのように。

否定する力もなく、ぼんやりと床を見つめる事しか出来ない。その言葉通りに、このまま死んでいくのだろうか。

突然、霞んだ視界に、土色の塊がいくつも浮かび上がった。いや、今になって見えただけで、元からそこにあったのかもしれない。

それは、その塊は、幾重にも重なり果てた月海原学園の生徒達だった。

どうやら、ここで力尽きたのは先程の彼だけではなかったらしい。ここまで辿り着き、しかしどうにも出来ず、果てていった者達は。

……そして間もなく、自分もその仲間入りするのだろうか。

——このまま目を閉じてしまおうか。そうすれば楽になれる。

やれる事はやった。これ以上何を望む？

もう終わりにしてもいいのかもしれない。本当に？

本当に、これで終わってしまったって良いのか？

答えは「否」だ。諦めたくない……。そう思って、起きあがろうと力を入れた。けれど、体中に激痛が走り、まったく動かない。人形の敗北Ⅱ使役者の死とはこういう事でもあったのだろうか。

それならば……。いや、それでも——

このまま終わるのは、許されない。全身に駆け巡る痛みは、もう許容外の感覚だ。あまりに痛すぎて、目から火が出るところの話じゃない。痛覚だけで眼球が燃えている。五感是指先から断裁されていく。

怖い。痛みが怖い。感覚の消失が怖い。先程見た死体と同じになる事が怖い。

……そして。無意味に消える事が、何よりも恐ろしい。

ここで消えるのはおかしい。おかしいと、ノイズにまみれた意識が訴える。ここで消えるなら、あの頭痛は何のために。ここで消えるなら、彼等は何のために。

——立て。

「恐いままでもいい。痛いままでもいい。その上でもう一度、考えないと。」

「だってこの手は、まだ一度も、自分の意志で闘ってすらいないのだから——！」

「へえ……？ 死を前にしてなお、立ち上がろうと？ これはまた、酔狂な人間の居た事です。ですが……嫌いではないですね、その反逆の意志。どうせ貴方が最後の候補なのだし、私の為にも、せいぜい利用させてもらいましょうか。さあ、立ちなさい。その魂、私が貰い受けましょう」

ガラスの碎ける音がして、共にさつきまで薄暗かった部屋に光が灯った。軋む体をどうにか起こし、頭痛に耐えながら辺りを眺める。

部屋の中央には、いつの間にか、ぼうつと何かが浮かび上がりつつあった。

その姿は——

外見はほとんど普通の人間と変わらない。だが違う。明らかに。

ここへ来るまでに出会った敵などとは比べ物にならぬ程の、人間を超越した力。触れただけで蒸発しそうな、圧倒的なまでの力の滾り。それが体の内に渦巻くのが、嫌でも感じ取れる。

漆黒の鎧を纏い、何かを象った紋章を旗に掲げる美しい少女。それでありながら、狂おしい程の憎悪、絶望、憤怒といった負の感情が、彼女の周りから吹き荒れるように自身へと叩きつけられるような錯覚。冷たい美貌を身に着けた彼女は、その顔にニヒルな笑みを浮かべて言う。

「二応、形式的なものらしいので、仕方ないですが尋ねましょうか。そ

れでは、問いましょう。貴方が、私のマスターですか？」

『マスター』という単語、嫌々そうに口にする彼女に、

「はい」

「すぐくスマート過ぎる回答をもって応えた。

「……ふん。まあ、これで契約完了としますか。それでは……サーヴァント、『アヴェンジャー』。ここに参上しました。せいぜい無様に足掻きなさい、その可愛らしい顔を歪ませて、ね」

ここに、最後のマスターと、そのサーヴァントが契約を果たした。0から10へと至る少女と、その従者たる復讐者の物語が始まりの鐘を鳴らしたのであった。

## プロローグ2　そして聖杯戦争へ

彼女は私の返答を受けるや、その手に持った旗の柄の先端を差し出してくる。どうやら、それを掴んで立てという事らしい。

鋭く尖った先端を持つのは、少々躊躇いがあり、勇気が必要だったが、せっかく差し出してきているのだから、その柄の先端を掴み、まだへたり込んでいた体を無理やり起き上がらせる。

と、握った手が僅かに発熱した。……鈍い痛み。一瞬手の平を切ったかと錯覚するが、すぐにそうではないと気づく。手の平ではなく、手の甲。そこに、何かを刻まれたような、そんな痛み。

そこには、3つの模様を組み合わさった紋章にも見える、奇妙な印があった。刺青のように皮膚に染み込んでいる。

呆気にとられて、その模様と目の前の人物を交互に見る。何が起こったのか、さっぱり分からない。

と。  
ギシリ。

背後の物音で我に返った。振り向くと、そこには先程闘ったあの人形が身構えていた。

惨敗を思い出し、思わずたじろぐ。すると——漆黒の少女は、たじろぐ私の姿を鼻で笑って、私の前に立った。

「まったく、情けないマスターだこと。何を恐れるというのです？ あんな木偶人形に、我が憎悪の炎がせき止められるとでも？」

面白くなさそうに、少女は大きな旗を掲げて、人形へとその旗の尖った切っ先を向ける。そして、声高々に宣言する。その声に、ありったけの侮蔑と憎しみを込めて。

「私は竜の魔女。復讐を果たす者。たとえ神だろうと、聖者だろうと、我が憎悪と憤怒の炎で焦がし焼き尽くすのみ！ さあ、愚かなるマスター。光栄に思いなさい？ 貴方に私の指揮をとらせてあげる。凡人らしく、無様に運命に抗ってみせなさい！」

黒き魔女は、私に指揮を任せると、そう言った。邪悪な笑みを浮か

べて、私に足搔けと宣った。

……いいじゃないか。ここまでバカにされては、流石の私も黙ってはられない。この高慢知己な魔女に、少しでも見直させてやろうではないか！

「行くよー！ アヴェンジャー!!」

私は覚悟を決めると、アヴェンジャー、そして人形へと意識を集中する。同時に、アヴェンジャーの纏う空気も戦闘態勢に移行した事で、より重圧で濃厚な殺意を帯び始めた。

その時。先制攻撃とばかりに、人形がアヴェンジャーへと突撃を仕掛ける。大きく振りかぶった腕がアヴェンジャー目掛けて振り下ろされようと――

「アヴェンジャー、ガードして!!」

その刹那、私は叫んでいた。私のがむしやらで必死の叫びに、アヴェンジャーはニヤリと口の端を曲げると、その手にした旗の柄で、人形の腕を受け止めた。

ガードされ、動きを一瞬止められた人形。すかさず私は次の指示を飛ばす。

「アヴェンジャー、そのまま人形を足で押し出して、そこに旗をお見舞いしてやって!」

「ふん……」

指示の通り、アヴェンジャーは人形の胴体に蹴りを入れ、がら空きの胴に綺麗にキックが炸裂する。蹴飛ばされ、怯んだ人形の背をその頭上から大きな旗の柄が襲いかかった。

「今度は柄で足下をガード! そのままガードした柄で人形に思い切り殴りつけて!!」

強烈な一撃を受け、地面に倒れ伏した人形は、回転する要領で起き上がりと同時に蹴りを放とうする。

しかし、そこには既に旗が立てかけられており、蹴りはアヴェンジャーへと迫る事はない。

そして、またしても攻撃を防がれて一瞬止まった人形の腹に、槍の柄の先端が叩き込まれる。

人形は旗の殴打を受け、大きくアヴェンジャーから離されるように転がっていった。そんな人形へ追撃を掛けんと、アヴェンジャーは転がる人形を追走し、起き上がった人形へと旗を叩き付けようとした。

「アヴェンジャー、ガードされる！ 突き崩して!!」  
「……………」

立ち上がる瞬間、人形が追撃を防御しようとする素振りが見えた私は、即座にブレイクの指示を出す。アヴェンジャーも私の声に咄嗟に反応し、旗を叩き付けられる瞬間、そのまま叩き付けずに、旗と一緒に大きく体全身を振り子の原理で回転させ、より勢いを増した旗の一撃を繰り出した。

腕をクロスさせるように守りを固めていた人形は、その腕を碎かれ、肩へと強烈な振り下ろしが直撃する。メリメリとめり込んだ旗の柄を、摺り下ろすように抜き取ると、アヴェンジャーは膝をついて崩れた人形の肩に乱暴に足をかけ、尖った柄の先端を、その脳天目掛けて突き刺した。

「準備運動……………」といったところでしたが、まあ、良いでしょう。これで幕引きとしましょうか。さて、さっさと燃え尽きろ。この出来損ないの木偶人形」

言葉の終わりと同時、柄の先端が刺さった脳天から、ゴウツと勢いよく烈火の炎が立ち上った。

頭部から胸へ、胸から足へ。その全身に炎が回り、人形の体を焼き尽くさんと轟々と炎は燃え盛る。それこそ、地獄の業火とでも表現するのが正しいような。

不思議と、炎を生み出したアヴェンジャーは、未だに燃える人形に足をかけているというのに、炎が燃え移る気配は一切ない。

それどころか、その姿はまさに火炙りを楽しむ悪魔のようにさえ見える。人形が灼かれる様子を、醜悪な笑顔で見つめて、本当に魔女であるかのごとく。

人形は、もう動かなくなつた。……………ここまで黒こげに焼き尽くされれば、動きようもないだろう。

「…………ハア。でもやっぱり、人形ごときでは心の底から楽しめない。



悲鳴も絶叫も、断末魔も聞けない火刑ほどツマラナイものはないわね」

彼女が何やら言っている。……が、その声は、ろくに耳に入ってこなかった。左手に刻まれた印の発熱。先程までは戦闘指揮による興奮で、あまり気にはならなかったが、今は違う。

戦闘が終わり、一息つけたと思つた瞬間、忘れていた熱が一気に全身を支配する。

気づかなかつただけで、それは闘いの最中も徐々に強まり、今や耐え難い激痛となつて、意識を白く焼き焦がす。

『手に刻まれたそれは令呪。サーヴァントの主人となつた証だ。使い方によつてサーヴァントの力を強め、あるいは束縛する、3つの絶対命令権。まあ使い捨ての強化装置とでも思えばいい。ただし、それは同時に聖杯戦争本戦の参加証でもある。令呪を全て失えば、マスターは死ぬ。注意する事だ』

再度あの声が聞こえてきた。どうにか痛みを堪えつつ、言葉に耳を傾ける。

『困惑している事だろう。しかし、まずは……おめでどう。傷つき、迷い、辿り着いた者よ。主の名の下に休息を与えよう。とりあえずは、ここがゴールという事になる。随分と未熟な行軍だったが、だからこそ見応え溢れるものだった。いや、私も長くこの任に就いているが、君ほど無防備なマスター候補は初めてだ。誇りたまえ。君の機転は、臆病ではあつたが蛮勇だつた』

……あらためて注意を傾けると、声はどこことなく癩に障る。厚みを持った声は三十代半ばの男だろうか。こちとら霞む意識を必死にへばりつけて聞いているというのに、ムカつくことこの上ない。

場所が場所なだけに、重苦しい神父服をイメージさせる。神父のくせに人をイライラさせるとは、一体どういう見か。

……いや、本当に神父かどうかは知らないが。

『おや、私のパーソナルが気になるかね？ 光栄だが、そう大したものではない。なにしろただのシステムだ。私は案内役に過ぎない。かつてこの闘いに関与した、とある人物の人となり元にした定型文と

いうヤツだ。私は言葉であり、君が今超えた峰であり、かつて在った記録に過ぎない』

「ああ……人理記録に在った『冬木の聖杯戦争』の……。ま、私にとつて、そんな事はどうでもいいのだけど」

アヴェンジャーは何か知っているような素振りを見せるが、すぐに興味なさそうに、焦げた人形をゲシゲシと蹴り始める。……非常に、嗜虐的です……。

と。そんな事より。

記録——では、この声に文句を言つても、何の答えも返つてこない、という事だろうか？

『そうだ。——だが、これもまた異例だな。君に、何者からか祝辞が届いている。『光あれ』と』

どこの誰かも分からない、何者かから贈られた言葉。……たつた一言のそれが胸を衝くのは、込められた気持ちが見事だからだ。ただ、君に期待する”と。それは短くても、祈りのような言葉だった。

『では洗礼を始めよう。君にはその資格がある。変わらずに繰り返して、飽くなき回り続ける日常。そこに背を向けて踏み出した君の決断は、生き残るにたる資格を得た。しかし、これはまだ1歩目に過ぎない。歓びたまえ、若き兵士よ。君の聖杯戦争はここから始まるのだ』  
声の語る内容は、全く意味が分からない。

聖杯戦争……？

生き残る資格……？

『然り。かつて地上には全ての望みを叶える、万能の願望機が存在した。人々はその奇跡を『聖杯』と呼称し、多くの欲望が無限を求め争い、しかして、至れる者は一人のみ。この闘い——このシステムは、そのカタチを継承したもの。聖杯を手にするただ一人になる為の、魔術師達の命を賭した戦争。君は今、その入り口に立ったのだ』

……全くもって、意味が分からない。だが、私の思考を無視して『声』は続ける。

『聞け、数多の魔術師よ。己が欲望で地上を照らさんと、諸君らは救世主たる罪人となった。ならば殺し合え。熾天の玉座は、最も強い願い

のみを迎えよう』

その声はまさしく主の御言葉のように、不視の伽藍に響き渡った。殺し合い……？

魔術師……？

願いを叶える聖杯……？

そんな、頭に渦巻く多くの疑問の全てを、この体に刻み込むように。『闘いには剣が必要だ。それはマスターに仕えるサーヴァント。敵を貫く槍にして、牙を阻む盾。これからの闘いを切り開く為に用意された英霊。それが君の隣にいる者だよ。……しかし、また契約したサーヴァントがアヴェンジャーとはね。いやはや、一体どんな因果を持つたというのやら』

人形を蹴り遊ぶ黒鎧の少女を見る。彼女は特に顔を向けるでもなく、ひたすらに焦げた人形をイジメていた。

彼女が、サーヴァント……。そして、アヴェンジャー……？

『君の決断は、既に見せてもらった。もはや疑うまい。その決意を代価とし、聖杯戦争への扉を開こう』

その時。印——令呪と呼ばれていたそれが、再び痛みを増してきた。

駄目だ。もう耐えられない。

限界が来て、思考がホワイトアウトしていく。そのまま気を失う一瞬前に、あの声の、最後の言葉が聞こえた。

『では、これより聖杯戦争を始めよう。いかなる時代、いかなる歳月が流れようと、闘いをもって頂点を決するのは人の摂理。月に招かれた、電子の世界の魔術師達よ。汝、自らを以て最強を証明せよ——』

ここで、本当の、本当に、私の意識は途絶えた。自分の身に何が起きているのか。何が起ころうとしているのか。何をしなければならぬのか。

漠然と、ただ『闘え』という言葉のみが、頭から焼き付いて離れなかった——。

「さあ、これでようやく聖杯戦争の始まりです。復讐者と契約を結んだ、哀れで愚かなマスター。後悔なんてさせてあげないから。そんな暇も無いほどに、私が貴方を憎悪で黒く塗り潰してあげる。……フ。」

「アツハハハハ!!!」

第一章 『awakening / programize  
d heaven』

私は無知なひよこです

空が焼けている。

家が溶けている。

人は潰れている。

路は途絶えている。

これが戦いの源泉。これが再起の原風景。ここで『私』は、ただ一人生き延びた。

思い出すな / 忘れるな。

忘却は至上の救いであり、最悪の罪である。

忘れるな。

地獄から『私』は生まれた。

これは忌まわしい夢。何処かであった、何処にでもあった、そして此処に起きた、幼年期の記憶である。

多くの血が流れ、響き渡る怨嗟の声を聞いた。命は消える。思いのほかあつさり。肉親も友人も、名前も知らない隣人も他愛なく。銃を持った兵士も、生き延びようとする家族も、最後まで醜くも逞しくあがき、臨終の間際、穏やかな面もちで呼吸を止めた。

——それが、どうしても承伏出来なかった。何故、という疑問が消えなかった。

紛争と天災の違いはあれ、何故このような悲劇は起きるのか。何故誰をも救う事が出来ないのか。

いや、そもそも——何故世界は、この地獄を許すのか。

『当然でしょう？ だって、世界は残酷なのだから。過ちが当然のよ  
うに罷り通る、そんな無慈悲な場所が、この世界なのだから』

……穏やかな雨が降る。カタチあるもの、生あるものは、ひとりを残して消え去った。

無力感と絶望の中、意識は薄れていく。胸にあるのは疑問と怒りと

雨を頬に感じながら、瞼を閉じる。多くの人間の、人生の、時間の痕跡が、跡形もなく消え去った。

その犠牲を見て、死の淵でなお顔を上げた。認めない、と。

もし、もしもう一度、まだ命を与えられるのなら、今度は、今度こそは、決して――

だが二度はない。雨はほどなくして、焼けた大地を清めていった。

忘れるな。地獄から『私』は生まれた。その意味を――どうか、忘れないでくれ。

……何か、欠けた夢を、見ていたようだ。  
目が覚めた。ここは学校の保健室。いつの間にか倒れて、運ばれてきたらしい。

それでは、あの扉の先の世界、行く手を阻む人形、そしてサーヴァント……。あれらも全て夢だった？

いや、この保健室は既に見慣れた日常のそれとは違っていた。似てはいるが、どこか異質で……。

状況が見えないが、とりあえず寝ていた体を起こし、ベッドに腰掛

ける。制服に乱れもなく、寝ている間に……なんて、薄い本ソリッドブックのような展開は皆無らしい。少しホツとする。

「ようやくお目覚めですか。だらしないわね」

不意に、虚空から女性の声が聞こえた。聞いた事のある声。冷たく、突き放すような、その口振り。他人を見下し、馬鹿にする声を、私は知っている。

キョロキョロと周りを見渡すが、その声の主の姿は見当たらないと。

「まあ？　寝ている貴方の耳元で、邪悪な呪文を唱えるという嫌がらせは出来たので、イーブンといったところかしらね」

ベッドの横に、突然人影が現れた。忘れようもない、強烈な印象を残したその姿――

漆黒の甲冑に身を包み、背には端の焼け焦げた黒いマント。年相応以上に主張するその胸部には、若干羨ましく思ってしまう。いや、私だって、決してそこまで小さい訳ではない。……はず。

全身を包む黒一色とは真逆に、そのショートショートの白髪は、むしろ無色を連想させる程に禍々しいものを感じる。

……もつとも、外見の判断は意味がないのかもしれない。何しろ相手は人間ではないのだし。

「さて、闘いの時間には間に合った事だし、これからが聖杯戦争の本番です。私のマスターとなった以上、敗北は認めないから。……ところで、貴方……もちろん、聖杯戦争の事は分かって参加しているのよね？」

突如現れた少女は、「当然知ってるでしょ？」とでも言いたげに、『聖杯戦争』とやらについての知識の有無を尋ねてくるが、無論、私はそんな事を知るはずもなく。

「聖杯……戦争……？」

「……、……」

少女は私の言葉に絶句し、ポカンと口を開いて、しばしの間、私と彼女は見つめ合う。しばらくの沈黙の後、その静寂を破ったのは黒い少女だった。

「——ま、さか。本当に？ 聖杯戦争を知らない、と？ そんなのでよく私のマスターになったものですね。呆れを通り越して、哀れに思える程よ」

え……。知らないってだけで、そんなに責められる？

というか、そもそも私がマスターになったというより、そっちが私を選んだんじゃない？

そんな、私の反抗心を込めた睨み付けも、アヴエンジャーは一笑に伏してしまふ。

「なんですか、その可愛らしい顔は？ 言っておきますが、そんな顔で見られても、許してなんてあげないから。……私のマスターが聖杯戦争も知らないなど、これから先が心配だし、仕方ないから私が教えてあげましょう」

べ、別にそんな顔してないし。

私の意思是華麗にスルーされ、途端、教師面になった少女が頼んでもいない講義をレクチャーし始める。

「さすがに聖杯は知っていますね。忌々しい救世主の血を受けたときれる、あらゆる願いを叶える万能の願望機を」

聖杯……と言うと、あの聖杯だろうか。西欧の伝承の端々に現れる何かしらのシンボル。

アーサー王の探索譚などでも有名な、奇跡を起こす聖遺物だ。

「ま、もつとも、真作の所在は定かではありません。世に出てくるものは贗作……つまりは贗物ばかり。例えば、汚泥にまみれた呪いの杯だったり、単なる莫大な魔力の塊だったり。はたまた、聖杯が人間自身であったりとね」

「……喩えにしては、やけに具体的だね」

「ですが、そんな事は問題ではありません。それが願いを叶える願望機としての能力を持っていれば、贗物であろうとも、それは聖杯である……。かつて、そういった聖杯を巡る魔術師達メイガスの儀式があった。名を聖杯戦争と言います」

聖杯戦争……。先程も、あの時も聞いた言葉……。

「もつとも。アレは儀式とは名ばかりの生存競争、所有権を決める殺



し合いでありましたが。一方、この闘いはその聖杯戦争を模した闘い  
のようですね。そうでしょうか？ 魔術の途絶えたこの時代でなお魔  
術師と呼ばれる、新世代の魔術師？」

魔術師……。断言する。全くもって聞き覚えも、身に覚えもない、  
聞き慣れない単語だが、どうも、彼女からは自分はそういったモノと  
して認識されているらしい。

それにしても、聖杯戦争というのが殺し合いとは一体……？

「物分かりの悪いマスターね。いい？ 聖杯を手にするのはただの一  
人だけ。互いに所有権を争う以上、敗北者は必然でしょう。仮にも  
『戦争』……。戦争とは互いが互いを殺し合う、シンプルな殺し合いな  
のです。当然、死は避けられないのが道理というもの」

なんだか、知らない間にとても物騒では片付けられないような、壮  
絶な状況に陥っている気がしてならない。

「よいですか。聖杯戦争の仕組みは至って簡単。選ばれた魔術師は  
サーヴァントと共に闘いの場に赴き、一騎討ちの勝負をします。  
敗れた者は全ての令呪を剥奪され、また、闘いの結果によっては命を  
も失うでしょう」

思わず左手に目をやる。そこには紋章にも似た奇妙な模様が3つ、  
刻まれている。あの時の痛みは、今はもう無い。

「その勝負を繰り返し、最後まで残った者が聖杯へと至る——とい  
うのが、この聖杯戦争のシナリオでしょう。私もこの聖杯戦争に詳し  
くはありませんので。細かなルールも色々と定められているよう  
ですが、簡単な話、ただ勝ち続ければいい。どうですか？ 当に「簡単  
でしょう？」

いや。それほど簡単な話じゃないだろうし、素直に納得も出来ない  
けれど、とりあえずは理解した。

自分は好む好まざるに関わらず、その聖杯戦争とやらに、殺し合い  
とやらに参加してしまった事だけは。

「ふん。理解したのなら、ひとまずは良しとしますか。では、貴方——  
—どうせサーヴァントとは何かも分かっているのでしょうか？」

見下したように蔑んだ笑みを零すアヴェンジャー。くっ……彼女

の言葉が真実であるだけに、その嘲笑を見返してやる事は不可能だ。

「ここは諦めて、素直に彼女から教えを請うとしよう。」

「分からない……だから、教えてくださいお姉様」

「おね……!?!」

急に、ヒクツとたじろいだ彼女に、私は疑問符を浮かべて首を傾げるが、すぐに体裁を整えると、一つ咳払いをして続きを話し始める。

「……こほん。元々サーヴァントとはこの聖杯戦争でマスターを勝たせるために呼び出された過去の英霊です。生前に名を馳せた英雄は後世にまで信仰される、神仏的な存在——英霊へと昇華されるのです。その存在を、聖杯の力によって世界に再現した姿がすなわちサーヴァント。サーヴァントは戦士です。呼び出した魔術師を守り、導く役割といったところでしようか」

「……いやいやいや。導く？ それにしてはずいぶんと、そのマスターを蔑ろに扱っていませんか、あなた？」

「元になった聖杯戦争のルールに従って、呼び出されたサーヴァントは7つの役割に分けられます。元々は英霊達の正体を隠し、召還の負担を減らすためのモデル化なのですが、まあ無知無恥なマスターには説明の必要はないでしょう」

と、自らの胸を持ち上げるような形で腕を組んで、勝ち誇った顔をするアヴェンジャー。

分かってしまった。分かりたくはないが、理解してしまった。彼女は『無知』と『無恥』を二重で使って私を乏しめたのみならず、『ムチムチ』と掛けて私の体型をも馬鹿にしたのだ！

それは非常に許し難き、言葉の暴力である。無論、私は抗議の視線で反抗するが、やはりアヴェンジャー相手に意味を為さず、むしろ彼女は私の睨みに嬉しそうにしている。

「話を戻しますよ、貧相なマスター?」

「失礼な！ 私だって、それなりにはある！ 着痩せするタイプなんだ！」

「セイバー。ランサー。アーチャー。ライダー。キャスター。アサシン。そしてバーサーカー……。このクラスというのは、用途の一本化

です。英霊のパーソナルを全て搭載しては容量が足りなくなるので。クラスに応じた英霊のパーソナルだけを抽出し、カタチにするのです。要は、クラス名そのものが相手の特性と考えて問題ありません。蛇足ですが、セイバーにあたる者が最良のサーヴァントだと言われていますね」

ん……………?

ちよつと待つてほしい。その理屈だと、アヴェンジャーたる彼女は、どのクラスにも該当しないではないか。

「そこは……………この『私』に、この聖杯戦争での最適なクラスが他にありませんし……………というか、この聖杯戦争で『ルーラー』とか、まず有り得ないし。そもそもアイツと同じ『ルーラー』のクラスとかもう御免だし。というか、『私』はアヴェンジャーとしてでしか存在を許されていないし……………ああもう！ そんな事はどうだっていいわよ！

ともかく私は『アヴェンジャー』。どのクラスにも該当しない、凡百のサーヴァント共とは違うのだと理解しなさい！」

ええー……………。なんという独裁者のような宣言か。まあ、初めて会った時から、そんな性格であろうというのは分かっていたのだが。

いや、むしろここまできると、むしろ清々している分、気持ちが良い……………か？

何はともあれ、性格に多少難はあるようだが、頼もしい味方である事は間違いない。

しかし……………アヴェンジャーが英霊というならば、いったいどの英霊なのだろうか？

「私の真名が気になると？ 別に教えても減るものじゃなし。バレたところで私には問題のない名前ですが……………、それはそれで、私がアイツと同一存在であると思われるってしまうようで気に食わないわね。そうね、私の名は、貴方が我がマスターとして相応しいと認められるようになった時、教えてあげてもいいわよ？」

「じゃあ、教えてくれるのは当分先……………？」

「その当分先があるかも心配になるのはこちらよ。まさか契約したマスターがこんなヒヨコ同然のド素人だなんて……………」

途端に、私は不安に掻き立てられる。味方とはいえ、彼女はどこの誰とも知らない存在だ。しかも、復讐者などという不吉なクラス名を自称しているのだから、裏切られる可能性とて存在しうる訳だし。

「……っ。そ、そんな顔をしないでくれる？ 分かった、分かったから。うう……相対者の憎悪や激情なら得意なのに、こういった消え入りのような感じは苦手よ……。魔女が潔白なんて馬鹿げているけど、身の潔白は示してあげる。正直なところ、私にも今回の聖杯戦争がどんなものかは、まるで分かりません。ですが、願望機として機能し、サーヴァントを再現出来るだけの人類史を貯蔵しているのは確か。貴方は魔術師であり、私は復讐者の英霊であり、私達が手にするべき聖杯は真実です。今はその事実だけで満足なさい。その不安は、闘いが始まれば自ずと霧散せざるを得ないでしょうから——」

そういうと、サーヴァントは姿を消した。しかし、まだ自分の近くに存在している事は感じる。

用の無い時は姿を消しているのだろう。敵に見られて、正体を悟られない用心かもしれない。

いや、それはないか。ただ単に、無意味にマスターと接触したくないだけなのかも。なんたって、どう見てもあのサーヴァントはひねくれているし。

そうして、私とアヴェンジャーの二度目の邂逅は終わりを告げた。

それはいいが、私はこれからどうしたら……？

とりあえず、私はベッドから起き上がった時と同じく、次に取るべき行動として、ベッドから腰を上げる。いつまでもここで座つていても、事態は決して変わらない。何か、些細な事でもいいから、何か次に取るべき行動へのキツカケを掴まなければ……。

そんな時だった。

私が立ち上がったのとほぼ同時、私以外は無人だったらしい保健室に、来訪者が現れる。ガラガラとスライド式の扉を開けて中へと入ってきたのは、

制服の上に白衣を纏った、藤色の長い髪をした女の子だった。

そうして私は打ちひしがれる

白衣の少女は、私が立っている事にすぐに気が付いた。入ってきていきなり私が起きていた事に驚いた素振りすら見せずに、少女は淡々と事実と感想を述べる。まるで機械であるかのように――。

「あ、岸波さん目が覚めたんですか？ 心配していましたが、起きてくださって良かったです。体の方は異常ありませんから、もうベッドから出て大丈夫ですよ」

いや、既にベッドから出ているんだけど。

しかし、少女はそんな私の言葉を聞いておらず、変わらずの口調で続けた。

「あ、一応自己紹介しますね。私は聖杯戦争におけるマスターの皆さんの健康を管理するAIで、間桐桜と言います。それと、セラフに入られた時に預からせていただいた記憶は返却メモリーさせていただきませので、ご安心を」

「メモリーを返却……？」

「聖杯を求める魔術師は門をくぐる時に記憶を消され、一生徒として日常を送ります。そんな仮初の日常から自我を呼び起こし、自分を取り戻した者のみがマスターとして本戦に参加する――以上が予選のルートでした。貴方も名前と過去を取り戻しましたので、確認しておいてくださいね」

……むむむ？ おかしい。その話は本来なら眉唾ものだが、これが現実である以上、ここでは当然の事なのであろう。

しかし、私は名前こそはつきりと口に出来るが、記憶が全く思い出せない。

学園にいた頃は、みな普通の生徒だったと思い込まされていた、というのは分かった。しかし自分は、未だ以前の記憶が思い出せない――

素直にその事を伝えると、先程までは機械のように伝達していた少女もさすがに、不可思議なものを見たような顔をして、きよとんとし

ていた。

「え、記憶の返却に不備がある、ですか……？　それは……わたしには何とも。どうにかして差し上げたいところではありますが、間桐桜は運営用に作られた健康管理AIであって、参戦するマスターの体調くらしいか手が出せないんです」

抗議の声は、彼女の残念そうな、申し訳なさそうな言葉で断ち切られた。どうにも、この聖杯戦争とやらはルールもそうだが、運営側にも色々と複雑な要素が絡み合っているらしい。

「あ、そうでした。これ、渡しておきますね」

と言って彼女は白衣のポケットから何やら取り出すと、丁寧にも両手でそれを差し出してくる。

丁寧には丁寧で返す。それが私なりの礼儀だったので、私も両手で差し出されたそれを受け取った。

「……携帯端末？」

受け取ったブツを確認してみれば、薄く平べったい、何かの携帯端末のようだった。とりあえず連絡用の物みたいだが、別の用途もあるのかもしれない。

「本戦の参加者は表示されるメッセージに注意するように、との事です。それと簡単に使い方の説明もおきますね」

そう言つて、彼女——間桐桜は、私の隣に並び立つと、一緒になつて端末の画面を見始めた。いくら女の子どうしだからって、こんなに間近に顔があるのはけっこう恥ずかしい。というか照れる。

「それではまず、画面をタッチしましょう」

言われた通りに、真っ黒な画面に指を触れると、画面からボウツと青色の光が放たれる。どうやら端末が起動したようだ。

「項目としては、ステータス、岸波さんのサーヴァントの現在の霊基の確認が出来るところです。そして次がマトリクス、対戦相手に関する情報などを閲覧出来ます。次は装備ですね。岸波さんが取得した『礼装』を装備、または変更出来ます。そしてアイテム。これは単純ですね。所持しているアイテムが確認出来ますよ。……これくらいかな？」

懇切丁寧に、一つ一つ指差して教えてくれる間桐桜。あのサーヴァントと比べれば、天地程の差である。ああ、こんな優しい子がサーヴァントだったら良かったのに……。

「……岸波さん、口に出てますよ」

ハツとしてチラリと横に目をやると、間近で恥ずかしそうに頬を紅く染める桜が。私は気恥ずかしさで思わず顔を背けてしまう。

ああ……地の文か会話文なのか、はつきりしないこの語り口調はどうにかならないのだろうか……。

だが、それが私の、『岸波白野』のアイデンティティ。決して我が道を曲げる気などない！

「馬鹿馬鹿しい宣言などする前に、アンタにはする事があるでしょう！」

「うひゃあ?！」

と、突然のアヴェンジャーの乱入に、私は情けない叫び声を上げながら飛び上がった。

何気に、今まで罵倒や見下し発言はあれども、『貴方』とまだ敬称は残っていた。しかし、とうとうアヴェンジャーは私を『アンタ』呼ばわりしてきた。親しき仲にも礼節は大切だ。

いやまあ、アヴェンジャーとは知り合ってまだ間もないなんてレベルじゃないけど。それでも、いくらなんでもマスターを『アンタ』呼ばわりとは……。

「不服そうな顔ね。だいたい、アンタが悪いんじゃない。聖杯戦争は命懸けの殺し合いなのよ? 馬鹿げた事を抜かす暇があったら、闘いに向けての心構えでも叫びなさいこのヒヨコマスター!」

「ぐぬぬ……」

アヴェンジャーが正論すぎて、反論すら出来ません。やだ、私のサーヴァント……論破すぎ……。

「あ、あのー。とりあえず次は言峰神父に会えば良いかと……。あの人は聖杯戦争を運営するAI、NPCにおける総監督者みたいなものですから。詳しい話も聞けると思います」

おどおどと、私とアヴェンジャーの一方的なやりとり（アヴェン



ジャーから私への一方通行)を仲裁するべく、桜は私が次に取るべき行動を示してくれた。

それにより、アヴェンジャーもひとまず納得し——舌打ち混じりではあったが、再びその場から姿を消す。やはり天使か、桜……。

「もう……また声に出ています」

「あ、ごめんなさい……」

ここは素直に謝った。

ともかく、せつかくの情報だ。早速その言峰神父とやらに会いに行こう。神父という単語に、どこか嫌な予感がしないでもないが。具体的には、癪に障る見えない天の声的な。

桜に礼と謝罪を告げると、私は保健室を出ようと扉へと向かう。そんな私の背に、まだ掛けられる声があった。

それはやはり、桜からのもので、少しためらった感じだったが、恐る恐るといったように、私へと質問をしてくる。

「あの、岸波さんは……この保健室に、何か思うところがあったりしませんか？」

質問の意図がよく分からない。保健室自体は、偽りの学園生活でも何度かお世話になったような気はするが……。しかし、特別何か思い入る事は無いはずだ。

その旨を彼女に伝えると、少し思案顔をし、

「そう、ですか。いいえ、なんでもありません。忘れてくれて構いませんから。どうぞ、行ってらっしゃい」

どこことなく、儂げな笑みを浮かべながら、彼女は小さく手を振った。

「行ってきます」

それだけ告げて、私はやっと保健室を後にした。桜は何を言いたかったのか。少しの疑問を胸に仕舞って。

廊下に出ると、私以外にも学生服を着た生徒らしき者の姿がちらほ

らと視界に入る。

否。彼らはアヴェンジャーの言葉や、あの『最後の間』の言葉を借りるなら、『聖杯戦争予選を突破した者達』だ。決して、ただの生徒である筈がない。

なんとなく、近くにいた女子生徒に声を掛けて、それが真実であると思ひ知らされる。

「あら、予選が終わっていきなり保健室に担ぎ込まれたマスターね？  
確か貴方が最後のマスターだとか。ま、お互いがんばりましょ。対戦相手だったら容赦しないけど」

「お、お手柔らかに……」

「でも、ついに聖杯戦争も本戦……。予選で記憶を封じられたのに、良く突破出来たと自分でも思うわ」

それは私だって言いたい。そも、私は未だ魔術師という自覚すら無いのだから。これでよく、あの場を切り抜けられたものだ。ひとえに、アヴェンジャーのおかげと言えらるだろう。

保健室は一階の端にある。今の女子生徒との話は保健室の隣の職員室前だった。そこを過ぎれば、正面玄関と階段前に出る。

まずは早速、情報収集を始めよう。一階は見渡した限りでは、神父らしき人影はありそうにない。片っ端から近くに居る者達に話を聞いてみるか。

「これが本戦か……。予選とは空気も違うんだな。さつき屋上で空を見てきたけど、明らかに別物だったよ。お前も行ってみたら？」

「保健室で言っていた、言峰とか言う人……今はいないみたいね。ちよつと校舎を探索してみようかしら」

「いろんな電腦にダイブしてきたけど、ここまでリアルな作りは初めてだ。流石はセラフ、と言うところだね。願いが叶うなんて信じてなかったけど、これを見ると信じちやうよな……」

「そういえば、予選の頃から噂にあつた、神父一押しマーボー……。実際そんなメニューなかったんだよ……。学園の敷地内に教会が無かったら、神父の推薦したものなんて完全にオカルトだったろうに」

「身体を鍛える事こそ、勝利への近道。この世界でも、走り込みは欠かさないんだから！ キミもどう？ 気持ちいい汗、気持ちいい勝利！ 青春って感じでしょ！」

「まさハーウェイからあの子が来るとは……。これは、奴らも相当本気みたいね。あら、知らないの？ レオナルドはハーウェイの次期当主よ。あの若さで選ばれるぐらいだから、相当出来もいいんでしょね」

——一階で得られる情報はこれくらいか。そろそろ二階に行こう。地下に食堂と売店もあるにはあるが、まさか神父が食事中という事もあるまい。

階段を上がり、二階へとやってくる。予選で自分のクラスがあつた階だ。他の階よりはまだ馴染み深いと言えるだろう。

「おお、お前も突破出来たのか。良きかな、良きかな！」

二階に来た瞬間、私の知っている男の声が掛けられる。黒い制服に、鋭い目つきを眼鏡で覆うその男子生徒……。生徒会長の柳洞一成だ。彼がここにいるという事は、彼もまた、聖杯戦争の参加者だった……？

「む？ いや、それは違う。我々生徒会は聖杯戦争の運営委員会でもある。つまり黒い学生服を着ている者は全員、お前達のように一般の学生服を着ている者とは違い、セラフが用意したAI、またはNPCだ」

……！

桜の時も思ったが、要は彼らは人間ではないという事だ。普通の人間のように受け答えや会話が成立していたので、本物と話していると

錯覚させられてしまう。

「岸波は情報収集の最中か？ それもいいが、本戦の校舎は全部回って見たか？ 屋上からの眺めはなかなかのものだぞ！」

屋上、か。情報収集がてら、行ってみるとしよう。

一成に別れを告げて、私は二階でも手当たり次第に声を掛けてみる。ここは図書室もあるので、少しは有益な情報が手には入るかもしれない。

「ふうむ…。予選とは同じようで別物だな。よりセキュリティが増している気がする…」

「システム系のNPCが黒い服、生徒会のキャラクターらしいわ。何か分からない事があれば、彼らに聞いてみる事ね」

「む…。キミもマスターか。近寄るな、話す事など無い」

「おかしいなあ…。教室に入れなんだよね…。少しブラブラしてるしかないのかな」

「これでも故郷では名の知れた霊子ハッカーだったんだ。しかし、まさか…。あの遠坂が参加してるとはな。大したものだよ、この聖杯戦争って奴は」

ふう…。…だいたいこんなところか。途中、自分のクラスだった教室の扉を開けようしてみたが、本当にピクリともしなかった。あの女子生徒の話は本当のようだ。

図書室にも寄ってみたが、全く人がいなかったのは予想外だった。仕方なく、適当に本棚から見て回る事にしたが、これといった収穫がない。

しかし、音楽関連の棚には何者かによる自著らしき本が、他の本を押しつけて、それだけが取り出しやすそうに無理やり突っ込まれてい

た。

タイトルは、『デミドラ系アイドル始めました』とある少女がアイドルとして色んな困難を乗り越えて、アイドルとして大成していくという内容のようだ。

なんというか、お腹いっぱいな気分です……。

二階での情報収集を終え、今度は三階へ。しかし、三階は人がほとんど居らず、しかも一般生徒らしき姿でならない。あれらもNPCなのか？

などと、疑問に思っていると、私の視線に気付いたのか、三年生の教室前廊下に居た幼女らしき者が、私の方へとやってくる。

「お姉ちゃんもマスターなの？」

砂糖菓子のような、ふわふわした印象を受けるその容姿と衣服に、私は自然とはにかみ、柔らかな物腰で回答する。

「うん、そうみたい。あなたは？」

「ありすもマスターよ。また今度遊びましょうね？」

それだけ言って、少女は私が来た階段を駆けて降りていった。まさか、あの幼女もマスターだとは……。しかし何故、制服を着ていないのか。

私は同様に、幼女が居た反対側の廊下。視聴覚室前の廊下で窓の外を眺める少女の事も疑問に感じた。彼女もまた、私のような月海原学園の制服ではなかったのだ。

ただ、彼女は私が話しかけても上の空のように、ただただ窓から空を眺めるのみ。会話すら成立しないのでは、どうしようもない。

私は諦めて階段前に戻る。もう三階で得られるものは無さそうだし、一成の言っていた屋上に行ってみるとしよう。

屋上に来ると、なるほど、一成の言っていた事は間違いではなかったらしい。校舎周辺は数字の羅列する円形のドームに覆われており、その外側はまるで水中に居るかのような、壮大かつ幻想的な風景が果てしなく広がっていた。それこそ、海中遊泳でもしているかのような気分にならなってくる。

「……一通り調べてみたけど、おおまかな作りはどこも、予選の学校とたいして変わらないのね」

と、不意に女性の声はどこからか聞こえてくる。不思議に思い、声を辿ってみれば、屋上の少し突き出た部分で、壁や床をぺたぺたと触つて、何やら呟いている美少女。

あれは……直接の面識はないけれど、あの真つ赤な服に黒髪ツイン。きつと『遠坂凜』だろう。

予選の時から噂に聞いた、容姿端麗、成績優秀な月海原学園のアイドル。同じクラスだった「慎二」からもずいぶん愚痴を吹き込まれた。

ただ、そうした評判は、あの平和な学校にいた頃に与えられたもの。今は修正する必要があるだろう。

彼女の瞳に宿る強い意志の光は、偶像<sup>アイドル</sup>などという淡いイメージの存在ではありえない。

聖杯戦争——訳も分からないまま巻き込まれたとは言え、ここはもう闘いの場……なのだ。彼女が纏う空気が、それを如実に示している。

……そう。実感は湧かないが、目に映る人間は全て、殺し、殺される関係に過ぎない。そんな事実を、嫌でも気付かされてしまう。

「……あれ？　ちよつと、そこのあなた」

と、私の存在に気付いた彼女。彼女の目が、こちらを見てふつと和らぐ。柔らかな笑みを浮かべる彼女に、私は自分を指差し、確認する。まあ、屋上<sup>ここ</sup>には私と彼女以外は居ないのだけだ。

「そう、あなたよ。……そういえば、キャラの方は、まだチェックしてなかったわよね。うん、ちようどいいわ。ちよつとそこ動かないでね」

不意に伸ばされた彼女の指先が頬に触れる。それは、細く、柔く。戦場に相応しい、強い眼差しを持ち主が、まだあどけなさの残る少女である事を、何よりもはっきりと伝えてくる。

「へえ、温かいんだ。生意気にも。……あれ？　おかしいわね、顔が赤くなっているような気がするけれど……」

少女の顔が鼻先三センチまでぐつと近づく。先程の桜は真横ではあったが、その時とは状況が違う。その距離に、心臓がどきりと鳴る。頬にかかる息は微かに温かく、風に流れる長い髪が首筋をかすめた。

無遠慮に肩やお腹をぺたぺたと触る仕草は、さつきまでの鋭い眼差しの持ち主と同じと思えない程に幼い。

拒む事も出来ずに（成り行きで仕方なく）、棒立ちのまま（反応し辛しいし）、彼女の白い指先を見つめていた（実は少し気持ち良かったり……?）。

「なるほどね。思ったより作りがいいんだ。見かけだけじゃなく感触もリアルなんて。人間以上、褒めるべきなのかしら」

言うや、くるりと反転した彼女は、虚空に向かつて話しかける。

「……ちよつと、なに笑ってんのよ。NPCだってデータを調べておいた方が、今後何かの役に……」

端から見れば、何もない所に話しかける頭のアレな少女に見えなくもないが、ここは聖杯戦争、その本戦の地。おそらく姿は見えないが、彼女のサーヴァントがそこに居るのだろう。

と、またもくるりと反転し、再び私に向き直る彼女。その顔には、呆然とでも言うべき驚愕を引っさげて。

「……え？ 彼女もマスター？ ウソ……だ、だってマスターならもつと……。キヤー!!! ちよ、ちよつと待つてよ。それじゃあ、いま調査で体をベタベタ触ってたわたしって一体——」

少し、ヘンタイチックでした……。などと口にする訳にもいかず、私は黙って彼女から顔を少し背ける。

少女はと言えば、つい先程の行動を思い出したのか、顔を真っ赤にしてしまった。こちらも改めて顔が熱くなる。

「くつ、なんて恥ずかしい……。うるさい、わたしだって失敗ぐらいするってーの！ 痴女とか言うなっ！ 職業病みたいなものよ。これだけキャラの作りが精密な仮想世界も無いんだから、調べなくてなにがハッカードっての」

後半のセリフは、おそらく彼女のサーヴァントが余計な茶々でも入

れたのだろうか。

『痴女、ですか……。なら、貴方も痴女かしらね？ 全身くまなくベタベタ触られて悦ぶマスターだものね？』

「わ、私は痴女じゃないし!!?」

私も彼女同様、姿の見えないサーヴァントへと思わず異を申し立てる。ただ、限りなく、敗北に近いグレーだとは思いますが。

「……その感じ、本当にマスターなのね。大体、そっちも紛らわしいんじゃない？ マスターのくせにそこらの一般生徒キヤラと同程度の影の薄さってどうなのよ。というか、さりげなく、私は”って言ったわね。言っておくけど、わたしだって痴女じゃないわよ！ なに一人だけ逃げようとしてるのかしら？」

耳聡い……。というか、負けず嫌いなのだろうか事がよく分かる。

「はあ……。全く何よ。今だってぼんやりした顔して。まさかまだ予選の学生気分で、記憶がちゃんと戻ってないんじゃないでしょうね？」

「……」  
これは……。返答に困る。彼女は冗談半分で言ったのだろうが、それは紛れもない事実だった。

当事者である自分ですら、途方にくれてしまう程の。

私が返事をしない事に、彼女もハツとした顔になる。

「え……。ウソ。本当に記憶が戻ってないの？ それって……。かなりまズいわよ。聖杯戦争のシステム上、ここから出られるのは、最後まで勝ち残ったマスターだけ。途中退出は許されていないわ。記憶に不備があっても、今までの戦闘経験バトルログがなくても、ホームに戻るコトは出来ないわよ？」

明らかに私を心配するセリフであったが、しかし、

「……。あ。でも別に関係ないわね。聖杯戦争の勝者は一人きり。あなたは結局、どこかで脱落するんだから」

彼女の心配げな声が、急に醒めた。目の前にいるのは、聖杯を奪い合う敵。その事実を思い出したように。

——いや、目の前の一人だけではない。この聖杯戦争に来ている者は全てが敵なのだ。



「本人にその気は無かろうと、今のは挑発ととって良いですね。こんなヒョコ相手に挑発など、滑稽ではありませんが、せつかくです。目には目を。歯には歯を。売り言葉には買い言葉を。アヴェンジャーのマスターならそれらしく、復讐の言葉を投げかけてやりなさいな」  
いつの間にか現界していたアヴェンジャーが、私の背後でだけしかけてくるが、しかし、私は沈黙を破れない。目前のライバルに、言い返す事が出来ない。

勝ち残れない、と。

その宣言は、誰より自分自身が感じている事だからだ。

「……へえ。あなた、そんなマスターらしくなくせして、まさか『エクストラ・クラス』を従えているなんてね。……ま、ご愁傷様とだけ言っておくわ。今回のオペは、破壊専門のクラッキングじゃなく、侵入、共有のためのハッキングだったし。一時的にセラフが防壁を落としたりといっても、あっちの事情はわたし達には知れないしね。あなた、本戦に来る時に、魂のはしっこでもぶつけたんじゃない？ ロストしたのか、リード不能になってるだけか、後で調べてみたら？」

もはや気遣いなんて欠片も、微塵もなく、ただひたすらに、冷酷に言葉を紡ぐ少女……遠坂凛。しかして、彼女の言葉は的確であるのだと、肌で感じさせられる。

「ま、どっちにしても、あなたは闘う姿勢が取れてないようだけど。覇気と言うか緊張感と言うか……全体的に現実感が無いのよ。記憶のあるなし、関係なくね。まだ夢でも見てる気分なら改めなさい。そんな足腰定まらない状態で勝てるほど、甘い闘いじゃないわよ」

自分は記憶喪失……という事だろうか。自分は何者で、どんな経歴を持っていたのか。

いや、そもそも何故、聖杯戦争なんてものに参加したのか。

いま確かな事は、自分はサーヴァントを従えた魔術師マスターという事だけだった。

凛は、それ以上は語らず、私に背を向ける。もう語る事は無い、という事なのだろう。

私も、言い返す事の出来ないままに、その場を後にした。自分に自

信を持つ彼女を前に、なんとなく私自身が情けなく思えてしまったから。

ただ、アヴェンジャーのみが、なかなか動こうとしない事が気がかりではあったが、私はそのうち来るだろうと思いい、気にせず屋上から去った。

故に、私は彼女がこの時、遠坂凜に何を言い残したのかは知らない。

「あなたのマスターはもう行つたわよ。さつさと後を追えば？」

「アレに現実感が無い……つまりは偽物、贋作。つまりはそういう事、とも言えます。ですが、忘れない事ね。『贋作は真作にはなれずとも、真作を上回る事も出来る』のだと。この身で証明してあげましょう。貴方達、本物に」

「……？ あつそ。ならせいぜい、あのマスターが死なないよう守りなさい。そして、せめて命の奪い合いが出来る覚悟が持てるように導きなさい。そうすれば、少しは認めてあげてもいいかしら？」

「その言葉、ゆめ忘れない事です。贋作が真作を凌駕した時、貴方の事を笑って差し上げましょう。」

「ざまあみろ、この真作が……とね」

私には覚悟が足りない――

遠坂凜と別れてからその後、結局夕方になっても言峰神父に会う事が出来なかった。

彼女とのやりとりで、精神的に打ちのめされた私は、言峰神父を探しはしたものの、その足取りは重く、思うように校舎を回れなかったのだ。

気付けば、私は教室に居た。予選の時の自分のクラスだった2―Aの教室。昼間は何故か入れなかったが、いつの間にか開放されていたらしい。

私以外にもチラホラと生徒の姿がある事から、彼らもまた、ここで休息をとっているのだろう。

男子生徒が二人、たむろしてだべっているのが自然と耳に入ってくる。

「試しにアクセスしてみたら、予選を突破しちやつてさー。やつぱ俺って天才ハッカーなのかもな」

「俺も興味本位で参加してみたけど、まさか本戦に行けるとは思ってたかったぜ」

「俺の対戦相手はあの遠坂らしいんだけど、ま、軽くひねってやるぜ！」

「お、言うね〜！ 俺なんて変なガキだぜ？ 見た目なんてまんま幼女だし。こりや楽勝かな？」

ゲラゲラと呑気に笑う二人に、私は頭が痛くなる。先程見た遠坂凜……彼女はその纏う空気も、その中身も、彼らとは違う一流のそれだった。

そんな彼女に、興味本位程度で参加した彼が勝てるとは到底思えない。

もう一人の男子生徒が言う幼女とは、まさか三階で見かけたあの子の事だろうか……？ やはり、本当にマスターだったという事か……？

考えたところで、仕方ないとは分かっている。今の私は、自分の事だけで手一杯なのだ。無闇に悩んでばかりいられない。

そんな悩める私に、教室の隅の方から声が掛けられる。あまり聞き慣れない男の声だ。

「よう、白野。予選でも同じクラスにいたんだけど、俺の事は覚えてるかい？」

にこやかに笑いかけてくる彼ではあるが、あいにく、私は彼に覚えがまるでない。記憶喪失うんぬんとか関係なく、普通に知らない。

「ごめん、ちよつと……」

申し訳ないが、私は率直に謝罪と事実を述べた。これはいわゆる、『あの子を俺は知ってるけど、あの子は俺を知らない』というやつだ。うん、なんだかライトノベルのタイトルのような文面に見えなくもないが、そんなところだろう。

男子生徒は私の言葉に少しだけ残念そうな顔をするが、すぐに爽やかな笑顔へと戻る。

「仕方ないさ。みんな似たようなアバターを使ってアクセスしてるわけだしね。遠坂や慎二みたいに、俺もカスタムアバターを使ってみたよ」

カスタム……アバター？

ここで聞き慣れない単語に、私は知らずのうちはその単語をリピートする。私の言葉に、目の前の男子生徒は変わらずの好青年ぶりで、言葉の意味を説明してくれた。

「ん……？ 白野はカスタムアバターを知らないのか？ いや、そんなに可愛い見た目してるから、てっきり白野もカスタムアバターなんだとばかり……。あ、いや、うん。えつと、つまりカスタムアバターってのは、要するに自分専用で改造したアバターって事さ。本来なら俺やお前みたいに、普通のアバターを使うと一般生徒の学生服がデフォルトなんだけど、腕のいい奴らはセラフが用意したアバターを自分自身と瓜二つに設定し直しまうのさ。それがカスタムアバターって事かな」

……さりげなく可愛いとか止めてほしい。照れる……。

まあ、だいたいは分かったけど、私自身は決してそのカスタムアバターとやらでない事だけは断言しておく。

だって、さつき凛に完全にモブ扱いされてたし。記憶が皆無だが、おそらく私は一流の魔術師ではなかったに違いない。

「ところで、お前はもう言峰神父には会ったか？」

と、彼が問いを投げかけてくる。言峰神父にはまだ会っていないと、素直にそう告げると、彼はそれならと、私にアドバイスをくれた。

「言峰神父だけど、さつき一階の廊下で会ったよ。なんでも、夕方まで運営NPC専用の控え室で自家製麻婆を煮込んでたから、来るのが遅れたんだってさ。今なら会えるから、白野も行ってくるといいよ」

な、なんだその微妙すぎる理由は……。あれだけ探して見つからない理由が、まさか料理していたからだなんて。

どつと気が抜けると、私は彼に礼を言つて教室を後にする。真剣に悩んでいたのがバカバカしくさえなってきた。

しかし、麻婆を煮込んでいて遅れるとは、一体どんな人物、もといNPCなのか。少し前情報を集めておいた方が良いかもしれない。適当に、そこらに居る生徒達に聞いてみるか。

「え？ 言峰神父がどんな人かつて？ えつと、そうね……。言峰神父は、システムNPC……黒服達の統括者、みたいな感じなのかな。なんか、人間ぼくなくて、ちよつと怖かったけど……」

「言峰神父？ ああ、さつき校内をウロウロしてたよ。なんかすごく刺激的な匂いがしてたけど……。まだ居るんじゃないかな」

「言峰神父……？ ああ、さつき一階で話したよ……。なんか麻婆を凄くイイ笑顔で勧めてきたんだけど……。あんなの人が食べるもんじゃなウボロロロロ……」

なんだろう。そこはかとなく、関わってはいけないような危険臭がプンプンする。あまつさえ、尊い犠牲——被害者も出ているようだ

し。

でも、会って話さない事にはどうにもならないし……。

「あら、誰かと思えば、記憶喪失のひよひよマスターさんじゃない」と、悩める私の少し前方上方より声を掛けられる。チラリと目を向けると、階段の上から降りてきたらしい凜の姿が。

その際どすぎるミニスカで階段はいかがなものかと思わなくもないが……。まあ、ヤブヘビだろうし言いほしないが。

さすがに丸一日、屋上で過ごす訳もないのだろう。彼女も落ち着ける場所を探して降りてきたのかもしれない。

そうだ。今ならさつきよりは気が紛れているので、彼女に色々と教えを請えるかもしれない。この聖杯戦争についても詳しい様子であったし。言峰神父に会うのはそれからでも良いはずだ。

別に、あぶない感じがするからと言う理由で、接触を避けている訳では決してない。

とまあ、言い訳がましくもそう思い、私は凜にご教授願ってみた。

「まだ何かあるの？ あの時も言ったけど、これは戦争で、わたしとあなたは敵なのよ。あんまり馴れあってほしくないけど……。……まあ、記憶がないんだからしょうがないか。少しでも情報が欲しいんだろうし……」

なんだかんだで、遠坂凜という少女はお人好しなのだろう。先程は突き放した私に、こうして温情を掛けてくれようかと迷っているのだから。

それを迷う時点で、彼女はお人好しなのだ。

「……………。はあ、仕方ないわね。基本的な知識だけなら教えてあげる。それでいいでしょ？ それ以上は自分で取得するコト。セラフにだって情報検索出来る場所はあるし、ま、リハビリと思いなさいな」  
結局は、教えてくれる事にした凜に、私は感謝の意を込めて、満面の笑顔で尋ねた。

「そのセラフがもう分かりません」

「……………そっか、そこから分からないのね」

若干の諦めた顔、もしくは何かを悟ったような顔でため息を吐く

と、凜は心を入れ替えたと言わんばかりに、態度をキリツと切り替える。教師の格好が似合いそう、などという感想が思わず浮かんだ。

『霊子虚構世界』。わたし達が今居るこの仮想世界の事よ。電脳世界って言い方もあるわね。とはいっても、そこらのスパコンやら、有機ネットワークやらのは、それこそ桁が違うわよ。普通なら英霊の再現なんて、1体でもリソースを使い果たして即ダウン。それが、ここでは、100を越す数が存在している。予選での学校や、NPC——システム側の管理するAIキャラの作り込みを見ただけでも予想はつくでしょ?」

言われてみれば、確かに……。この自分の体ですら、現実感リアリティしか感じないのに、それに加えてエネミーやらサーヴァントやら、更には人間のような精度を持つNPCが、これだけの数も存在して容量過多キャパオーバーにならないのは凄まじい。何から何まで、リアルに出来ているのに、正常を保っているのだから、そのスペックは計り知れないものだ。

「何もかも規格外の代物だから、ここにはAクラスのハッカーでない」と、アクセスする事すら出来ない。そう、わたし達のような、魂を霊子データ化して送り込める、ウィザード級のハッカーでないとね。とりあえずここまではいいわよね?」

……少し頭がパンクしそうだが、とりあえずはついて行けている。では、そもそもそのウィザードとは一体どんな存在か。アヴェンジャーからはその辺、詳しく聞いてはいなかったし。この機会に聞いておこう。

「はいはい……。そういえば、予選からまだ学生気分が続いてる状態で記憶喪失なんだから、それも知らなくて当たり前か。……。そうね。この霊子虚構世界ヴァーチャルワールドが仮想空間である以上、わたし達が実体でない事くらいは分かるわよね」

それはそうだろう。だって、さつきからNPCやらデータやらリアリティやら、VRゲームの話でもしているような感覚なのだから。アバターとか、正にそうだし。

「あら、ヒョコにしては飲み込みが早いコト。教える身としては楽で助かるわ。普通のハッカーは、仮想世界への侵入はプログラムを組ん

での間接介入になるけど、わたし達霊子ハッカーは違う。魂そのものをプログラム化して、仮想世界へ直接に介入出来るのよ。あらゆる情報をダイレクトに摂取でき、即座に出力できるから、その能力は普通のハッカーとは比べ物にならない」

……イメージとしては、ネットという電腦空間に、『ナビ』というAIを送り込んで情報のやりとりをする——といったゲームがあったが、そんな感じだろうか。

「□ックマンEXEの事？ うーん、そうね……。そのナビと自分自身とを置き換えた感じかしら？」

通じた……!?! まさかこの知識を共有出来るなんて思いもしなかったので、少し感激してしまう。

しかし、何故記憶は無いのに、こんなしようもない情報は頭にあるのだろうか。疑問である。

「そして、これは誰にでも出来る事じゃない。生まれつきの才能が必要よ。生まれつき体に、——そう、『回路』サーキットを持っている者。それがウィザードよ。世に聞く第三魔法が魂の物質化なら、ウィザードが行うのは魂のデータ化。『魔術師』ウィザードの現代版ってとこね」

なるほど……。たいへん分かりやすい説明だった。これでウィザードがなんたるかは、だいたい理解出来た。

だが、ウィザードが才能が無ければなれないのなら、私にはその才能があったという事か？

……まるで実感が湧かない。そんな才能もの、到底あるようには思えないからだ。なんたってヒヨコマスターだし……。

「……なによ、そのアヒル口ならぬヒヨコ口。……ちよつと可愛いじゃない。で、それで他に聞きたい事は？」

少し拗ねていると、凜が私から目を反らしながら、次の質問はないかと尋ねてくる。

ならば、聖杯そのものについて聞いてみようか。聖杯戦争なんて、名前に付くくらいだし。詳しく知っておいて損はないだろう。

「そうね、この聖杯戦争の優勝商品だし、気になるのも当然よね。ま、わたしも実物を見た訳じゃないから、詳しい事は口に来ないわ」



なんだ……凜でも詳しくは知らないのか。少し残念だ。なんでも知ってる物知り博士みたいだったのに。

「な、なによ。わたしだって万能って訳じゃないんだからね。そりゃあ、なんでもは知らないわよ。知ってる事だけ。それしか教えられないもの」

それもそうか。高望みすぎるのもよくはない。私なんて、凜よりももっと何も知らないのだから。それに私は教えてもらっている身。凜を責めるのは筋違いというものだ。

「けれど、その実在と、願望機としての力は間違いない、と言っているでしょうね。何しろ西欧財閥がわざわざ封印指定にした、ってくらいだから。結構な大物も、この聖杯戦争に参加してるし。噂の尾ひれ……を割り引いて考えてみても、聖杯に眠っている力は計り知れないわ。世界を容易に変え得るほどの物よ」

そんなに凄いのか……。まあ、それも当たり前と言える。こんなに凄まじい性能を持つセラフが用意した賞品だ。おかしな話でもないだろう。

「——ただし、このセラフの深層に至り、聖杯を手に来るのは、勝ち残り、最後に残ったただ一人のマスターのみ。だから全てのマスターは敵同士の。勿論あなたとわたしもね」

やはり、お人好しであれば、その辺の線引きは出来ている凜。そこそが一流たる所以の一つなのかもしれない。

では、そんな凜自身の事を聞いてみようか。予選の時から、噂の美少女について気になってはいたし。

「……わたしの事なんか聞いてどうするのよ。予選のあの学校じゃあるまいし、友達ごっこしても仕方ないでしょ。あ。もしかして、わたしの情報を集めて、対戦した時に優位に立とうってわけ？ ふーん、意外と考えてるじゃない」

いや、別にそんな気はありませんが……。

「でもムダよ。あなたは次の相手に勝てないもの。実力も低いし、闘いへの姿勢もなってない。……そんなあなたに色々教えてるわたしも、ひどくムダな事をしてるのよね。はあ……考えると鬱だわ」

く……やはり凜は一言多い！　せっかく紛れていたのに悪い気分が甦りそうだ！

でも、あらかた聞きたい事は聞けたような気がする。そろそろお開きで良いだろう。あ、言峰神父の事だけ最後に聞いておこう。

「言峰神父……？」　あの外道麻婆神父なんて知らないわよ。あのヤロウ、麻婆を世界破壊兵器にでもしようとしているのかは知らないけど、中華が得意なわたしとしてはアレを麻婆だなんて認められるかっての！　そのクセ、八極拳なんて身に付けてるから更正しようにも返り討ち……質たちが悪いつらいわよ！」

何を思い出したか、荒れてきた凜に、私はお礼を言って逃げるように一階へと退散した。このままでは、要らぬとぼちりを受けそうな気がしたからだ。

『藪蛇という奴ね。せっかく綺麗に終わろうとしていたのに、あの女を怒らせてしまったみたい。ふふ……我がマスターにしてはなかなかやりますね。褒めてあげましょう。あの女のあの姿、少し気分がスツとしたわ』

アヴェンジャーが姿を消したまま話しかけてくる。どうにも、アヴェンジャーは凜が気に入らないらしい。本人の前でそれを言わなideくれただけ、まだ良かったものを……。まったく、扱いに困ったサーヴァントである。

『……ちよつと待って。なんですか、この鼻を抉るかの如き強烈な香りは。まるで竜の胃酸のような刺激臭……』

途端、アヴェンジャーの声が不快感一色に染まる。彼女の言うように、確かに強い香辛料の香りも私の方にもプンプン漂ってくるが、そこまで強烈ではないような……。

むしろ、香ばしいとさえ思うのだが、気のせいなのだろうか。

その匂いの発生源はすぐに私の知れる事となる。階段を降りてすぐの所、そこに、カソックを纏った長身の男が立っていた。胡散臭さはあれど、彼が件の言峰神父に違いない……そんな直感が、私にはあったのだ。

神父は私の姿を見つけるや、不敵な笑みを浮かべて拍手で称える。

「本戦出場おめでとう。これより君は、正式に聖杯戦争の参加者となる。私は言峰。この聖杯戦争の監督約として機能している、NPCだ」

やはり、彼が言峰神父……。しかも、この声……。予選の最後の間で聞いた声と全く同じだ！

散々人を馬鹿にした天の声、その本人が目の前に居る……。

「今日この日より、君達魔術師はこの先にあるアリーナという戦場で闘う事を宿命付けられた。この闘いはトーナメント形式で行われる。一回戦から七回戦まで勝ち進み、最終的に残った一人に聖杯が与えられる」

それは、つまり……一回戦を終える毎に、この校舎から半数ものマスター達が脱落していくという事だ。そして七回戦まであるのなら、この聖杯戦争に参加しているマスターの数は――。

「ほう、察しがついたかね。その通り。つまり、128人のマスター達が毎週殺し合いを続け、最後に残った一人だけが聖杯に辿り着く。非常に分かりやすいだろう？ どんな愚鈍な頭でも理解可能な、実にシンプルな殺し合いだ」

そんなシンプルなシステムなんて、理解したくもない。だが、理解しなければ、この先を生き残っていくなんで不可能であろう。そう、凜が私に言っていたように、覚悟を持たねば、簡単に駆逐されてしまいうだろう未来が目に見えている。

「闘いは一回戦毎に7日間で行われる。各マスター達には1日目から6日目までに、相手と闘う準備をする猶予期間モラトリアムがある。君はこれから、6日間の猶予期間で、相手を殺す算段を整えればいい。そして最終日の7日目に相手マスターとの最終決戦が行われ、勝者は生き残り、敗者にはご退場いただく、という具合だ」

それが、聖杯戦争の大まかな流れ……。対戦者同士は互いに殺し合うために牙を研ぎ、弱点や付け入る隙を嗅ぎ回る、という事か。それを、平然と言つてのけるこの神父もそうだが、私は寒気を禁じ得ない。だって、あの凜だつて人を殺すと当たり前前のように言った。ここまでは、『殺す』という行為が平然と認められているのだ。それも、当然だ

と言わんばかりに、ごく自然に。

そんな中に馴染めなんて、岸波<sup>わたし</sup>白野には無茶なオーダーというものだ。

『貴方が記憶の不備において、現在はただの女子高生であっても、この現実を受け入れなければ死が待っているだけです。死にたくないのなら、諦めて殺し合いに興じなさい？ 興が乗らないのだとしても、せめてマスターを演じなさい。そうでなければ私の邪魔でしかないのだから。貴方が私のマスターとしての役割を演じている限りは、私も貴方のサーヴァントとして、仇なす敵の一切を屠りましょう』

姿の見えないアヴェンジャーからの言葉。それは私の身を案じているようで、まるでその真逆。存外に、『マスターとして役割を果たさないのなら、その時は殺す』という意志が明確なまで見え隠れしている。

アヴェンジャーにとって、私はこの聖杯戦争へ参加する為の切符でしかないのだ。それは、彼女と契約した時の言葉からも分かっている。

アヴェンジャーは、少しでも私がマスターとして失格だと判断したなら、私では勝ち進めないと確信したなら、即座に私を排除しようとするだろう。

それがアヴェンジャー……復讐者たる彼女の在り方なのだ。復讐という、憎悪と憤怒にまみれた、邪悪な魔女。それが、彼女なのだ。……」

「いささか顔色が悪いようだが、何か聞きたい事があれば伝えよう。最低限のルールを聞く権利は、等しく与えられるものだからな」

……。とても気分が悪いが、聞けるうちに聞いておいた方がいいだろう。情報は有るだけ有った方がいいのだから。

「……じゃあ、聖杯戦争で生き残るには？」

「今言った通りだ。6日間の準備の末に、相手を首尾良く殺せばいい。そのために、サーヴァントという強靱な剣が与えられたらどう？ そうだな、助言するならば、6日あるとはいえ、計画は入念に立てておく事を推奨しよう。逆に言えば“6日しかない”のだからな」

それは自分だけでなく、対戦相手にも同じ事が言える。その6日の間に、相手よりも準備の質も速度も劣れば、それがそのまま敗北に繋がるからだ。

「端末にメッセージって聞いたのは？」

「その端末はこの聖杯戦争システムからのシステムメッセージを受け取るものだ。配信されるメッセージは、注意深く見ておくといいだろう」

あと聞かなければならない事。それは、私の対戦相手についてか。まだ覚悟の持てない私だけど、このまま闇雲に進むのだけは避けたい。それだけは、してはいけない。

「私の対戦相手がまだ決まってないけど……？」

「何？ 一回戦の対戦者が、まだ、決まっていらないだど？ ふむ……少々待ちたまえ」

言峰神父は私の言葉に、訝しげに目を閉じて、祈るように黙りこくる。そして少しの沈黙の後、

「——妙な話だが、システムにエラーがあつたようだ。君の対戦組み合わせは明日までに手配しよう」

まさか、まだ知らされていないだけ……ではなく、本当にまだ決まってるらいなかったのか……。

だが、明日には対戦相手が決定する。そして、第一回戦が始まってしまふ。

私は、それまでに少しでも心構えを持てるだろうか……。

「それから、最後にもう一つ。本戦に勝ち進んだマスターには、個室が与えられる。これを受け取りたまえ」

そう言つて、言峰神父が差し出してきた手に、私は出す。すると、光る何かが私の手元に落とされ、それはポケットに入れていた私の端末へと自然と吸い込まれていった。

「これは……？」

「それはマイルーム認証コードだ。君が過ごしたクラスの隣、2―Bが入り口となっているので、認証コードのインストールされたその端末を扉に翳してみるといい。さて、これ以上長話しても仕方あるま

い。アリーナの扉を開けておいた。具合が悪かろうと、今日のところはまず、アリーナの空気に慣れておきたまえ。君は言わば、他のマスター達よりも出遅れている」

それは……確かに、そうだ。覚悟も、記憶も、対戦相手も……全てにおいて、私は他のマスターに比べて遅れている。しかも、私が最後の本戦に選ばれたマスター。少しでも遅れを取り返さねばなるまい。「アリーナの入り口は、予選の際、君も通ったあの扉だ。では、健闘を祈る。そして失礼する。私はこれから自作麻婆の製作に戻らねばならぬのでね。アリーナから戻った頃にでも、君にもご賞味いただく。なに、遠慮は要らない。これから始まる君の聖杯戦争、その饞別だ」

言うだけ言うと、言峰神父は地下の食堂へと姿を消していった。あれで、彼なりの私への気遣いだったのだろうか。

『言っておきますが、私は絶対に食べないから。貴方が無理と言っても、私は知りません。その時は、嫌がる貴方の口に無理にでも突っ込んで食べさせるから、そのおつもりで』

そんなに言峰神父の作る麻婆を食べたくないのか、アヴェンジャー。

まあ、少しは気分がマシになった。今のはアヴェンジャーなりに、私の聖杯戦争への気負いを紛らわす為の嫌味だったのだろう。

……気を紛らわせるのに嫌味とは、いかなものかと思うのだが。そして、私は廊下を進む。予選の時とは違う、本戦としては初めての、エネミーが闊歩するであろう戦場へ――。

今度は、アヴェンジャーと一緒に。

「ねえねえ、岸波さん、ちよつと先生のお願い、聞いてくれないかなー？」

「……ぐぶつ!？」

いぎ、戦地へと赴かんとばかりに足を踏み出した私だったが、突然の呼び止めと同時に万力が如き力で両肩を掴まれ、ずりりと足を滑らせる。具体的には、バナナの皮を踏んでひっくり返るような構図の転び方だ。

無論、スカートでそんな転倒の仕方をすれば、絶対領域なんてなんのその。禁断の内側が前方に対し、外界へと露わになるだろう。

しかし、私はそれどころではなかった。後ろ向きに倒れた拍子に、頭を少し固い物へと打ち付けたのだ。おそらく、今私の肩に手を掛けた人物の足……が履いている靴だろう。

「あちゃー……大丈夫?」

悶絶してのた打ち回る私に、「やっちゃった☆」的な感じで心配する声。声を大にして、大丈夫ではないと力強く言いたい。

「……何と言いますか、悶絶する姿は面白いのだけど、一応私のマスタ―として心配してあげましょう。大丈夫ですか? こんな始まつてすらない段階で、不慮の事故で早々に脱落とか、勘弁してよね?」  
いつの間にか現界していたアヴェンジャーが、私の事を可哀想なもので見るように見下ろしていた。

そんな目で見るくらいなら、早く手を引いて起こしてほしい。

「何? わざわざ貴方の下着を薄汚い男共の視線から守ってあげたというのに。せめて立つくらいは自分でなさいな」

感謝など要らぬ。そう突き放すような言い方は、やはりアヴェンジャーというか……。ひねくれているにも程がある。

私はアヴェンジャーの助けを諦めて、さっさと立ち上がって私のこける原因となった人物へと目を向ける。

そこには、申し訳無さそうに両手を合わせて謝る女性の姿があつ

た。

茶髪のショート、しましまシャツの上に着たワンピース……。そしてこの元気はつらつを人型に固めたような、テンションの高さ……。私の記憶が正しければ、この女性は予選の頃の、私のクラス担任だった藤村大河女史だ。

確かにウザイ感じは少しするが、それを差し引いてもこの人は、その人柄の良さから皆に慕われていた。若干バカにされてはいたが、この人を嫌っている者はこれっぽっちも居なかったのだ。

憎めない……。とは、こういう事を言うのだろうか。

「ごめんねー。ちょっと一大事だから、あんまり余裕がなかったのよ」  
「それにしても……。NPCのくせに、動きがまったく予想出来なかったわね。というか、気配が獣並に自然すぎて気付かなかったわよ」  
「アヴェンジャー、それは褒めているの……？」

いや、確かに表現的には的を射ているけれども。なんせ、藤村先生はその名前から、『タイガー』と生徒から影で呼ばれていたほどだし。名前さながら、行動といい、言動といい、本当に虎っぽい時が多々ある。

それはそれとして、お願いとは一体何の事だろうか？

今からアリーナに行く身としては、あまり厄介な面倒事はお断りなのだが……。

「あ、お願い聞いてくれるの？　ありがとー！　先生嬉しいわ」

お願いの内容を聞こうとしたら、勘違いしたらしい藤村先生が勝手に引き受ける方向で突っ走り始める。

その勢いには、流石のアヴェンジャーも少し引いていた。

「それで実はね、私の愛用の竹刀が行方不明なのよ。用具室に置いていたら、アリーナに紛れ込んだみたいで……」

用具室……？　あ。

思い出した。予選の時の、あの異界へと続く部屋。あの倉庫だ。あそこが確か用具室だったはず。

そして、言峰神父が言うには、その扉がアリーナへと繋がっているはず……。



なるほど、確かに、用具室の扉がアリーナへの入り口なら、用具室からアリーナへと中の物が混入してしまう事もありえない事ではないだろう。

もう、なんとなくだが藤村先生のお願いの内容にも見当がついてきた気がする。

「だから、アリーナから、竹刀を取ってきてほしいの。それで一回戦の間に渡してくれればいいわ」

「やっぱりね……。だが一回戦の間という事は、一週間は待てるという事か。案外、そこまで切羽詰まっている訳では無さそうだ。」

「ただ、私も毎日いるわけじゃないから、タイミングよく、声をかけてね。じゃあ、よろしくー」

言うだけ言って、そのまま藤村先生はどこかへと去ってしまった。なんともせわしない先生だ。予選の頃とまるで変わりないその姿に、何故か、私は自然と頬が緩んでいた。

「嵐のような女だったわね……。しかも、余計な任務<sup>オーダー</sup>まで押し付けて。まあ、どうでもいいけど。それよりもさつさとアリーナへ行きましょう。特にヒヨコの貴方は、いつまでも油を売ってられないのだし」

私の笑顔が気に入らなかったのか、アヴェンジャーは不機嫌そうに言うのと、再び姿を消した。どうにも扱いに困ったサーヴァントである。

さて、気を取り直してアリーナへと向かおう。現在地は階段前。ここから真っ直ぐ教室の並ぶ廊下を抜けた先に、目的のアリーナへの入り口がある。私は頭の中で場所を再確認すると、再びアリーナ入り口を目指して歩き出した。

歩を進めていくうちに、色々なサーヴァントらしき姿が目に入ってきた。たとえば、獣の耳のようなものが頭部に付いている麗しの女性だったり、筋肉の塊のような変質者っぽいマッスルだったり、私の事は舐め回して品定めするかののように全身隈無く見てくる上半身裸の男性だったり……。

アヴェンジャーもそうだが、誰も彼も、一癖有りそうなサーヴァントばかり。やはり、人間とは違うが故なのだろうか。英霊にまで至っ

た英雄達、それを人間が完全に御し切るのは不可能に近い。

よつぽど、サーヴアントが従順でなければ、まず無理な芸等に違いない。だからこそ、私達ウィザードは、サーヴアントと目的を同じくしなければならぬのだ。目指す場所、つまりは聖杯。それを手にする為に、協力者として……。

アヴェンジャーは、聖杯に何を願うのだろうか？

彼女の事だから、どうせ教えてはくれないだろうか。

なら、私は？

私は何故、この聖杯戦争に参加した？

今はまだ、分からないけれど、記憶を取り戻した時には、それも分かるのだろうか……？

やがて、私は教室郡を抜けて、廊下の最果て、用具室前へとやってくる。そこまで距離はなかったので、あっという間に到着した。

あの時、レオや彼を追って、この扉を開いて、私の運命は決した。アヴェンジャーと共に、この聖杯戦争へと参加するという運命に。

決まってしまった事はもう覆せない。目的も、記憶も、覚悟も。何も持たない、持たざる者である私が、この命を懸けた聖杯戦争でどこまで行けるかは分からない。だけど。

だけど、私は止まらない。死にたくない。消えたくない。

こんな、訳の分からないままで、到底終われない。

「マスター、一応言っておきます。アリーナに入ってしまったえば、今日はもう学園に戻って来る事は出来ず、アリーナを出ると明日になってしまいます。今日は練習期間ですが、礼装やアイテムの購入、情報収集など、学園でやり残した事があるのなら、アリーナに入る前に済ませてください」

現界したアヴェンジャーの警告とも取れる忠告。アリーナへ入るなら、下準備を満遍なく、滞りなく済ませておけ、という事か。

そして、今日は練習期間。まだ対戦相手すら決まってないから、準備諸々について今日は気にするなという事らしい。

もちろん、今度からはしっかりと準備が必要となってくるだろう

が。

「分かった。とりあえず、今日はアリーナに慣れるところからだしね」  
「分かったのならいいわ。せめて戦場の空気には最低でも慣れてもらわないと私が困ります。マスターが足手まといとか、洒落にならないから」

そうして姿を消したアヴェンジャー。言いたい事は全て言った、という事か。

さあ、それではアリーナへと向かおう。私は扉に手を掛けると、そこで電子メッセージが取っ手の部分から宙へと浮かび上がる。

メッセージによれば、第一層か第二層か、どちらかを選択しろという事だった。なるほど、一回戦毎に二層マップが用意されているのか。多分、ここまで大掛かりな聖杯戦争を用意しているのだから、アリーナも毎回一回戦が終わると変更されるはずだ。

使い回しなんてしては、マンネリ化してしまうというものだし。

当然ながら、いきなり第二層に入れる訳もなく、とりあえず現在選択出来る第一層の項目を指で触れる。

すると、電子メッセージは取っ手に吸い込まれるように戻っていき、ガチャリ、と鍵が開くような音が小さく鳴り響いた。

これで、アリーナへと行けるのだろう。藤村先生に出鼻を挫かれた感は否めないが、ようやく、アリーナへと入る事が出来る。

いざ、戦地へと赴こう。兎にも角にも、戦闘に慣れなければ、この先やっていくなんて不可能なのだから。

扉を抜けた瞬間、私は光に覆われ、気が付いたら異界に足を踏み入っていた。

無機質な風景は、コンピュータの中に直に入ってしまったかのような錯覚を起こさせる。床や壁は青色の半透明で、景色の何から何までが青々としている。青一色と言っても良いぐらいだ。

ピリリ、とポケットの中の端末が小気味良い電子音を鳴らせて、メッセージ受信の合図を送ってくる。取り出し、端末を開いてみると、

『一の月 想海』

と、画面にはシンプルに表記されていた。それが、この場所の名前のようだ。

「さて、軽くアリーナについて触れておきましょうか」

現界し、初戦闘時に振るっていた禍々しい旗を持ったアヴェンジャー。どうやら、軽い説明をしてくれようとしているらしい。

「この闘いの場…アリーナと呼ばれていますが、ここでは自由に戦闘する事が許されています。セラフの敵性プログラムがウロウロと闊歩しているようですが、当然ながらその全てを蹴散らしますよ。ヒヨコの貴方には経験値がいくらあっても足りないくらいだし」

つまり、見かけたエネミーは片っ端から撃破していく……と？

なんとスパルタな事を言ってくれるのか、この魔女は。私は素人だというのに、最初からそんな事をしていれば、みすみす死に行くようなものだ！

「ちよつとー！ 私をあの脳味噌筋肉共と同じにしないでくれる!? 分かってるわよ。貴方はこれが初陣、今日は飽くまでも戦闘に慣れる事を目的としているのだし。適当に進んだところでお開きにしましょうか」

アヴェンジャーはスパルタと言われるのが非常に気に入らなかつたようで、凜の時よりも機嫌悪そうに、床にガンガン旗を打ち付けていた。

そんなに嫌だったのか……。機嫌を損ねて八つ当たりを喰らうのも嫌だし、言葉には気を付けよう。

「さて、ではそろそろ進みましょう」

と言って、アヴェンジャーはさっさと先へ歩き始めてしまう。これではどちらが従者か分かったものではない。

私は慌ててアヴェンジャーの後を追いかける。正直、こんな所で置き去りにされたくないし。辺りの配色も相まって、不気味にさえ思え

てくる。

寒色で自分の周囲を囲まれていると、何故か、心が不安に搔き立てられるような気がしてくる。しかも、今の私は状況はおろか、見知らぬ土地で命懸けの闘いを強いられているのだから、不安で堪らない。

だから、怒られるとは思いつつも、私はおずおずと先を歩くアヴェンジャーの手に、自らの手をそっと添えた。

アヴェンジャーの手はその外見の、美しくも冷たい見た目からは予想外にも、ちゃんと人肌の暖かさを備えていた。伝わる温もりは、私の心を瞬く間にほぐしていく。

「!! ちょよ、何をしているの! 離さない!!」

しかし、やはりといった具合に、アヴェンジャーは私の手をすぐに払いのけてしまう。馴れ合いを好まない彼女からすれば、『手をつなぐ』という行為そのものが嫌いなのもかもしれない。

「ごめん……でも、なんか……急に心細くなって。つい……」

「……まったく。ヒヨコで甘えん坊、と来ましたか。私は貴方の親鳥ではありません。自分の意志で、自分の足で歩を進めなさい。私は貴方の敵を殺すだけ。私は死と破壊を撒き散らすだけと知りなさい。決して、私に心を許さない事ね」

それつきり、アヴェンジャーは私の後ろに行くのと、先を進むのを止めてしまった。自分で先を行け、とその黄金の瞳が物語っている。

だが、どうにも機嫌を損ねたという訳ではないらしい。本当に、難しいサーヴァントである。

少し進むと、開けた場所に出た。そして、そこにはキューブ型をしたエネミーが、乱雑に飛び回りながら上下に分離して、フロアを闊歩している。

「アレが本戦へ進んで最初の敵よ。さあ、貴方の指図で動いてあげるのだから、少しは感心させてみなさい!」

アヴェンジャーが旗を構えて戦闘態勢に入る。エネミーもこちらに近付いてきた際に、私達の存在に気付いて、猛スピードで突進してきた。

「来る……!! アヴェンジャー、ガードして相手の出方を見て!」

不規則な動きをする敵に、まずは出方を窺い様子見をすると判断する。

指示通り、アヴェンジャーは旗を横に構えて攻撃を待ち構えた。

「……………」

が、エネミーを地面に向かって、急降下した次の瞬間、勢いよくアヴェンジャー目掛けて全身を使って突き上げてきた。

あまりの勢いに、アヴェンジャーは旗を持つ手を旗ごと打ち上げられ、隙だらけとなった胴へとエネミーの突進をモロに受けてしまう。

「ガフツ……………!!」

「アヴェンジャー!!」

ダメージを受けつつも、即座にアヴェンジャーは胸の下辺りに来ていたエネミーにエルボーを落とし、そのまま地面へと叩きつけられたエネミーを大きく溜めた蹴りで吹き飛ばす。

「……………これは。ちっ!」

攻撃を受けた腹をさすりながら、アヴェンジャーは何か気付いたような態度を見せるが、すぐに敵に向き直る。エネミーはまだ倒せてはいないからだ。

「マスター! あれは所詮はプログラム。不規則に見えて、その実その行動には規則性があるわ! それを見極めなさい!」

そんな事を言われても、初めて見るし、まだ完全に見極めるなんて、この僅かな間では無理だ。

「誰も素人に完璧なんざ求めてないわよ! なんとなくでいいから、動きを少しでも読む努力をしろ!」

怒声気味なアヴェンジャーの叱咤に、私は頬をパンパンと叩き、気合いを入れ直す。

負けは許されない。敗北すなわち、死なのだから。一時も気を抜けない!

私はエネミーの動きによく目を凝らす。プログラム、つまり機械だ。ならば、必ずどこかに規則性が見つけれられるに違いない。

「アヴェンジャー、今度はこっちから仕掛けるよ! 攻撃の合間にフェイントを入れて! 私はエネミーの動きを観察するから、その間

はアヴェンジャーは攻め続けて！」

「よろしい。守り一辺倒な指示よりは幾分マシね！」

ニヤリと、口の端から零れた血を拭い、不敵な笑みを浮かべるアヴェンジャー。言われた通りに、彼女はエネミーに向けて旗を掲げて走り出す。

アヴェンジャーが闘っている間に、私は目を凝らしてエネミーの動きを凝視する。キューブ型の体をバネのようなものを間から垣間見せながら二分させて、縦横無尽に乱回転するように飛び回るエネミー。

アヴェンジャーの攻撃に合わせて、体を二分させて受け止め、または受け流す。

が、時折混ざるフェイントにはあまり対応出来ていないようで、分離直後に旗の一撃の直撃を受けていたり、戻った瞬間に弾き飛ばされたり……。

「アヴェンジャー、フェイントを主軸に戦闘！ 敵が深く踏み込んできた時は地面に打ち付けて！」

今までの戦闘や、キューブの動きを見ていてなんとなく気付いた事がある。動きは複雑だが、その行動パターンは単調だ。

キューブはこちらが先に見せた動きに対して、その行動パターンを決定する。こちらが防御姿勢を取れば、向こうはブレイク。こちらが攻撃態勢を見せれば、分離、または固まってガード。そして、強く踏み込もうとすれば、即座に懐に入ってアタックしてくる。

つまり、このエネミーはこちらの手札に対してずっと後出しをしていたのだ。

仕組みさえ分かれば簡単。このエネミーに限らずとも、エネミーが機械的なプログラムなのであれば、攻略法には滅法弱いはず。あとは、エネミーの行動パターンに合わせて対応すればいいだけ。

そこからの戦闘は、アヴェンジャーの一方的な蹂躪だった。攻略法を見出されたエネミーは、まるで反撃の機会を与えられず、いや、与えられてもそれは偽りだ。もはやこの戦闘はアヴェンジャーの手の平の上にある。

瞬く間に、エネミーはボロボロになってデータのほつれが見え始め、もはや全身がノイズまみれとなっていた。

「それではさようなら。消え失せろ」

ダメージの蓄積でふらふらと力無く宙を漂うエネミーに、アヴェエンジャーは腰から抜いた剣を、そのままの勢いで居合い一閃した。

振り抜かれた刀身は、分離から戻った直後のエネミーを縦に分断し、キューブ型は四方へとバラけながら完全に消滅した。

「……っ、ふう」

敵の消滅に、私は張り詰めていた緊張が一気に解けた。とりあえず、本戦で最初の試練を乗り越えられたのだ。

途端に、思わず腰が抜けたように、私はその場へとへたり込んでしまう。なんだか疲れがドツと襲ってきたような感覚だ。

「素人なりに素人らしく、よくやった方ですね。でも、たったの一回の戦闘でこれでは、先が思いやられるわ」

嘆息して、アヴェエンジャーは呆れたように、いつかのように私を見下ろしていた。口の端から垂れた、少し痛々しくも見える血の跡が、あの時とは違うという何よりの証拠か。

「大丈夫、アヴェエンジャー?」

「ハッ。他人の心配などをしている余裕はあるようですね。なら、まだ余力は有りそうね」

心配して声を掛けるも、鼻で笑われてしまう。私はいつもの事と割り切り、足に力を入れて立ち上がる。

ふと、アヴェエンジャーの方に視線を送ると、訝しそうに、先程エネミーから攻撃を受けた腹をさすっていた。

妊娠……?」

「……馬鹿な事を言ってる、焼き殺すわよ」

め、目が本気です!

すぐに謝り、訝しげにしている理由を聞いてみるが、

「……少し面倒な事になっているかもね。まあ、確証はないし、今は気にしない。さて、また今のタイプのエネミーを狩りに行きましょう。ワンサイドゲームって嬉しいし」



と、はぐらかされてしまった。少し気にはなるが、今は戦闘に慣れる事を優先しよう。アヴェンジャーが嗜虐的な笑みを浮かべているが、気にしたら負けである。

その後、しばらくフロアを回ってキューブ型エネミーと闘っていたが、少し強そうな虫<sup>バグ</sup>タイプのエネミーが通路を塞いだため、今日はそこまで探索は終了となった。

蛇足だが、アイテムフォルダも二つ程入手した。エーテルの欠片と少しばかりの軍資金だ。ちなみに、セラフでの通貨は『PPT』というらしい。

そして、藤村先生から頼まれた竹刀はまだ見つけれられていない。また今度、探してみる事にしよう。

そうして、私達は元来た入り口へと向けて、帰路についたのだった。

## ゼロという最弱の称号

アリーナから戻つてくると、既に日は沈み、空はすっかりと真つ暗になっていた。予選の頃の名残かは知らないが、こういったロケーションは健在らしい。

アリーナの入り口から離れ、一年生の教室がある廊下へと出る。他の学生服の姿はめつきり減っており、ほとんどは引き上げてしまったようだ。

未だに残っているメンバーは、この奇異な世界をもっと探索しているか、それとも闘いの備えを入念にしているか……もしくは、それらともまったく異なる目的であるのか。それは彼らのみぞ知る事だ。

余計な詮索は、在らぬ誤解を招きかねないので、私は彼らの存在には触れずに通り過ぎる。

目的地は二階。正確には2―Bの教室だ。言峰神父の話では、そこが私とアヴェンジャーに与えられた休息の地であるはず。

マイルーム目指して二階に辿り着いた私だが、教室の方にふと目を向けると、目当ての2―Bの教室の前に、何故か生徒——いや、他のマスター達の列が出来ていた。

「……？」

疑問に思うが、これではマイルームに入れない。一体何が起きているのか？

「あら？　また会ったわね、ひよひよマスターさん」

……、この声は。

振り返り、声の方を見てみれば、そこにはやはりといったように、遠坂凜が立っていた。これで今日三度目の遭遇である。

「別に対戦相手でもないのに、こう日に何度も顔を合わせるの、一体何の因果なのやら……。それで？　アリーナに行ったんでしょう？

少しは覚悟を持てたのかしら？」

わざわざそんな事を聞いてくるあたり、やはり彼女はお人好しだ。なんというか、彼女の声音には私に対する侮蔑や卑下が無く、むしろ

お節介で声を掛けてきている感じがする。

ここは素直に答えるのが、凜への礼儀というものだろう。

「……確固とした覚悟はまだ持ててない。でも、私がしつかりしないと、契約してくれたアヴェンジャーに申し訳ないよ」

それは心からの本音だった。あの時、アヴェンジャーが手を差し伸べてくれなければ、私は終わ<sup>死</sup>って<sup>ん</sup>いた。それだけでも、アヴェンジャーには感謝だけでは足りないくらいなのだ。

口は悪いし、態度も悪い。性格や性根だつてひん曲がった彼女ではあるけれど。

自分の為に、私を利用する為に、私との契約を交わしたと語った彼女だけれど。

それでも、それがあつたからこそ、私はこうして生きている。

訳の分からない聖杯戦争なんてものに巻き込まれてはいるが、それはアヴェンジャーの責任ではない。私の覚えてない『私』<sup>記憶</sup>に原因があるのだから。

ならばせめて、アヴェンジャーへの恩くらい少しでも返そう。この鬨に理由を未だに持てない私だが、きちんと理由を持てるその時まで、それを私の鬨う理由にしようじゃないか。

「……そ。ふーん。ひよひよマスターにしては、立派な心構えじゃない」

凜は私の答えに、少し感心したように息を漏らす。一流である凜に褒められたのは、素直に嬉しい。

だが、調子に乗ってはいけない。どうせすぐに——  
「でも、それだけじゃ聖杯戦争を勝ち抜くなんて、まず不可能。何もかも未熟なマスターなままじゃ、決戦の日に辿り着く前に、アリーナのエネミーに倒されるのがオチよ。そうなりたくないなら、鬨う意志は強く持ち続ける事ね」

……ほら、やっぱり。ありがたい教えを授けてくれるのは良いが、上げて落とすのは止めて下さいお願いします。地味にへこみます  
……。

「……ハア。どうにも、あなたを見ると構ってしまふのよね。勝ち進

めるかもまるで分からないヒヨコで、勝ったら勝ったで敵になるかもしれないってのに……。憎めない子よね、まったく……。」

少し貶しすぎではないですか？ 私だって傷付きますし。

「ウィザードが何言ってるんだか。ウィザード同士のやり合いなんて、もつと熾烈で苛烈でえげつないのが本来なのよ。こんなの可愛いもんですよ」

そんなの聞くと、記憶を思い出したくなる。止めよう、もうこの話はここまでだ。

それよりも、気になっている事があつたはずだ。

「ところで、この列って何？」

「え？ ああ、これ。マイルームに入る順番待ちよ。いくつかの教室がマイルームの入り口として設けられたはいいけど、参加者は100を越えてるのよ？ 扉は限られているし、同時にマイルームには入れないから、こうして順番待ちしてるのよ。わたしもさっき来たけど、その時はもつと混んでたんだから。これでも減った方ね」

なるほど。確かに、よく見てみれば携帯端末を扉に翳して一人ずつ中に入って行っている。それは時間も掛かるはずだ。

「あなたは2―Bの教室からマイルームに行くの？」

「うん、そうだけど……」

「ふーん。わたしは2―Cの教室がマイルームの入り口で登録されるから、じゃあね」

去り際に指でピツと別れの挨拶をした凜は、そのまま向こう側の列の方へと行ってしまった。

私も自分の列に並ぶとしよう。この分なら、あと10分もしないうちに順番が回ってくるだろう。

そして、10分足らずで私の番になり、他の生徒達と同じように、私も認証コードがインストールされた端末を扉に翳す。アーリーナの時と同じく、ガチャリと解錠した音が響くと、扉に手を掛ける。扉の先は、やはり光で溢れており、もはや躊躇なく足を踏み入れた――。

中はなんて事のない、ありふれた普通の教室だった。ただし、本当にただの教室だ。休むためのベッドも無ければ、布団一つ置いていない。

「気が利かない、と言えばそれまでだが、それにしても、いくらなんでもおびなり過ぎやしないだろうか？」

「干し草の山でも有れば上等でしたが……まあ、無いものねだりしても仕方ありませんか。さ、それではひとまずの寝所作りをしなさい、マスター？　これではおちおち休んでもいられないでしょう」

現界したアヴェンジャーは、腕を組んで教室の端っこの方に居た。このサーヴァント、手伝う気は皆無らしい。

くそう……私よりも筋力有るくせに！

とりあえず、机を一カ所に集めて大きな土台を作り上げる。ピッチリと隙間なく敷き詰めるように並べているので、多少上に乗って動いたくらいじゃ崩れないだろう。

私とアヴェンジャーはその上に登ると、腰を落ち着けた。地べたで横になるより遥かにマシなので、寝る時もここで寝よう。

「さてと……、ようやく落ち着けたところで、マスターにお知らせがあります」

と、甲冑を脱ぎ捨てて、並べた机の上にその豊満な胸を押しつぶしながら、だらしなく寝そべったアヴェンジャーが、脱力しきった顔で口を開いた。

にしても、お知らせとは……？

「先程のアリーナで分かった事だけど、どうやら私は本来の力を出せていないみたい。マスターの未熟さが、こうして私のステータスに表れたという事かしらね。まあ？　ステータスが低下したとは言っても、私の技量が消えて無くなったという訳ではないから、そこまで心配は要らないでしょう」

「!!」

ちよつと待て。今さらつと言ったけど、それはつまり、アヴェンジャーは私のせいでかなりハンデを背負っているという状態という

事じゃないか！

そんなの、心配すると言われても無理な話だ。

「……こういうのは好かないけど、こう思いなさい。貴方はヒヨコ。これは変えようのない事実です。しかし、ヒヨコは成長し、大人へと進化していくものでもある。貴方がヒヨコから鶏に至るのか、それとも鳳にまで化けるのかは、これからの貴方次第って事よ」

これからの、私次第……。

「ですから、明日も、アリーナでエネミー共を狩りまくるわよ。貴方にとっても経験値になるだけじゃない。エネミー共が消滅時に出すデータの残滓は、私の魂の容量を補強する糧にもなるのですから」

そう、だな。うん。私がどうなるかは、私にしか決められない。闘いを繰り返せば、度胸もついてくると良いのだが……。

そして、覚悟も。命を奪い合うという、人を殺すという覚悟を……。それと、これだけは言っておきます。貴方は全マスター中、最弱と言っても過言ではないでしょう。記憶も無く、ウィザードとしての技量も無く、闘う事への覚悟も無い。貴方には聖杯戦争へ参加するにあたり、まさしく、他のマスターが持つものが無い、真に最弱のマスターと言えるでしょう」

最弱、か……。なかなか痛いところを突いてくる。それは自分でもはつきりと自覚がある。多分、こんな風に、意味も分からずに聖杯戦争に臨もうとしているマスターは他には居ないだろうから。

凜が言っていた事を思い出す。

この聖杯戦争は、セラフに入ってくる段階から既に人を選んでいく。ウィザード級のハッカーでなければ、セラフには接続出来ず、その上、予選において更に人数が篩ふるいにかけられる。

つまり、本戦まで来た時点で、相当な腕前を持ったウィザードばかりが、聖杯を求めて争うのだ。周りは言わば強者しか居ないのと同義。そう、ただ私を除いては……。

私だけが、ゼロからスタートするのだ。

「そう悲観する事ないわよ。確かに、ゼロには何を掛けてもゼロ。でも、ゼロは空っぽの状態だけど、空っぽなりに、そこにはあらゆる可

能性が秘められているんだし。まだマイナスよりかは幾分マシじゃないの？」

欠伸混じりに、アヴェンジャーは寝転んだまま背筋をググツと伸ばしながら言う。彼女はこの状況に特に思うところは無いようだ。当事者であるというのに、まるでどこ吹く風である。

何故、そんなに気楽でいられるのだろうか？

「はあ？ 別に鬼気迫る状況じゃないからに決まってるじゃない。今のこの状況なんて………存在すら許されなかったあの頃の私に比べれば……」

「え？」

アヴェンジャーの言葉をどんどん小さくなっていき、最後の方は聞き取る事すら難しかった。なので、聞き直そうとしたが、

「何でもないわよ。あまり詮索しない事ね。私の深層に嵌まれば、アムタは地獄の炎に焼かれる事になるから。だから、知っておきなさいマスター。私は復讐の徒。断罪者でありながら、自身もまた赦されぬ罪を負う者。私は邪悪であり、闇であり、愚者である、報われぬ人類の敵対者。英雄と対を為す、反転の存在……『反英雄』であるという事を」

それっきり、アヴェンジャーは私から顔を背けて、相変わらずのだらしなさでゴロゴロし始める。もう今日はこれ以上は私と語る気はないという表明だろう。

アヴェンジャーも、何かを抱えている。漠然とだが、それはとても根の深い業なのだ、直感的に感じた。何も無い私とは違い、アヴェンジャーがアヴェンジャーたる所以となる、深い深い闇が、彼女の奥底で渦巻いているのだろう。

それを、私は覗き見る事はまだ出来ない。彼女が私に心を開いてくれないのなら、それは叶わない。彼女に許しを得ずに踏み込む事は不可能なのだから。

深淵を覗いた時、向こうもまたこちらを覗き見ている。故に、アヴェンジャーの秘密を知ろうとした時、それは彼女に筒抜けであるという事を、忘れてはいけない。

同意も無しにそれをしてしまえば、本当に、私は彼女の炎を以て、身を灼かれる事になるだろう――。

私が契約したサーヴァントは、そういうサーヴァントなのだ。それをゆめゆめ、忘れてはならない。

最弱のマスターは、復讐者たるサーヴァントと共に、ゼロから聖杯戦争を始めるのだ。この旅路の行く末に、何が待ち受けているのかも分からないままに。

ここからは、休むアヴェンジャーと私の、取り留めもないガールズトーク（仮）である。しばしのお目汚しを、お許しいただきたい。

「ところで、アヴェンジャーってスタイル良いよね。何を食べてたらそんな風になったの？」

「なに、羨ましいとでも？ 別に大したもののは食べてなかったはずよ。元々の私は農家の娘だし。裕福じゃなかったしね」

「裕福じゃないのに、そんなにムチムチになれたの……？ ずるい……」

「……スタイルなんて、遺伝によるものが大きいじゃないのよ。貴方の時代に比べれば、殆どの英霊の生きていた時代では食べ物に恵まれていたとは言えないのが当たり前。栄養が足りなければ、体は貧相になるのは当然だけれど、ある程度は余裕があれば、体格は遺伝情報に従って成長するものだし。まあ、この世界の地上も大地がやせ細っているみたいだけど、それでも胸の大きい女は居るでしょうし」

「なん……だと……？ なら、私は遺伝的に負けたというのか……!？」

「なによ、遺伝的敗北って……。アンタ、やっぱりバカじゃないの？」「う、うるさいやい！ ええい、このグレた巨乳サーヴァントめ！ そ



んなけしからんモノは揉みしだいてくれる!!」

「ちよ、止めなさい!! どうしてバカはこう、すぐ行動で示そうとするのよ!?!」

「逃げてでも無駄だよ。この教室では私とアヴェンジャーの二人きり。狭い室内でいつまで逃げ続けられるかな……?」

「この……変態が!」

しばらくの追いかけてこの後、マジ切れしたアヴェンジャーに私が殴られて気絶し、その後、目が覚めたら朝になっていたのは、言うまでもなかった。

堅い床の上で眠るのって、冷たい上に体の節々が痛むものなのね……。

## 対戦相手は――

翌日、早朝から特にする事もなかった私は、マイルームを出て、すぐ隣の2―A教室に入る。起きてすぐにアリーナとか、正直なところ無理だし。

この教室は休息を取るマイルームとは違い、全ての聖杯戦争参加者にとって共有かつ共通の控え室のようなものだった。故に、私以外にもこの教室で時間を潰したり、何か作業をしていたりと、他のマスターの姿が散見出来る。

そんな中で私は手持ち無沙汰であったため、予選時に自分の席だった場所に腰掛けていた。まだ、運営側からの連絡は来ていない。自分の対戦相手が誰かも分からずに、こうしてぼーっとしているのは私くらいのものではなからうか？

と。そんな風に呑気に机に肘をついて頬杖しながら他のマスター達を眺めていたら、突然、無機質な電子音が教室中に鳴り響いた。しかも、どうにも私の間近でその音は発生しているらしく、よくよく聞けば音はどうやら、ポケットに仕舞い込んだ携帯端末から出ているらしい。

音の発生源である端末の持ち主――つまり私に教室中の視線が集まるも、私が携帯端末を取り出したのを見てすぐに「なんだ、運営の知らせか」と各々すぐに元の行動に戻っていく。

私は端末の画面に目を落とすと、そこには何やら文字が表示されている。

『……2階掲示板にて、次の対戦者を発表する』

端的かつシンプルなそのメッセージ。なるほど、端末を通しての連絡とは、こういう感じで来るのか。

それよりも、メッセージの内容だ。対戦者の発表。サーヴァントの言っていた、一騎打ちの相手を知らされる、という事だろうか。

とにかく、2階掲示板の前に行ってみれば分かるのだろう。

端末からの指示に従って掲示板の前に来てみると、そこには見慣れない一枚の紙が張り出されていた。

真っ白な紙に書かれているのは、二人の名前。1つは自分。もう1つの名前は――

『マスター：間桐慎二 決戦場：一の月想海』

「へえ。まさか君が一回戦の相手とはね。この本戦にいただけでも驚きだったけどねえ」

いつの間にか、慎二が隣に立っていた。青みがかった髪は若干（ワカメっぽい）パーマが掛かっており、着崩した制服は妙に似合っている。常に自信に満ち溢れた彼は、むしろその態度のデカさからナルシストと断言していい。いや、確実にナルシストである。

「けど、考えてみればそれもアリかな。僕の友人に振り当てられた以上、君も世界有数の魔術師<sup>ウィザード</sup>って事だもんな」

勝手に自分の都合が良いような自己解釈をする慎二。しかし、そうか……。自分の対戦者が決まっていないう事は、その逆も同じだ。つまり、私の対戦者も、まだ次の対戦相手が決まっていなかった状態という事になる。

ならば慎二にも、私と同じで運営側からの連絡があつて当然なのだ。

「格の違いは歴然だけど、楽しく友人やってたワケだし。一応、おめでとうと言っておくよ」

なんだろう、私は予選の頃から慎二の事を知っているので、この自信過剰っぷりにも別段思う事はないのだが、姿が見えていないはずのアヴェンジャーが額に青筋を浮かべているのが容易に想像出来る。

……まあ、普段はサークレットをしているので、マイルームでのオフモードでしかその額を見る事は出来ないのだが。

多分、彼女は慎二のようなタイプは嫌っているだろう。なんとなく、うん。だって上から目線とかすごくイライラしそうだし。

「――そういえば、君、予選をギリギリで通過したんだって？ どう

せお情けで通してもらったんだろ？ いいよねえ凡俗は、いろいろハ  
ンデつけてもらってさ。でも本戦からは実力勝負だから、勘違いした  
ままは良くないぜ？」

勝手に話を進める慎二。その言葉からも、態度からも分かるよう  
に、完全に私を自分以下の存在だと見下しているというのがよく伝  
わってくる。

しかし、それに反論出来ない事もまた事実。私には、如何せん彼や  
他のマスターのように、魔術師ウィザードとしての経験があまりにも欠けている  
からだ。事実を前に、私には慎二に返す言葉が見つからなかった。

「けど、こここの主催者も、なかなか見所があるじゃないか。ほんと、一  
回戦目から盛り上げてくれるよ。そうだろう？ 嗚呼！ いかにも仮  
初の友情だったとはいえ、勝利のためには友をも手にかけてねばならな  
いとは！ 悲しいな、なんと過酷な運命なんだろうか。主人公の定番  
とはいえ、こればかりは僕も心苦しいよ」

私には分かる。今のはただの芝居がかっただけの、心にもない叫び  
だ。だって、その顔はあまりに自分に陶醉しきっていたから。

いつものにやついた表情に戻ると、彼は私の肩をぽんと叩いた。  
「ま、正々堂々と戦おうじゃないか。大丈夫、結構いい勝負になると思  
うぜ？ 君だって選ばれたマスターなんだから。それじゃあ、次会う  
時は敵同士だ。僕らの友情に恥じないよう、いい戦いにしようじゃな  
いか！」

そして、言いたい放題言うだけ言って、彼はさっさと去って行った。  
あのナルシストめ、無遠慮かつ許可なく肩に触れた事、セクハラで訴  
えてやろうか。

……などと、ふざけてみたが、やはり奇妙な感覚に捕らわれていた。  
……慎二と、そのサーヴァントと戦う。幾度か頭の中で復唱してみ  
ても、それは実感を伴わない、ただの言葉でしかない。

理由も、目的も思い出せないまま、仮にも自分にとって友人という  
役割だった人間と殺し合う……？

悪い夢のようだ。

慎二がこの状況に浮かれているのなら、自分はこの状況にうなされ

ている——。それこそ、悪夢のように。

時は過ぎ、現在は夕方にさしかかっていた。空にも夕焼けの紅が混ざり始めている。

私はというと、朝の慎二とのやりとり、そして決まった対戦相手が慎二という現実には、呆然と、ただただぼんやりしていた。何をすればいいか分からない——いや、実のところそんな事は分かりきっている。アヴェンジャーの言葉を借りるなら、アリーナでマスターとしての腕を磨け、といったところだろうか。

しかし、分かっているにしても、どうにも行動に移せるような気分じゃなかったのだ。

私は未だ、悪い夢の中でもがきながらゆらゆらと漂っているような、そんな気分であった。

そして、そんな意識さえも宙に飛んでしまっているような私の耳に、朝聞いたのと同じ電子音が届けられる。携帯端末に運営からの知らせが届いた合図だ。

その音で我に帰った私は、ポケットから朝と同じように端末を取り出し、画面を確認する。

『…：第一暗号鍵を生成。第一層にて取得されたし』

またしてもシンプルにそう表示されていた。それにしても、  
第一暗号鍵……？

——何の事だろうか？

字面から察するに何かの鍵のようだが……。

『分からないのなら、あの怪しい神父にでも聞きなさい。あの男は聖杯戦争の運営を取り仕切ってるみたいだし』

と、姿を消したままのアヴェンジャーが助言をくれる。なるほど、それは確かに良い案だ。分からないなら、絶対に知っていて教えてくれるであろう彼に聞けば、一番手っ取り早い。

凜に聞くのも良いが、彼女が校内に居るとも限らない。だって彼女

もマスターだから、アリーナに入っている可能性が高いのだし。

何より、聖杯戦争の運営を取り仕切っている者として、参加者たるマスターを蔑ろには出来ないはずだ。ルールも分からない状態で、それを教えないなんて運営としては失格も良いところだから。

それに確か、最低限のルールを聞く権利は誰にでもあるというような事を言っていたはずだ。

教室を出ると、目当ての人物はすぐに見つかった。階段の前に立っている彼の元まで歩き、何やら他のマスターからの質問に答えているらしいので、少しの間待つ。

それから5分と経たず、彼に何かを聞いていたらしいマスターは質問が終わったのか、1階へと降りていった。

「ん？ おっと、これはこれは、最後の予選通過者の君か。ようやく君の対戦相手も決まったようで、運営の責任者としても安心したよ」

どうやら私に今気付いたらしい彼は、本当に安心したのか分からない微妙な微笑みで私を迎える。なんというか、とても胡散臭い笑みです。

「それにしても、ちょうど良いな。若きマスターよ。アリーナへ向かう前に、私の話を聞いていきたまえ」

なんだか、用事があるのに話を聞かせたがる親戚の叔父さん”的な言葉で話しかけてくる言峰神父。だが、この神父が親戚とか不幸にも程があると思う。笑いながら人の不幸とか喜びそうな感じがするし。

どうにも、この神父の元となった人物は破綻していると思えないのである。神父が人の不幸を愉しんじやダメだと思えます。

まあ、なんとなく後が怖いので口には間違っても出さないが。「先程端末に、<sup>ブライマイトリガー</sup>第一暗号鍵が生成されたと通信があっただろう？ 本戦の参加者は皆、六日の<sup>モラトリアム</sup>猶予期間のうちに、この暗号鍵を二つ、揃えなければならぬルールとなっている」

こちらが聞く前に、私の聞きたかった内容について語る言峰神父。なら、もつと深く掘り下げて聞いておこう。

「暗号鍵って？」

「暗号鍵とは、マスター同士が雌雄を決する闘技場の鍵だ。それをマスター自身の手で、猶予期間に集めてもらおうという訳だが——それすら達成出来ないようでは、闘技場に入る前に、ゲームオーバーになるだろう。なに、それほど身構えなくてもいい。決戦に値するかどうかを示す、簡単な試練だよ」

なるほど……。ただ戦うだけが本戦ではないという事か。それにしても……、

「二つ？」

「アリーナは、各対戦でそれぞれ、二つの階層から構成されている。そして暗号鍵は、各階層で一つずつ生成される。よって、各対戦で生成される暗号鍵は二つだ。君達マスターには、それを取得してもらおう。その二つの暗号鍵を、便宜上、第一暗号鍵、第二暗号鍵、と呼んでいる。暗号鍵が準備出来次第、聖杯から君の端末に通達が入る。注意して待つがいい」

意外にも詳しく教えてくれたおかげで、全く分からない所がないくらい、スツと理解出来た。要は期限までに鍵を見つけて来い、というクエストだ。それが出来ない者は、戦う権利すら与えられない。

当然と言えば当然かもしれないそのシステム。この時点で篩に掛けられ、真に弱きマスターは排除されるといった寸法だ。力を計るまでもない、単純かつ残酷なシステムと言える。

しかし、それよりも驚いたのは、あのメッセージが聖杯から直接送られているものだという事である。運営スタッフからじゃなくて、賞品そのものからメッセージが送られてくるとか、とんだカルチャーショックだ。

「他に質問はあるかね？」

「もうないです。すごく分かりやすくて助かりました」

「そうか。注意点を伝えておくが、七日目に闘技場に入る前の私闘は、学園であれ、アリーナであれ禁止されている。万が一、アリーナで私闘に及んだ場合は、数手前で、システム側から強制終了させられるだろう。学園での私闘には、マスターのステータス低下という、罰則が

加えられる。気を付けたまえ」

ただでさえひよこマスターなのに、その上更にステータス低下とかされたら、それこそ勝ち目がゼロ、いや、むしろマイナスにさえなってしまう。それだけは気を付けないと……。

しかも、厄介な事に少し短気なところのあるアヴェンジャーが私のサーヴァントなのだ。マスターとして細心の注意を払ってアヴェンジャーをしつかり止めないと。最悪の場合、令呪の行使も頭の片隅に置いておく必要がある。

言峰神父に礼を言い、軽く頭を下げたからその場を後にする。呆然としていた頭も、今の説明のおかげか、少しはマシなものになった。さて、では早速その暗号鍵トリガーとやらを探しに、アリーナへと潜るとしよう。

それにしても、何故ダンジョン系のステージに入る時は「潜る」というのだろうか？

まあ、多分だが地下迷宮がダンジョンの大元だから、「潜る」という言葉がダンジョン全てに当てはめられたのかもしれない。どちらでもよい事ではあるが……。

「お、岸波。お前もトリガーを取りに行くのかい？」

と、階段を下りたすぐの所で、朝に会ったきりの慎二が立っていた。その口振りからするに、慎二も今から行くところだろうか。

そしてその予想は、やはり正解だった。

「悪いけど、僕もこれから行くところさ。お前みたいなノロマには取れないかも知れないけどさ、せいぜいがんばんなよ、あはは！」

またしても、言うだけ言って慎二はアリーナの方へと向けて去っていく。その背中を、何も言い返せずに見送るだけだった私の前に、アヴェンジャーがいきなり現界した。

あ、やっぱり案の定、顔がイラつきを隠せていない！

「あの男、小者臭が半端なくせに偉そうにズケズケと……。言い返さないマスターもマスターです。アヴェンジャーたる私のマスター



なら、そんな負け腰なのは許さないから。それにしてもウザいわね、あのワカメ！ 今度会ったら直接文句つけてやるわ」

「くれぐれも、校内でだけは喧嘩売ったりしたらダメだからね……？」  
「ふん……。分かってるわよ、そんな事。ただでさえ未熟なマスターが、追い討ちで能力低下の罰則とか受けたらしたら、この私でも容易にサーヴァント相手に勝てないんだし。それどころか、雑魚エネミーに負ける可能性すら出てくるわよ」

意外としつかり理解して下さいっているアヴェンジャーさん。これなら余計な心配はいらな——

「でも、よっぽどムカついた時は校内だろうと焼き殺してやろうかしら」

ダメだ。やっぱり私がしつかりとアヴェンジャーの手綱を握るしかない。どうしてこう血気盛んなのだ、このサーヴァントは。もつと女の子らしくあつて下さいお願いします。

「ところで、こちらのマスターから耳寄りな話を小耳に挟んだわよ。今日から保健室で、あの幸薄そうな女A-Iが支給品を配布してくれるそうよ。最弱なら最弱らしく、縫れるものは何でも縫っておく事ね」  
ストレス発散とばかりに私まで貶してアヴェンジャーは姿を消した。というか、小耳に挟むというより盗み聞きなのは……と思うのだが、当然怖くては口が裂けても言えません。

まあ、せつかく為になりそうな情報をくれたわけだし、アリーナに行く前にちよつと寄ってみよう。

という訳で、やってきました保健室。何故だろう、不思議と保健室つて中に入る時、少し勇気がいる気がする。

だが、こんな程度で腰が引けていたらアヴェンジャーにまたとやかに言われそうなので、パツと入ってしまおう。

保健室の扉を開けると、そこはやはり、本戦に進んで最初に起きた頃と全く変わりなく、部屋の中央に設置されたテーブルの前に、ちよこんと健康管理A-Iの桜が椅子に腰掛けていた。なんというか、すご

く手持ち無沙汰に見えるのは、私の気のせいだろうか？

桜も私が入室した事に気が付いて、座ったまま小さく手を振ってくる。

「どうも、岸波さん。良いところに来てくれました。実は今日から、聖杯戦争参加者の皆さんに、私から支給品を配布する事になっているんですよ。はい、どうぞ」

と、私が桜の近くまで行くと、白衣のポケットからゴソゴソと何かを取り出し、手渡してくる桜。それを受け取って、何かを見たところ、どうやらエーテルの欠片をデータ化したものらしい。

「ありがとう、桜。大事に使わせてもらうね」

「はい。是非お役に立ててくださいね。それと、支給品なんですが、一回戦に一度だけとなっています。なので次の支給品は、次の試合の時にまたいらしてください。暇な時にでも来てもらえればと思いますので」

そう言って優しく微笑む桜。『暇な時』が少し強調されていた気がしないでもないが、私は改めて桜に礼を言うと、保健室を後にした。無料程素晴らしいものはない。是非とも今後も保健室には足を運ぶ事にしよう。礼として、暇な桜の話相手くらいにはなってあげたいし。

「ちよつといいかしら」

アリーナの入り口一步手前という所で、黒い制服を着た女子生徒に呼び止められる。服装からして、一成と同じく聖杯戦争の運営NPCだろう。

「アリーナに行く前に、少し助言させてもらうわね。情報マトリクスの説明についてはもう受けたかしら？」

情報マトリクス……？

またも聞き慣れない単語に、私は首を横に振る。なんとも、今日は色々知らない事ばかり聞かされる日だ。

「やっぱり。聖杯戦争のキモとも言える事なのに、把握せずにアーリーに突っ走るマスターばかりね……。いい？ この聖杯戦争は、相手の情報を得る事が勝利のカギ、といっても過言ではないわ。相手を調査し、それで得た情報は、端末の『情報マトリクス』に自動的に記録されていくから、チェックを忘れないでね」

なるほど……。対戦相手サーヴァントの情報を得れば、自動的に蓄積してくれるのか。それは便利だ。いちいち自分で整理しないで済む分、非常に楽だ。

「そうだわ。自分のサーヴァントの情報も記録されているから、まずはそれを見てみるといいわよ。まあ、サーヴァントが教えてくれた範囲までしか確認出来ないんだけど。そこはほら、サーヴァントとの絆を深めて、自分で切り開いていってね」

そういえば、端末のメニューに『マトリクス』という項目があったのを思い出す。なるほどなるほど、その為の項目だったという訳だ。

まだ確認していなかったが、とりあえず今はアーリーナに向かおう。確認くらいは帰ってマイルームでゆったりとしたところだし。

さあ、気を取り直して、私はアーリーナ入り口前に立つ。慎二はもうアーリーナの中だろう。という事は、中で十中八九、彼とそのサーヴァントに鉢合わせる事になるだろう。

慎二のあの様子では、私は完全にナメられている。彼のサーヴァントがどんな人物かは知らないが、もしかしたら挑発を兼ねた牽制として、戦闘を仕掛けてくるかもしれない。

まだ、友人という役割だった慎二と戦うという実感は湧かないが、向こうはそうじゃない。戦う気どころか、余裕で勝てると思ってるのだ。いるのだ。

慎二は、私とはまるで違う。友人というキャラクターだったに過ぎない私と戦う事を、何一つ気負いしていない。ともすれば楽勝な相手でラッキーとすら思っているかもしれない。

私は——彼のようにとは思えない。少なくとも、私は予選の頃も、そして今も、慎二の事を友人とと思っているのだ。そんな彼と殺し合えだなんて、何度も言うが、私にとっては悪夢でしかない。知った顔、そ

れも友人が敵なのだ。普通、そこまで割り切れない。

だからこそ、私は未熟な魔術師ウィザードなのだろう。甘い考えが切り捨てられないのだから。

迷いを抱いたまま、私は扉に手を翳す。この先で、友人が敵意を持って私を待つ事を理解しながらも、受け入れきれないままに――

## 他サーヴァントとの初遭遇

扉から転送されて、アリーナへと足を踏み入れる。先に入った慎二が居るはずだが、すぐ近くにはその姿は確認出来ないようだ。

「……ふん。サーヴァントの気配がしますね。気を付けなさいマスター、あの優男、サーヴァントと共にどこかで待ち構えているわよ」隣に降り立ったアヴェンジャーが、鋭い視線でアリーナの奥地へと睨み付ける。サーヴァントならではの気配というものなのか、アヴェンジャーには他のサーヴァントの気配が感じ取れているらしい。

「ですが、これは見ようによっては、アイツから情報を奪う好機です。アリーナに奴らがいる間にこちらから仕掛けてやろうじゃない」

邪悪な笑顔を浮かべて、アヴェンジャーは手にした旗に頬ずりする。これは……どう考えても鬱憤を晴らしてやろうという顔だ。本気でアヴェンジャーは慎二の事が気に入らないらしい。

「ほ、程々にね？」

「何よ、まさか私が馬鹿な真似をするでも？ 安心なさいな。あのエセ神父も言っていたけど、決戦までは私闘は禁じられているし、もしアリーナで戦闘になっても、それは牽制にしかならないのだから。第一、数手で戦闘を強制終了されるのだから、そうそう間拔けな事にはならないでしょう」

うーん、アヴェンジャーはスラスラと述べてみせるが、頭に血が上って暴走しないか、心配で気が気でない。

「それと、今日に限った話じゃないけど、アリーナでは何が起こるかは誰にも予測が付きません。機会を逃せば得られない情報もあるでしょう。まして、アリーナには一日に二度は訪れられない。取りこぼしが無いように注意なさい」

一度入ってしまったえば、出た時には一日が終わりを告げてしまい、その日はそれが最後となる。それも当然か。入ってすぐにでも出ない限り、マスターは出来る限りアリーナを探索しようとするだろう。

何度も出入りが許されず、だからこそ期間内のマトリクス回収をマ

スターには求められる……。

時間は有限とはよく言ったものだ。聖杯戦争では時間を無駄にする余裕は無いという事か。

「理解したようね。では、行きましたようか。雑魚エネミーを蹂躪し、そしてあのワカメ野郎から情報をふんだくるわよ！」

意気揚々と、アヴェンジャーは私を置いてアリーナの奥へと歩を進めていく。ああ……ついに言ってしまった。頼むから、本人の前でワカメについての言及だけはしないでください……！

天にも祈る気持ちで、私はアヴェンジャーの後を追い始めるのだった。

前回の探索時に回った箇所でエネミー狩りに興じたアヴェンジャー。何度でも言おう。エネミーを狩っている時のアヴェンジャーは、非常に……嗜虐的です……。

嬉々として、攻略法を見つけたエネミーを一方的に蹂躪し、駆逐していくその姿は、ある意味で苛烈と言える。彼女が自分のサーヴァントで、味方で心底良かったと思える程に、その光景はあまりに残酷、冷酷、悪逆そのものに見えないものだった。

アヴェンジャーは味方にすら控えめに言っても厳しい態度だが、敵に対しては慈悲すら掛けない。遠慮もなく、躊躇もなく、戸惑いもなく、いとも容易く殺すのだろう。

嗚呼、私は彼女が怖い。その身に秘めた悪意が、殺意が、憎しみが、憤りが、絶望が。彼女を構成する全てが怖いのだ。

だが、それと同時に頼もしいとさえ感じている自分がある。彼女の絶対的な自信、揺るぎない意思、時折見せる人間らしさ。

アヴェンジャーが真性の怪物ではないのだと感じさせる、どうしようもない少女としての容貌かおが、私を安心させていた。

「……私の顔に何か？ ニヤニヤと気持ち悪いわよ」

と、隣を歩くアヴェンジャーの横顔を見つめていると、それに気付

いたアヴェンジャーが嫌そうな顔をする。

「というか、そんなつもりはなかったのだが、知らず知らずのうちに私は微笑んでいたらしい。」

それにしても、女子に向かって笑顔が気持ち悪いとか、失礼なんてものじゃないぞ。

「あら？ 私は事実を言っただけです。そんな事より、昨日の虫型エネミーが居た辺り、見てみなさい」

ちように直線上に位置していたため、少し遠くだがよく目を凝らしてみると、すると、

「……慎二」

そこには虫型エネミーの代わりに、慎二と、そのサーヴァントらしき人物の姿があった。遠目からでも分かる背丈やシルエットからは、サーヴァントが女性であるという事が分かる。

「やはり居たわね、優男とそのサーヴァント。マスター、このように、アリーナでは対戦相手と出くわす事があります。それが吉と出るか凶と出るかはその時々ですが、今日のところは、相手の手の内を探る好機としましょう」

そうだ。まだ慎二と戦うという実感は湧かないが、何もしなければ敗退は確定事項となってしまう。やらないで後悔するよりも、やって後悔した方が何倍も良いだろう。

相手の情報を得る事が、聖杯戦争における最も重要な事柄。さっきも聞いたではないか。なら、慎二とここで小競り合いをするのは、とても重要になってくる。少しでも情報を得られるなら、やるに越した事はない。

「ふっ……。では行きましようか。あのワカメ、私の炎でカラツカラに干からびさせてやるわ」

やめてあげてくださいい慎二が縮んでしまいます。というか、マスターに直接攻撃とか、しても良いのだろうか……？

まあ、それも戦略としてはあるのかもしれないが。また今度、言峰神父にでも聞いてみるとしよう。

エネミーを軒並み倒した私達は、誰に遮られるでもなく、悠然と待

ち受ける慎二達の元まで歩を進める。

さつき会った時と変わらず、過剰な自信に溢れた彼の顔付きに、自然と隣のアヴェンジャーの顔付きもまた険しくなっていくのが、分かりたくないが分かった。

「遅かったじゃないか、岸波」

ようやく正面から対面するとすぐ、慎二はいかにも余裕しやくしやくといった風に、私へと向けて声を掛けてきた。

「お前があまりにモタモタしてるから、僕はもう暗号鍵トリガーをゲットしちゃったよ！」

「え…もうっ？」

「あははっ、そんな顔するなよ？ 才能の差ってやつだからね。うん、気にしなくていいよ！」

悪びれる様子もなく、平然とそれを口にする。つまりは、お前は自分以下だ、と慎二は私に告げているのだ。

「ついでだ、どうせ勝てないだろうから、僕のサーヴァントを見せてあげるよ。暗号鍵トリガーを手に入れられないなら、ここでゲームオーバーになるのも、同じ事だろ？ 蜂の巣にしちゃってよ、遠慮なくさ！」

最後の言葉は私に掛けられたものではない。彼の隣にいる、彼のサーヴァントに対してのものだった。

慎二のサーヴァント——真っ赤なコートに身を包み、胸元は大きく開かれてその豊満な胸がギリギリまで晒け出されている。

そして何より印象に残るのは、桃色寄りの赤みがかった長髪…：…であるにも関わらず、それを使って隠そうともしていない、顔の中央に大きく走った傷跡だ。

美人である事は一目で分かるが、眉間から左頬にまで刻まれた長い傷跡が、せつかくの美しい容貌を台無しにしまっている。

いや、だからといって、彼女の良さが失われたかと言えば、まるで真逆だ。彼女の様子からするに、彼女はその傷を何一つ恥じていない。見せて当然とさえとれる、その毅然とした佇まいに、独特なワイルドさが滲み出ている。

「うん、お喋りはもうおしまいかい？ もつたいないねえ。中々聞き



応えがあったのに」

慎二のサーヴァントは残念感を隠さずに、溜め息混じりに私へと視線を向けると、話し掛けてくる。

「ほら、うちのマスターは人間付き合いがご存じの通りヘタクソだろ？ お嬢ちゃんとは、珍しく意気投合しているんで、平和的解決もありかと思つてたんだがねえ」

「な、なに勝手に僕を分析してんだよおまえつ。コイツとはただのライバル！ いいから痛めつけてやってよ」

なんと……！ あの慎二が、こうも容易く手玉に取られている……！

このサーヴァント、出来る……!!

「おやおや、素直じゃないねえ。だがまあ、自称親友を叩きのめす性根の悪さはアタシ好みだ。いい悪党っぷりだよシンジ。報酬をたっぷり用意しときな！」

慎二のサーヴァントは威勢良く声を張り上げると、その手に何処からともなく大きな拳銃を取り出し、戦闘の構えになる。

ピストルなんて可愛く見えるそのサイズ。あれは直撃すればサーヴァントと言えども危険に違いない。

「来るわよ！ マスター!!」

無言で慎二を睨み付けていたアヴェンジャーが、旗を構えて同じく戦闘態勢に入った。

「ハハッ！ いいねえ、そうこなくっちゃねえ!!」

慎二のサーヴァントはアヴェンジャーが戦闘態勢になった事で、嬉々として両手の拳銃を構え、無遠慮にそれらを乱雑に撃ち放つ。

大きな拳銃による凶弾の嵐に、アヴェンジャーは旗を両手で回転させ続け、それを防いでみせた。

「へえ、やるじゃないか。なら、これはどうだい!？」

銃撃の嵐を完璧に防いでみせたアヴェンジャーに、敵サーヴァントは悪どい笑みを浮かべると、一気にアヴェンジャーへと距離を詰めてくる。

「チイツー！」

銃とは本来、中距離、遠距離から撃つもの。しかし、近距離で撃てないのではない。間合いの問題があるだけで、相手の懐に入ってしまったら、確実かつ的確に相手を殺傷しうる必殺にもなる。

それを理解していたアヴェンジャーも、旗の振り回し直後の隙を突かれ、忌々しいとばかりに舌打ちする。

この近距離で直撃を受ければ、ただでは済まない。

「アヴェンジャー、石突きを思い切り地面に叩き付けて!!」

「…!!」

距離を詰められ、必殺の間合いから凶弾を放とうとする敵サーヴァントに、彼女が銃撃態勢を取る前にアヴェンジャーは振り回していた旗をそのまま地面に刺す勢いで叩き付けた。

そう、何度かアヴェンジャーがしてみせた、武器による炎の発生。敵に振るうのが間に合わないのなら、足下の地面に叩き付けるだけなら、まだ間に合う。

私の考えが理解出来たらしいアヴェンジャーも、即座に行動に移してくれたのである。

「おっとー」

アヴェンジャーが何かをしてくると察したらしい慎二のサーヴァントは、急ブレーキを掛けて、すぐさまバックで後退する。

そして、ゴウツ、と黒混じりの燃え盛る炎が、寸前まで彼女が来ようとしていたアヴェンジャーのすぐ目の前で燃え上がった。

「へえ、旗だけが武器かと思いきや、そんな芸当も隠し持っているとはねえ。アンタ、一体どこの英霊だい？」

慎二の元まで下がった彼女は、今の炎を目にしても怯む事なく、余裕の態度を崩さない。

「ふん。貴方に言う必要があるわけないでしょう。この薄汚い女海賊が」

「……ほう。よくアタシが海賊だって分かったねえ、アンタ」

途端、場の温度が一気に下がるのを感じる。先程までのちゃらけた空気が消え去り、今や場を支配するのは二人のサーヴァントによる緊張感のみだ。

と、そんな両者の睨み合いに答えるかのように、アリーナ内に警報のようなサイレンが鳴り響く。

「チツ…セラフに感知されたか。まあいい、とどめを刺すまでもないからね」

サイレンと共に、得物が強制的にサーヴァントの手から放され虚空へと消えていく。慎二の口振りからするに、今のがセラフによる私闘の禁止、それによる措置といったところだろう。

これ以上の私闘を許さない為に、武器を奪うのだ。

「旗や炎が武器とか、少しばかりレアなサーヴァントを引いたみたいだけど、僕には通用しないんだよ。そうやってゴミのように這いつくばっていればいいさ！ 泣いて頼めば、子分にしてやってもいいぜ？ まあ、このゲームの賞金も、少しは恵んでやるよ。あははははははっ！」

高笑いと共に、私の事を貶すだけ貶して慎二はサーヴァントと共に姿を一瞬で消した。どうやらどこかへと転移したらしい。もしくは、アリーナから外へと出たのかもしれない。

「チツ——逃げ足の早いワカメ……。邪魔さえなければ、あのワカメへアアを焼いてやったのに」

いや、邪魔がなくてもそれは不可能だったはずだ。何故なら、慎二のサーヴァント……彼女は紛れもなく、アヴェンジャーを上回った力を持っているはず。

こちらが防戦に躍起だったというのに、彼女は攻めるばかりかまだまだ奥の手を隠していそうな雰囲気だった。

マスターの未熟さゆえに、サーヴァントへのステータス低下……。それさえなければ、アヴェンジャーはもつと十全に戦えたはずなのに。

「それを気にする暇があるのなら、さっさと経験を積みなさい。そのためのエネミー狩りだという事を忘れない事ね」

アヴェンジャーのそれは、気遣いなどではないのだろう。彼女はただ事実を口にしたまで。

だけど、それが私には嬉しく思う。少なからず、アヴェンジャーは

私の事を気にかけてくれている。少し猟奇的なエネミー狩りではあったけど、それも私の為の事なのだ。

まあ、自分の強化の為という本音が、そこにはあるのだろうけど。それよりも、だ。アヴェンジャーは慎二のサーヴァントが海賊だと言いついて、それを彼女も認めた。何故、アヴェンジャーは彼女が海賊の英霊だと分かったのだろうか。

「それは……、あの女の事をちよつと知ってるだけよ。でも、あの女の真名とか宝具については期待しない事ね。残念だけど、生前に正史で直接にしろ間接にしろ、関わりがなかった英霊については、その人物について少しは知っていても、ムーンセルからロックが掛けられているから。だから私から教えられる事はそうないし、あつても教える気はないわ。だって、そんなの面白くないし」

アヴェンジャーはそれきり、慎二のサーヴァントについて何も言わず、口を閉ざしてしまう。

むう、少し期待したが、やっぱり捻<sup>ひね</sup>くれている、このサーヴァント。仕方ない。今の戦闘で予想出来るところは自分で想像するしかない。

あのサーヴァントのメインの武器は恐らく、あの銃だ。武器が飛び道具なら、少しはクラスを絞れるかもしれない。断言出来ないがアーチャーではないだろうか。

だが、まだ確定でない以上、もっと情報収集が必要だ。

「やる気が出てきたのかしら？ なら言っておくけど、アーリーナを隅々まで探索すれば、何らかの敵の情報や痕跡を掴めたり、こちらに有利な状況を作れる事もあるでしょう」

アヴェンジャーは、仮称アーチャーである彼女について知っていても教える気はないが、私とその正体を探る事には協力してくれるようだ。だからこそ、こうして助言をくれるのだろうか。

「いい？ この聖杯戦争はこうやって進めるのよ。探索、情報収集、そしてヒヨコマスターの貴方にはスキルアップの為のエネミー討伐。これらが今後の方針において根幹となるのです」

「そうだね。忘れないように肝に銘じておくよ」

「そう、分かったのならいいでしょう。何にせよ、この聖杯戦争は時間との戦いです。故に明日も同じように、ここで敵と遭遇するとは限らないし——その日しか得られない情報も時にはあるでしょう。後悔したくなければ、納得いくまで探索する事を心掛けておきなさい」

時間との戦い……。まさしくその通りだ。定められた猶予期間のうち、暗号鍵トリガーの取得、敵の情報収集、そしてマスターとして魔術師としてのスキルアップ——と、やる事はたくさんある。

時間は多く残されているようで、その実、あまり余裕はないのだ。特に私には——。

ならば、する事は決まっている。さっきの慎二とのやりとりで、多少は友人との戦いにも現実感を得られた。もはや迷っている場合ではない。時間は有限、慎二はどこかへ去り、昨日は虫型エネミーが塞いでいた道も、今や障害となるものは何一つないのだから。

「さあ、先に進もう。アヴェンジャー」

そうと決まれば、余すことなく探索を進めよう。せっかくだ、いつそ今日このフロア全てを隅から隅まで満遍なく探索してしまおうではないか。

私はアヴェンジャーよりも先に、未知の領域へと足を踏み入れている。そうしなければ、威勢ばかりかと、隣に居た彼女に笑われてしまうのだから。

「……………。なんというか、どうしてこう、私のマスターになる人間はこうも前向きなのかしらね。卑屈で陰険な自分が馬鹿みたい…………。私に見出されて、貴方も運が悪いわね、マスター？」

アヴェンジャーが何やら後ろで言っているが、それは私の耳には届かない。

出来れば、早く付いて来て欲しいのだが……。だって私、未熟な魔術師だし？ ヒヨコマスターだし？ 戦うスキルなんて持ち合わせていない単なる女子高生だし？

なので、早く来るようにアヴェンジャーに催促する叫びを上げた。

「助けて!! 盾みたいなのエネミーに見つかった!!」

実は、あんなモノログのように呑気にしている場合ではなく、結構な窮地に陥っていたり。

「っ！ あんのバカマスター……！ 調子に乗って先々進むからよ!!」  
物凄い形相で、こちらに走ってくるアヴェンジャー。私も急ぎ彼女の方へと走り、アヴェンジャーと入れ替わる形で前後を交代する。

「さあ、やるよ。アヴェンジャー!!」  
「……マイルームに帰ったら、私自らありがたいお話をしあげるか、覚悟していなさい」

凄みの利いた良い笑顔を頂きました。これはお仕置き兼お説教コース確定です。ああ、とてつもなく帰りたくない。出来るだけアリーナで時間を潰したい程に。

これは本気で、今日中にこのアリーナ全踏破を試みるしかないようだ。

「バカなマスターを持つと苦労しますね、まったく。せめて、不様な指示だけは出さないでちょうだい」

初めて目にするエネミーを相手に、無茶な注文だとは思う。だが、アヴェンジャーを失望させるつもりも毛頭ない。

やってやろうじやないか。死に物狂いで、エネミーの一挙手一投足のその全て、観察しきってやる！

結論から言おう。盾型のエネミーは、討伐出来ました。それも、驚く程に呆気なく。

見た目の通り、守りを固める事を優先的に行うエネミーだったようで、確かに攻めがたい硬さではあったが、その分、ほとんど向こうから攻撃を仕掛けてくる事がなく、守りを崩す一撃を連続でアヴェンジャーに打ち込まれたエネミーは、簡単に消滅していききました。

「恐ろしい……敵の行動を読み取る、この私の洞察力が———あいたっ!?!」

「バカな上に阿呆ですか、マスター？ あんな奴、行動パターンが単純だっただけでしょくに」

ペチン、と頭を軽くはたかれる。ボケ殺しは止めてほしい、ほんと。割と真面目に対応されると、こちらとしても困るといえるか……イタツ!? だから痛いです!!

無言で私の背中を刺すかのごとく、指で突いてくるアヴェンジャー。地味に痛いのですが。

「ハア……。ふざける元気はあるそうですね。なら、その有り余る体力で、さつさとこのフロアを制圧するわよ」

制圧は何か違うような気がする。それだと、種別が変わってくるというか。ゲーム的に言えば、ジャンルが異なると言えば分かるだろうか。

しかし、そんな私の異論を送る視線はスルーされ、今度はアヴェンジャーがアリーナの先を歩き始める。

こんなチグハグな主従関係、私達以外に果たしているのだろうか……?

そんな疑問を胸に抱きつつ、私は慌ててアヴェンジャーの後を追うのだった。

## トリガーを取得せよ

その後、シールド型エネミーを倒した私達は快進撃のごとく、アリーナに侵攻——うん。本当に、まさしく侵攻というべき勢いと暴威を以て、アヴェンジャーはエネミーというエネミーを討ち滅ぼしていった。

それはもう、かのマケドニアの征服王もかくやという程の、圧倒的な力による蹂躪だ。

本来のステータスではないと彼女は言うが、それでも雑魚エネミー相手では、十分過ぎるくらいの戦闘力を持っている。

アヴェンジャーによる侵攻という名の探索を進める中で、私はアイテムフォルダを二つ発見した。今まで見たアイテムフォルダは青色だったが、その二つはオレンジ色をしており、しかもエネミーが守っている形で設置されていた。

と言っても、守っていたのは盾型のエネミーで、アヴェンジャーに為す術もなく、呆気なく宝を守るガーディアンは消滅させられたのだが。

そして、その中身である一つは、

「……マフラー?」

鳥のようなシルエツトが縫い込まれた、肌触りが恐ろしい程に心地良いシルクのマフラー。

私がアリーナで何故マフラーが……と、目を白黒させていると、隣で見っていたアヴェンジャーは、

「これは……良い拾い物をしましたね」

「えっ、これが? でもただのマフラーじゃ……」

特別、変わったところは見られないのだが。いや、そういえば、マフラーと言えば毛糸を使うはずなのに、一部毛糸っぽくない素材が使われているような……。

「そう。その部分が特別なのです。それはシルクで出来たマフラー



に、鳳凰の羽をあしらっているようです。言うなれば、『鳳凰のマフラ―』……かしら」

ホウオウ……、鳳凰!!?

鳳凰といえ、中国を発祥とした霊獣で、日本にも伝説の存在として語られている、超メジャーな霊獣だ。

諸説あるが、その姿は鳥をベースに、合成獣キメラのように様々な動物、または他の霊獣の部位を併せ持つという異形であると語られている。

しかし、にも関わらずだ。キメラとの違いは、そのような異形であるにも関わらず、その存在がほとんどの伝説で聖なるものとして語られているという点だろう。

分かりやすい例を一つ上げるとするなら、鳳凰は別名、朱雀と言われている。そうだ、あの有名な季節や方角を司るとされる四神の一柱。

獣とはいえ、仮にも神。それは守護神として、聖なる存在として人類に多く認知されている。

私が自身の手にしたマフラ―に畏敬の念を抱きながら、落としてしまわないように丁寧かつ慎重に持っている、アヴェンジャーがバカにしたような鼻笑いをしてくる。

「たかが低級な礼装に、何をそんなに畏れを為しているのやら」

「だ、だって！ これ、あの鳳凰の羽が使われてるんでしよう？ 鳳

凰って、一万円、そう！ 一万円の裏の！」

「いちまんえん……？ ……ああ、日本の通貨の事。でも、それが何？」

「いやいやいや、一国の通貨に鳳凰が描かれてるんだよ？ それだけ

鳳凰って日本という国を象徴する凄い霊獣なんだよ!!? それにあれだし。西洋では東洋のフェニックスとか言われてるらしいし！」

「何をそんなに興奮しているのかしら……。言っておくけど、そのマフラ―にあしらわれているのは、鳳凰の羽がただか一本程度です。だから、そこまで力のある特別一級品という訳ではありません」

さも当然と言うように、アヴェンジャーは面倒くさそうに、マフラ―の価値について指摘した。あまつさえ、私の手から雑にマフラ―を掴み取り、これまた雑に私の首にぐるぐるとマフラ―を掛けてく

る。

「ちよ、痛い、痛い。髪が絡まってる！」

私の首にマフラーを巻き終わると、アヴェンジャーは満足したように頬を緩めた。

「ん、これでよし。……なかなか似合うわね、不覚にも、少し可愛らしいじゃない」

反面、私はというと、日本の象徴とも言うべき霊獣の羽を使ったマフラーが、私の首に巻き付いているという現実には、日本という国すべてを首に背負ったようなプレッシャーを感じていた。

「——いや、もし日本を首に背負おうものなら、私の首は跡形もなく潰れているのだが。」

「一度しか言わない大切な話をするから、よく聞いておきなさい」

私が自身の首元にある一品に恐れおののいていると、アヴェンジャーが急にかしこまって、真面目な顔で説明を始めてくる。

「この聖杯戦争では、なにもサーヴァントだけが戦闘を行う訳ではありません。サーヴァントの戦闘を補助する手段として、『コードキャスト』と呼ばれる簡易術式プログラムが存在します。どんなに二流の魔術師ウィザードでも、これは聖杯戦争を戦う上で必須のスキルとなるでしょう」

コードキャスト……。つまり、マスターがサーヴァントの戦闘に介入するための手段。だが、私にはそんな手段も、それを使う知識もない。

「そんな事、知ってるわよ。最後まで聞きなさい。ウィザードはあらかじめコードを設計・製造しておき、それに魔力を通す事でプログラムを起動します。コードキャストにも型のような種類があり、一つは外付けによる消耗型ワンオフ、もう一つは自身の身体……。霊子構造に組み込むインストール修得型に分かれます」

「インストールとワンオフ？」

「おバカなマスターに簡単に説明してあげましょうか。インストール型のコードキャストは身体に組み込む分、相応に強力ではありませんが、イコール術者の身体に直接埋め込む事に等しいため、術者の性質を変化させてしまうという欠点を持ちます。故に、こちらを選ぶウイ

ザードは少ないですね」

「強力であるがゆえの、代償。代償を恐れて使う人は少ないのか。次にワンオフ型ですが、これについては簡単ですね。消耗型という通り、回数に限度のある使い捨ての術式です。強力なものもあれば、大したことのないものまで。当然、その能力に応じて使用限度も増減し、一度しか使えないようなプログラムもありますね。ですが、消耗とはいえ使いどころには注意が必要です。構築の難しいもの程、作成にも日数や手間、コストが掛かります。インストール型とは違う意味で、使い勝手に注意が必要でしょう」

後腐れなく使える利便性であるがゆえの、稀少価値。強力であつても一度きり、もしくは回数に限度があつては、何度も戦略としては使え続けられないのだろう。

「——と、ここまで説明しましたが、マスター。貴方に記憶が無い以上、今からその術を修得していくには、あまりに時間が足りません」  
え———？

じゃあ、何故そんな説明をしたのだろうか。意味が無いじゃないか。

「だから、最後まで話を聞きなさい！ まったく……。良いですか？ 貴方が今、首に巻いているそれ。それは礼装と言い、その内部にプログラムがインストールされていて、それをマスターの魔力で使えるだけ使える……。まあ、インストール型とワンオフ型の中間でしょうか」

えっと、つまりなんだ？ このマフラーがあれば、私でもコードキャストが使えると？

「そういう事ですね。良かったじゃない、ヒヨコマスターにとって礼装の入手は絶対に必要なものだし。これで他のマスターと同等とはいかずとも、少しは上手く立ち回れるようになるでしょう」

……。なんと。それは、本当にすごい拾い物をしたという事か。運が良い。慎二に取られていなくて助かった。

「確かに良い拾い物ですが、そのマフラー、礼装としては低級も低級ですよ。だってそうでしょう？ 鳳凰の羽一本程度の稀少価値で、しか

もマフラーって。普通、礼装というのは伝承に基づいたものや、魔力の込められた特殊な代物です。例えば、有名どころで言えば『赤原礼装』や『マグダラの聖骸布』などがありますね。マフラーとか、形状が陳腐過ぎます」

と、マフラーをたいそうバカにするアヴェンジャー。マフラーとてバカにははいけないのに。

マフラーといえば、恋人に贈るプレゼントとして上位に位置する、恋愛脳概念的に礼装といっても過言ではない。たとえばクリスマス、クリスマスプレゼントとして贈るには、あまりにポピュラー過ぎて、知名度補正がマフラーにあると仮定するなら、最大限のステータスアップが期待されるだろう。それ以外にも、冬場の誕生日プレゼントとしても優れた一品だ。手作りならなおのこと良い。それで恋人同士が長いマフラーを二人で巻いた日には、公然イチャイチャ罪で『リア充爆発しろ!』と言われても仕方ない程に甘々な独自の世界を発生させるのだ。そう、いわばカップルの固有結界：的。それだけマフラーというのはバカには出来ない。否、バカにははいけないのだ。一説には、〃手編みの真っ赤なマフラー〃は乙女の血を吸った呪いの礼装、つまり呪具であるらしい。赤い糸伝説を信じた、ちよつとヤンでる女の子がバレないように糸に血を含ませたという、有りそうで有る逸話だ。そこまで愛される事は私ならやぶさかではないが、世間一般にはあまり好まれないのだろう。だからこそ、呪具であるのだ。つまり、マフラーとは恋愛という観点のみで言えば最強の礼装であり呪具ともなる、素晴らしくも恐ろしい代物なのである。

どうだ、アヴェンジャー!!

「いや……どうだと言われても。その……今までで一番ウザかった」真顔で、端的に、簡潔に、感想を言われました。そう言ったアヴェンジャーは、若干ですが、私から何歩か離れて、その顔はかなり引いているようでした。

「たかがマフラーでそこまで語れるなんて、ある意味見直したわよ、マスター。出来るなら、その情熱を他に回してほしいところだけど。というか、貴方本当に記憶喪失なの？ しかも固有結界を知ってるの

「？」

「いやいや、私は歴とした記憶喪失ですよ。そして、固有結界って、もしかしてこの界隈でも使われてるの？」

「知らずとして固有結界という単語を口にしていたのね。まあ、いいわ。とりあえず無駄話はお終い。ともあれ、これでマスターにもウィザードとしての技術を行使出来るようになったのだと、頭の片隅にでも置いておきなさい」

「なんだか、アヴェンジャーにしては珍しく、私を労るような——  
——というか、可哀想なものでも見るような目で、私に横目を送って前へと歩き出す。」

「なんだか釈然としないが、私はアヴェンジャーを追うのだった。」

「そして、もう一つのアイテムフォルダから出てきたモノは——

「……竹刀？」

「日本の剣道というスポーツで使用される、竹を束ねた道具ですね」  
「アヴェンジャーの説明はもつともだ。そう、これは剣道用の竹刀。漫画やドラマで、体育教師がいつも持っている印象のある、アレ。」

「もしや、これは……。」

「あの騒音のように騒がしい女教師に頼まれていたものでしょうね」  
「握り手をよく見れば、『藤村大河』と名前が油性インクであろうペンで書かれていた。」

「どうやら、これでタイガーからのクエストは達成出来たという事だ。あとは、これを本人に返却するまで。」

「これでお使いクエストは終了——次は、私達の本来のクエストですよ」

「そう言っつて、アヴェンジャーはこのアイテムフォルダのあった部屋の隣のフロアに目を移す。道の先に見えるのは、昨日見た虫型エネミーだ。そしてその背後には、緑色をしたアイテムフォルダが。その光景はまさしく鎮座する宝を前に佇む番人のようだ。」

「多分あれがトリガーの入っているアイテムフォルダでしょう。さあ、あの虫のエネミーを蹴散らして、目的のモノを手に入れましょう」

か」

途端、好戦的で獰猛な笑みを浮かべ、アヴェンジャーは手を前へと翳した。開かれた手の平からは炎が生まれ、炎の中から現れたのは、竜を率いし魔女の掲げる邪悪なる旗。

彼女は武器である旗を取り出す時、いつもこうやって旗を出現させているが、正直なところ、

マジでカッコいいです。

「第一の暗号鍵<sup>トリガー</sup>。奪ってやるわよ……!!!」

一部屋空いた場所に居るエネミーへと、旗を後ろ手に走り出すアヴェンジャー。私もまた、彼女を追って走り出す。

虫型エネミーも私達の接近を感知し、向こうもまたアヴェンジャーへと向けて飛行する。

ハエのような、ハチのような形状のそれは、虫特有の素早い飛行で、思っていた以上の速度でエネミーは飛来した。

「ぐっ！」

尻から鋭く尖った針を突出させ、突進してきたエネミーに、アヴェンジャーは咄嗟に旗を両手で構えて受け止める。

ガギギギ、と金属と金属が擦れるような甲高い音を鳴り響かせて、針と旗とがせめぎ合う。彼女は全力で針を振り払うと、吹き飛ばされたエネミーに追撃を掛けようと旗を振り下ろすが、エネミーは空中で態勢を整えると、スツと容易く避けてしまう。

「流石は飛行するエネミー。簡単には崩れてくれないわね……」

苦虫を噛み潰したように、飛ぶエネミーを睨み付ける。エネミーはといえば、悠々と宙を舞っていた。

しかし、これは厄介だ。今までのエネミーに比べても、いつそう不規則すぎるその動き。これでは動きを読もうにも、見切れない。

でも、負けられない。多分、これが本戦で最初の試練だ。これを乗り越えられなければ、未来はないのだ。それに、この程度のエネミーに勝てなければ、これから戦うであろうサーヴァント達と勝負にもな

らないだろう。

やるしかない。私は死にたくない。こんなところで、死ねない……!!

「マスター、指示を！ 私の期待に答えなさい！」

期待を求めるその声に、私は手を強く、色が変わってしまったくらいに握り締め、答えた。

「アヴェンジャー、相手の動きがまだ読めない！ だから、防御に徹して時間を稼いで!!」

「いいわよ。従ってあげる!!」

宙を自在に飛び回るエネミーに対して、無闇に攻撃しない方が得策だろう。無駄にスタミナを消費するばかりか、手玉に取られてしまう可能性が高い。

ならば、多少のダメージを覚悟で敵の動きの把握に務めた方が良さだろう。

がむしやらに動くより、大局を見据えた動きを選択するべきなのだ。

アヴェンジャーは指示通り、エネミーを見据えたまま旗を構え、防御の姿勢を取る。

エネミーはこちらが攻めてこないと認識したのか、好機とばかりに攻撃を嵐のごとく放ってくる。

針による連続突きは、その一差しが鋭利な槍のごとし。時に全身を使つての体当たりは、大砲から放たれた砲弾のごとし。その羽が皮膚に触れば、鎌鼬のように切り傷を作り出す。

全身の至る所を武器に、虫型エネミーはアヴェンジャーへとその猛威を振るった。

しかし、アヴェンジャーだって負けてはいない。攻撃の全てを、ここごとく弾き、流し、受け止め、打ち返す。

多少のダメージはあるが、決定打は未だに受けていない。そして、いくらかの時間を稼いでくれた事で、私もエネミーの習性を少しだが分析する事が出来た。

「アヴェンジャー、防衛解除！ 攻めに転じるよ!!」

「やつと？ 待ちかねたわよ」

針の一撃を大きく弾き返すと、アヴェンジャーは待つてましたと言わんばかりに、弾いたエネミーに追撃を仕掛ける。

「そのまま攻撃してもかわされる。それを利用する！ こちらの攻撃後、敵が回避後に移動すると思われる空間に炎を打ち上げて!!」

「そういう事…。了解です！」

勢いよく振り下ろされた旗は、やはりエネミーに回避される。しかし、それはこちらの推定通り。

アヴェンジャーは旗を地面に打ち付けたと同時に、攻撃をかわしたエネミーが飛んだ方へと炎を地面から打ち上げた。

「■■■■■■ツ!!」

突然、自分の真下から立ち上った炎に包まれるエネミー。データで構築されたエネミーの、声無き声のような叫びが聞こえてくるような錯覚がする。

全身を炎に包まれる苦痛、それは想像を絶する痛みを伴うのだろう。灼かれ、身体中の水分が蒸発していき、皮膚が爛れていくその感覚……理解したくもないし、想像すらしたくもない。

もちろん、エネミーには爛れる皮膚もなければ、蒸発する水分もなく、痛みを感じる心もない。

不憫に思う必要は、まったく無いのだ。

しかし、火刑の如き光景を目にするアヴェンジャーの後ろ姿を見ると、不思議と胸が痛くなるのは、どうしてなのだろうか。

この気持ちはエネミーに対するものではなく、このどうしようもないくいたたまれない、やり切れない感情は、アヴェンジャーへと向けられたものだった。

「よくも痛めつけてくれたわね。お返しに、煉獄の中で鍛えたこの憎悪の炎、内側からも味わせてあげる!!」

炎の中で悶えるエネミーの腹に目掛けて、アヴェンジャーは躊躇いなく腰に提げた剣を抜き、力強く突き刺し貫いた。

すると、突き刺された腹の中から剣を通じて炎が生み出され、エネミーの体内すらも焼き尽くしていく。



やがて、炎の容量に耐えきれなくなったその内側から、爆発するように全身が弾け、エネミーは炎と共に消滅していった。

その光景は凄絶で、惨たらしいもの。それがまつとうな生物で為されたものでなくて、心の底から良かったと安堵する自分が居る。

今を見て、何も感じなければ、それはもう病気だ。心が壊れてしまっているに違いないだろう。

だからこそ、私は心配になる。こういった手段を躊躇なく出来てしまうアヴェンジャーが。

彼女は、心が壊れてしまっているのではないか。正常ではないのではないか。

このサーヴァントは、最初から破綻した存在なのではないか。

「どうしました、マスター？」

ふと、私は我に返る。胡散臭いものでも見るような彼女の目が、私の顔を覗き込んでいた。心此処に在らずだったマスターへの心配は、まったく無いようである。

「なんでもない。さあ、緑色のアイテムフォルダを開けよう」

私はなんとなく、今自分の思った事を胸の内に仕舞い込んで、何もないという風に取り繕う。

軽蔑しているとか、そんなんじゃない。どう言えば良いか——つまるどころ、アレだ。

私はアヴェンジャーという少女の在り方に、哀しい感情を覚えたのだ。どうすれば、こんなに歪んだ人格になってしまったのか。何が、彼女をここまで歪めてしまったのか。

だが、私がそんな事を考えていたと知れば、アヴェンジャーは怒るだろう。こちらの事にいちいち詮索してくるな、と。

だから、私は今は何も言わないし、聞かない。いずれ、彼女が自身の生い立ちや、その歩んできた人生を、彼女自身の口から話してくれる、その時まで——。

私は、待とうと思う。

想いを隠した私は、緑色のアイテムフォルダを開封する。そして中から現れたのは、やはりというか、カードキーのような形をした暗号鍵だ。

手に触れた瞬間、それは細かなデータの波と化し、私のポケットに仕舞ってあった端末へと吸い込まれていった。

端末を取り出し、画面を見るとそこには、

『トリガーコードアルファを取得しました』

と、簡素なメッセージが表示されていた。

「今のが暗号鍵ですか。あの神父は各対戦に2つと言っていましたね。もう1つも忘れないように……とは言っても、次の層に行かないといけないのでしょうか」

何はともかく、これで1つ。この部屋に入ってきた道とは対岸側に、次の部屋への道が伸びており、その部屋の中には、入り口と同じような光に満ちたエリアが存在していた。

どうやら、このフロアはこれで全てらしい。

エネミーは全て狩り尽くし、アイテムフォルダも全て開封し、トリガーも手に入れた。もう今日のところは引き上げて良いだろう。

「そうね。そろそろ帰りましようか」

アヴェンジャーも同意のようで、私達は一途帰路につく。明日は、次の階層に入る事になるだろう。

そして、また慎二と鉢合わせになる可能性もある。あの海賊のサーヴァントに、一矢報いる事が出来れば良いのだが……。

## サーヴァント・アヴェンジャー

私達がアリーナから校舎内へと帰還してくると、既に日は傾き、廊下の窓から見える海の空には、夕日が空を真っ赤にしながら輝いていた。

うん。海の中から見る夕日の空は、実に幻想的で、神秘的で美しいものだ。それも、ロケーションは海底に沈むように建った校舎ときた。

ロマンチック……この一言に尽きるだろう。お誂え向きに、私の首には肌触り最高級のオシヤレなマフラーが巻かれている。自分で言うのもなんだが、さぞ、絵になる事だろう。

そして、実際に私は、校舎内で他のマスター達から注目的になっていた。

ああ、私の姿を見てヒソヒソと話すマスター達の声が耳に届いてくる。

「なあ、アレって……」

「ああ、だな。間違いない」

「ちよつと、アレ本気で……？」

……見られている。まじまじと、私へと視線が集中している。

その理由に気が付いた、いや、気が付けたのは、

「あら、また会ったわね。ヒヨコマスターさん？」

階段へと差し掛かった所で、地下の食堂兼購買から上へと昇ってきた遠坂凛のおかげである。

「……って、何？ 何でマフラーなんて巻いてる訳？」

「え？ ああ、このマフラー、アリーナで拾ったんだ。なんでも礼装で、これを付けてれば簡単にコードキャストが使えるからって、アヴェンジャーが」

私の説明を受けて、しばらく凛はポカンとした後、次第に破顔一笑へと変貌していった。

それはもう、お腹を抱えて必死に笑いを堪えるように、プルプルと我慢していたが、やがて耐えきれずに爆笑したのである。

「ぷはっ！ あははははっ!!」

私は今の説明で何故、彼女に笑われたのか訳が分からず、凜と入れ替わる形でポカンとなるが、凜が笑いを必死に抑えながらそれについて説明をする。

「いや、ぷふ、礼装って端末で装着や着脱するのよ。礼装を直に身につけてるマスターなんて、見た事ないもの。うふ、でも、そうね。確かに新たな試みかもしれないわね」

「な……!?!」

なん…だと……!?!

私はてつきり、礼装とはこうやって装備するものだとばかり思っていたので、現実を前に唾然となる。

いや、アヴェンジャーが巻いてくれたから、それが普通なのだと、つい思い込んでいたのだが。

『……ぷっ』

私にマフラーを巻いた当の本人であるアヴェンジャーは、霊体化したまま、バカにするように笑っておりました。というか、その様子だと知ってたな、アヴェンジャー……!!

これですよやく得心した。何故、こうも視線が私に集まっていたのか。何のことはない、礼装の一般的装備の仕方も知らない、アホの子マスターとして、周囲の注目的になっていたのだ。

すごく、恥ずかしい……!!

恥ずかしさのあまり、私は急ぎ首からマフラーを脱ぎ捨てる。いや、実際に捨てたりしないが。もはや鳳凰がどうこうではなく、一刻も早く残念な状態から脱却したかったのだ。

きっと、今の私の顔は蒸れたトマトのように、真っ赤になっているに違いない。

「けどまあ、似合ってたわよ。さっきのマフラー姿。サーヴァントが巻いてくれたんでしょ？ あなたのマフラー姿が可愛らしかったから、他のマスター達にも見せびらかしたかったんじゃない？」

いや、それはない。だってアヴェンジャーも笑ってたし。私に恥をかかせる事が目的だったに違いない！

まったく、なんてサーヴァントだ……!!

「……ふーん。でも、礼装か。という事は、トリガーももう手に入れたのかしら?」

「えっと、うん」

その返答に、凜は意外そうに感嘆の息を漏らす。どうやら、私を見くびっていたらしい。

「まさか基本のきの字も知らない、未熟な魔術師ウィザードが、1日でトリガーを取ってくるなんてね。少しは見直したかも。少し、だけどね」

それは彼女からの素直な賞賛だ。未熟も未熟な私が、トリガーをたった1日で取得した事が、一流である彼女からすれば、褒められる事だったのだろう。

そう思うと、少し嬉しいかもしれない。先程までの羞恥心が少しは和らぐくらいには。

「でも、次も上手く行くとは思わない方が良いわよ。アーリーナは第二層から本格的に厳しくなっていくらしいもの。言ってしまうえば、第一層は肩慣らし。本番は第二層からと思っておきなさい」

それじゃ、と凜はさっさと二階へ上がっていった。おそらく、彼女もマイルームへと帰るのだろう。

しかし、今の凜の言葉は、私にとって結構重くのしかかるものだった。

あれで、まだ序の口……?」

これから先、もつと過酷なアーリーナ探索が待ち受けているのだと思うと、私は頭が痛くなる。それだけじゃない。慎二とそのサーヴァントの存在もまた、私の思考に暗い影を落としていた。

手の内が読めず、正体、サーヴァントとしてのクラスもまだはつきりと分からない状態。今度また戦えば、今日のように無事で済むとは限らない。

どうにか、打開策を考える必要があるだろう。でも、とにかく今はマイルームへと戻ろう。今日は少し疲れたから、早く腰を落ち着けた

い。

そして、私とアヴェンジャーはマイルームへと戻ってきた。アヴェンジャーは帰るなり現界し、早速甲冑を脱ぎ捨てて、並べた机の上にとだらけ始める。

その豊満な肢体を隠そうともしないで、彼女は突っ伏していた。色々見えそうで見えない、なんとも厭らしい姿か。私が男だったなら、正直アブナかったと思う。その、理性とか我慢とか、色々……。「そういえば……マスター」

と、私もアヴェンジャーに倣い、その隣でゴロゴロしようと思って、机の上によじ登ろうしていたところに声が掛けられる。何でしょうか？

「私、貴方にお話がある事を忘れていないでしょうね？」

——そういえば、そんな事もあったかもしれない。

「いや、あったから。忘れたとは言わせないわよ」

寝転んだまま、良い笑顔で、まるで聖女のような慈しみに溢れた顔で、アヴェンジャーが私に微笑みかけてくる。そんな顔も出来たんだね、でも、目が笑ってないから凄く怖いよ……。

そこから、小一時間程の長つたらしい説教を受けた私は、罰として寝転ぶアヴェンジャーの背中に跨がり、背中を全体的にマッサージさせられる事となった。

しかし、ここでラッキースケベ的に「あ、うっかり手が滑った」とその豊かな胸に触れようものなら、私は塵一つ残さず灰燼と化すだろう。

それが分かっている、そんな恐れ多い事は出来ないのだ。はあ……従順なサーヴァントを持つマスターが羨ましい限りである。

「んっ……その調子で続けなさい……」

なんだ、今の気持ちよさそうな声は。エロ……ゲフン！ ちよつとヤらしいぞ！

というか、そろそろ手が疲れてきたのだが。誰かのマツサージをした事のある人なら分かると思うが、マツサージはそれなりに力を使うので、5分やっただけでも疲れる重労働でもある。それを私は既に30分はやらされているのだ。そろそろ辞めたい。割と真剣に。

　　マツサージ師が思っていた以上に偉大な職業なのだと、改めて実感させられたのだった。

「ふうっ……それにしても、あのワカメ、小物臭が半端ない癖に、んうっ……なかなか厄介なサーヴァントと契約してて頭にくるわ」

　　背中越しでも、アヴェエンジャーが不機嫌そうに顔を怒りで歪ませているのが想像出来る。それも仕方ないかもしれない。あのサーヴァント、思っていた以上に厄介かもしれないからだ。

　　銃撃戦を得意とする事はもちろん、その立ち回りは海賊のそれらしく、喧嘩殺法的に乱雑で予測が難しい動きが見られた。

　　凝り固まった拳法や戦闘の構えが脅威的であるのは間違いないが、逆に定まった戦闘スタイルを持たない相手というのも、相応に厄介極まる。パターンが掴みにくいのだ。洗練された動きは、読み易くともその速度や精度から、動きを捉えるのは難しい。

　　しかし、乱雑な動きというのは、ランダム過ぎて動きが読めない。それこそ、その人物の癖でも見切らなければ、対応に困るだろう。

　　これは本気で、どうやって活路を開くか考えないといけな。しかし、あのサーヴァントの情報が少なすぎる。

　　海賊が英霊になるとして、有名なものといえば『黒髭』ことエドワード・テイチ。昨今の私達がイメージする海賊像は、彼の存在に依るところが大きいからだ。現代の海賊像を作り上げたという意味で、彼は反英雄として最も海賊の英霊として名を挙げられやすいだろう。

　　他には、ジョン・ラカムや、その繋がりでアン・ボニー、メアリー・リードが挙げられる。可能性があるとするれば、後者の内のどちらかだろうか。

　　史実によれば、メアリーは少年のような見た目であったらしい事から、アンの方が当てはまるか。見た訳ではないが、アンは男装していたものの、ナイスバディの持ち主だったらしいし。

慎二のサーヴァントも素晴らしい胸囲の持ち主だったので、もしかするとドンピシャかもしれない。

そも、あのサーヴァントは女性だったので、女海賊の英霊しか当てはまらないだろう。

「そうそう……あつ……そんな風に敵の情報について思考を巡らせなさい。……ふっ……敵の正体を探ろうというその意思が、んんっ、この聖杯戦争において忘れてはならないのです」

とどころど入る喘ぎにも似た嬌声のせいで、言葉が頭に入ってきてません、はい。

とまあ、アヴェンジャーは今の私の思考については、バカにするどころか、むしろ推奨していた。ゆつくりと考え事の出来るマイルームでは、敵の情報の整理や推測の時間に当てられるので、今後もそうする事にしよう。

「ふう……もういいわよ、マッサージ。貴方もゆつくり休みなさい」

ようやくお許しが出たので、私は手を止める。疲れた……。

アヴェンジャーから降り、その隣で両腕両足を投げ捨てるように寝転がる。

ダメだ、これは疲労ですぐに眠ってしまう……。

「マスター、アリーナでも言いましたが、この戦いは相手の手の内を知る事に、大きな意味があります。そのためには学園でも、一日一日、注意深く調査する必要がありますでしょう。よいですか、アリーナに入ってしまうえば、その日の学園での調査は、やり直す事が出来ません。そして仮初の学び舎であっても、そこにいるのは生きた人間。その日に起こっている事が明日も起きるとは限りません。よって、アリーナに入る前には、学園内を隈無く調査し、他人の話に耳を傾けなさい。分かりましたか？」

眠気に必死に耐えながら、少し長めのアヴェンジャーのアドバイスをどうにか頭に入れる。出来る事は出来るうちに、必ずしろ、という事だ。

「分かった……ふわあ……、」

「気の抜けた返事ね。寝る前に、アリーナに入る前に声を掛けてきた



NPCが言っていたマトリクス、一応目は通しておきなさい」

そう言うや、アヴェンジャーはうつ伏せから仰向けに変わり、目を閉じた。彼女はもう眠るのだろう。その豊かな双丘が、彼女の呼吸に合わせて上下に動いている。

流石に、うつ伏せのままでは寝苦しいのだろう。

私は逆に、うつ伏せになつて端末を起動した。仰向けよりうつ伏せの方が端末を操作しやすいからだ。

マトリクスの項目を選択すると、画面が切り替わる。すると、そこには二つ、データが記録されていた。一つはもちろん、今日出会った対戦者である慎二とそのサーヴァントの覧。そしてもう一つ、それは私とアヴェンジャーの覧だった。

自分達の覧も気になるが、とりあえず目下の厄介事である慎二達の覧から確認しよう。

まず最初にステータスの画面が表示された。ここに、クラス名、マスター名、サーヴァントの真名、そのサーヴァントの所持する宝具、そしてサーヴァント自身に関するキーワードが記録されていくらしい。また、ここでそのサーヴァントの筋力、耐久、敏捷、魔力、幸運、そのほか所持するスキルのランクも表示されるらしい。

ただ、まだ謎ばかりなため、ほとんどが空欄で、クラスは『アーチャー?』で、マスター名のところしか確定情報がないようだった。次の画面では、そのサーヴァントのキーワードを少し深く踏み込んだものとして記録されるらしい。

やはり、まだ何も記載は見られない。

次は技能について。つまりサーヴァントの持つスキルについての簡単な詳細についてだ。無論、ここもまだ何も分かっていないのだが。

そして最後、ここでそのサーヴァントに纏わる伝承やサーヴァント自身についての詳細を記すらしい。正体が明らかになった時、完全に解放されるのだろう。

と、結局ほとんど分かった事はなく、やはり情報がまだまだ足りない

いらしい。

眠気も少し覚めてきた私は、気になっていたアヴェンジャーの覧を選択する。隣のアヴェンジャーをチラリと見てみるが、変わらず、胸を上下させて眠っている。

なんだかアヴェンジャーの秘密をこっそり覗くような気がして、少し背徳感があるが、堪え切れぬ好奇心を胸に、私はアヴェンジャーのデータを閲覧した。

page. 1 ステータス

クラス：アヴェンジャー

マスター：岸波 白野

真名：

宝具：

キーワード：竜の魔女

筋力E 耐久E 敏捷E 魔力E 幸運E

復讐者B 真名看破(偽)EX 自己回復(魔力)A

page. 2 キーワード

竜の魔女……生まれながらにして竜を従える力を持つ。また、スキルとしても所持している能力であり、ランクとしてはEX相当。竜を従える者としての最上級のランクである。スキルとして使用した場合、味方の竜種や、竜の血裔の強化が出来る。

page. 3 技能

復讐者「B」：敵対者から傷を負わされる毎に、傷を負わせた敵対者に対しての与えるダメージが増大していく。憎悪を募らせ、その邪悪を敵対者は自らが負う事になるのだ。

自己回復(魔力)「A」：何もしていなくとも、自然と自身の魔力が回復していく。ランクAともなれば、マスターに頼らずとも、ある程度は自分で必要な魔力を生成出来る。宝具の使用は厳しいが、マスターの魔力消費を抑えられるという、節約出来るお得スキル。

真名看破(偽)「EX」：本来の真名看破とは全く異なるスキル。自らの真名を隠匿し、暴かれたとしても彼女自身の真実を知る事は絶対に不可能。本人が口にしない限り、それを知る術はない。

月の聖杯戦争に参加するにあたり、その出自から獲得した彼女の固有スキル。

page. 4 詳細

……、データを見た私の感想はと言えば、スキルだけ見れば超一流じゃないか、このサーヴァント!!

ステータスは私のせいでランクダウンしているという話だが、本来のステータスがもつと高水準なのは火を見るより明らかだ。

果たして、私は彼女を元のステータスにまで戻す事が出来るのだろうか。

それより、気になったのは空欄の多さか。やはり、私はまだまだ彼女の事を知らなすぎる。もつと彼女の事を知っていけば、自ずとこの空欄達も埋まっていくのだろうか……。

もう一度、チラリと隣で眠る彼女に視線を送り――

「……………」

それはもう、バツチリと、目と目が合いました。

寝転んだまま、アヴェンジャーは私と、私の手に握られた端末に視線を交互に移すと、

「そんなに私の事が気になりますか?」

いやらしい笑みで、口の端を歪ませて、尋ねてきた。今にも、子ウサギをとって喰わんとしているような幻視をしてしまう私は、それでも、頷いて返した。

「気になるし、知りたい。だって、これから先、私とあなたは相棒で、パートナーだから。命を共有した仲間だから」

この聖杯戦争を戦う上で、マスターとサーヴァントは一蓮托生だ。

バトルロワイヤルならまだしも、これは1対1のシンプルな殺し合い。裏切る余裕はなければ、裏切つても次に繋がる可能性は僅か。故に、サーヴァントがマスターを裏切る事は、よほど特別な理由でもない限り、まずないだろう。

それか、サーヴァントがよっぽどの悪鬼でもない限りは。

「――！ ホント、どうして私のマスターになる人間は……」

私の答えに、アヴェンジャーは一瞬面食らい、すぐに自虐的な嘲笑をこぼした。その顔は、今にも消え入りそうで、儂く、可憐で、とても復讐者のものとは思えなかった。

でも、それもすぐに終わる。彼女は私から顔を逸らすように横に寝転がると、

「知りたければ好きにしなさい。その代わり、貴方がマスターとして私に認められない限り、私から話す事はありません」

それきり、彼女は押し黙ってしまった。今度こそ、眠りに入ろうとしているのだろうか。

要は、「私の事が知りたければ、もつと私の役に立ってみせろ」という事だ。彼女に認められるには、それしか方法はない。

まったく、どこまでひねくれたサーヴァントなんだ、この子は……。多分、私とそう年も変わらないだろうに、英霊として座に至ったこの少女。

自身を復讐者と、魔女と、自らを陥れるような発言をする彼女が、一体どんな人生を送ったのか。私はマスターとして、どうしようもなく気になってしまった。

こうなれば、意地でも彼女の事を知ってみせよう。彼女に私をマスターとして認めさせよう。どれほどの道程かは分からないけれど、そこにたどり着けるかも分からないけれど、

私は、サーヴァント・アヴェンジャーの事を知りたいと思ってしまったから。

そうと決めれば、今は目の前の事に専念しよう。慎二とそのサー

ヴァント。今は、彼らへの対処が先決だ。

明日に備えて、私はアヴェンジャーの隣で触れない程度に距離を開けて眠る。でもいつか、くつついて眠れる時が来るといいな……。

そうして、私の意識は微睡眠、闇へと落ちていった。

「……………ホント、物好きなマスター」

## 遠坂凜と間桐慎二

翌日、私は早速、朝から校内探索を始めようと起きて早々にマイルームを後にする。

無論、甲冑を外して寝ていたアヴェンジャーが付け直すのは待たない。というのも、

「私の着替えを待つ暇があるなら、少しでも情報収集に奔走してきなさい。それとも何？ 私の着替えを間近で見たいと？ この変態！」

とのお達しがあつたのだ。いや、決してアヴェンジャーの着替えを覗きたかったがアヴェンジャーからのお仕置きが怖くて大人しく従った訳ではないとだけ言っておく。

というか、女同士だし。そもそも脱いだ時に普通に一緒に居たし。だから、別に見ても興奮しないよ？

うん…ホントに。多分。

という訳で、私は気ままに何か情報が無いかと、廊下に出ていた。「……………ん？」

そして早速というか、何やら遠く——図書室前くらいの所で、誰かと誰かがもめているようだ。

あの後ろ姿——から、そこはかとなく漂うワカメ感……：慎二か？

それと、もう一人。ここからでも分かる、真つ赤な服と超ミニスカの少女。遠坂凜だ。

どうやら、その二人が何か言い合っているらしい。

少し気になる。近づいて様子見するか……。とりあえず、喧嘩ではなさそうだが。それに、上手く行けば慎二のサーヴァントについて、何か情報が得られるかもしれない。

そーっと、二人に悟られないようにこっそりと、彼らの背後へと忍び寄る。そこにたどり着くまでに、他のマスターから奇異の視線を浴びたが、これも情報を得るためならと心を無にして、羞恥を感じない

ように努める。

そして、ようやく二人の会話が聞こえる距離にまでやってきた。慎二が遠慮もなしにデカい声で話しているので、自ずと私の耳に会話の内容が入ってくる。

「——ところで、君はもう、アリーナには入ったのかい？　なかなか面白いとこだったよ？　ファンタジックなものかと思ってたけど、わりとプリミティブなアプローチだったね。神話再現的な静かの海つてところかな。さつき、アームストロングをサーヴァントにしているマスターも見かけたしねえ」

神話再現的……？　確かに静かと言えば静かだったが、あれは神話の再現と言えるのだろうか。原初の海はうねり荒れ狂う渦だけだったと聞くが。それとは真逆の雰囲気だったように思う。

「いや、シャレてるよ。海つてのはホントいいテーマだ。このゲーム、結構よく出来てるじゃないか」

確かに、慎二にとってみれば、彼のサーヴァントは海賊だし、海は相性的にも良いだろう。

自分の事ばかり語る慎二に、ずっと耳を傾けていた凜も、ようやくその口を開いた。

「あら。その分じゃ、いいサーヴァントを引いたみたいね。アジア圏有数のクラッカー、マトウシンジ君？」

……、今のは聞き捨てならない。慎二が、アジア圏有数のクラッカー……？

優秀であるのは知っていた。だが、まさかそこまで名の知れたウィザードだったなんて。

「ああ。君には何度か煮え湯を飲まされたけど、今回は僕の勝ちだぜ？　僕と彼女の艦隊はまさに無敵。いくら君が逆立ちしても、今回ばかりは届かない存在さ」

艦隊、と言ったのか、今？　待て。それでは話が違ってくる。海賊で艦隊——それではこちらの予測していた真名、アン・ボニーには当てはまらない。彼女が艦隊に属していた、もしくはそれに準じる逸話など、存在しないからだ。

しかも、その口振りからして、あのサーヴアントは恐らく、その艦隊を率いる船長。根本的にこちらの予測とは、決定的に違っている。

と、私がまさかの情報に唾然としていると、ふと凜と視線が合ったような気がした。しかし、それもほんの僅か、1秒にも満たない一瞬で、彼女は再び慎二と話を続ける。

「へえ、サーヴアントの情報を敵に喋っちゃうなんて、マトウくんったら、ずいぶんと余裕なんだ」

優雅さを含んだその声は、遠坂凜の物だった。彼女は慎二の自慢を保護者さながらの余裕で流している。

そして、自分の失態に気が付いたのか、慎二の顔がさっと赤くなる。

「う……そ、そうさー！ あんまり一方的だとつまらないから、ハンデつてヤツさ！ で、でも大したハンデじゃないか、な？ ほら、僕のブラフかもしれないし、参考にする価値はないかもだよ……？」

いや、慎二……。明らかに焦りを隠せてないよ。それじゃ、さっきのが本当の事だと言ってるようなものだ。

しかも、当然ながらというか、凜はそれを見透かしたように余裕の笑みを浮かべている。

「そうね。さっきの迂闊な発言からじゃ、真名は想像の域を出ない。ま、それでも艦隊を操るクラスなら、候補は絞られているようなものだし、どうせ攻撃も艦なんでしょ？」

……!!

そうだ。何も拳銃が武器だからって、アーチャーであるとは限らないはず。サーヴアントのクラスは、そのサーヴアントの伝承の基となる何か、つまりは武器、宝具で決定される事が多いらしい。

武器が銃器でも、宝具が別の場合だってあるだろう。

「艦砲射撃だとか、或いは…突撃でもしてくるのかしらね。どのみち、物理攻撃な気がするけど」

「う……」

凜の鋭い指摘に、慎二は言葉が詰まってしまふ。いよいよ、さっきの彼自身の言葉が、真実であるのだと証明されてきたようなものだ。

「ま、今のわたしに出来るのは、物理防壁を大量に用意しておくぐらい



かしら」

対策まで口にされ、慎二の顔が、みるみる青くなる。

サーヴァントの情報が敵に知られれば、対策も立てられてしまう。

個々の力が強力である以上、一方だけが対策を立ててしまえば、戦いの結果は明らかだ。

なるほど、情報が重要だというのはこういう事だったのか。実感してみて初めて、それがよく分かる。

「あ、一つ忠告しておくけど、わたしの分析が正しいなら、『無敵艦隊』<sup>アナライズ</sup>はどのようなかしらね。それはむしろ彼女の敵側のあだ名だし？

せっかくのサーヴァントも、気を悪くしちゃうわよ」

恐れ入る。凜は今のやりとりで、慎二のサーヴァントに当たりが付いたらしい。流石、としか言いようがない。腕ももちろんの事、その知識も一流のそれなのだ。

「ふ、ふん……まあいいさ。知識だけあっても、実践出来なきや意味ないし。君と僕が必ず戦うとも限らないしね」

「ふーん……。ま、それもそうなんだけど。そうね、どうせ言っても無意味だろうから、あなたの対戦者の事を教えてあげましょうか。あの子の契約したサーヴァント……あなたはもう見た？」

今度こそ、確実に凜は私に視線を送った。何を言うつもりだ……？  
「見たさ。デカイ旗を持った、黒塗りの甲冑を着た女だったよ。それが何なのさ？」

慎二からの返事を聞くと、凜は途端に今までの余裕ある態度を改める。その目は、どうしようもなくマスターとしての本質を表す、戦う者の瞳をしていた。

「あの子のサーヴァント、クラスはアヴェンジャーですって。マトウ君には心当たりがある？ 旗を持った英霊、それも復讐者なんてオプション付きの英霊に。正直言つて、わたしにはまったくくないわ」  
「……………!!」

凜から私のサーヴァントについて聞かされた慎二は、さっきよりも更に顔を青くした。このままでは、本当に顔が海藻色になってしまうのではないかと、少し心配になる。

いや、それよりも凜だ。何故、彼女はそんな事を今ここで話したのか。

「アヴェンジャーだって……!? あんな凡人が、『エクストラクラス』のサーヴァントを連れてくるっていうのか……!?」

それは焦りと嫉妬の入り混じった、表現に難しい声音だった。そんなにエクストラクラスとは珍しいものなのだろうか。

正直、アヴェンジャーは傍若無人で、マスターである私を小間使いのように扱ってくる時があるので、羨ましがられる要素が皆無なのだが。

「旗を持った英霊ならまだ心当たりはある。それこそ、世界で最も有名な聖女、フランスに名高き聖処女『ジャンヌ・ダルク』。でも、彼女は聖女。間違っても復讐者なんかじゃないもの」

あの凜ですら全く正体を掴めないアヴェンジャー。私自身、彼女の事を何も知らないという事もあり、慎二への言葉であると同時に、私への言葉とも取れるように思えてならない。

「そんなの知るかよ！ くそつ、あいつ黙ってやがったのか……!! ふぎけてる！ 凡人のクセに、僕を見下してやがったのか!!」

屈辱。そうとしか取れない感情。慎二は余裕がどこに行ったのか、最初に見た時とはまるで別人である。

もはや凜と話す事はないのだろう、慎二は別れの挨拶もせず彼女に背を向ける。そして――

「おまえ、岸波……！ まさか、そこでずっと見てたわけ!」

と、たまたま去る方向がこちらだったのだ。こっさり様子を窺っていたのが、慎二にバレてしまった。

「ふ、ふん……どうせおまえじゃ、僕の無敵艦……いや、サーヴァントは止められないさ。そう、そうだよ……エクストラクラスなんか知った事か。どっちにしる僕の勝ちは動かない。じゃあな。おまえもせいぜい頑張れば？ 無駄だろうけどさあ!!」

最後にありったけの怒りを込めて怒鳴ると、そのまま慎二はさっさとどこかへ行ってしまった。

「……やれやれ、緊張感に欠けるマスターが多いわね」

と、凜が私に呆れたように笑ってみせた。どうやら、最初から彼女には私が様子見していた事がバレていたらしい。

「……………ねえ」

「どうしてあなたのサーヴァントのクラスをマトウ君に教えたのか、でしょ?」

「どうやら、私が問おうとしていた事に察しがついていたようだ。それなら、話は早い。」

では聞こう。その理由は何故?

「簡単よ。だって、教えても本当に意味がなかったから。クラス、そしてあのサーヴァントが持つ旗。それらから該当しそうな英霊をピックアップしてみただけど、そんな英霊は見つからなかった——というより、存在しなかった。だから、教えても無駄なのよ。だって、どうせ分からないし」

なるほど、それは言い得て妙だ。だって、私もアヴェンジャーの正体に心当たりがまるでない。いくつかのヒントはあっただろう。それでも、彼女の真名にたどり着ける、これといった確信の持てるものがない。

あの凜をして、〃正体不明、予測すら不可能〃なサーヴァントと言わせしめるのだ。確かに、慎二にクラスを教えたところで、特に問題は見受けられない。

「わたしもジャンヌ・ダルクかなとは思ったんだけど、やっぱり有り得ないのよ。聖女はつまり聖人。聖人が復讐するなんて想像出来る?

死後、英雄として、聖人として昇華された彼女は間違いなく正しき英霊となった。間違っても復讐者になんてならないでしょう」

そういうものなのか…………。むう、結局アヴェンジャーが何者なのか、自分で突き止めるしかないという事か。

「ま、あなたのサーヴァントの正体は何なのか、今のわたしにはどうでもいいんだけどね。だって、あなたがマトウ君に勝てるとも思えないし。それじゃね。頑張りなさいよ、ヒヨコさん?」

そう言っつて、ひらひらと手を振って、凜も去っていった。どうやらマイルームに戻るらしい。

「私が着替えている間に、ずいぶん盛り上がりつつあったようですね？」

そこへ、二人が居なくなつたのを見計らつたようにアヴェンジャーが現界した。その顔はどことなく、不機嫌そうである。

「まあ、いいけど。……あの女に賛成する訳ではありませんが、確かにあのワカメはこの聖杯戦争での情報の重要性を理解していないようですね。ともかく、あれほど容易な事は稀にしる、昨日言ったように学園でもアリーナ同様、重要な情報が得られる事もあるでしょう」「そうだね。まさか、こんなにあつさり情報が手に入るとは思わなかったけど」

相手が慎二だつたからこそ、という話かもしれないが、それでもこうして学園での情報収集が有用性を持つ事が理解出来た。これは確かに、その日その日を大切にしないといけない。今日みたいな事もあるし、それを逃してしまえば大きな損失となるだろう。

それにしても、アヴェンジャーはいつからこつちに来ていたのだろうか？

「貴方がワカメと赤い女の話盗み聞きしようと、忍び寄っていた時ですね」

という事は、最初からじゃないか。それなら、霊体化しながらも話しかけてくれれば良かったのに。

「そんな事より、これであのサヴァントのクラスがアーチャー以外の可能性もあるという事が見出せたでしょう。これよりは、もつと確固たる情報を得るよう努力する事ね」

そしてアヴェンジャーは姿を消した。アーチャー以外で、あのサヴァントのクラスを予想するなら、それは――

ライダー。

海賊なら船に乗るだろう。それも、船長クラスともなれば、操舵の腕も優れているはずだし、自分の船を持っていて当たり前。海賊なら

ライダーのクラス……うん、案外しつくりくる。

そういえば、話の中で『無敵艦隊』というキーワードがあった。それについて、都合の良い事に現在、図書室の前に居るので、ここで調べ物と洒落込もう。

図書室には私以外にもマスターが居て、同様に何か調べ物をしていらっしゃるらしい。私も、大量の蔵書の中から、それらしき書物を検索する。海賊の英霊なら、大航海時代に的を絞って探してみれば良いか。

そこで、とある一つの本に行き当たった。内容に軽くざっと目を通すと、

『無敵艦隊について』

というもつともなページを発見。それによれば、大航海時代におけるスペイン海軍の異名を指しているらしい。

千トン級以上の大型艦100隻以上を主軸とし、合計6万5千人からなる英国征服艦隊。

スペインを『太陽の沈まぬ王国』と謳わしめた、無敵の艦隊——であるそうだ。

うーん、凜が言っていた通り、この無敵艦隊とは海賊を示すものではないようである。むしろその敵の立ち位置である海軍の呼称だ。

しかし、まったく関わりがないとも思えないし、それに縁のある英雄という事だろうか。

それにしたって、女海賊で有名な過去の人物か……。うーん、まるで分からない。候補はある程度絞れるだろうが、確信を持てるものがない。

……無いとは思いますが、こうまで該当しないのは、もしかや彼女は、史実では女性ではなく男性”として語られている存在だから、とか？

いや、流石にこれは突飛すぎる考えだろう。なんだ、その『男と思っていたが実は女でした』みたいな、マンガやアニメやラノベの世界にありそうな文面は。

もつと真面目に考えよう。彼女が一体何処の誰なのか。もつと隈

無く探せば見つかるはずだ。そのためにも、再び慎二と接触し、情報を引き出さねばならない。

私は本を棚に戻すと、とりあえず図書室に居るマスター達に声を掛けてみる。別に、慎二と接触するだけが情報収集の手段ではないし。他のマスターなら、あのサーヴァントの特徴から、何か知っている事があるかもしれない。聞いてみるだけなら、何もリスクは存在しないのだ。

「二丁拳銃の英雄、ねえ。パツと思いつくのだと……ビリー・ザ・キッドとか？ カラミティ・ジェーン……は違うか。ごめん、あんまり思いつかないわ。そっちも大変ね。私も対戦相手の真名探しが大変で大変で。常にダルそうな槍使いのオジサンんだけど……あなた知らない？」

「二丁拳銃を使いそうな英雄？ うーん……伊達政宗とか……は、使ってもイメージが崩れなさそうだけど。中々難しいねえ。まあ、想像するだけなら楽しいもんだけど」

うむ、やはりそう簡単に分かるはずもないか。地道に慎二から情報を引き出す方が手っ取り早いかもしれない。

ただ、さっきの慎二の様子から、そう簡単にいくかどうかという心配な要素が発生してしまった。慎二はナルシストだが馬鹿ではない。無駄に賢いところがあるため、今後も彼が口を滑らせてくれるとは限らないのだ。

まあ彼が、調子に乗ったらどうなるかは分からないが。だって慎二だし。すぐに鼻を伸ばしそうな気がする。

そう、例えば私達と戦って優位に立った時とか。

その後、校内を探索して回ったのだが、慎二の姿はどこにもなく、これといった情報も得られなかった。

なので、私達は新たなアリーナへと探索に赴こうと思ったのだが、

第二層はまだ開放されていないらしい。

どうやら、トリガーの生成と同時にアリーナも構築されるようだ。つまり、どんなに早く第一暗号鍵プライマリトリガーを取得しようとも、第二暗号鍵セカンダリトリガーが生成されるまでは、第一層にしか入れないのである。

あまりにも世知辛い。どうせなら、さつさと次のステージに進ませてくれればいいのに……と、アヴェンジャーが愚痴っていた。

仕方なく、私達はアリーナ第一層に入ったのだが、何故か慎二達の姿はおろか、気配さえ皆無だった。もしかするとマイルームに居たが故に、学園でも慎二に遭遇しなかったのかもしれない。

「こういう事もある、という事ですね。でもまあ、今回はあのサーヴァントの情報を得られたのだし、今日はこれ以上の高望みは無しです。潔く、エネミーどもを狩り尽くして帰るとしましょうか」

今日は学園で情報を得たが、アリーナでは得られなかった。その日、その時々によって、何があるか分からないという事だ。今朝の一件は本当に運が良かったのだと言えるだろう。

アヴェンジャーの言葉通り、もはや日課になりつつあるエネミー討伐をこなし、マップ全てを回って完全にアリーナからエネミーを駆逐した後、私達は帰路へとついた。

ところで、アヴェンジャーは私の為にエネミーを狩っていると断っていたが、それはどうしてなのか。エネミーとの戦闘は確かに私の観察眼を養ってくれるが、イコール魔術師としての腕前に直結するでもなし。

かといって、アヴェンジャーの能力値が変動した訳でもなし。少し気になり聞いてみたのだが、

「そこはあれよ。後のお楽しみってやつ」

と、はぐらかされてしまう。その時が来るまでお預けなのだろう。気になる、すごく気になる。

結局、マイルームに帰ってからもアヴェンジャーは教えてくれる事はなく、相変わらず甲冑を脱ぎ捨てて自堕落に寝転がっていた。

いくらなんでもダラケすぎではないだろうか、このサーヴァント……。

そうして、聖杯戦争第一戦目の三日目が終了し、そして、新たな朝、四日目が始まる――。



## 王者の風格

翌朝。昨日と同じように、私は朝から学園内を探索しようと、マイルームの前に居た。今回は最初からアヴェンジャーも一緒だ。

校舎の中を歩いていると、NPC——賑やかしの生徒達に混じって、マスター達とすれ違う。校舎内には運営のためのNPCやAI以外にも、これといった役割の無い、本当に単なるNPCも存在するのだ。

それらに溶け込んでいるように見えてその実、彼らマスター達はやはり異質な空気を纏っている。

外見でそれと分かる訳ではない。けれど、どこか雰囲気が違う。

意志のない人形と、人間の差か。戦いに臨む、彼らの張り詰めた気持ちだが、グラフとして読み取れる。

そんなマスター達の中に、ひときわ異彩を放つ人物が居た。

「おや、あなたは……やはり、あなたも本戦に来たんですね。言ったでしょう、あなたにはまた会えるって」

レオ。眩い金髪に、真っ赤な学生服で身を包んだ、あどけない少年は、その外見だけでも十二分に目立つけれど、何よりも圧倒的なのは、その「存在証明」の濃さだ。

予選の学校では、オーバーペースベック 過剰すぎて獅子が鶏小屋に居るような違和感があったが、この緊張した空気の中では、むしろ自分が場違いだ。

……そして、異彩を放っているのは少年だけではない。彼の後ろ、影のように一人の青年が立っている。

花の意匠を施した白銀の甲冑を着込み、帯剣しているその姿。隠しもせず漏れ出る、人の域を超越した力。

それは紛れもなく、明らかにサーヴァントのもの——！

私の騎士への視線に気が付いたのか、レオは怪訝な顔をするが、すぐにハツとした顔をする。

「……ガウエインですか？ ああ、僕とした事が失念していました。ガウエイン、挨拶を」

慌てるでもなく、余裕を持って後ろの青年へと命令を下すレオ。彼の命令に、騎士たる青年は嫌そうな顔一つせず、従順に礼を尽くした。「従者のガウエインと申します。以後、お見知りおきを。どうか、我が主の良き好敵手であらん事を」

甲冑の青年は涼やかな笑顔と共に頭を下げた。生真面目だが重苦しく構えたところのない、純真潔白な騎士を連想させる。そう、言わば騎士の中の騎士かのような――。

どうあれ、この少年によく似合ったサーヴァントだ。

……それにしても、ガウエイン卿といえば、アーサー王伝説の円卓の騎士としてあまりに有名だ。

伝承によれば、その力は主君であるアーサー王を凌ぎ、手にした聖剣は、王の聖剣と同格の威力を持つとされるが――。

クラスはどう見てもセイバー。書物などから、この英雄の事を調べるのは、さほど苦勞しないだろう。弱点だって分かるかもしれない。だが、レオがそれを分かっている、とは思えない。これはレオの自信の表れだ。

気負ったの事ではなく、ごく自然に、少年は戦術の機微に頓着していない。

明かすものは全て明かす。その上で勝利する事が、生まれた時から彼に定められた日常なのだとしたら――。

絶対の勝者。それすなわち王者。

弱き者を支配し、強き者すら支配せんとする、支配の頂上に位置する階級だ。

彼は、若くしてその王者の風格を既に備え持っている。教育によるものもあるだろう。しかし、彼のそれは素質によるところが大きいであらう事は間違いない。

この若さでそれを持つ時点で、それこそがその証明に他ならないからだ。

挨拶も済んで気が済んだか、はたまた、これから何か用事があるのか、改めてこちらに丁寧にお辞儀をする、

「それでは、失礼しますね。再会を祈っています。どうか、悔いのない

戦いを」

別れを告げて、少年と騎士は去って行った。その背中を呆然と見つめていると。

「レオ……！　ハーウェイが来るのは想定してたけど、あんな大物なんて——」

マイルームのある廊下の方から、もはや聞き慣れた声の持ち主がやってきた。

小さな、押し殺したような呟き。凜が少年に放つ視線は、殺意に等しい鋭さだった。

「万能の願望機、聖杯……。西欧財団の連中がセラフを危険視して、るって話は本当だったか。にしても、御自らご出陣とはね。……いいじゃない。地上での借り、天上で返してあげる」

依然、鋭い殺意を込めたような視線は変わりないが、険しいだけの凜のその表情に、ニヤリといたずらな笑みが混じる。

「楽しくなってきたわ。魔術師としての腕前なら、こっちに一日の長がある……！」

レオの前では、もう私など目に入っていないのか。凜はこちらへの挨拶もなく、「よし！」と自らに気合いを入れて、勇ましい足取りで去っていった。

レオが王者なら、凜は戦士といったところか。支配に抗わんとする反逆の戦士……。さしずめレジスタンスといったところか？

うん、彼女のイメージにピッタリな感じがする。

——さて、では私は、彼のサーヴァント、ガウエインについて調べるため、早速、図書室へ行ってみる事にしよう。

図書室で本を探して、思いのほか早くに目的のものは見つかった。早速それに目を通していこう。

『ガウエインについて』

アーサー王伝説に登場する円卓の騎士の一人。アーサー王の甥でもある。

アーサー王の片腕と称されたランスロット卿に並ぶ騎士だったが、兄弟をランスロットに殺された事をどうしても忘れられず、彼とは相容れなかった。

高潔な人格、理想の若武者であったが故に、肉親への情も人一倍だったのだろう。

しかし、その怨恨がガウエイン卿の騎士としての格を落とすばかりか、最後には王の没落にまで繋がってしまう。

ガウエイン卿は、アーサー王最後の戦いであるカムランの丘にて、ランスロット卿に受けた古傷を打たれ死亡したとされる。

……つまりは、ガウエイン卿が怨恨さえ捨てていれば、アーサー王はもしかしたら死ぬ事もなく、彼自身もここで死ぬ事はなかったかもしれないと。

ブリテンはまだ続いていたかもしれないという事か。

だが、それはもしもの話。どう足掻いたとて、所詮は『if』のしがらみからは逃れられないのだろう。

もう起きてしまい、終わってしまった事を、今更変えるなんて不可能だ。それこそ、聖杯にでも願わない限りは――。

ひとまずガウエイン卿に関しての情報は得られた。他にも無いか探そうと図書室を見回した時、とある一角にレオの姿があるのを見つけた。

どうやら私が本を読んでいる間に彼も、ここへと足を運んできたらしい。

と、向こうもこちらの視線に気付いたのか、さつき別れたばかりだというのに、そんな事は顔一つ出さずに、朗らかな笑みを向けてきていた。

気付いたのなら、行かなければ無視したように気に障る。私はレオの所まで行き、また話をする事にした。

「岸波白野さん。改めて、本戦出場おめでとうございます。一回戦はマトウシンジさんですか。彼は強力なサーヴァントを持っているよ

うです。お気をつけ下さい」

レオが慎二のサーヴァントを強力だと、今はつきり口にしたという事は、もう疑いようがないだろう。そもそもレオが嘘をつく必要なんてないし。

これであの女海賊の英霊が、強敵である事は確定的だ。

「それにしても、あなたからはまだ気の抜けた感じが伝わってきますね。なんというか、学生気分が抜けていないような……。もしかして、まだ仮初の学園生活が僕達にとってどういったものだったかも、理解されていないんですか？」

う……。そんなに表に出やすいのだろうか。いや、この際だ。あの学園生活がどのようなものだったか、確かに詳しく知らないので聞いてみるか。

「……そうですね。あなたとは縁もある。僕でよろしければ、少しばかり説明してあげましょうか」

「お願いレオくん」

甘える女子高生をイメージして、少し上目遣いで頼んでみる……。が、あはは、と華麗にスルーされた。そして何事もなかったかのように、レオくんは説明を開始した。

「では、早速。固有結界というものはご存知ですか？ 強力な魔術を以て、術者の周りの空間を、まったく別の空間に作り変える魔術です。サーヴァントの中にも、この固有結界を持ち合わせる者がいます。固有結界の維持には大変な熱量を要し、サーヴァントの強力な魔力を以てしても維持するのは長くて数分が限度です」

知らなかったが、そんな凄い話だったのか、固有結界って。

「そして、予選で我々が過ごした学園は、聖杯がその所有者を決める為に作り出した、固有結界なのです。予選の学校と同様に、本戦の学園、アリーナ、そして、マスター同士が雌雄を決する決戦場。これらも全て、聖杯がその桁外れな魔力を元に作り出した、個別の固有結界なのです。あれだけの規模の固有結界を長時間、しかも複数同時に維持し続ける事は、現代の最新鋭のスパコンでも不可能です。聖杯の魔力の規模がどれだけ凄まじいか、ご理解頂けるかと思えます」

以前、凜から聞いたセラフのスペックの高さを、こうして聞くとき改めて凄まじいと思わされる。しかも、予選の為だけにあれほど手の込んだ仮初の日常を用いるとは、どれだけ処理機能に余裕があるというのか。

「聖杯戦争に参加した全てのマスターは、一度記憶を完全に削除デリートされます。そしてまったくの別の人物として、聖杯が作り出した固有結界の中で、偽りの学園生活をさせられていたのです。聖杯は学園生活に時間制限を設けました。四日間。その間に、自分が与えられた役割を演じさせられている事に気づけるかどうか。それが聖杯戦争参加の条件だったのです」

普通に考えて、日常生活をしている中で、誰かから自分に役割を与えられているなんて思う人はまずいないだろう。

しかしムーンセルは、それに気づけと示していたのだ。偽りの日常に疑問を持たなかったら、違和感を覚えられなかったら、戦う資格すら与えられない。

ずいぶんとシビアな条件ではないか？

「……ふふ。もつとも、トオサカさんの場合、すぐに役割を抜け出していたようですので、演じていたという部分は当てはまりませんね。ちなみにフジムラ先生やイツセイリユードーはマスターではなく、役割を与えられたNPC、またはAIです。予選で役割に気づく事が出来なかったマスター達は、そのまま精神の死、という形で結末を迎えました。悲劇的ですが、弱い者には生きる余地さえ与えられない。それが聖杯戦争です」

淡々と、何事でもないように、それが当たり前であると言わんばかりに述べるレオ。やはり、根本的に思考回路が異なっているのがよく分かる。

そこらへん、王の気質とでもいうのだろうか。

「この戦いで生き残るには、可能な限りの情報を集める事です。それが、やがてあなたの力となるでしょう」

ここまで聞き終えて、少し気になる事がある。

どうして、レオは私にそこまで気にかけてくれるのだろうか。私な

んて、言ってしまうばただの凡人だ。

しかも、記憶すら失ったままの、ただの学生同然の私に、明らかにこの聖杯戦争でもトップランクのマスターであるレオが、私に気にかける理由が全く分からない。

「おや？ そんな事ですか。簡単ですよ。あなたは仮初とはいえ、僕のクラスメイトだった人で、友人だった人だ。本戦であつても、僕としては学校の友人だったあなたは特別な存在です。なんせ、学友なんて初めてでしたからね」

爽やかに笑いながらいつてのけた彼に、私は畏敬の念すら覚える。彼は本心から、私に友人としてアドバイスをくれていたのだ。それが嘘でない事くらい、私にだって分かる。

そも、嘘を良しとするマスターの元に、あの高名な円卓の騎士、ガウエイン卿が参じるはずもない。

「それでは、僕も自分の対戦相手のサーヴァントについて、少し調べ物でもしようと思うので、ごきげんよう、ミス・ハクノ」

と、優雅に一礼をして、レオは本棚の方へと行ってしまった。あれが強者の余裕というものなんだろう。多分見習えと言われて出来るものではないはずだ。

とりあえず用事は済んだので、図書室を出ようとしたところで、思わぬ人物と鉢合わせた。

「あれ？ こんなところで会うなんて奇遇だね」

扉に手をかけようとしていた私の背後から掛けられる声。それは間違えようもない、慎二のものだ。

「なんてね。ウソに決まってじゃないか。情報収集といえば図書室で決まりだよ。僕も、君の情報は集めているから、くれぐれも手を抜かないでくれよ」

白々しい……。多分、私が調べ物を終えて、ここに来るのをこうやって待ち伏せていたのだろう。なんとも慎二らしいというか……。「ところで、めぼしい本が見つからなかったみたいだね。残念ながら、

既に対策済みさ。あの海賊女に関連する本は、既に隠蔽<sup>スプーフィング</sup>済みだよ！ 少しでも君が楽しめるようにと思つてね。アーリーナに隠しておい

てあげたよ。最弱マスターの君に見つけられるかな？」

……!!

これは…せこい嫌がらせにも程がある。だが、それも戦略のうちと考えれば、意外と悪い策でもないので、文句の付けようもない。簡単な話、自分のサーヴァントの情報を相手に与えたくないのなら、その情報を隠してしまえばいい。

慎二はそれをやっただけに過ぎないのだ。

それにしても、昨日は別れ際にかなり怒っていたはずなのに、今日は何故こんなに機嫌が良いのか、これでようやく理由が分かった。私への妨害工作が上手くいっからだろう。

「ちなみに、君のサーヴァントは働くのに何を要求するんだい？」

「やっぱり、お金？ そうだよねえ！」

「え？ いや、強いて言うならマツサージだけど」

「は…？ たかがマツサージで動くなんて、安いサーヴァントだな。まあ、せいぜい足搔いておくといいさ。あはははははは。じゃあね。せいぜい頑張ってくれよ。次にアリーナで会った時に一太刀くらい浴びせてくれないと、僕も退屈だからね。もつとこのゲームを楽しませてくれよ！」

言いたい放題、挙げ句は高笑いして、慎二は私を押しつけて、悠然と図書室から出て行った。

ポツンと一人取り残された私は、少し呆然と、先程までの嵐のような一時を頭の中で何度か反芻させた後、私も図書室を後にした。

図書室を出て、階段の前に行くと、再び凜の姿が。今度は凜も、私の存在に気付いてくれたらしい。手を軽く振ってくれている。

「あら、ごきげんよう。その後調子はいかがかしら？」

「さつきレオとここで話してた時、私も居ただけど」

「あら、そうなの？ 全然気付かなかったわ。だってあなた、少し影が薄いし」

「けっこう痛いところをザクザク突いてくるよね、凜って。流石に遠慮や加減を覚えてほしい。」



「そんな事より調子は怎うなの？ 逃げ回つてばかりじゃ、勝てる見込みはないわよ」

その点に関しては問題ない。むしろ、こちらから率先してエネミー討伐や、慎二の情報を探りに行つていくくらいだ。

「ふーん。それは良い傾向ね。この聖杯戦争は言わば情報戦。相手の情報を得ないまま戦いを挑むなんてのは愚の骨頂なんだから。相手を倒したかったら、向こうのクラス、技、関連情報、とにかく出来る限りの情報を集めなさい。そうすれば対策が取れるし、相手の戦い方も、読めてくるといふものだわ」

レオといい、凜といい、何故こうも親切にしてくるのか。レオはまだ理由を聞いたからいい。では、凜は？

「どうして、そんなに色々教えてくれるの？」

「別に。ただ、あなたの方が勝ちやすい気がするだけよ。ああ見えて、間桐くんはゲームチャンプ。彼が勝ち上がるより、あなたと当たった方がやりやすそうなもの」

うわあ……隠す事なく、漏れ出すどころか開けっぴろげに本音を吐露しやがった。こういうところが後腐れなくて気持ちのいい人物なのだが、やはり流石に今のは直球が過ぎると思う。

だが、凜はこちらの意を汲まず、

「ま、せいぜい頑張りなさい」

と軽く別れの挨拶を告げて、階段を上へと去ってしまった。もしかすると、また屋上にでも行くのかもしれない。

「朝から濃い面子の勢揃いね……」

見計らつたように現界したアヴェンジャーは、気だるそうに欠伸をしながら、彼らへの感想を口にした。

確かに、アヴェンジャーの言う通り、私も朝から話すには、全員かなり濃いやと思う。

一人だけならまだしも、それが連続で3人だ。王者の風格を持つレオ、戦士の矜持を持つ凜、自分に絶対の自信を持つ慎二。

彼らを相手に、ただの学生（気分的には）でしかない私では一回の会話だけでも気後れするというのに。私の精神的疲労は、例えるな

ら、

「逆らい辛い御曹司なクラスメイトとスケバンを張る先輩と話すのが少し面倒くさい友人と連続で機嫌を損ねないように気を遣って会話をした後くらい」

である。要は、全員にそれなりに気を遣うという事だ。リラックスして話すには、彼らは少し特殊すぎた。

「ワカメや赤い女はともかくとして……マスター、あのレオとかいう奴には注意しておきなさい」

アヴェンジャーにしては珍しく、他のマスターの名前を口にしたら。それだけ、彼女はレオを警戒しているのだろう。

「あのレオって奴、今は全く敵意を見せていないけど、もし対戦相手になった場合、今のままじゃ私達では勝ち目はありません」

……！

それを口にされて、改めて実感する。レオはアヴェンジャーにここまで言わせる、破格のマスターなのだ。

あんな風にサーヴァントを隠しもしないで、あえて見せているのだから、彼もそれを自覚している。

自分は勝つ自信しかない。だから、サーヴァントを見せてもまるで問題はないのだ、と。

「今はワカメに勝つ事が何より先決ですが、あのマスターはおそらく決勝にまで進出する候補として最有力。彼らと当たるまでに、最低でも私の霊基を元のランクまでに戻さないと、十中八九私達は負けるでしょう」

目の前の戦いも大切だが、それを見越した上での発言。もし勝ち進めたとしても、このままの状態ではレオと当たれば、確実に私達は負ける運命にあるのだ。

「……でも、どうやってアヴェンジャーのステータスを元に戻すの？

これまでエネミー討伐はだいぶこなしてきたけど、アヴェンジャーのステータスに変化はないよ？」

そう。もうかなりエネミーを倒したが、目に見えた能力の上昇は確認出来ていない。だというのに、アヴェンジャーはエネミー討伐に躍

起になっている。

一体どうやって霊基を修復するというのだろうか？

そんな私の疑問に、アヴェンジャーはフンと笑ってみせると、誇らしげに答えを口にした。

「方法ならあります。さあ、やっど御披露目といきましょうか。まあ、本当は心底気に喰わないのですが、背に腹は代えられません。ではマスター——」

——教会に行きますよ」

## 迷える仔羊は教会へ往く

教会——。そういえば、この学園の敷地内には何故か教会が建っている。私も予選の頃は、教会の前にある噴水広場で、焼きそばパン片手に一成とよく眼鏡談義をしたものだ。

しかし、実際に教会の中には不思議と入ろうという気が起きなかった。だから、私は教会がある事は知っていても、その中で何が行われているのかは全く知らない。

普通に考えれば、祈りを捧げていると思うのが妥当だ。だが、ここはムーンスセルの電子の海の中。データ処理が当たり前のこの仮想世界で、祈りを捧げるだけ——なんてのは、正直考えられない。

きつと、そこでしか出来ない何かがある。だからこそ、アヴェンジャーはそこに行こうと言ったのだ。

——そう、具体的には、

「教会にはもう、足を運んだかね？ あれはシステムの管轄外だが——サーヴァントの強化が出来るはずだ。有効だと思うなら、利用するがいい」

——こんな具合に。

階段を下りた所で、私は言峰神父と遭遇したのだ。いや、もう何度目だよってくらいいの、階段移動後の遭遇率なのだが。

私はとりあえず頭を下げて、そのまま言峰神父の横を通り過ぎようとしたのだが、

「待ちたまえ」

と声を掛けられては、止まらざるを得ない。声を掛けられ、私はピタリと止まると、素直に彼へと向き合った。

「ふむ…暗号鍵<sup>トリガー</sup>を既に得たのか…：優秀だな。この調子で第二暗号鍵<sup>セカンダリトリガー</sup>

を入手すれば、決戦場の扉は開かれる。第二暗号鍵は、次の迷宮で生成される。猶予期間も後半に差し掛かった今ならば、アリーナの扉から新たな迷宮に入れる事だろう」

なるほど、だから次の階層に進めなかったのか、と納得している私に、この神父は盛大なネタバレの追い打ちを仕掛けてきたのである。「伝えるべき事は伝えたぞ。——ああ、それと……。一つ、伝達を忘れていたようだ。教会にはもう、足を運んだかね？ あれはシステムの管轄外だが——サーヴァントの強化が出来るはずだ。有効だと思うなら、利用するがいい。さあ、これで伝達事項は全てだ。存分に殺し合うがいい——」

伝達事項を伝えた彼は、さっさとどこかへ去って行った。まだ伝えていない他のマスターを探しにでも行ったのだろう。

私はといえば、アヴェンジャーが教会で何かしらステータスを元に戻す手段があるという期待が、こうもあっさり知らされる事となり、思い切り肩透かしを喰らった気分になっていた。

「……なんとというネタバレ」

『……………』

霊体化しているアヴェンジャーが、絶句しているであろう姿が容易に想像出来てしまう。

その……ドンマイ。

『……別にヘコんでなんかないし。ほら、分かったなら早く教会に行きますよ……ん？』

ヘコんでないと言いつつも、どこか不機嫌そうなアヴェンジャーだったが、何かに気付いたらしく、私も周囲を確認する。すると——

「きーしーなーみーさーん!!!」

——虎が、猛スピードで私に向かって突進していた。

「ハイッ!」

『マ、マスター……?!!!』

猛烈なタックル（としか言いようのない抱き付き）を受け、私の体が藤村先生が来た職員室と反対側の廊下へと、すごい勢いで転がっていく。

視界はミキサ―にでも掛けられたかのごとく、グルグルと超速で回転し、耳には遠ざかるアヴェンジャーの叫び声。そして衝撃が全身に襲い来る。

体は教室二クラス分を転がり終えて、ようやく止まり、私は衝撃の為に何が起きたか分からない。

つまりは、かなり混乱していたのである。

「な、なに、が——!?!」

訳も分からず、目を白黒させていると、

「ご、ごめんねー!! つい勢いのあまり……」

向こうの方から、藤村先生の声が近付いてくる。そうだ、そういえば、こうなる前に藤村先生が私に向かって走ってきていたではないか。

という事は、犯人は虎——!!!

「ごめで済んだら火炙りの刑なんて要らないわよ！ この猛獣教師！」

と、アヴェンジャーが現界し、藤村先生へと詰め寄っていた。

どうやら、私がつもない勢いで跳ね飛ばされた事が、彼女にとっても想定外に衝撃的だったらしい。想定外すぎて、いつもよりすごく取り乱した感じだ。

「ほんとにごめんね、岸波さん！ この前頼んでた事が気になって、つい……」

「……ああ、そういう……」

なるほど、理解した。藤村先生にとって、竹刀はアイデンティティにも等しいアイテムなのだろう。

だって、予選の頃から藤村先生といえば、『虎、竹刀、熱血』で構成されたかのような先生として、あらゆる生徒から認識されていたし。

「あの、これ……アリーナで回収しておきました」

私は端末から、データ化して仕舞っていた竹刀を取り出し、未だガクガクと震える脚を支える杖代わりにして、藤村先生に竹刀の無事を視覚として伝える。

「あ、私の竹刀！　ありがとうー。見つけてくれたのね」

私はアヴェンジャーに肩を貸してもらい、藤村先生に竹刀を返還する。竹刀を受け取った彼女は、満面の笑みで竹刀を胸に抱き締めた。

まるで、我が子を愛しく抱く母のような、慈愛に溢れた姿だ。

うん、見ていて微笑ましく感じる。

「ところで、ついでも悪いんだけど――」

……せつかく良い感じに締めようとしたのに、タイガーが良からぬ言葉をお口にします。

まさか――

「岸波さん、もう一つ、先生のお願ひ、聞いてくれない？」

oh……やっぱりか。いや、どうせついだから、別にいいんだけど。出来れば無理難題はご遠慮願ひたい。

「まあ、いいですよ」

「ありがとー！　実はね、先生ちよつとみかんが必要な。アリーナの第二層なら、きつとみかんもあるわ。一回戦の間を取ってきてくれたら、先生、とっても嬉しいなー」

いや、いくらなんでも、おかしい。アリーナでみかんで……。それは場違いにも程がある。

というか、本当にそんなものがアリーナに……？

「取ってきてくれたら、お礼に素敵なインテリアをあげちゃうわ。じゃあ、お願いね！」

頼むだけ頼んで、藤村先生は職員室へと消えて行った。

よく考えれば、みかんくらい自分で取り寄せられないのだろうか。購買とか食堂に行けば、どうにか手に入れられない気がしないでもないが……。

「頼むくらいだから、あの猛獣教師じゃ自分で入手出来ないのでしょう。それにしても、調子狂うわね、あの女が絡んでくると……」

肩越しにアヴェンジャーが愚痴る。アヴェンジャーとタイガー

……確かに、相性は悪そうだ。一方的にアヴェンジャーが頭痛に苛まれるのが、目に見えて分かる。

「で、マスター？ 足の調子は？ そろそろ一人で立ちなさいな」

促され、私は歩けるかどうか確かめる。

うん、どうにか一人でも大丈夫そうだ。

「そつ。じゃあ、教会に向かいましょうか」

アヴェンジャーは私がすっかりと自分の脚だけで立てているのを確認すると、貸していた肩を離して、姿を消した。

いや、まさかアヴェンジャーがあんなに取り乱すところを見られるとは。体中が痛いけど、おかげで良いものが見れた。眼福眼福……。

さあ、気を取り直して教会に行こう。教会へは、保健室のすぐ前にある扉から通じている噴水広場を通して行ける。距離は少しあるが、時間はそこまで掛からないはずだ。

噴水広場には、他のマスターはほとんど居ない。一人の女子生徒が噴水を眺めているくらいだ。

喧騒とは離れた、静寂の空間。聞こえてくるのは、噴水のジャバジャバという水音だけ。

ここだけが、聖杯戦争から切り離された空間のような、少し異質で歪な空気が漂っている。

かといって、邪悪であるとか、禍々しいとか、そんな事はなく、不思議と神秘的な印象さえ受ける。教会という聖なる領域と、噴水という癒やしを作り出す装置が、そんな印象を与えているのかもしれない。

扉へと手を掛け、荘厳な造りをした教会の中へと入る。

重い扉の先は薄暗い世界が広がり、そこは完全に外からの音を遮断しているようにさえ感じられた。

先程の噴水広場が聖杯戦争から切り離された空間のようなら、こち



らは、この場所だけ世界から切り離されているかのような印象を受ける。

並んだ長椅子には誰も座っていない。

しかし、正面に目をやると、鮮やかな赤と青の色が目飛び込んできた。

長い赤髪の女性と、短めの青髪の女性。見た感じシスターではなさそうだが、かといって聖職者には全然見えない。

何故こんな所に居るのだろうか。

私は中の薄暗さに少し不気味さを覚えながら、ゆつくりと彼女達の元へと足を運ぶ。

少し距離を置いて座る二人の中心、台座らしきものの上では、乱回転する一つのキューブと、それを包むように回る二つのリングが。

教会にしては異質過ぎるその光景が、ここが本来の教会としての役割を果たす場所ではないと実感させてくる。

私が来た事は、ここに入った時から分かっていたのだろう。二人のうち、赤髪の女性が私に声を掛けてきた。

「はあい、ようこそ教会へ。君も魂の改竄をしにきたのかな？」

フランクな感じの女性が私に声を掛けた事で、何やらデータ処理らしき作業をしていた青髪の女性も、私の存在に今気付いたらしい。

「ん、お前は確か……なんだったかな。……ふむ。私が物忘れとは、珍しい。ま、細かいコトはいいだろう。被験者が多い分には問題ない。

ようこそ楽園<sup>エデン</sup>の死角<sup>ひがし</sup>へ。魂の改竄に来たのだろうか？」

魂の改竄？ 聞き慣れない言葉を二人続けて口にされ、私が返答に困っていると、状況を察したのか、私からの返答を待たずして、向こうから言葉を掛けてきた。

「あら、魂の改竄を知らないで来たんだ。ってことは貴方、本当に、素人の中の素人ってコト？」

「素人か……。簡単に説明すると、魂の改竄とは、そうだな……。君の魂とサーバーの魂を連結させる事だ。マスターの魂の位階が上がれば、それだけ強く連結させる事も出来る。どう連結させるかを決めて、直接魂にハッキングするという訳さ」

つまり、マスターとサーヴァント——私とアヴェンジャーの魂の繋がりを外部からの干渉により連結させ、ステータスの底上げをする……と。

「そんなところかしらね。んで、私はその改竄をする役についてるの。いろいろあつて成り行きで、ね。ちなみに、姉貴は居る意味なんてまるでないけど」

姉貴……という事は姉妹なのだろうか。聞いてみようとも思ったが、二人の間にはそれをさせまいとする無言の圧力が存在していた。「とにかく、大体の事は分かったでしょ？ 魂の改竄をしてほしかったら、私に声を掛けてね。その女はまったく、これっぽっちも、カセットテープ程の役にも立たないから」

赤髪の方が、青髪の方を貶すが、そんな罵倒も不敵に笑って流すと、「そういうお前は眼鏡拭き以下だな。またぞろ失敗して、ムーンセルからの苦情が来ないよう、注意するコトだ」

負けじと赤髪の方を貶し返していた。

「ちよつ、アレはマスターが悪かつたんだつてば！ 違法スレスレで改竄してくれ、つて言うから、スキルを幾つか付加しただけじゃない」「は。そのオチが、巨大化したあげくロストでは、笑い話にもならない。いいかな、お嬢さん。サーヴァントと自身の命が惜しければ、その女の技量を、あまり過信しない事だ。ま、サーヴァントの失われた霊格を取り戻す程度にしておけば安泰だろう。それくらいなら、いくらコイツでもそうそうミスはしないだろう」

「くっ……このクソ姉貴。後でビームかましてやる……！」  
なるほど。うん、分かった。この二人、すごく険悪だ。今にも殺し合いを始めてもおかしくなくらいには、仲が悪いし、憎しみ合っている。

藪をツツいて蛇が出ないように気をつけないと……。

「つと。そういやまだ名前を言ってなかったわね。私は蒼崎青子ね。よろしく、新米マスターさん」

「……私は蒼崎橙子だ。ま、気楽にな」

えつと、赤髪の方が、蒼崎青子。そして青髪の方が、蒼崎橙子……

と。

うん、なんか髪の色と名前が逆な気がするが、ツツコまないぞ。だって地雷踏んだら怖いし。

にしても、だ。これがアヴェンジャーの言っていたとおきか。ステータスの向上——もとい、魂の改竄。魂を扱う時点で、それがとてもデリケートな作業だというのは、考えずとも分かる。

それを踏まえた上で、先程からの話を聞くに、どうも、赤い方の女性にはあまり器用ではないようだ。

……いや、言い直そう。魔術師としての自覚がない自分でも感じ取れる程、蒼崎青子はこの手の作業に向いていない。

精密作業よりも殴り合いとかの方が似合っているようにすら思える。

魂の改竄、サーヴァントの霊格施術はこちらの女性——蒼崎橙子の得意分野と思われるのだが……？

「うん？ そりゃそうだ、改竄は私の方が上手いよ。青子の十倍は効率よく強化出来る。ふむ、君は人を見る目は素人ではなさそうだな」  
「ぐっ……悔しいけど、ここは我慢してあげる。橙子の嫌味なんて日常茶飯事だし」

勝ち誇った橙子に、わなわなと拳を震わせる青子。しかし、十倍は言い過ぎではないだろうか？

「お前は私の一割以下」と言っているようなもので、青子が橙子に殴りかからないのが不思議なぐらいだった。

「不思議じゃないさ。嫌味じゃなく、純然な事実だからね。本当のコトを言っているだけだから、青子も黙るしかないだろう」

「うぐぐぐぐ……」

今度はぎりぎり歯を鳴らす青子。橙子の言い分は分かったが、それならどうして彼女は改竄係にならないのだろうか？

「答えは至ってシンプルさ。私は私でやるコトがあつてね。うちの坊やの頼みで人を探しているところなんで、君達の世話を焼いてる暇がない。今は不肖の妹が、君達に迷惑を掛けないよう、最低限の監視をしているだけだ。なので、私の事は無視してくれて構わないよ。魂の

改竄は、その壊すコトしか能のない女に頼むがいい」

「……ムカつくわく、マジ。いちいち監視とかいらぬし、迷惑だつての」

歪な姉妹関係なのは分かったから、早く魂の改竄とやらをしてほしいのですが？

姿の见えていないはずのアヴェンジャーが、いつ姉妹喧嘩という名の殺し合いが始まるのか、ウズウズしてるのが、なんとなく伝わってくるし。

「…はいはい。なんかやる気削がれたわく。仕方なく私に頼るとか、ちよつとお姉さん傷つくなく」

「しようもないコト言ってる暇があるなら、さっさと改竄してやったらどうだ？」

「もう喧嘩は止めて！ 私の為に争わないで!？」

ホント、胃がキリキリと痛んでくるから。あんなラブコメ風な台詞を、違う意味合いで使う事になろうとは……。

どうにか喧嘩を仲裁し、私は魂の改竄をしてもらうべく、アヴェンジャーを現界させる。

「へえ…アヴェンジャー、『復讐者』のサーヴァントね。これはまた珍しいサーヴァントと契約したもんね」

「ふん。道化じゃあるまいし、私は見せ物ではないのですよ？ 早く魂の改竄をしなさい」

まじまじと自身を眺め回す青子の視線が気に入らないのか、それとも、この教会という空間に長居したくないのか。アヴェンジャーは不機嫌さを隠さない。隠そうともしない。

「ごめんごめん。本当に珍しいからさ。エクストラクラスなんて、私がおこに來てから初めて見たもん。あ、でも無駄な事じゃないからね。観察して、そのサーヴァントをよく知っておく事も、魂の改竄では重要だから」

純粹に、物珍しそうにアヴェンジャーを観察していた青子。しかし、一応それなりの理由がそこにはあったらしい。

「どうだか……」

しかし、言葉通りに信じようとしめないアヴェンジャー。どうにも彼女は、何かを信じるといふ事を嫌っている節があるようだ。

私の事も、マスターとして信じてくれないのだろうかと思うと、少し不安になる。

「……何か？」

と、アヴェンジャーが疑問を口にした。顔に出ていたかと思いい、彼女の方へと顔を向けるが、どうやらそれは私への言葉ではなかったらしい。

アヴェンジャーが視線を送る先、そこに居たのは、蒼崎橙子だった。彼女は、少し神妙な顔をしてアヴェンジャーを見ていたが、首を小さく横に振ると、クールに笑って答える。

「いや、君の声が私の探しているヤツの声と似ていてね。少し驚いてしまったただだよ。うん、そうだな……。一つお願いしてもいいかな？」

今度は私の方を見て、橙子が話し掛けてくる。その目は真面目そのもので、真剣に頼み事をしようとしているのが伝わってくる。

「君のサーヴァントの声に似た女を見かけたら、私に教えてほしい。そうすれば、私もお役御免になるからね」

「アヴェンジャーに……？ それはいいですけど、その人の特徴とかは？」

まずそれを知っておかねば、声が似ているというだけでは、人違いの可能性は潰えない。

「特徴……か。そうだな……。着物を着てて、その上にジャンパーを羽織ったおかつぱ風の女だ。年は……20歳くらいで、男口調なのが特徴だな。まあ、見て、声を聞いたらすぐに分かるだろう」

着物の上にジャンパー……。変な組み合わせだ。

「確かに変だが、もし本人に会っても絶対に言ってくれるなよ。機嫌を悪くして殺されても、私は責任を負いかねんからね」

怖い！ 出会い頭に「着物にジャンパー、変なの〜」とか言ったら殺されるとか!?

なにその人すごい野蛮!!

「気まぐれな猫みたいなヤツだからね、アイツは。それに、並みのサーヴァント程度なら瞬殺してのける実力は持っているから、怒らせたら面倒だぞ?」

「私も同じような眼を持つ子を知ってるけどさ、その着物女、ただの人間なのにサーヴァントでも簡単に斬り殺せちゃうからね。身体能力で言えば、人間離れはしてるかも」

やだ、怖い。もし会っても、絶対に怒らせないようにしよう。命が幾つ有っても足りないぞ……。

「ふーん……。サーヴァントに生身の人間の身で勝てる女、ですか。面白いわね」

楽しそうにしてるけどね、アヴェンジャー。絶対に喧嘩ふっかけたりしないよね?

私は未熟、アヴェンジャーも不完全。そんな状態なのに、サーヴァントに勝てる人間なんて、戦っても勝てる気がまるでしないもの。

それより、今は魂の改竄だ。まだ見つけてもいない着物の女性については、この際置いておいて。

早くアヴェンジャーの霊格を少しでも上げたい。今まで焦らされたのだから、エネミーを討伐してきた成果をすぐにでも確かめたいのだ。

「それもそうね。姉貴の頼みなんてついででいいんだからね? さ、それじゃ始めよっか」

青子はアヴェンジャーに台座のキューブ前に立つように指示を出し、アヴェンジャーの少し前でデータ処理の準備を始めた。

ついに、大量のエネミーを討伐してきた事が結実するのだと思うと、なんだか私は感無量な気持ちになる。

ああ、やつと、アリーナを何度も駆け巡ってエネミーを討伐した事に意味が持てるのだ。

「感動しているところ悪いけど、あの程度で私のステータスが戻る事はありませんからね」

「……………え」

「当たり前でしょう。狩っていたといつても、たかが低級のエネミーばかり。まだまだ霊基の完全なる再現に至るまでは足りません」

そんな…バカな……!」

——なんて、実はそこまで驚きはない。それもそうか、そんな簡単にいく訳がない。最低ランクにまで落ちてしまったのだから、もつと苦勞しなければ、元のステータスにまでは戻せないだろう。

しかも、本人がそれを自己申告しているのだし。これは気の遠くなりそうなりハビリになりそうだ。

「さて、こっちは準備OKよ。それじゃあ、作業に入るとしましょうか」

青子も支度が整ったようだ。アヴェンジャーが光の柱に包まれ、その体が宙へと独りでに浮いていく。

「マスター。確かに道のりは果てしなく遠いでしょう。ですが、復讐者の本懐は、その執念深さにあります。ですから、私は決して元の霊格を取り戻す事を諦めませんから、そのおつもりで」

ふふん、と自信たつぷりの笑顔で、アヴェンジャーは告げてきた。それなら、私だつて負けてない。だって、諦めが悪いからこそ、今こうしてあなたと私は契約出来ているのだから——。

アヴェンジャーの体が強い光に覆われていき、やがて全身が完全に見えなくなった。

アヴェンジャーの魂の改竄が、蒼崎青子の手によって開始されたのである。

私は、それが終わるのを黙って見届けていた。

少し心配なのは、青子がミスしないかという事だが……。

「またその話?!」 ちよつとはお姉さんを信用しなさいよね!」 いいかげん私も怒るわよ!」

## 靈基再臨への道

魂の改竄が始まってから数十分。青子の作業は未だ続いているが、まだ終わりが見えてくる気配はない。

必然的に、私は彼女の作業が終わるまで手持ち無沙汰となり、その間、教会の中を回ったり、橙子の作業を覗いてみたりと、暇つぶしをしていた。

「……」

「……はあ。そんなに暇かね？」

と、見かねたらしき橙子が、作業は止めずに、チラリと私に視線だけを軽く送って聞いてくる。

「暇です、はい」

「素直な事だ。…ふむ、そうだな。よし、では君にとって為になる話でもしようか」

為になる話？

それはマスターとして、という事なのだろうか？

「そうだ。君のサーヴァントは霊格が君に合わせて低下してしまっているな？ 魂の改竄はそれを取り戻す手段、またはサーヴァントのステータスを底上げするものだ」

それは最初の説明の時に理解した内容だ。他のマスターなら、私は違い十全のサーヴァントの能力を更に強化するのだろうが、私の場合は一から組み上げていかねばならない。

つまり私はハンデを背負って、この聖杯戦争に臨まねばならないのである。

「だが、魂の改竄にも限界はある。一定まで霊格を強化したところで、打ち止めとなってしまうのさ」

当たり前と言えば当たり前か。何事にも、必ず終わりはあるし、限界だって定められている。

半永久が有り得たとしても、完全なる永久なんて、世界のどこにも存在しないから。それこそ、魔法の域にでも足を踏み入れない限り



は、不可能だろう。

「しかし、その限界を超える方法がある。そこそこが——霊基再臨。英霊の基礎となる霊基を格上げする事で、その英霊のステータス成長領域を限界突破させるんだよ。それにより、魂の改竄の限界も上限が大幅に増大されるのさ」

霊基、再臨……。サーヴァントの限界を超えたステータス拡張を可能とする手法。それがあれば、サーヴァントを限界以上に強化出来る——と。

「そうだ。なかなか飲み込みが良いマスターだな、君は。しかしながら、霊基再臨にも限度というものはある。出来るのは良くて4度までだな。それ以上は霊基を形作る、霊核——英霊の魂の核だな、それが負荷に耐え切れない。もしくは、耐え切れたとして、それは英霊の域を超えてしまい、世界に存在出来なくなってしまうだろう。大きすぎる力というのは、その存在だけで世界を壊すからね。世界が拒絶反応を起こしてしまうという訳だ」

つまり——霊基再臨とは魂をより高位のものへと上書きし、霊格を格段に向上させる事を言うのだろう。

ただし、やはりそれにも限度が存在し、行き過ぎた霊基再臨は、英霊が世界に存在出来ない状態にまで、霊格を強めてしまう、と。

ただそこに居るだけで、世界を壊しかねない——故に、世界はそもそもそんな存在を受け入れないのだ。

「君は予想以上に賢しいな。満点とまではいかないが、ほとんど正解だ」

む。ならば、百点満点の答えとはどのようなものなんだ。是非聞かせて欲しい。

「いや、それは不可能だ。そもそも、真なる『正解』など存在しないんでね。私だってそこら辺を専門にしているでもなし。ムーンセルから引き出した情報がほとんどだよ。それに、私の専門は人形師だ。魂に関しては何れも研究しているが、英霊にまでは手を伸ばしちやいなからね」

なるほど。この世に本当の意味での『正解』が存在しないように、私

の答えも、橙子が持つ答えも、満点ではないと。満点には成り得ないと。そういう事か。

「そうそう、そういう事だよ。まあ、なんだ。霊格の向上に限界を感じたなら、霊基再臨をしに来るといい。おっと、言い忘れたが、もしする時は保健室の健康管理AIを連れて来る事を忘れるな」

桜を？ でも、どうして……？

「なに、霊基再臨は英霊への施術ではあるが、マスターと繋がった英霊の魂を上位のものへと昇華するんだ。それはつまり、契約者たる君の身にも影響を及ぼすのは至極当然。なにしろ魂が連結<sup>リンク</sup>しているんだからね。君にも変化が表れるだろうさ」

分かった。言いたい事は概ね理解した。

サーヴァントの霊基再臨に伴い、マスターにも何かしらの影響が出る。それをケアする役割として、桜のような健康管理AIが必要なだろう。マスターのバイタルを確認出来るのは、本人以外だと、そういった役割を与えられたNPCくらいだろうし。

「それと、魂の改竄ではエネミーから奪取したリソースを使用するが、霊基再臨にはまた別の素材が必要となる。それについては、君のサーヴァントが霊基再臨を必要とした時に知らせるとしようか」

なんだかんだと、先はまだ長いのか。まずは霊格の再現が求められるんだし、霊基再臨は遠い先の話だろう。

それから間もなくして、アヴェンジャーの魂の改竄がようやく終了した。見たところ、異常は確認出来ないので、どうにか成功したようだ。

「ん〜？ どうにかつてのは聞き捨てならないわ。言つとくけど、たかが霊格を取り戻すくらいなら、私にとっちゃ朝飯前なんだからね」  
「それすら出来んようでは、まさしく出来損ないの役立たずだがね」  
「いちいち突っかかってくんないっつーの！」

本当、青子の言う通りです。出来れば私が居る時は喧嘩しないでほしい。止められる自信は露ほども無いので。

光の中から帰還したアヴェンジャーは、手を何度か開閉させて、満

足そうに口元を緩めていた。

「ふん。霊格を一つ取り戻したようですね。さあ、もつと私のリハビリの為に励みなさい、マスター」

彼女の様子からするに、十分な結果が出たのだろう。私は本当にステータスが上がったのかを確認するため、端末を手取る。

そしてステータス画面から変化があるかを見てみると、筋力と耐久がEからDへと上がっていた。

「本当にステータス上がってる……」

「当然。私がやったんだから、ミスは無いわよ。でも、リソースがもう空っぽになっちゃったから、また集めてから魂の改竄に来てね」

姉御肌を垣間見せる笑顔で、青子は私に手を振っていた。私も、彼女に礼を告げると、アヴェエンジャーを伴って教会から出て行く。

扉を開け放つと、ようやく切り離された空間から、少し慣れてきた聖杯戦争の舞台へと戻ってきたような気がする。

が、やはりどこに行っても一悶着あるのは、もはやお約束なのだろうか。教会から出てすぐに、花壇のところに人影があるのが見えた。

見ると、慎二がまた何か、トラブルを起こしているようだ。

どうやら、女子生徒（恐らくNPCと思われる）を連れて、教会前で騒いでいた慎二が、あの老人の怒りを買ってしまったらしい。

「教会では静かにするものだ。それが例え教会の中でなくとも。君の神がどのようなものかは知らんが、神父からそう教わらなかったかね？」

豊かな白髭を生やしたその顎。まるで物語にでも出てくる魔法使いのような威厳さえ感じられる。年を重ねた大樹のような厳かな空気を纏い、その緑を基調とした服装がより一層、それを際立てている。なんとなく、軍服のようにも見えるが……。

熟年、老年の貫禄……でもいうのか、ともかく、私なんかよりも歴史を深く歩んできた、老齢の重鎮のように感じられた。

「悪いね！ あいにくと、僕は無神論者なんだよ」

慎二と言えば、あの老人に臆するどころか、突っかかっていた。いた。馬鹿なのか、勇敢なのか、人それを蛮勇と呼ぶ。どちらにせよ、

慎二は自らが愚かな行いをしたという認識がまるでない。

要は、反省が見られないのである。

「……ふむ。日本人は礼儀正しいと聞いていたが、それもそれぞれと言う事か。去るがいい、小僧。主を信じぬ人間に、父の家の門は開かれん。兵士としての技術を学ぶ前に、礼儀作法から出直すのだな」

慎二への呆れを通り越して、言外に愚か者と断じた彼は、そのまま私の横をよぎり、教会へと姿を消していった。

「はん、やだねえロートルは、口ばかり偉そうでさ！ まあ、いずれ戦う事になったら、たつぷりと思いき知らせてやるさ」

この男、まるで反省していない……。

慎二は肩を竦めてみせると、私に気付く事なく噴水広場から、女子生徒を連れて去っていった。

彼は何かしら問題を起こさないと気が済まないのだろうか。お前は漫画に出てくる悪ガキか。

ツツコミは心の中だけに収め、私は今の彼らのやりとりを頭の片隅に追いやる。

とりあえず、保健室の前を通るのだから、せつかくだし桜に顔を見せに行こう。最後に来たのは、支給品を貰いに行った時だったか。

「あ、岸波さん。いらっしやい」

保健室に入ると、やはり変わらずといった様子で、桜はテーブルの前の椅子に腰掛けていた。

私の顔を見るなり、嬉しそうにはにかんだ彼女に、私も釣られて笑顔になる。

いいな、なんか……笑顔の連鎖って。心が暖かくなってくる。

「お茶でも淹れましょうか？ あっ、紅茶にしましょうか。今朝、購買で良い茶葉を貰ってきたんですよ」

「うん。お願いするね、桜」

「はい」

なんだか、すごく嬉しそうだ。そんなに暇だったのか。忠犬が仕事

を与えられたとばかりに、桜はテキパキと紅茶の準備を始めていく。数分して、紅茶を淹れてもらった私は、保健室の隅から椅子を引つ張ってきて、桜の対面へと腰掛けた。

「どうぞ、粗末なお手前ですが…」

謙遜する桜をよそに、私はソーサラーを手に、ティーカップを反対の手で持つ。

まずは香りを楽しむ。……うん、やはり紅茶はこうでなければ。

「まずはも何も、紅茶は香りがメインでしょうに」

む。せっかく香りを楽しんでいるのに、悪態をつかないでもらいたいな、アヴェンジャー。

ちなみに、アヴェンジャーも私の隣で椅子に座って、紅茶を飲んでる。

というのも、

「せっかくなので、アヴェンジャーさんもどうぞ」

と、桜が気を利かせてアヴェンジャーの分も、こうして紅茶を淹れてくれたのである。

霊体化していたアヴェンジャーは渋ったのだが、せっかくの桜の厚意を無碍にするのは良くないと、どうにか説き伏せて現界させたのである。

というか、ケチついたりする割に、自分だって香りを楽しんでいるじゃないか。

「う、うるさいわね！ 出されたものなのだし、食べ物を粗末にするのは、私としても許せませんので。仕方なく！ そう、仕方なくいただいているだけだから！」

素直じゃないな、このサーヴァントは。たまには素直になりなさい、アヴェンジャー！

「ふふっ」

そんな私達のやりとりを見て、桜は本当に楽しそうに微笑んだ。いや、自覚がないが、そんなに微笑ましいのだろうか？

「はい。それもあるんですが、やっぱり誰かとうこうしてふれあう機会が楽しくて……」

「貴方は健康管理AIですからね。基本的に保健室から出る必要がないし、マスターが体調に異変を兆した時にここに居ないようでは問題です。まあ、当然人と会う機会は少ないでしょうね」

アヴェンジャーの指摘に、桜は寂しそうに、儂げで曖昧な笑みになる。彼女自身、それが分かっているから、どうしようもないのだろう。「おつしやる通りです。私は単なるAIに過ぎません。私は健康管理AI。その役割から逸脱する事は不可能です。ムーンセルから作られた私達NPCは、役割に縛られています。そして、その役割から脱しようとも思いません。私達はどのように設計されていますから」

それは——寂しいな。こうして接している分には、人間とまるで区別がつかないのに。

でも、やはり根本的に違っている。だって、彼女の言葉は人間らしさがあっても、中身に人間味が欠けていたから。

決定的に違っている。私と桜では、在り方から、思考回路から。何から何まで、違うのだ。

「……人間と英霊が違うように、NPCも全く別の生命体という事ですね。それに関しては深く考える必要もないでしょう。私達は聖杯戦争を勝ち進む事だけを考えていればいいのですから」

……いくらなんでも、私はそこまで割り切れない。たとえ桜が人間じゃなくても、私は彼女と、こうやってふれあっている。それをバツサリと切り捨てる事は私には無理だ。

「いいんです。私達NPCは、聖杯戦争の終了と共に、デリートされますから。私はサクラタイプとしての外郭は残りますが、現在の聖杯戦争を経て蓄積された記憶領域は完全に削除されますので。だから、岸波さんが気にする事はありませんよ」

そう言うと、さつきと同じように笑ってみせる桜。でも、どうしても、さつきと同じ笑顔なのに、さつきよりも脆く散ってしまいそうに見えるのは、決して私の気のせいなどではないだろう。

桜——美しく咲き誇り、儂く散り行く、春の花。

間桐桜という少女の在り方とそっくりではないか。この聖杯戦争の間だけ、彼女は彼女として在る事が出来る。

しかし、それも終われば、彼女の中身はまっさらにされてしまう。  
なんて——虚しいのだろう。

「それがムーンセルのシステムなのだから、仕方ないでしょう。それに、私や貴方も、一回でも負ければそこで終わりだし、戦いに勝つという事は、相手を殺すという事。そんな甘い考え方でいると、いつか足下掬われるわよ」

アヴェンジャーはそこからは、一切この話題に関しては口を開かなかった。もうその話はお終い。言わずとも、アヴェンジャーの意思が伝わってくるようで、私は何も言い返せない。

自分の命が掛かっているのに、他人の心配をしている余裕があるのか？ と、そう言われているような気がしてならなかったから。

「霊基再臨……ですか？」

少し気まずい空気を一転する理由で、話は変わり、教会で聞いた事を私はこの場で話してみた。

蒼崎橙子が桜を連れてくるよう指定したという事は、桜もそれについては知っているはずだ。

「はい。確かに、私に限らず健康管理AIなら、それについてはある程度は把握しています」

「霊基再臨、ねえ……。まさか、ここでもその言葉を耳にするなんて」  
ん？ その口振りから察するに、アヴェンジャーも霊基再臨を知っているの？

「知ってますとも。サーヴァントの真の力を引き出す為の儀式でしょう。貴重な素材を捧げる事で、サーヴァントの霊基を一段階上のものへと引き上げる技術……」

「はい。ですが、それだけではありません。霊基再臨によって、サーヴァントの英雄としての最善の姿が再現されるんですよ。ですので、サーヴァントの見た目にも変化が現れる事から、マスターとサーヴァント共に楽しみにされる方が多いんです」

姿が…変わる……？

えっと、それは具体的にはどんな風に？

「別にそこまで大きな変化はないわ。服装や装備が変わったり、髪が伸びたりするくらいよ。まあ、一部例外的に身体的な変化のあるサーヴァントも居るようですが……」

なるほど……。桜が言ったマスターやサーヴァントが楽しみにするという気持ちだが、分らないでもない。

見た目の変化に期待するのは勿論の事だが、それが苦勞した分だけ、目に見えた形として表れるのだから、嬉しい事この上ないだろう。大金注ぎ込んでレアモノが出た時のような気持ちだろうか。

「いや、それは違うでしょう……」

薄気味悪いものでも見るかのごとく、露骨に嫌そうな顔をするアヴェンジャー。

何故……？

「幾多ものマスターが高レア（私）を求めて、有り金叩いて一喜一憂している姿なんて、まるで亡者の終わり無き行進でしかないわよ。はあ……間違っても、マスターはそんな亡者共と同じ事にはならないで下さいね。もしなつてしまつたら、私が火葬してあげるから」

「ハイ、ワカリマシタ、サー！」

……だって、焼かれるの怖いし。

「それはそうと、霊基再臨ともなると、素材集めがすごく大変そうですよ？ 残っている記録によると、その素材集めに奔走しすぎて、聖杯戦争を敗退したマスターも居たそうですので」

「……マジですか？」

「はい。それだけ、霊基再臨は特殊な儀式なんです。今までの全マスターの中にも、一度も素材を得る事さえ叶わずに進んだマスターが8割を超えていますから」

「それと、素材を得るには、それに見合ったエネミーを討伐しないと駄目でしょうから、霊基再臨したかつたら、早く私のステータスを元に戻す事です」

えー、アヴェンジャー曰わく、「早く私を育てろ」と？

キツイ。そもそも素人マスターに、あまり期待しすぎないでほしい。いや、頑張りたいとは思うけどさ。



分不相応という言葉があつてだね——

「ハッ。戯れ言を。私のマスターになつたからには、私の望みは出来る限り叶えてもらいますからね。せっかくのマスター一人サーヴァント一人。ワガママ放題させてもらうから、そのつもりで」

ワガママ宣言入りましたー。うん、隠そうともしなかつたね。いや、潔いというか、なんというか……。

アヴェンジャーのマスターは苦勞するね、まったく………私か。

「えつと……頑張ってくださいね、岸波さん？ 私も、保健室から出る事はほとんどありませんが、ここにいらしてくれた際には、出来る限り労りたいと思いますので。といつても、お茶やお茶請けを出すくらいしか出来ませんが……」

天使だ……。天使がここにいる！

大天使サクラエル……!!

「あ、あの、恥ずかしいので、出来ればそれは止めてください……」

「私のマスター、なんて残念なの……」

顔を赤くして俯いてしまう桜と、可哀想なものを見る目で私を見てくるアヴェンジャー。温度差がすごく激しい。解せぬ……。

しばらくの談笑を楽しんだ後（アヴェンジャーはたまに相槌を打つ程度ではあったが）、私達は保健室を後にした。かなりリフレッシュ出来たように思う。

桜もそう感じてくれていたといいのだが……。今後も、度々お邪魔させてもらうつもりなので、これで桜も寂しい思いをしないで済むだろう。まあ、桜にそういった感情があればの話なのだが。

さて、これからすぐにアリーナに行くには少し時間が早いかな。少し校舎を探索して、マイルームで休憩した後、アリーナに赴く事にしよう。

そうと決まれば、早速校舎を駆け巡って、慎二達の情報を集めて回るとするか。

『靈基再臨…か。懐かしいわね。果たして、貴方に私を最終再臨させられるのかしら……？』

## 黄金色の瞳

朝の校内探索を終え——というか、朝から色々と濃い時間を過ごした結果、探索が終わる頃には既に、学園全体がランチタイム・ムードへと突入していた。

食堂では多くのマスターが購買またはカウンターに並び、各々の昼食を調達しているようだ。

校舎内だけではない。外のグラウンド周囲、教会前の噴水広場、そして屋上と、ピクニク感覚で昼食を摂っているマスターはそれなりに存在していた。

気分転換の意味合いもあるのだろう。同じ風景や場所ばかりでは、気分も滅入ってくるというものだし。

とまあ、色んな場所で、色んなマスターがランチタイムを過ごしていた訳だが、やはりと言うべきなのだろう。サーヴァントと共に昼食を摂るマスターの姿はほとんど見られなかった。

いや、それはまあ、例外的にレオのように、明らかにサーヴァントな人物とペアでランチタイムな人も居るには居たが、それはレアなケースだ。

情報を奪われないよう懸念してか、単独、または対戦相手ではないマスター同士といった具合で、昼食を摂るマスターが多かったのだ。

いくらお昼時とはいえ、ここは聖杯戦争の地。すなわち戦場だ。用心深い者、自信のない者といった魔術師達は、間違ってもサーヴァントと一緒に人前で昼食を……という訳にはいかないのだろう。

それこそ、自信に満ちた者や、少しズレたマスターくらいしか、そんな愚行ともとれる行いはしていないのだ。

——そして私とは言えば……。

「いくぞ焼そばパン……。具材の貯蔵は充分か」

マイルームにて、購買で買ってきた焼そばパンを前に、いざ食事に赴かんとしていた。

「……………」

鉄板で焼けてソースにより肌の茶色くなった麺は、芳ばしい香りを放ち、キャベツは炒められても瑞々しい輝きを持ち、細かく切られた玉ねぎや人参が全体に更なる彩りを与え、それらを中心に切れ目の入ったパンが聖母のごとく優しく包み込んでいる。

これは一種の、完成されたカタチだ。無駄がなく、乱雑に詰められたそれは、ある意味美しくさえある。

どうにもこうにも、私の食欲を刺激してたまらないのだ。

「……………」

私は口が大きい方ではないので、先端から口に含み、少しずつ噛みちぎって食べていく。

口に入れた途端、口内に広がるソースの味と匂い。どこか刺激的で、それでいて懐かしささえ感じる、その旨味。麺は程良く炒められ、簡単に噛み切れる柔らかさでありながら、少しコシがあって食べ応えもある。

キャベツのシャキシャキとした食感が、古き文明に新しい風を取り入れるかのような、口の中で文明開花が行われているような、不思議な感覚。

そして、紅生姜のピリリとした辛味が目を冴えさせる。

これは当に、お口の中の、フランス革命や〜!!

「……………、ていつ」

「あいたっ!?!」

私が焼そばパンを堪能していると、いきなりアヴェンジャーが私の頭を小突いてきた。

危ないな、舌を噛んだらどうするんだ!

「貴方は阿呆ですか? それとも痴呆ですか? 何を呑気に食レポみたいな真似をしているのですか? たかが焼そばパンでしように……………」

深く溜め息をつきながら、アヴェンジャーはもう一度、残念そうに溜め息をつく。

…………二回も、目の前で本人を前に溜め息をつかれると、少し傷つき

ます。

「ラーメンならまだ分かるけど、そんなどこでも買えそうなパンで一喜一憂しないでくれる？ 私のマスターが焼そばパン程度で喜ぶ安いマスターだと思われるじゃない。いや、安いマスターなのは事実だけれど。せめてラーメンの食レポをしなさいな」

呆れ顔でラーメンの食レポなら許すと宣うアヴェンジャー。いや、それではポピュラーすぎてツマラナイと思うのだが。

どうせなら、誰もしてこなかったものにチャレンジしてみたいと思うし。

「……妙なところで挑戦したがるわよね、貴方って。それも、かなり微妙な事に」

口調は感心している口振りなのに、顔が呆れ顔のままなので、バカにされているようにしか聞こえない。

「そういうアヴェンジャーは、何か好きな食べ物とかないの？」

「私？ 私はラーメン屋の食ベログ？ とかいうのをやった事があるわよ。ラーメン屋を巡っては、如何にまずかったかをしっかりと書いてやるのが楽しいのよね」

うわあ……。アヴェンジャーの事だ、まずかったらありのままの事実を隠さず書くだろうから、ラーメン屋専門の影響妨害だ。とかいうか、絶対に愉快犯に違いない。嬉々として、悪い点を挙げて述べ連ねるのだろう事が、容易に想像出来てしまう。

というか、サーヴァントがラーメン屋の食ベ歩きって……。

「…なによ。サーヴァントが食ベ歩きしちや悪い？ 世の中には、腹ペコ王とか、戦車男とか、愉悦倶楽部のメンバーとか、色んなサーヴァントが居るのだから、別に私だけが変だという事ではないわよ」

な、なんだ、その頭の悪いネーミングの連中は……。聞いているこっちの頭が痛くなってくる。特に、愉悦倶楽部メンバーのサーヴァント、絶対にロクなサーヴァントじゃないはずだ。

英霊にまでなって愉悦倶楽部ってなんだ、なんなんだホントに。

「……どうでもいいけど、こんな下らないやり取りのせいで、我慢していた私まで余計にお腹が空いてきてしまいました。罰として、その焼

そばパンの半分を頂きます」

「ああっ！ 私の焼そばパン!!」

暴論を吐き捨てると同時に、目にも留まらぬスピードで、アヴェンジャーは私の手から焼そばパンをひったくると、かじりかけだった私の焼そばパンを、言葉通り元々の大きさの半分程をパクパクと口に入れてしまう。

「もつきゅ、もつきゅ……意外に、もつきゅ、イケるわね、これ……もつきゅ」

「うう…私の焼そばパン……」

なけなしの小遣いで買った焼そばパンは、あつという間にアヴェンジャーのお腹へと消えていった。

というのも、主に回復薬などでPPTを消費するため、こういった娯楽や嗜好品のようなものは、極力コストカットせざるを得ないのだ。

そもそも、この電子の海で何かを食べる必要性は無い。要は気分の問題である。地上では食事が当たり前の習慣となっていたから、ほぼ全てのマスターが習慣に倣い、この月の世界でも食事を欠かさないのである。

しかし、全く意味が無いかと問われれば、そうではない。むしろ、食事をする事により、マスターもサーヴァントも、少し程度なら魔力を蓄える事が可能なのだ。食事量⇨魔力量の増加へと繋がっているのである。

ただし、やはり胃袋の限界は当然ながら存在する。この身体を構成しているのはデータ化された魂だという事らしいが、データとはいえ侮るべからず。地上の肉体と寸分違わぬ性能と機能を兼ね備えており、生命活動に必要な要素が幾つか不必要になった程度で、ほとんど変わらないのだから。

とは言いつつも、やはり人間にとって食事とは楽しみの一つなもので、私は焼そばパンを奪われた悲しみから、座っていた机に伏せり盤面を涙で濡らしていた。

「……っ。そんなに泣くほどの事？ ……仕方ないわね」

諦めと共に、アヴェンジャーはとあるブツを私へと、ぶつきらぼうに差し出してくる。そのブツとは――

「アヴェンジャーの昼食用に買った……カップラーメン？」

まだ蓋がされているが、少し開いた隙間からは熱そうな湯気が漏れ出している。その少しの隙間から漂ってくる、カップラーメン特有の美味しそうな香り。その匂いだけでよだれが出てきそうな錯覚がしてくる。

「二応、理不尽な理由で貴方の昼食を奪った訳だし、貴方には復讐の権利が当然ながらあります。遠慮せずに私の昼食を奪い返して、復讐を完遂しなさいな。それが復讐者への第一歩でもあるのだし」

いや、どんだけ小さな第一歩なんだ、それ。でも、そうか……、よし。

「じゃあ、復讐じゃなくて、お互いのお昼ご飯をシェアしよう。私はアヴェンジャーのカップラーメンを半分、アヴェンジャーは私の焼そばパンを半分食べる。ね？　これでお互いフェアなトレードの成立だよ」

アヴェンジャーの提案を歪曲しただけの折衷案だが、復讐なんかよりはよっぽど良いはず。復讐は復讐しか生まないと、どこかの誰かが言っていたと思うし。

私の提案に対し、アヴェンジャーは面食らったような表情をした後、その黄金色の瞳を揺らせて、動揺しているようだった。

「復讐を……そんな風に塗り替えてしまえる、なんて。考えた事もなかった……。同じ事柄、同じ内容であるはずなのに、考え方一つ変えれば、全く異なるものになってしまうなんて……」

「？」

哑然として私を見つめるアヴェンジャーだったが、そのまま固まってしまった動かないので、差し出されたカップラーメンを遠慮なく受け取る。

だって、そろそろいい時間だし、ほっといたら麺が伸びてしまう。

「じゃあ、いただきます。……ふー、ふー。ズズ、あちゅー！」

さ、冷ましても熱い！

もつと冷まさないと、とてもではないが味わえない。

「……。別に慌てて食べなくてもいいから、ゆっくり冷まして食べなさい。ラーメンは熱いうちが美味しいけど、無理して食べては火傷をさせていただきます」

我を取り戻したアヴェンジャーは、なんとも言えない目つきで、私の姿を眺めている。何か思うところでもあったのか、先程の私のシエア発言にケチを付けてくる事もなく——不思議と、いつもは険しい黄金の瞳も、今だけは和らいでいるように見えた。

改めて見ると、アヴェンジャーの色素の薄い身体に、その黄金の瞳はまるで宝石のように映えている。

普段の様子からは禍々しく映るそれも、暖かな雰囲気には美しく思えるのだから、不思議なコトだ。

「それと、忘れないように。食べていいとは言いましたが、半分だけですからね。もしそれ以上食べようものなら、焼そばパンの残りは私がもらいますから。当然、残ったカツプラーメンも奪い返した後で」

途端、挑発的な言葉で、手に持った焼そばパンを人質のつもりなのか、ゆらゆらと揺らしてみせるアヴェンジャー。

きたない、復讐者さすがきたない。

別にそんなセコい事はしないのに、どうにも彼女は、素直に人へ優しく出来ないらしい。だからこうして、わざと私から好かれまいとするし。

「食べ終わったら、アリーナに行きますからね。あのワカメの口振りからして、十中八九アリーナにサーヴァントに関する資料を隠しているはず。図書室から持ち出せても、勝手に処分出来ないのが幸いしたわね、マスター」

ちゆるる。うん、確かに。ムーンセルの権限様々だ。閲覧の自由は許すが、勝手な削除は認めない。

流石、管理の化け物と言われるだけはある。聖杯戦争下の全てのマスターの行動は、セラフには筒抜けなのだから。下手な反則や違反は、よっぽど腕の立つ魔術師ウィザードでなければ、隠蔽は困難なのだろう。

まず。それにしても旨い、このラーメン。伊達に月印と銘打ってい



ないという事か。

「本当に半分で終わるのかしらね……ハア」

昼食を終え、私達はマイルームを出た。すると、それとほぼ同時に、

『……第二暗号鍵セカンダリトリガーを生成。第二層にて取得されたし』

端末へとトリガー生成の連絡が届いた。決戦まで残り三日しかない。出来る限り早急に取得しなければ……。

しかし、凜は第二層からが本番だとも言っていた。これは気合いだけでなく、注意も払って探索に臨まねばならないだろう。

『トリガーが生成されたようですね。さあ、キビキビと回収に参りましょう』

「うん。……げぶう」

『……だらしないわね。半分ずつとはいえ、パンとラーメンは食べ過ぎでしたか』

それは仕方ないというものだ。目の前に美味しそうなものがあれば、食べたくなるのが人間の道理。

食べ過ぎたっていいじゃない

だって、にんげんだもの

はくの

『バカ言っていないで、行きますよ』

もうっ。冷たいなあ、アヴェンジャーは。

そして、私達はアリーナへとやってきた。

『一の月 想海 第二層』

周りの風景は第一層とは打って変わって、殺風景なものから変質を遂げていた。

まるで海の深く深く、一握りの生物しか生きる事の許されない海の底——原初の海底をそのままに、時が止まってしまった深海。

その名残ともいうべき、当時を生きただであろう原生物達の亡骸、その骨格のみが綺麗に残った状態で海を漂っている。

この光景をほぼ生身の状態で目にする事が出来るのは、この月の聖杯戦争に参加したマスターのみに許された特権だ。地上では、何年掛かるかも分からない、原初の神秘。それが、私の目の前に果てしなく広がっていた。

「…ふん。この苛つく気配……どうやらワカメ共もアリーナに居るよ  
うね」

いち早く、慎二のサーヴァントの気配を察知したらしいアヴェン  
ジャー。

ふむ、やっぱり慎二達も来ていたか……。

「帰還の隙を突かれるのは面倒だし、奴らをどうにかするまでは、学園  
に戻るのはやめておきましょう」

うん。それには私も賛成だ。

いくらムーンセルによって私闘が禁じられているとはいえ、この  
前の一件から、アリーナでは完全に禁止している訳ではないと分かっ  
た。

制限以内に致命的なダメージを受けてしまったは、ムーンセルの介  
入があったところで手遅れ。もはや意味すら為さないだろう。

「まずは奴らに感づかれる前に、あのクソワカメが隠したという本を  
見つけるとしましょうか、マスター」

宝探しにワクワクする子どものように、その黄金の瞳をキラキラと  
輝かせて、チロリと舌なめずりするアヴェンジャー。

獲物をいたぶるSっ気がバンバン溢れ出しているが、私はあえて指  
摘しない。触らぬ神に祟り無し、だ。

進んでみて分かったが、このアリーナは至る所に沈没船と思しき船  
が浮かんでいた。ともすれば、化石のような骨よりも、船の残骸の方  
が圧倒的に多く確認出来る。

まるで船の墓場だ。過去の遺物が、暗い海の底で還らぬ主を待ち続けている。いつか、戻ってきてくれると信じて、いつか、直してくれると信じて、いつか、もう一度——航海の旅へと旅立てると信じて。しかし、それは叶う事のない夢幻。彼らにはそれを許されない。この聖杯戦争が終われば、アリーナごと解体される運命にあるのだから。

何より、彼らの主なんてとうの昔に死滅しているのだから。

「幻想的……でも、この海には悲しみが満ちている。もう海を渡る事は叶わず、かといって日の目を見る事もない。閉ざされた海の虜……それが、彼らの運命なのでしょうね」

どこかポエムじみた語りではあるが、私はそれを否定しない。むしろ、同感さえしていた。

この海には希望が存在していない。あるのは沈み往く現在いまと、孤独に海の底でたゆたう未来絶望だけだ。

こんな寂しい海に、あまり長居したいとは思わない。早くトリガーを手に入れて、学園に帰りたいとさえ思う。

「……これは」

少し進んだところで、私は通路を塞ぐものを発見する。扉……というには取っ手がなく、これは侵入者を拒む柵に近い。

嚴重なセキュリティーという、スパイ映画で出て来そうなイメージの赤外線センサー。その物理版とでも言おうか。こちらはセンサーではなく、物理的に侵入を拒んでいるようで、触れても何も起きないが、破壊するのも無理そうだ。

「どこかに解除キーが設置されているはず。探しますよ、マスター」  
「ん、了解」

となれば、それを守るように配置されたエネミーが居るはずだ。探し出すのは良いが、おそらくそれなりに強いエネミーを倒さないといけない。

戦闘になると覚悟しておくべきだろう。

そして——

「見つけた！ エネミーと、その後ろのアレが……」

地面から操作盤のように突き出た、細長い小さな柱状のスイッチ。あからさまな設置からして、おそらく扉を開く鍵だ。

当然のようにスイッチの前に漂うエネミーは、頭部の大きな蛇のような形をしている。あれがここを守る番人の役割を担っているのは明白。

敵もこちらに気づくと、這うように宙を泳いで突進してくる。

「アヴェンジャー、初めて見るタイプのエネミーだよ。警戒を怠らないで！」

「ふっ。誰にそんな口をきいているの？ 当たり前でしょう！ 慢心するのはどこの金ぴかなのかは知らないが、エネミーはすごい勢いでこちら

にきている！

「指示を！ 従ってあげるわ！」

旗を構えたアヴェンジャーが、私に指示を仰ぐ。よし、応えてみせよう――

「見た目からして、直線的な攻撃はかわされやすい。フェイントを交えつつ、変則的な軌道で攻撃！ それと同時に、相手の動きをよく観察して！」

「ウイ。やるわよ！」

アヴェンジャーは返答するとすぐに、迫るエネミーへと駆け出した。旗は長い分、リーチがあり有利に戦える。

彼女は片手で旗を横に風呂、エネミーへ叩き付けようとするが、宙を泳ぐだけあり、エネミーはスイと上に避けてしまう。

が、それは囷の攻撃。本命は、もう片方の手に握られたアヴェンジャーのサプウエポン、漆黒の直剣だ。

横に風呂いだ右手はそのままに、左手を大きく下から振り上げる。二段階に渡る攻撃に、エネミーは察知しきれず剣による斬撃をその身に刻み込まれる。

「チー！」

しかし、それは浅く、決定打には届かない。エネミーは身をよじる

と、長い尾を遠心力に任せてアヴエンジャーへと叩き付けてきた。それをまともに肩へと打ち込まれ、アヴエンジャーは堪らず片膝をつく。

「この…!!」

ただでは転ばないのが復讐者。膝をついたと同時に、アヴエンジャーは地に手をつき、燃え盛る火炎を大地から噴出させる。

想定外の攻撃方法に、エネミーは尾を灼かれるが、それだけしか当たらない。回避の間に合わなかった尻尾だけが黒く焦げたのみで、エネミーは身を翻してアヴエンジャーから距離を取った。

「ツツ……。蛇のような体だけあって、身のこなしが優れてるってワケ？ 上等よ、ならその全身をバラバラに刻んでやる……!!」

帯刀し直し、肩を押さえるアヴエンジャー。ダメージを負わされた事に、頭に血が上ってしまったっているらしい。

短気を起こしては、戦闘全体に影響を及ぼしてしまう。こちらが彼女の冷却剤ストッパーになるしかないようだ。

「アヴエンジャー、戦闘だけに集中！ 恨みに目先を奪われすぎないで！」

「……！ チツ。分かっているわよ、そんな事」

ビクンと肩を震わせて、振り返る事なく旗を構え直すアヴエンジャー。いや、これは絶対に分かってなかったな。

警告して正解だった……。

「それで、次はどうします？」

エネミーは炎を警戒してか、私達の周りをぐるぐると遊泳しながら、こちらの動きを窺っているようだ。

「……」

少しだが、今の一連の動きを見ていて分かった事がある。体が蛇のようにしなやかに動くため、攻撃が回避されやすいが、頭部が大きいために、そこだけは移動時、攻撃時と共に動きが鈍い。

「狙いは頭部に絞って攻撃。多分攻撃は体全身を使った体当たりと、遠心力を使った尻尾の振り払い。あとは噛み付きくらいだと思う。狙いは噛み付き攻撃の時。来たら上手く弾いて攻撃。他は防ぐか受

け流して！」

「いいでしょう。その戦術で行きましようか」

相手は様子見に徹している。ならば、こちらから仕掛けるに限る。時間は有限なのだから、足踏みなどしてられない！

「仕掛けて！　まずは相手の攻撃を誘発させるよ！」

私の掛け声と共に、アヴェンジャーが走り出す。周囲を回遊していたエネミーも、それに合わせてクネクネとアヴェンジャーへと飛来する。

金の瞳を輝かせ、復讐者は獲物を狩らんと、禍々しき旗を振るわんとする。

当然ながら、獲物たるエネミーも、黙っている訳もなく、身をかわしながら復讐者へと武器でもある全身を以て戦おうとしていた。

ここで勝たねば、道は開けないというのなら——無理矢理にでも押し通るのみだ!!

## トレジャーハント（という名の略奪）

蛇のような形をしたエネミーを見ていて分かった事がある。

確かに体はクネクネと柔軟そうな動きをしているが、よくよく見てみれば、継ぎ目のように見える箇所が全身に点在していた。生物で言うところの、『関節』。それが、この蛇のようなエネミーには存在していたのだ。

普通、蛇にはそのような関節は存在しない。だって蛇には骨こそあれど、手足がついていないから。

故に、骨を曲げたりする機構も最小で良くなり、関節という機関自体が備わっていないのだが、このエネミーは違う。

見た目は蛇のような姿をしているが、やはり電子の海の敵性データ。言わば機械なのだ、このエネミーは。

だから、稼働する為の関節部分が必要になる。生物ではないがために、必然的に関節部分が必要となっているのだろう。

そうでなければ、機械が蛇のようにスムーズに動けるはずもない。「アヴェンジャー、このエネミーは関節がたくさんある。その部分を狙って攻撃して！」

「いいですとも。バラバラに分解してやりましょうか！」

頭部への一点集中攻撃から一転して、アヴェンジャーはエネミーの全身に備わった関節部分へと狙いを切り替える。

容赦なき旗の一撃がエネミーに襲いかかった。正確には、その頭のすぐ後ろにあった、首に該当するであろう関節部分へと。

が、やはりひらりと身を翻して避けるエネミー。

「甘い！」

しかし、アヴェンジャーだって簡単にいくとは思っていない。振り下ろした旗の一撃ごと、その勢いを利用して体を一回転させるようにジャンプすると、更に威力の増した旗の振り下ろしがエネミー目掛けて放たれる。

息つく間もなく叩き込まれた旗での重撃をまともに受け、その全身

を地面へと叩きつけられるエネミー。

「まだよ!!」

追撃とばかりに、アヴェンジャーが剣を抜く。だが、それをエネミーに向けて振り下ろすのではなく、逆に天高く掲げる形で、大きく上へと振り上げた。

「この憎悪、生半可な事では収まらぬ……! 無様に死に絶えるがいい! 汝の道は、既に途絶えた!!」

アヴェンジャーが叫び終わると同時、掲げた剣の上空では何本もの黒い槍が形成され、地に這いつくばっていたエネミーに向けて、一斉に降下していった。

それはあまりに凄惨な光景だ。関節全てを的確に射抜くだけでなく、その全身を埋め尽くすように、漆黒の槍は次から次へと、エネミーの体に生えていく。

全身を串刺しにされて、最後に爆発するように黒混じりの紫色をした炎が地面から吹き上がる。そして、はるかにオーバードメージを受けた末にエネミーは消失した。

後に残された黒い槍の数々が、そこに蛇型をしたエネミーが居ただと分かるように、シルエツトを形作っている。

しばらくして、黒い槍も自然と跡形もなく消え去っていった。もはやエネミーの痕跡は残されてはいなかった。

「ふう…」

剣を腰に差し直したアヴェンジャーが、一息つくように息を漏らす。その顔は、『とりあえず一仕事終えたぜ』的な感じの清々しいものだった。

「いや、ふうじゃなくて。今の何? 黒い槍がぶわーって。けっこうグロい光景だったんだけど」

いや確かに口上はかつこよかったが! それとこれとは話が別だ。あれをエネミーのようなデータで構成されたものじゃなく、生身の生物にやられた日には、金輪際お肉が食べられなくなるぞ。

リアルにミンチ肉になっていくところとか、エグいしグロいしキモいの三拍子ときた。いくらなんでも揃いすぎだ!



「はあ？　せつかく魂の改竄で取り戻したスキルを使ってあげたのに、その言い草は何？」

「え…スキル？　あれが？」

「というか、そんな話は聞いてないんだけど？」

「当然よ。だって言ってなかったし」

しれっと答えるアヴェンジャー。この復讐者、まるで悪びれた様子が見られない。てんで反省などしていないのだ。

「別にいいでしょう？　ほら、こうしてお披露目してあげたのだし。なに？　まさか、ちよつとした秘密も許容出来ないワケ？」

いや、別にそこまで言っていないけど。というか、復讐者がそんなに素直な訳がないし。どうせ他にも秘密や嘘なんてもっとあるんじゃない？　それこそ、そんなの気にしてたらキリがないじゃない。

「…どこぞのウソツキ焼き殺すガールに聞かせてやりたいわね、その台詞」

「なにその物騒な人…？　アヴェンジャーの友達か何か？」

「別に。私の知ってる頭のおかしな女っただけですよ。仲良くも友達でもありません」

深く語るつもりはないのか、それとも友達扱いされた事が気に障ったのか、完全に話題はそこでバツサリと切り捨てられた。

アヴェンジャー、友達少なそうなのに、意外といろんな知り合いが居るよね。いや、一方的にアヴェンジャーがその人物達について知ってるだけとか？

まあ、どちらにしても意外な事には変わりないのだが。

「いつまでも下らない事を言っていないで、先に進むわよ。ほら」

くいつと顎でスイッチを押せと促してくるアヴェンジャー。なるほど、自分は敵を倒して道を切り開くが、こういった装置的なものは私に任せてくれるらしい。

やだ、この復讐者…：優しい…：!!

と、悪ふざけも大概にして、そろそろ真面目に事に当たろうか。私は促された通り、柱から少し浮いたひし形のスイッチに手をつくすと、力強く柱に向けて押し込んだ。

ガツシンという心地良い感触と共に、手から放したひし形のスイツチがクルクルと回転しながら眩い黄金の色に輝き、そしてどこか遠くで何かが開いたような音がフロアに響き渡る。おそらく、あの封鎖されていた扉が開いたのだろう。

「ふん。道が開けたようだし、先に進むわよマスター。あのワカメと海賊女め、今度こそ痛い目に遭わせてやるわ……!!」

あくあ。アヴェンジャーだったら、またサディズムな笑顔を浮かべていらっしやる。懲りないな、このサーヴァントは……。

開放された通路を抜け、更に一つ部屋状のフロアを突っ切ると、その次のフロアに入る直前で、エネミーが門番かのように立ちふさが

る。全身紫色を基調とした、牛とも馬ともつかない体軀をし、その頭部と思しき箇所には、二振り巨大な大鎌が並んで揺れていた。

あれで切り裂かれようものなら、大ダメージを負うであろう事が容易に想像される。あのエネミーの攻撃を受けるのは危険と見て間違いないだろう。

「アヴェンジャー、あの鎌の動きに注意して。絶対にガードは怠らないように」

「あの鎌……なかなか私好みの色合いに形状をしているじゃない。大ききさも申し分ないし、私のサブウェポンにしてやろうかしら……」

ああ、もう！ 私の話を聞いてないどころか、武器屋で『これは……いい代物だ。相当の業物と見た！』とか言って喜んでる客みたいな顔になってるし！

ダメだ、多分本気であの鎌を奪いに掛かるぞ、これは。何事もなく済めばいいのだが――。

——はい、何事もなく、無事エネミーは討伐出来ましたとも。

あのエネミー、どうやら馬の要素が強かったのか、『馬』鹿みたい

同じ行動の繰り返し返ししかしてこなかったのだ。

具体的には、攻撃↓防御↓重撃↓攻撃……と、こんな具合に延々とループしていたのである。

観察していてすぐに気付いた私は、アヴェンジャーにそれを伝えると、あつという間にエネミーはボコボコにされていった。

それはもう、見ているこちらが不憫に思えてくる程の、リンチである。ひどいイジメを見た気分だ……。

宣言通り、アヴェンジャーは戦闘中に旗でエネミーの大鎌を、根元からポキリと折って奪い取ると、

「いい、いいわよ！ これよ、これ！ 雑魚のエネミーにしてはなかなか良い鎌ね！ うっふふふ……さあ、首を切りましょう。どこが首だかは分からないけど、これでもうアンタは用無し。おさらばです」

鎌を手に入れた途端、一気に熱が冷めたかのように鋭い視線でエネミーを一瞥した彼女は、手にした鎌をエネミーに向けて勢いよく振り下ろした。

自らの鎌によって殺されたエネミーは、断末魔を上げる間もなく、ノイズとなって消滅した。

「なんというか……ご愁傷様？」

「なんでそこでその言葉が出てくるのよ。……ま、そんな事はどうでもいいわ。それよりも、この鎌よ。帰ったら早速私専用チューニングに加工しないといけません！ この反り具合といい、鋭さといい、素晴らしい、素晴らしいわ……!!」

よっぽどその鎌が気に入ったのか、目を爛々と輝かせて振り回している。その姿はさながら、親に欲しいものを買ってもらった女の子のようである。

———というか危ない！

頼むからそんな大きい鎌をブンブン振り回すのは止めて下さいお願いします。当たったら怪我どころか死んでしまいます。

「!! ……コホン。さあ、先に進みましょうか、マスター。ワカメが隠した海賊女の資料とやらを見つけてやりましょう」

やっと我に帰ったか、はしやぐ姿から一転、何事もなかったかのように取り繕うアヴェンジャー。

しかし、今のはもうなかつた事になど出来ないのだ。このネタで今度、マイルームに居る時にからかつてやろうじゃないか。

更に奥へ奥へと進むと、今度は道が二つに分かれていた。ふーむ、どちらに進んだものか……。

私の直感が、右だと告げている。なので、ここは先に左から見てみよう。

進路でないにしても、何かアイテムを拾えるかもしれない。そう思い、左に進んだのだが、すぐに行き止まりに行き当たる。

どうやら、またあのスイッチを探さねばならないようで、さつきと同じフェンスゲートの扉が、進路を塞いでいた。さつきの私の直感には当たっていたらしい。おそらく右の通路の先にスイッチはあるはずだ。

「…またこの扉？ もう、面倒ですね」

うんざりといった具合に、アヴェンジャーは引き返していく。私も、面倒ではあるが再び元来た方へと足を向けた。ゲームならまだいいが、リアルなダンジョン探索はこれだから疲れる。道草一つであっても、余計な体力の消耗へと繋がるので、下手に動き回る訳にもいかないのだ。

体力も有限なのだし、無意味に走り回る事だけはなんとしても避けたい。

そうして、億劫になりつつも、私達はもう一方の通路を進んでいた。進むにつれて、周囲の風景もより深くなっていく。深海の更に底の底へと向かって歩いていくようで、奇妙な感覚になると共に、不気味さが増していく気がする。

ここに生命の終わりは感じられないが、船の墓場と表現するに相応しい海底——無生物の終焉が、ここではありありと感じ取る事が出来る。

命が無くとも万物に終わりは来る……それを嫌という程に認識さ

せるのが、この聖杯戦争において私の最初はじまりの海なのだ。

「それにしても、全然それらしい物が無いね」

幾分かは進んだはずなのだが、それという手掛かりすら見当たらず、周りに漂うは、壁の向こうの船の残骸ばかり。

スイッチもなければ、慎二のサーヴァントの資料らしきものも無い。というか、結構奥まで来たのにその慎二達にすらまだ遭遇していない。不意打ちを喰らう事だけは勘弁なのだが……。

結局、こちらの道の先ですら行き止まりにたどり着いてしまう。これは困ったぞ……、ここまでの道すがら他の道なんて全く見当たらなかったというのに、ここに来て八方塞がりとなってしまふのか……？  
しかし、それも杞憂に終わる事となる。

「マスター。こちらに怪しい隠し通路がありますよ。行ってみましょうか？」

と、アヴェンジャーがおもむろに壁に向かって歩き始める。

いやいやいや、ぶつかるって!?

「……って、あれ?」

ぶつかるどころか、アヴェンジャーの体は壁をスツと通り抜け、その足はしっかりと地面を踏みしめていた。本当に見えない道がそこにあつたのである。

隠し通路の先は、とある沈没船の甲板に繋がっていた。そこに設置された、オレンジ色のアイテムフォルダが二つと、ゲートを開くためのスイッチ。おそらく、このアイテムフォルダのどちらかはサーヴァントに関する資料だろう。

目当てだったものが全て、一気に発見出来た事はラッキーだ。それぞれ分けて探す手間も、これで省けるといふもの。

「ここは、あのワカメが物を隠すのに好みそうな場所ですね。さあマスター。早速その箱を開けてみることにね」

アヴェンジャーに促され、とりあえず手近な、私から向かって左手にあるアイテムフォルダを開封する。

ガチャリ、という解錠音と共に、中から現れたのは――  
「ボロボロに古ぼけた手記……?」

あつた。慎二が必死になって隠蔽した一冊の本は、羊皮紙に書かれた、何かの手記のようだった。

古過ぎて文字は消えかかっていたが、『ゴールデンハインド黄金の鹿号』という船の名前や、いくつかの島の名前、襲った船の積荷などを読み取る事が出来た。荒海を駆けた海賊の航海日誌——だろうか。

よほど強いプログラムで組まれたものなのだろう。慎二はこのフォルダを消去する事が出来ず、やむなく、この場所に移動させたのだ。

やはり、ムーンセルの管理するデータを簡単にデリートするのは困難なのだろう。慎二の隠蔽行為そのものが、それを物語っているのだから。

「これこそ、あのサーヴァントの事が書かれた書物でしょうね。海賊の情報を記されたこれが隠されていた以上、これは確実にあの海賊女の事を示していると見て、まず間違いないはず」

うん。それはもう確定事項だろう。ただ、真名が読み取れないのが痛い、彼女の正体を探る手掛かりとしては十分な成果と言える。

「では、もう一つのフォルダもぶんどって、スイッチを押した後に先に進みましょう」

「ぶんど……、いや、そうだね。それじゃ……っ!!」

手記をデータ状にして端末に収納した瞬間、けたたましいブザー音のようなものが周囲一帯に鳴り響く。

当然と言えば当然だったのだ。誰だって、嚴重に保管した物を盗られないようにセキュリティを施すのが道理。慎二の場合、実力で取り返す自信があるのだろう、私が手記を見つけたら、合図が鳴るよう細工していたのである。

「チツ。奴ら、小癩な真似を……! マスター、どうせ居場所がバレているのです。それなら、こちらから出向いてやろうじやありませんか」

……。どのみち、ここまで大きな音が鳴り響いているのだ。遅かれ早かれ、慎二は私達を探し出すだろう。

それに、帰還前に不意打ちされぬように、彼らを退場させておきた

いという、こちらの都合もある。

アヴェンジャーの言う通り、こっちから打って出るのも有りだ。

「分かった。その代わり、絶対に無理はしないでね」

情報は増えつつあるが、それでもまだ完全には程遠い。相手の真の正体が分からない以上は、油断こそしないが無理は禁物だ。慎重にコトを進めるように気をつけなければ……。

「よし、行くよ！ アヴェンジャー!!」

「ええ。前は後れを取りましたが、一矢報いてやろうじゃない。復讐者だけにね」

所代わり、アリーナのとある場所にて。

「……ちっ！ 岸波のクセに、もう見つけたのか!?!」

慎二は少しの焦りを隠せない。岸波白野が彼の予想以上に早く、隠した手記を手に入れたからだ。

その証拠に、設定していたブザー音が遠くの方から聞こえてきていた。

「あんな奥に隠したのに…っ。ふん…まいいい、すぐに取り返せば問題ないさ。アイツが僕のサーヴァントの情報を得たところで、僕には敵わないんだからさあ!!」

「アンタの自信はどこから来るんだろうねえ。調子に乗ってアタシの事をペラペラ喋って、あのリンとかいう小娘にバレたばかりだったのに」

若干の呆れた口振り、慎二のサーヴァントである女性は苦笑する。

「う、うるさい！ いいから、お前は僕の言うことだけを聞いてればいいんだよ！ 天才である、この僕の命令をな!!」

「自信過剰は時に身を滅ぼす悪癖じゃあるが、アタシはそういうのが嫌いじゃない。むしろ好みさね。ウジウジした野郎ってのは、見てい

てケツに風穴開けてやりたくなつちまう。その点、アンタは小悪党ぶりが否めないが、実に良い小悪党っぷりさ！ 悪党つてのはそうできやいけない。敵に優しさなんて見せる必要ないんだよ。ただ奪い、ただ楽しめりやアタシら悪党は他に何も要らないのさ」

バンバンと慎二の肩を豪快に叩き、快活に笑つてみせる彼女。悪党らしい悪党の持論を掲げながらも、何故か憎めない女海賊——そんな彼女の人柄が、そうさせているのかもしれない。

海賊でありながらも英霊とまでなった彼女には、そういった人を惹きつけるカリスマのようなものが備わっているのかもしれない。

「痛い、痛いんだよバカ女!? 力加減くらいしろよ!？」

「おっと、悪い悪い。んゝ、そのナヨナヨしいのは、どうにかならないもんかねえ……」

「さつきからいちいちうるさいんだよ！ さつきと岸波から取り返しに行くぞ。モタモタして逃げられるなんて面倒だからな」

そう。ここで漫才をしている場合ではない。彼らとて、対戦相手に易々と情報を与える訳にはいかないから。

「あいよ。さーて、んじや一切合財奪いに行くかあ!!」



嗚呼、それでこそ復讐者――

アリーナ全体に、トラップ式に仕掛けられていたアラームが鳴り響いたのなら、あまり余裕もないだろう。すぐにでも慎二はこちらへと向かって来るはずだ。

私は端末をしまう間もなく、すぐにもう一つのフォルダへと手を掛ける。

「まったく、敵が近づいてるつてのに強欲なマスターだこと」

いや、だって今逃したら手に入れそびれるかもしれないし。慎二が気にも留めなかったのは多分たまたまだ。プライドの高い彼のこと、アリーナに設置されたアイテムを拾うなんてまずしないはず。

だけど、気まぐれにフォルダに手を伸ばす事が無いとも言い切れない。なら、今のうちに、まだ余裕がある今こそ取っておくべきだろう。

「……まあ、確かに一理あるわね。…生意気にも」

もう、一言多いなあ。アヴェンジャーは！

…つとと、さてさて中身は？

「片眼鏡……？」

中から現れたのは、どうという事はない、飾り気もお洒落感も皆無な、シンプルなモノクル。多分、礼装なんだろうけど……。

とりあえずデータ化して端末に収納し、名前と性能にザツと目を通す。えつと、名前は『聖者のモノクル』…？

「聖者ですつて？ 腹が立つわね、その礼装」

「いやいや、これかなり使えるよ。アリーナ内の敵の能力がある程度解るハッキングツールだって」

そう。流石にサーヴァント相手には厳しいだろうが、アリーナに湧くエネミーの情報を得られるのは大きい。

エネミーごとの特徴や能力が分かれば、それだけエネミー戦での時間短縮や簡略化にもつながる。その分、アリーナでの探索にも時間も余裕も持てるというもの。

「フン。なら早速装備する事ね。もちろん、端末を通して、ね」

言われなくても分かっているとも。もう、あんな恥ずかしい真似はゴメンだ。

「！サーヴァントの気配が近づいてきてるようね。さっさと装備して迎え撃つ構えを取りなさい！」

「どうやらあまり猶予は無いらしい。手早く『聖者のモノクル』を端末内で装備すると、臨戦態勢に入る。」

「さあ、二回目の対サーヴァント戦。上手く凌げるといいのだが……。」

このまま待っているのも癪だったので、こちらから慎二達の前に出向いてやろうと考えた私達は、分かれ道になっていた地点まで引き返す。

そして、そこでどうとう慎二達とのご対面と相成った。というか、けっこう離れてたのにサーヴァントの気配ってそんなに分かるものなのアヴェンジャー？

「……チッ！ あんなところまで探すなんて、ずいぶん必死じゃないか」

あからさまにイラつきを見せる慎二だったが、すぐに平静さを取り戻すと、余裕たっぷりな笑みを浮かべて、私に向けて指差した。

「けど、残念だったね。せっかくだけど、その本は返してもらおうよ」

「……いや、データ化しちゃったんですけど。」

とは流石に言い辛く、どうしたものかと黙っていると、

「出ましたね、海藻野郎。この前のように行くとは思わない事です。さあマスター、私の言葉が偽りではない事を、そのクリクリした目をよく見開いて思い知りなさい！ 聖杯戦争において情報を得ると言う事が、どういう事かを！」

アヴェンジャーは既に戦闘態勢に移行しており、得物たる邪悪な旗を掲げて、敵を睨み付けていた。

彼女の高らかな宣戦布告を前に、慎二はギリ、と歯を軋ませる。

「雑魚サーヴァントが吠えるよねえ！ いいさ、思い知らせてやる！ さあ、やつちやってよ!!」

ブーメラン、それブーメランだから慎二。自らも吠える慎二は、怒鳴り散らすように彼のサーヴァントへと戦闘を命じた。

「仕方ないねえ。報酬分はきっちり働いてやるさ!!」

女海賊が銃を構えて、戦闘態勢へと入る。

「……………!!」

銃を持った敵が目の前に居るというのに、私は不思議と焦りはなかった。それどころか、視界は平時よりもクリアで、思考も明瞭に冴え渡ってさえいる。

「やれ!!」

慎二の乱暴な命令と共に、女海賊は銃を構えたまま、アヴェンジャーに照準を合わせて走り出す。

走りながら照準を合わせるなんて、本来ならムチャクチャな芸当も、流石は英霊、難無くこなしてみせるのだから恐れ入る。

「！ 頭に照準来てる!! 注意して！」

以前と比べて、私の眼には彼女の行動が完璧ではないが、少し読める。どういう理屈かは分からない。

「だけど、見える……………!!」

「多分、右手の頭狙いは囷。左手の脚への照準が本命!!」

「へえ、やる……………!!」

私のアヴェンジャーへの指示を聞き、女海賊は感心したように笑ってみせると、両手に持った拳銃の照準を、真っ直ぐアヴェンジャーの胴体へと切り替える。

読みは当たっていたようだが、すぐに狙いを変えられてしまったらしい。

「ナメた真似を……………!!」

真正面から突っ込んでくる敵サーヴァントに、アヴェンジャーが怒りを露わにその軌道上へと向けて旗を振り下ろそうとするが、

「もう読めてんのさ!!」

サイドステップにて旗から逃れる女海賊。そして、その旗の床への

着弾と同時に放たれた、追撃である黒き炎も、容易くかわされてしま  
う。

「もらったあ!!」

「あぐ!」

回避の直後、それこそコンマ単位の反応速度で、女海賊は即座にア  
ヴェンジャー目掛けて拳銃を乱射する。

流石に回避行動からの精密射撃は難しかったようだが、それでも攻  
撃としては十分だった。直撃こそしないが、何発かがアヴェンジャー  
の肌を掠めていく。

2発程は鎧が弾いてくれたが、鎧が無ければどうなっていた事か。  
想像に難くないだろう。

「アヴェンジャー!!」

「心配する暇があったら、敵に集中しなさい!!」

私の声も、彼女の怒鳴り声によってかき消される。いや、それは当  
然の反応だろう。

敵との戦闘中に、敵から注意を反らしてはいけない。その隙に殺さ  
れては、文句も言えないのだ。

私は意識を切り替える。初めて慎二と戦った時よりも、何故少しで  
も敵の動きが読めるようになったのか。

『目をよく見開いて思い知りなさい! 聖杯戦争において情報を得る  
と言う事が、どういう事かを!』

…ふと、先程のアヴェンジャーの言葉が脳裏を過ぎる。

そうか。私があのだのサーヴァントの手記を、敵の情報として端末に取  
り込んだから、私の意識と端末とが同調して彼女の動きを捉える手助  
けとなっているのか。

多分、そういう理屈なのだろう。現実なら、携帯端末と人間の意識  
が直結するなんてオーバーテクノロジーにも程があるが、ここは電子  
の海。

多少の無理や無茶も当たり前のように通るし、この月の世界におい

ては地上の常識も意味を為さないのだろう。

だけど、だ。

確かに僅かにだが、敵の動きを読めるようになってきたが、やはり完全とはいかない。ノーダメージでこの局面を切り抜けるのは、現状で不可能だと見た方がいい。

なら、ダメージ覚悟で攻撃を仕掛けるしかない！

幸い、私には鳳凰のマフラーがある。このマフラーに組み込まれたコードキャストは『heal(16)』。つまりサーヴァントの傷を少し回復させるものだ。

早速それを使い、先程アヴェンジャーが受けた銃撃による掠り傷を治す。

「マスター、治療は感謝しますが、あまり使いすぎないように。魔力にも限度はあるのよ」

せっかく回復したのにこの言い草だ。ホント、捻くれてるんだから……。

「……！ 来るよ!!」

と、のんびりと話している場合ではない。ゆらり、と余裕を持って佇む女海賊は笑っていた。

向こうも、ムーンセルからの妨害が入る前にケリをつけたいはず。

躊躇なく、殺す勢いで掛かってきても何らおかしくはないのだ。それをしないのは、敵としてみなされていけないという事か？

「回復かあ……。こいつあちよいと面倒だね。ようし、出し惜しみなしだ！ 宝具とまではいかないが、コイツを喰らいな!!」

突然、右手の拳銃を上空へと向けて発砲したと思ったら、彼女の背後の空間から、大砲の砲身らしきものが5本、宙に浮かんだ状態で現れる。

それが何を意味するか——

「!! アヴェンジャー、避けて!!」

「チイツ……!!」

指示を出したところで、回避はもはや遅かった。一斉に撃ち出された砲弾は、獲物を襲うだけでなく、アヴェンジャーの逃げ道すらも

奪ってしまおう。

どう動いたところで、どれかは直撃する事は必至。

なら、どうするか。

「斬れえ!!」

一瞬。それこそ、砲弾が発射されて一秒にも満たない間に、私は命令を口にしていった。

砲弾がアヴェンジャーに当たるであろう未来を予測して、それを回避するために。

「ツハ!!」

僅かにも満たない一瞬のやりとりだが、それでも私の意図はアヴェンジャーへと伝わった。

アヴェンジャーはエネミーからもぎ取った大鎌を現出させながら、その刀身にありつたけの黒炎を纏わせて、正面直撃するだろう一発の砲弾目掛けて鎌を振り下ろした。

ヒュン、という空を切る音すらも飲み込んで、鎌と砲弾がぶつかる轟音が周囲に鳴り響く。

焦げ臭い匂いと、金属の焼けた独特の匂いが辺りに充満する中、アヴェンジャーは立っていた。鎌を持っていた腕は全体的に紅く火傷をしたようになり、額のサークレットも衝撃で弾け飛んでしまったけれど。

でも、生きて立っている。大砲を撃たれて、それでも生きて立っていたのだ。

「な、馬鹿な……!?! 有り得ない、有り得ないだろおお!!?!」

見事に生還劇を果たしたアヴェンジャーに、今まで余裕で見っていた慎二も流石に取り乱さずにはいられなかったらしい。

驚愕に目を見開き、唾を飛ばして怒鳴り散らすその姿からは、焦りしか感じられない。

「ほーう……アレを耐えたかい。なかなかやるじゃないか」

マスターとは対照的に、女海賊の方は冷静にアヴェンジャーを見据えていた。宝具ではなくとも、大砲での一撃を凌いでみせた事に、素直に感心と敬服していたのである。

「お褒めに与り光荣ね。では、御礼参りと行きましようか!!」

ニヤリと邪悪な笑みを見せて、旗を天高く掲げたアヴェンジャー。その頭上で黒い槍が10本程形成され、一齐に女海賊へと向けて打ち出された。

「くっ……い！」

当然、アヴェンジャーの攻撃を避ける女海賊だが、それでも追尾性能を持つ黒槍は執拗に彼女を追いかける。

拳銃で何本かは撃ち落とせたものの、打ち損じた槍が獲物の肩へと襲い掛かった。

「ツツウー！ つたく、痛いじゃないか！」

肩に当たる直前で、どうにか掠らせる程度でかわした女海賊だったが、その傷は決して浅くはない。

彼女の肩を軽く抉った槍は霧散したが、残った槍が更に彼女へと襲い掛からんと飛来する。

が、やはり英霊。手負いでありながら、もう片方の拳銃で残った槍を全て撃ち落としてしまう。

そして、それと同時にアリーナ全体へと響き渡ったブザーのような警告音。ムーンセルからの戦闘禁止命令だ。

強制的に武装解除させられたアヴェンジャーと女海賊だが、両者共に傷を負った形だった。明らかに、前回とは違う結末だ。

「う、嘘だ……っ。この僕が、傷を受けるなんて……い！」

この結末に、慎二は信じられないとでも言わんばかりに、羞恥に顔を歪ませて、体を震わせていた。

「こ、この程度で調子に乗るなよ。セラフの監視もあるし、決着は本番まで取っておいてやる！」

噛んでこそいたが、強気なセリフを吐き捨てると、彼はサーヴァントと共にこの場から一瞬のうちに離脱した。

周囲にそれらしき気配は感じられない事から、どうやら撤退したようだ。

「実に小物らしい逃げ口上だったわね。そして、これで分かったでしょう、マスター」

尻尾を巻いて逃げていった慎二に、嘲り笑うアヴェンジャー。痛むであろう腕をだらんと脱力してぶら下げて、彼女は続きを口にする。「まず、あのサーヴァントに関わる書物が、航海日誌だった事。そして、先程、あのサーヴァントが見せた艦船の砲列——」

そうだ、乗り物に関わりがあり、それによって力を発揮するサーヴァント……。であれば、あれは間違いなく、ライダーだ。

これで彼女がアーチャーかもしれないという可能性は潰えた。敵のクラスが分かっただけでも、今回のアリーナ探索は儲けものだったと言えるだろう。

こちらも無事では済まなかったが、あちらにも手傷を負わせる事が出来た。私達の成長が実感出来た戦いだった。

「さて、優男が隠した本を手に入れるという、当初の目的は果たしました。奴らも撤退したようですし、もう、帰還しても問題ないでしょう」出来れば、日数に余裕を持って暗号鍵トリガーを取得しておきたいところだが、アヴェンジャーの傷は重いもの。今日のところは帰った方が良いでしょう。

私は端末から、昼食購入時に一緒に買っておいたリターンクリスタル……ゲームで言うところのダンジョン脱出アイテム……を取り出すと、ギョツと握り潰した。

パキン、と脆く崩れ去ったクリスタルの残骸から、小さな光が飛び出し、瞬く間に大きな光へと膨張すると、私達の全身を呑み込んだ。

眩い光に目を閉じて、しばらくして目を開けると、そこは——

「校舎に、戻ってる……？」

アリーナの入り口が、目の前にはあった。

初めてリターンクリスタルを使った訳だが、なるほど、こうなるのか。

これは便利だし、緊急時にもすぐに帰還出来るのは利点しかない。お手頃価格なので、常に一つは常備しておこう。

うん、帰りに購買に寄っておくか。

「なんでもいいけど、私が手負いである事を忘れないでよね？」

あつ。そうだった……。早くアヴェンジャーを休ませてやらない



と。

今日は本当によくやってくれたのだし、ご褒美として購買でも何か買ってあげよう。

今の私の実力では、傷を一回か二回治すのがやっと。アリーナではその程度しか回復させられないが、その点マイルームはサーヴァントへの回復効果も担っているのだろう、一晩休めば大概は完全回復してしまうのだから。

アヴェンジャーとしては早かマイルームで休みたいのだろう。

「すぐに買い物を済ませるから、アヴェンジャーは先にマイルームの前まで行って?」

「はいはい……早くしてよ?」

霊体化し、アヴェンジャーの気配が遠ざかっていく。さて、私も購買に向かうとするか。

手早く買い物済ませ、待っていたアヴェンジャーと共に、私はマイルームへと帰ってきた。

部屋に入るや否や、アヴェンジャーは早速甲冑を脱ぎ捨てるが、やはり腕が痛むのだろう、少し時間を掛けてようやく、並べた机の上に寝転んだ。

「ふう……、奴に一矢報いる事が出来たわね。あなたが情報を集めれば、それだけ私も存分に戦う事が出来るのです。しかし、それだけで勝てる相手でもないでしょう。あなた自身の鍛錬は怠らないように」  
確かに、今回は情報を得ていたおかげで、ライダーに反撃出来た。情報がどれほど重要なかを思い知らされた一日になったと言える。

だけど、アヴェンジャーの言うように、それだけでは慎二に勝てないだろう。事実、こちらと向こうでは、私達の方がダメージは大きいのだし。

これはエネミー狩りをより一層、励まないといけないな。魂の改竄

には、エネミーを倒して得られるリソースが必要になるし。  
「あ、そうだ。アヴェンジャー、今日頑張ってくれたご褒美。これ、あげるね」

私は端末から購買で買ったものを取り出した。

「……!! こ、これは、ちよつとお高いプレミアムロールケーキ……!!」

「ごくり、と寝転んだまま喉を鳴らす彼女に、私は嬉しくなってしまう。そんなに喜んでもらえたなら、買ってきた甲斐があるというものだ。」

「無駄遣い……と叱りたいところですが、まあ、今日は大目に見てあげましょう。あ、今私、利き手が動かないので、食べさせるのはよろしく」

「おつふ……あーんをしろ、だと……。人使いが荒いというか、マスタ―使いが荒いというか。」

まあ、それくらい今日の頑張りに免じて、お安い御用なだけけどね。

アヴェンジャーへのあーん、も終えて、私達は各々自由に過ごしていた。アヴェンジャーは寝転んだまま、片手で手に入れた鎌に何やら細工をしており……というか、砲弾を斬って刃こぼれ一つないとか、どんだけ頑丈なの……?」

私は私で、ゴロゴロ横になりながら、端末片手に今日の戦果——マトリクスについて確認していた。

今まで空欄になっていた敵の情報に、新たにクラス・ライダーと、キードである無敵艦隊の他に、航海日誌が追加されていた。

クラスが判明した事で、クラススキルである対魔力Dも明らかとなっっている。

早速、航海日誌の欄について見てみると、

『世界一周を成し遂げた、ある偉大な航海者の航海日誌。内容はところどころかすれて読めないが、著者である船長は冒険家にして私掠船艦長、そして艦隊司令官であるようだ』

——との記入があった。

この世界一周という点、これは彼女の正体について、真名を切り崩すヒントとなるキーワードだろう。

それだけでなく、功績もそうだが、肩書きが少し豪華過ぎるのも気になる。

読み取れるだけでも、海賊であり、冒険家でもあり、商人でもあり、拳げ句は艦隊司令官でもある……。

もしかしたら、私が見落としているだけで、彼女はとんでもなく有名な英霊なのではないか？

うーん、だけどまだ確信に至るには足りない。もっと情報を集める必要があるな。

「ふう……ん〜つと」

どうやらアヴェンジャーの方も一区切りついたらしく、だらしなく寝そべって伸びをしていた。

……本当に、その肉まんより大きいソレを、少しでいいから分けて欲しいです、ハイ。

「ん？ なに？ 私は寝るから、アンタもいいところで区切りがついたら寝なさい。じゃあ、おやすみ」

と、挨拶をおざなりに済ませて、アヴェンジャーはすぐに寝入ってしまう。

疲れていたのだろう、すんなり寝て……。疲れていたなら鎌を弄つてないで寝れば良かったのに。

「ふふっ……」

そういうところは、子どもっぽいと思う。普段は物騒な彼女だけど、こういういじらしい一面もあるから、不思議なものだ。

さあ、私もそろそろ休むとしよう。今日が終われば、決戦までもう残り二日。刻一刻と、着実にタイムリミットは近付いている。

それまでに、ライダーの正体と、アヴェンジャーの力を少しでも取り戻さなければ……。

そんな事を考えながら、私は眠りについたのだった。

暗躍？・する慎二。奔走するはくのん。

そして翌日。

もはやルーチンワークと化した、起床後にマイルームの隣教室へと脚を運ぶ事に、違和感を感じる事もなく、私は自席……といったも予選時の話だが、そこに腰掛けて朝食を摂っていた。

今朝のメニューは、

〃朝の焼きそばパン。冷えた紙パック牛乳を添えて〃

なんとなく、フランス料理店で日本語で書かれていそうな言い方をしたが、これは単なる見栄です。

実際はそんな高級な料理には遠く及ばない、質素な朝食。

いや、別に文句はないよ？　むしろ焼きそばパン最高。朝から濃厚なソースを絡めた焼きそばを、気軽に気楽にパンに挟んで食べられるなんて、ある意味贅沢じゃない？

だというのに、

『……毎朝毎朝、焼きそばパンばかり食べて飽きないとは、呆れたマスタ―ね』

などとのたまうアヴェンジャー。そんな彼女は朝は食べない派らしく、何かあるか、お昼までは霊体化しているとだけ告げて姿を消していた。

……焼きそばパンの魅力、いつか彼女にも伝えてやろう。それはもう、嫌と言う程に。泣いて謝っても、その口に次から次へと突っ込んでやるぜ☆

まあ、多分実行しようとした時点で、私が振り返りに合う未来なのだろうが。

朝食を終え、しばらく食休めをしていた私だったが、意図せずして周りの話し声が耳へと届いてくる。

どうやら慎二の事らしい。

「そういえば、朝早くから間桐が何かしてたな。自分の机んとこでゴソゴソと。あいつ、目立つから、行動がバレバレなんだよな」

「早朝も早朝だから、それこそ起きてるマスターもそこまで多くないけど、それでも、ね……。『ふふふ、これで……』とか言ってたけど。私、顔は良くてもあの自信過剰な性格、全然タイプじゃないわ」

男女二人組で会話しているマスター達。何やら慎二は、朝の早くから自席で何かをしていたらしい。

そんなに早い時間に……という事は、もしかしたら私に見られるのを避けたかったのだろうか？

そんな事を考えていた私に、少し離れた所から声が掛けられる。

「おっ。おはよう岸波！ いやあ、やっとトリガーが二本揃ったよ。岸波はどうだ？」

声の主、それはいつぞやのマスターだ。確か前にも、この教室で声を掛けられたのを覚えている。

その顔に、以前と変わらず、やはり何も思い出せないのだが……。

「ううん。私はまだ一本だけ……」

「…そうか、相手があの慎二だもんな。大変だな、お前も」

私の返事に、少しの同情を示す彼。やっぱり、慎二が対戦相手というのは、他のマスターからしても手強いという事なのだろう。

確かに、強気な発言の多い割に詰めの甘い慎二だが、彼のサーヴァントは一級品のように見受けられたし。

そして慎二自身も、ゲームチャンプという肩書きを持つ事から、決して侮つていい相手ではないのは確実だ。

「ま、元気出せよ！ 気分が滅入ったら、調子も出ないしき。それじゃあな。俺はアリーナにでも行って、鍛えてくるよ」

パンパン、と私の肩を軽く叩き、気合いを入れようとしたのだろう彼は、爽やかな笑顔と共に教室から出て行った。

気の良いマスターだなあ……などと感じてしまう私は、もしかして場違いなのかも。普通のマスターなら、何か裏があるのではと勘ぐるのが自然だろうし。

『マスター、アリーナに行く前に、校内を探索してみましようか。あの

ワカメ野郎が何か小細工をしたのは確実にしようし。もしかしたら何か手掛かりが掴めるかもしれません』

霊体化したままのアヴェンジャーが、アドバイスを出してくる。先程の二人組の会話を、彼女も聞いていたのだろう。

うん、それに賛成だ。もし罫でも仕掛けられていたら、情報も無しにアリーナへ出向くのは危険だし、少しでも探っておくのが得策か。予選の記憶を頼りに、一応、慎二の席も調べておく。まあ、いくら慎二でも流石に証拠を残しているはずもなく、神経質な慎二らしく、机の周りは綺麗に整頓されている。

ここに手掛かりを期待するのは無駄のようだ。

調べるものは調べたし、校内を見て回るとしよう。もしかしたら、慎二本人に遭遇するか、もしくは彼の犯行現場を目撃した証人が見つかるかもしれない。

さて、色々と聞いて回った私だが、とりあえず上から順に階を絞つつ聞き込んでみた結果、やはり何人かは慎二の姿を目撃していた。残念ながら、最も取れるであろう情報源の慎二本人には、遭遇どころか影すら掴めなかったが。

ここで、私が集めた話をいくつかピックアップしてみよう。

……ピックアップと聞くと頭が妙に痛くなるが、きつと気のせいに違いない。

『なんか、また慎二がバタバタ走り回ってたぜ。忙しい奴だな、あいつも……』

『慎二も忙しい奴だな。昨日もそうだけど、今日もあちこち走り回ってたぜ』

『間桐くんも必死みたいね。セラフへの介入なんて出来っこないのに、アリーナにあんな細工をするなんて。あの子、あれがセラフにバレたら、相当なペナルティがあるわよ』

とりあえず、ここまでが二、三階で得た情報。少し気になる事を言っていたな。アリーナへの細工がどうか……。

そして、私は一階にて、もつと確信に迫る話を聞く事に成功した。

「間桐君？ 彼ならさつき、保健室の方で何かしてたけど」

「ああ、俺も見た見た。慎二の奴、保健室のところで何してたんだ？

あんなに慌てて……」

最初の方は慎二の目撃証言も、かなり時間が経っていたものだったが、これは鮮度がまるで違う。

ついさつき、つまり慎二が来てまださほど時間が経っていないという事だ。慌てていたという事は、もしかすると何かしらの痕跡が残っているかもしれない。

そうと決まればいざ、保健室へ！ 別に、桃色な展開を期待してな  
どおりません!!

「……え？ 間桐慎二さんがどうかしました？」

キョトンとしながら、目をパチクリさせて問い返してくるのは、保健室の彼女と名高い、健康管理AI兼支給品担当の間桐桜だ。

予選では慎二の妹という配役を与えられていた彼女だが、どうやら慎二が何をしていたかどころか、慎二の姿をまず見ていないらしいかった。

なんと、慎二は保健室に入っていなかった！

となれば、彼は一体何をしていたのだろうか？

「えつと、岸波さん。せつかくですし、良かったらお茶でも飲んでいきませんか？ 皆さん、一回戦が始まって最初の日しか来てくれなくて……」

いじらしく、どんどん語尾が小さくなっていく桜。ふーむ……凜や他のマスターを見ていて分かったのだが、魔術師とは他人にけっこうドライなところが多いらしく、保健室にも支給品を貰ったら、『はい、サヨウナラ』と寄り付かないらしいのだ。

そんな事もあり、初日こそ忙しい桜は、翌日以降、まるつきり暇に

なるという算段らしい。

こうして、私のように毎日でなくとも、たまにでも足繁く通っているマスターは、私の他には居ないと、この前来た時に聞いた。

それを知っていた私は、あまりにも桜が不憫に思えて仕方なくなる。どうせ慎二がアリーナに何かしたというのは分かったし、昼までは桜に付き合う事にしよう。

「……いー ありがとうございます。……センパイ」

お礼の後に何か言ったらしいが、声が小さすぎて聞き取れなかった。でも、たいした事でもないだろう。

今だけは、聖杯戦争の事も、慎二の仕掛けた罠についても忘れよう。たまには、聖杯戦争抜きに私情を挟んでも、罰は当たらないと信じて。『まったく……マスターらしくないマスターね、本当に』

少しの楽しい時間を過ごし、私は保健室を後にした。さあ、ここからは気持ちを切り替えて、慎二が何をしたのかを突き止めるか。

いや、突き止めようにも、近くで見ている者でさえ、慎二が何をしていたのかは分からなかったのだし、諦めて素直にアリーナで罠に對峙した方が良くかもしれない。

何も知らずに向かうのではなく、あらかじめ「何かが」あると踏んでいけば、多少はマシだろう。

既に保健室で昼食も済ませている。アヴェンジャーは嫌々といった風に現界して昼食を摂っていたが、ともあれ保健室からアリーナ入り口へと直行した私達。

そこで、慎二が施した細工が何かを知る事となる。

「んにゃ!?!」

アリーナに入ろうとした瞬間、何かにつぶかったような感触を覚え、体が弾き返された。どうやら、目の前に見えない壁があるようだ。「チツ。空間に何か細工したようですね。こんな事をする輩は一人しかいないでしょう」



……もしかしくなくても慎二しかないな、うん。

「やあ」

と、機を見計らったように後ろから声を掛けられる。この声、今しがた噂になった慎二だな。

「アリーナでの強化に、精を出してるみたいだね。悪いけどさ、この辺りにちよつと、細工をさせてもらったよ。岸波みたいなレベルの低いマスターにアリーナで出会うと、イジメになるからね。これは僕なりの優しさなんだ」

勝ち誇った顔で、私を果てしなく見下した台詞を口にする慎二。私とて、言われっぱなしでカチンとくるものがあつたが、更に私よりも沸点の低いアヴェンジャーは、流石に口を出さずにはいられなかつたらしい。

「よく言えたものです。昨日、私達に反撃された分際で、どの口が吠えますか？ サーフアントの力を自分の力と同視し、勘違いする愚かな魔術師。そもそも、小細工を仕掛けてくる癖に……ああ、なるほど。昨日の戦闘で、私達に負けるのが怖くなつたのね。情けないつたらありません」

「……つぐ、ぐぐ」

高慢にも程があるアヴェンジャーの態度だったが、慎二には思いの外、重くのしかかるものだったようで、一気に悔しそうに顔を歪めてしまう。

「う、うるさい！ そんなんじゃないさ！ た、ただこれも戦略の内に過ぎないんだよ！ でも、そうだな。どうしてもアリーナに入りたいなら、二個……こ、この学園に隠した僕の魔法陣アエンテナを探せばあ？ ただし、アリーナに入ってきたら、今度は全力で君を潰すからね。覚悟が出来てるなら入ってくればいいよ」

アヴェンジャーに凶星を突かれた上に、言い負かされたというのに上から目線の姿勢を崩さないどころか、開き直っている節も見られた慎二。

凶太いのか打たれ弱いのか、一体どっちなんだ……。

「じゃあね。魔法陣アエンテナの場所？ はは、それは自分で見つけなくっちゃ

！」

言いたいだけ言うと、彼はさつきと場を後にした。これ以上、アヴェンジャーに何か言われなくなかったのかもしれない。歩調が足早だったのが、それを裏付けていた。

「くっ……今この場で、ワカメを炙り焼きたいところですが、規約<sup>ルール</sup>上、そうもいきませんね」

かなり悔しそうに、犬歯を剥き出しに威嚇するアヴェンジャー。苛立ちに鋭い睨みのまま、彼女はアリーナの扉へと視線を移し、細工の観察を開始する。

「——見たところ、これはアリーナの入り口を施錠したのではなく、周囲の数值を歪める事で、この場所を塞いでいるようですね」

うーん……、つまり、どういう事？

「要は、周りに川を作って、ここに水を流し込んでいるようなものです。さて、面倒な事この上ないですが、仕方ありません。マスター、あのワカメが魔法陣を設置したと思われる場所を探し、歪みを直すのです。先程のワカメの言葉の通りなら、その場所は二カ所でしょうね」なるほど。慎二が仕掛けを施したと思われる場所を探せ……と。

……ん？ いや、なんというか、その……心当たりありませんけど。

はい。ありましたよ、保健室の扉にそれらしきモノが。なるほど、確かに桜が気付かない訳だ。

というのも、この魔法陣———というか御札なのだが、肉眼で見つける事が難しい代物で、道理で他のマスターも慎二が何をしているのか分からなかったのだろう。

私とて、さつきここに来た時はまるで気付かなかったし。

ちなみに、私がこれを見つけたのはコレ、『聖者のモノクル』のおかげだ。

アリーナでコードスキルの媒体に使えば、エネミーの情報を知る事が出来るのだが、実はコレには他にも能力が備わっている。

端末を通してではなく、直接身に着ける事により、モノクルを通して見た視界には不正や隠匿、秘匿行為が浮き彫りとなるらしいのだ。四苦八苦して探している時に、ふと脳裏に浮かんだ『誠のメガネ』という単語をヒントに、この聖者のモノクルの隠された力を知る事になったのである。

いやはや、やってて良かった『エ○ヤの伝説』。たまたま購買で格安で見つけたゲームだったが、まさかこんな風に役立つとは。

ちなみに、『エ○ヤの伝説』というゲームは、シリーズも数多く出ており、私がプレイしたのは主人公が少年期と青年期を行き来するもので、サブタイが『時のフライパン』。少年期は普通の少年なのに何故か青年期になると褐色の肌に白い髪を持つハードボイルドになるという、主人公が不思議な変身を遂げるのが有名だ。

おっと。脱線してしまったようだ。

とにかく、私は慎二の仕掛けた御札を剥がすと、そのままクシャリと握り潰した。これで、残るはあと一つ。

そして、その場所は――。

教室でした。うん、捻りが無さすぎて、少々リアクションに困る。

保健室の時と同じく、聖者のモノクルを通してのみ見える御札が、慎二の机のど真ん中に貼り付けてあった。ふむ、机で何やらしていたというのは、これの事だったのだろう。

御札を剥がし、今度はビリビリに破り捨てる。これで、アリーナの扉の結界も崩れたはずだ。

『これで二つ、ね。さあ、下らない遊びはここまでです。さっさとアリーナへ行きましょうか。私を煩わせた事、たっぷりと後悔させてやるわ』

おおぅ……復讐する気満々ですね、アヴェンジャーさん。いや、頼りになるんだけど、ブレーキ掛ける私の身にもなってね？

満を持して、私はアリーナへの扉前へと戻ってくる。すると、そこ

には、

「ちっ……意外と早かったじゃないか」

待ち構えるように立っている慎二の姿があった。しかし、何やらさつきとは様子が違うような……？」

「これじゃあアイツもあんまりお宝を取れてない可能性が……」

ブツブツと何かを呟きながら、慎二はアリーナへと姿を消した。アイツ……というと、ライダーの事だろうか？

お宝、となればライダーは海賊のようだし、アリーナで宝探しでもさせていたのか？

ここで頭を悩ませていても仕方がない。私もアリーナへと向かうとしよう。仕掛けは結界の事だったんだろうし、多分他に罫はもうないはずだ。

『うふふふ……私専用チューニングに調整した鎌の切れ味、早速試せそうで楽しみね』

ああ……霊体化しているのに、舌なめずりして鎌に頬ずりしている様が目に浮かぶ。

別に気合い十分なのは良い事だが、出来れば深追いだけはしないように、私が注意して手綱を引かないといけないな。

アリーナ内に入った私達だが、入り口から慎二と鉢合わせるといいう事もなく、とりあえず私達は昨日行けたところまで行った。そして、閉じていたゲートの前まで辿り着いたところで、ある事に気がつく。

「あ……スイッチ、押してない……」

フエンスゲートは閉ざされたままになっていたのだ。

そう。昨日、あの沈没船でスイッチにアイテムフォルダを見つけた私達だったが、先にフォルダ開封してすぐに、あの甲高いアラームが鳴り響いたために、スイッチを押すのを忘れていたのである。

「意気揚々と来てみればこのざま……あなた、たまに抜けてる時があるわよね」

ぬぐぐ……。アヴェンジャーだって、分かってたならあの時教えてくれたら良かったじゃん！

それをしないって事はつまり、自分だって気付いてなかったくせに！！

「な……。!? ベ、別に？ そんなの分かってましたとも！ あ、あれは、あなたを試すためだったのよ。マスターとしての洞察力に観察眼がいかにほどのものかを見るためにね！」

そんなの、それこそ言い訳じゃないか。ずるい、後からなら何でも言えるもんね！

それによく思い返してみれば、あの時のアヴェンジャーって、エネミーから鎌を奪い取って気分上々だった。浮かれてスイッチの事も忘れてたに違いない！

「うぐ……。要らない事ばかり覚えてんじやないわよ！ ああもう！ 分かったわよ、分かりました、分かりましたとも！ 私も気付いてなかった、だからおあいこよ。それでいいでしょう、もう……」

いや、おあいこというか、そもそもアヴェンジャーの方が先に私を——と、いや、もう言うまい。

こんな口喧嘩をしても不毛なだけだ。こうしている間にも、慎二達が襲ってくるかもしれないのに、仲違いしている場合じゃないだろう。

「なんか、ごめんねアヴェンジャー。今度から気をつけるね」

「……そう。まあ、あなたの洞察力はさっきの結界破りでよく分かりましたし、今度からは私も気をつけるとしましょう」

なんとなく、喧嘩はしたけど、少しだけアヴェンジャーと仲良くなれたような気がした。

……気がした、ではなく、「仲良くなった」とハッキリ言えたら良いのになあ。

喧嘩を終えた私達は、早速スイッチを押しにもう片方の分かれ道に向かう。

あと、言い忘れていたが、実はここに来るまでに既に何体かのエネ

ミーを倒している。もちろん、エネミーから奪った鎌で。

アヴェンジャーにより、アヴェンジャーお手製の特注鎌へと変貌を遂げた鎌は、柄の部分が彼女の持つ旗の柄と同じくらいの長さへと加工され、デザインも、刃の箇所には炎をイメージした意匠が凝らされている。

正直、すごくカッコイイです。

そして、恐ろしい事にアヴェンジャーは元々の武器でなかったにも関わらず、器用に鎌でエネミーのことごとくを切り裂いていった。それは今までの戦いぶりよりも苛烈で、サクサクエネミーを刈り取る様はまるで、本物の死神の如し。

なぜ、そんなに鎌の扱いが上手いのか聞いてみたところ、彼女曰わく、

「私の知り合いに、ランサーなのに鎌使いの英霊が居るのですが、その見様見真似ですよ」

という事らしい。

いや、ツツコミどころ満載だが、見様見真似で出来てしまうアヴェンジャーもどうなんだ……？

と、意見を述べたのだが……、

「ふん。こう見えて、私は模倣する事に一日の長がありますから。たいていの事は、ある程度訓練すれば修得など容易いものです」

才女、ここに見たれり。こういうのを、天才肌っていうんだろうな。見ただけで——いや、アヴェンジャーの場合、まず見て、それを模倣という形で訓練してる訳だから、天才に違いないが、彼女の場合は『努力の天才』なのだろう。

そうでなければ、模倣なんてまずしない。足りないものがあるからこそ、誰かの技術を真似する必要があったのだ。

アヴェンジャーはそういう点においては、人一倍得意だった、そういう事である。

ともかく、私達はスイッチを押して、ゲートの所にまで戻ってきた。気になるというか、心配なのは、ここまで慎二に遭遇しなかった事か。どうやってか、このゲートの先に進んでいたのかもしれない。

もしそうなら、この先に十中八九、慎二とそのサーヴァントである  
女海賊、ライダーが居るだろう。

警戒して進もう。昨日の一件で、向こうはもう油断も容赦もなく、  
本気で潰しに掛かってくるはず。

決戦まであと二日。ここで倒される訳にはいかない――。

## 決戦場への片道切符

奥へ、奥へ、奥へ。私達はアリーナを突き進む。

何度かのエネミーとの戦闘もあったが、未だ慎二に鉢合わせる事はなく、今のところは入り組んでもいないアリーナを、下へ下へと降りていく。

どんどん海の底へと下っていくようで、心は寒さを感じ始めている。元々、深海なんて人間が生きる世界ではないのだから、そう感じるのも当然の事かもしれない。

だけど、孤独ではない。私には、アヴェンジャーが居る。

私の隣で、共に歩いてくれている。だから、私は深海へ降りて行っても平気だ。一人じゃないという事が、こんなにも心強いなんて、なんだか不思議な気分ではあるが。

「うーん……それにしても、何故に？」

進んでいるうちに、私達はレアアイテムフォルダを見つけたのだが、その中身というのが――

「みかん、ね」

アヴェンジャーはアイテムフォルダから出て来たみかんを、片手で頭上に翳して眺め回している。

そう、何の変哲もないみかん。漢字で書くと『蜜柑』。ジャパニーズ・コタツの相棒としても海外に広く知られているであろう、その冬のおこた仲間が、何故か、こんなアリーナで、しかも海底で現れたのである。

それを疑問に思わないのは、人としてズレているに違いない。

「みかん。果てしなくみかん。どこからどう見てもみかん。もしか、と思うもやっぱりみかん。……焼いて食べたら美味しいかしら？」



いや、串焼きの準備は止めてねアヴェンジャー？

確か、タイガーがみかんがどうのこうの言っていた気がするし、多分これの事だろう。

それにしても、分からない。何故、アリーナのこんな奥地でみかん？ まさかタイガー、アリーナに何か良からぬ事でもして、みかんを発生させたのだろうか。

……それはないか。だって、あのタイガーだし。だって彼女はどうかしようもない善人だもの。周囲を巻き込む台風のような人物ではあるが、それと同じくらい他人の為に動けるのが、藤村大河という人物なのだ。

たとえば、悪性の神に取り憑かれようとも、その根本が塗り替えられる事はないだろう。

まあ、多少は人格に今以上に更なる異常が生じるかもしれないが……ま、まあ、大差はないはずだ。うん、私の勘がそう告げている。

私の勘は三割当たる!! ……………多分。

「またおバカなコトを言つて……。はい、コレ。さつさと仕舞いなさいな」

アヴェンジャーが手に持ったみかんを投げて寄越す。

おっと、危ない危ない。上手くキャッチ出来た。

私はポケットから端末を取り出して、受け取ったみかんを端末へと転送する。

むう……タイガーがどうしても必要としているという事は、このみかん……もしかして、何か特別な代物だったり？

そう思い、アイテムの項目から確認してみるが、どうという事は無い、『ごく普通の温州みかん』でした、ハイ。

いや、温州のみかんという辺り、こだわりがあるのかもしれないが……何故、こんな月の、それも電子の海に……？

全くもって、謎は尽きぬ限りである。

更に奥へ進み、またしてもレアアイテムフォルダを発見した私達。

私は早速、そこへと駆け寄ると、アイテムフォルダへと手を伸ばす。すると、中から出て来たのは、小振りの短刀だった。少し古ぼけており、それがより味を出しているように見受けられる。

「あら、今度は礼装ですか。私のマスターにしては、案外ツイてるわね」

グイツと私の肩から顔を覗かせるアヴェンジャー。あの：色々と当たってます……。

そんな事は気にも留めず、アヴェンジャーは私の手から短刀をヒョイと奪い取ると、ジロジロと品定めするように眺め回し始める。

「……………、ふーん」

あらかた見終えたのか、途端に興味を無くした彼女は、短刀を元の私の手の中へと返却すると、溜め息混じりに言う。

「ゴードキャストは、まあいいでしょう。それなりに有用なものだと思わ。でも、私の好みじゃないわね、ソレ。見た目もボロツちいしま、そのくらいがマスターにはお似合いかもだけど」

……。ハッ！ 今、そこはかとなくバカにされた!? いや、むしろおおつぴらにバカにしたよね!?

なんて失礼なサーヴァントなの！ マスターの顔が見てみたいわ!!

……私だった。

「ともかくとして、あのモノクルで端末越しに装備しなくても、マスターが直接身に付けても礼装は使えると分かったのだし、それは護身にでも腰に提げておきなさい」

それは確かに、一理ある。エネミーはともかく、敵マスターやサーヴァントと遭遇した時、私の身が必ずしも安全とは言い切れない。

不意打ちや騙し討ち、マスターを狙った攻撃が可能性として無いと否定しきれないのもまた事実。

無いと断定出来ない以上は、少しでも身を守れる手段は持つておいて損はない。

「見たところ、それには破魔の効果も少しは見られるようですし、サーヴァントはともかく、敵マスターからのスキルには対抗手段として申

し分ないはず。ホント、良い拾い物したわよ」

うん。と肯定を返し、私は短刀——『守り刀』を腰に提げようとする。

しかし、ここで重要な欠陥に気がつく。

「腰から提げられない……だと……!?!」

そうなのだ。私はSAMURAIでもなければ、NOMINでもない。どこにでもいる普通の可愛い女子高生なのである。

故に、腰帯なんてスカートに付いてないし、ベルトを通す箇所さえない。だってそういう制服だもの!

どうしよう……まさかパンテゲフンゴホン! 下着に仕込んで「仕込み刀です。なんちて☆」などとふざけた真似も出来るはずもなく……。

どうしたものかと頭を抱える私の耳に、ジャラリ、という金属音が聞こえてくる。というか、これは——鎖の音?

「そんな事だろうと思ったわよ、まったく……。ほら、コレあげるから使いなさい」

振り返ると、アヴェンジャーが自らの甲冑に付いていた鎖の一部を引きちぎり、私へと差し出していた。

「え……いい、の?」

「いいわよ、別に。減るもんでもなし、どうせマイルームに戻れば再生出来るんだし。ほら、ちよつとジツとしてなさい? 付けてあげるから」

と言つて、アヴェンジャーは私から短刀をひったくると、鎖と短刀の鞘を外れないように固定し、余った鎖の部分で私の腰に一周させる形で装着させる。

「どう? 密着させすぎると肌を傷つけるから、少し余裕を持たせて尚且つ腰からずり落ちない程度にしたけど」

えっと、地肌 напрямую じゃない分、そこまで痛くないし問題ないです。長時間だと流石に擦れて痛いかもだけど……。アリーナの探索くらいなら問題ないかな?

「あつそ。ならいいわ。今は即席だけど、今度からは自分で装着出来

るように。後で加工しといてあげましょう」

「なんだかんだと、優しいところのあるアヴェンジャーさん。やだ、すぐく姉御肌……!」

「ッ!!? な、なんかすごい鳥肌が立ったんですけど!! アンタ、今何か変な事を考えたんじゃないでしょうね?」

「思ってませんとも。ええ、これっぽっちも、そんな変な事なんて考えてませんよ?」

私を疑いの目で見ていたアヴェンジャーだったが、再び溜め息をつくと、私から顔を反らしてしまう。ちよつと機嫌が悪くなつたみたいだ。

「そうこうしているうちに、彼女は私を置いて先へ進んで行こうとする。私も、慌ててその後を追って走り出す。」

「いやあ、それにしてもアヴェンジャーをからかうのって、後が怖いけど面白いなく。」

そして、ゴールは案外あっさりと到着した。

礼装を入手して僅かな距離に、帰還用のポータルが設置されていたのだ。

無論、ポータルの前には道を塞ぐようにあの鎌の生えたエネミーが配置されていたのだが、アヴェンジャーに掛ければ何のその。

彼らは仲間の鎌で作られた、アヴェンジャーお手製の煉獄の鎌で、瞬く間にその命を刈り取られていった。

「ふう……辺りにエネミーの気配は無し。一息つけますね」

鎌を消し、旗を杖代わりに体重を掛けて休むアヴェンジャー。一休みする彼女を横目に、私はポータルへと続く通路、更にそこへと至るまでに存在する分かれ道へと足を運ぶ。

その先には、緑色をしたアイテムフォルダが鎮座している。そう――

「二つ目の、暗号鍵……」

昨日は取り損ねたが、ようやく決戦へと赴く鍵が手に入る。これさ

え取ってしまったえば、ひとまずは安心だ。

これで、問答無用で決戦当日に不戦敗、なんて事はなくなったのだから。

「……」

私は自然と唾を飲み、手に汗を握っていた。

アレを取れば、私は決戦の地へと誘われる。マスターとマスター。そのサーヴァントとサーヴァントが雌雄を決し、命を奪い合う、正真正銘の戦場へと。

否、言葉を濁すまでもない。間違いなく、そこは死地であろう。そう、私は、殺し合いに向かおうとしているのだ。

それは自分の意思とは関係無く、否応無く、参加を余儀無くされた私に残された一方通行の道。

私が生き残るために示された、たった一筋の道だ。

私は、この道を歩むしかない。そうしなければ、生き残る事は出来ない。そうでなければ、生きると決めた私に手を差し伸べてくれたアヴェンジャーに申し訳が立たないから。

意を決し、私は足を踏み出す。トリガーが全て揃えば、もう後戻りは出来ないだろう。戦いへと向けて進むしかない。

それでも、私はトリガーを手に入れよう。前へと進もう。

まだ、この先に何が、その果てに何があるのかは分からない。けれど、ただ“生きる”為に歩き続けよう。

それしか、ないのだから。

そして、私はアイテムフォルダに手を触れた。光と共に、中から現れたのは『トリガーコードベータ』。

トリガーは私の手に触れると同時に、端末へとデータの波となって吸い込まれていった。

これでトリガーは揃った。後は、決戦の日に向けて、少しでもアヴェンジャーの力を取り戻す。それと、ライダーの真名を突き止めねば……。

「あら、どうやらトリガーは揃ったようね」

私が戻ると、なんとも呑気に座って出迎えるアヴェンジャーの姿が。

私の先程の決意の時間を返してくれ、と言いたくなるのを何とか堪え、彼女の元へと歩み寄る。

彼女がこうして呑気に座れているという事は、この辺り一帯は今、彼女視点では安全地帯という事になる。

「ライダーの気配は？」

「無い。というか、ここに来るまでに一切の気配を感じなかったわ。多分、私達がここまで来る前に帰還しているでしょう」

舌打ちと共に、吐き捨てるように述べるアヴェンジャー。彼女からしてみれば、ライダーへの雪辱はまだ晴らし切っていないのだろう。

だからこそ、今回慎二達に遭遇出来なかった事に苛立ち、同時にやる気も失せて座り込んでいたらしい。

「トリガーも揃った事だし、これだけは言っておきます」

と、だらしなく座ったままの姿勢で、気怠げに言葉を紡ぐアヴェンジャー。一体何を……？

「いい？ トリガーは死地への片道切符。一度乗ってしまえば、降りる事は決して許されない、死の列車のね。行き先はあの世か、それとも次の戦場か、二つに一つ。勝って生き残った方が、また次の死地へと進むのです」

「……、」

「そして、それは相手にとっても同じ事。だから、死に物狂いで抗いなさい、マスター。あなたはこの月の聖杯戦争において、最弱のマスター。故にこそ、誰よりも醜く、生き汚く、足掻きなさい。それはあなただけに赦された特権です。最初から何も持たざるあなただからこそ、誰よりも油断なく、慢心なく、生にしがみつけるのだから」

それは、私を肯定する言葉だった。

持っていないからこそ／醜く抗っている。

弱いからこそ／生き汚くもがいている。

私はどんなに無様であっても、足掻いてもいい、と。そう、彼女は告げていたのである。

——だからこそ。そんなあなただったからこそ、私はあなたをマスターに選んだのだから。

「さて、と。エネミーもほとんど刈り尽くしてしまったようだし、あのワカメと海賊の海鮮主従も居ないようだし、そろそろ帰りましょうか。帰ってから一仕事ある訳だしね、ソレの」

顎で私の腰辺りを指すアヴェンジャー。ああ、鎖の簡易ベルトの事か。

意外にも器用な一面もあるアヴェンジャー。本当に復讐者なのかと疑いたくなる職人スキルだが、あえてツツコまないぞ、私は。

ただでさえ悪い機嫌を、ここで更に悪化させれば、へそを曲げてベルトの加工をしてくれないかもだし。

なんとなく、アヴェンジャーの扱いにも慣れてきた私、偉い。多分このサーヴァントと上手く付き合えるマスターは、世界中を探してもそうそう居ないと思うし。

彼女の性質からして、一流のマスターはまず彼女の在り方を受け付けない。だって、彼女はあまりにも不確定要素で満ちている。

気まぐれで気分屋。負けず嫌いな上に短気。マスターにすら喧嘩腰で、アヴェンジャーという謎多き特殊クラスときた。

一流のマスターなら、契約の時点で拒絶を示すだろう。彼女はそれだけ、異質な存在なのだ。それはきつと、サーヴァントとして、英霊としても同じ事が言えるはず。

彼女と契約出来るとするなら、それは普通のマスターではないに違いない。それこそ、人並み外れた寛容さを持っているか、私のように生きる為には手段を問えなかった者……みたいな。

いや、別にアヴェンジャーと契約したのが失敗だったとは思わない。だってああ見えて、年相応の女の子らしさも持ってるし、一緒に居て何より飽きないし楽しい。

……ああ、どうやら私も絆ほだされ始めているらしい。アヴェンジャーという、本当の名前も分からぬ少女を、友達のように感じ始めている

のだから。

ポータルから帰還を果たした私達は、購買で夕食を買ってからマイルームへと戻ってきた。

アヴェンジャーは何やら、購買で私からせしめたお小遣いを使い買っていた。手元がゴチャゴチャしていたので、加工に必要な素材だろうか。

「帰ってきたわね。さて……」

これまた、ポポポイ、という音でも聞こえそうな気がするくらい、甲冑やガントレットを華麗に脱ぎ捨てていくアヴェンジャー。

いや、いくらなんでも早すぎだろう。

「腹ごしらえ前に、ちやちやつと済ませるから、ちよつとこっちに来てくれる?」

「あ、うん」

ちよいちよい、と私を手招きするアヴェンジャーに、私は二つ返事で了解すると、彼女の側まで近寄る。

「あのワカメも、あなたを警戒し始めたようね」

ガチャガチャという鎖の音を鳴らして、世間話でもするような気軽さで語りかけてくるアヴェンジャー。

作業しながらでも、会話くらいは普通にこなせるらしい。

「トリガーは解決したとして、あとは私達自身のレベルアップね。泣いても笑っても、後一日しか猶予期間は残っていません。明日は悔いの無いように、準備を怠らない事ね」

そうか……。もう、明日が最後の一日なんだ。

明日を過ぎれば、後はもう慎二と戦うだけ。逆を言えば、明日が過ぎてしまえば、慎二と戦わなくてはならない。そして、私達は決定的に情報に欠けている。

クラスは分かった。世界的に有名な海賊であるという事も分かっ



ている。

「だけど、その真名が分からない。彼女がどこの誰で、いつの時代を生きた英雄なのか。どんな逸話を持っていて、どんな伝説が語られているのか。」

「それが、解らない。解明出来ないでいた。」

「明日が最後というなら、それがラストチャンス。明日、彼女の真名に至る情報を得られなければ、万全とは言えないままに決戦へ臨む事となる。」

「それだけは避けたい。聖杯戦争での情報が如何に重要か、昨日の戦鬪で嫌という程に思い知っていたのだから。」

「少しのデータ開示だけで、あの効果だ。決戦へと挑むに当たり、最弱のマスターである私には敵サーヴァントの真名を掴むのは勝利への最低絶対条件だろう。」

「私個人のスキルで補える程、慎二は弱くないし、これから先の聖杯戦争でも、それは変わらない事実。」

「そうだね……。試験はクリアした。後は情報収集と、私達自身を鍛える事。それに専念しよう」

「分かっているなら、それでいいわ。…もうちょいで……」

「私が考え事をしている間にも、作業は進んでいたようで、

「ん……。行けた！」

「ガチャリ、と一際大きな金属音がして、私の腰から鎖のベルトが取り外される。それにより、少し開放感を得た私は、軽く体を伸ばす。」

「これは私が加工しておきますから。まあ明日には出来上がってるでしょう。ありがたく思うコトね？」

「そう言うや、アヴェンジャーは私から取り外した簡易ベルトと、購買で買ったカッププラーメン片手に、いつの間にか彼女の専用スペースとなっていた窓際で、作業と食事の両方を器用に開始した。」

「ちなみに、ポットなんて便利なモノはマイルームにはないので、保健室で桜に湯沸かし器を借りました。」

「便利だよ、保健室。むしろ、あそこに住みたいレベルで色々揃っているので、保健室をマイルームにしてしまいたい程である。そうす

れば、桜も喜んでくれそうな気もするが、それは出来ない話なので諦めるとするか。

私も夕食に買った焼きそばパンにかぶりつく。そこ、「いつも焼きそばパン食べてない？」とか言わない。

今日は他にもカレーパンを買ったのだ！

種類が一つ増えただけで、ちよつと豪勢になった気がする私って、貧乏性なのだろうか……。

まあ、とにもかくにも、明日だ。明日次第で、私達の運命は大きく左右される事は間違いないだろう。

明日、どんなに小さな情報でもいいから、少しでも彼女の正体ライダーに近付ける何かを得られれば良いのだが……。

そんな事を思いながら、私は焼きそばパンを食べ進めるのだった。

あ、タイガーにもみかんを渡さないと。

## 猶予期間最終日、突入――

新しい朝を迎え、私は「んゝつ」と身体を伸ばして目覚めた。

どうやら知らぬ間に寝てしまっていたらしく、そういえばアヴェンジャーは……と、横を向いたところで気がついた。

私の寝ていたすぐ隣に、昨日アヴェンジャーが急拵えしたものは少し違った、きちんと整備の行き届いたチエーンベルトがちよこんと鎮座していたのだ。

次に、私はその作者であるアヴェンジャーの姿を探して、彼女の専用スペースへと目を向けると、

「……すう」

静かに寝息を立てて、横になっている彼女が居た。

多分、夜通しで昨日は作業に当たっていたのだろう。私に、「明日までには出来る」と言ってしまった手前、完徹で完成と決め込んだらしい。

手先は器用だけど、そういうところは不器用だなあ、なんて思ってみたり。

寝ているアヴェンジャーを起こすのも悪いので、私はこっそりと部屋を後にする。一仕事終わってくれたのだから、労いの意味も込めて、朝食の買い出しにでも行くとしよう。

「……?」

購買へ来てみると、そこには何故か一成と桜、そして言峰神父の姿があった。それにしても、不思議というか珍しいというか、とにかく変わった組み合わせだな。

「あ、岸波さん」

「ん? おお、岸波ではないか」

と、どうやら桜が私が来た事に気付いたらしく、他の二人も私へと

視線を向けてくる。

運営に携わるA Iの三人がこんな朝から揃っているのだ。私は何かあったのかと疑問に思い、彼らに問うてみる。

「何か問題でも？」

「問題……という程の事でもないのだがね。購買のデータに軽い異常が見られたのだよ」

言峰神父にしては珍しく、困ったように——本当にほんのわずかだが、顔をしかめて私の問いに答える。

「うむ。何故か、購買に『あんみつ』が入荷されていてな。購買のNPCから俺の元に報告が来たので、調査の後に応援として上位A Iの二人を呼んだという訳だ」

おっと、聞かなくても一成が私の聞きたい事を全て話してくれた。なるほど、だからこの三人がここに一堂に顔を合わせている、と。

そしてその購買に起きたという異常。何故にあんみつ……？

「分かりません。私達NPCやA Iの誰も、そんなデータの追加はしていませんし、もししたとして、それをする理由がありません」

ふーむ、桜の意見はもつともだ。確かに、NPC達がこんな事をする意味が見出せないし。

ならタイガーは？ 藤村先生なら、案外やつてもおかしくないし怪しくない。現に、私も意味不明な頼まれ事をされたし。

「いや、俺も真っ先に藤村女史に訊ねたのだ。だが、彼女も何ら一切の関与は無いと証言していてな……」

「はい。藤村先生は確かにそういうところがありますが、嘘はつかない人ですので、信じて良いと思います」

うむむ……。桜の太鼓判もあるし、私もそこら辺はタイガーを信用しているので、タイガー犯人説の線は切れたか。

でも、他に心当たりは無いのだろうか？

「無いな。聖杯戦争の運営責任者として、ハッキングを受けたか私直々に調査、確認したが、それらしき痕跡はまるで見つけられなかったのだ」

言峰神父が仕事の手を抜くとも考えられないし、この人も嘘は言わ

ないタイプの人間っぽいし、ならば購買に起こった不具合とは何なのか。

「まあ、聖杯戦争に実害が有るでも無し。実際にこのあんみつを購入しているマスターも存在しているらしいので、現状の処置としては黙認、ないし放置といったところだろう」

「俺も、それで良いかと思っている。買う者がいる以上、利益として運営に還元されているのだ。他に異常も無いようだし、様子見だな」

「はい。私もそれで異論ありません。聖杯戦争が命懸けとはいえ、マスターの健康管理の面からも、少しは嗜好品も精神衛生上はあった方が良いでしょう」

「どうやら結論が出たらしい。最高責任者である言峰神父が放置すると断言したのだ。問題無ければ二人にも反論の必要も意味も無いだろう。」

「マスターである君がそこまで案ずる必要もない、という事だ。さあ、気兼ねなく購買を利用するがいい。さて、私は私で購買に新しく入荷予定の商品を開発中なので、これで失礼するとしよう」

それだけ言つて、言峰神父は食堂の奥の部屋へと消えて行った。あんみつの謎も気になるが、言峰神父が開発中という新商品も気になる。というか、そちらの方が気になるのだが。

「だって、あの言峰神父だよ？ 何か奇想天外なモノを売り出すに違いない。そして、買った者を愉悦の笑みを浮かべて眺めるのだろう。」

……まあ、そもそも買う人が居るのか分からないのだけでも。

「では、俺も戻るとするか。まだ他に仕事が残っているのぞ。それでは失礼するぞ、岸波。壮健にな！」

一成も、私に励ましの言葉を掛けて、食堂から出て行った。やっぱり、運営のAIともなると忙しいのだろう。何か謎なモノを開発しているような一部例外を除いて、の話だが。

「えっと、それでは私も失礼しますね。もし保健室に用事のあるマスターさんが居たら、困るでしょうから……。岸波さんもまた是非、保健室にいらしてくださいね」

ペコリ、と桜は一礼し、パタパタと小さく駆けながら食堂を後にし

た。いやはや、桜はやっぱり健気な後輩キャラだ。その一挙手一投足が見ていて癒される。

……多分、急がなくても誰も保健室には来ないだろうが、それを口にするのは酷というものだろう。

桜もそれが分かっているから、謙虚気味に言っていたのだろうし。さあ、私も用事を済ませてマイルームに帰るか。朝ご飯食べない派のアヴェンジャーには、手軽でお腹にも重くないゼリーでも買っている。

あ、お礼も兼ねてプリンも追加。この

『産地直送！』の口に刺すような甘味を貴方に〜』

という謳い文句のプリンを手取る。生産元は『Y A R I O 村』で、コカトリスの卵を使用している……らしい。

怪しい。怪しい…のだが、販売している以上、歴とした商品なのだろう。多分、アヴェンジャーはこの怪しいプリンをすぐに口にしないだろうから、同じものを私が毒味用として食べるとするか。

「お姉さん、このプリン二つください」

「はいはいと……、プリン二つにゼリー一つ、それと焼きそばパン二つで合計1100PPTですね」

むう、結構な額になったが、仕方ない。ここは素直に支出する。

「はい。ありがとうございます。またどうぞー」

購買のお姉さんからのセールスマイルを受け、買ったものを端末に転送してもらった私は、謎のあんみつの事も忘れてマイルームへと帰った。

マイルームへと戻ってくると、アヴェンジャーは既に起きていたよう  
うで、

「あら、朝から元気なこと。一体どこへ行っていたのかしらね……？」  
扉を開けて入ってきた私を見るや、彼女はいやらしい笑みを浮かべ

てからかってくる。

残念ながら、キミが期待するような事は何もなかったとだけ言っておこう。

「あつそ。それは残念。これからネタにして弄ってやろうかと思っただけに」

「アヴェンジャー、あなたはもしかしておバカなの？ 第一、相手が居ないし、居たとして何時殺し合いをする敵同士になるかも知れないのに、そんな呑気な恋愛ごっこなんてしてられない。」

「ふーん。弁えるところはしつかりと弁えているようですね。ま、私がマスターの色恋なんて許す訳も無いんだけど。アンタは聖杯戦争だけに集中すればいいのよ。脇目も振らず、ただ生き残る事だけに執着すれば……それだけでね」

結局のところ、今のもいつものアヴェンジャーの挑発的な態度からによるものだった……と。そういう事なのか。

まあ、心配しなくても大丈夫だよ。私は、生き残る事だけに必死なんだから。寄り道も脇道にも逸れたりする余裕はないし。

「分かっているのならいいわ。……それで？ 結局どこにほつつき歩いてた訳？」

つまらないとでも言いたげな顔をして、アヴェンジャーが私の先程までの行動について詮索してくる。いや、別に隠すつもりもないので、素直に白状するけども。

「購買へ行ってたんだ。アヴェンジャー、昨夜は頑張ってくれたみたいだし、朝食の調達も兼ねて何かお礼にと思って。はい、どうぞ」

私は端末から、購買で買ってきたプリンとゼリーを取り出すと、彼女へと手渡す。

アヴェンジャーは、ゼリーこそありきたりな栄養補給系の商品と一目見て分かるので、普通に受け取るが、プリンの方は手を伸ばしかけたところで動きがピタリと停止した。

「ジーツと、訝しむように怪しげなプリンを見つめるアヴェンジャー。しばらくそうして見つめていた後に、ゆっくりと口を開いた。」

「……何ですか、ソレ？」

「プリン」

「いや、それは分かっているわよ。だから、何でそんなゲテモノみたいなプリンを買ってきたのかって聞いているの」

「だって、美味しそうだったんだもん」

「コカトリスの卵とか、気になるよね。食べてみたいと思うのが人間の性さがというものでしょう？」

「んなの、物好きか頭がトんでる連中だけだっつもの。私だって全うな英霊じゃないけど、そんな変なモノ好き好んで食べたくないし」

「まあまあ。そう仰らずに、グイッと一口、行つとく？」

そう言いつつ、私はプリンのカップをアヴェンジャーの頬にグリグリ押し付ける。カップ越しでも分かるアヴェンジャーの頬の感触。プニプニしてて、柔らかくて気持ちいい……。直で突つつきたいな……。

「ぐっ……。し、仕方ないわね。だけど、アンタは私が拒否するのを見越してもう一つ買ってきてるみたいだし、予定通りアンタ自身が先に食べて感想を言いなさい。それ次第で、食べてあげない事もないわ」

結局そうなるよね。というか、目聡いアヴェンジャーは、私がその事を伝える前に袋の中身から、私がプリンをもう一つ買っていて、それが何のためかを先読みしたらしい。

スキルの直感Aでも持つてるんじゃないの貴方……？

結論から言つて、アヴェンジャーはプリンを食べました。それはもう、ペロリと底まで綺麗に平らげて。

「い、意外と味わい深いのね、コカトリスの卵って。濃厚だけど後を引く程でも無く……。なんとというか、素材そのものの良さがあるというか」

「たいへん満足していただけたようで。というか、私も食べたのだが、めちやくちや美味しかったです。」

悔り難し、Y A R R I O村……。他にもアイスクリームやバター、野



菜なんかも作っているらしく、それらも食べてみたいと思った程である。

残念ながら、購買ではプリンとアイスクリームしか仕入れていないそうなので、アリーナで拾える事に期待しつつ、新しく入荷されるのを希望したい。

そんなこんなで、私達は朝食を済ませてマイルームを出る。とりあえず日課となりつつある隣教室へ向かうため、足を運ぶとしよう。

中に入ると、ほとんど誰も居ない状態で、僅かにマスターが作業や会話をしている程度。それ故か、アヴェンジャーは珍しく教室で霊体化を解いて現界していた。

「朝からバカみたいに騒いでいたけど、いよいよ明日が決戦ですね。やり残した事はありませんか？ 相手のマスターはよく分からないワカメですが、サーヴァントはそれなりの使い手でしょう。初戦の腕ならしには丁度良いですね」

この数日で、慎二達と何度かの小競り合いがあった。それらを経て、アヴェンジャーの中では慎二が『よく分からない』と印象付けられたらしい。

だけど、彼のサーヴァントであるライダーは別のようで、実力に関しては認めているようだ。その人となりを入っているかは別として、だが。

そして、この聖杯戦争がトーナメント形式である事を忘れてはならない。勝ち進む、という事はつまり、他の参加者<sup>マスター</sup>も同じく勝ち進んでいくのだ。

ならば自然と強者ばかりが残っていくのは自明の理。最弱の私は、そんな荒波の海を渡らねばならない。勝っても、それ以上に強い相手が次に待ち構えている……。私は、本当に、生き残れるのだろうか……。

そんな弱気な思考をしていたからか、女性マスター同士の会話がふと耳に入ってきた。

「明日……か。一回戦も、とうとう終わるんだねえ……」

「だね。そして明日を過ぎれば、この校舎にいるマスターは半分も消

えちやう。負けたら死ぬ——つて噂だけどさ、まあ、所詮ゲームだし。負けたら退場するだけだもんね。ヤバそうなら接続を切ればいいんだし。私は気楽に行くことにしたわ。悩んでも仕方ないしね」「そうなんだ。じゃあ私は——私、この聖杯戦争が終わったら、好きだった子に告白するんだ」

「……………うわあ」

「……………なによその目は！ 死なないって！ 決意表明だつて！」

「あからさまな死亡フラグありがとうございます。ま、それが現実にならないように頑張つてね？ あ、これもフラグか…」

「もー!!」

プンスカ怒っている女性マスターの片割れ。そんな事よりも、私はもう一人が口にした「所詮ゲームだし。負けたら退場するだけ」という言葉が気になった。いや、引つかかった。

これは本当にゲームなのか？ そんな確信を私は持てない。それに、負けたら死ぬ……………まだ本当かどうか分からないし、もしかしたら本当は死ななくて、そのまま現実世界に送り返されるだけ——とは、私にはどうしても、そんなに甘くは到底思えない。

エネミーやライダーとの戦いは、ゲームなんて優しいものじゃなかった。あの臨場感、命の危機感、死と隣り合わせな感覚……………。あれらは全て、ホンモノだった。どうしようもなくリアルそのもの。

ここが電脳世界だとしても、感じる全てが作り物ではない現実。感情も、感覚も、出逢いも別れも、全て。

そう、アヴェンジャーとの出逢いは、決して作り物なんかじゃない。確かなものが、そこにはあったはずだ。

「…………」

「……………マスター？」

アヴェンジャーの声に、私は現実を引き戻される。少しボーツとしていたらしい。

大丈夫、大丈夫だ。内向き思考はいけない。泥沼にハマりかねないから。

「そう……………シヤキツとしなさいよね。ほら、”お友達”も心配そうに

「見てるわよ?」

皮肉げにそう言って姿を消したアヴェンジャー。私は疑問に思いながら、彼女が示した方へと顔を向けると、そこには私を友達と呼ぶあのマスターが居た。

「よう。邪魔したみたいで悪いな」

「ううん。別にそんな事ないよ」

悪い事をした、と謝るように声を掛けてきた彼に、実際そんな事はなかったので無難に返事をする。

「…いよいよ明日だな、白野。調子はどうか?」

「良くはないけど、悪くもない…かな」

うん、嘘は言ってない。実際のところ、なんとも言えないし。

私の曖昧な答えにも、彼は気遣うような笑みを浮かべて、あははと軽く笑った。

「そうか。俺も同じようなものさ。…もし二人とも勝ったら、次は俺らで勝負するのかもしれないんだよな。ま、そんな時はよろしくな。正々堂々と戦おうな!」

それだけ言い残して、彼は教室から出て行った。アリーナにでも行くのか、それとも対戦相手の情報を集めに行ったのか。

そういえば、彼もトリガーは揃っていると言っていたし、後は戦闘に備えるだけなのか。

さっきの彼の言葉。彼にしてみれば、それは励ましのつもりだったのかもしれない。だけど、私には再会の約束のように聞こえてならなかった。

どちらかが負ければ、どちらも負けても、ああして話すのはあれで最後となる。だからこそ、再び会えるという事を前提にあんな事を言ったのだろう。

『戦う事になるかもしれないけど、また会おう』

そんな風に言っているように思えてならなかったのである。

彼の後を追う訳ではないが、私も教室を後にした。じつとしていると、なんだか周囲の全てに置いていかれてしまうような錯覚を覚えたからだ。

そして、階段の前にまで出た所で、私は「彼女」と遭遇した。

「ご機嫌よう」

陶器の如き透き通った声音に、私はそれが自分に向けられたものと少し遅れて気付く。

視線を向ければ、褐色の肌に、淡い紫の髪をした女の子の姿があった。羽織った白衣と、胸元が大きく開けたインナーはスカートも兼ねており、ワンピースのようにも見える。

眉間の辺りには仏陀のようなホクロみたいなものが。色違いでありながらデザインが同じニーハイ。そして少し大きめの眼鏡。全体的に解放感に溢れた姿は、彼女の容姿によく似合っている。

なんというか、こういうのをエキゾチックビューティーというのだろうか。

その容姿と身に付けたアクセサリーの類から、エジプトを連想させるので、もしかしたら彼女はエジプト出身なのかもしれない。

「ご機嫌よう……？」

挨拶には挨拶で。小さい頃にお母さんから教わらなかった？　と言っても、私は覚えていませんが。

まあ礼儀だよ、うん。

「明日が決戦なので。水辺で睦み合う二頭の一角獣。象牙の岸辺に踏み入り、王冠を頂くのは一体どちらか」

「え……？　うん……？」

ごめんなさい、何が言いたいのか、まるで理解出来ません。

と、私が混乱していると、今度は言葉はなく、一礼だけして彼女は階段を上へと消えてしまう。結局何だったんだ……。というか、名前も分からないままなだけだ。

でも、一目見て濃いキャラだったので、もしかしたら今後関わり合

いになる事もあるのだろうか。いけない、自分でフラグを立ててどうするっていうんだ、私……。

「なーに黄昏てんのよ、ひよこさん？」

次から次へと、全く以て忙しい事この上ない。今度の声には聞き覚えがある。『あかいあくま』こと、遠坂凜その人だ。

「悪魔とは失礼な言い草ね？ そんな事を言われたら、物理的に潰したくなつちやうわ〜」

怖!! すつごくにここにこしてるのに、笑いながら本気で指をパキポキ鳴らしてるんですけど!?

これはアレだ。冗談抜きで悪魔みたいな暴力マスターに違いない……!!

「……ハア。無駄に元気なようで、ちょっと安心したわ」

さっきのはただのフリだったらしく、けっこう本気の溜め息を吐く凜。これは呆れられてるのか、それとも安堵から来るものなのか。多分、前者だろうなあ……。

「いよいよ明日決戦ね。どうやら見たところ、まだ記憶は戻っていないみたいね。あいつも聖杯戦争に参加している以上、魔術回路を備えたマスターだから、油断はしない方がいいわよ。記憶のないお人形さんが、天才ゲームチャンプ『マトウシンジ』にどう立ち向かうか、楽しみにしてるわ」

じゃあね、と軽い別れの挨拶を告げて、彼女も上へと消えて行った。また屋上にも行くのだろうか。何故か、凜のお気に入りスポットらしい。

私は私で、とりあえず一階に行くとしよう。

「きっしなっみぎーんんん!!!」

あ、これデジヤびゆりつぷうウウ?!?!?

ズドーン!! と盛大に音を立てて跳ね飛ばされた私は、いつかのようにはぐろはぐろと廊下を何度か回転するように転がりながらスライドし、徐々に失速していき、悠に一クラス分の距離まで転がったところで停止した。

「ごめーん! 急に止まれなかったのお!!」

ゴフツ……。お、お腹と胸を中心にダメージが……。!!

な、なんとか致命傷は受けずに済んだが、これは後々響きそう……。

「あのゲツホ、藤村先生ゴツホ、みかん、取ってひゆう、来ました」

私は息絶え絶えに、端末を操作してみかんを取り出す。

「あ、みかん! 取ってきてくれたのね。ありがとう!」

みかんを受け取ったタイガーは、それはもう、たいそう喜ばれたそう。うな。

…何故、こんな語り口調かというと、私はダメージが酷かったのでそれを確認出来ていなかったのです。後からアヴェンジャーに聞いて、タイガーのあまりの喜びっぷりに若干微笑ましくも引いた私なのだった。

それはそうと、タイガーは相当嬉しかったようで、倒れる私を抱き起こすと、そのままギューツと締め上げてきた。……っていうかぐるじい!!

「ホント、ありがとうね! じゃあ、約束通り、インテリアをあげるわ。大事にしてね」

締め上げという名の抱き締めからようやく解放された私に、タイガーが何かのデータを渡してきた。受け取り、端末に転送して何かを確認すると、『タイガーライト』なる家具のようだ。

「ところで、そのみかんは何に使うんですか?」

頼まれた時、そして拾った時にも思った事を率直に聞いてみる。タイガーは嘘はつかないし、言葉通りの意味で信じていいはずだ。

「え? あ、別に道場とか、魔法陣とかは、関係ないわよ。本当に」

「あの、じゃあ何に……」

使うのか、そう聞こうとしたのだが、タイガーも暇ではないのか、そ

れだけ短い答えを残して、「それじゃあねー!!」と元気よく職員室へと帰ってしまった。

結局何に使うんだ、あのみかん……。

気を取り直し、私はアリーナ入り口前へと向かっていた。校舎で得られる情報はもう無さそうだったし、無駄に時間を潰すよりアリーナで鍛えた方が幾分マシだからだ。

そして、角にさしかかった所で、私は人の気配がある事に気付く。瞬間、立ち止まり、向こうから見えないギリギリの所で耳を澄ますと、話し声が聞こえてくる。これは――

「シンジいく。最初に言っただねえ？ アタシを働かせるには何が必要かってさあ」

「な……まだ金が要るのかよ?! この強欲女!」

ツ!! これは慎二とライダーの声だ! 思わぬところで遭遇……いや、まだ向こうはこちらに気付いていない。これはチャンスか……?

私は息を殺して、二人の会話に耳を傾ける。他の雑音はなるべくシャットアウトして、彼らの会話だけに集中して傾聴する。

「そうとも。アタシは雇われ海賊だからね。積まれた金が多ければ多いほど、やる気が出るってもんさ!」

「――ちつ、分かったよ。ちよつと待ってろ!」

隠れているので表情までは分からないが、慎二は怒りながらも、ライダーの頼みを聞く事にしたようで、何か作業をする音が聞こえてくる。

むむ、一体何をしているんだ……?

「……………」――また、アリーナにハッキングして、財宝を増やしてやったから……」

どうやらアリーナへハッキングをしたらしい。そういえば、昨日の聞き込み調査の時に、それっぽい話を聞いたような……、

「おや、お嬢ちゃん。奇遇だねえ」

「!!?」

「ば、バレた!? というか、私知らない間に前に出ちゃってるう!? 何をしているのか気になったあまり、身を乗り出してしまっていたのだが、そこをバツチリとライダーに見つかったらしい。」

ライダーの言葉に、慎二も私の存在を察知したようで、一瞬ビクツと固まり、すぐに振り向いてギョツとした顔になる。

「——岸波! お、お、お前……盗み聞きなんて卑怯だぞ!」

えー? それを慎二が言う? 言っちゃう?

そっちだつて、航海日誌隠したりとか、アリーナに入れないうち細工とかしたのに。

「……い、いや、まあいいや。聞いての通りさ。アリーナの第二層に財宝を出現させたんだよ。僕のサーヴァントは、お金を払えば、それだけ強くなるからね!」

凶星を突かれ、いつそ吹っ切れたのか、慎二は頼んでもいないのに、ベラベラと自分から白状した。チョロい、流石ワカメチョロい。

「まあ、財宝が欲しかったら、君も取りに来ていいんだぜ」

「へえ、ずいぶん余裕じゃないかシンジ。そいつの目の前で、財宝を全部取っちまおうって算段かい? いや、もうどうしようもないねじ曲がりっぷりだ! 小悪党にもほどがある!」

「小悪党って言うな! この性悪サーヴァント!」

なんとという漫才。なんとという茶番。いっそのこと、芸人になれば良いのではないだろうか、この海鮮主従は。

「じゃ、じゃあな。岸波。何なら、待っててやってもいいぜ。同時に取り始めたつて、財宝はきつと、僕らが全部取っちゃうに決まってるからさ! あつははははは!」

終始しどろもどろ感の否めない慎二だったが、ライダーの言葉よろしく、小悪党のような高笑いを見せてアリーナへと消えて行った。ライダーもまた、呆れたようなジェスチャーを私にして、その後を追う。

それにしても——財宝、ねえ……。



「聞きましたかマスター？ あの女、財宝を手に入れるほど、力を発揮するとか。まったく海賊様々って訳ね。お宝で強くなるとか」

彼らが居なくなり、アヴェンジャーが現界する。確かに、財宝で強くなるのは、海賊らしいと言えればいい。

「でも、敵の意気が上がるのを傍観するのは、こちらとしてもムカつくしツまらないわね。逆に、こちらが奴らから財宝を横取りして、敵の意気を削いでやろうじゃない」

ああ：また邪悪な笑みを浮かべて、良からぬ事を考えておられるわ、この竜の魔女様は。

まあ確かに、彼らの得るはずだった財宝をこっちが確保すれば、敵の弱体化に繋がるといふのなら、やらない手はないか……。

図らずも、こうして私達はお宝争奪戦に参加する事になるのであった。

よし、やるからには、勝ってやろう！

海賊王に、私はなる!!

——なんちやって。

とれじやーはんたー・はくのん

意を決し、私はアヴェンジャーと共に慎二達の待つアリーナ第二層へとやってきた。

今から財宝の奪い合いをするからだろうか、昨日までとは違って、アリーナには嫌という程に張り詰めた空気が漂っているように感じる。

「……この気配、アリーナに何か変化があったようね」

アヴェンジャーも同じように、アリーナに異変が起きたと察知したらしく、突如現れた異物に顔をしかめるように、鋭い目つきで周囲を睨み付けていた。

「あれは……」

いぎ、足を前へ進めてみれば、通路のすぐのところにある開けたエリアで、私達を待ち構えるように立つ慎二とライダーの姿が見えた。

察するに、さつきの言葉の通り、わざわざ私達が来るのを待っていたのだろう。よっぽど自信があるのか、それともライダーが指摘したように小悪党のような真似をしようとも言うのか。

どちらにしても、慎二との奪い合いは確定のものであるらしい。

「臆していてもしょうがないでしょう。売られた喧嘩はきつちりと買って、何倍——いいえ、何十倍にもして返してやろうじゃない……!!」

うわお。すごいやる気！

でも、それくらいがちょうどいいのかもしれない。せつかくの宝探し、それも競争だ。アヴェンジャーくらい張り切ってた方が、勝ち目も上がるというもの。

それに、私だって昨日の妨害といい今回といい、慎二のやりたい放題に付き合うのには、そろそろウンザリしてきたところだ。

ここらで一発、ドカンとかましてやろう。そして、あわよくばライダーの強化を妨害してやる。妨害してきたんだから、妨害仕返してもいいじゃない？

どうせ向こうから仕掛けてきた宝探し合戦な訳だし。

「その意気です、マスター。なかなか復讐者のマスターらしくなってきたじゃない?」

私の心意気がイタク気に入ったようで、アヴェンジャーはそれはもう、とてもイヤらしい邪悪な笑みを浮かべて、獲物をいたぶる狩人のように、舌なめずりをしていました。

なんだろう……妖艶だけど、すごく怖いです。

「はん、来たか」

私達が目の前までやってくると、わざとらしく待ってやっていて、と言わんばかりの大きな態度で、出迎えてくる慎二。

いや、そもそもそっちからふっかけてきたんじゃないか。

「大丈夫、岸波が強欲だってことは、他の奴には内緒にしといてやるからさ! せっかくだし、僕のサーヴァントと、どちらが早く、多く財宝を集められるか、競争してみないか?」

なるほど。つまりは財宝は一つではなく、複数ある……と。

一つを奪い合うのではなく、より多くを手に入れた方が勝ちという事か。

「その通り! ははっ、手加減してやるから、気軽にやってみればいいよ! じゃあお先に!!」

「えっ、ちよっ……!?」

スタートの合図もなしに、慎二とライダーはいきなり走り出した。私は一瞬だけ茫然となるが、すぐに宝探しが既に始まっているのだと気付く。

まったく、ワカメはこれだから姑息なんだ! 流石ワカメキタナイ、とだけ言われる事はある。

「いや、誰が言ってるのよ……?」

アヴェンジャーの渴いたツツコミを受け流し、私も彼らを追ってすぐに走り出す。アヴェンジャーも、溜め息一つ零すと、私に追従する

ようにスタートした。

「さあ、楽しい楽しいハントの始まりだ!! そら、死ぬ気で走りなア!! シンジイ!!」

「うるさいんだよ! お前のテンションに付き合ってもらえるかって話だ!!」

遠くから、二人の賑やかなやりとりが聞こえてくる。というか、

「ッ! 早い……!!」

そう、思っている以上に、聞こえてきた声からは、その距離が開いていたのだ。いくら私達が出遅れたからといって、この距離の開き方はおかしい。

「チィッ! マスター、端末からマップを開きなさい!!」

アヴェンジャーが何かに気づいたらしく、私は言われるままに、走りながら端末を取り出し、揺れる指先でどうにか操作してマップ画面を開いた。

「!! これは——」

アヴェンジャーが何に気付いたのか、私もマップを確認してようやく理解する。

慎二とライダーをすぐそばで視認したおかげで、彼らがマップ上でエネミーと同じく、赤い点として浮かんでいたのだが、その慎二達と思いき赤い点は、マップ上の道無き道を進んでいたのである。

「やつぱり…… 奴ら、チートコードを使っているわね。それも、単なる壁抜けだからムーンセルの監視に引つ掛からない程度の改竄……。姑息な上に小癪なやり口とは、トンだ腐海のワカメ野郎ね」

いつの間にか間近で走って、私の端末を覗き込んでいたアヴェンジャーが、遠く離れた慎二に向かって盛大に悪態をつく。

「というか、密着されると、とんでもなく走り辛いんですけど。」

「!! アヴェンジャー、エネミーが!!」

走る私達の進路上に、盾型エネミーの姿がある事を確認した私は、すかさずアヴェンジャーに声を掛ける。

「クソがツ！ エネミーは平常運転ってワケ!? こうなったら無視するわよマスター!! あんなのに構ってたら、奴らの思うがままです！」

アヴェエンジャーの意見に大手を振って賛成だ。せめて一撃で倒せるなら話は別なのだが、それが出来ない以上はエネミーはなるべく避けて進むべきだろう。

戦闘の手間はこの際、一切無しで行く。エネミーが居ても戦わずに避けるようにしよう。

「そうと決まったら走るわよ、マスター!!」

私達はエネミーを無視する事に決め込み、まだこちらの接近には気付いていない間に、その背後を颯爽と走り抜ける。

「——!!」

が、やはり気付かれずに、というのは不可能であった。エネミーは私達が側を走り抜けたと同時に、私達の存在を感知した。

となると当然、エネミーは排除すべき存在に向かって突進を開始する。

「アヴェエンジャー、追ってきてるー！」

私は振り返り、こっちに向かつて猛突進してくるエネミーを一瞥すると、すぐに前を向き直り全力疾走する。

あのタイプのエネミーは今まで何度も倒してきた。戦えばまず負ける事はないだろう。だけど、それではダメだ。

こと、エネミーとの戦闘だけはいけない。戦うなら、ライダーとのみにしないと。時間を取られるのは、相手に差を大きく開かれるのと同義なのだから。

「そう簡単には逃がさないって？ 上等よ。こっちだって、そう簡単には追いつかせないっての!! 先に行つてなさい、マスター!!」

言うや、アヴェエンジャーは一人急ブレーキを掛けて、エネミーへと対峙する。当然、私は彼女一人を置いていくなんて……と思ったが、迷いを振り払い、走る。

アヴェエンジャー本人が言ったではないか。無視する、と。戦わないにしても、どうにか追っ手を振り切る手段があるのだろう。だからこ

そ、私に先に行けと言ったに違いないはずだ。

「分かった！ 先に行くから、アヴェンジャーも早くきてね!!」

「言われずとも、そのつもりよ!!」

私は走る。少しでも慎二との距離を詰める為に。ただひたすらに走る事だけが、今の私に出来る唯一の事だから――。

マスターが先に行ったのを確認すると、私はエネミーに対して旗を掲げる。対象は一体、倒す必要はなく足止めが出来ればそれでいい。

故に、出力は最大限抑えてで構わない。

「我が憎悪の一端、僅かなれどもその業を見よ!! 邪竜咆哮！ 『怨嗟の叫びは呪いとなりて』!!」

この身に宿りし憎悪、この身を灼きし憤怒、この身に渦巻く絶望。それらのほんの一握りを、炎として具象化し、現世へと具現化させる。

一気に焼き尽くす為の炎柱ではなく、長く燃え盛る炎の壁を生み出した訳だ。言わば、単なる足止めでしかないが、この炎は特別製。

時間稼ぎや足止めを目的としているので威力こそ弱い、なかなか消えないという性質を持ち、燃え移れば長らく消せずにダメージが蓄積する――といった効果もある。

……私らしい粘着質なスキルじゃない？ まったく、自分の醜さが全開で出ているみたいで、反吐が出る。

「――、■■□!!」

エネミーは思惑通り、炎の壁によって進路を塞がれ、完全に前進が停止しているらしい。雑魚、それも知能数の低いエネミーなら当然の結果だろうが、それが通じるのは雑魚だけだ。

ライダーや強いエネミーなら、あの程度の炎では足止めにならないどころか、障害にすらならないだろう。

先に行かせたマスターはどこまで進んだか。守り刀を腰から提げているから、少しくらいなら自衛は可能だろうが、未熟なあのマスターでは、それも長くは保たないはず。

出来れば敵と遭遇してないと良いが……。

「チツ。競争なんてするもんじゃないわね」

でも、今更愚痴を言っても仕方がない。とにかくマスターに追いつく事。それが今は最優先事項だ。

そうとなれば、ジエツト噴射で飛ばすか？ ふふ、もちろん、そのままの言葉通りの意味ですが。

「ハツ、ハツ、ハツ、」

アヴェンジャーと離れてからも、私は走り続けていた。とにかく、走って、走って、ひたすら走る。

幸い、マップでエネミーを予め確認出来るので、ルートを避けるなどして回避していたが、そろそろそれも怪しくなってきた。

この階層は、進むごとに道が長く伸びて分岐が少なくなる構造をしている。故に、必然的にエネミーと鉢合わせる機会は迫ってきていたのである。

一応、今朝アヴェンジャーからもらったチエーンベルトと、付随して装備した守り刀を腰に提げているが、忘れるべからず。何度でも言うが私はか弱い普通の女子高生なのだ。

当然ながら、そんな私がドンパチやチャンバラの真似事など出来るはずもなく、私に出来るのは、エネミーと遭遇する前にアヴェンジャーが合流してくれる事を祈るだけ。

そんな折だった。

「!!?」

突如、アリーナ全体に鳴り響くかの如く、盛大な爆発音が私の耳に届いたので。音は後方ではなく、前方からのもの。

…という事はアヴェンジャーではなく、ライダーによるものか。おそらく、あの時見せた艦船で砲撃を行ったのだろうが、相手はエネミーだろうか？

それにしても、一撃でエネミーを葬れるだけの火力は羨ましいの一言に尽きる。私達も一撃必殺が可能なら、こんな回りくどいやり方を

しなくても済むというのに……………、

「……………ん？ という事は……………」

今の爆発音がライダーによるものだとするれば、エネミーを倒したという事だろう。それはつまり、私の進路上のエネミーを倒したという事も同義なのでは？

なら、少しの間は彼女が通った道にはエネミーが居ないという事になる。これはチャンスかもしれない。

あの隠し通路と沈没船があった先に通じる道と、トリガーがあった道とでひとまず別れ道となる。慎二達がどちらを進むかは分からないが、とにかく彼らとは逆の道を進めばいいだろう。

どこに宝があるかは不明だが、複数出現しているならば、どっちのルートにも出現していても何ら不思議は無いのだし。

『まずは一つめ、と。ハッ！ 楽勝だね』

と、走る私の耳に、校内放送でもしているかのように、慎二の音が響いてくる。いやらしいというか、慎二らしいというか……………。わざと私に宝を手に入れたと教えてきているのだ。

「くっ……………先手を取られた！」

一体、財宝とやらは全部で幾つあるのか。もし3個だけなら、完全にアドバンテージを奪われた形となる。こればかりは天命に賭けるしかない。

そうこうしているうちに、私は例の分岐点まで到達した。残念ながら、アヴェンジャーとは未だ合流出来ていない。……………まさか、私って案外、走るの速かったり？

……………いや、馬鹿な事を考えている場合か。まずは慎二達がどちらを進んだのかを、手早く端末のマップで確認する。

「……………右か」

どうやら隠し通路のあるルートを進んだようだ。なら私は反対を進むとしよう。



それにしても、アヴェンジャーはまだ――

「アツハハハハ!!! なにこれ超楽しいんですけどお!!」

「え!?! ちよ、ぬわあああ!!?」

突然の叫び声?に、私は思わず振り向いた。すると、流星の如く黒い物体――もといアヴェンジャーが、両手を後ろに構えながら豪速球ばりの勢いで突っ込んで来ていたのである。

私は為す術もなく、巨大な火炎球を前にした時のような叫び声を上げながら、アヴェンジャーと正面衝突した。

「ガハッ!? うぐ……な、なんか私、こんな目に遭ってばっかりのような……」

「この駄マスター! 脇に避けるくらいしなさいよ!! そうすれば、そのまま脇に抱えて行けたのに!!」

痛い! 痛いから、こんな絡み合ったみたいな体勢で暴れないで!? あつ、脚が変な方向にい!!?

――どうにか変な体勢から互いに脱出し、私は息を整えてアヴェンジャーに向き直る。今のは多大なタイムロスだ。早く巻き返さないと……。

「分かってるわよ。それで? あいつらはどっちに行つたのかしら」

尋ねられ、私は右の道を指差した。すると、黒き魔女が旗を虚空から現出させると、高らかに呪いの言葉を発した。

「走れ邪炎よ、『怨嗟の叫びは呪いとなりて』!!」

旗の一振りと共に生じた炎が、まるで壁のように慎二達が進んだ道を封鎖してしまう。これはすごい! これなら足止めにピッタリだ!

「賞賛しているところ悪いけれど、これにそこまでの効力は無いわよ。出来てせいぜい雑魚エネミーが通れないくらい。サーヴァントなんてとてもではないけど、まるで通用しないから。だからこれは、気休め程度に思いなさい?」

本人からお墨付きで否定されてしまった。でも、この炎の壁に警戒

させる事くらいは出来るはず。それだけでも足止めとしては十分と言えるだろう。

「なら、今のうちに——」

走ろう、そう言おうとしたところで、私は不意にアヴェンジャーに抱きかかえられ、その脇にすっぽりと収まった。

「よっこらせつと……」

え？ いや、よっこらせつとじゃなくて。何を——？

抵抗しようにも、私の腰をガツチリと押さえられてしまっており、更にすごい力で抱えられているので、脱出は困難を極める。

「じつとしてなさい、マスター？ 振り下ろされてぼろ雑巾のようにズタボロになるわよ？」

なにそれこわい。そんな事を言われては、おとなしくしている他ないので、私は素直にアヴェンジャーの指示に従った。手足はダラリと、完全に脱力しきる。これで完璧なお荷物人間の完成だ。

「ぐっ…!? 急に重く……ええい!! 知ったことか！ 行くわよ、即席スキル『繋がれし魔女は空に焦がれる』!!」

アヴェンジャーが叫んだ次の瞬間、彼女は私を脇に抱えたまま、両手から炎を吹き出し、ジェット噴射の要領で前進を開始した。

その勢いやかくや、それはもう凄まじいもので、私は走っていたのがバカみたいに思えてくる程のものだ。

というか、こんなスキルがあつたなら、もっと早く使つてほしかった！

「仕方ないでしょう。それにさつき言った通り、これは即席のスキルなのよ。私だつて、これにようやく慣れてきたところなんだから、贅沢言わないでくれる？」

悪びれる様子はなく、むしろ「何言つてんのこの小娘がつ」とでも言いたげに吐き捨てるアヴェンジャー。

まあ、それなら仕方ないかもしれないが……。

『これで二つ目。ハッハー！ これはもう楽勝なんじゃないか？』

その時、またしても唐突に空間へと響く慎二の声。もう二つも取られてしまったのか……!?

「またワカメの勝ち誇ったウザイ声ね。いい気になるのも今のうちです」

ああ、やっぱりアヴェンジャーにも聞こえてたんだ、アレ……。

でも、一向にそれらしきものが見つけれないのは厄介だ。まさか隠されているとか？

「！ 見えた!!」

なんて、思っていた矢先、前には無かつたはずの場所にアイテムフォルダが配置されていた。おそらくアレがそうだ！

「アヴェンジャー!!」

「ようやくお宝ですか。さあ、頂戴するとしましよう」

私の声に、アヴェンジャーが炎の勢いを弱め、減速する。私はアイテムフォルダが目の前に来ると、抱きかかえられたままの体勢で手を伸ばし、それを開封した。

「……出た。財宝だよ、アヴェンジャー!」

思った通り、中から出て来たのは『名だたる海賊の財宝』というアイテムデータだった。これが目当てのもので間違いないだろう。だって、財宝って名前に付いてるし。

「さあ、次に行きますよマスター!!」

私を抱え直すと、再度ジェット行進が開始される。この調子で次も頂こう。とは言っても、向こうが現状勝っているのに変わりはない。

追いつかれていない今のうちに、こっちのルートは全て押さえてしまおう。幸い、アヴェンジャーの即席スキルのおかげで、こちらは機動力に優れている。

慎二達の最初のチート行為も、あれつきりだったらしく、以降はマップの通りにしか進んでいないところを見るに、一度だけのものなのだろう。

「あった！ 二つ目!!」

そしてすぐに次のアイテムフォルダを開けたエリアで発見。だが、そこには当然のようにエネミーの姿が。こっちはまだ誰も来ていな

いのだから、それもそのはずか。

だが、戦闘は避けたいところだが無理だろう。そうなれば、残された道は二つ。

そのまま戦って倒してから財宝を手に入れるか、それともアヴェンジャーが戦っている間に私が財宝を取得、そのまますぐに逃走するか。

どちらかを選ぶなら、私は――。

「アヴェンジャー、敵の注意を引き付けつつ、アイテムフォルダから引き離して！」

もちろん後者だ。今は一分一秒とて惜しい。それなら、効率的に動いた方がよい。

「いいわよ、マスター。さっさと取りなさい。そら！ こつちよ雑魚エネミー!!」

早速アヴェンジャーが鎌で攻撃を仕掛け、エネミーにマークされに行く。私はその隙に、エネミーからなるべく距離を取りつつ、アイテムフォルダへと駆けた。

「取った……!!」

アヴェンジャーが上手く引き付けてくれている事もあり、私は危なげなく財宝を手にする、そのまま道の先へと走り出す。

「アヴェンジャー、こつちはOK！」

「了解よ。それでは、これにておさらばです」

私の合図に、アヴェンジャーがエネミーとの戦闘に見切りを付け、炎で撒くと同時に手から炎を噴出させる。今度は直進するアヴェンジャーから横にズレて、私はアヴェンジャーが抱きかかえ易いように両腕を上げて待ち構えた。

「お利口ね、少しは学習したって事かしら？」

私を上手くキャッチして、アヴェンジャーはその場から逃走を開始。次の財宝を探して高速のジェット噴射で突き進む。

さあ、これで慎二と数が並んだ。だが、もうこのルートも終わりが近い。帰還ポータルのある部屋までに財宝があればいいが……。

勝っていると思っていた。いや、勝ったと思った。

先に二つの財宝を手に入れて、こっちがリードしているはずだった。

——だった、のに。

「おや、あちらさんも二つ取っちゃったか」

ライダーの呑気な声がまた、僕の苛立ちをより煽る。

何故、離れた位置にいないはずの岸波が、財宝を手に入れたのか分かるのか。そんなの、簡単な事だ。財宝の入ったアイテムフォルダが開くと、僕の端末の着信音が鳴るように設定してあるからだ。

当然、僕が二つの財宝を取った時も、僕の端末はそれに反応していた。

なのに、さつき僕とは無関係に鳴った端末。そんなの、原因は岸波しかない。

「シンジイ、アタシはもつと財宝が欲しいんだけどねえ？」

「うるさい！ 昨日もあれだけ財宝漁りをやらせてやっただろうが！

まだ欲しいのかよ、この強欲女!!」

あく、ホントにイライラする！ 上手く行かないこの状況も、計画が思い通りに進まない事も、僕以外はバカで雑魚のクセに!!

なんで、僕の完璧な道筋を邪魔ばかり!?

「クソ、クソ、クソオ!!」でも、まだだ！ まだ終わっちゃいない!」  
そうさ。まだ、勝負は終わっていない。財宝は五つ。残るはあとラスト一つだけど、取られたって構いやしない。

あいつらが取った分も、襲って奪えばいい。元々は僕がハッキングして出した財宝なんだ。なら、持ち主はこの僕なんだからさ!!

「行くぞライダー！ 奴らの良いようにさせてやるもんかよ!!」

「オウさね。欲しいモンがありやあ奪う。それが海賊つてもんだからねえ」

調子に乗るのもここまでさ、岸波。お前よりも、僕の方が格上なんだって事を、存分に思い知らせてやるよ!!

## 記憶の中の友情

「よしっ……取った!!」

三つ目の財宝。それを帰還ポータルがある部屋の一つ前の部屋で、私達は手に入れた。

これで、こっちが慎二達からリードを奪い取った形になる。

「さて、あと幾つお宝はあるのかしら？ 全部で五つなら、区切りとしては良いところだし、私達の勝ちで確定なのですが……？」

やれやれ、といった風にあヴエンジャーは溜め息を吐いた。その顔には幾分か疲労が私でも見て取れる程で、スキルとはいえ即席のものを多用するのは、やはり厳しいものがあるらしい。

「いずれにしても、向こうも黙ってないでしょうね。私なら——というやり方を教えてあげましょうか？」

……？

それはどういう意味合いで？

「決まってるじゃない。私がアイツ等と同じ立場で考えるとしたらって話よ。それ以外に何があるの？」

えっと、例えば……これからどうするか、とか。あとは、まだ財宝探しを続ける、とか？

「……コホン。そうね、私がアイツ等の立場でやるとするなら——」

あ！ 今ごまかした！

私の意見があまりに正論というか一般的答えすぎたからって、自分の間違いをそれはもう潔いくらいサラッと流したぞこのサーヴァント！

私の熱い異論申し立てすらもスルーして、あヴエンジャーは先を続けて言う。

もし、あヴエンジャーが慎二達の立場であったなら、どうするか——。

「敵が手に入れた財宝を、奪いに掛かるでしょうね」

「……っ、」

それは……なんというか、非常に納得出来る手段だ。相手の方が多く集めたなら、その集めたものを奪った方が効率的と言える。

別に私はアヴェンジャーのその考えを肯定する訳ではない。私とその当事者だったなら、そんな手段は使わない。

だけど、それは「私だったら」という話。なら、「慎二達は」それを実行したとして、それも何らおかしくはないのだ。

だって、慎二の契約するライダーは海賊のサーヴァント。そもそも財宝なんて存在するかも分からないものは、夢やロマンを求める冒険家にこそ相応しい。

なら、海賊は？ 海賊とて、財宝を欲するのは当たり前。冒険にも胸躍る事だろう。

だけれど、海賊の代名詞こそが『略奪』だ。商船を襲い、積み荷を奪い、時には他の海賊とすら宝や物資を奪い合う。

海の賊とはよく言ったものだ。故にこそ、「賊」であるからこそ、アヴェンジャーのその考えを、ライダーが思いつかないとは限らないし、私への様々な妨害を行った慎二が思いついても、別段不思議ではない。

「あら、マスターの理解が得られるとは思っていなかったわ。じゃ、マップを見てみることにね。そこに、答えはあるでしょう」

私はその言葉に、黙って端末を手に取る。嫌な予感も何も、私は答えがなんとなく分かっていった。

だって、私もその答えを認めてしまっていたのだから。

——慎二達らしき赤い点は、迷いなく、私達の居るここを目指して、一直線に動いていた。それが、答えだ。

「よう……岸波い」

間もなくして、慎二とライダーが私の前へと現れる。慎二の声からも分かる、私への果てしない苛立ち。その顔を一目見るだけで伝わっ



てくる、私への深き憤り。

そんなピリピリとした空気を纏った彼の隣では、ライダーが不敵な笑みを浮かべて、私ではなく、アヴェンジャーへと視線を送っていた。

「……………」

「……………」

二人のサーヴァントは、互いに微動だにもせず、牽制し合うかのように睨み合っている。空気が一瞬で、戦場のソレへと変わるのが、素人の私でも感じ取れるくらいに、重圧で張り詰めたこの空間。

さつきまでのアヴェンジャーとの楽しい宝探しが、まるで夢だったかのように、遠い記憶のように感じられる。

「まさかあのお前が、僕よりも多く財宝を集めるなんてな。いや、驚いたよ。ホント、イラつくくらいにさあ!!」

血相を変えて、語気を荒く、唾を飛ばして吼える慎二。そんなに、私がリードした事が気に入らなかったのか？

「ああー、気に入らないね!! 僕の方がお前なんかより優秀なんだぞ!?! その僕が、凡人のお前なんかに劣る訳がないだろ!! なあ、岸波いい!!」

プライドも何もない、心からの彼の叫びは、私の心に重く響いた。偽りの——いや、私はあの予選で感じた友情を、本物だと信じていた。

お調子者で、自信家で、人を見下す癖があつて、そのくせアドリブには弱いし打たれ弱いところのある、大切な友人の一人。本戦が始まり、あれが作られた関係だと教えられても、私にとって慎二は、『敵』ではなく気の置けない友人に過ぎないと思っていた。

そう、思っていた、のに……………」

それは、私だけの一人よがりだったのか？

慎二にとって、あの予選の記憶は、本戦への単なるフアクターに過ぎなかったのか／いや、それは本当にお前の記憶だったのか？

私は軽い眩暈に、思わず頭に手を触れた。一瞬、何か脳裏で雑音が混ざった気がする。

眩暈はすぐに収まり、私は慎二へと面と向かって対峙する。

彼の真意を聞くために。

「慎二、私はあなたを友達だと思ってる。それは、本戦で慎二と対戦する事に決まったあの時も、そして今も変わらない。ねえ、慎二。あなたの中で、私との友達としての記憶は、紛い物だったの？ 所詮はセラフが作った偽物でしかなかったの？ どうなの、慎二……!!?」

私は、あれが作り物だったなんて思いたくはない。あの場、あの空間を作り出したのは確かにムーンセルだろう。

でも、あの時に感じたもの全てが、幻想であつたとは思えない。それが、私の記憶があのです選からの地続きだったからだとしても、それを否定する事だけはしたくない。してはならない。だって――

だけどそれは、本当に私の記憶だったか？

うぐ……!!? 軽い／とてつもなく重い、頭痛がした。だが、そんな事に構ってられない。慎二の真意をこの耳で聞くまでは、意識を逸らす訳にはいかない!

「……知ったことか。僕は他の奴とは違う、生まれながらの天才なんだ……そうやって生まれてきたんだ……。他の奴の事なんて知るかいよいよ、教えてやるよ。僕にとって、お前もその他大勢の一人に過ぎやしないんだ。天才であるこの僕の友人なんて光栄な『役割』を与えられたんだから、お前はツイてる方じゃないの？ 単なる凡人にしてはさあ!!!」

「……ッ!!」

それが、慎二の本音か。今まで、そう思っていたのか、私の事を。いや、周囲の全てを。

彼にとつて、あの予選での出来事は、全てゲーム内で起きた事に過ぎなかった。私との間に有った、と思っていた友情は、ゲーム故の作り物でしかなかった、と。

知りたくなかった。知りたいと思つたはずの真実に、現実には、心が押し潰されそうになる。私を構成する全てが、崩れ落ちていくよな、足下が一気に崩れ去つたような虚脱感にも似た浮遊感。

気持ちが悪い。今の心境を表すなら、それが妥当だった。

この私を構成する意識は、あの予選での記憶のみを軸に形作られて

いる。それ以前の記憶がまだ戻っていないのだから仕方ないが、唯一の心の拠り所だったその記憶を否定されるのが、こんなにも辛いものだとは思わなかった。

「おしやべりはそこまでにしときな。ここからは、海賊稼業を優先するんだしねえ」

私の気持ちなんて関係なく、事態は進行する。ライダーが睨み合いの均衡を崩し、戦闘開始を慎二へと催促したのだ。

「僕を海賊なんて低俗な連中と一緒にするなよ!? まあ、いいさ。そもそも、それが目的だったんだしねえ!」

「よっしや! んじゃまあ、一切合切頂かかねえ!!」

ライダーが嬉々として戦闘態勢へと移行する。それに対応するように、アヴェンジャーも虚空から大鎌を出現させた。

「マスター! 今は戦闘に集中しなさい、というかしろ!! そもそもこの聖杯戦争は殺し合い。友や知人を手に掛ける事を躊躇えば、そこでアンタは終わりなのよ!!」

アヴェンジャーの叱咤する声が聞こえる。思いやりは感じられないけれど、私の為に叱ってくれている事だけは分かる。

そうだ……。私は、生き残るためにこの聖杯戦争を戦うと決めたはず。

本当に敗北が死と直結するのか、それは分からなくても、負ければ本当に全てが終わってしまう。なんとなくだけど、そう予感させる何かがあった。

確かに辛い。でも、今ここで何もせず折れてしまうのは、嫌だ。絶対に、イヤだ!!

「ごめん、アヴェンジャー。気を引き締めて行くよ!!」

今はこの胸の痛みを無視する。決して消えて無くなった訳ではない。だが、無理矢理にでも気にしない。ライダー程の強敵は、戦って生き延びる事のみを考えないと。とにかく、それだけを――。

それでもしなければ、私は戦う意志を持ち続けられないから。

「そうこなくっちゃあ!! 叩きのめしてやれ、ライダー!!」

慎二の命令と共に、ライダーが行動を開始した。手数限定されたこのアリーナでの戦闘で、仕留めに掛かってくるとするなら、最初からスキルによる攻撃が来るだろう。

そして、その読みは正解だった。

「出し惜しみナシだ！ 砲撃用意!! カルバリン砲、一斉掃射!! 藻屑と消えなあ!!」

彼女の掛け声と共に現れる、砲首の数々。これは——前回の比じゃない!? 悠に数倍……、二十もの砲台がアヴェンジャーへと、その照準を一斉に向けていた。

「アヴェンジャー!!」

「面倒くさいったらないわね、この海賊女は!!」

端正な顔を歪ませて、アヴェンジャーは口汚い言葉を吐き捨てながら鎌を構える。

向こうの数も前と比べれば文字通り桁違いだが、こちらも前回とは違い、アヴェンジャーの調整によつて、あの鎌は完全に彼女の物となっていた。

エネミーから奪つて即時使った時とはまるで違い、鎌が纏った黒炎は、刃の全長よりも十倍近く大きな炎の刃となり、元から大きかった鎌を更に巨大化させている。

「だけど、こちとらアヴェンジャーなのに、しぶとく生き残るのが売りなのよ! なんなら戦闘続行のスキルでも持つてるんじゃないかって程にね!!」

「ハッ! せいぜい吠えてなあ!! 撃てえーっ!!!」

そして、それを合図に砲弾の雨が、アヴェンジャーたった一人を狙つて発射された。艦船による砲撃が、船を狙うのではなく、一人を狙つて行われる事が何を意味するか。

例えるなら、本来堅い物を叩くトンカチで、豆腐を叩くようなものだ。それくらい、人間を狙った砲撃というのは脅威であると言える。

しかも、二十に及ぶ大砲による砲撃。普通なら、それを受けて人間の原型を留める事はまず無理だろう。

だが、

「喰らえ、私のオリジナル!! 灼き切れ 『祖国断つ黒刃』!!!」

アヴェンジャーは普通の人間に該当しない。彼女は砲撃が開始されるのとほぼ同じタイミングで、全力でその手にした大鎌を振り切った。鎌に宿った黒炎が、半月のような大きな弧を描いて宙へと放たれ、撃ち出された砲弾の悉くを真つ二つに切断する。討ちこぼしは有るものの、それも僅かなもので、アヴェンジャーは飛来するそれらを軽々と回避した。

当に圧巻の一言に尽きる。危機的状況にあつたにも関わらず、たつたの一振りですれを難なく退けてみせたのだ、このサーヴァントは。そして、驚いていたのは私だけではない。それは敵であるライダーや慎二にも言える事で、驚きとしては向こうの方がより強く感じているかもしれない。

「おいおいおい……今のを防ぐのかい。コイツア、とんだ強敵じゃないか」

「な……そんな、バカな!!?」

素直な賞賛の言葉を贈るライダーとは正反対に、慎二は口を大きく開けて、有り得ないものでも見たかのような顔で、愕然としながら震えていた。

「なんで岸波なんかのサーヴァントに、僕のサーヴァントの攻撃が効かないんだよ!!! おかしいだろ!! ち、チート! チートでも使つて

——」  
「そこまでにしときな、シンジ」

暴言を吐く慎二を手で制し、彼の口の動きを止めるライダー。いつも勝ち気で陽気な彼女とは思えない程に、その視線は鋭く、それでいて熱い。まるで、好敵手と対峙している時のような——。

「ちよいと敵さんをナメすぎてたようだよ、アンタは。にしても、流石は復讐者を名乗るだけはある。アンタ、それで本調子じゃないんだろ? まったく、大した女さ。うちのクルーに欲しくなるっつてもんだ」

「お生憎様ね。私は賊の真似事なんて御免よ。私は群れる事を好まないし、馴れ合いもまっぴら。気に入らなければ仲間だろうと殺してや

るわよ？ だから、仲間なんかに誘うのは大間違い。私はそんな薄汚れた魔女なんてね」

魔女と海賊、互いに社会から疎まれるはずの存在である彼女達は、同じような立場であっても相反し、交わる事は決してない。

アヴェンジャーとライダーのそのやりとりが、それを証明するかのごとく、笑っていないながらも睨み合いを続けるという、ある意味でちぐはぐな構図となっていた。

静かな睨み合いも、すぐに終わりを迎える事になる。流石にどちらも大技過ぎたのか、今の極僅かな時間の攻防でも、即刻セラフによるアリーナでの戦闘禁止令が発動したのだ。

それにより強制的に武装解除された事で、場を支配していた威圧感が幾らかマシなものになる。

「そつちのお嬢ちゃん。うちのマスターが悪いねえ。コイツは自尊心の塊みたいな人間なんで、悪気があってアンタにあんな事を言ったんじゃないのさ」

さつきまでは眼中になかったはずなのに、プレッシャーが緩和されたからか、私は急にライダーから話し掛けられ、少し驚いた。

まさか、彼女から謝罪の言葉が出るとは思わなかったからだ。

「な……!?! ば、バカが！ 悪気だって？ そんなの有るに決まってるだろ！ コイツは敵なんだ。敵に優しくしてやる必要がどこにあるんだよ！」

……慎二が慌ててライダーの言葉を訂正しているが、よく思い出してみれば、妨害こそすれど、マヌケにもいつもヒントらしきものを言っていた気がする。

多分、慎二は感情に流されやすいのだろう。その時の気持ちによって、その言動も左右され、喜怒哀楽が大きく表に出て来る。それが、『慎二』という人間性なのかもしれない。

だとすれば、さつきの言葉も、少しの真実はあっても、全てがそうではないのかもしれない。そう思うと、少しだけ救われた気がする。

「お、お前……!! なに勝手にほっこりしちゃってんの!?! ああもう!! やっぱりムカつくんだよ、お前と話してるときあ、岸波!!」

「そうカリカリしなさんな。アンタがまだ戦いたいとは言ってもだよ、シンジ？ 今日はまだこれ以上は戦えないんだ。さつきと引き上げるとするよ。なに、思わぬ収穫ならあったじゃないか。なあ？ フランス出身の魔女さんよ？」

!!? アヴェンジャーが、フランスの英霊？

いや、それよりも、どうして彼女がそれを知って、る………ん？

いや待て、待て待て待て。そういうえば、さっきのスキルを使った時、アヴェンジャーは何と言っていた？

より正確には、そのスキルの名前は？ 確か……、

『デュランダル・ル・ノワール祖国断つ黒刃』

あ、はい。私も分かりました。あの時はとにかく切羽詰まっていたから気付かなかったけど、デュランダルってアレだよな。

フランスの叙事詩『ローランの歌』に登場する英雄ローランが持つとされる聖剣で、イタリア語読みではドウリンダナ とも読まれ、デュランダーナとも呼ばれる、名だたる聖剣の一振りだ。その刀身、刃は、不滅の刃の意を持ち、あらゆるものを切り裂き、貫くと言われている。

え、まさかアヴェンジャーってあのデュランダルと関連のある英霊とか!? シヤルルマーニュ十二勇士とも縁があったり……!!?

「いや無いから。血縁とか、知り合いとか、そういうの一切無いから」否定された。それはもう、即時否却する裁判官のように、無表情に、何の感情も籠もっていない声で。

私の予測があまりに的外れで、呆れを通り越して哀れみすら抱いているという感じすらした。

「ともあれ、アンタがシヤルルナンタラと関係あるかどうかは別として、フランスと関係のある英霊の可能性が出たんだ。これを思わぬ収穫と言わずして何と言うんだってねえ」

「そう、だ。やった！ ハツ……ハツハハハ!! 何が正体不明だ！

遠坂の奴め、僕は岸波のサーヴァントの正体に一步近付いたぞ!!

早速帰ったらフランスを重点的に検索しまくってやるさ!!」

さつきまでの機嫌の悪さはどこへやら、慎二は瞬く間に活気を取り戻すと、いつもの調子で自信満々にアリーナから、ライダーと共に姿を消した。リターンクリスタルでも使ったのだろう。

結局、私達はライダーの強化こそは防げたが、その真名へと至る手掛かりは今回は手に入れられなかった。

でも、凶らずともアヴェンジャーのマトリクス……かどうかは分からないが、僅かでも素性が分かったのだ。それでよしとしよう。

「フランス……か。忌まわしいあの国が、私の祖国……。ああ、全く以て忌々しい！ 虫酸が走るわ!! いつまでもグズグズしてないで、私達も帰るわよ、マスター!!」

アヴェンジャーの機嫌がすこぶる悪化した。なんだから、今日はホントにツイてない。慎二との会話で気分が悪くなったし、財宝探しで疲れたし、ライダーのマトリクスはゲット出来なかったし。

でも、不思議だと感じた事もある。どうして、予選の時の事を思い出した時、眩暈や頭痛がしたんだろうか。

私の記憶なのに、他人の記憶を覗き見ているような気分になった。忘れるな。お前「達」が奪ったんだ。復讐者のサーヴァント、そしてそのマスター。

……止めよう。これ以上はまた気分が悪くなる。アヴェンジャーの言う通り、今日はもう帰ろう。

それに、明日は決戦の日なんだ。英気を養う、という意味でも早めの休息を取るの間違いではないはずだ。

どうせ近くに帰還ポータルもある事だし、近辺のエネミーだけでも倒して帰ろう。私はアヴェンジャーにそう伝えると、意外にも乗り気で了承された。憂さ晴らしでもしたかったのかもしれないな。

こうして、決戦前日の最後のアリーナ探索は終了した。もう、決戦までは秒読みだ――。



## 真名看破：ライダー

校舎はひっそりと静まり返っている。明日が決戦の日だからだろうか、マイルームへ戻るまでの間、誰一人として外を出歩いている者は居なかった。

既に、校舎全体が異様な空気で満たされているようで、嫌でも明日が運命の日なのだという事を、私へと宣告しているかのようだ。

「……」

私は自然と口数少なくなり、静寂の中で自分の歩く足音だけが虚空へと響く。無人ではないはずの校舎は、しかし、はるか昔に打ち捨てられた無人の廃校舎であるかのように、恐ろしい程の静けさに支配されていたのだ。

「いよいよ明日が決戦ですね」

マイルームへと戻って、妙な緊張感から解放された私に、開口一番でアヴェンジャーが決戦の事を口にした。

彼女にしては、いつもの私をからかうような素振りは一切無く、最初から真面目な顔をしている。それが余計に、本当に明日が私の運命を決定付ける日であるのだと、自然と意識させていた。

「今日までの間、私達はしっかりと出来る事をしてきた。あとは覚悟を決めるだけよ。無駄に気負わず、エネミーと戦う時と何も違うわいな。違うのは、相手が手強いという事だけ。油断と慢心、それさえ気を付けていれば、それでいいから」

彼女にしてみれば、明日は決戦の日であると同時に、私を見極める日でもある。私がマスターとして相応しいかどうか。

負ければそこまで。そのまま敗北と同時に、契約が切れるだけ。

勝てば、私は一応は彼女のマスターとして認められる。この先も、私と共に戦ってくれるはず。

そうだ……。いつもと同じだ。慎二とはアリーナでも何度か戦っ

た。明日はその延長線上にあるに過ぎない。

今までの全てが、明日の為にあつたのだ。今日までの全てが、明日へと集約されるだけ。

それだけの事、だ。

「……なんて、そう割り切れたら良かったのに」

自問自答の末に、私はやっぱり、それを簡単には受け入れられなかった。

だって、相手は友達だ。仮とは言え、慎二と私は友達だった。そんな人物と、命を賭けて戦うなんて、そう簡単に認められるはずがない。「まだそんな府抜けた事を……って、無理もないとは思うけど。アンタは記憶が戻らず、結局そのまま決戦に挑むんだものね？ 予選の頃の気分が抜けないままに」

うじうじする私が気に入らなかつたのか、彼女の辛辣とも取れる言葉が私の胸に刺さる。

アヴェンジャーの言う通り、私はただの学生だったという記憶しか持ち合わせていない。この聖杯戦争に参加した目的も、望みも、願いも、何も思い出せていない。

本当の自分がどんな人物だったのかさえ、はっきりと掴めてすらないのが、この『私』だ。

こんなあやふやな状態の私が、ただ生きたいという理由だけで、慎二に勝てるのだろうか。

私は私に分からない。故に、自信なんて持てるはずもなかつた。

「……フン。まあ良いわ、私の足さえ引つ張らないでくれたら、それで。そうそう、私はもう休むけど、アンタもさっさと休みなさいよ。明日、決戦に赴く前に、自室にて情報を整理しましょう。まだ真名も掴めてないでしょうし、敵を知れば、危うき事もありますからね。私とあの海賊、どちらの悪意が勝つか、明日はそれを教えてやろうじゃない」

アヴェンジャーはそれだけ言って、さっさと寝てしまう。明日に備えて早めに休みたかつたのだろう。

それだけ、アヴェンジャーにとってライダーは強敵であると捉えて

いるのだろう。万全を期して、明日の戦いに挑む為に。

私はまだ頭と心の整理がつかないが、ひとまず彼女の言葉に従い、横になり休むよう努める。

くよくよ悩んでも仕方ない。刻限はもう、すぐそこまで迫っている。

明日は、今までのようにセラフによる邪魔は一切入らない。一度始まってしまえば、どちらかが倒れるまで、終わらない。

微睡みの中で、私は、そんな事を思いながら眠りについた。

翌日。そう、決戦当日の朝。

私は端末への着信で目を覚ました。確認してみると、私と慎二の戦いは夕方からのようだ。

隣へチラリと視線を送る。アヴェンジャーはまだ寝息を立てており、豊かな双丘がゆつくりと上下しているの、どうやらまだ寝ているらしい。

彼女を起こさないように、私は静かにマイルームを出て購買へ向かう。決戦の日に朝食を抜いては、いざという時に力が出ない。サーヴァントは別かもしれないが、こういうのは気分の問題だし。

「いよいよ決戦の日となったが、準備は整ったかね？」

マイルームを出てすぐに、私は横から声を掛けられる。その声に振り向いてみれば、そこには言峰神父が立っていた。

いつもながら思うが、本当に神出鬼没な神父だ。

だが、それも今日に限っては当然の事かもしれない。

そう、今日は決戦の日。自分と慎二、どちらかが退場する日。それは私達だけに限った話ではなく、現在の参加マスターの半数も同じく退場する事になる。

——命を散らす、本当に？

アリーナでも何度か命の危機を感じた事はあるが、正直……あまりに現実からかけ離れた『死』という言葉には、未だに真実の響きを感じ

じられなかった。

頭ではなんとなく分かっている。だけど、心がそれを認めたくなかったのだ。勝つという事が相手を殺すという事で、負けるという事が命の終わりであるという事を。

「全ての準備が出来て、決戦の時刻になれば、私の所に来たまえ。一階玄関前に控えているので、来ればすぐに分かるだろう。それまでに、魂の改竄や、購買部で身仕度、敵の真名がまだ分かっているのなら、それを突き止める事に努める事だ」

言うだけ言って、彼はその場を去って行った。他のマスターにも説明に行つたのだろうか。

私は彼を見送ると、自分もまた、購買へと足を運ぶ。朝食の調達だけでなく、必要な物も一緒にまとめて買ってしまおう。

マイルームへと戻り、既に起きていたアヴェンジャーの口に無理矢理に焼きそばパンを突っ込む。

朝食要らない派の彼女には、こうして無理にでも食べさせるのが手っ取り早い。

……口に焼きそばパンが入りきらず、ちよつとイケない感じの絵面になっているが、気にしたら負けだ。

今日は大事な日なのだし、盛ってる暇なんて私には欠片も無い！朝食を手早く済ませ、私は端末からマトリクスを開いた。

決戦の日はやってきた。時間になれば、慎二との戦いが始まるのだ。

——しかも、命を賭けた。

それが真実かは分からないが、今まで集めた情報ぐらいは一度整理しておこう。

間桐慎二。

予選の頃には自分を友達と言った、どこか憎めない男。私自身も、彼を友達だと認識している。

そんな彼の自慢のサーヴァント、彼女が使った武器は……クラシツクな二丁拳銃。

そう、アリーナで力を見せ付けられた時、彼女が使っていたのは、クラシツクな二丁拳銃だ。

人付き合いの上手くない慎二と彼女は、良いコンビに見えた。豪快な姉、という感じだろうか？

そして、慎二は図書館にあった、彼のサーヴァント自身の手記を見し、アリーナへと隠したんだった。

その手記に書かれていた、彼女の宝具とは何だったか…。

それは、「船」だ。

古く、文字も掠れたその手記には、彼女の駆った『黄金の鹿号』<sup>ゴールデンハインド</sup>という船の名が読み取れた。

更に彼女の攻撃により、船に乗る英雄である事が分かり、彼女のクラスが『ライダー』だと判明したのだ。

最初は余裕を見せていた慎二も、こちらが情報を得ていく事で焦りを見せていった。アリーナに入るのを妨害したりと、子どもじみてはいたけれど。

だが、少しずつ得た情報を並べていけば、最初は全く掴めていなかったはずの、慎二のサーヴァントの正体が臍気ながら見えてくる。

そう、彼女の真名はおそらく――

「――フランシス・ドレイクだ」

フランシス・ドレイク。

七つの海を股に掛け、喜望峰を越えた破格の海賊。

無敵とされた、スペインの艦隊を打ち破り、一躍英雄となった人だ。太陽を落とした――とは、正に言い得て妙だろう。まさか、女性だったとは意外だったが。

「ふーん？ どうやら、あの女の真名を突き止めたようですね。初心者には見事、と言ってあげましょう」

ライダーの正体を知っていたらしいアヴェンジャーが言うのだ。

これは確定的だろう。

ともあれ、決戦までに真名が分かったのは、運が良かったと言える。慎二はどこか抜けているところがあるとは言え、自分とは比べ物にならないレベルの、一流のハッカーなのだから。

せめて、その差が、情報で少しでも埋まるといいのだが――。

「真名さえ分かれば、もうマトリクスに関しては文句無しですね。さあ、少し食休みしてから、教会に行きますよ。魂の改竄をしに、ね」  
アヴェンジャーはそう言いつつ、甲冑を身に付け始める。すぐに出られるようにしているのだろう。

私も情報整理の片手間に食べていた焼きそばパンをパパッと口に放り込む。アヴェンジャーの用意が終わり次第、教会へ向かうとしよう。

相変わらず厳かな雰囲気、漂う教会の中は、かといって重苦しい空気ではなく、なんとも不思議な空間だ。

だが、今日はなんとなくであるが、少しピリピリしているような……？

「なんだ、君も決戦前に魂の改竄に来たのか。慎重なマスターの多い事だね、まったく」

祭壇の前にまで行くと、私に気付いた橙子が声を掛けてくる。君も、とは……？

「ん？ ああ。君以外にも、当日になって調整に来るマスターは多くてね。いや、別に貶してる訳じゃない。慎重に慎重を期すのは良い事だよ、うん。だが、やはりこう多くては、不肖の我が妹の機嫌も悪くなるというものだね」

なるほど。道理で、教会内の空気がピリピリしている訳だ。青子の方を見ると、眉間にシワを寄せて、手元の操作パネルを睨みつけながら、何やらブツブツと呟いていた。

これは、頼まない方が良さののだろうか……？

「いいや、コイツの事は気にせず、どんどんこき使ってやってくれ。そ

もそも、それが原因で君が負けたとあつては、言い訳のしようがない  
多大なミスだからな」

「うっさい！ さつきからずっと聞こえるっつーの！ 分かってるわ  
よ、仕事なんだからきつちりやりますう!!」

あはは……相も変わらず仲のよろしい事で。

「別にこんなのと仲良くなんてないし！ もう、あなたも魂の改竄に  
来たんでしよう？ なら早くしてくれる？ 数十人分の改竄こなし  
て、マジで疲れてるから、ちよつと休ませてほしいし」

機嫌は悪いが、流石はプロといったところか。仕事はきちんとこな  
してくれるらしい。

アヴェンジャーは絡まれるのが面倒だったのか、黙って祭壇の上に  
立つと、静かに施術を受ける態勢に入る。

「じゃ、ちよちよいと片付けるわね」

青子の作業が始まると共に、アヴェンジャーの体が光に包まれて  
いった。

やっぱりこの作業が終わるまでの時間が、どうにも手持ち無沙汰と  
なってしまう。今度から何か対策でも考えようか。

……今度があれば、の話だが。

とにかく、今度があると想定して考えよう。

たとえば、そうだな……ゲームでもして待っていようか。この前  
買った『エ○ヤの伝説 時のフライパン』は夜中にちよくちよくやつ  
ていたが、クリアしてしまった。

いやまさか、主人公のエ○ヤにあんな秘密があつたなんて。まさか  
少年期と青年期が別々の……、いや、それはここでは語るまい。注意  
書き無しでネタバレ駄目、絶対。気になるお方は各々でプレイしてみ  
てネ。

そんな訳で、『エ○ヤの伝説』シリーズに大ハマりしてしまった私。  
既に次の作品にも目星を付けてある。シリーズ最新作の『エ○ヤの伝  
説 エ○ヤ・オブ・ザ・ワイルド』だ。

今までの世界観を引き継ぎながらも、これまでのシステムとは一新  
した完全新作……というのがキャッチコピーらしい。

そういえば、最近見つけたのだが、『エ○ヤの伝説』と並び人気があるらしい育成ゲームで、その名も『鯖モン』。

これは略称であるらしく、正式名称を『サーヴァントモンスター』。それを略して『鯖モン』という訳だ。

なんでも、デフォルメされて可愛らしい姿となった英霊達を育て、戦わせるというもので、他のプレイヤーとの通信対戦や交換も出来るらしい。

ゲーム内でのプレイヤーの事は、現実と同じくマスターと呼ばれ、鯖モンマスターを目指すのがゲームの最終的な目標のようだ。

ただ、このゲームなのが、プレイするのに制限が掛けられている。というのも、登場するのが英霊だけあり、聖杯戦争に大に関わってくるのだ。

なので、もし対戦相手のサーヴァントが登場しても、セラフによって記憶にプロテクトが掛けられ、ゲームと現実の記憶間での結び付きにロックが生じるらしい。

現実離れたその対策に、流石は管理の怪物とまで言われるムーンセルと言わざるを得ない。

さて、ゲームの話はここまでにして、今回は決戦前の微調整のようなものだし、そこまで時間は掛からないはず。

「……少しいいかね？」

と、そろそろ終わるかと思っていたら、橙子から声が掛かる。彼女の方から話しかけてくるのは、正直なところかなり珍しいので、何か重要な内容だろうか。

「君の対戦相手は、知人だそうだね」

「……！」

「ふむ。その反応からするに、まだ完全に踏ん切りがつかっていないか」

橙子の視線がなんだか、こちらの事を全て見透かしているような錯覚に捉えられてならない。そんなに分かりやすく表に出ていたのだろうか、私……？

「なら、先達として助言をやろう。聖杯戦争では対戦相手へのあらゆる



る情を無視しろ。愛情、友情、温情……それらは戦う上で邪魔だ。それに、魔術師なら知人を殺す事だつて珍しくはないからね。かつての学友だろうと、必要があれば殺す。親兄弟だろうとも道を違えれば殺し合う。それがこの世界だ」

まるで自分の体験してきた事のように語る彼女は、私から視線を外し、ここではない、どこか遠くを眺めていた。

その顔に悔いはない。ただただ、過去の思い出を見つめているような、そんな表現に難い顔をしていた。

「さて、そろそろ愚妹の方も終わる頃合いだろう。健闘を祈るよ、若き未熟なマスター。君が迷いを乗り越える事を、少しばかり願っておくとするさ」

その言葉を最後に、橙子は再び作業へと戻る。もう語る事は何もない、という事なのだろう。

そして――

「これで……終わりつと！ あゝ、疲れた〜!!」

青子のボヤキと同時に、アヴェンジャーを包んでいた光が収束していった。

光から解放されたアヴェンジャーは、手を見つめながら何度か開閉を繰り返して、力を少し取り戻した事を実感するかのようには確かめた。た。

「また少し、本来の力に近付いたようですね。悪くないわ」

そう言って、満足げに祭壇から飛び降りると、青子に礼も言わずに、彼女はさっさと出口へ向けて歩き出してしまった。

「ほら、帰るわよマスター。あとは時間が来るまで待つのみです。マイルームで待機していきましょう」

私の返事を待たずして、アヴェンジャーは教会の外に出る。私は溜め息を吐き、橙子と青子に頭を下げて短くだけ礼を言うと、我がサーヴァントの後を追ったのだった。

――。

今し方、教会を出て行ったマスターを見送った蒼崎青子は、ようやく仕事から解放され、体を伸ばして一息つく。

が、その顔は何故か釈然としないものだった。

「うーん……」

「なんだ、鬱陶しい。お前が悩み事とか、この中が辛気臭くなるから、外でお願いしたいんだがね」

「……アンタ、私に喧嘩売らないと生きていけない病気なワケ？ 別に悩みとかじゃないわよ」

少し険悪な空気になるが、そこはそれ。いつもの事なので、二人は互いに気にしない。

「ほら、今来てた子。魂の改竄をしてる時に、ちよつと気になる事があつたっていうか」

青子の口から、先程までここにいたマスター、『岸波白野』の事が語られる。本人はサーヴァントを追って、そそくさと教会を後にしたので、それについて言えなかったのが気掛かりとなっていたのだ。

「あのマスターがどうしたと？ まさか、また不手際を起こしたとは言わんだらうな？」

鋭い睨みを利かして、青子を威圧する橙子だったが、青子は平然とそれをはねのけ、逆に食ってかかる。

「してないわよ！ 何もしないアンタに文句とか言われたくないっつーのー！」

「なら何だ？ 何が気になるの？」

「それは……」

一瞬、言おうか言うまいか迷う青子。だが、別に隠す必要もなかったもので、ここは素直に言う事にした。

「サーヴァントには特に問題はなかった。いやまあ、後付けの違法データスレスレの追加データならあつたけど。問題はそこじゃないわ、マスターの方」

「マスターの方……？」

「そ。あの子の魔術回路、どういう訳か分からないけど、一瞬だけエラーが発生した。まあ、詳しく調べる前にすぐに表示が直っちゃった

んだけど」

「ふむ……、どういうエラーだった？」

橙子がここまで気にするのは珍しい。それこそ、さつき彼女自ら、あのマスターへと助言をしたという事から、蒼崎橙子は岸波白野を気にかけている節がある。

それを見逃さない青子ではない。

「あら？　ずいぶん気にするのね、あの子の事」

「いや、あのマスターから漂うお人好し臭が、知り合いに似ているものでね、つい気にしてしまうだけだ。で？　下らん事を言う前に、エラーがどんなものだったか答えたらどうだ？」

「食えない女……。で、エラーについてだったわね。まあ、簡単に言えば魔術回路がダブってた……って感じね。正確に言えば、ステータスが二重になったというか……」

それはつまり、どういう事なのか。

ステータスが二重になっている、岸波白野のステータスが二つ存在したという意味になる。

同時に岸波白野という人間が、二人存在していたという、何とも有り得ない現象が起きていたのだ。

「でも、多分バグね。あの子は記憶に問題が残ったままみたいだし、その影響でも出たんでしょ」

深く考えても、結局はすぐに直ったのだし、無意味だと判断した青子は、それを忘れる事にした。本人に伝えたところで、どうにもならない事だったからだ。

「まあ、バグだろうな。気になるところではあるが、こちらで対処のしようもない。それに、問題があればセラフがどうにかするだろうしな」

気にはなるが、仕方のない事。橙子もまた、そう割り切る。128人もマスターが居れば、一人はそういう事が起きてもおかしくはないだろう。そう自分に言い聞かせて。

その産声を誰も知らない。

復讐者という異常<sup>バグ</sup>がもたらした、忌むべきモノの誕生を、まだ誰も知る事はなかった――。

Moon nightmare in the D  
espair

私は存在を奪われた。

本来在るべき居場所は消え去り、『私』という存在意義さえも、真っ黒に塗り潰されて。

在るべき、至るべき未来は、違うものへと変貌した。そこに、私の居場所はどこにもない。

『私』は確かにそこにある。

だけど、私はその中には居ない。本当なら、月の聖杯戦争に参加するのは『私』と彼女ではなかったはずだ。

なのに、彼女が存在してしまった事で、因果が狂ってしまった。

異世界——平行世界からの来訪者。それが、彼女の正体だ。

本来なら、この世界に存在し得ないはずの彼女が、月の聖杯戦争に介入するという、同じく本来なら有り得ないイレギュラーの発生。

それは同時に、私というバグの発生を引き起こした。

『私』はそのまま覚醒したが、バグにより私という狂った概念が誕生

してしまっただのだ。

だからこそ。

だからこそ、私は『私』を許してはならない。

私は彼女を許せない。その所業を赦せない。

私という概念が、彼女という存在の為に産み落とされ、彼女が『私』と手を取り合ったが故に私の価値が奪われた。抹消された。

私が歩むべき道は、彼女によって閉ざされたのだから――

――許せるはずがない。

だが、私が生まれたのは彼女のおかげでもある。こんなバグとして生まれたくはなかったが、でも、それも少しはありがたいかもしれない。

彼女というイレギュラーによって生まれた私は、『私』とはその体を構成するものが異なったからだ。

『私』を構成するのは、他のマスターやAI、NPCと何ら遜色ないありきたりのデータに過ぎない。

しかし、私を構成するのは、月の裏側に封じられし悪性情報によって汚染された霊子。

体の芯まで黒く染め上げられた私に、『私』のような優しさや甘さは一切残されてなどいない。

まささらだった『私』というキャンバスは、濃厚に醸造された悪性情報によって真っ黒になったのだ。

それこそが私。

イレギュラーによって生まれ、  
イレギュラーによって汚染され、  
イレギュラーによって邪悪への成長を運命付けられ、  
私は復讐を決意した。

あなた達のせいで私は生まれた。

お前達のせいで私は汚染された。

貴様等のせいで私は悪になった!!

ああ：確かに、正当なる復讐ではないだろう。  
けれど、私は復讐しよう。

生まれるべきではなかった、芽生えるべきではなかった、この私と  
いう穢れた存在を、『私』と彼女に清算させるのだ。

凄惨に、残酷に、無慈悲に、冷血に。

お前達という存在を、私という概念が蹂躪する事で、私の最初で最  
期の『私』への復讐と為そう。

ふふ……。それこそ、彼女には相応しい結末だろう。

アヴェンジャーたる彼女には、復讐を以て我が誕生の礼とするべき  
だ。

だが、まだ足りない。

奴らを殺し尽くすには、力が足りない。手駒が足りない。なによ  
り、憎悪が足りない。

今はまだ、その時ではないのだ。

今はただ、『私』が勝ち進むのを待つとしよう。

『私』が育てば、私も育つ。

『私』が対戦相手に勝てば、私が対戦相手を喰らえる。

聖杯戦争、その終結の暁には——私手ずから『私』と彼女を殺せるだろう。

ああ……楽しみだ。

この世全ての悪に染まった私が、あなた達に復讐する、その時が。



## 第一回戦決戦 開幕の刻、来たれり

決戦当日という事もあってか、保健室やアリーナ入り口は固く閉ざされ、中に入るのはおろか、ピクリとも動かなかった。

決戦前に桜とお茶でもして心を落ち着けようかと思っただが、残念ながらそれは出来ないようだ。

夕方——慎二との決戦まで、私はアヴェンジャーと共にマイルームで時間が来るのを待っていたが、私は迫る戦いへの緊張で、自然と無口になっていた。

アヴェンジャーも何も言葉を発する事はなかったが、私と違い、ただ静かに闘志を鋭く磨き上げているように見られる。

これが、戦闘を直に経験した者と、そうでない者の差なのか。

彼女の闘気とも殺気とも言えないような、曖昧だが痛烈に身に刺さる強く鋭利な意志が、時間が来るまでの間中、ずっと私の精神を圧迫してきていた。

永遠にも思えたこの時間も、やがて終わりを迎える。

「……時間だ」

手に乗せてずつと見つめていた端末に表示されている時計が、決戦の時間が来た事を告げていた。そろそろ決戦の地へと赴かなければならない。

「……」

「……行くわよ」

端的にそれだけ言うと、アヴェンジャーは返答するよりも前に、私より先にマイルームを後にした。

私は、まだ決心も踏ん切りもついていない。そんな状態で戦場に向かって、彼女の足を引っ張ってしまうのではないかと、一抹の不安を胸に抱えたまま、マイルームを出たのだった。

相変わらず、校舎の中はシーンと静まり返っており、他のマスターの姿はない。既に決戦の終わった組は確実に存在するはずだが、それ

でも、その姿は影一つ掴めなかった。

静寂。それでいて何か大きな威圧感のようなものが、一階に降りるにつれて強く感じられ始める。その正体が何であるのか、それは目的地の手前に来て、すぐに分かる事となる。

階段を降りてすぐに、言峰神父が立っているのが視界に入った。彼自体に別段おかしなところは見られない。いつもと変わらぬ胡散臭さを纏って、彼は用具室の前に佇んでいる。

そう、問題は彼ではない。彼の後ろの用具室こそが、強烈な違和感と威圧感の正体だったのだ。

普段は何の変哲もないそこは、今は光り輝く鎖で封鎖されており、扉の中心の部分に二つの穴があつて、そこが不自然な程に光を纏っていた。

そういえば、その部分の大きさがちょうどトリガーと同じくらいのサイズのように思われるが、もしかすると、ここがその鍵を使う場所——つまりは決戦場への入り口、という事なのかもしれない。

「ようこそ、決戦の地へ。身支度は全て整えたかね？」

私とアヴェンジャーに気付いたらしい彼は、それこそ聖杯戦争の監督役らしく、最後通告を行ってきた。

「扉は一つ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、コロッセオ闘技場の扉を開こう」

今更、引き下がるなんて出来るはずもない。覚悟がどうあれ、私には進む他に道はない。

言峰神父の問いに頷いて返すと、彼は満足そうに、または不敵に笑ってみせた。

「いいだろう、若き闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。ささやかながら幸運を祈ろう。再びこの校舎に戻る事を。そして——存分に、殺し合い給え」

神父の言葉にしては、いささか不謹慎に過ぎるとは思ったが、そこには彼なりの真摯な気持ちが込められているような気がして、不思議とツッコみたい気持ちは起きなかった。

「……………」

アヴェンジャーはマイルームを出てから終始無言を貫いている。私は、言峰神父が扉の前を譲ったのを見届けて、端末を扉へとかざした。

すると、端末の画面が光を放ち始め、そこから飛び出すように、アリーナで取得した二つのトリガーが扉の光る穴へとはめ込まれていく。

そして、トリガーがガチン、という音を鳴らしてはまった瞬間、解錠音のようなものが鳴り響く。それと同時に、光り輝く鎖は消滅していき、気付けば用具室の扉は、エレベーターへと変貌を遂げていた。静かに開いたエレベーターの中からは、厳かな空気が外へと溢れ出している。やはり、そこは決戦への入り口に他ならなかった。

ゆつくりと、私はエレベーターに足を踏み入れる。それに続くように、アヴェンジャーも静かに私の隣に並び立った。

マスターとサーヴァントが乗り込んだ事を認識したのだろう、エレベーターは私達が乗り込んですぐに閉ざされる。これでもう、本当に後戻りは不可能となった。

ゆつくりと、私達を戦場へと運ぶ箱は、真っ暗のままに下へと降りていく。いや、沈んでいく。なんとなく、感覚的にそうなのだと分かる。

深みへと、今私達は当に沈んでいる最中だった。

やがて、深淵へと向かう箱舟の中で、私は、ここに居る人間が私達だけではないという事に気が付いた。

私達とは対面に位置する暗闇。そこに、暗闇であるというのに、ぼんやりとした人影のようなものがあると分かる。目が闇に慣れたからかもしれない。

向こうも、こちらと同じく、私達の存在に気付いたらしく、少し警戒したような気配が漂い始める。

そして、ようやくお互いにその姿を視認する事になる。

「やっぱり、岸波だったか。ふーん、なんだ、逃げずにちゃんと来たんだ。ああ、そういえばそうだったね、学校でも生真面目さだけが取り柄だったっけ」

声の主——慎二が、いつもと変わらぬ態度で私を見下してくる。何故か、それが私にはとても安心感をもたらしていた。

互いが互いに認識したからか、暗闇は薄れていき、完全に闇が晴れたこの場の全景が露わとなる。

私と慎二の間を隔てるように、半透明な壁があり、人が四人も乗るには少しばかり広い空間だった。

エレベーターに揺られながら、私達はどこまで降りていくのかも分からない状態で、到着を待たざるを得ないという事か。

「でもさ、学校でも思ってたけど、空気読めないよねホント。せつかく僕が忠告してやったのに」

それは慎二も変わらない。話しかけずとも、向こうから話しかけてきた。

「悪いけど、君じゃあ僕には勝てないよ。どうせ負けるんだから、さつさと棄権すればよかったのに」

ムカ。

いくら覚悟がまだ出来ていなくても、流星の私もイラツとくるのは仕方ない。

言い返さないのも、それはそれで癪だ。

「そんな事、やってみないと分からないよ」

「……は？」

壁ごしに、慎二の間の抜けた顔が見て取れる。こちらに触れないと分かっているはずなのに、慎二は堪え切れず、バカにしたような笑いを浮かべて近寄ってきた。

「なに言ってるんだお前？ 僕との差を考えろよ。学校でだって、一度も僕には勝てなかっただろ？ 何度も言ったよね。凡人がいくら努力しようと、天賦に届く訳ないんだって。まあ、相手が誰であれ関係ないか。僕には誰も勝てやしないんだから」

いつもの事ながら、この自信は一体どこから来るのか。いくら友人

とはいえ、ナルシストも度が過ぎれば、果てしなくウザさ極まるな。こちらの少々冷たい視線に気付いた様子もなく、慎二の口は止まる事を知らない。

「僕と僕のエル・ド……サーヴァントは無敵だからね」

「今更言い直したところで、無駄ですが。この子、そのサーヴァントの真名を見抜いてるし」

「……な!？」

自適悠々と語る慎二に、突然横から口を挟んだアヴェンジャー。彼女の言葉に、慎二はあからさまに取り乱していた。

「僕のサーヴァントの真名を……見抜いただって!? は、ハツタリだ。そんなのハツタリに決まってるさ!」

「フフン。なら、言ってやりなさいな、マスター? あの海賊女が、一体誰であるのかを!」

いやなんでアヴェンジャーが自慢気に話しているのか分からない……事はないのだけれど。まあ、私はあなたのマスターな訳だし?

少しばかり自分のマスターの出来るところを見せびらかしたいという気持ちは、分からないでもない。

別にアヴェンジャーの威信の為という訳ではないが、ライダーの真名が何であるのかを答えるくらいなら良いだろう。

「分かったよ、アヴェンジャー。言うね、ライダー。あなたの真名は――『フランシス・ドレイク』。七つの海を股に掛け、当時無敵とされたスペイン艦隊を破った大海賊。そして、世界で初めて、航海で世界

一周を成し遂げた偉大なる冒険家。それが、あなたの正体だ、ライダー」

「!!?」

「……」

私がライダーの真名を口にすると、慎二の顔にみるみるうちに大量の脂汗が浮かび始める。

しかし、そんな彼女のマスターとは対照的に、名前を言われた当の本人たるライダーは、無言のままに私の事をジッと見つめていた。

「……っは」



乱そうという目論みでもあったのだろうか、当てが外れて面白くなさそうにしていた。

「それにしても、お前も運が悪いよな。一回戦目から僕に当たるなんて。もしこれが決勝戦だったら、友人のよしみでちよつとくらいは見せ場を作つてあげても良かったんだけど——」

言いかけて、途中で何か思いついたらしい。慎二は嬉々として、それを提案しようとしてくる。

「ああ、そうだそうだ、いいコト思いついた！　これからの戦いで、君に得になる話だけど、聞かない？」

慎二の事だ、どうせロクな話ではないだろうが、聞くだけ聞いてみるか。聞くだけならタダだし。

「一応、聞かせて」

「賢明だね、それでこそだ。……まあ、こういうコトを僕から切り出すのはちよつと気が引けるんだが……」

それなら言うな、というツツコミたい気持ちを必死に抑えて、続きを聞く。

「……君さ。この戦い、わざと負けくない？」

ほんの僅かな間だが、一瞬、私は固まった。彼が何を言ったのか、それを頭で再確認する必要があったからだ。

「何を、言ってるの……？」

「だって無駄じゃないか！　真名がバレたところで、僕の圧勝は目に見えてるけど、それでもほんとに少しは消耗するからな。戦いつてのは如何に戦力を温存するかだ。勝ちが見えている戦いでも、勝者はカードを切らなくちゃいけない」

なんだ、その上からの物言いは。戦う前から、もう結果が見えている？　そんなの、やってみなくちゃ分からないじゃないか。

「勝つにしても、そこが辛いところなんだが……ほら、君がわざと負ければ僕は力を温存出来るし、君も痛い目に遭わずに済む！　どうだい？　実に合理的だ！　君も無意味に負けるよりは、僕の役に立った方がいいだろう？　余計な怪我をさせる事もないしね。本当に戦うとなると、僕のサーヴァントは手加減が出来ないからな。そうだ、大

サービスで、優勝賞金を分けてあげてもいい。僕が欲しいのはタイトルだけだしね」

慎二からすれば、この提案は私への温情のようなものなのだろう。だから、怪我の心配や賞金の分け前などを引き合いに出してきたのだろうし。

だけど、それはアヴェンジャーの事を完全に無視した提案でしかない。彼女は、何か目的があったからこそ、この聖杯戦争に参加し、私をマスターとしてくれた。

その彼女を無視したような提案を、私が受けると思っているのか、慎二は？

「どうだ、夢みたくない話だろ？ 友人同士、手を取り合って先に進もうじゃないか！」

そう言つて、決して触れる事は叶わない手を差し出してくる慎二。私は当然、彼に対してこう答える。

「断るよ。私は、その提案を受け入れられない。ううん、受け入れるべきじゃない。受け入れちゃいけないんだ」

「ちゃんと戦うつて？ ……はあ。お前つて本当にバカなんだな」

心底、残念だと言わんばかりに溜め息を吐く慎二。あまりにもわざとらしいそれに、こっちこそ呆れて言葉も出ない。

「呆れを通り越して哀れだよ。……そっか、分不相応の力を手に入れて、僕に勝てるとかドリームを見ちゃったのか。おい、そのサーヴァント。お前から言つてやれよ、諦めた方がいいって」

私が提案に応じないと分かるや、今度はアヴェンジャーに説得するように持ちかける慎二だったが、彼こそバカなのではないかと思いたくなる。

そんな提案、今までのアヴェンジャーとのやりとりで、どう返されるかなど分かっているだろうに。

当然、アヴェンジャーは慎二の方を見ながら、ありつたけの嘲笑を加えて答えた。

「やっぱり海藻類はどこまで行っても海藻類なのです。海に揺られてたゆたううちに、脳細胞が死滅したのかしら？ ……あ。これはご



めんなさいね。ワカメには脳細胞どころか、考える為の脳すらありませんでしたね」

毒舌に毒舌を上乗せしたような毒を吐いたアヴェンジャーに、慎二は今まで見た中で一番と言える程の怒り顔になる。効果抜群すぎて、ちよつと怖いんだけど。

「な……!! ぼ、僕になんて口を!! 所詮は使い魔の、サーヴァントの分際でっ!!!」

「アハハハ、言われちゃったなあ、マスター」

自分のマスターが盛大に貶されたというのに、面白そうに笑うライダー。当然、それに慎二は更に怒りを爆発させる。

「お、お前! どっちの味方なんだよ!」

「そりやアンタに決まってるだろ。アタシはアンタの副官だよ? 金額分はきつちり働かせてもらうさ。でもなあ、八百長なんざツマらないだろ? 手加減とか出し惜しみとかよしてくれ。アタシや宵越しの弾は持たない主義さ。いいじゃないか、食い物も男も女も殺し合いも、真つ向勝負が一番気持ちいいんだからさ!」

マスターである慎二とは違って、ライダーはここで完全に決着をつけたいらしい。何度となく小競り合いをして、時に押し、時に押された相手——アヴェンジャーと。

「どうせアタシら悪党だろう? 悪党の利点なんて、食い散らかせるコトだけじゃないか。湿気った花火なんざ誰も喜ばない。アンタも悪党なら、派手にやらかせばいいんだよ」

「誰が悪党だよ! ぼ、僕をお前なんかと一緒にするな、この脳筋女!」

「はっはっは! いいね、その悪態はなかなかだよシンジ! アンタ、小物なクセに筋はいいのが面白い!」

慎二の悪口を受けて、ライダーは怒るところか彼を褒めた。そればかりか、少し乱暴な手付きではあるが、ワシヤワシヤと慎二の頭を豪快に撫で始める。

「ちよ、やめろ、やめーろーよー! 頭撫でるな、この乱暴者! あと酒臭い! 真面目にやれよな!」

……。

この二人、実は良いコンビなのかも知れない。マスターとサーヴァントは相性の良きで選ばれるというが、慎二にとってはこの手の豪快な女性が、共闘に適して“いるのだろうか？”

なんだか分かる気がする。二人を見てみると、調子に乗っている弟分を軽くあしらう豪快な姉貴分——という構図が浮かんでくるからだ。

そうこうしている間も、エレベーターは決戦の地へと着実に近付いていた。私達が、それを実感する事もなく、唐突に終わりはやってきた。

ゴウン、という軽い振動と共に、エレベーターが止まる。いつの間にか終着点まで来ていたようだ。

扉が開かれ、これで本当の意味で、戦場への道は開かれた。この先に進めば、いよいよ慎二達との決戦が始まる。

自然と私達は、互いに壁ごしにマスターとサーヴァントで並んで向かい合っていた。ついに、刻は来たのだ。

「……ふん。素直に降参しとけば、トドメの一発くらいは勘弁してやろうと思ったのにな。いいよ。お前がその気なら、遠慮なくやってやる。圧倒的な実力差ってヤツを思い知ればいい。僕のエル・ドラゴのカルバリン砲でボロボロになって後悔するんだね！」

自信たっぷりと言い放ち、慎二はライダーと共にさっさと扉を抜けて行く。

「私達も行きますよ、マスター。あの軽薄なワカメとは、ここで完全にケリをつけましょう」

アヴェンジャーはゆったりと、そして堂々と扉を潜る。ここまで来たら、いや、来てしまったら、もう行くしかない。後戻りなんて最初から出来ないと分かっていた。

ここから校舎に帰れるのは、たった一組のみ。負ければ、死。それが本当かは分からないけど、その一点においてのみ、何故か確信めいたものが、私の胸にはあった。

私は生きたい。ただそれだけの理由の為に、今は戦う。目的も、こ

の先も戦う覚悟なんてないけど、とにかく、今を生き残る為に私は――

――友と戦う。

## 竜の魔女と偉大なる海賊

エレベーターの扉の先、光の中から外に出たと思うと、そこは船の上だった。

いや、正確には沈没船の少し傾いた甲盤上に、私達は立っていたのだ。アリーナで何度も目にした、死んだ船。それこそが、決戦の舞台だったのである。

「……！」

私はふと周囲を見回した。自分達が乗ってきたはずのエレベーター、つまり帰る手段が残っているのかを確認するためだ。

しかし、辺りにはそれらしきものはまるで見当たらない。それが意味する事とは、やはり――。

「勝った方だけが、ここから帰る事が許される。そして、敗者は文字通り、この船の墓場に置き去りにされる……そういう事ね」

アヴェンジャーも私と同じ考えに至ったのだろう、その事実を口にしていた。それにより、より殺し合いという言葉は現実味を帯びてくる。

「ハッ、海賊に用意された戦場が船の墓場たあ、ちよいと趣味が悪すぎやしないかい？」

そう言いつつ、離れた所に立っていたライダーの顔は、むしろ楽しそうにすら見えた。いや、事実彼女はこの状況を楽しんでいるのだろう。

彼女は海賊であり冒険家でもある。冒険家とは、困難を乗り越える事をこそ善しとするもの。彼女にとって、困難の無い旅路はツマラナイのだろう。

「なら、アンタの墓標をここに建ててあげる。さぞ、見栄えのある墓標になるでしょうね？ 『偉大なる大海賊、フランシス・ドレイク。ここに眠る』……ってね」

アヴェンジャーがいつものように挑発を掛ける。というか、それは洒落になっていないんだけど。

海賊相手に沈んだ船に墓標を建てるとか、それはかなりの侮辱ではないか。だって、海賊として負けたからこそその何よりの証明に他ならないと言える。

船諸共海の底へと消えた、それだけならまだいい。だけど、その沈んだ船に墓標を建てるといふのは、その人物を貶める以外の何でもない行為だ。

そして、それが分かっているからこそ、アヴェンジャーはそんな挑発をしたのだろう。復讐の英霊、自らを竜の魔女と名乗る、絶望と憎悪に塗れし憤怒の塊こそが自分なのだと、いつかアヴェンジャーが言っていた事を思い出す。

故に、彼女に敵を思いやる心なんて必要ないのだ。彼女にとって敵とは憎むべき対象。倒すべき障害。殺すべき他人でしかない。

たとえ、挑発であろうとも、最大限の効果を発揮してこそ価値がある。そういう思考の持ち主が、彼女なのだ。

その彼女の挑発を受けて、ライダーはと言えば、激昂するでもなく、悲嘆するでもなく、何かを悟ったような顔でアヴェンジャーに視線を返していた。

「そいつは結構。アタシが生前やった、死ぬ間際の滑稽さに比べりゃ、まだマシってもんさ。病に冒された身で鎧なんざ着て錯乱するバカよりよっぽどマトモじゃないか。ああ、今でこそ思い返してみれば、トんだ間抜けだよ、死にかけだった頃のアタシは」

淡々と生前、死の間際に取った自らの奇行について語るライダー。その行いに少し恥じるところがあつたようだが、どうやら、彼女へのアヴェンジャーの挑発は、まるで意味を為さなかつたようだ。

「でもまあ、それはそれ。今のアタシは全盛期バリバリの頃のアタシさ！ くだばりかけのババアじゃない、それこそ太陽を落とした女。それが今のアタシだ！ さあ、さっさと殺し合おうじゃないか、アヴェンジャー！ アンタのその旗、アタシが勝ったら記念に頂戴してやるよ!!」

「フー！ 我が旗は復讐を忘れぬ為の誓いそのもの。貴様ごときに奪わせるはずがないでしょう？ じゃあ、望み通りに殺し合いましょ

う。アンタのその首、斬り落として我が炎の薪にでもくべてやるわ!!」

最初から挑発なんて必要なかった。二体のサーヴァントは、互いに勝利を宣告するや、巨大な殺気を撒き散らしながら、マスターの指示を待たずして衝突を開始した。

今、当に戦いの幕が切つて落とされたのである。

戦いが始まってしまった以上、私もいつでも指示を出せるように、ライダーの動きに目を見張る必要がある。

ライダーは海賊なだけあって、その身のこなしはとても軽く、身軽なフットワークと瞬発力の高い武器、拳銃を使用してくる強敵だ。

反面、アヴェンジャーは今は旗は消して大鎌を持っているが、どちらにしてもメインの武器が共に大きいため、向こう程の俊敏な動きを取るのには難しい。

走りながらアヴェンジャーの周囲をグルグルと回って銃撃を開始したライダーに、私は大声で指示を飛ばした。

「アヴェンジャー、跳んで地面に向けて炎を放つて！」

「ウイ！」

鎌で銃弾を弾きながら、二丁拳銃の連発に何とか隙を見つけたアヴェンジャーは、大きくジャンプして、さつきまで自分が立っていた場所に向けて手を翳す。

「邪竜咆哮！ 燃えろ!!」

呪いの言葉と共に彼女の手から放たれる紅蓮の炎。それは彼女の立っていた床の周囲を焼き尽くさんと一気に燃え広がっていく。

「おっと、危ない危ない」

しかし、指示が聞かれていた事もあり、簡単にライダーに攻撃をかわされてしまう。

「アツハハハ！ バツカじゃないの？ どこに戦闘中に指示を大声で出すマスターが居るワケ？ バレバレすぎて難易度イージーどころじゃないね、これじゃあさ!!」

見事に外れたアヴェンジャーの攻撃に、慎二は高笑いしながら私へとバカにしてくる。だが、彼の言う事はもつともだ。

私のやり方では、アヴェンジャーだけに伝える事が出来ない。どうしても、敵にも私の指示が伝わってしまう。

もっと大雑把な指示でないと、細かな指示では簡単に対応されてしまうだろう。

それが分かっていたのだろう、アヴェンジャーも炎の円に着地すると同時、炎が消え去るのも待たずに私の元へと、炎を飛び越えて退いてくる。

「マスター、ムカつくけど、あのワカメの言う通りです。何か他の方法を考えないと、貴方の指示は全く効かないわよ」

他の方法、と言われても、咄嗟にそれが浮かべば苦労はしない。

でも、考えている余裕もない。敵は待つてはくれないのだから。

ライダーは再び駆け出すと同時に、走りながらこちらに向かって銃撃してきた。アヴェンジャーと私諸共に。

「チィッ！」

アヴェンジャーは私の前に出ると、鎌を風車の如く猛回転させて銃撃をガードする。だけど、そのやり方では、こちらは動く事が出来ない。

攻撃の手を休めずに接近してくるライダーに、アヴェンジャーは防戦一方と成らざるを得なかった。

このまま一方的に攻撃を受け続けるのは拙い。こうしている間にも、ライダーは着実にこちらに近付いている。

「……………」

私はその時、ふとある事を思い付いた。この状況を打破し、逆にこちらが有利に立てるかもしれない、起死回生の一手を。

だけど、これは賭けにも等しい危険な行いだ。意識せずとも、私の足は竦んでしまう。

「そろそろヤバいわね……………」

「……」

アヴェンジャーが漏らした苦言に、私はハツとなる。今は尻込みしている場合じゃない。私が原因で、この状況に陥っているんだ。

なら、私がどうにかしないと……………」

意を決し、私は、私を守るアヴェンジャーの背中を一瞥すると、彼女の守護範囲外へと飛び出した。

「!! マスター、何を!？」

「余所見してる暇なんざ無いんじゃないかい!？」

「くっ……!!」

気配で察知したアヴェンジャーだったが、ライダーの言うように、ガードの手を緩める事は出来ない。幸い、ライダーが私へ狙いを定めなかったおかげで、今もライダーの銃口はアヴェンジャーを狙い続けながら接近している。

それも当然か。だってこれは、サーヴァント同士が雌雄を決する戦いだ。私を銃撃の標的に巻き込んだのだって、彼女からすれば戦術の一つに過ぎない。

私も銃口の先に居れば、アヴェンジャーが守るだろうという腹積もりだったに違いない。

そして、彼女の目論見通り、アヴェンジャーは私を守る為にその場で縫い付けられるように身動きを封じられてしまった。

「だけど——」

だけど、私はそれを打破するためにこそ、銃弾から守ってくれていた彼女の背中から飛び出したのだ。

今こそ、マスターとしてアヴェンジャーを救う時……!!

私は腰に手を掛け、チェーンベルトに差していた守り刀に手を触れながら、もう片方の手をライダーに照準を合わせて突き出した。

「コードキャスト、hack (16)!!」

短い詠唱で私の手から撃ち出されたテニスボール大の光球が、走るライダー目掛けて一直線に飛んでいく。

「ッ!？」

私の放った光球が視界に入ったライダーは、一瞬だけギョツとする、僅かに走るスピードと攻撃の手が緩む。その隙を、アヴェンジャーが見逃す筈がない。

「お返しよ!!」

好機とばかりに、回していた鎌を後ろ手に持ち変え、空いた左手で



腰に差した剣を抜き放つと、切っ先に居るライダー目掛けて、虚空から生み出した数本の黒槍を射出した。

「チクショウが!!」

アヴェンジャーの攻撃に気付いたものの、ライダーはアヴェンジャーとの距離を詰めすぎた。それにより、完全に回避する事は叶わず、どうにか身を振っても槍が彼女の体を少し抉り抜く。

私の光球も当たりはしたが、まるでダメージを与えるまでには届かない。

それもそのはず、このコードキャストは、敵の魔力に反応して効力を発揮する”、言わば後出しの先制攻撃のようなもの。

敵が魔力を用いた攻撃やスキルを使用しようとしてきた時に、この光球が当たるとその魔力に干渉し、体をほんの僅かな間だが一時的に硬直させるのだ。

その僅かな一瞬が、サーヴァントにとつては命取りとなる。一流の英雄達なら、その一瞬を逃さずモノにしてみせるのだから。

「やってくれるじゃないか。結構キツイの貰っちゃった」

脇腹を抉られたというのに、言葉とは裏腹に華麗なステップで身を翻すと、ライダーは未だ余裕を持った顔で慎二の元へと舞い戻る。

あの程度の傷では、行動に支障を来す事は出来ないという事か。

「クソ、まさか岸波が奇襲なんて器用な真似をしてくるとはね。ナメてたとはいえ、生意気にも程があるよねえ!」

慎二はライダーがダメージを負った事に怒りこそしているが、彼女同様にその余裕が崩れはしていない。

それだけ、彼は自信を持つているという何よりの証だ。少しくらいのダメージなら、まだ彼の許容範囲内なのだろう。

「ライダー、バンバン撃ちまくれ! アイツを海の藻屑にしてやれ!」

「オウとも。派手にぶちかまそうじゃないか! 喰らっていきな!!  
撃ち方用意、全砲門、撃てえーッ!!!」

彼女の上方への銃撃と共に現れる、大量の砲首の数々。あれは前にアリーナで見たものと同じだ。

二十もの砲首が、虚空からその顔を覗かせ、そして全てタイミング

がバラバラに砲撃を開始した。

「面倒な……！」

前回、一度でほぼ全ての砲弾を切り裂かれた事への対策か、今回は同時射出ではなく、全ての砲首がそれぞれ別々のタイミングで隙なく砲弾を撃ち出していたのだ。

それも、一発ずつ撃つのではなく、何発かずつの同時射撃を何度かに分けて、だ。

これでは、一斉に打ち落とす事が出来ない。打ち落としてもすぐに次がやってくる、まるで寸分の隙も与えない織田信長の『三段撃ち』だ。

「アヴェンジャー、ダメージは私が回復する！ だから思い切りやっちゃって！」

こうなれば、私はアヴェンジャーが傷を負ってもすぐに回復する事に徹する他ない。今更、守り刀によるコードキャストを使ったところで、ライダーに当たったとしても砲撃は開始してしまっている。ならば、回復する魔力が持つ限り、彼女の好きにやらせるのが一番効果的だろう。

「ハッ。魔力温存の為に、なるべく当たらないようにしてやるわよ」  
大砲による砲撃の嵐を前にして、アヴェンジャーは愉しげに犬歯を剥き出しにして鎌を構える。

手にした鎌の刃先から、炎の刃が生み出されると、大鎌片手にアヴェンジャーは大砲の雨へと自ら突っ込んで行った。

アヴェンジャーは特別足が速いという訳ではない。ライダーに比べれば、勝てるとも思えない。

だけど、その身のこなしは負けずとも劣らない。彼女はダンスでも踊るかのようには、ヒラリ、ヒラリと砲弾をかわしては、時に手にした鎌で切り裂き、時に黒槍を射出しては砲弾と相殺させていた。

ライダーは前回のアヴェンジャーによる炎を纏った大斬撃を警戒して、一斉掃射を避けたのだろうか、むしろアヴェンジャーは別々の砲撃の方が滅法強かったのだ。

どこでダンスなんて学んだのかは知らないが、華麗な足捌きに、妖

艶にすら映る回避の一つ一つが、彼女を一流のダンサーかのように思わせて仕方がない。

「ふっ、はっ……そら!!」

美しくも獰猛な笑みが、私に彼女がダンサーではなく復讐者なのだと思わせると思わせる。

時折、鎌から炎の斬撃を放つ彼女は、着実に砲首を一つずつ潰していた。高熱を伴った炎の斬撃によって、砲首は真つ二つに切断されてしまい、使い物になるはずもなく、虚空から現れた時と同様に、虚空へと消滅していく。

無論、アヴェンジャーの快進撃を、慎二は面白いはずもなく、

「な、なんだよ……どうなってんだよ、これは!? 前よりも簡単に避けられてるじゃないか!!」

先程までの余裕はどこへやら、途端に取り乱し始める。

「いや、やる女だとは思っちゃいたが、まさかこれでも通用しないとはねえ……。こうなりや、もうアレしか残ってないかもね、シンジイ」

絶句……とまではいかないにしても、ライダーには十分驚愕だったらしく、アヴェンジャーの舞う姿の前に、意味深な言葉を発していた。

「なんだか、嫌な予感がする……」。

「この砲撃の間は身動き取れないが、この調子じゃ砲首は全部落とされちゃう。こうなりや、最後の一つがやられた時点で、ドカンと一発、花火を打ち上げてやろうじゃないのさ!」

「……仕方ない。出来れば、こんな所で使いたくはなかったけど。流石にアレを耐えて生き残れるはずもないしね。いいさ、やってやれライダー! 許可してやるよ!」

「あいよー さあて、んじゃあ魔力をたっぷり練り上げなあ!! コイツで仕留めてやろうじゃないか!!」

……確実に何か仕掛けてくるつもりだ。アヴェンジャーは砲撃をどうにかする事に集中しきっているため、慎二達の会話がほとんど耳に届いていないらしい。

「ここは、私がしつかりしないと……!」

「これで、最後!!」

そうこうしている間に、アヴェンジャーは最後の砲首を叩き斬ってしまう。それはつまり、ライダーによる何か奥の手の発動を許してしまう事と同義だった。

「アヴェンジャー、多分また何かしてくる！ それも、もつと凄まじいのが！」

すぐさまアヴェンジャーに注意を呼びかけるが、彼女は慎二達の話聞いていなくとも、ライダーの雰囲気では何かを察したようだった。

「……宝具か！」

一段と鋭い目つきになった彼女は、鎌を消すと、すぐに旗を現出させる。彼女本来の武具である大きな旗、それを取り出したという事は、よっぽど強力な攻撃をライダーがしてくるといふ事なのか。

「マスター、下がりなさい！ 敵の宝具が来る!!」

「宝具……つて？」

聞き慣れないその言葉に、私はアヴェンジャーへと問い返すが、アヴェンジャーは言葉早に答えを超越した。

「簡単に言うなら、敵のとつておきよ！ こればかりは私も全霊で構えないと、凌げるか分からない。せつかく回復のコードキャストを使わせなかったんだから、出し惜しみせずに、宝具が発動したら断続的に回復を掛け続けなさい!!」

アヴェンジャーをしてここまで言わせる、その宝具とやら。それほどまでに、備えが必要な攻撃なのだろうか……？

私の疑問を余所に、そのライダーの宝具とやらの実態はすぐに明らかとなる。

「ヤロウども、時間だよ！ 嵐の王、亡霊の群れ、ワイルドハントの始まりだ！」

ライダーが一際高く飛び上がったと思った次の瞬間、彼女の足元から巨大な帆船——いや、海賊船がどこからともなく現れ、彼女をその船首へと乗せていた。

それに伴って次々と現れる海賊船の群れ。それら全てが、彼女が指揮するものだと一目で分かる。

彼女が今乗船している船こそが、彼女が生前に愛用した海賊船、

『ゴールデンハインド 黄金の鹿号』。この大船団全てを率いる、母船とも言うべき司令塔だ。

「アタシの名前を覚えて逝きな。テメロツゾ・エル・ドラゴ！ 太陽を落とした女ってな！」

ライダーの掛け声に応じるように、全ての海賊船から全力砲撃が開始された。人間一人を狙うには大袈裟過ぎる攻撃。けれども、それら全てが、彼女を——アヴェンジャーを仕留める為に必要だと判断したからこそその、ライダーの全力を以ての全艦砲撃によるフルファイアなのだ。

「アヴェンジャー!!!」

彼女一人を打ち倒す為だけに行われる超火力攻撃に、私は指示を出す事も忘れて、必死でその名前を半ば叫ぶように呼んでいた。

どうすればいいのかわからない。どうしようもないかもしれない。

けれど、私に言える事は一つだけ。マスターとして、アヴェンジャーに今私が言える唯一の事。それは——

「死なないで……!!」

懇願にも似た、死ぬなという命令。具体的な指示も無く、あの必殺を生き残れと、私は無茶を言っていると自覚していた。

でも、まだ一週間ちよつとしか共に過ごしていないけど、彼女の頼れる姿を何度も目にしてきたのだ。

こんな逆境、きつとアヴェンジャーなら乗り越えられると私は信じている。

「我がマスターながら、呆れた命令だこと……!!」

背を向けたまま、私の方を振り返る事もせず、けれどその言葉とは裏腹に、何故かやる気に満ち溢れた声音だけが、轟音の中でも不思議と私の耳に届いていた。

そして、次の瞬間には、彼女の姿は大量の砲撃の中に飲み込まれるように消えていった。

「アヴェンジャー……!!!」

私の叫びもまた虚しく、砲撃の音へと飲み込まれるように掻き消さ

れた。

——私にとって、信じる事は邪悪です。

けれど、マスターがこんな私なんかを信じて、生きろと命じたのならば、気に食わないけど、仕方ないから応えてやろうじゃない……!!

## 穿つは復讐の業火

視界を埋め尽くす巨大な爆炎、周囲に充満する火薬の焦げる匂い、離れていても肌を灼くような強烈なる爆熱。

直接その砲撃を受けていないというのに、私まであの砲撃の嵐の渦中に巻き込まれてしまったかのような錯覚すら覚える、艦隊によるこの凄まじい一斉掃射。

その真っ只中に、アヴェンジャーは飲み込まれていた。

ひっきりなしに続く砲撃で、絶え間なくアヴェンジャーが居るであろう辺りは爆炎と黒煙に包まれ、その安否を確認する事すら不可能。

今、私に出来るのはアヴェンジャーを信じて、ひたすらに回復スキルを行使し続ける事だけだった。

だけど、それもいつまで保つかは分からない。私の魔力が尽きれば、アヴェンジャーを癒やす事はもう叶わなくなる。

そうなれば、本当にアヴェンジャーはあの猛攻に耐えられないだろう。今でさえ、無事かも分からないのに、回復の手段が無くなれば、そこで一貫の終わりだ。

幸い、ダメージの程は分からないものの、コードキャストに手応えは感じているので、まだ死んではないという事だけは実感出来ていた。

この猛攻を耐え抜けば、まだ勝機はあるはず。これだけの超火力攻撃を行って、向こうの消費も甚大に違いない。

その隙を上手く突く事が出来れば、勝てるかもしれない。

だけど、この嵐のような砲弾の雨はいつ終わるのか。まるで終わりが見えないと、少し不安になってきたところで、ようやく勢いが弱まり始める。

それこそ、徐々にはではなく、一気に。まるで打ち上げられた花火が夜空へ花開いた後のように、急速に勢いが失せていった。

砲撃が止み、私の視界を埋め尽くすのは今や黙々と立ち昇る黒煙のみ。立ち込める暗雲が如く、その真っ黒な煙は私の胸中すら不安で黒

く塗り潰そうとする。

早く。速く。迅く。

アヴェンジャーの安否を確かめたいと、逸る気持ちを必死に抑え、手をギュツと両手で握りしめる。

それを知りたいのは、私だけではなく、敵である慎二とライダーもまた同じ。あちらの場合、ちゃんとアヴェンジャーを仕留められたかという確証を得たいのだろうが。

「……こりや完全に弾切れだ。もう残り滓程度しか残っちゃいないね。ま、流石にアレを喰らって無事とはいかないだろうがねえ」

「ふん。弾切れだろうと、もう僕の勝ちが決まったようなもんだし、気にする事もないね！」

自身の持てる最高の攻撃を放ったライダーは、その顔に疲労を覗かせながらも、勝ちを確信したように不敵な笑みを口の端に浮かべていた。

慎二もまた、自分が勝ったと慢心し、完全に勝ち誇って笑い声を上げて油断している。

「……………」

だけど、今の私にとって、それらは些末な事でしかない。アヴェンジャーが無事かどうか。それだけが、私の頭の中をいっぱいにしたから。

そして、永遠にも感じられたこの時間にも終わりが来た。

黒煙は小さくなっていき、ようやく私の視界も完全に晴れる。ア

ヴェンジャーは――

「笑え、晒え、嗤うがいい。滑稽なる魔術師よ。我が内にくすぶりしこの憎悪、その程度の生半可な事では収まらぬ……!!」

立っていた。先程と寸分違わぬその場所で、全身を煤と火傷だらけにして、それでも、しっかりと立ってそこに居た。



白い肌は痛々しい程に赤く、何ヶ所かは焼けただれてしまっている。酷い激痛を伴っている事は明白だ。

それなのに、彼女は膝をつく事すらせずに、気丈に振る舞っている。慎二とライダーを、かつてない程の殺意の籠もった視線で睨み付けながら。

「ひっ……!!?」

その視線を受けて、慎二は顔を青くして後ずさる。恐怖の色がヒシヒシと彼の顔には表れていた。

「こりや参ったね。まさかアレを生き延びるたあ、見上げた根性だ。恐れ入った恐れ入った!」

マスターとは対照的に、ライダーは驚きはしたものの、アヴェンジャーの生還に素直な賞賛の言葉を述べる。

全力全霊を尽くした、最大最高の攻撃に耐えたアヴェンジャーを、ライダーは認めたのだろう。彼女が自身の賞賛に値する英霊であるのだと。

復讐を語る魔女を、世界的な偉業を成し遂げた大海賊が認めたのだ。それがどれほど栄誉ある事かは想像に難くない。

「アヴェンジャー!! 良かった、生きてて……!!」

私は堪らず、アヴェンジャーの元へと駆け寄る。かなりの重傷ではあるが、幸いにも致命傷は負っていないようだ。

私は残ったなけなしの魔力で、彼女の傷をコードキャストで治療する。魔力はすぐに尽きてしまうが、特に酷い火傷はどうか治す事が出来た。

「そんな簡単に死んでたまるかっての。私を誰だと思ってるの? 死にかけてもしつこく生き延びるのが私よ」

ダメージは大きいのが、軽口を叩く余裕はまだあるらしい。それとも、私を心配させまいとして平気のフリをしているのだろうか。

どちらにしても、まだ戦える。アヴェンジャーはまだ諦めてなどいない!

「う、ウソだ……なんで生きてるんだよお!!? 宝具を使ったんだぞ!? 切り札を出したんだぞ!?」 なのに、なんでまだ立ってられるんだ

!!?

相変わらず顔を青くしたままで、叫ぶ勢いで喚く慎二。その顔はこれまでで一番、焦りと恐怖で入り混じった混沌とした表情となっている。

「そ、そうだ、きつとチートを使つたんだ！　じやなきや、僕のエル・ドラゴの宝具に耐えられる訳がない！」

「ハッ。今まで散々ハッキングやら妨害やらと、不正に手を染めておきながら、よくも言えたものです。ムーンセルに見逃されていたから良いものを……。分を弁える人間。今すぐ消し炭にしてやろうかしら？」

「う、うあ……っ!!」

これは脅しでも狂言でもない。アヴェンジャーは真実を口にしたに過ぎない。やろうと思えば、慎二一人くらいは簡単に焼き殺せるのだ。

しかも、消耗激しく魔力切れの状態のライダーなら、上手く立ち回れば言葉通りに慎二を炎で焼き尽くせるだろう。

慎二も、アヴェンジャーが本気でそれを口に行っているのだと理解出来たからこそ、もう何も言えなかった。彼は臆してしまったのだ。敵対者であるアヴェンジャーに。

それが戦場で何を意味するか、もはや語るまでもない。

「……チッ。雇い主がビビっちまってどうする。つってもまあ、こっちも素寒貧。こりや悪運尽きたかね？」

慎二の様子に呆れ果てるライダーだったが、その言葉とは裏腹に、まだその眼から闘志は消えていない。最後まで諦めるつもりは、彼女には毛頭無いらしい。

「よく言う……。アンタ、万全じゃないにしても、まだ俊敏性は維持してるんでしょ？」

「おや、まさかバレちまうとは。……しかし、引つ掛かるねえ。これまでの事を思えば、どうにもアンタはアタシの事を知ってると思えない。細かい部分は流石にそうでもないが、どうしてだろうねえ？」

「それが何か？　ええ、知ってますとも。フランシス・ドレイク、オケ

アノスの海では随分と派手に暴れていたみたいだし」

ライダーの疑問に、アヴェンジャーはしれっと返事をした。けど、その返答はライダーの望んだものではなかったらしく、アヴェンジャーの言葉は理解されはしなかった。

「何を言ってるかは分からないが、どうやらアタシを知られてる以上、下手な真似は出来ないか。まあいいさ、どうせもう余力なんざそう残っちゃいないんだ。がむしゃらにだろうと死ぬまで戦うだけさね!!」

疲労を無理に振り払うように、ライダーは再び拳銃を構える。銃弾はおそらく魔力で形成、装填しているはず。ならば、あれだけの砲撃を行ったのだし、本当にギリギリに違いない。

「いいわよ? 存分に殺してあげる。宝具を使った事、後悔してももう遅い!!」

三日月の如く口元をニンマリと歪め、アヴェンジャーは旗を掲げる。ドシリと構えたその姿は、一見隙だらけのようできて、その実ほとんど隙が見られない。

ライダーもそれが分かっているのか、様子見しながらどう仕掛けるか機会を窺っていたが、何の前触れもなく、場に変化が起きた。

「……アヴェンジャー!?!」

突然、アヴェンジャーの体から炎が現れ、彼女の全身を包み込んだのだ。私は思わず彼女の名前を叫んだが、彼女は空いた片手で私に、心配するなという合図を送ってくる。

どうやら、これも彼女のスキルの一つらしい。

「さあ、募りに募った我が憎しみ、返してあげましょう。アヴェンジャーたるこの身には、復讐こそが我が本懐であると知れ!!」

彼女の叫びと共に、全身を包んでいた炎は旗の先端、槍の部分へと一点集中していく。人間一人を包んでいた炎はサッカーボール大まで凝縮され、轟々とひしめくように燃え盛っていた。

アヴェンジャーはそれを槍の先端で維持したまま、旗を横に傾けると、槍を突くかのように勢いよく突き出した。

「穿て!!」

「させるかあっ!!」

レーザー光線の如く発射された炎塊を、ライダーは銃撃で撃ち落とそうと、間髪入れずの連発を叩き込む。

しかし、勢いは収まるどころかより増して、ライダー目掛けて一直線に突き進んでいく。

「クソツ、止まらないか!」

撃ち落とす事は不可能と判断すると、ライダーはすぐにそれを避けようと足に力を入れるも、やはり疲れは大きく蓄積されていたのだから。

一瞬、ガクンと力無く膝をつく彼女の肩を、炎によるレーザーが撃ち貫く。

「ぐううっ!!」

左肩にはテニスボールくらいの風穴が開き、左手からは握られていた拳銃がゴトリと音を立てて落下した。

壮絶な痛みには歯を食いしばって堪えるライダーだったが、

「言ったでしょう? 復讐こそが我が本懐だつて」

知らぬ間に接近を許していたアヴェンジャーが、彼女の眼と鼻の先に立って、旗を突き出しているところだった。

「…………ゴフ」

旗の穂先は、彼女の胸を貫通し、心臓を抉っていた。彼女の背中から生えた槍の刃先からは、ポタポタと絶え間なく血を滴り落としている。抜けばきつと、大量の血が噴き出す事だろう。

「は、は……アタシも、焼きが…回った、か」

胸を貫かれ、息苦しそうに話すライダー。右手に握られていたもう片方の拳銃も、その手から零れ落ちた。全身が震え、脱力した彼女はアヴェンジャーへともたれかかるようにして体を投げ出す。



「な、なんでだよ!? なんで僕のサーヴァントが負けるんだよ!? どう考えても僕の方が優れている! 天才のこの僕が! こんなところで負けるワケにはいかないのに!」

今や、彼の自信過剰っぷりも、こうなってしまうては哀れにしか思えない。慢心故の油断、宝具を使えばどれだけ消耗するかを分かった上で、ベストのタイミングで放つべきだった。

アヴェンジャーはほぼ万全の状態で、敵の宝具を迎え撃ったのだから。

「そ……そうだ、全部お前のせいだぞエル・ドラゴ! お前が不甲斐ないから、こんな事に!」

負けたのはライダーのせい。そう責任転嫁させて、全ての責任を彼女一人に押し付ける慎二。

そのライダーはといえば、もう立つのもやつとはずなのに、もたれていたアヴェンジャーからそつと体を離すと、ゆらりと慎二の元へと覚束ない足取りで歩み寄る。

「……うん? なんだい、ボロボロのアタシに鞭打つかい。さつすがアタシのマスターだ。筋がいい」

悪いのは全てお前だと言われているにも関わらず、ライダーはいつもの調子で、慎二とのやりとりをしていた。

その様子から、無理をして会話しているのが、嫌という程に伝わってくる。そうまでして、何故彼女は慎二との会話が続けようとするのか?

私には、それが分からなかった。

「っ、憎まれ口を叩ける余裕があるなら、戦えよ! 僕が、僕達が負けるワケないんだから!」

「いやいや、そりゃ無理。アタシ、綺麗に心臓抉られたし? そろそろこの体も消えるつぽいよ?」

消える——意識が、肉体が、魂が、心が。そしてその存在が。

その事実をさらつと言つてのけたライダーに、慎二だけではなく、私も背筋がゾツとするのを感じた。

冗談でもなんでもない、真正正銘の死。彼女はそれを前にしながら

ら、いつもと変わらぬ様子で、慎二と向き合っていたのだ。

「な——なんだよそれ、勝手に一人で消える気か!? 僕はお前のせいで負けたのに!」

「……………ああ、アタシのせいかもねえ。実力、天運、はたまた執念、こっちの油断。負けた原因はいくらでも口に出来るが……ま、なんでもいいさね。人生の勝ち負けに、真の意味での偶然なんてありやしない。敗者は敗れるべくして敗れる。こっちの方が強いように見えてもね——きつと何かが、アタシ達は劣っていたんだ」

海賊らしく、負けてもキツパリと負けた事実に向き合える。いや、海賊かどうかは関係ない。彼女だったからこそ、負けたのに引きずらず、さっぱりと流せてしまうのかもしれない。

でも、慎二はそうではない。彼は、負けた事実を良しと認める事は出来ない。だって、予選の頃から、彼はそういう人間だった。

「な、なに他人事みたいに言ってるんだよ! 僕は完璧だった! 誰にも劣ってなんかかない! こんなはずじゃなかったのに……とんだハズレサーヴァントを引かされた! 使えない奴だ! くそっ! 僕が負けるなんて! こんなゲームつまらない、つまらない!」

いつまでも、泣き言のように認めないの一点張りで、あまつさえライダーをハズレ呼びする慎二。

ふざけるな。彼女は人類史に名を残す、偉大な先人の一人だ。

戦い、けど負けてしまったけれど、彼女だって死力を尽くして、持てる力の全てを以て、この決戦に臨んでいた!

それをマスターである貴方が乏すのは間違っている!!

「ライダーは悪くない。負けた結果を、彼女一人に押し付けるのはおかしいよ! 貴方達は二人で戦って、そしてこの結果だったんだ。二人で戦ったのに、ライダーだけが悪いはずなんてない!」

「う、うぐ……ぐくつ……!!」

私は自然と慎二に向けて怒鳴っていた。無意識のうちに、彼を叱りつけていた。

マスターとサーヴァントは二人三脚で聖杯戦争を戦っていくもの。それなのに、それを理解していない彼に、私は気が付けば憤りを覚え

ていた。

「……不愉快極まりないわ。帰るわよ、マスター。こんなワカメ、相手にする必要などありません」

アヴェンジャーの慎二を見る目は、もはや人間へと向けるものではない。下等な生物を見下すかの如く、冷たく、蔑んだ視線を彼へと送っていた。

彼女は完全に慎二を見限ったのだ。程度の知れた海藻以下の存在であると。

さつさとエレベーターがあつたであろう位置に向けて歩き出すアヴェンジャー。私も、もはや語る事はない。彼女に続こうと背中を向けたところで、慎二から継るような声を掛けられる。

「あ……ま、待てよ、おい！ お前に話があるんだ。僕に勝ちを譲らないか？ だだ、だつてほら、君は偶然勝っただけじゃないか！ 二回戦じゃ絶対に、100%負ける。でも、僕ならきつと勝ってみせる」

……何を言い出すのかと思えば、今度は勝ちを譲ってくれと？ 冗談でも笑えないよ、慎二。

「な、考えてみろよ。二回戦目で二人とも終わるより、どちらかが優勝した方が僕達にとっては何よりのプラスになるだろう？」

……。本当に救えない男だ。彼とは友達だが、そんな浅はかな提案に頷ける訳がない。

私は何も答えず、再び慎二に背を向けて歩き出す。いや、この行動こそが彼にとつては何よりの答えであろう。

「あ……待て、行くなよおい！ こんな簡単な計算も分からないのか？ 聖杯を分けてやるって言ってるのに！」

「やめとけてってシンジ。負けちまった以上、何で上塗りしようよ、今更惨めなだけだぜ？」

諦めきれない慎二に、既に負けを受け入れたライダーが諭すように言う。だけど、どうあつても彼は耳を貸そうとはしない。

「うるさいー！ お前のせいで負けたんだぞ？ なに偉そうに口開いてんだよ！ ……くそ。ふん、岸波、お前もこんなゲームで勝ったからって調子に乗るなよな。リアルなら僕の方が何倍も優れてるんだ。



いいか、先に地上に戻って、お前がどこの誰かハッキリしたら——」

そこまで言いかけた、その時だった。

突如、慎二の腕から先が黒いノイズに染まり、少しずつ肩へと侵食し始めたのである。

「——うわっ!? な、なんだよ、これっ! ぼ、僕の、僕の体が、消えていく!? 知、知らないぞこんなアウトの仕方!」

その黒いノイズは、まるで体を蝕む毒か、はたまた病のように、慎二の体を黒く染め上げようと、少しずつ、少しずつと蠢いていた。

そして、その黒いノイズの発生から間もなくして、私達と慎二達とを隔てるように、エレベーターの時と同じような仕切り壁がスライドして現れる。

この仕切りに受ける印象は、まるでこの向こう側は隔離病棟のような、外界から隔絶された空間との接続を遮断するためのように感じられた。

その例えは、決して間違いではない。

叫び声を上げた慎二の、手が、足が、体が、段々と消えていこうとしている。側で見つめる、彼のサーヴァントと共に。

この壁の向こう側は、深い海の蒼が一切消え失せ、全てが赤く染まっていた。死にゆく世界、消えゆく世界、滅びゆく世界……。

赤い色が嫌でも『死』を連想させる。言わば、この向こう側は、生者の死滅する世界だ。

赤い海の底で、ライダーは上を見上げた後、慎二へと視線を戻す。「聖杯戦争で敗れた者は死ぬ。シンジ、アンタもマスターとしてそれだけは聞いてたはずだよな」

「はい!? し、死ぬってそんなの、よくある脅しだろ? 電脳死なんて、そんなの本当なわけ……」

慎二の藁にも縋るような、淡い希望も、顔にまでノイズの侵食が及んだライダーにより、脆く崩れ落ちる。

「そりゃ死ぬだろ、普通。戦争に負けるってのはそういうコトだ。だいたいね、此処に入った時点で、お前ら全員死んでいるようなもんだ。

生きて帰れるのは、ホントに一人だけなんだよ」

その言葉は、慎二へと向けられたものだろう。だけど、決して慎二だけにそれが当てはまるのではない。

その全員の中に、確実に私も含まれている。いや、この聖杯戦争に参加する全てのマスターがそうだ。

勝者は一人だけ。そして生き残るのも一人だけ……。

「な……やだよ、いまさらそんなコト言ってるなよ……！ ゲームだろ？ これゲームなんだろう!? なあ!？」

その叫びは、悲痛そのものだった。消えゆく体を、彼は恐怖に支配されながらも必死に抱き止めようともがいている。

それが、何の意味もない行為であるというのに。

「あ……ひ、止まらないよコレ!? な、何とかしてくれよ、サーヴァントはマスターを助けてくれるんだろ!？」

「そんな簡単に破れるようなルールなら、最初から作られちゃいないさ。でもまあ、善人も悪党も、最後にはみーんなあの世行きだぜ？」

別段、文句言うようなコトじゃないだろ?」

心臓を抉られ、更にはノイズに体を侵食されながら、ライダーは死を肯定していた。それは、彼女が既に死したる身であるが故の悟りのようなものなのだろうか。

「な、何分かったようなこと言ってるんだ……！ お前悔しくないのかよ!?! 負けた上に、こんな、こんな……!！」

「うん? 悔しいかって? そりゃ反吐が出るほど悔しいさ。だがねえ、一番初めに契約した時に言っただろう、坊や。〴〵覚悟しとけよ?

勝とうが負けようが、悪党の最期ってのは笑っちゃまうほど惨めなものだ”ってねえ!」

心から愉快そうに笑うサーヴァント。その姿はもうかなりノイズに覆われて、よく見えない。

「あんだだけ立派に悪党やったんだ。この死に方だって贅沢ってなもんさ。愉しめ、愉しめよシンジ。そしてアンタらも容赦なく笑ってやれ。ピエロってのは笑ってもらえないと、そりゃあ哀れなもんだからな」

ひとしきり笑って、彼女は一息つくくと、ドカッとその場に腰を下ろした。今ので、限界など当に越えていたはずの、本当に最期の余力も尽きたのだろう。

「……さて。ともあれ、良い航海を。次があるのなら、アタシより強くなつていてくれよ？ アタシや本業は軍艦専門の海賊だからねえ。自分より弱い相手と戦うつてのは、どうも尻の座りが悪くていけない。じゃあな、メンコいお嬢ちゃんに、復讐の魔女さんよ。また会える事を楽しみにしてるぜ」

最期にこちらを見て苦笑し、女海賊はかき消えた。

人類初の、生きたまま世界一周を果たした英傑。世界の歴史を変えた偉大な航海者は、最後まで楽しげに笑っていた。

その簡潔な最期は——慎二の行く末、避けられない運命をはつきりと告げていた。

「お、おい！ なに勝手に消えてんだよ！ 助けてくれよ、そんなのつてないだろ!？」

一人、サーヴァントに先立たれ、閉ざされた死の海に取り残された慎二は、慌てるように壁へとへばりつく。決して届かぬと分かっているはずなのに、彼は私に救いを求めていたのだ。

「あわ、あわわわ……じゃあ、お前！ そうだ、お前が助けるよ！ お前が負けないからこんな事になったんだぞ!? 責任とって、早く助け

——

言葉の途中でもお構いなしに、侵食は慎二の体を更に蝕んでいく。既に彼に残されたのは胸から上のみ。ほぼ全身を黒いノイズで覆われ、もはや身動きすらも自由には取れなくなっていた。

「ひ、消える……! やだ、と、友達だろ、友達だっただろ!? 助けてくれよお!」

悲痛な叫びは、だけど虚しく空間に響くだけ。私ではどうにも出来ない。負けたからと死ぬのは、あまりに惨すぎる仕打ちだが、助けたくても壁は私を拒んで通そうとはしない。

「あ、あ——消える、消えていく！ なんで？ おかしいぞこれ、なんでリアルな僕まで死ぬって分かるんだ!? うそだ、うそだ、こんな

はずじゃ……くそつ、助けるよおつ！ 助けてよお！ 僕はまだ八歳なんだぞ!?! こんなところで、まだ死にたくな——」

——消えた。間桐慎二という人間。その魂、その存在が、完全に喉を裂くような彼の叫びも虚しく、彼の存在は完全にこの世界から消失した。

一欠片の痕跡もなく。  
残っているのは、ただ勝者のみ。

——聖杯戦争の一回戦は、こうして終結した。

## 虚栄に満ちた勝利

戦いは終わった。

自分が勝ち、慎二が負けた。その結果、慎二は消滅——死を迎えた。

……本当に？

間際の姿をはつきりと見たが、どうにも実感がない。

本当に、命が一つ、永久に消え去ったのか？

自分が勝っただけで？

何の説明も、何の価値もないままで？

慎二の消滅を目にし、茫然となる私をアヴェンジャーが無理にエレベーターに押し込め、校舎へと帰る箱に揺られる中で、私はそんな事ばかりを繰り返し思考していた。

「一回戦、終わったみたいね」

どれだけ呆然と立ち尽くしていたのか。気が付けば、遠坂凜がこちらを睨み付けていた。

どうやら知らないうちに、私は校舎へと戻ってきていたらしい。

「シンジはアンタと戦うって言ってたから、負けて死んだのはアイツの方ね。アジア屈指のゲームチャンプも形無しか。まあ、命のやりとりなんて話、あのバカには未体験だっただろうけど」

さも、当然だと言わんばかりに、慎二が死んだのだと確定したように語る凜。

一流の中の一流とも言うべき、その凜がそれを口にした事で、慎二の死という事実が、私の胸に重くのしかかる。

「遊び気分でのこの聖杯戦争に参加した魔術師ウィザードの末路ってヤツ？ どう？ みつともない死に様だった？」

「……っ！」

死者を冒瀆する言葉に、私は反射的に言い返そうと口を開いたが、「ここは戦場なのよ。敗者に肩入れしてどうするの」

彼女の言葉と、眼差しが告げていた。

戦場では負けた者がただ死ぬ。それだけの事。

アヴェンジャーだって、ライダーだって言っていたはずだ。この聖杯戦争は殺し合い、負け即ち死すなわであると。

誰もがそんな事は分かっている。分かっている慎二や自分が、場違いであり、異常なのだ。

もう、何度もそれを感じたはずではないか。

「聖杯戦争で勝利した一人は、手にした聖杯でどんな願いでも叶える事が出来る。だからこの場所に来た者達はみんな、願いを、望みを、どんな事があっても叶えたい目的を持っているのよ。もちろん、そのために命を奪う覚悟、敗れた時に命を失う覚悟も持ってる」

聖杯戦争に参加する魔術師ウィザード達は、命を奪い奪われる事を、当然の事象であると認識して然るべき。

それは、軽はずみに参加した者達にも余儀なく義務付けられた、言わば宿命なのだ。

ここに入った時点で全員死んだようなもの——ライダーが死の間際に言っていた言葉だ。

承知の上で聖杯戦争に参加した者も、知らずして命懸けのデスゲームに参加してしまった者でさえも、等しく同じ運命を辿る。

そこには慈悲などなく、本当にたった一人だけが、勝利と栄光、そして万能の願望機を手に入れ、そして残り全ての人間は漏れなく死が待っている。

もはや知らなかったで済まされる話ではない。参加してしまった以上、殺し合いをする覚悟を、嫌でも持たなければならぬのだ。

「その様子じゃ記憶、まだ戻ってないんですよ。……それはいいわ。目的が無いのはいい。けれど、覚悟くらいは持っていないなさい。覚悟もなしに戦われるのは目障りなの。死ぬ覚悟も殺す気概もないのなら、世界の隅で縮こまっついて」

凜のこれは、決して忠告ではない。警告だ。

死ぬ覚悟も、殺す覚悟も持てないなら、ハナから参加するな、と。そうでなければ、私など戦うに値しないのだ、と。

邪魔だ。端的に、そう言われているのだ。

だけど、私だって人間だ。それも、記憶すら戻っていない素人でしかない。当然ながら、いきなり覚悟を持つと言われて、持てるかといえば、容易な事ではない。

まして、慎二の死を目の当たりにした直後。今までの決意や覚悟も、あの無惨な最期を前にして簡単に瓦解した。

「そんな事、急に言われても……」

「現実逃避もいいけど、布団を被って丸まってても、二回戦は必ずやってくるわ。覚悟もなしに勝てるようなマスターなんか、もう残ってないわよ」

何もかもが、凜の言う通りだった。

この場にいる者は、みな強い意志を持って立っている。

そんな相手を前に、流されるまま戦っていては勝てるはずもない。

自分には、まだ、勝つ理由が存在しない。

覚悟以前の問題だ。そんな自分に、彼らの願いを踏みにじる権利があるのだろうか……？

遠坂凜は押し黙ってしまったマスターに溜め息一つを残して、そのまま階段が上がって行った。どうせまた屋上にでも行ったのだろう。

マスターは、遠坂凜が既にこの場から居なくなっている事にすら気付いた様子はない。

頭の中で、遠坂凜に言われた言葉を何度も反芻しているのかもしれない。

俯いたまま、瞬きもほとんどせず、焦点がどこか定まらない、少しばかり虚ろな瞳には、一体何が映っているのだろうか。

十中八九、あのシンジとかいうワカメマスターの残像だろう。あの男はくだらない、実に人間としても魔術師<sup>ウィザード</sup>としてもマスターとしても、何を取ってもくだらない男だった。

だが、マスターからすれば、あんな男でも一応は友人だったのだ。それを、自らの手に掛けた事を、まだウジウジと引きずっているに違いない。

友人。

私からすれば、それが何だという話ではあるのだが。

そんなもの、殺し合いに邪魔なだけだ。友情などというあやふやなものに惑わされ、挙げ句殺されては良い笑い物でしかない。

友など、いつ裏切るかも分からない。自分の利に反する時には、友だろうと大概の人間は裏切りに走る。

ましてや、この月の聖杯戦争において、友情など不要の長物。互いに殺し合いを強要された時、果たして友情は成立するか？

成立などするはずがない。人間は誰しも自分の身が可愛いものだ。他人の命と自らの命を天秤に掛ける時、大抵の人間は我が身可愛さ故に、他人を犠牲にする。それが普通なのだから。

我が子なら、流石に話が変わるかもしれないが、友など所詮は赤の他人。切り捨てて然るべきなのだ。

だけど、それが出来ない人間も当然いる。残念ながら、我がマスターがその良い例だ。

確かに敵であった間桐慎二をマスターは倒した。だが、そこに殺意があったかと言えば、否である。

殺すつもりはなかった。殺したくもなかった。だけでも殺してしまっただけだ。

故意ではないが故の罪悪感。友を我が手に掛けてしまった事への虚脱感。友の死を目の当たりにした絶望感。

それら全てと、その上、記憶が戻らないがためにこの聖杯戦争に目的も意味も見出せない事が絡み合い、マスターを更なる虚無へと誘おうとしている。

無知は罪というが、はて、マスターはこの罪にどう抗うというのか



しらね？

このまま、目的も思い出せないまま聖杯戦争を無為に突き進むのか、それとも、何か意味を見つけて勝つ事を望むのか……。

契約した以上、サーヴァントとして貴方の行く末を見届けてあげる。

どの道、復讐者と契約したマスターには私と同じ、地獄が待っているのでしょうけど、ね。

さて、そろそろマスターにも動いてもらわないと。いつまでも下を向いたまま、こんなところで立ち尽くされていても困るのだし。

『マスター。遠坂凛に言われたでしょう？ どんなに足掻いたとて、次の戦いは必ずやってくる。別に悩むのなら、好きにすればいいわ。だけど、これは貴方だけの聖杯戦争ではないのよ。これは私にとつての聖杯戦争でもある。それだけは常々忘れない事ね。さもなくば、私に寝首をかかれる事になると思いなさいな』

霊体化したままで、私はマスターに声を掛ける。マイルームに戻れば、そこに備わった自動修復機能によつて傷も完治するが、かなりのダメージを負った状態で現界し続けるのは負担が大きいからだ。

「……………あ、……………ごめん」

半ば脅しにも近い私の言葉にも、考えがまとまらないのか、マスターは渴いた返事だけをして、覚束ない足取りで歩き始める。

見ている危なっかしいが、生憎こちらとて肩を貸すだけの余力は無いし、そもそも肩を貸す気もサラサラない。

まあ、校舎内ではよっぽどの事でも無い限り、死ぬような心配はないだろう。せいぜいコケて痛い思いをするくらいだ。

……………。それにしても、マスターがああ調子ではまるで張り合いがない。

戦闘に支障さえ無ければ別に問題ないが、いつまでもあんな状態で見られるのは鬱陶しい事この上ない。

さっさと振り切ったら良いものを……………これだから人間は面倒くさいのよ。

聖杯戦争、全ての一回戦は終結を迎えた。

これでほとんどの甘い考えを持ったマスター、そして実力の伴わなかったマスターは敗退し、消滅した事になる。

これから先は、真の意味での殺し合いの幕開けだ。聖杯戦争の重みを知る者達の、本当の殺し合い。

単なる生存競争ではなく、聖杯を求めてまで何らかの願いを叶えようとすると、一流の者達による欲望の競い合い。

それこそ、聖杯戦争に相応しきものだ。

自らの欲望を満たすために、欲望同士がぶつかり合い、殺し合い、戦いの末に最も強い欲望を持った者が、聖杯を手にする。

欲望の塊である人間だからこそ、それを観測するために開かれたこの聖杯戦争。

さあ、本当の戦いはこれからだ、全てのマスター諸君。

持てる力の全てを以て、その巨大な欲望を白日の下に晒け出すがい。

浅ましき欲望をこそ、ムーンセルは肯定し、受け入れる。それが人間の原動力であると知っているからこそ、ムーンセルは利用し、観測するのだから。

「……………むっ？　これは……………」

全ての一回戦の記録<sup>ログ</sup>を確認していた際に、私はとある不具合に目が止まった。

全てのマスターによる決戦自体に不備はない。滞りなく終了した事に間違いはない。

だが、これはどういう事だ？

128人のマスターが二人一組で殺し合ったはずだ。なのに、何故残ったマスター数が65人などと、不揃いにも程がある表示と

なっている？

「……。何かのバグか、それとも何らかの不正か。もしくは……。いや、まだ結論を急ぐのは早いか。仕方ない、全ての運営委員会メンバーを召集し、問題解決に当たるとしよう」

全くもって面倒なものだ、聖杯戦争運営管理責任者というものは。これならば、聖杯戦争に参加していた方がまだ幾分気楽というものだろう……。

「単なる表示ミスであるなら、余計な面倒もなくて良いのだがね。さて、一体何が潜むのやら……」

「……………」

ふと、彼女は深い微睡みから目覚めた。

彼女のぼやけた視界には、何も映らない。

いや、映らないのではない。視界は黒く覆われ、そこには何も無いのだ。

何も無いから、何も映らない。見るべきものが無いのだから、何も見えないのも自明の理というもの。

「つつう……頭が痛い」

光すら届かぬ闇の中で、彼女の思考は頭痛によりクリアになっていく。

「アタシは……死んだはずだ。ってコトはアレか？　ここはあの世ってか？　シャレになってないねえ」

彼女——ライダーは頭を押さえながら、アヴェンジャーに貫かれたはずの胸に手を置いた。

しかし、やはりそこには抉られた傷跡が残っており、これが現実であるのだと認識せざるを得ない。

「……負けたサーヴァントは、誰彼構わずここに落とされるってコトなのか？ いや、それにしたってアタシだけしか居ないってのは妙だ。……一体ここは何だ？」

闇の中というだけで、もしかしたら自分のように負けたサーヴァントが居るだけかもしれない。もしくは、個別にこの暗闇の空間に閉じ込められるのか。

どちらにせよ、どれも憶測の域でしかない。他に情報もない現状、確かめようにも不可能だ。

「八方塞がり……か。シンジはどうなったんだ？ アイツもどこかに捕まっちゃったか？」

「居ない」

不意に、ライダーの耳に少女と思しき声が届いた。

驚く事に、それは彼女のすぐ近くから聞こえ、だけでもその姿を視認する事は叶わない。

「誰だい、アンタ……」

当然、ライダーは警戒を露わに、自然と身構えていた。この何も見えない闇の中、いつ攻撃されても対処するのは難しい。

それでも、警戒だけは怠る訳にはいかないのだ。

警戒心を全開にする彼女に対し、闇に溶け込んだように姿の見えない少女は、気にした様子もなく、最初のライダーが発した疑問にのみ答える。

「慎二は居ない……。ここに招いたのは、あなただけ……」

淡々と最初の疑問に答えるその声音には、まるで感情が籠もっていない。表情が窺えない以上、その声から喜怒哀楽の感情を読み取れないというのに、彼女はそれすら許さない。

声の主である少女が敵なのか、判断に困るライダーだが、ひとまず情報を集める事に専念する。

「そうかい。つまり、シンジの野郎は御多分に漏れず、他マスター同様にくたばってるか。んで、死真んだアタシを捕まえて、何が目的だ」

「……そんな事も分からない？ 星の開拓者であり、嵐の航海者、フラインシス・ドレイクともあろう英雄が……」

少女は迷わず、ライダーの真名を口にした。それが何を意味するかを分からぬ程、ライダーも阿呆ではない。

「お前、何でアタシの真名を知ってる？」

知っているのはマスターである慎二、元々知っていたらしいアヴェンジャー、そして推測の末に言い当てた岸波白野だけのはず。

遠坂凜のように、慎二が自ら絡みに行つてバレたという例外もあるが、それも彼女だけだったはずなのだ。

故に、その四人以外に知っている者が居るなど有り得ない。

なのに、どうして少女は知っている。知るはずのない真名を、何故把握出来ている？

警戒心はもはや最大限にまで高まり、ライダーはすぐにでも迎撃出来るように拳銃に手を伸ばす。

「無駄だよ、ライダー……」

「！ ッグアアアッ！」

伸ばしたところで、手の感覚が消失した。正確には、腕から先の感覚が。

途端、凄まじい激痛に襲われる。胸に空いた穴は痛みすら感じないというのに、失われた腕の断面からは経験した事のない痛みを。

そうだ、何か剣のようなもので、腕から先を斬り落とされたのだ。

「グウウウウ!!?! て、テメエ、何モン……!!?!」

「さあ、もう一度殺してあげる。今度はもつと痛いよ……？ もつと、悶え苦しむよ……？ だけど、きつと愉しいよ……？」

闇の中であるというのに、苦しむライダーの姿が見えているとでもいうのか、先程までの感情の無い声音は、それはもう無慈悲で楽しそうな感情を孕んでいた。

「ふざけ、——ア」

そして、ライダーの声は途絶えた。この世界から、完全に『フランシス・ドレイク』という英雄が消えた。

英雄フランシス・ドレイクという概念が、ではなく、『彼女』という存在が。

「……まだ足りない。まだまだ足りない。もつと、もつと……。さあ、どうか勝ち進んで、岸波白野……。ふふ、うふふふふふ」

笑い声だけが不気味に闇へと響き渡る。

月の聖杯戦争は、薄暗くどす黒い願望すらもその内に秘めて、その第一回戦がここに終結した——。

## 第二章 『arousal / border alliance』

### 始まる第二回戦

心が混乱している。

慎二の死。投げつけられた凜の言葉。

凜は正しい。理性では分かっている。しかし感情は受け止めきれず、どこへ行けばいいのかも定まらない。

そんな姿を見かねたか、サーヴァントが声を掛けてきた。

「昨日から引き続き、まだ引きずっているのね。友人だったとはいえ、あのワカメは貴方を何度も貶めようとしていたじゃない。だからあれはアイツへの復讐よ復讐。どうせ現実では互いに、本当はこの誰とも知れない相手だったというのが真実なんだから、気にするだけ徒労というものよ」

相変わらず、慎二への当たりが強いというか、もはや嫌っているのは明らかなのだが、これは彼女なりの励ましなのかもしれない。

だとすれば、正直なところ驚きだ。

このサーヴァントは、マスターである私にすら罵詈雑言を平気で言うのに、今の言葉にはほとんど私を貶すようなものはなく、気遣うような言葉だって無くもない。

アヴェンジャーの意外な気遣いに、つい、何故、と問いたです。

「どうして、私を励まそうと……？」

「別に励まそうとして言った訳じゃありません。貴方のその暗い雰囲気も、間近で見ている、そろそろ鬱陶しいと感じていただけです。でも、まあ……そうね。上手く言えませんが、今回の戦いで私はほんの少しは貴方を気に入りました」

若干どや顔でカツコつけるアヴェンジャー。

気に入られたのはかなり意外で嬉しくもあるのだが、ほんの少し、というところがアヴェンジャーらしくて、つい笑ってしまう。

アヴェンジャーのいつでも勝ち気なその態度には、私が暗闇のどん底に沈んでも、必ず引つ張り上げてくれるような、そんな気さえした。「それでいいのよ。私がポジティブな方でもないのに、マスターまで陰気になられたら、たまったもんじゃありませんからね」

いや、あなたも十分にポジティブシンキングなところがありますよ？

なんて、間違っても口にはしない。言った途端、グチグチと細かいお小言が待っているだけだし。

ネチっこいその辺り、復讐者らしいと言えはらしいのだが。

「良いですか、より強い願いが生き残るのではありません。より醜く抗った者が生き残るのです。生きたい——何よりも強い生への執着は、自らの内に眠りし、秘めたる力さえも呼び起こす事があります。願望ではなく、欲望。願いを叶えたいという願望よりも、ただ死にたくないという生への欲望をこそ、私は貴方に見出したのだから」

アヴェンジャーにしては珍しく、諭すような口調で私に語りかけていた。

言っている事は真逆だが、私はその姿に一瞬だけ、聖女のような姿を垣間見る。

復讐の魔女ではなく、誰かを導く尊き聖女——そんな風に錯覚したのだ。

……自分は優しいのか。

消えゆく慎二の姿を思い出す度に流れた涙。

あの涙は優しさから出たものなのか。

それは分からないけれど。

アヴェンジャーの言葉は私を肯定してくれているようで、心を落ち着かせてくれた。

しかし、ただ癒されてばかりではいられない。優しさに甘んじていては、二回戦を勝ち残れなどしないのだから……。

「長話が過ぎたかしらね……」

私が彼女の言葉で落ち着いたと分かったのか、当の本人は少し気恥



ずかしそうに、そっぽを向くとそのまま姿を消してしまう。  
うん。やっぱり、こういうのにも慣れてないんだろなあ……。

そんな時だった。

もはや聞き慣れたあの電子音が、突然、私の携帯端末から鳴り響いた。

そして、その画面に映し出された文面もまた、容易に想像のつくものであった。

『……二階掲示板にて、次の対戦者を発表する』

来た。やはり、来てしまった。

もはや逃れられぬ宿命だとは分かっていたが、こんなにも早くに二回戦が始まるのは、少々予想外だ。

だが、始まってしまった以上は仕方がない。二階掲示板の前へ急ごう。

掲示板には、この前と同じように、二つの名前だけがあつた。自分の他にも何人かマスターが居たが、どうやらこの掲示板は見る者によって、そこに書かれている表示が異なるらしい。

要は、自分とその対戦者の名前のみが、それを見た者の目にだけ映るのだ。

私が見た掲示板の表示の一つは自分の名前。そして――

『マスター：ダン・ブラックモア 決戦場：二の月想海』

「……ふむ。君か、次の相手は」

いつの間にか隣に立っていた老人が、私へ声を掛けてきた。

髪は混じりけ無しの白。顔にも体にも老いの印が深い。

だが、何故か、衰えらしき物がこの老人からは感じられなかった。

例えるなら、深い年輪を重ねた大樹だ。長い年月に相応した風格、揺るがぬ芯の強さが、この老人から衰えを取り除いている――

私は彼に話しかけられて、ようやく場の異様な空気に気付く。

彼を中心に、さつきまで掲示板を見ていたはずの周囲のマスターが距離を置いて、小さくざわついていたのだ。

だが、彼は周囲の様子など気にも留めず、真っ直ぐに私へとその視線を向けていた。

「若いな。実戦の経験も無いに等しい。相手の風貌に臆するその様子が、何よりの証だ」

「……………っ!!」

私の細かな様子だけで、そんな事まで見抜かれたという事実には、やはりこの老人がただ者ではないと再度実感させられる。

彼はそれだけに止まらず、私の目をジツと覗き込むかのように見つめると、

「それに君の目……、……………迷っているな」

私の今の心情ですらも、簡単に見抜かれてしまった。目を少し見ただけで。

「案山子以前だ。そのような状態で戦場に赴くとは……………不幸な事だ」

彼は、残念そうに、それでいて哀れむように私を一瞥して、その場を去った。

私は…………一言も言い返す事が出来なかった。

彼の風貌に臆したのは紛れもない事実だ。だけど、そんな事は些細でしかない。理由にすらならない。

私が言い返せなかった本当の理由は、彼の言葉が全て真実であったから。全てが的を射た言葉だったからだ。

あの老人は一切の迷いなく、私と面と向かっていた。だけど、私は彼と違い、この戦いへの迷いを抱いている。

私なんかが、本当に聖杯戦争に参加していても良いのか。慎二の命まで奪って、勝って意味などあったのか。

だからこそ、私は彼に言い返せなかった。彼のその立ち居振る舞い

が、私とは比べ物にならない程に高潔だと感じてしまったから。

彼が去った事で、今度は私に周囲の視線が集まる。嫌でも、その会話内容も私の耳へと入ってきた。

「おい、マジかよ。さっきのつて、あのダン・ブラックモアか？」

「まさか、あんな大物まで参加してたなんてな……」

「レオといい、遠坂といい……、なんかレベル高すぎじゃね？」

「アイツも運が悪いよな。ダン・ブラックモアが対戦相手とか、終わっただらろ」

「おい、ブラックモアの対戦相手の子……めっちゃ可愛くね？」

ちよつと声かけてみようかな……」

ヒソヒソと話す彼らも、やがて各々の聖杯戦争の為にこの場から離れていく。

私も、とりあえず早急にその場から離れる。何故か、余計な注目も浴びてしまっていたからだ。

とりあえず教室へと避難して一息ついていたところで、アヴェンジャーが急に現界して話しかけてくる。

教室に人が少ないから、姿を現したのだろう。

「確か以前、教会の前でワカメとモメてたジジイだったわね。あのジジイ……中々に厄介です。命令に殉ずる事も厭わない意志の強さを感じます。でも、これは良い機会かもしれません。貴方の粗末な戦闘技能を洗練させる好機ですからね。強者、それもその道の達人が相手となれば、否が応でも成長するでしょう」

実力差は感じてても、敗北への心配などは一切言ってこない。

自分の力があれば勝利するのは当然だ、と思っっているのかもしれない。

しかしこちらは、それほど楽観視は出来ない。実力差のみならず、今の男——ダンの指摘した問題も残っているのだから。

迷いは戦いの邪魔になる。……自明の理だ。

けれど、簡単に捨てられるなら、最初から迷わないのだ。

自分の対戦相手が決まり、一つ思い出した事があった。

それは、右も左も分からなかった自分に助言アドバイスをくれた、一人の少女の事。

——遠坂凜。

あの後すぐに探し始めたのだが、結局夕方になるまで見つけれなかった。

もしかしたらアリーナにでも行っていて、だから校舎内では遭遇出来なかったのかもしれない。

だが、さすがにそろそろ帰ってきてもいい頃合いだろうし、私もアリーナに行く前に、もう一度だけ屋上を見に行っておこう。

居た。

屋上に足を運んだ私は、遠坂凜と初めて出会った所で、あの時と同じように佇む彼女の姿を見つける。

凜も、屋上に誰かが来たという事には気付いたようで、それが私だったと分かると、溜め息を吐いてこちらに手招きしてきた。

「昨日あれだけ言ってもまだ私の所にノコノコ来るなんてね。おバカさんというか、肝が太いというか……。まあ、それで世話を焼く私も大概なんだけど」

呆れるように自嘲の笑みを浮かべる凜。別に、私は凜の事を嫌っているつもりもないし、昨日のあれだって、決してマイナス面だけで受け取った訳ではない。

凜は当たり前前の事を口にしただけ。どちらかと言えば、私の方にこそ問題があったのだから、それで彼女を嫌うのは間違っている。

「……はあ。それよりも、あなたの二回戦の相手、聞いたわ。もう現役じゃないけど、ダンカクレは名のある軍人よ。西欧財閥の一角を担う、ある王国の狙撃手だった。匍匐ほふく前進で1キロ以上進んで、敵の司令官を狙

撃するとか日常茶飯事。ま、並の精神力じゃないのは確かね」

匍匐前進で、1キロ…だと…!!?

いや、常人のレベルを遥かに逸脱している、それは。

それに、西欧財閥ってどこかで聞いたような…??

「…分かる? 一回戦とは何もかもが違う。見たところ記憶も戻ってなさそうだし…。ホーントご愁傷様。ただでさえ弱いのに、そんなハンデまで持ちちゃってねー。根性論はあんまり口にしたくないけど、勝利への執念は目的から生まれるもの。記憶が戻らないのは崇るわよー」

どこまで本気なのか、からかうように遠坂凜は言う。

しかし、ハンデとは何の事だろう?

確かに記憶が戻っていない事はマイナスではあるだろう。だけど、聖杯戦争は個人の戦いだ。記憶が戻っていない事が、それほど影響する大きなマイナスとは思えないのだが…。

「その顔…分かってないと言っても言いたげね。言っておくけど、大アリよ。勝利への執念イコール集中力だもの。義務だけで戦えるのは、それこそ軍人だけよ。あなたには、そのどちらも不足している。一回戦を勝ち抜けたっていうのに、まだふわふわしてるのはそういうコト」

「ふわふわ…、そんなにふわふわして見える? 私…」

他人に言われるのと、自覚するのでは全く違う。私自身、そんなつもりはなくても、外から見ればそう見えているというのは、違和感しかない。

「してるしてる。風船かっつくくらいにね。ともあれ、あんたのサーヴァントの宝具がどんなに強くても、このままだとあっさりサー・ダンを殺されるでしょうね」

「宝具…? ……宝具っていうと、慎二とライダーの使ってきた、アレ?」

「いや、私に聞かれても困るんだけど。って、なにハトが豆鉄砲食らったような顔してるのよ。宝具よ宝具。アーサー王ならエクスカリバーって風に、サーヴァントをサーヴァント足らしめる絶対的な力」

うーん、切り札的なものとだけアヴェンジャーから聞かされていたが、サーヴァントをサーヴァント足らしめるとは、どういう事なのだろうか。

問い詰めてみると、遠坂凜は哑然とした顔で絶句する。

「……宝具を持つてない？ え、それって、サーヴァントの力を完全に使っていないってわけ？ そんな状態でエル・ドラゴを倒したの？」

「宝具？ なにそれおいしいの？ みたいな心境です」

いや、スキルとかなら使つてはいたけど、決定的な必殺技らしき必殺技つてのはなかったな。

それがあまりに驚愕の事実であつたらしく、凜は初めて会つた私をNPCと勘違いしていた時くらい驚いた顔をして、若干固まっていたが、少しして再び動きだす。

「いや、驚くわよ、そんなの。私はてつきり、あなたのサーヴァントの宝具が桁違いに強いから、エル・ドラゴも宝具頼みで倒したと思つていたわ……」

確信した。今の今まで、凜は完全に私を残念な子だと認定していたのだ。サーヴァントに頼り切つた残念マスターだと。

失礼にも程がある。少なくとも、私はアヴェンジャーとは対等とまではいかなくとも、二人三脚でやってきたつもりだ。

アヴェンジャーを頼りにしてはいるが、依存しているつもりは一切ない。

「……………ふうん。少し、見直したかも。でも、ますます危なっかしいなあ。予選を突破したのに記憶を取り戻せていない事といい、宝具を使用出来ない事といい、あなたのパーソナルデータは、問題を抱えすぎているわ」

思案顔で私の現状を推測し始める凜。場違いだとは思うが、物思いに耽る彼女は顔は、本当に美人だと感じる。

予選の頃、学園のアイドルなどと言われていたのも頷けるといふもの。

「考えられるのは、予選を突破した時にバグが発生して、パーソナルデータに傷を付けたか。それとも、あなたの魔術回路に、何らかの異

常が発生してるか。いずれにせよ、何とかするしかないわ。とにかく、原因が分からない以上、サーヴァントを使いこなして、魂の改竄を繰り返しなさい。サーヴァントとあなたの繋がりを強化すれば、もしかしたら宝具が使える様になるかも知れないわ」

考えがまとまり、結論が出たらしい凜は、私へ助言をくれた。アドバイス

なんだかんだと言いつつ、やっぱり凜はお人好しなのだろう。だから、こんな私の事で真剣に考えてくれるのだ。

「セラフは基本的に、参加している全てのマスターに対して平等の筈よ。なんで、宝具が使えないマスターがいると分かれば、何らかの形で修正処理を施すでしょう。あ、それと。もう倒した相手だからって、戦った相手のチェックを怠るのもマイナスよ?」

「……それって慎二とライダーの事? でも、どうして……」

「そんなの、倒した相手でも、そのプロフィールを知れば何かの助けになるかもしれないからよ。暇を作ってマトリクスを見ておきなさい」  
マトリクス……そういえば、あの決戦後は茫然自失となっていたので、確認する余裕もなかった。精神的にも、身体的にもキツかったし。

慎二の最期を思い出すのは辛いけど、凜の言うようにマトリクスをチェックするのだけは、しておいて損はないだろう。

「ありがとう、色々と教えてくれて」

「別に? 無知なヒヨコを放っておくと寝覚めが悪かっただけよ。でもまあ、いずれにしても、覚悟が足りないなら、宝具を手に入れる必要は無いと思うけどね」

こういうキツパリサツパリしたところが、凜の良さでもあるのだが、何とか一言余計ではある。

「それより、あなたもアーリーナにでも行きなさい。まだまだ未熟なあなたには、少しでも自身を鍛える事が何より重要かつ不可欠でしょう?」

そう言っつて、私に背を向けた凜は、ヒラヒラと手を振って、露骨にどこへなりとも行けと伝えてくる。

聞くべき事は聞いた。彼女の言う通り、アーリーナで自分を鍛えるのは私が聖杯戦争で戦っていく上で必要不可欠。

もともと、アリーナに行く前に彼女と話したかったのだし、そろそろお暇いとまするでしょう。

私は軽く凜に礼だけ告げて、屋上を後にした。ダン・ブラックモア、彼の情報収集にも手を付けていかなければ……。

戦いへの覚悟はまだハッキリとはしていない。だけど、準備だけは怠ってはいけない。

備えだけでも万全にせねば、万に一つも私に勝ちの目など残されていないのだから。

「不具合……ね」

岸波白野がこの場を去ってから、誰に言うでもなく、彼女はポツリとそれを呟いた。

「そういえば、黒い学生服——運営AI達が何かバタバタとしていたようだけど……。ええ、何かの問題が見つかったって」

否、彼女一人ではない。ここには、彼女のサーヴァントたる存在が、姿を消しているだけでした。とあつたのだ。

「少し気になるわね……。私もちよつと探りを入れてみるから、『ランサー』もお願い。それに、霊体化出来るあなたの方が、そういうのは最適だし」

普通の人間が見れば、彼女が独り言をブツブツと呟く異常者に映るだろう。だが、ここは普通の世界ではなく、月の中に広がる電子の海。

故に、彼女が誰と話しているのかは、聖杯戦争に関わる者からしたら、一目瞭然である。

「なんとなくだけど、嫌な予感がするわ。何事も無ければいいんだけど……」

溜め息を吐くと、彼女は空を見上げた。そこに広がるのは、データの飛び交う月の海。

地上とはルールの異なるこの異世界にも等しい場所で、頼れるのは自分と、その相棒たるサーヴァントだけ。



あのヒヨコへの心配と悩みの種も尽きないが、これ以上の厄介事だけは勘弁とばかりに、遠坂凜は憂うのであった。

## 謎を追う者

「難しい顔をしていますね、マスター。先程の女の話が気になってい  
るのかしら？」

屋上から一階まで降りてきたところで、アヴェンジャーが急に現界  
して話しかけてきた。

そう、この眼前に居る少女もまた、サーヴァントとして強力な力を  
持っている。

旗と鎌を自在に操り、炎によりミドル・ロングレンジをカバーする  
他、スキルによる魔力の自己回復、そしてダメージを負えば負うほど  
敵への攻撃力が増していく『復讐者』というスキル。

慎二戦において、ライダーの宝具を凌いだ後に彼女をほぼ一撃で屠  
れたのも、その後者によるところが大きい。

だけど、私は彼女の真名も、宝具すらも全く知らない。

一応、自分もマスターとしては、切り札となる『宝具』が気になる  
のは当然だ。

「時が来れば、いずれ宝具を使う事もあるでしょう。だけど、宝具とは  
英霊の象徴そのものでもある。それは、私という存在が世界に露見  
し、認識させる事に他なりません。少なくとも、一回戦で使うには時  
期尚早でしょう。ま、貴方はへっぴりマスターなのだし、どうせ使わ  
ざるを得ない時は必ず来るでしょうから、それまで期待して待つ事ね  
？」

……、ん？

確かに、宝具は英霊を象徴する装具。使えば敵には勿論、それを感  
知した他のマスターにも知れる可能性は否定出来ない。

宝具の使用は後になればなるほど有利だ。サーヴァントにしてみ  
れば、最後の切り札は最終局面まで温存しておきたい……というのが  
心情だろう。

だけど。

だけど、彼女——アヴェンジャーの場合、その意味合いが違うよ

うに感じるのは、私の気のせいかな？

何というか、アヴェンジャーは宝具を使用する事で真名が露見する事を危惧しているのではなく、『宝具の使用自体が彼女にとって都合』という風に聞こえたのだ。

「ねえ、アヴェン——」

聞いただそうと、私が言いかけたところで、端末からの呼び出し音によって遮られてしまう。

彼女が何を隠しているのか、彼女の正体が何であるのか。今はまだ分からないけれど、いずれ判る事だろう。

適切な時に、と彼女も言っているし、今これ以上の詮索をするのが正しいとも思えない。

私は気を取り直し、スカートのポケットから端末を取り出す。画面には、

『…：第一暗号鍵を生成。第一層にて取得されたし』

タスク  
試練か——。

そう、また二本のトリガーを得なければ、決戦の資格を得る事すら適わないのだ。

それに、風に聞いた話では、トリガーを揃えられなくて、決戦に至る事もなくそのまま退場したマスターも居たらしい。

これは決して他人事ではないのだ。私だって、うかうかしていたら、彼らと同じ末路を辿る事となる。

「試練が発令されたようですね。行きますよマスター。今は私の宝具より、試練の遂行をすべきでしょう？」

挑発的に笑ってみせると、アヴェンジャーは姿を消してしまう。

彼女の言う通りだ。宝具に気を取られて、トリガーを揃えられなかった、などでは目も当てられない。

今は、戦いとトリガーの取得、そしてダン・ブラックモアにだけ集中しなくては……。

そんな訳でやってきました保健室。

どんな訳だ！ とは言わないでくれると嬉しい。

ほら、だって二回戦も始まった事だし、支給品も更新でしょう？

それなら、貰いにいかない道理はない。そう、タダに勝るものはないのだ！ これぞ人間の真理にして、全ての人間の持つ心理でしょう！！

「寒いダジャレをどうも。だけど残念。私の独断と偏見で脳内審理に掛けた結果、掛け値無しの評価ゼロ。どころかマイナスよ」

しんりだけに!？」

あつさりと私の渾身の一発は、保健室に入った途端に現界したアヴェンジャーによって、残念評価を下された。

暗い雰囲気吹き飛ばそうと、私なりに頑張ったのだが、無意味だったらしい。

「あはは……何と言いますか、その、相変わらず仲がよろしいようで、何よりですね？」

え、今のが仲良く見えたの、桜？

というか、何気に疑問系なのは何故。

「はい、では支給品を渡しますね。どうぞ」

「ん。ありがとう、桜」

桜から支給品であるエーテルの欠片を受け取ると、お礼に桜の頭を撫でてあげる。

少し恥ずかしそうに、こしよばいようにモジモジとする桜の姿は、やけに印象的に私の目に映った。

「その、くすぐったいですね。でも、なんだか不思議と気持ちがいいです。ありがとうございます、先輩。他のマスターさんはこんな事はしてくれないので、なんだか新鮮で……」

確かに、凜から教えられた魔術師像は、NPCやAIなど生命の輪ウィザードに無いモノへの態度はドライなもののような印象を受けた。

こうして、必要以上に彼ら彼女らと触れ合おうとする私の方こそ、

やはり異常なのかもしれない。

「それでは、今回も頑張つて下さいね」

そう言つて、桜は笑顔で会釈をしていた。何故だろう、いつもその笑顔に優さを感じてしまうのは。

私は頭ではなく、心のどこかで、桜に何か感じるところがある。それが何かは私にも分からない。

だけど、それはとても大切に重要な事であつた気が――。

「……桜？」

私の思考は、疲れたように溜め息を吐いた桜を見て中断される。

今まで気付かなかつたが、少し顔色も悪いように見える。

「もしかして、疲れてる？ それならゴメンね。バカ騒ぎしちやつて……」

「まったくよ。私のマスターなんだから、少しは賢く振る舞つてくれないかしら？ どうせ中身はそんなに詰まっていらないんだし、隠す努力くらいしなさいな」

ドサクサに紛れて、私に毒を吐くのは止めて!?

けっこう心にグサリと刺さるから!?

「あ、いえー！むしろ気が紛れたので、とてもありがたいです。確かに、昨日から夜通し働き詰め。本当ならいつもは、夜は休止モードに入っているのですが、昨晚急に言峰神父から運営関係者全員に緊急召喚命令がありました」

昨晚……というと、全ての一回戦が終了したのが昨日だったはず。

という事は、一回戦で何か問題でも発生したのだろうか。

「……あの、本当ならダメなので、内緒にしてくださいね？ 実は……」

内緒話するように、桜が私の耳元で話し始める。

……あつ。耳元に桜の吐息が……!?

「バカっ。真面目な時に頭沸騰してんなつての!」

あいだっ!? ゴツンと頭上からゲンコツが。見かねたアヴェンジャーからの制裁が飛んできたようだ。

「やっぱり、仲が良いですよ。ちよつと羨ましいくらいです」

「ゴメンゴメン。それで、言峰神父から呼び出された理由は？」

「はい。えっと、どうやら聖杯戦争自体に不具合は無いようなんです。ですが、どうにも不明な点が見つかって……」

桜の言葉は、どうにも歯切れが悪い。本来なら言っただけでいいけど、でももあるし、AIとしての機械的判断もあるのだろう。

それでも、桜は私に話してくれようとしているのだ。ここはしっかりと聞いてあげるのが筋というもの。

「ふむん……で？ その不明な点とは何かしら」

どうやらアヴェンジャーも聞き耳を立てていたらしく、桜に催促の言葉を投げかける。

「あ、はい。聖杯戦争は1対1で行われる事はご存知ですよ？ そして予選を通過したマスターの総数は128名。それらが一回戦で半分も減ってしまった……はず、だったんです」

はず、だった？

それは何か、半分きつかりの数ではなかったとか？

「そうなんです。本来、現在の残りマスター数は64名でなければいけません。ですが、何故か現状残りマスター数は65名」

「なるほど……それは確かに不可解ね。全ての決戦の内、どれか一戦くらいは異常でも起きたのかしらね」

アヴェンジャーの推測は、ただですぐに桜によって否定される。

「いいえ。記録<sup>ログ</sup>も言峰神父をはじめ、全ての運営関係者で何度も確認しましたが、どこにも問題はありませんでした。全て滞りなく、有っても不戦敗で消滅したマスターが居たという程度です」

むむ……よく考えてみれば、65という数字は確かにおかしい。

マスターが共にトリガーを集められず、両者揃って敗北扱いならまだ分かる。それなら、必ずしもマスター残数も64人にはならないからだ。

だけど、減る事はあっても増えるのだけは有り得ない。必ずどちらか、もしくはどちらとも消滅するのが確実のルールである以上、増える事はまず起きない。

確実に、一回戦が終わった時のマスター数は65未満にならないけれ

ば、辻褃が合わないのだ。

「ですが、校舎内をスキャンしてみても、この校舎内にいるマスターはやっぱり64人だけなんです。だから、私達も不具合の原因を探すのに奔走していて、昨晩からずっと働き通しだったんですよ。今は少し休憩していましたが」

なるほど。これで桜が疲れている理由が分かった。それも当然か。いくらAIとはいえ、不休で作業を続ければ疲労も溜まるだろう。

うーん……。それなら、桜には悪い事をしたかもしれない。

せつかくの休憩中、私なんかの相手をさせてしまつて、迷惑だったろうに。

「何度もゴメン。邪魔だったよね、私。じゃあ、もう行くね……」

桜に謝り、私は保健室を出て行こうと扉へと向かう。

「……」

アヴェンジャーは動く気配がないが、どうせアリーナに行くのだし、そのうち付いて来るだろう。

「あ……ま、待ってください。別に、私は迷惑なんて思つてません！」扉の取っ手に手を掛けたところで、後ろから桜が呼び止めてきた。なんとなく必死な感じがするのは、気のせいではない。

振り返ると、やはり必死な顔をした桜の姿がそこにあつた。

「あれ？ 私、どうしてこんなに必死になつて……」

どうやら桜自身も、何故血相を変えて叫んだのかが分かっていないらしく、その姿にどうしようもなく人間らしさを感じてしまう。

彼女は人間ではない。だけど、とてもそうには見えなかった。

「えつと、そう。今からお茶にしようと思つて、準備してたんです。せつかくですから、岸波さんもどうぞご馳走になつていつてくださ  
い」

あはは、と小さく笑つた桜は、いそいそと紅茶を淹れる準備を始める。

夕方ではあるが、まだ時間はあるし、せつかくなのでお呼ばれしていくとしよう。

「うん。じゃあ、お言葉に甘えて……」

「はい！ それでは、椅子に座って待っていて下さい。すぐに用意しちやいますから」

桜に促されるままに、私は部屋の中心にあるテーブルの方へと向かい、椅子に腰掛けた。

「…………ふん」

と、アヴェンジャーもドカッと不躰に私の隣に腰掛ける。どうやら、最初からアヴェンジャーはこうなると分かっている、私が部屋から出ようした時に動かなかつたらしい。

それにしても、気になるな。

何か嫌な予感がする。それも、とびきり超級の厄介事のような…………。

岸波白野とアヴェンジャーが保健室で一服している頃の事。

運営NPC達が忙しなく校舎を行ったり来たりしている姿を眺めながら、真つ赤な制服に身を包んだ少年——レオは、サーヴァントであるガウエインを引き連れ、食堂へと向かっていた。

その堂々たる姿からは、溢れ出る自信に満ち満ちている程で、自然と他のマスター達も彼に道を譲り、さながら王の凱旋のような光景となっている。

「レオ。私は先に席を確保して参りますので、食事の注文をどうぞ」

「ありがとう、ガウエイン。では、僕はゆつくりとメニューを決めるとします」

「ハッ。ありがたきお言葉。では…………」

騎士の礼の姿勢を取ると、彼は空いている席を探してテーブル群に突撃していった。

円卓の騎士が席の確保という、ちよつとしたシニールな光景ではあ



るが、そこに好奇の視線はあれど、もちろん異議を申し立てるような者も居ない。

レオは気にした風もなく、カウンターから少し離れた所で、夕食をどうするか真剣に考え始める。

「うーん……悩みますね。昨日はウドンを頂きましたし、今日は麺類よりも米を食べたい気分でもある。米……カレーライス……うっ、頭が……」

何を連想したのか、レオは少し顔を青くして、頭を思わずといった具合に押さえる。

何かカレーライスに嫌な思い出でもあったのかもしれない。

「あら、ハーウェイの御曹司ともあろう者が、こんな市民食堂ならぬ学生食堂に居るなんて。学生の真似事でもしたくなかった？ それとも、市民の味を確かめにでも来たのかしら？」

真剣に悩む彼の背後に掛かる声。それは彼と同じく一流と称される、優勝候補筆頭の一人、遠坂凜のものだった。

「おや、ミス・トオサカ。奇遇ですね、今日は僕もここで食事をおもったんですよ。最近になって知ったのですが、ここの食堂はなかなかメニューのレパートリーが多く、味も屋敷で雇っていたシェフと同等、もしくはそれ以上です。こんな事なら、初日から利用していれば良かったと思う程ですよ」

凜の嫌味とも取れる言葉も、レオはしれっと流してみせる。いや、流したというより、本気で気にしていないのだろう。

凜が信条として掲げるものが、『遠坂たるもの、優雅であれ』とするなら、レオは『ハーウェイよ、我らは絶対の王者なり』であろうか。

強者として、王になる者として育てられたレオは、それが顕著に彼の態度や性格に表れている。

異常なまでに真っ直ぐな王の卵。ハーウェイが育んだ天性の才能を、過酷かつ丁寧な英才教育によって仕上げた王の卵こそが、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイなのである。

それがどれだけ高貴であろうとも、歪な在り方には変わりない。だが、それを彼が自覚するかは別問題に過ぎないのだが。

どちらにしても、彼はこの聖杯戦争に参加する全マスターで最強といつでも過言ではない。

「……流石はハーウェイが作った過去最高傑作。嫌味もまるで通じないわね」

凜は挑発も兼ねて嫌味を言ったのだが、全く通じていないと見や、すぐさま諦める。

無意味な挑発は、かえって自分に心労が掛かるだけだ。

「ああ。今のは嫌味だったんですね。すみません、気付けませんでした。僕の見識もまだまだ浅い、という事でしょう。ありがとうございます、ミス・トオサカ。良い経験になりました」

「はっはー……嫌味に感謝で返すとか、苛立ちを通り越して虚しくなるっつうの」

ヒクヒクと目尻を痙攣させる凜。かなり怒りを我慢しているのだろう。

しかし、レオはそんな事にも意を介さず、現在彼が抱く疑問を凜にも投げかける。

「ところでミス・トオサカ。今日一日、NPC達の動きを見て、何か感じる事はありませんでしたか？」

「……やっぱアンタも気付いてたか。確かに、NPC——特に運営関係のAI達は朝からずっとピリピリしてるわね」

凜の言葉に、レオもまた「やはり」と呟く。

いや、彼らだけではない。見る者にもよるが、多くのマスター達の内、少数はこの異常事態を察していた。

それを感じ取れるマスター程、より優れた才覚を持っているという事でもあるのだが、問題の解決が出来るかと問われれば、話は変わってくる。

「何か僕らにも重大な影響が出るようであれば、言峰神父から通達があるでしょう。問題発生の可能性は気になりますが、僕はひとまず静観ですね」

「ふーん。レオは手は出さない、と。なるほどね……つまり、レオも何  
が起きてるのは把握してないってコト」

ニヤニヤと、凜は何かを思い付いたように、悪戯な微笑みを浮かべ  
た。

「なーんだ。天下のハーウェイ、それも次期当主でも分からない事があるのね。ちよつとは人間味があるじゃない？ あなたも」

「ふふ。今度は分かりましたよ、ミス・トオサカ。残念ですが、僕だつて人間です。完璧を常に心掛けてはいますが、僕の手が及ばない範囲外では、さすがに十全とまではいきませんよ」

挑発と分かつて、なおも毅然としてその態度を崩さないレオ。彼への挑発は、もはや無意味どころか完全に無効であろう。

そう判断した凜は、今度こそ挑発を諦める。いつまで、何度やつても、期待した結果は返って来ないのだから。

「ま、残念な事には変わりないか。元々私も探る為にわざわざここまで来たんだし。アンタが何も知らないなら、これ以上の会話も無駄という事かしらね」

「おや？ 僕は無駄だったとは思いませんが。少なくとも、僕には有意義な時間を感じていましたから」

「……早速嫌味を返してくる辺り、流石よね」

にこやかな笑みを見せるレオとは対照的に、うつすらと青筋をこめかみに浮かべる凜。この二人、かなり相性が悪いのは、誰から見ても明白だ。

「それでは、そろそろ失礼します。ガウエインを待たせていますので」  
優雅に一礼をすると、彼は凜に背を向け、カウンターへと足を踏み出した。食事を注文するのだろう。いつの間にか、今夜の夕食を何にするか決めていたらしい。

「……レオでも知らなかったか。やっぱり、当事者に直接聞くのが手っ取り早いかしらね」

凜もまた、彼に背を向けて食堂から足を遠ざける。これ以上の収穫は見込めないと判断したが故に。

蛇足だが、この時レオが頼んだ料理は――

「これは米と具材共にを炒めたものでしょうか？」

「ええ。『チャーハン』、というらしいですよ。ミス・トオサカを見た  
ら、急に中華料理が食べたくなりましたからね」

「はあ……？」

ガウエインは頭に疑問符を浮かべながら、レオの食事風景を見つめていたのだった。

『王は人の心が分からない』のであれば、また『王の心は人に分からない』のである。

## 蒼崎橙子の気まぐれ

保健室から出た私は、そういえばと思い出した事がある。  
ライダーとの戦闘に勝利した際、私達は結構な量のリソースを賞品として獲得していたのだ。

「……………うーん」

保健室のすぐ前の扉は、教会のある裏庭へと続く道に繋がっている  
ので、ついでだし寄って行こうかと悩む。

夕方だし、時間の余裕はそこまで無いが、魂の改竄くらいなら大丈夫  
だろうと判断を下した私は、アリーナとは正反対の方向へと行き先  
をシフトチェンジした。

さて、どれくらい霊格を取り戻せるのだろうか……………？

難なく、教会へと辿り着いた。

やはりというか、この時間は人が少ないようで、ここに来るまでに  
すれ違ったマスターもたったの二人だけ。

皆、今頃は休息に入ったか、それとも未だアリーナに潜っているか  
のどちらかだろう。

そして私も、改竄が済み次第アリーナに行く予定ではあるのだが。  
教会の中は相変わらずの空気の重さで、その発生源はやはり教会の  
奥。そこに二人して左右に離れて腰掛けている蒼崎姉妹からだ。

「おっ！ 最後の予選通過者ちゃんじゃん。どうにか一回戦は無事に  
切り抜けられたみたいね。いやあ、お見事！」

入ってきたのが私だと気付いた青子が、重苦しい空気の中、我関せ  
ずとばかりに笑顔で手を振ってくる。

というか、今更だけど私の事を覚えてくれてるといのが意外なの  
だが。

「そりゃ覚えてるって。アヴェンジャーなんてエクストラクラスと契  
約してるのは、全マスター中でも君だけなんだからね。それに君、可

愛い顔してるし、お姉さん覚えちゃった♪」

「そ、それはどうも……」

そう言つて、ウインクしてくる青子。率直な感想としては、年甲斐もなくそんな仕草をするのはどうかと――

「――、へっ!?!」

刹那、ギョオンという凄まじい轟音と共に、ジュツと肌が焼けるような音を立てて、私のほっぺを太くて光るビームのようなものが掠めていった。

「年が……なんだつて?」

私は光線の軌跡を辿つて後ろを向いていたが、恐る恐る声の方と振り返ると、そこにはとてもイイ笑顔をした蒼崎青子が、その手の平から白い煙を出しながら立っていた。

心なしか、未だにプスプスという嫌な音が聞こえている気がする。

「な、なんでもありません! はい!!」

「そう。いい子ね。私も可愛い女の子を手を掛けるのは気が引けるし、以後、気を付けるよーに!」

怖い笑顔から一転、にこやかに朗らかな笑みへと変わる青子の笑顔。

誓おう。女性に年の話はしない、と。

私のすべすべにぷにぷにほっぺがいくらあつても足りない。いや、命が幾つあつても足りない、の間違いか。

『ビーム! 今ビーム撃ってきたんだけどあの女!? 何? アイツま

さかセイバーなの!?! ビームとかセイバー共の専売特許でしょう!』

アヴェンジャーがいつになく取り乱して、何やら訳の分からない絶叫を上げていた。

姿は消しているが、多分とんでもない顔になっているに違いない。

「バカはどこへ行つてもバカなのか? おい愚妹。ここでビームは撃つなど何度も言ってるだろうに。ムーンセルから追い出されても知らんからな。……いや、むしろ追い出されてくれた方が、目障りが居なくなるし都合合か?」

呆れた顔で青子に注意を呼びかける橙子だったが、途中からむしろ

追い出されてくれた方が嬉しい的な感じに変わっている。

「どうしてそんなに仲が悪いの二人共!？」

「いや、しかしそうなる私に改竄の役目が回ってくるか。チツ。やはり愚妹でも居る方がまだマシか」

「うっさいわよ! 私はこの世界できな臭い事が起きそうだから居るってのもあるけど、今はアンタが妙なコトやらかさないかを見張る方が重要だっつもの!」

姦しいとはまた違った意味での喧しきだな。これが仲の良い姉妹の可愛い口喧嘩だったなら、どんなに良かった事か……。

「さて、愚妹は無視するとしてだ。用件は……そうだな、魂の改竄にでも来たのだろうか?」

隣で（距離は離れているが）喚く青子を余所に、橙子は軽く視線を私に向けてくる。

意識は私へも傾いているようだが、やはり手元は絶え間なく動いている辺り、もう流石としか言いようがない。

「どうかね? 改竄には慣れてきたか?」

「それは……もう何度か来てるから、はい」

私の返事に、橙子はさほど興味は無さそうにはあるが、少しだけ満足そうにしながら続けた。

「結構。君のサーヴァントは、本来ならもつと上位の霊格の筈だ。マスターの魔術階梯に合わせて劣化しているのだろう。早く、元の力に戻してやれ」

橙子のアヴェンジャーへの評価は、私が思っているよりも高いらしい。

確かに、アヴェンジャーはパラメータはまだ残念だが、スキルだけを見れば一流であると素人の私から見ても分かるくらいだし。

橙子の人を見る眼は確かなようだ。伊達に眼鏡を掛けてはいない、という事か。

今度、眼鏡談議を是非したいところだ。

「ふーん? 珍しいコトもあるもんね。橙子が凡人のマスターに声を掛けるなんて。なに、電気タバコばつかでイカれちゃった?」

さつきから無視され続けていた青子が、仕返しとばかりに嫌味を橙子にぶつけるが、橙子は橙子で、その嫌味に対して皮肉げに笑ってみせる。

「ああ、その通りだ。嗜好品コーヒはない、隣にはバカが一匹、おまけにセラフは全域禁煙ときた！ これでどうかしない方が異常だろう。さつさと用を済ませて、この体を廃棄したくてたまらない」

……悪態をつく蒼崎橙子だが、彼女の言葉には少しだけ違和感があった。

『この体を廃棄したくてたまらない』、とはどういう意味だろうか？ 「ん？ なんだ、気になるのか？ 言葉通りの意味だよ。セラフに侵入した魔術師は、聖杯を手に入れるまで帰れない。しかし、私はマスターではない。侵入した時点で永遠に出られない。であれば、結論は一つだろうか？」

……結論は、一つ。

その言葉に、私は肝が冷えた気さえした。それはつまり――、「死んでもいい自分を作って、セラフに侵入すればいい。用件を済ませば、後は自壊するだけさ」

……えーと……。

正直、意味は分かるのだが、それを実行する精神性が、分からない。「あー、ほっとけほっとけ。その女、人形好きをこじらせ過ぎて、もうただの変質者だから」

少しばかり混乱する私に、橙子の横からビーム系お姉さんが口を挟んでくる。私へのフォローのつもりだろうが、さりげに橙子を罵倒する辺り、流石の仲の悪さだ。

「コピーと自分の区別とか、とつくないのよ。天才となんとかは紙一重ってヤツね。なんで、まっとうな私や貴方は、話半分に聞いておけばいいんだって。ほら、そんなコトより改竄していかない？」

と、強引に話題を切り上げ、魂の改竄を勧めてくる青子。

まあ、もともとそのつもりで来たので、もちろん改竄していくけど。「さて、ライダーとの戦闘経験値はどれほどのものだったか、確かめさせてもらおうじゃない？」



アヴェエンジャーはいつの間にか現界しており、意気揚々と改竄を行う台座へと飛び乗っていた。

こう、何というか、本人は気付いていないのだろうが、楽しい事の前にした彼女はいつになく、少女らしさが全身から滲み出ている。

普段からその笑顔を見せてくれればいいのに……なんて、無理とは分かっている望んでしまう私も、成長しないな。

はい。分かってはいましたとも。

相も変わらず、魂の改竄中は手持ち無沙汰なんだよね、私。

「……………」

あまりに暇で、私は天井をぼーっと見上げていた。

静けさに包まれた教会内。だけど、教会にはらしくない、カタカタというキーボードを叩くような、だけど電子音の混じったような、神聖さには不釣り合いな、青子と橙子のそれぞれ違った目的と意味を持つ作業の音色。

確かに場違いな感じはするが、不思議と嫌な感じはしない。むしろ、小気味良いその音は、聞いていて落ち着いてくる程だ。

「……………ふう」

カタタン、と一区切りでもついたので、橙子が軽く息を吐いて首を回す。

心なしか、その顔には疲労に隠れて、達成感のようなものが垣間見える気がする。

「…………ん？　なんだ、まだ何か用があるのか？」

私の視線に気付いたらしく、橙子がチラリと私に視線を送って、声を掛けてきた。

「えっと、別に用はないです……」

「そうか。……そうだな、私も休憩を入れようと思っていたところだ。何か聞きたい事でもあるのなら、休憩がてらに教えてやっても構わないよ」

いや、それでは休憩にならないのでは。そう思い、断ろうとするも、

橙子は私が口を開く前に手で制し、

「どうせ休憩と言つても、特にする事も無いのでね。あっちのバカみたいに、暇だからといって無我の境地に達する程、私はバカじゃない。それに、たかがお勉強会のようなものだし、別段疲れなどしないのさ。むしろ、気分転換にはちょうどいい」

向こうから「聞こえてるっつーの！ 誰がバカよ!!」という青子の反論はこの際聞き流すとして、そこまで言うのなら、そのお言葉に甘えるでしょう。

いざ、何か聞きたい事があるかと言われると、少し悩むが、そもそも発端。私がこの命懸けの戦いに臨む羽目になった聖杯、そして聖杯戦争について。

凜やアヴェンジャーからも軽く説明はされたが、どうにも分からない部分が多すぎる。

「ふむ、聖杯と聖杯戦争について、か。そうだな、君は記憶に不備があるのだったか。それなら、知らなくても無理はないか」

電子タバコを口から離すと、橙子は脚を組み直し、説明の構えに入る。

私も自然と、*“聴く”* 姿勢へと移行していた。

「まず、聖杯戦争への参加を望む全てのマスター候補へ向けて、ムーンセルからこのような謳い文句がある」

『聞け、数多の魔術師よ。』

己が欲望で地上を照らさんと、諸君らは救世主たる罪人となった。いかなる時代、いかなる歳月が流れようと、戦いを以て頂点を決するのは人の摂理。

月に招かれた電子の世界の魔術師達よ。

汝、自らを以て最強を証明せよ。

熾天の玉座は、最も強い願いのみを迎えよう———』

「———このような具合に、賞品である聖杯自分を賭けて、多くのマスターを月に招き入れて争わせ、その残った最後の一人が願いを叶えられ

る、といったようにな」

そこまでは知っている。ここに集まった多くのマスターは、それが目的で参加しているという話だし。

「ところで、何故ムーンセルは自身を賞品にしてまで、そんな事をしていいのか、君は分かるかね？」

「聖杯戦争を開催した、理由……？」

言われてみれば、何故、ムーンセルはそんな事をする必要があったのか。そもそも、ムーンセルとは何なのか。

知らない事が多すぎる。

「全てが解明された訳ではないが、既に幾らかこの月の性能と意義については見識が存在している。さて、ここで問題だ。ムーンセルとは一体どういうものか、君は知っているか？」

ムーンセルとは何か。確か、月の内部に発見されたエネルギー蓄積体で、電脳構造的に第七層までで構成された、超巨大スーパーコンピュータ……と、凜が言っていた気がする。

「まあ、大方正解だ。ムーンセル、正式名称『ムーンセル・オートマトン』。人類とは異なる知的生命体によって作られた世界最古の超古代アーティファクトが、その正体と言われている。一説では、紀元前より更に前、人類がこの地球に誕生した頃から存在しているとされている」

……とんでもないスケールの話だ。

人類史には数多くの英雄とその伝説があるが、残されたものでも、確か『ギルガメッシュ叙事詩』が人類最古の物語だと言われている。

その人類最古の英雄王を語った物語でさえ、紀元前のもの。つまり、ムーンセルは人類最古を軽く超越してしまう程に歴史が深い存在と言えるのだ。

「そのムーンセルを作った、人類とは異なる知的生命体の目的。それこそが、ムーンセルの存在意義でもある。そうだな、ムーンセルは、言うなれば『地球を観測する目』だ。地球上全ての生命を忠実にシミュレートし、確かな未来予測までも可能とする演算器。言わば——」

——言わば、人類のデータベース。その生態、歴史から思想、魂

までを記録した莫大なメモリー。

人類がこれまで歩んできた、人類史の全てがそこにあると言っても過言ではない。

そういう、事か——。

「その通り。なるほど、君は察しがいい。教鞭の取り甲斐もあるというものだ。その通り。地球の生命の在り方を記録するだけのために、このムーンセルは設置された。だが、長い年月を経て、ムーンセルは現在の機能を持つまでに至ったのさ」

ムーンセルが地球を観測する観測機である以上、観測機としてその在り方はフェアでなくてはならない。

観測する以上は、見えない部分などあってはならない。それこそが、全てを記録するモノとしての絶対の条件であり、フェアであるからだ。

結果、ソレは地球の全てを知るために機能を必要とした。

全てを平等に、ありのままに記録するためには、単なる観測機以上の性能が必要となる。

「そうして、ムーンセルの機能は夥おびただしい進化を遂げた。観測から監視、果ては星の運営すら把握する演算器バケモノにまで機能を拡張したのさ」

……聞いていた以上に、このムーンセルとはとんでもない代物であつたらしい。

とても、ヒト一人にどうにか出来るとは思えない規模とレベルに、私は思わず唾を呑む。

この聖杯戦争を勝ち抜いた者は、そんな怪物級の賞品を手にする事になるのだ、と。

「さて、ここで聖杯戦争だ。ムーンセルは地球を観測する。そして地球を実質的に支配している人間が、現在のその主な観測対象である事は明らかだろう。そこで、ムーンセルは“人間”というものの観測——理解するために、人間同士を自らの内に招いて争わせ合う事を選択した。それこそが、この『月の聖杯戦争』という訳だよ」

「観測するただけに、自分を賞品にまでして、聖杯戦争を開催した……っ。」

理解出来ない。そんな事のためだけに、自らを賞品にまでして、人間を観測しようというその結果が。

いや、きつと私だけではない。人間に理解出来るはずがない。何せ相手は機械。コンピュータだ。

思考回路がそもそも異なるというのに、理解しろという方が無理な話。

「ムーンセルは『最強の一人』を求めているのではない。この生存競争そのものが観察対象であり、人間を知るための物差しスケールとして機能している。無論、勝者が何を望み、どんな結果を招くのかも人間を知るための数値として入力されるのだろうさ」

あくまでも、観測するためだけに。何もかもが、ムーンセルにとっては観測の対象でしかない。

善悪の思想も、未来への欲求も、更には結末すらない。

ただそこにあるだけの器物。

神の残した自動書記タイプライター。

月に穿たれた観測レンズ——

「後に、この夢を映すだけの水晶体ムーンセルはこう呼ばれる。『月の眼。底なしのクラインキューブ。この星の全てを読み上げた、持ち主の居ないタイプ・ムーン』、と……」

タイプ・ムーン……。外より地球を見つめ続け、過去から現在、そして未来までも永劫、その在り方を観測し続ける、未知なるアーティファクト。

それが、ムーンセルの——私達人間が、月と呼ぶモノの正体。

「もう分かっただろう？ 何故、ムーンセルが聖杯——『万能の願望機』と呼ばれるか」

深く考えなくとも、私のような素人でも、その理由、結論へ至る。要は簡単な話だ。

ムーンセルは地球のありとあらゆる過去、現在を観測し、そして未来さえも恐ろしいまでの演算機能によって、あらゆる可能性の未来をも予測出来る。

膨大な地球のシミュレート記録を保管するムーンセルを閲覧すれ

ば、そこには必ず『誰かが望む未来の地球』が存在している。  
ムーンセルが使える事になった『誰か』は、ただ一言、ムーンセルに告げればいい。

『この、私にとって理想の未来を再現しろ』と。

ムーンセルは速やかに地球をその未来のカタチに運んでいくだろう。

そのための方法を、実行手段を、月は全て識っているのだから。

「つまるところ、その『誰か』が望んだ通りに、地球は運営されていくという事さ。例えば、『地球人類の全てを人形に変えて欲しい』と願えば、年月を掛けようと人間から人形へと置き換わり、そういった社会形式になるだろうな」

橙子の言葉は、全く冗談などではない。そのように望んだとしたら、人形が人間と同じような機能を持って、『人間』として振る舞う世界に作り替えられる。

橙子はそう言いたいのだろう。

「何にせよ、だ。人間は人間が想像する範囲において、実現出来ないものはない。それがどのような幻想、絵空事であっても、体験する手段は必ず存在するのさ」

それは、何となく分かる気がする。

人類はこれまで、幾度となく不可能と思われていた事を可能としてみえた。

ニコラ・テスラによる雷電の解明、チャールズ・バベッジによる蒸気機関の開発などは歴史にも残っている程だ。

一回戦の対戦相手だったライダー——『フランシス・ドレイク』だった、当時は無理だと思われていた、人類で初めて航海にて世界一周を成し遂げた偉大な英雄であった。

ムーンセルは、それを簡単に再現出来てしまうチート級のツールと言えるだろう。

「ふう……。こんなところか。これで一通り、聖杯……まあムーンセ

ルだな。それと聖杯戦争については理解出来ただろう」

「はい。でも、私が想像していたよりも遥かに壮大な内容過ぎて、その渦中に自分が居るのかと思うと……少し、いいえ。かなり自信が無いです」

「なに、気にする事はないさ。君は素人ではあるが、それ以前に記憶の欠如がある。そう感じてしまうのも、仕方ない事だよ」

橙子が珍しく、私を気遣うように労ってくれているのが分かる。

「なんだか、暖かいものが胸の内に湧き起こってくるような、気持ちの良い感覚……」

人の暖かみとは、こういう事をいうのだろうか。

「そういえば、記憶が欠如しているのなら、君は決戦の細かなルールも把握出来ていないのではないか？」

「……うん。指摘されてみて、確かにあまり分かっていない自分がいる。」

「その様子では、忠告して正解だったか。別にそこまで多くはないから、しっかりと聞いておけ」

そう言って、橙子がルールについて説明を始めた。

1. 決戦場以外でのマスター同士の戦いは禁止されている。

しかし、あくまで禁止されているだけで、破ればペナルティは与えられないが、それで失格になる訳ではない。

やろうと思えば、校舎内でもアリーナでも敵マスターを攻撃する事は可能である。

2. 決戦場においては、サーヴァントはサーヴァントにしか攻撃出来ない。

3. マスターはサーヴァントとマスターに攻撃出来る。

つまり、決戦の際はサーヴァントはマスターへの攻撃は完全に不可能だが、マスターは敵マスターとサーヴァントのどちらにも攻撃を仕掛けられる、という事らしい。

マスターがマスターをコードキャストでダイレクトアタックをしても問題はないようだ。

ただし、マスターが死亡してもサーヴァントがすぐに消える訳でもなく、倒されたマスター側のサーヴァントが敵サーヴァントを倒せば晴れて「共倒れ」となる訳だ。

そういえば、一回戦での決戦の際、ライダーは私諸共アヴェンジャーを銃撃し、アヴェンジャーに防がれていたが、今になって思えばアレは私がルールを知らないと踏んでの搦め手だったのだろう。

多分あの時、私には何らダメージは入らなかったはずだ。でも、私もアヴェンジャーも、そのルールを把握出来ていなかったからこそ、まんまとライダーの策に嵌まってしまったという訳だ。

まあ、とっさの打開策で切り抜けたのだが。

「マスターがマスターを攻撃し、そして殺害するなんて事は滅多に無いんだが。まあ、この辺り、矛盾した話ではあるのだがね、戦いの勝敗基準は「どちらのサーヴァントが敵サーヴァントを倒したか？」なのだよ。そして、生きて次の戦いに移動出来るのは勝者のみ。敗者はファイヤーウォールによって生還の道を閉ざされ、空間ごと消滅する運命にある、という訳さ。心当たりはあるだろう？」

あの、赤い壁と、そこを仕切るように慎二が取り残された、全てが紅く染まったあの空間……。

あれが、ファイヤーウォールによる敗者の排除なのか。

私も負ければ、空間ごと消される運命にある——。

吐き気がする。

「世界を区切る攻性防壁<sup>ファイヤーウォール</sup>は突破不可能の壁で、これを無効化出来る者は神霊クラスのサーヴァントのみとされている。が、そんな規格外のサーヴァントでは聖杯戦争の勝ちを約束されたようなものだ。まず有り得ない可能性だろうさ。ムーンセルは人間と人間の戦いを観測するために聖杯戦争を始めたのに、勝ち確定の組なんぞを作ってしまったては、本末転倒だからな」

つまり、この聖杯戦争において「絶対」は無い、という事か。

だけど、マスターやサーヴァントによる性能の差は必ずしもそうとは限らない。

だからこそ、レオはその優秀さとサーヴァントの強さから、最強の



一角、優勝候補筆頭などと言われているのだから。

「さて、長話になってしまったが、そろそろ改竄も終わる頃合いだろう。途中で飽きずに最後まで傾聴していた褒美だ。紙芝居ではないから、飴とはいかないが、代わりにこれを進呈しよう」

橙子はコンソールを操作し、何やらデータのようなものを現界させると、指で銃でも撃つかのように、私の方へとデータを飛ばした。正確には、私の端末へと。

「今のは……？」

「探し物の途中でたまたま拾<sup>サルベージ</sup>ってね。私には不要なものだから、君にプレゼントした」

言われて端末からアイテム画面を開き、確認してみると、見慣れぬアイテムが保存されていた。

「えつと……虚影の……塵？」

「ああ。以前話しただろうか？ サーヴァントの霊基再臨に必要な素材の一種だよ」

「な!!？」

軽く言う橙子だが、確か入手困難な代物だったのではないか？

そんな貴重なものを私が貰ってしまって良いのだろうか……。しかも、二つも。

それに、私だけがそんな待遇というのも……。

「言っただろう、褒美だと。君以外のマスターは全員、私やそのバカと深く会話しようとしないでね。まあ、気分転換に付き合ってもらった礼でもあるから、何も言わずに受け取っておけ。なに、黙っておけば、誰にもバレまいよ。ムーンセルとて、この程度でペナルティーもクソも無いだろう」

この調子だと、こちらが断つても橙子は頑なに返却を拒否するだろう。

どうあっても押し問答だというのなら、ここはありがたく頂戴しておくでしょう。

もちろん、感謝の言葉は忘れずにネ！

「ありがとうございます。大事に使わせてもらいます！」

「ふっ……。まあ、霊格が限界まで強化出来たら、の話ではあるのだがね」

それではな、と橙子は再び作業に戻っていった。

それにしても、思わぬ収穫もあったものだ。ムーンセルについてや、聖杯戦争の意義、そして細かなルール。

まさか霊基再臨の素材まで手に入るとは。

幸先良いが、逆にこの後で何か不運に見舞われそうな気がして、気がでない。

何事も無ければ良いのだが……。

## 老騎士ダン・ブラックモア

それから間もなくして、アヴェンジャーの魂の改竄が終了した。光の帯から解放されたアヴェンジャーは、いつものように手を何度か開閉させると、ニヤリと笑みを零す。

「着実に力を取り戻しています。本調子にはまだ程遠いけど、この分だと四回戦に行くまでには、本来の能力スペックを取り戻せるでしょうね」

そう言う割りに、彼女はとても満足そうに見える。思っていた以上に、良い成果だったのかもしれない。

私もアヴェンジャーの様子から、どれほどステータスが上昇したのか気になったので、早速端末から確認してみる。

「……おお、すごい！ 結構上がってる！」

筋力がDからC。敏捷、魔力、幸運のそれぞれがEからDに。

軒並みステータスの向上が見られた。なるほど、確かにアヴェンジャーの機嫌も良くなるはずだ。

私だって、こうして戦闘経験の成果がはつきりと形となって表れるのは嬉しく思うし。

「フフン。さてと、それじゃアリーナへ行きましょう、マスター？ もっとリソースを奪って、完全なる私を取り戻すのです」

テンション高く、アヴェンジャーはアリーナ探索への催促の言葉を残して、教会から姿を消した。

もう夕方。のんびりしていて、アリーナに行けませんでした……なんて事にならないためにも、早足でアリーナに向かうとしよう。

そうしてアリーナの入り口にまでやってきた私なのだが、ちょうどその入り口に気配を感じて、思わず身を潜める。

あれは……昼間に出会った老人——ダンと、その横に居るのは彼のサーヴァントだろうか。

緑衣のマントに、背格好や声からして男性のようだ。ただ、彼だけは背を向けた形となつてゐるため、後ろ姿しか確認出来ない。

「二回戦の相手を確認した。……まだ若く、未熟なマスターだが、一回戦を勝ち残つた相手だ。油断はするな。予断も独断も、感心はせんぞ」

私への評価はそれほどだが、一回戦を勝つただけあり、慎重に慎重を重ねている事は明らか。

流石は騎士なだけはある、という事か。

対して、彼のサーヴァントたる緑衣の英霊は、ダンとは対照的に、気の抜けた返事を返している。

「へいへい、分かつてますつて。どんな相手だろうと手加減なし、かつシンプルにぶつ殺しますよ。ま、ともあれ、あつちも既に一人殺してるワケですし？ 一回戦で戦つた連中より、幾分マシなんじゃないすかね。いや、精神的に」

「それを油断というのだがな。……ともあれ、この戦いは連携が肝要だ。私の指示に従え。一回戦のような独断はするな。この戦場は、ただ勝つだけでは許されない戦いだ」

あの緑衣のサーヴァントが何をしたのかは分からないが、マスターであるダンの意に反する手段を取つたのだから事が伺える。

そして、ダン是一段と険しい目つきで、彼のサーヴァントへと律するかの如く告げる。

「よいか。あのような真似は二度とするな」

「あー、はいはい、分かりましたよ。つたく、口うるさい爺さんだぜ」  
気怠げに、緑衣のサーヴァントは了解の返事したが、あの様子だと反省したのかは少々、いや、かなり疑わしい。

「……へえ。まさかアイツが二回戦の相手とはね。さてさて、手応えはあるのかしら？」

現界したアヴェンジャーが、私に倣うようにこつそりと陰から彼らの方を覗き込む。

言い方からして、またしても対戦相手のサーヴァントの事を知つてゐるようだが……？

「でも、一回戦を勝ち抜いている以上、あの狡い狩人でも、この正規の  
一対一での対戦で勝つだけの実力はある、か」

自分だけ訳知り顔をするのは止めてほしいが、どうせ一回戦の時の  
ように、たとえ彼の事を知っていても、何も教えてくれないんだろう  
な。

「……動くわよ、マスター」

と、アヴェンジャーの言葉に、私は彼らの方に意識を戻す。

彼女の言う通り、ダンとそのサーヴァントはアーリーナへと入って  
いったようだ。

「今入れば、まず間違いなく鉢合わせる可能性が高いでしょうけど、ど  
うしますか、マスター？」

……問いかけてくる割に、獰猛な笑みが隠しきれていないよ、ア  
ヴェンジャー。

それに、私がどうするかなんて、とつくに分かつてるくせに聞いて  
くるんだから、タチが悪いというか何というか。

もちろん、私の返答は決まっている。

「行こう。私にはまだ、聖杯戦争で戦っていく目的も理由もないけれ  
ど、立ち止まる事だけはしちやダメなんだ。たとえ中身が無い空っぽ  
の願いなのだとしても、私は進まないといけない。進むしか、ない」  
——それが、曲がりなりにも友人の、慎二の命を奪った者として、

果たすべき責任なのだから。

「そう。まあ、出会てくわきさないように警戒はしましょうか。あのマスター  
とサーヴァント、方針から戦いへの姿勢がまるで噛み合っていないみ  
たいだし。下手に仕掛けるよりも、まずは様子見をすべきでしょう  
ね」

彼女の意見には賛成だ。

聞いていた限り、ダンと緑衣のサーヴァントは性格も在り方も、戦  
い方すら真逆のような感じがしてならなかった。

警戒と注意を怠らないように、アーリーナを進まないといけないだろ  
う。

『二の月 想海』。

一回戦の時は一の月だった事を考えると、回が進むにつれて、くの月と繰り上がっていくようだ。

第一層は、一回戦時のアリーナと同様に、海という割に無機質な光景がどこまでも続いている。

もしかしたら、第一層はこういう風に設計されているのかもしれない。そして、第二層も同じように、一転して背景が鮮やかになるように作られているのだろう。

「……！」

呑気に感想を述べてはいたが、実際はそんな余裕は無かった。アリーナに入った瞬間、まとわりつくような空気が脳に危険を告げる。

立ち止まるな——。

瞬間。

目に映る世界の色が反転したかのような、気持ちの悪い錯覚イメーシが視界に焼き付いて離れない。

立ち止まるな——。

それは頭では理解している。だが、両の足はアリーナの床に縫い付けられたように動かす事が出来ない。

本能が恐怖という制動スイッチを入れたのか、思いが身体に伝わらない。

「マスター！ この程度の死の香りで怯むな！ ここで、この程度で足を止めては、これから先の全ての戦いで生き残るなんて、それこそ泡沫の夢と同じです!!」

理解わかっている、早くここを離れないと。

立ち止まる時間が過ぎる程に自分の命の刻限を縮めるのだ、と。

「チツ……！」 このエリア一帯に毒が仕掛けられたようね。姿も見せ

ず、隠れてこの私を殺そうなんて——ナメられたもんだわ。流石は狡い狩人なだけあるってところかしら？」

不快感を隠そうともしないアヴェンジャーの声に、麻痺していた思考が戻る。

大丈夫、——足も、手も動く。

「考えるまでもない。これはあのサーヴァントの宝具でしょう。入り口にまで、鬱陶しいコトこの上ない殺気が伝わってきています。この手の宝具なら、基点となるものが近くにある筈。それを壊せばこの毒も消える筈よ」

毒……。という事は、私の視界が狂ったような、色の反転した世界を映していたのは、錯覚でも何でも無かったのか。

これは毒による、一種の精神汚染に近い現象だ。実際に目がおかしくなれば、この程度で済む筈がない。というか、目を殺しに掛かってくるだろう。

故に、この毒の本質はそこではない。視界の異常は、あくまで副産物に過ぎない。

「さあ、そうなれば成すべき事は唯一つ。この小賢しい仕掛けを、我が炎を以て、完膚無きまでに灼き尽くしてやりましょうか！」

アヴェンジャーが声高らかに旗を掲げる。

復讐の魔女。竜の魔女。

自らをそう呼称する彼女が、このような策に屈する訳もなく、また、見逃す筈もない。

でも、確かに早くなんとかしないと。

「——ッ！」

こうしている間にも、毒は着実に私達の身体を蝕んでいる。

手足は動く。だけど、指先には微かな痺れ、関節の節々にじんわりと広がる痛み、そしてこの胸を締め付けるような苦しみ。

体が、頭が、身を以て理解している。この毒は単なる毒ではない、魔力すらも侵食する魔術師殺しの毒である、と。

アヴェンジャーはスキルで魔力を回復出来るからいいが、私は回復の手段が無い。

それに、聞いた話では、人間は体から魔力が完全に尽きてしまった状態で、それでも無理に魔術を使おうとすると死ぬらしい。

人間は体内に誰しもが微弱であっても魔力を有している。それを扱えるかどうか、その身に魔術回路が備わっているかで決まるのだ。

魔術回路の無い人間は、どうあっても魔術師にはなれない。出来て精々、道具に頼った魔術使いの真似事、いや、その真似事にすらならない、単なる偽物。

だけど、ヒトは誰しもが肉体に神秘を宿している。生命、魂、心……その他にも様々な神秘が、体の内には眠っており、その神秘こそが微弱であっても魔力を生み出す源となっているのだ。

——と、話が逸れてしまったが、とにかくこの毒は生命力を削るだけではなく、魔力すらも削る猛毒。

ダメージが蓄積すれば、コードキャストによる回復やサポートも出来ないし、最悪の場合、そのまま毒により死に至るだろう。

そうなる前に、なんとしてもこの毒の発生源を除去しなくては……!!

私達は走り出した。歩いて探す暇も余裕も有りはしない。

アリーナ内を浮遊する、ボックス型のエネミーを鎌で切り裂き、炎で焼き払いながらも、アヴェエンジャーは走る足を止めず、先行して私の行く手の脅威を排除する。

移動しながらの戦闘をこなす彼女の器用さが伺いしれるというものだ。

だけど、感心している場合ではない。私は彼女のソレを、当然の事だと受け止めて、彼女の背中を追いかける。

止まる事なく、アヴェエンジャーが道を阻む障害の<sup>エネミー</sup>ことごとくを排除してくれると信じて、私は走る足を止めない。

「マスター！ アレを見なさい!!」

少しして、アヴェエンジャーが足を止めて、透明な壁の向こうを指差す。



私も彼女に追いついた先で、息を整える間もなく、片膝をつきながら、その方向へと目を向けた。

「……こんなところに、どうして木が？」

そこにあつたのは、一本の大きな樹。無機質なアリーナには、正確にはこの第一層には不似合いにも程がある。

壁と壁で阻まれた向こう側で、異様な存在感を放ちながら佇むソレは、不気味な輝きを脈動させるかのように放っていた。

「マスター、あの樹から魔力マナの流れを感じます。おそらくはあれが基点でしょう」

言われなくとも、視界の狂った私の目から見ても、如何にあの樹が毒々しいのかが見て取れる。単なる樹とは違った、如何にも毒素をばらまいているという雰囲気醸し出していたのだから。

「あれを壊せばこの毒も晴れるはずです。行くわよ!!」

そう言つて、アヴェンジャーは再び走り出す。私もまた、その背を追いかけて始めた。

位置からして、遠回りしなければ行けないのは明らかだ。遠目で見ても、今回の第一層が入り組んだ迷路になっているのが分かる程に、ややこしい構造をしている。

マップも随時確認しながら、道に迷わないように気を付けなければ……。

何度か行き止まりやループに当たるも、マップを確認しながらどうにか正解の道を見つける。

しばらく道なりに走つて、ようやく樹に近付いて来たと思つた頃、唐突に事態は急変した。

「マスター、息を潜めて」

先に辿り着いていたアヴェンジャーが、声を小さく、ジェスチャーで静かにしろと伝えてくる。

私は息切れの音をどうにか抑えるため、口元に手を当てて、息を潜める。

この状態で息切れを抑えるのは結構辛いものがあるが、これは必要な事。

何故なら、通路の先から、話し声が聞こえていたのだから。

声の主は、二人しかいる筈がない。

——ダンと、彼のサーヴァントだろう。

「向こうはまだこちらに気付いてないみたいね……。ちようどいいわ、このまま奴らの会話を盗み聴くわよ」

アヴェンジャーはなるべくバレないように、姿を屈めて気配を断つ。私もそれに倣い、同じようにしゃがみ込んで息を殺して、彼らの様子を伺う。

しゃがみ込んだおかげで、幾分か呼吸も楽になった。とは言っても、毒の影響がまだ続いているのだが。

「これはどういうことだ？」

ダンがサーヴァントへと向けて、静かな怒りを滲ませながら問い質す。

それに対し、さして堪えた様子もない緑衣のサーヴァントは、平然と返答した。

「へ？ どうもこうも、旦那を勝たせるために、結界を張ったんですが。決戦まで待つてるとか正気じゃねーし？ 奴らが勝手におつち

ぬんなら、オレらも楽できて万々歳でしょ」

「……誰が、そのような真似をしろと命じた。死肉を漁る禿鷹にも、一握りの矜持はあるのだぞ」

作戦の方針で意見が合わないのか、揉めている様な声が聞こえる。やはり、これはあのサーヴァントの独断で行われた事なのか……？

「イチイの毒はこの戦いには不要だ。決して使うなど命じた筈だが……。どうにも、お前には、誇りと言うものが欠落している」

「誇り、ねえ。俺にそんなもん求められても、困るんすよね。っていうか、それで勝てるんらしいですけど？ ほーんと、誇りで敵が倒れてくれるなら、そりや最強だ！」

反省の色などまるで見られない。緑衣のサーヴァントは、ダンの説

教も軽く笑い飛ばし、即座に冷静に戻る。

「だが悪いね、オレやあその域の達人じゃねえワケで。きちんと毒を盛って殺すリアリストなんすよ」

「……ふむ、なるほどな。条約違反。奇襲。裏切り。そういった策に頼るのがお前の戦いか」

半ば呆れたように、半ば諦めたように。ダンは小さくため息を漏らす。

結界を張ったサーヴァント。彼がこの結界を張った事に対して、意見の違いがあるようだ。

騎士であるダンにしてみれば、このような邪道な戦法は受け入れ難いものなのだろう。

「それにしても、不仲な主従もあつたものね。あの老騎士の言わんとする事は、腹立たしい事ですが、まあ理解わかります。そして、あのサーヴァントのやり口にも。だけど、どちらにしても私からすれば、苛立ちしか感じないのだけど」

アヴェンジャーがこそこそと、彼らに対して抱いた感想を述べてくる。

騎士としての誇りを掲げるダン、勝つ為ならどんな汚い手段でも平気で使う緑衣のサーヴァント。

そのどちらの在り方も、アヴェンジャーには気に入らないのだろう。

魔女に誇りなど要らない。

勝ちへの意欲ではなく、人への復讐を果たす事こそが活力。

故に——気に入らないのだ。どちらも、己の信念を元に行動している。その信念こそが、アヴェンジャーとは相容れないから。

「今更結界を解け、とは言わぬ。だが次に信義にもとる事があつた時は——」

ダンの声のトーンが一段、低くなる。

それは侮蔑か、落胆か。

その真偽の程は分からない。

はいよ、と洩々返事をする声を最後に、二人の気配は消えてしまっから。

おそらく、リターンクリスタルで校舎へと転移したのだろう。

重苦しい空気から解放され、私はほっと息を撫で下ろす。

マスターとサーヴァントの不仲。マスター同士の実力差は如何ともし難いが、これが自分達にとって二回戦のカギかもしれない。

「一息つく前に、結界を破壊しに行くのを忘れないようになさい」

アヴェンジャーが立ち上がり、顎でもうすぐそこに見えている樹を指し示す。

そうだ、まだ終わりじゃない。体のダルさはまだ続いている。

私も立ち上がり、毒の基点であろう樹を目指して歩を進める。

途中、虫型エネミーと遭遇したが、力を取り戻しつつあるアヴェンジャーと、観察に磨きが掛かり始めた私の敵には最早ならない。

色が少し違う程度で、特徴的な動きには変化があまり見られなかった。多分、一回戦の時とは違った、強化タイプなのだろうが。

そして、今のエネミーを最後に、私達は毒に侵されながらも、ようやく辿り着く。

「これですね。結界の基点、イチイの樹ですか」

アリーナの床に屹立した基点からは、濃密な魔力が滔々と流れ出し

ている。覚悟も無しに近付いた者があれば、その毒気に溺れてしまう程に。

「こんな邪魔臭いもの、さっさと焼き払うに限るわね」

言うや、アヴェンジャーは穢らわしいものでも払うかのように、手の素振り一つで樹の根元から炎を発生させた。

轟々と燃え盛る紅蓮の炎に包まれて、毒をエリア一带へと吐き出していた樹が、焼かれ燃えゆく。

やがて、全体を炎で覆われた樹は、葉の代わりに炎を生やし、花の代わりに火の粉を散らしながら、その存在をも焼却されていき、そして完全に燃え尽きた。

焼却された樹は、初めからそんな物は無かったかのように、炎と共に霧消する。

結界の基点が消えた途端に、身体を支配していた重圧と蝕む痛みから解放される。

視界も徐々に、その色彩を取り戻していった。

「……………ふう」

私はようやく毒から解放された事に、たまらず息を吐き出した。これにより、緊張感からも解き放たれる。

それにしても結界とは……………。

どうやら今回の相手は、常に警戒を怠ってはいけない危険なサーヴァントのようだ。

危険だからこそ、もつと情報を集めなくては。その正体が不明（私だけ）のままでは、対策も何もあつたものではない。

「でも、おかげでヒントは得られたわね、マスター？」

自分は知ってるからって、超絶上から目線で言ってくるアヴェンジャー。いや、確かにその通りなんだけど。

ヒント——確か、ダンはあるの毒を『イチイの毒』と言っていた。

となると、今焼却した樹は、『イチイ』という名の樹である、という事なのだろうか。

残念な事に、その名に心当たりは無いし、調べようにも、図書館でもない限りは無理だ。だからといってここで早々に帰るには、まだ余力もあるので勿体ない。

今はひとまず、この第一層を出来る限り攻略するべきだろう。

早めにトリガーを手に入れられれば、その分、心に余裕も持てるというものだし。

「先に進もう、アヴェンジャー。まだ日数に余裕はあるもの。彼の正体を探るのは、明日以降。今はとりあえずアリーナに専念しよう」

「……………ま、それもそうね。アイツらは帰ったみたいだし、まさかまたアリーナに入って来る事も無いでしょう。今なら、敵サーヴァントを気にせずに進みたい放題ってところかしら？」

アヴェンジャーは私の意図を汲んでくれたようで、来た道を引き返

し始める。

基点の破壊を優先に進んでいたの、後回しにしていたが、実はもう進むべき道なら分かっていた。

道中、と言つてもすぐそこなのだが、例のフェンスゲートと、脇にあるスイッチが見えていた。どう見てもあからさまですありがとうございます。ごじます。

まあ、その分、その先が険しい道のりである事を暗示しているのかもしれないのだが……。

私は一抹の不安を胸に、アヴェンジャーの後を追うのであった。

## 毒と迷路のスパイラル

ゲートを抜けた先は、大きく開けた一つの空間が広がっていた。だいたいの教室二つ分くらいの広さだろうか。中心を位置する辺りには、また別のフェンスゲートのスイッチが鎮座している。

が、当然ながら、それだけ広いという事は、その分エネミーも多く存在する訳で。

エネミー達は我が物顔で、スイッチには簡単に近寄らせまいとばかりに、このエリアを縦横無尽に動き回っていた。

「あれは……」

そんな中、私はとある一体のエネミーに注目する。

他はボックス型やバグタイプ、蛇型のエネミーと見知ったものばかりなのに、その個体だけは初めて見るタイプだ。

顔だけのワニのような形状で、身体の9割をその大きな口で占めている。

有り体に言ってしまうえば、パッ○マンのとゲトゲしいバージョン、といったところだろうか。

「マスター、あの個体を警戒しつつ、見知った型のエネミーを駆逐していくわよ」

アヴェンジャーも、初めて見るエネミーに警戒しているようで、常に他のエネミーを視界に入れながらも、あのエネミーから意識を離さない。

「了解。アヴェンジャーは慣れてる雑魚を討伐。私は逐一指示を出しながら、あのエネミーの動きを観察するね」

「ウイ！ 派手に燃やし尽くしてやるわ!!」

美しくも醜悪な微笑みを浮かべて、アヴェンジャーは得物を旗から大鎌へと持ち替える。

鎌に手を当て、その刃に炎を乗せると、まず目の前を闊歩する蛇型エネミーを一刀両断する。

『■■■■』  
『!!!!』

胴体を真つ二つ。綺麗に魚を捌くかの如く断面図だが、やはりその内は果てしなく機械そのもの。

そこに生命の名残など微塵も存在する筈もない。

「イイ、イイわよー。素晴らしい切れ味だわ!! 力が全身に漲るのを感じます!!」

エネミーを葬り去ったアヴェンジャーは、いつになく上機嫌に高笑いを上げて、すぐさま次の獲物へとその凶暴な視線を向ける。

エネミー達も、アヴェンジャーの笑い声に反応し、近くに居た個体が彼女目掛けて一斉に集中していく。

「だけど、

「無駄よ!!」

それこそがアヴェンジャーの狙い。自身を基点とし、周囲にエネミーが殺到したその時、アヴェンジャーは弧を描きながら回転するように、握り締めた大鎌を力任せに振り抜いた。

『□□■■■■□——ッ!!?』

『◆◆◆◆……!!』

当然、複雑な思考を持たないエネミー達は、アヴェンジャーの企みなど見抜ける筈もなく、彼女の目論見通り、大鎌による炎の回転斬りによってその身を散らしていく。

声など有る訳がないが、エネミー達の断末魔が幻聴として聞こえてくるような気さえする。

「アツハハハハ!!」

エネミーが消滅していく中で、その円の中心では、大鎌片手に魔女が嗤っている。

大きすぎるダメージで、形状を維持しきれずにデータ化していくエネミーに、魔女から嘲笑という名のレクイエムが贈られていた。

「さあ、まだいるわよね? もっと殺させてちょうだい!!」

物騒な台詞に違わぬその風貌。美しい魔女が次なる獲物を求めて、声を張り上げながら鎌を掲げる。

悲しいかな、理性も知性も存在しないプログラムであるエネミーには、力の差が分かっているようにも難を避けるという行動を取れはしな



い——否。

力の差など理解出来ないのだ。だって、そういう風に設計された機械なのだから。

待つばかりでは埒があかないと、アヴェンジャーは自ら散らばって移動するエネミーへと走る。

「アヴェンジャー、あのエネミーが動いた！ こつちに来る!!」

広い空間と言えど、視界が開けている上に、戦闘の騒音を隠そうともしていないのだから、当然ながら離れていようと異変を感知される。

大口を開きながら、全身で跳ねるようにバネ運動でそのエネミーは私の方へと突進してきていた。

何故アヴェンジャーではなく、こちらへと狙いを定めたか。

簡単な話、近くに居た敵として手っ取り早い位置に居たのが、私だったのだ。

「ちようど粗方片付いたところよ。では、そのお手並み……いいえ、口並み拝見しましょうか!!」

目前に居たエネミーを倒した直後、アヴェンジャーは宝探しの際に見せた炎のジェット噴射移動で、すぐさま私の前へと帰ってくる。

そしてその勢いのまま、新型エネミー——ええい面倒だ！ ワニ口エネミーへと向かって行く。

「シッ!!」

猛スピードで突っ込んだアヴェンジャーは、鎌をその大口目掛けて横に振り抜く。

しかし、タイミング悪く口が閉じた事で、その一撃は防がれてしまった。

「くっ……ぐぐ、」

鎌を抜こうともがくが、ワニ口エネミーに噛み付かれたまま微動だにしない。噛む力は強いと聞くが、あのエネミーは全身がほぼ口のようなもの。

その力は計り知れない。もし直で噛まれようものなら、大怪我どころでは済まないだろう。

炎を纏った斬撃も、受け止められてしまって効果が無い。しかも、未だ炎を纏っているのに、エネミーはさほど影響を見せておらず、単なる炎だけでは通用しないという事か。

「アヴェンジャー、一度鎌を手放して、腰の剣で追撃して！」

「……クソ、仕方ない。すぐに奪い返してやる……!!」

このままでは、どうあってもエネミーは鎌を放そうとしないだろう。無理に鎌を取り戻そうとした結果、あのエネミーによる未知の攻撃を受けないとも限らない。

ここは一度立て直した方が良さだろう。アヴェンジャーもそれを理解し、すぐに鎌を手放すと、エネミーから距離を取りつつ腰の剣でターゲットを付ける。

「串刺しにしてやるわ！」

声を合図に、剣の切っ先にいるエネミーへと魔力で形成された黒い槍が、群を為して襲い掛かる。

迫る黒槍の前に、ワニ口エネミーは鎌を振り放すと、飛び跳ねたと同時にその大きな口をガパツと広げて、黒槍全てを一気に噛み砕いた。

「へえ、やるじゃない……!」

強烈な顎の一撃を受け、砕けた黒槍が霧散していくのを見て、アヴェンジャーは楽しそうにしながらもエネミーを注視する。

今のところ、正面からの攻撃は全て防がれてしまっている。だが、あの形状からするに、側面や背面からの攻撃には弱いはず。

狙うなら、陽動からの不意打ちだ。

「アヴェンジャー、そのままエネミーの気を引いて。私に考えがある」私の指示に、アヴェンジャーは少し考える素振りを見せたが、すぐに頷き返した。

「いいでしょう。その代わり、きっちり遂行するように」

その返答を受け、私はすぐに右の方へと走り出す。幸い、エネミーがこちらに来てくれていたおかげで、戦闘はこのエリアのほぼ中心で行われていたので、私の進路上に行き止まりは存在していない。

アヴェンジャーがエネミーのほとんどを駆逐してくれていた事も

あり、障害となりうるものもない。

無論、突然の私の動きにエネミーも反応を見せるが、

「行かせるかってのー！」

それをアヴェエンジャーが許さない。指先を銃のようにして、人差し指から小さな炎の塊を連続で撃ち出してエネミーを牽制する。

「よし……いー」

私は今のうちに、円を描くように走り、エネミーの背後を位置取ると、アヴェエンジャーと同じく指先で銃を作ると、腰に提げた守り刀によるコードキャストを発動した。

指先から放たれる、テニスボール程の大きさの光弾は、迷う事なくエネミー目掛けて一直線に飛んでいく。

「アヴェエンジャー、攻撃中止!!」

光弾が当たる数秒の間に、私は炎の銃撃を止めるように叫ぶと、彼女も素直に従ってくれたようで、ピタリとアヴェエンジャーからの攻撃が止んだ。

「……そういうコト」

距離が開いているので、アヴェエンジャーが何か言ったようだが、私の耳には届かない。

そうこうしているうちに、私が撃った光弾がエネミーの後頭部(?)へと直撃する。

『■■■■!!』

当たりはしたが、当然ながらダメージはほとんど無い。だって、このコードキャストは本来、敵の魔力に反応して効果を発揮するもの。故に、ダメージも効力も今のエネミーには全く無意味だ。

「そう、それでいいの」

だが、背後からの攻撃があつたという事実さえ作る事が出来れば良かった。

狙いはダメージや効力による一時的な麻痺ではない。本当の目的は、一片の注意でも良かったから、私の方に意識を向けさせる事。

機械的なエネミーは、目の前の敵を警戒するようにプログラミングされているが、見えない箇所からの攻撃にも当然警戒しなくてはなら

ない。

狙い通り、エネミーはアヴェンジャーから私へと方向転換した。

一瞬でも、こちらに意識を向けた事が、自身の敗因になるとも知らずに。

「素人にしては、なかなか上出来よ、マスター!!」

嬉々としてアヴェンジャーが両腕を左右いっぱい広げて、そのままクロスさせるように反対の方へそれぞれ一気に振り抜く。

エネミーが背を向けた隙に作り出した、二本の小振りの黒槍は、彼女の腕の動きに合わせて、左右から同時にエネミーを串刺しにした。

『■■■■■■■■』

それはまさしく一瞬の出来事。エネミーは何が起きたかも分からぬまま、渴いた獣のような叫びを上げながら、その身を解れさせデーター化していった。

「……勝った、かな」

ひとまずの脅威が去り、私は気が抜けたように息を吐く。

あのタイプのエネミーは、その特徴的な大口から見ても正面からの攻撃に滅法強い。その反面、左右後方はがら空きで、そこさえ突ければ容易に倒せる。

気を付けなければならぬのは接近戦か。あの大きな口に生え揃った大量の鋭利な牙。あれこそがあのエネミー唯一にして最大の武器だ。

サーヴァントならまだしも、あれにもし私が噛まれようものなら、ひとたまりもないだろう。

今度からあのエネミーと戦う時は、なるべく近付かないようにしよう。

「分析するのもいいけど、早く進むわよマスター」

つとと。考え事に没頭しすぎていたようだ。

いつの間にかアヴェンジャーが私の方へと近付いていた事にも気付かなかったとは。

「ほら、スイッチなら押ししておいたから」

言われてそちらを見れば、エリア中心地ではスイッチが黄金の光を

放っている。

道は私達が来た方とは対面のものの二つしかない。そして、まだ行っていない方は下り坂になっているようなので、間違えて戻るという心配もなさそうだ。

「よし。それじゃあ行こう、アヴェンジャー」

何という事か。この先の構造を、私は甘く見ていたらしい。

分岐点や坂が異常に多い構造をしており、さっきのイチイの樹があったところも迷路だったが、こちらもなかなかの迷路具合をしている。

しかも、迷路プラス大量の坂だ。無駄に体力の消耗を強いられるのは目に見えていた。

「ゼエ……ヒイツ……」

「だらしないわね、この程度でその体たらくとか。もつと体力付けなさい」

私が息絶え絶えで坂を上り下りしているのに、アヴェンジャーは素知らぬ顔で、私の体力不足を叱責してくる。

そんな事言っちゃってしょうがないじゃないか。私は何処にでも居る女子高生の代表的かつ平均的な能力しかないのだ。

逆に私がスタミナ有った方が、ギャップが強すぎると思う。だから、私は悪くない！

「屁理屈ばかり並び立てて……。情けないわね、こんなのが私のマスターだなんて」

そう言って、心底残念そうに溜め息を吐くアヴェンジャー。

いや、今のはものすごく失礼だと思うのですが!?

主にマスターへの畏敬の念が、あなたには足りてないと思う。

「無駄口を叩く余力があるという事は、まだ限界ではないという事の裏返しです。ほら、どんどん先に進むわよへボマスター?」

「今のは本当に傷付いた!! とうか言葉に棘しか無くて心がチクチク

するよ!？」

否、チクチクどころがザクザク刺さりまくりです。

言葉は時に、どんな武器よりも鋭利な刃となって、人の心を傷付けるのだと知って下さいアヴェンジャーさん。

このままでは、私の心がズタボロです。

まあ、当然ながら私の懇願など聞く耳持たずの復讐者は、私の腕をグイグイ引っ張って、無理矢理坂道を歩かせるのだった。

何度かの坂道とエネミーとの戦闘を経て、私達は緑色のアイテムフォルダ——即ち、暗号鍵<sup>トリガー</sup>を発見する。

疲労で鈍る脚に鞭打ち、私はフォルダの元まで辿り着くと、力無く手を翳し開封した。

「やった……トリガー、ゲットだぜ……!」

中から出て来たのは、『トリガーコードガンマ』。初日からトリガーを取得出来たのは、結果としては上々か。

よく考えたら、毒を受けて、迷路と坂道に苦しめられて、よく頑張った私、と自分を褒めてあげたいくらいだ。

「トリガーを手に入れたわね。ひとまず、これで安心といったところかしら?」

本当、サーヴァントだからかは知らないが、全然疲れて見えないアヴェンジャーが羨ましい。

今も、余裕しやくしやくといったように腕を組みながら、私の手に握られた端末を目にしている。

「ふう……これで、あとは帰るだけだね」

「それもそうね。流石に少し疲れたし、さっさと帰りましょうか」

え。嘘だく? 絶対に私よりも疲れてないし、疲れたようには全く見えないんですが。

……でも、間違ってもそんな事を言えば、もっとひどいマラソンに付き合わされる羽目になるのは見え見えなので、ここは素直に頷いておく。

しかし、そうは問屋が卸さない。元々、今私達が居るのはちよつとした迷路なのだ。出口は近いだろうが、それらしき道はまたしてもフェンスゲートによって閉ざされていた。

結果、私はまたヒイヒイ言いながらスイッチを探す事になるのだつた。

「今回のアリーナしんどすぎ……」

どうにか無事……とは言い難いが、校舎へと帰還した私達は、そのままマイルームへと直行した。

もはや寄り道するのも億劫になる程に、私の疲労はピークに達していたからだ。

なので、夕食は今日は摂らないで、すぐに休む事になっていた。

もはやアヴェンジャーの早脱ぎにも見慣れたもので、ポイポイと投げのように脱ぎ捨てられていく甲冑やガントレットも気にならなくなっている。

そして、その豊かな肉まんにも、もはや何も思わなくなってきた。

大きさだけが重要ではない。形だつて重要だ。私は量より質を取るだけ。

小振りだからといって、巨乳に遅れを取るつもりは一切無いのだ！

「……時々思うのだけど、貴方つてたまに女とは思えないコトを言う時があるわよね。なんというか、魂がオッサン？ みたいな」

「アリーナの時より傷付いた!! それはあまりにヒドい物言いだ!!」  
どこからどう見たって私は女子。それをオッサン呼ばわりなど、笑止千万。

謝つて。この可憐な女子高生の私に謝つて！

「いや、そういうトコロがオッサンくさいというか……」

「はうあ!？」

なん……だと……!？」

まさか、私は無意識のうちにオツサン化しているとしても!？」

屈辱だ……。果てしなく屈辱だ……!!

「いつまでもバカ言っていないで、さっさとやるコト済ませて休むわよ」  
アヴェンジャーに軽く頭を小突かれ、私はおふぎはここまで、  
今日一日の出来事を振り返る。

まず、二回戦の対戦相手——ダンとそのサーヴァントについて。  
緑衣のサーヴァントは毒を用い、待ち伏せや奇襲、罠を利用する典  
型的な暗殺者然とした戦いを得意としていると推測出来る。

それだけで見れば彼のクラスは『アサシン』であると過程出来なく  
もないが、まだ彼の武器が何か分からない上に、宝具だけではそのク  
ラスを判断するのは困難だ。

だって樹が宝具とか。あれだけでクラスを見極めるのは無理だろ  
う。

「……」

私の分析を黙って聞いているアヴェンジャー。彼女は彼の正体を  
知っているが、話してくれる事はない。

私が彼の真名に辿り着けるか、苦勞して真実を見つけようとする私  
の姿を楽しんでいるのだろう。

話を戻す。

しかし、ダンは騎士であるために、そのような戦法を良しとしない。  
故に、その事である主従は正反対の人物同士の組み合わせのように見  
えた。

「それには私も同感ね。どう見たってアイツらは戦いに対する姿勢が  
食い違っていました。相反する戦闘思考は、こちらが付け入る最大の  
隙でしょう」

あ、どうやらサーヴァントの正体についてはノータッチのようだが、  
彼らと戦う上での話には参加してくれるらしい。

「マスターの実力差は仕方ないとしても、私達の負けが決まった訳で  
はありません。奴らの人間としての理想の差異……よく目を凝らし



て見定めるコトね」

言われなくても、それは分かっている。

私とダン、どちらが優秀かは明らか。だけど、そんな彼にもサーヴァントとの不仲という穴がある。

劣る私は、その欠点を上手く突く必要があるのだ。どれだけ優れた牙城でも、亀裂を狙われては脆く崩れるもの。

必ず、万物にはどこかに弱点が存在する。力で劣る私は、そこをどう活用するかが求められてくるのだ。

「それはそうと、あのサーヴァントが毒を使ってくるのは分かったのだし、対策くらいは考えておくべきよ」

一通りの今日一日の総括を終え、さあ休もうとしていた私に、アヴェンジャーが声を掛けてきた。

既に彼女はだらしなく寝そべっていたが、目はまだ眠気を携えてはいない。

「対策……って言うと、例えば？」

私が問い返すと、呆れたようにアヴェンジャーの私を見る目が、明らかに見下すソレになっている。

「そんな事も分からない？ つくづくおバカなマスターだコト」

むむ。そこまで言われたら、私だって黙っちゃいけない。彼女から答えを言われる前に、正解を言い当ててやろうではないか。

いざ考えるとなると、案外あっさりと思いが浮かんでくる。

毒。現実では即効性と殺傷力が高いイメージがある。ゲームでは、じわじわとHPを奪う傍迷惑な状態異常だ。

今日の感じだと、あのサーヴァントが使ってきたのは後者のもののように思える。

ゲームの毒は基本的に治療の手段がある。魔法による除去か、あるいは道具を使った除去か。

自然回復というのものもあるが、それは回復の手段がない場合や、HPに余裕がある時の話。

「……購買に治療用の道具って売ってるかな？」

結論、アイテムによる除去。コードキャストでそういった類のものを持っていない私には、購買で毒を回復出来るアイテムが買えるかどうかが重要になってくる。

毒をいつまでも引きずったまま、エネミーや敵サーヴァントと戦闘に突入するのは不利でしかないからだ。

「売ってるでしょう、多分。今はまだスキルを使ってくるエネミーと遭遇していませんが、そのうち手強いタイプも出て来る筈。その中には、毒や麻痺といった状態異常にしてくるエネミーも居る筈よ」

……確かに一理ある。聖杯戦争の進行に合わせて、残るマスターのレベルも相応のものへとなっていく。

ならば、エネミーもそれに比例するように強化された個体が現れても、何もおかしな話ではないのだ。

当然、スキルや状態異常を付与してくるエネミーも出て来るだろう。

いや、そういう事を得意としたサーヴァントだって、今回以外でも対戦する事になるかもしれない。

ダメージを回復するアイテムが売られているくらいだし、状態異常を治すアイテムも売られている方が自然だ。

まさかそういったアイテムが数に限りある貴重品という訳でもあるまい。もしそうなら、どんなハードゲーだと文句を言いたいレベル。

「とりあえず、明日の朝ご飯を買いに行く時にでも、購買で確認してくれるね」

まあ、実際に見てみなければ分からないのだから、あると祈りながら今日はもう休もう。

「おやすみ、アヴェンジャー……」

私はそれだけ言って、どんどん意識が闇の底へと沈んでいき、完全に途絶えた。

「おやすみ、アヴェンジャー……」

マスターは就寝の挨拶を告げると、死んだように眠りにつく。よっぽど疲れたのだろう、寝るまでに数秒と掛からなかった程だ。それか、緊張の糸が切れたからか。

どちらにせよ、疲れたのには変わりない筈だ。

「……………ホント、憎らしい程に可愛らしい寝顔だコト」

眠るマスターの顔は、まさに無垢なる乙女そのもの。先程は魂がオッサンと称したが、その実、この子は戦いのイロハも知らなければ、命の奪い合いからも無縁だった、ただの人間に過ぎない。

そう、単なる一介の少女でしかないのだ。

魔術師としても未熟、マスターとしても未熟、戦いへの姿勢には著しく成長が見られるが、やはりまだまだ雛鳥の範疇を出ない。

「……………」

私は静かに、音もなくマスターへと這い寄る。

その無防備な寝顔を、起こさないように気を付けながら見つめ、頬を指で突っついてみる。

ぷにぷにしている、その触り心地に思わずクセになりそうだ。しばらく突っついてはいるが、マスターは一向に起きる気配はない。

やはり、疲労が溜まっているのだろう。

「無理もない、か……。毒に、迷路に、戦闘に。今日だけでも密度の高い一日だったワケだし」

聖杯戦争において、あらゆる面で素人のマスターが、この聖杯戦争を勝ち抜くには、聖杯戦争を知る者の手助けが必要となる。

そうだ、私が、この子を導かねば。

本来なら、手を取り合う事もなかった私達。奇跡にも等しい巡り合わせで、私は彼女と巡り会ったのだ。

私の望みは、ここでなければ叶わない。

私の願いは、現在進行形で叶っている。

私の目的は、聖杯戦争を勝ち抜く事で達成される。

そのためにも、復讐者の虜となった我がマスターを、死なせる訳にはいかない。

別にマスターが特別好きとか、そんなんじゃない。

だけど私には、もう彼女しか居ない。この繋がりを、断ち切る訳にはいかないのだ。

それが、私が選んだ願い／道だから――。

マスターは相変わらず、頬を突っつかれていても起きない。

本当に、憎らしい程に可愛らしい。

どうか、我が煉獄の炎に吞まれぬ事を。復讐に取り憑かれるのは、私だけで十分だ。

そうでしょう、下らない聖女様？

あなたは星の導きを信じますか？

翌日。

想像以上に私は快眠だったらしく、目が覚めた時には既に全身から疲れが消え去っていた。

それどころか、いつもより体が軽い気さえする。ただ、起きた時にアヴェンジャーの顔がすぐ側にあった時は、流石の私も面食らったのだが。

私が目覚めて間もなく、彼女もパチリと目を開けたのだが、ひたすら無言で、顔が無感情のままゆっくりと私から体ごと顔を背けた時は少しホラーだった。

何を聞いても黙りこくって、一言も喋ってくれないし。寝ている間に何かあったのだろうか？

そんな事もあり、私はマイルームに居るのが気まずくて外へと出ていた。気分転換に、購買で何か買って食べようと思い、

——ふと、廊下の先から、誰かの話し声が耳に届いた。片方の声は聞き覚えがある。

「はじめまして。サー・ダン・ブラックモア。高名な騎士にお目にかかれて光栄です」

丁寧な口調で挨拶しているのは、間違いなくレオだった。予選の頃の記憶を鮮明に覚えているのだ、聞き間違える筈がない。

背後には今日も、あの長身のサーヴァント——ガウエインが不動で直立している。

「……………」

ガウエインは沈黙を守っている。もう一方の話し声は彼ではなく、レオの前に居る——

「ごちらこそ。ハーウェイの次期当主殿に、このような場所でお会いするとは……」

ダンだ。今思えば、昨日も聞いた声に、私はよりいつそう息を殺して、気配を殺す。

偶然とはいえ、聞き耳を立てている形となっている。あまりバレるのはよろしくない。

「そう驚く事もないでしょう。僕はただ、我々の手に在るべき物を回収するために来ただけです。未だ戦場を知らぬ若輩ですが、一族で協議したところ、適任者は僕でしたので。それも、貴方を前にしては、恥ずかしい話ですが」

あのレオが、皮肉でそんな事を口にしていてとは思えない。あれは、レオの心から言葉。彼は、ダン・ブラックモアという人間を高く評価しているのだ。

「万能の杯……。聖杯はあなたの物であるか？」

「ええ。あれは我々が管理すべき物です。所有権が空席なら尚更だ。人の手に余る奇跡は、人の手に渡すべきではありません。その管理は王の手にあるべきでしょうし。聖杯戦争という手続きは面倒ですが、そこは仕方ありません。それに、存外これはこれで新鮮でもありますからね」

「王は人にあらず。超越者であると。……なるほど。あなたなら口にする資格がある」

レオとダン……。互いに知り合い……。ではなさそうだが、どうやら共に有名人らしい。

「これは、いよいよ聖杯も真実味を帯びてきましたな。正直なところ、わしは半信半疑でしたが……。いやいや、年甲斐もなく楽しくなってきた。まさかこの歳で、聖杯探求の榮譽に関われるとは」

「もちろん。聖杯は真実です。少なくとも、あなたの国にとっては「ほう。それは如何な理由で？」

「それはあなたですよ、ダン卿。軍属でありながら女王陛下に騎士勲

章を賜った程の戦士。そのあなたを派遣する事が、何よりの証に思えます」

女王陛下に、騎士勲章……そんな古き時代を思わせる単語が、現代でなおも使われ、そして勲章それを与えられたダン。

もしや、彼の出身は英国イギリスでは……？

女王が存在し、レオをしてここまで言わせしめるとすれば、未だ王政を敷く英国くらいしか思いつかない。

いや、地上の世界情勢を詳しくは覚えていないのではあるが。英国がまだ続いている国だというなら、その可能性は高いだろう。

「なにを仰る、若き王よ。わしはこの通り老兵だ。生還の保証のない戦いと知り、古い先短いわしに、声が掛かっただけの話です」

「女王陛下の懐刀であるあなたが？ 風聞ですが、陛下は現在の同盟体制に一言あると聞きましたか？」

「さて、女王の意向は分かりかねますな。所詮、一人の軍人に過ぎませんので」

先程からずっと、二人は話している間、その表情を全く変える事なく相手の出方を窺い、互いに合わせているようだった。

印象としては、腹の探り合いをしているような。

極めて高度な応酬が、そこでは繰り広げられていたのだ。隠れているとはいえ、私なんかはあまりに場違いな程に。

だけど、そのやりとりも終焉を告げる。

「ああ、なるほど。これは失礼しました。では僕はこれで。行きますよ、ガウエイン」

「御意」

ダンに別れを告げて踵を返したレオは、そのまま歩みを進め——  
——って、あ。

「おや？ お久しぶりですね、岸波さん」

……うん、そりやバレる。だって呑気に様子を見ていただけだし。いきなり会話が終わったもんだから、逃げる暇さえなかったもの。

「一回戦を突破したとお聞きしました。おめでとうございます。次は二回戦ですね。どうかお気をつけて、と言いたいところですが……」

その祝辞はどちらかと言えば、ありがた迷惑だ。だけど、彼の言葉の本質は、祝いよりも後にあつた。

「……どうなんでしょうね。黒騎士の槍は折れている。いえ、槍を剣に持ち替えたのでしようか。もし彼の信念が以前と違うものなら、あるいは……あなたにも、勝機はあるのかもしれませんが」

それだけを告げ、レオは去っていく。

どこに消えたのか、いつの間にかダンの姿もない。次に顔を合わせる時が気まずい……。多分、隠れて聞いていたのはバレているだろうし。

……結局あの二人は、何を話していたのだろうか？

理解出来ない言葉はただ、手の隙間から零れ、頭に浸透する事なく消えていく。

ただ一つだけ分かった事は、彼らは本気で聖杯を手に入れようとしている。

万能の願望機と言われても実感が湧かないが。

彼らが言うのであれば、その価値は真正の物なのだろうか――。

時は進み、夕刻。

アヴェンジャーも、朝の出来事を流石にいつまでも引つ張るつもりはないようで、互いにあの一件は暗黙の了解として忘れる事になった。

あれは偶然の事故だったんだ……。そう、自分に何とか言い聞かせて。

「マスター。不仲であるとしても、貴方とあの老いぼれ騎士とでは、その差は歴然です。アリーナに行きますよ。少しでも戦闘経験を積んで、その差を縮めない」と

うん、そうだね。アヴェンジャーの言う事も、もつともだ。

少しでも差を縮める努力を。それなくして勝利など有り得ないのだから。



そうと決まれば早速アリーナ!

と、私はマイルームから出て階段の方へと向かった。  
向かった、のだが……。

「ごきげんよう」

階段の前で、待ち伏せていたのかと思うくらい、私の前で立ち尽くす一人の少女。

何度か校舎内で見た、どことなくエジプト風味なエキゾチック眼鏡っ子は、私の姿を確認するや、ひらりと優雅に会釈する。

「ご、ごきげんうるわしゅう……?」

私も思わず、釣られて似たような会釈をするが、如何せん不意打ちな上に慣れていない事もあり、声が若干上擦ってしまふ。

ハズい……!! 超ハズい……!!

だけど、それも私の杞憂で、目の前の少女は気にするどころか、眉一つ動かさず平静を保ったまま。

ジツと見つめてくる視線が、少しこそばゆくさえ感じる。

それにしても、相変わらずの、機械的な表情と言葉。

一体、この娘は何なのだろうか。

「こうして、人間らしく対話するのは初めてですね」

と、やはり先程の私の失敗に触れる事もなく、話を進め始める少女。  
というか、え? 対話が初めてって、何度か話した事があるような気がするんだけど……?

「私はラニ。あなたと同様、聖杯を手に入れる使命を負った者」

そういえば、名前を聞いたのはこれが初めてだ。

改めて聞けば、澄んだ鈴のような声に感情が少し乗った事で、彼女が、同じ人である事に安堵する。

「あなたを照らす星を、見ていました。他のマスター達も同様に詠んだのですが、あなただけが…霞に隠れた存在」

眼鏡に手を添え、恥ずかしげもなくポエムのような言葉を口から奏でるラニ。真顔で表情変える事なく、割と真剣な話なのだろうか。

「では、改めて質問を。どうか答えてほしい。あなたは、何なのですか？」

「月海原学園、二年A組、岸波白野です」

聞かれたから答えた。それだけの事さ。

割と失礼な質問ではあると思うけど、それは言わないお約束。だって、見た感じ、学年で言えば後輩な感じがするし、この娘。

先輩たるもの、後輩には常に優しくあれ——どこかのヒゲが素敵なうっかりオジサマもそう言っていたはずだ。

「困ります。今の回答は、正解ではありません」

む。そういう事ではない、と。

いや、無いとは思ったが、反射的に自己紹介してしまった……。

ラニ、と名乗った少女の失望の眼差しが、痛い。

「正体を隠すのですか？ 昨日、ブラックモアのサーヴァントにはあんなに無防備だったのに」

「——え」

……見られていた!?

いや、あの場には自分と相手しか居なかった筈。

私が不審に思ったのに気付いたのか、ラニは変わらぬ声色で続ける。

「警戒しないで下さい。私は、あなたの対戦者ではないのですから。見ていた、というのは正確ではありません。星が語るのです、あなたの事を。私は、ただそれを伝えただけ」

……けっこう本気で警戒しているのだが、ラニは少々イタイ病気を患っているのか？

星が、語る？

「我が師が言った者が誰なのか。私は新たに誕生うまれる鳥を探している。その為に、多くの星を詠むのです。あなたが、その鳥なのかは分かりませんが……」

いけない。先入観で判断するのは。

星を詠む——占星術、と言う奴だろうか。

彼女の言には分からない事が多かったが、今の言葉も輪をかけて分

からないが、少なくとも敵意は…感じない。

鳥…：新たに誕生<sup>うま</sup>れるかどうかの話は知らないが、そういうえば私つてよくヒヨコとかヒヨヒヨとかヒヨッコとか、主に凜とアヴェンジャーに言われてるな。

…：思い出したらちよつぱり腹が立ってきた。

「私は、もっと星を観なければならぬ。ですので協力を要請します。ブラックモアの星を、私にも教えてほしい。如何でしょうか？ 彼の星を詠み、知る事は、あなたにも有益な事だと思えますが…：蔵書<sup>アトラス</sup>の巨人の最後の末として、私はその価値を示したい」

『アトラス…：!?!』

姿は見えないが、アヴェンジャーがラニの言葉に驚いているらしい。

彼女の目的自体はよく分からない。だが、これは協力関係を築きたいという申し出なのだという事は、なんとなくだが伝わった。

「私はあなたを利用し、あなたは私を使用する。あなた達風に言うのであれば、win-winの関係、というものでしょうか。…：どうでしょう。私の頼みを、聞いていただけますか？」

目の前のこの少女の言い分は理解した。ならば、私を待ち伏せていた事も納得がゆく。

だけど。

「勝手にこつちを調べたの…：?」

ダンの調査がしたいと言う以前に、こちらの事も既に…：見られていたというのか。

その事に気が付いた事で、軽い戦慄が走る。

『ホント、おバカなマスターね。何を当たり前のコトを。この戦いは情報戦だと以前も言ったでしょう？ むしろ、アンタが無防備すぎる上に疎すぎるのよ。情報を得るために動いているのは、こちらだけではないという事を理解しておくコトね』

…：アヴェンジャーに叱られてしまった。

むう、よく考えれば私の方こそ軽率だった。次に誰が対戦者になるかも知れないのに、要注意な人物をこそ対戦者でなくとも調べて当然

なのだ。

ラニもまた、それをしているに過ぎない。

「けれど、彼女は素直に謝罪を口にする。ラニに非があるという訳でもないのに。」

「申し訳ありません。しかし、師が言った事の意味を知るためには、私は人間を知る必要があるのです。師は言いました。人形である私に、命を入れる者が居るのかを見よ、と」

「あなたが、人形……？」

それはつまり、どういう事か。どこからどう見たって、私と同じ人間にしか見えないのに。

彼女が言う師とは、彼女を虐待でもしていた？ 人間扱いされなかつた、という事なのだろうか。

「師が言うのであれば、私は探さなければならぬ。人間というものの在り方を。あなたがそうなのか、それは分かりません。でも、あなたには少し……他のマスターと違う星が見える。私は……もつと人を見なければならぬ。あなたも、そしてブラックモアも。だから私に、見せて欲しいのです」

懇願とは程遠い、その願い。

でも何故か、切実な気持ちがそこには込められているように思えてならなかつた。

人間の在り方を知りたいと、ラニは言う。それが哲学的な意味を持つのか、それとも本当に人間という存在の在り方をその眼で確かめたいだけなのか。

自身を人形と宣言するだけあって、その心の内をまるで読む事が出来ない。

それでも、純粹な気持ちだけは伝わってきた。それは確かな事だ。「何か彼の遺物を見つけたら、私の所まで来て下さい。私は三階の廊下の奥で待っています。その時、空を見てみましょう。ブラックモアの星を詠む事は、あなたにも無益な事ではないでしょう？ 今から三日後には、星を詠むのに適した時が満ちるでしょう。その時まで、遺物をお持ち下さい」

そう言うと、いつものように、「ごきげんよう、ではまた」と彼女は微笑んだきり、私に背を向け、廊下から空の見える窓際へと歩いて行った。

不思議な少女だが、少なくとも……敵意は感じなかった。

ダンの情報が得られるのであれば、彼女に協力をするのもいいかもしれない。こちらが損をする事は一切無いのだし。

何かそれらしきモノを手に入れた時は、三階に会いに行ってみよう。確か……三日後、だったか？

『それにしても、あの女……まさかあのアトラスの魔術師だったなんてね。道理で、奇天烈な格好に思想だったワケか』

なんだか一人で納得しているアヴェンジャー。そもそも、その『アトラス』って何？

『……説明が面倒くさいわね。えーと、つまり要約すれば、頭のおかしい魔術師の集まりよ。それと、下手にアトラスの魔術師には喧嘩を売らない事を推奨します。なんたって奴ら、世界を救うために世界を七度滅ぼせる兵器すら創り出したとかいうキチガイなのに、それでも満足していない連中なんですから』

おおう……。この性根のひねくれたアヴェンジャーにここまで言わせるのか、そのアトラスとやらの魔術師は。

え？　じゃあラニを怒らせないで済んで、私って運が良かったの？

「岸波さん、ちょっと、大変なの。先生のお願ひ、聞いてくれない？」  
そして唐突に発令されるタイガークエスト。

ラニとの会話を終え、階段を下りた所ですぐに私はタイガーに物理

的に拘束された。

肩をガシツと掴まれ、まるで虎が獲物を逃がさないようにしているかの如く。

力が強く、逃げるに逃げられない。となれば、ここは素直に頼みを聞いてあげるしかないだろう。

「……………ハア。いいですよ」

「キヤー！ 先生嬉しい!! ちよつと深い溜め息が気になったけど、そんなの関係ないわ！ あのね、知り合いから貰った柿が、手違いで誰かのアリーナに転送されちゃったのよ」

何やってんのこの虎!?

どうやったたら手違いで柿がアリーナに飛ばされるのか、その詳細がすごく気になる!!

「誰のアリーナに送られたか分からないから、みんなに声を掛けてるんだけど——あなたのアリーナも、探してみてくださいないかしら」

……………それで見つかったら、驚く以外の何物でもない。いや、探すけど。

「たぶん、二日もしたら、エラーとして消去されちゃうだろうから、その前に回収お願いね」

なんと、ラニの依頼期日より日数が少ないときた!

ホントなんなんだこのタイガー……。それにしたって、今度は柿つて。この前は蜜柑だったのに、そもそもその知り合いって誰だ。

AIで知り合いに柿くれる人……。謎すぎる。

『……………ここまで自由だと、いつそ清々しいわね。私、あの虎女みたいなジャガー女に心当たりがあるわよ…………』

ジャガーつて。まさかタイガーがジャガーの皮を被ってサーヴァント化してたりなんてしないだろうな…………?!

あ、なんか割とありそうで嫌だ。召喚しようものなら、聖杯戦争が未曾有の大混乱に陥りそうな気がする。

もちろん、カオスという意味で。

『それにしても面倒ね。まさかオーダーが一度に二つも来るなんて。もちろん、あのアトラスの魔術師の方を優先しなさい? 柿なんて二

の次です。ついでよ、ついで』

そりやそうだ。柿探しに躍起になって、ダンの遺物探しが捗らないなんて事になったら、タイガーを末代まで崇めてやる。

こんな事が言えるのも、その当の本人がクエストを発令するや、既に風のようにこの場を去っていたからだ。

『ふうん？ なかなか復讐者のマスターとしての心構えがなってきたじゃない。ま、まだまだ規模が可愛いものだけど』

そんな事で誉められても、全然嬉しくない……。

岸波白野との邂逅から、ラニは変わらず窓から空を見つめていた。星を詠む——ならば、より詠みやすいのは夕刻から朝に掛けての時間帯。故に、彼女は昼間アリーナへと行き、帰ってからはもっぱら星を詠むために空を眺めるのが日課となっていた。

「……………」

聖杯戦争本戦が始まり、既に一週間以上の日数が経過している。本戦へと進むのが早ければ早い程、この本戦の校舎で過ごす時間も、後から来たマスター達より長くなる。

ラニは本戦への参加資格を勝ち取ったマスターの中では、かなり早い段階からこの本戦用の校舎に来ていた。

与えられた仮初めの役割も、本来の彼女の在り方が故に、時間を掛けるまでもなく看破したからだ。

いち早くここへ来たからこそ、ラニは多くのマスター達の星を見る時間を得られた。だからといって、すべてのマスターの星を把握出来たかと言えば、そうではないが。

そんな中、彼女はとある一つの星を見つけた。

他の星とはどこか違う、それでいてどの星よりも輝きの弱い星。

「……岸波白野」

それが、その星のマスターの名前。

最後の本戦通過者。噂では、記憶に障害が残り、予選からそのままこちらの本戦会場へシフトして来たような状態で、その影響かサーヴァントも弱体化してしまった、文字通り最弱のマスター。

その最弱のマスターの星故に、その輝きも弱いものだど、ラニは最初そう思っていた。

だけど、違った。

岸波白野は最弱でありながら、有力なマスターの一人に数えられていた間桐慎二に勝った。

日が進むにつれ、その星の輝きも強さを微弱ながらも増して行かせて。

気になった。他とは違う輝きを持つ星、そのマスターの事が。

自分が対戦者に当たった時の為とか、そんな事とは関係なしに。ただ純粹に、『岸波白野』という一人の人間に興味を持ったのだ。

もしくは、彼女が、師の言っていた――

――それはどうかな？

ふと、声が聞こえた気がした。

振り返り、声のした気がした方へと視線を向けるが、誰も居ない。

ただ、視界の端で、真っ白な長い髪が揺れていたのが、見えた気がしたのだった……。

空に輝く弱き星の光。その裏に隠れるように、小さな、真っ黒な輝きがある事を、ラニはまだ、気付いていない。



## 忍び寄るは毒の影

今日も今日とてやってきましたアリーナ探索。今回の探索での大きな目的は二つ。

一つは、ラニが言っていたダンとそのサーヴアントに関わる残留物の搜索だ。それが何かまでは分からないが、明らかにアリーナにとつて異物である物が存在するなら、それは彼らの遺物に他ならない。

そしてもう一つは、割とどうでも良いのだが、タイガークエストである柿の搜索。先程、大きな目的は二つと言ったが、こっちはついでに探す程度で十分だろう。

だって直接聖杯戦争に関わりが無い訳だし。単なる人助けのようなものだ。まあ、探すけど。

「奴らにまつわる遺物、ね……。そんなものが都合良く落ちてれば万々歳もいいところだけど、果たしてそう上手くいくかしら？」

復讐者だけにネガティブ発言をするアヴェンジャー。いやまあ、それは確かにそうだけど、探してみない事には始まらないのだし、やるだけやってみようよ。

「やらない、なんて誰が言ったの？ もちろんやるわよ。どうせ柿も探すんでしよう？ なら、どっちにしたってアリーナを隅々まで調べるんだし、たいして変わりないじゃない」

イジワルな笑みを私へと向けてくるアヴェンジャー。なんだ、あなたもなかなか私に私の事が分かってきたじゃないか。

無論、隅から隅まで探してやるとも。こういうのは、根気と負けん気とやる気だ。諦めなければ、たいしての事はどうにかなるもの。

と言つても、流石にライダーよろしく、不可能を可能なままに実現させるなんてのは無理なんだけど。ホント、星の開拓者様々ですよ。ね。

「とりあえず、まずは結界の基点になってたあの木があった所を調べてみよう。もしかしたら何かあるかもだし」

今回は毒もなく、あっさりと目的地へと到着する。道を阻む敵も、霊格を取り戻しつつあるアヴェンジャーにとって、雑魚程度なら難なく倒せるようになってきている。

それに加えて、私が購買で治療薬を購入した時に見つけて買った、新しい礼装の力も相まって、瞬殺をも簡単にしてしまったのだ。

その名も『空気撃ち／＼の太刀』。守り刀よりも更に小振りな短刀で、装備する事により、Cランク相当の魔力放出スキルを私でも使えるようになったのである。

守り刀と同じように光弾を手から撃ち出す訳だが、こちらは戦闘開始前の初手のみに効力を発揮する仕様で、上手く当たれば戦闘開始と同時に有効打を遠慮無しで決める事が可能となる。

ただし、戦闘が始まってしまえば使えない、無用の長物と化すという、便利だが不便な礼装と言えるだろう。ここら辺、決戦を踏まえた仕様になっているのかもしれない。初手で動きを封じられるのはかなり大きいし。

ともあれ、それにより、まず私が敵の動きを一瞬でも止めた間に、アヴェンジャーが一撃でエネミーを葬るといったサイクルを築き上げたのである。

ヤバい、楽チンすぎてクセになりそう……。

「おバカ。その分、魔力の消耗も激しいでしょうが。あまり多用しすぎないように気をつけなさい。今回は子どもみたくに新しい玩具にハシヤいでしたから見逃してあげましたけど、次からは無いわよ」

ビシッとお叱りを受けてしまった。正論すぎてぐうの音も出ないので、素直に従っておこう。

確かに雑魚相手に使いまくるには、魔力がもつたないな。気をつけるでしょう。

さて、何かあるだろうか……？

「——これは？」

ダンがサーヴァントが作り出した結界の基点、イチイの矢が打ち込

まれた場所。

よく目を凝らすと、そこには鈍い輝きを放つものがあつた。

境界の基点、イチイの矢の残骸。手に取つたそれは、確かに年代物の矢じりのようだった。

「まさか本当にあるとはね。これでアイツの正体に一步近づいたわよマスター？ ほら、喜びなさいな？」

いやいや、これだけではまだ何とも言えない。だけど、もしかしたら他にもまだ何かあるかもしれない。他の場所も探してみよう。

次に来たのは、あのワニ口エネミーの居る広いエリア。

先にエネミーを殲滅して、それからここを隈無く探すと、エリアの一角に何か妙な物があるのが見えた。近寄ってみれば、燻した一本の棒が転がっていた。

折れてはいるが、矢——かもしれない。何かの証拠になるかもしれないし、持ち帰る事にしよう。

それと、あえて触れないようにしていたのだが、前に来た時は無かつたものが、エリア中央のスイッチの隣に鎮座していた。

オレンジ色のアイテムフォルダー——レアなブツが入っているアレだ。

もう何となく中身が分かつてしまったが、開けてみると、

「ぶふっ!？」

柿だった。それも、ダンボール箱一杯に詰まって。

隣でアヴェンジャーが吹き出しているが、私はあまりにアリーナには似つかわしくないその見た目に、唾然となってしまう。

「アリーナに柿も大概ですが、それを箱詰めで大量にとか……!! ふふふ……っ!! わ、笑える……!!!」

……タイガー。私はてつきり、柿は一つだけなのかと思つていたよ。

これだけの量がアリーナに紛失すれば、そりや探したくもなるよね。というか、これだけの量を何故、アリーナに紛れ込ませてしまったんだ……。私はそこがとにかく疑問でならなかった。

次は上下左右に伸びた迷路ゾーン。私は悪夢の再来に生唾を飲み込む。また、あの険しい坂を上り下りしなければならぬのかと。当然ながら、ヒイヒイ言いながら方々を探し回り、上っては下りて、下りては上って——それを繰り返してようやく見つけた。

迷路の奥の奥。しかもそこに行くまでに坂はほとんど無いという、さっきまでの私の労力をまさしく無駄足と嘲笑うかのような場所に、それはあった。

通路の奥によく目を凝らすと、見事な風切羽根が落ちていた。間違はなく、あのサーヴァントの残した結界の基点の一つだろう。

「……矢じり、棒、風切羽根、か」

拾ったものを全てピックアップし、口に出しながらそれらをイメージする。一つ一つを組み合わせていけば、簡単に一本の矢のイメージが出来上がってきた。

「パズルのピースとしては、それで完成でしょうね。なら、もう結界の基点に関連のある遺物もこれ以上は無いです。目的の物も回収出来たし、エネミーをひとしきり狩ったら帰るわよ」

個々として見れば、かなり小さいものだが、それでも三つ。彼らの手掛かりと思しきものが手に入ったのだ。上出来どころか、かなり運が良いと考えた方が良さそう。

最悪、何も見つけられなかった可能性だってあったのだし。

それに、今回手に入った矢のパーツ達。これらから考慮するにも、もしかすると彼のクラスは——。

いや、まだ断定には早い。今は「そうかもしれない」という当たりだけを付けておけばいい。特定するのは、確固たる証拠を手にしてからだ。

「探せるところはこれで全部だし、アヴェンジャーの気の済むまでエネミーと戦ってね」

とりあえずはやる事はやった。今日はもう戦闘経験を積むくらいしか出来ないし、アヴェンジャーの好きにやらせてあげよう。

サーヴァントの強化だって重要だもんね。

白野達がアリーナに探索へと赴く少し前。校舎屋上では緑衣のマントに軽鎧を身に着けた男が一人、寝そべったままぼんやりと海を眺めていた。

「……なんだかねえ。空を見上げてるはずなのに、見えるのは数字やら記号やらの羅列に、海の中ってか。神秘的っちや神秘的なんですよけど、数列のせいで風情もロマンもあつたもんじゃないぜ」

ぼやく彼の傍らには、彼の主たるマスター、ダン・ブラックモアの姿はない。つまり今の彼はいわゆる、単独行動というやつだ。

アーチャーというクラス故の宿命か、アーチャーのサーヴァントは独自に持つクラススキル、『単独行動』によつてマスターから離れて活動する者が、彼のように少なくない。

が、彼にしてみれば、自由に過ごす事自体がライフワークの一つでもあるのだが。

彼の生き方はともかくとして、つまりは、後に付ける白野の目星は、見事的中しているという事だ。

「しかし旦那と四六時中一緒ってのは流石に疲れるね。旦那の言う事も確かに正しいっっちゃ正しいが、正しいだけじゃ世の中通用しないでしょ」

誰に言うでもなく、ぶつぶつと自らの主への文句を零す彼だったが、何もダンの思想を全否定している訳ではない。

ダンの思想は、彼からしても崇高だと思えるものだ。尊敬に値すると言つたって良い。

だけど、彼はそれを自分のやり方へ反映させられない。培ってきたものが、ダンと彼ではあまりに違いすぎた。

前提がまず違うのだ。ダンが騎士としての誇りを重んじるならば、

彼は反逆者として誇りを軽んじる。敵を倒すのに、誇りは時に邪魔でしかない。

「畏だろうと、暗殺だろうと、奇襲だろうと。卑怯な手であっても、勝てるなら使えるものは何でも使う。」

それが彼のやり方だ。だからこそ、騎士であるダンとは根っから基本的な方針が噛み合わないし、戦闘への嗜好も志向も真逆。それは仕方ない事なのだ。

「……青いねえ。ま、空って言っても海の中だし、当然なんだけど」  
どうして、自分はダンのサーヴァントになったのか。ムーンセルも粹な嫌がらせをしたものだ。

そう思わずにはやっつけられないと、彼は自嘲の笑い声を漏らす。

「……おっと、お客さんだ。どれどれっと」

不意に、下から扉を開ける音が聞こえた。屋上への入り口の上に居た彼は息を殺し、気配を消して来訪者に視線を送る。その視線の先に居たのは――

「つつかれた〜！ ホント、嫌になっちゃうわ。二回戦、さっさと終わってほしいって切に思うわね」

屋上に来た少女。赤い服装にミニスカート、長い黒髪をツインテールにした、控えめに言っても美人の彼女の名は、

（トオサカ……リン、だったか？ 旦那が危険視してるマスターの一人じゃねえの。こりや、気付かれるのはマズイか。一応、宝具使つとくかね）

まさかの大物マスターの登場に、彼は最大限の警戒と注意を以て、彼女に自身の存在を気取られまいとする。

その凜はと言えば、疲労を隠そうともせず、完全にだらけきって、柵に肘をついていた。

「まさか二回戦の相手がストーリーカー気質持ちとか。アーリーナに入れば常に私を追っかけ回してくるし、校舎でも私を見かけたものなら、離れてずっとくっついてくるし！ 気持ち悪い上に撒くのも面倒！」

地上でもこんなヤツ私の近くに居なかつたっての!!」

(うへえ、こりやかなり荒れてるな。やつぱバレたらヤバイね)

グチグチと愚痴を言い続ける少女に、彼は若干の同情を覚えながらも、一言一句を聞き逃さぬように意識を集中する。

どうやら、姿を消している彼女のサーヴァントへとその愚痴は向けられているようだった。

「ハア……。え？ モテモテ？ あんなのにモテても嬉しくもないわよ。アンタ、今度アイツとアリーナで会ったら少し本気で行きなさい。なんなら、別にそこで倒してしまっても構わないわ。特別に許すから」

本気で頭にキているのが、その台詞からも分かる。一体どんな対戦者と当たったのか見てみたい気もするが、遠坂凜がソイツと戦う以上、自分達と当たるカードは有り得ないだろう。

故に、ソイツの情報など要らない。要るのは彼女、間違いなく強者である遠坂凜の情報のみ。

対戦者でなくとも、強者というだけで脅威でしかない。

(つてもまあ、俺としましても、このお嬢さんには親近感があるんですよええ。一人でレジスタンスとか、生前の俺かって話な訳だし?)

「あー、やだやだ。もうこの話はお終い。もっと別の話にしましょう。そうね……。例えば、あの子とか?」

あの子……。この少女が気にかける程だ。おそらく、その人物もまた手強いマスターの一人に違いない。そう踏んで、彼は耳に意識を傾ける。

「あの子のバカさ加減は呆れるけど、なんでかあの子の顔を思い出すと気分転換するのにちょうど良いのよね。あれかしら、庇護欲をそそられるというか、母性本能をくすぐられるというか……。とにかくそんな感じ」

……。? そのあの子とやらは、遠坂凜にとっては敵ですらないという事か?

その言い方だと、マスターとしてはそれほど危険視されていないようだが。

「でも、まさかあのシンジに勝つとは思わなかった。曲がりなりにもゲームチャンプにしてウィザード、そこらのマスターじゃ勝てないだろう実力をシンジは持っていたのに。記憶をロクに持たないままに、あの子は勝ってみせた」

（記憶を持たない？ それにシンジ——確かあの海藻みたいな頭の小僧か。ん？ ソイツと一回戦でやった相手って言えば、確か……）

「岸波白野。あの子、一体何なのかしらね。この聖杯戦争唯一の、エクストラクラスと契約したただ一人のマスター。最後に予選通過した、落ちこぼれマスターのはずなのに」

（こいつぁ……）

予想外の名を、まさか予想外の相手から聞く事になろうとは。

岸波白野、二回戦の対戦者。人畜無害そうな、子リスのようなあの少女が、遠坂凜に一目置かれる程の存在とは思えない。

だが、確かに一回戦を勝ち進んだという事実がある。偶然か、それとも必然であったのか。

いずれにせよ、細心の警戒を払う必要があるだろう。何せ、結果も突破された相手なのだし。

（ヒュー。こりゃイイ話を聞いたもんだ。情報がどうかじゃねえ。あの小娘が殺すに値する実力者なら、俺もちよいと本気で仕留めに行きますかあ！ 具体的には明日からだけでも）

遠坂凜はここから動く気配はない。下手に動くのも危険だが、彼は今、とある宝具を展開中だ。なら、多少は気配を気取られようと、追撃までは仕掛けられないだろう。

何せ、そういう宝具なのだから。

緑衣のサーヴァント——アーチャーは、大胆にも一気に屋上から校庭へと飛び降りる。

着地してすぐに校舎へと入れば問題ない。もはや誰も彼の姿を捉えられない。無論、遠坂凜とて。



「……今、何か動いたわね。多分サーヴァントだろうけど、あのストーリーカー野郎のサーヴァント……じゃないか」

その凜はと言えば、今の今まで屋上に自分達以外に誰か居た事のようにやく気付いていた。

が、それも時既に遅し。異分子は既にこの場から去ってしまった後だ。追跡しようにも、今からでは気配も姿も、もはや捉えられない。「普段から自分の情報は口にしないように心掛けてはいるけど、やっぱり周りは全員敵だっていうのを痛感させられるわ。油断禁物ね、私」

自らを叱責する凜だったが、さつき口走った事が何かを改めて思い出す。それは自分の対戦者の事、そしてヒヨコマスターこと岸波白野の事だ。

別段、聞かれて拙い事は一つもない。他人の情報を勝手に口にするのはマナー違反かもしれないが、岸波白野のサーヴァントのクラスなど、とうの昔に多くのマスター達に知れ渡ってしまったている。

何せ、アヴェンジャーなどという正体不明な上に不吉なかつレアなクラスを引き当てたのだ。彼女とシンジとのやりとりで、それについて既に露呈してしまった以上、今更クラス名など知られたところで、岸波白野には痛手にならない。

言わば、岸波白野は一種のダークホースと化している。取り立てて強敵ではないが、レアなサーヴァントを引いたマスター。

それが、他のマスター達の岸波白野への印象だ。例えるなら、そう、動物園のパンダのような感じだろうか？

「私含め、周囲全てを信用しない事ね、ヒヨコマスターさん？　ここに居るのは、自分以外は敵でしかない。味方なんて皆無のトーナメント式バトルロワイヤルなんだから」

ここには居ない少女へと、凜は届かぬ言葉を口にする。それは岸波白野という少女へと、お人好しに接してしまう自分への戒めでもあるのかもしれない。

明日、岸波白野に何が待ち受けているのか。現在アリーナにて絶賛エネミー討伐中の彼女に、それを知る由もなかった。

## 満ちる殺意／毒

朝。  
アリーナでの鍛練を終え、特に何も変わった事なく迎えた明る

いつものようにマイルームを出て、惰性で教室に向かおうとしていた私は、突如として何か寒気のようなものに襲われる。

何だろう、この感覚は。例えるなら、そう、蛙が蛇に睨まれた時のような、言い知れぬ、底の知れない恐怖——死への恐怖。

漠然と、私の本能が訴えかけてくる。このままここに止まるな。動かなければここで死ぬ、と。

「——ッ!!」

寒気は気のせいなどではなく、確信へ。

死の恐怖は錯覚から絶対の認識へと移行した。否応なくこの身に降り注ぐ、誰かの明確なる殺気。それは私を殺そうという、剥き出しの殺意に他ならない。

間違いない。サーヴァントに狙われている。

『チィッ!! まさか朝っぱらから仕掛けてくるとか!? 走りなさい、マスター!! 死ぬわよ!!』

いつにもまして焦ったように怒鳴りつけるアヴェンジャーの声に、私は震えて止まっていた足のようにやく力が入る。

彼女の言う通りだ。これだけの濃厚な殺気を放っているなら、校舎内だろうと関係なく襲ってきたとしてもおかしくはない。

私は脇目もふらずに走り出す。突然の私の奇行に周囲の視線が何事かと集まってくるが、気にしてなどいられない。

彼らにこの殺気を気付いた素振りはない。この重圧は、私だけに向けられたものだ。故に、無関係な者には感じようがないのだろう。

「でも、どいかに……!!」

とりあえず走ったは良いが、階段を下りる最中でどこに逃げるかという迷いが生じる。闇雲に逃げるだけでは、敵の思うツボのように私

が動く結果になり得ない。

『ひとまずアリーナにまで逃げるわよ！ あそこでなら、こちらも敵を迎え撃つ備えが出来るから』

校舎で戦うより、少しの制限が付けられるアリーナで戦った方がマシか。それに、今は逃げるだけで手一杯。態勢を整える意味でも、アリーナに逃げ込んだ方が良いか。

「分かった！ 一気に駆け抜けるよ!!」

そうと決まっただけからは行動が早い。うやむやな状態で走るより、目的地が分かっているだけ足にも迷いが無いからだ。

廊下を走りながら、アヴェンジャーも私に併走する形で現界し、背後を確認しつつ追いかけてくる。

どうにか扉までたどり着くと、無我夢中でアリーナへと転移した。アヴェンジャーも追従するように共に転移され、昨日来てからまだ時間も経たないうちに、私達はアリーナへと足を踏み入れていた。

「ここまで、来れば——」

あるいは諦めてくれたか？

そんな淡い期待も、簡単に打ち碎かれる。

「まだ油断しないように。殺気は未だにこちらに向けられています」

……やっぱり。アリーナに入っただけは、ずっと続いていた不快感も途切れたが、それも一瞬の事。

すぐに胃を締め付けてくるような威圧的殺意が、私へと襲い来る。

「まだ走れますね？ とにかく、先に進みましょう。止まれば敵の格好の的よ」

そうだ、まだ脅威は去ってなどいない。立ち止まれば死ぬというこの予知にも似た感覚——まだ止まれない。

「……それにしてもこの感じ、あの狩人め。まさか——」

「アヴェンジャー、行こう!!」

アヴェンジャーが何か思うところがあるようだが、今は走る事が先決だ。あれこれ考えるのはこの窮地を脱した後で構わない。

「そうね。……杞憂であってくれれば良いのだけど」

止まる事なく走り続けて、中央の開けたエリアまで到達した私達だったが、電子の世界であろうと肉体に限界というのは存在する。

ここまで来たところで、私の心臓は警鐘アラートを鳴らし始めた。

肺が、足が、脳が。これ以上走れないと悲鳴を上げる。

——何とか、逃げ切れたか？

「予想通りだな。分かりやすいマスターで助かったぜ」

不意に、私の認識外から声が聞こえた。それに意識を巡らす間もなく、次の瞬間にはヒュン、という風を切る音がアリーナ内へと鳴り響く。

「フツ!!」

刹那、私の前に出たアヴェンジャーは、手にした旗で私に向けて飛来する何かを弾いた。

「やっぱり狙いはマスターだけか。死角から狙うとは徹底しているわね。だけど——!」

その場に入った瞬間を狙った矢は、アヴェンジャーによって防がれた——。

かに思えた。

「…………ツ!?!」

——鈍痛。

よく見れば、制服の袖を裂いて、微かな傷が腕に一条刻まれていた。それを確認するのが早いのか、体中を鈍い、こみ上げるような嘔吐感が支配する。私はたまたまず、その場に座り込んでしまう。耐え難い苦痛、吐き気は私の体から自由と思考能力をも奪っていく。

アヴェンジャーは確かに敵の奇襲に対応してくれた。しかし……ただ逃げているだけの自分には、隠されたもう一本の矢は見えなかったのだ。

「クソが、まさか二つ矢とは……!!? しかも毒まで塗っているとは——。あの狡賢い狩人が……!!」

アヴェンジャーが怒りを露わに、矢の飛んできた方向へと憤怒の視線を向けている。

私は矢尻の毒に身体を蝕まれながら、絶たれそうになる意識を振り絞る。

これほどの正確な射撃をされ、それを可能とする腕——予想は確信へと変わる。敵はアーチャーに間違いない。

この情報を生かすためにも、生き延びなければ意味がない。毒が回りにきる前に、安全地帯がくえんへと帰還しなければ——。

「ぐっ……」

こみ上げる吐き気をどうにか堪え、無理やり震える足を奮い立たせ、私は真つ直ぐにでなくとも立ち上がる。

リターンクリスタルによる転移は見込めない。指先が異常に震えて、端末の操作などままならない。

それなら、まだ死に物狂いで走った方がマシというものだ。

「マスター……行きましょう。貴方は何も考えず、ただ走りなさい。今度は二つ矢だろうと私が守ってみせましょう」

二つ矢を防ぎきれなかった負い目だろうか、アヴェンジャーは苦虫を噛み潰したような顔で、旗から大鎌へと持ち替える。その刀身に邪悪なる復讐の炎をたぎらせて。

出来れば戦う時までには隠したかったが、今は逃げるためにも、出し惜しみなんてしてられない。

「うん、行こう。アヴェンジャー……」

ふらつきながらも、走り出す。エネミーはアヴェンジャーが炎の壁を生み出してくれるおかげで、何も気にする必要なく無視出来た。

どこから狙っているのか分からないアーチャーが怖いが、既にアヴェンジャーの警戒心は最大限までに高められている。下手に追撃を仕掛けるのは、向こうからしても難しいだろう。

「はあっ……はあっ……!!」

動悸がこれまでになく激しい。息をするだけで肺が灼けるように

痛む。足は感覚すらなく鉛のような重さだけを感じる。

全身を支配する鈍痛と脱力感が、意識を手放せと命じてくるようだ。そうすれば、楽になれると。

私の脳に甘言がごとく囁いてくる。だけど。

それを許容するのだけはダメだ。それを受け入れてしまえば、私は死ぬ。ここで私の物語は、アヴェンジャーとの二人三脚は終幕となってしまう。

「それだけは、嫌だ——!!!」

だから、走る。

必死に、訳も分からず夢中で、ひたすらに走る。

生きるために。生きて帰るために。生き汚くであろうとも、私ともがいてみせよう。

「アンタ、そこらのお嬢さんにしては、なかなかしぶといな……」

アーチャーのものと思しき声が、嫌に頭へと響いてくる。与えた毒で少しは余裕があるのか、殺気はあれど攻撃の意思はこれ以上は感じられない。

「黙れ、アーチャー!! 撃つなら撃ちなさい? 今度こそ返り討ちにしてやる!!」

アーチャーの皮肉に、アヴェンジャーが目を見開き、犬歯を剥き出しにして吼える。彼女は怒りを通り越して憤怒すら抱いていた。今日の前にアーチャーが居れば、迷いなく殺しに行くだろう。

「おお怖い怖い。そうしたいのは山々なんだがね。今のアンタ、隙無さすぎでしょ。無茶な深追いはしない質たちでしてね、俺は」

軽口を叩くだけの余裕。毒にそれだけ自信を持っているのかもしれない。逃げたところで、自分がこれ以上の手を下すまでもなく、私が力尽きると。

だとしても、彼の思い通りになんてさせたくはない。せめて、この

場からすぐにも立ち去り、私が倒れる前に解毒の術を見つけてやろう——。

そうこうしているうちに、気付けば私は帰還用ポータルの前までたどり着いていた。

既に満身創痍で、自分が今何をしているのかすらあやふやだ。

思考はまとまらず、ただ本能でのみ体を動かしている。

「……たどり着きやがった。こいつは想定外だ。あの毒を受けてそこまで動けるのもそうだが、その体で動けるアンタの精神力、こりや脱帽モンだな。まいったまいった」

アーチャーが何を言っているのか、もはや私の耳には正常に聞こえてなどいない。彼が何か言っているという事だけしか認識出来ない。

そろそろ、限界が近いのかもしれない。

「マスター、もう少しです！ そのまま突っ込みなさい——!!」

アヴェンジャーも何か言っている。だけど理解出来ない。私はただ、何も考えずにポータルの中へと足を踏み込んで——。

「……………うあ」

気付いたら、私の顔を覗き込むように見下ろすアヴェンジャーの顔が視界に入る。

辺りを見回し状況を確認すると、どうやらここはマイルームのようだ。

「起きた？ 覚えてないと思うけど、アンタ、校舎に帰ると同時にぶっ倒れたのよ。そのまま十時間はまるまる眠って、もう夕方だし」

そんな……？ 今日一日を襲撃騒動で終えてしまったのか。それは時間の勿体ない事をした。



だけど、今はそれよりも他に気になる事がある。後頭部に柔らかい感触を感じる——もしかして、膝枕？

「……別に。今回だけは特別よ。毒に侵された体で、あそこまでやってみせたのだから、特別に、ご褒美。ホント、よくやったわ……」

珍しいアヴェンジャーの安心したような顔も、未だ感じる虚脱感故か、あまり鮮明に頭に入って来ない。

まだ毒が抜けきっていないのだろうか。というより、即座に気絶したという事は、まだ解毒すらしていないのかも。

「倒れたアンタを急いでマイルームまで運んだから、そんな暇もなかったわよ。まあ、ムーンセルの条約……安全地帯である学園内では、マスターの身体機能は最低限保証されるし。校内に居ればいずれ痛みは消えるでしょうけど、今は大事にしてください。夜が明け次第、早急に治療を受ける事ね」

「そっか……。ありがと、アヴェンジャー……」

今は何かを考えるだけでも億劫なので、軽く礼だけを告げ、私は素直にアヴェンジャーの厚意に甘える事にした。

この状態でなければ、アヴェンジャーの柔らかな太ももの感触を樂しめたのだろうが、この状態でなければ、それもなかった事なのだと思うと、少しのジレンマを感じる。

——ああ、落ち着く。なんだか良い匂いがして、少し苦痛が和らいでいくような気がしてきた。

次第に重くなっていく目蓋。再び遠ざかっていく意識。

微睡む瞳で微かに見えるのは、少し霞んだ視界の中で、復讐の魔女が慈愛に満ちた微笑みを携えているような、そんな錯覚がした。

すう、すう、という小刻みなリズムをとって、マスターは寝息を立て始める。

どうやら眠ってしまったらしい。でも、それも無理もないか。毒を受けてなお、気丈に、体に鞭打ち走り続けたのだ。

体には相応の疲労が蓄積しているのだろう。肉体のみならず、精神の疲れも溜まっているに違いない。

「……」

まだ毒は抜けきっていないだろうが、それでもかなり落ち着いた方だ。

ここまで担ぎ込んできた時などは、顔色は青いというよりも白く、動悸は激しくて、肩で息をするような状態だったのだし。いわゆる危篤の病人のような様子だった。

自分の失態でマスターに毒を負わせてしまったが、それを責めるでもなく、この子とはかく前だけを見て、あの窮地を駆け抜けた。

その精神力は、サーヴァントであっても恐れ入るといふもの。

「マスター……貴方を見てみると、自分の醜さが際立ってくるように思えてなりません。復讐という妄執に囚われ、己が身すらも焦がす煉獄の炎も、貴方の在り方を前にすれば、ちっぽけな灯火のよう……」

眠っているからこそ、マスターへの我が心情の吐露。起きている間には絶対に言えない。恥ずかしいというのもあるけれど、マスターには絶対的自信に満ちた私だけを見ていてほしいから。

弱気な私を見せて、復讐者などという救えないクラスのサーヴァントと契約してしまった彼女に、余計な心配も不安も与えぬように。

私はかつて知ったのだ。マスターを持つという事の幸福を。憎しみに囚われているだけだった私に、それを補填する以上の暖かいものをくれた人が居た事を。

私は自ら望んでここに居る。自分だけの願いを持つてここに居るが、それに巻き込んでしまったのだ、ならばこそ、マスターを勝たせるのが、せめてもの報い。

私がこの子に返せる、唯一にして至上のお礼なのだから――。

「せめて、今はただ穏やかに眠りなさい……。まだ、戦いは終わっていないのだから」

出来るだけ、優しい手付きを意識して、眠るマスターの頭を撫でる。幼子のように眠るマスターの寝顔に、私は妹が居ればこんな感じなのかと、うつすらとそのような事を思い描きながら、一人この時間を楽

しむのだった。

「仕留め損ねた、か。これはミスった。まさか耐えるとはな」

アーリーナから戻り、既に岸波白野とアヴェンジャーの姿が無い事に、何故か緑衣のアーチャーはとある確信をしていた。

姿がないなら、マスターの死と共に二人が消滅した可能性もあるにはあるが、あのマスターはきつと生き延びている。

あの、少女にしては異常なまでの強靱な精神力。それを目の当たりにしたが故に、彼女が毒くらいで簡単にくたばるとは到底思えないのだ。

「……仕留め損ねたのは痛いねえ、こりや。奇襲も旦那にバレてるだろうし、帰ったら大目玉モンだな。はは、まったく面倒なもんだぜ」  
心底面倒くさそうに、アーチャーは溜め息を吐く。ここで仕留められていれば、また話は変わっただろう。

どちらにしる勝ちも勝ち。次からの嚴重注意として処理されていたはずだ。

だが、彼は読み違えた。岸波白野という少女が、どのようなマスターであるのかを。

記憶喪失のままに聖杯戦争に臨む。それはつまり、予選の学生気分がそのまま維持されているという事に他ならない。

だからこそ、アーチャーは読み違えたのだ。単なる学生（という設定を引きずっているの）に、あれほどのタフさがあるなどという、想定外にも程がある現実を。

「いやはや、本当に学生かよって疑いたくなるぜ、あれは」

何なら、根性という一点においてのみ見れば、自身のマスターであ

るダン・ブラックモアとも良い勝負をするのではないか。

英国女王の騎士に匹敵する忍耐力を持った女子高生……それがどれほど異常な存在であるか、深く考えるまでもなく、論理に基づいてとある推測へと思い至るだろう。

彼女は間違いなく、強敵になり得るマスターである、と。

実力が伴っていないというハンデがあるが、もし魔術師としての才能が開花すれば、あの少女はこの聖杯戦争でもトップクラスのマスターに進化を果たすだろう。

偶然か、運が良かったのかは分からないが、魔術に関して素人でありながら一回戦を、それも強敵を突破した点は、もはや見過ごせないレベル。

聖杯戦争において偶然など本来存在しない。實力あってこそ、この月の聖杯戦争は勝ち進めるシステムになっている。

何せ、決戦以外でも容赦なく参加者をトリガーやエネミーといった障害で篩ふるいにかけるのだ。

それをかいくぐり、決戦にまで行ってようやく真の篩ふるいが待っている。確実にマスターを現在の半数へと減らす、絶対の門。

一人しか通る事の出来ないその門を、二回戦に進んだ全てのマスターは通過した。

その意味を、改めてよく考えてみるべきだ。そして、岸波白野というマスターの存在を。

「……ま、気になるのはあのお嬢さんだけじゃないんだが。妙な既視感があるのは、俺の気のせいなのかねえ……？」

果たして、それは誰の事を指しているのか。誰の顔を思い浮かべて、彼は胸騒ぎを覚えているのか。

それを、彼は近い将来知る事になる。

でも今は、そうとも知らずに帰路につく。彼の主が何を思い、彼を待ち構えているのか。それ自体は想像に難くないと知りながら、彼は叱責を受けると分かっているながらも、その場を後にしたのだった。

「ああ……岸波白野の苦しむ姿が愛おしい。あなたに感謝を、森の狩人。岸波白野の苦痛が、私をより強くするのだから」

毒により満ちるのは、闇に潜みし暗黒の殺意もまた――。

## 騎士の矜持

ぐっすり眠った次の日の朝。

なんだか昨日とあまり変わらない一日の始まり方だが、昨日との違いは、未だ全身に感じる倦怠感。

毒による痛みはもうほとんど無くなっていたが、気だるさを引きずったままにするのは良くはない。なので、私は朝一番で保健室へと治療の為に訪れていた。

昨日、アヴェンジャーも治療してもらえと言っていたし、それに素直に従っておくべきだと判断したからだ。

「これはイチイの毒ですね。自然界から抽出された毒にしては、ずいぶん凶悪なものですけど」

桜に軽く触診してもらい、診断結果を告げられる。しかし、触っただけで毒の種別が分かるとは、これ如何に？

「えっと、健康管理AI権限で岸波さんのパラメータを見させてもらったからです。本当は触る必要はないんですが、コンソールからアクセスするより、直接触れて岸波さんのパラメータに接続した方がすぐだったので……。もしかして……嫌、でしたか？」

まさか。桜みたいにかわいい女の子から触ってもらえるなんて、私の業界ではご褒美です。

「業界……？ ああ、私の権限で、どこまで治療出来るか分かりませんが、出来る限りやってみます」

桜に冗談は通らなかつたらしい。というか、多分理解すらされていない。

……それ以前に、業界って何だ業界って。別に私は『フヒヒ』とか『デュフフ』とかいった風に笑ったりする業界の人間ではない。

決して、そのような業界の人間ではない。(大事な事なので二回言った)

「でもダメですよ、一つしかない大事な体なんですから。次は気を付けて下さいね？」

本当に心配そうに、私の事を案じてくれている桜。嬉しく思う反面、『何故?』という疑問も生じる。

何故、私はこんなに嬉しく思っているのだろうか。桜との関わりは別に深い訳でもないのに。

たまにお茶したり、おしゃべりしに来るくらいの間柄の筈なのに。何故か、大切なものであるような気がしてならない。

それから、保健室のベッドに身体を預けつつ、桜から解毒の施術を受ける。

彼女の治療を受けられたのは、決戦日以外の私闘が禁じられているから、だろうか。

そんな事をぼんやり考えていると、保健室の扉が開かれ、予想外の来客を告げた。

「え、あの……!?!」

桜の制止も聞かず、その人物はベッドで休む私の元までやってくる。

そう——ダン・ブラックモアが。

「……」

予想外の——敵マスターの来訪に、身構えようとするが、体に力が入らない。

だが、彼の取った行動は、こちらの予想を大きく裏切った。

「イチイの矢の元になった宝具を破却した。宝具が消滅した時点で、イチイの毒は消え去るだろう。身勝手な言い分だが、これを謝罪とさせてほしい」

あろう事か、彼はベッドの傍らに立つと、宝具を封じたと言っただ。

そして、彼の行動はそれだけには止まらとどなかった。後ろに従えていた緑衣のアーチャーへと振り返ると、彼は更に想定外の言葉を口にす

る。「そして失望したぞ、アーチャー。許可なく校内で仕掛けたばかりか、毒矢まで用いるとはな。この戦場は公正なルールが敷かれている。

それを破る事は、人としての誇りを貶める事だ。これは国と国の戦いではない。人と人の戦いだ。畜生に落ちる必要は、もうないのだ」

静かな独白。

だが、確固たる信念に基づいた、覆らぬ何かを感じる、老騎士の双眸。

「アーチャーよ。汝がマスター、ダン・ブラックモアが令呪をもって命ずる。学園サイドでの、敵マスターへの祈りの弓イ！バウによる攻撃を、永久に禁ずる」

そう。まさしく想定外。彼は自ら、サーヴァントの宝具を限定的ではあるが封じたのである。

それに驚きを隠せないのは、私だけではない。その場に居た者すべてが、衝撃を禁じ得なかった。

「はあ!? ダンナ、正気かよ……! 負けられない戦いじゃなかったのか!」

アーチャーが血相を変えて口答えするが、もはや令呪による命令は遂行された後。ダンの右手の甲から、手袋越しに赤い輝きが放たれ、そして消えていった。

「無論だ。わしは自身に懸けて負けられぬし、当然のように勝つ。その覚悟だ。だが——アーチャーよ。貴君にまでそれを強制するつもりはない。わしの戦いと、お前の戦いは別のものだ。何をしても勝て、とは誰も言わん。わしにとって負けられぬ戦いでも、貴君にとってはそうではないのだからな」

「……」

緑衣のアーチャーは、マスターの言葉に納得の行かない顔をして、しかし反論するでもなく黙って姿を消した。

何を言ったところで、無意味だと理解したのだろう。

——令呪。

本戦参加者に与えられた、三つの絶対命令行使権利。

信じ難い事に、目の前の老騎士は、それを使ったのだ。自らのサーヴァントに、『正々堂々と戦え』と。

「こちらの与りあずか知らぬ事とは言え、サーヴァントが無礼な真似をした。



君とは決戦場で、正面から雌雄を決するつもりだ。どうか、先程の事は許してほしい」

そう言うと、ダンは踵を返し、立ち去っていった。

「……………」

瞬く間に、色んな事が過ぎ去っていった気分だ。昨日の一件もそうだが、まさか敵が自らを抑する行為や、宝具の名前すらも明かすとは。「……………お見逸れしたわ」

事のあらましを見ていたのであろう、アヴェンジャーは現界するなり、たった今の老騎士の所行を、素直に感心していた。

「なるほど、確かに騎士を名乗るだけはありません。敵マスターへの不意打ちを詫び、潔白を表すために令呪を使用し、かつ宝具名まで漏らすとは。高潔な騎士様が好みそうなやり方ではあるけれど、まさか現代でもそれを平然と行える人間がまだ残っているなんてね」

まさに感服したとばかりに、アヴェンジャーは老騎士への評価を改めたようだ——、

「だけど、なおさら虫唾が走る。清廉潔白？ 高潔なる騎士道？

ハッ！ それは何？ 下らないっつらないわ！ 綺麗事で済む程、世の中甘く出来ちゃいないのよ。いいわ、正々堂々と正面から戦う事を望むなら、その気高き思想を完膚無きまでに叩き潰してやろうじゃない……………」

——否。評価を改めたというのは正しくない。

彼の清々しいまでの行為は、アヴェンジャーの琴線に触れてしまったらしい。

考えてみれば、自らを復讐の魔女と自称する彼女が、世間一般で正しいと思われる行いを良しとする筈もない。

邪悪で獰猛なその笑顔が、何よりの証明だ。

「さあ、今度会ったら、今の命令がどれだけ愚かであったのかを思い知らせてやりましょうか、マスター？」

いや、私まで巻き込まないでほしいんだけど。

けれども、アヴェンジャーは聞く耳を持たず、私の意見を聞く前にさっさと姿を消してしまった。

いつも思うが、扱いに難しいサーヴァントだな、まったく……。

「……あ、あのう」

と、桜が小さく声を掛けてきた。そういえばここは保健室だったという事を思い出し、今のダンやアヴェンジャーとのやりとりを見ていたであろう桜の、居心地の悪さは想像に難くない。

「あ……ごめん、桜。ここは桜のテリトリーなのに、なんだか迷惑掛けちゃったみたいで」

「い、いえ。私の事は気になさらないで下さい。それよりですね……岸波さんの体を蝕んでいた毒なんですが」

あ。ダンが言っていた事が本当なら——まあ十中八九、真実なのだろうが——毒はキレイさっぱり消え去ったはず。

なら、もう保健室に居る必要もないという事か。

「もう大丈夫って事でいいんだよね？」

「はい。そういう事になりますね。岸波さんのステータスからも、毒による異常は見当たらなくなっていますから。でも無理は禁物ですよ？ 毒による身体への潜在的疲労までは消えてなくなった訳ではありませんから」

桜が注意申告を掲げてくる。それは健康管理AIとしての言葉か、それとも後輩としての心遣いか。

どちらにしても、この忠告はありがたく受け取っておくべきだろう。桜の言う通り、なんとなくだが、体のダルさはまだ少し残っている気もするし。

ベッドから降り、軽く体を伸ばして、異常は残っていないか動作確認をする。

……、うん。問題なく動く。アリーナ探索くらいなら大丈夫だろう。

「そういうえば、この前言っていた問題ってどうなったの？」

ふと、体に問題が無いかを確認して、問題というワードからその事を思い出す。たしか——残存するマスター数がおかしいという話だったような……？

いきなり全く違う方向の質問が飛んできた事に、少し焦ったような

桜だったが、すぐに平静を取り繕うと、歯切れ悪くぽつぽつと語り始める。

「それが……結局解決せず、そのまま様子見という方向になったんです。セラフも特に私達への通告もしてきませんし、現状は全会一致で問題無しと判断されました。何か兆しが見られた時には、問題解決に当たるという方針ですね」

全会一致、か。多分、それもその場に居た者すべてが渋々での合意となったのだろう。

手を尽くしても、結局何も解決しないどころか、原因すら何一つ分からなかったのだ。運営NPC達の悔しがる姿が容易に想像出来る。

今度、一成に会ったら何か奢ってやろうかな……。

その後、保健室を後にした私は、憂いもなく堂々と校内を歩いてマールームへと戻る。ダンがあれだけ厳しく言った上に、令呪まで用いてアーチャーを叱責したのだ。まさかまた校内で仕掛けては来ないだろう。

奇襲を恐れないで良いというのが、これほどに嬉しく思える日が来ようとは。何事も経験とはよく言うが、平穩のありがたみを改めて思い知らされたとも言える。

廊下を歩いている最中、もはや聞き慣れた電子音が鳴る。携帯端末を取り出し、確認してみると、

『……セカンダリトリガー第二暗号鍵を生成。第二層にて取得されたし』

二つ目の鍵が生成されたらしい。

今日で二回戦が始まってから四日目。決戦まであまり時間も無い。早めに入手しなくては。

余裕があるうちにアリーナへ行こう。

朝食後、アリーナに行く前に少し調べ物をしに図書室へと向かう。

というのも、保健室で知ったアーチャーの宝具、『祈りの弓』<sup>イール・バウ</sup>について何か新たな情報を得ようと思いついたからだ。

「んー……、あつた!」

イチイの毒から遡り、祈りの弓がケルト系、北欧神話に関連するものだと発見した私は、祈りの弓そのものについて記された書物を見つけて出す。

「えつと……『イチイはケルト、北欧における聖なる樹木の一種であり、かの森のイチイから弓を作るという行為は、この森と一体である』という儀式を意味する。また、イチイは冥界に通じる樹とされる。』……森と一体になる?」

つまり、ドルイドのような感じだろうか?

しかし、如何せん英霊の真名に直接繋がるような記載は流石に無いようで、説明もこれだけとなっている。

マトリクスにも新たに追記されているはずなので、本を直すと、他の利用者の邪魔にならないように本棚から離れ、近くの席に座って端末を操作する。

「アーチャーの項目はつと……これだ。『祈りの弓：このサーヴァントが拠点とした森にある、イチイの木から作った弓。標的が腹に溜め込んでいる不浄を瞬間的に増幅・流出させる力を持つ。対象が毒を帯びているなら、その毒を火薬のように爆発させるのである』……なにそれ怖い」

要はアレだ。毒を帯びたまま真名解放された宝具の矢を受けてしまえば、体の内側から一気に毒が爆発して弾ける……と。

うわ、想像しただけでもグロい。どこぞのほにやらら神拳のようなイメージだろうか。

『イチイは冥界に通じる樹とされる。このサーヴァントはその特性を知ってか、末期の時には「自分をこの矢が落ちた場所に埋葬して欲しい」と言って矢を放った。矢は果たしてイチイの木の根元に刺さり、彼は望み通り、親愛なるパートナーだった大樹の元に埋葬されたという』……。なんとというか、ああ見えてロマンティックなところもあるのかな?」

奇襲、待ち伏せ、毒矢——これらだけ見れば、ロマンスの欠片も感じられない彼だが、こういった逸話からはまた違った印象を受ける。

長きに渡り受け継がれてきた伝承によって、本来の彼の人物像との違いに、どこか差異が生じているのかもしれない。

「大樹がパートナー、か……。アーチャーだし、『森の狩人』ってところかな？ うん、なんだかそれっぽい感じがする」

「くんくんくん……。あ、私の柿！ あなたの所にあつたのね。ありがとう——」

調べ物を終え、一階へと来るなり職員室から藤村先生が私に向かって突進してきた。

犬ですか、あなたは。

「どうぞ。……。あの、一箱も紛失するのは流石に如何なものかと」

「ふふん♪ え？ なんて？」

「……。いいえ。何でもありません。良かったですね、見つかつて」

あまり深く追求するのは止めておこう。話が長引きそうな予感がしたし。

「ホント、助かったわ。これでおすそ分けが出来るもの。あ、そうだ——」

タイガーが期待に満ちた目で、何か思い付いたような顔で私を見てくる。嫌な予感しかしない……。

「岸波さん、生徒からお願ひされた事があるんだけど、代わりに聞いてくれないかしら？」

職務放棄ダメ、絶対。

とまあ、言っではみたが、どうせまた何か探してきて的なお願ひだろうし、引き受けておこう。

「まあ、いいですよ」

「助かるわー。あのね、その子、女の子なんだけど、アリーナでメガネを落とすしちゃったらしいの」

「ぜひ喜んで引き受けます!!」

——はっ。思わず条件反射で即答していたようだ。タイガーも私の即答に、目を丸くして固まっているし。

でも、仕方ないじゃない？ だってメガネに罪は無いんだもの……。

「き、岸波さんが乗り気でせ、先生助かるわー……。えっとね、それなんだけど、第二層の海の底に落としたらしいんだけど、そういう物って、たまに他の人のアリーナに紛れ込んでる事があるのよね。だから、あなたのアリーナも、探してみてくれないかしら」

「死に物狂いで見つけ出してみせます」

「わー、すごい血眼になった岸波さんが見られそー……。第二層のアリーナに落としたものだから、二回戦の間に探してあげて。でも、別に無理しなくてもいいんだからね……。？ じゃあ、お願いね」

そう言つて、タイガーは柿一箱を抱えて職員室へと引き返して行った。

流石はタイガー。あれを軽々と運搬するとは、並みの人間とは馬力が違うな。

『アンタも大概だけどね。そのアンタが人外認定した本人から、今のやりとりを心配されるくらい引かれてるって自覚はあつて？』

……べつにおかしなことなんて、しやべつてないよ？

『自覚が無い辺り、アンタつてば相当ね……。』

そんな事より、早速新しい階層に赴こう。トリガーも早々に回収しておきたいところだし。

一回戦が沈没船をテーマにした海の底だったなら、こちらは海に埋没した古代都市——アトランティス、だろうか。

生命の死を連想させた一の月と比べて、二の月は滅びゆく文明を思わせるロケーションだ。どれだけ繁栄しようと、どんなに栄華を極めようと、滅びぬものは存在しない。

人類史に名を残す、かつての数多の国々がそうであったように、永劫に続くものなど存在しないのだ——。

「……永遠、永劫、悠久の刻ときと呼ばれるそれらは、所詮はそれを夢見た人々が勝手にそうあれと望んだ、そうありたいと願った——自分勝手な妄想の顕あらわれなのでしょう」

まるで見てきたかのように語るアヴェンジャーに、私は自然と、肯定の意味で頷きを返していた。

全てのものに等しく終わりは訪れる。

それは死という形で。または滅亡という形で。もしくは忘却という形で。

有機物、無機物、事象、記録、そして記憶……。ありとあらゆる事は、何かしらの『終末』をその内に抱いているのだ。

人の営みに限らず、自然界も例外ではない。この世界に存在するといっただけで、やがて無条件にやってくる何かしらの終わり。

この海は、その一つの可能性を示しているだけに過ぎない。

「さあ、行くわよ。それと、あの老騎士はああ言っていました、アリーナでの戦闘が起こらないとは限りません。敵サーヴァントが宝具を封じられたのは校内でだけという事を忘れないように」

そうだった。彼は不当な場での宝具の使用を禁じただけで、アリーナでの戦闘は十分起こりうる。

注意だけは心掛けておくようにしよう。

今回のアリーナは、前にも増して迷路度が強化されているらしく、分岐点がかなり多い上に、一つ一つの通路が長く設計されているように、探索も一苦労しそうだ。

「遠くに見えているのは、コロッセオ……。かしらね。ローマの皇帝様

なんか喜びそうな光景だわ」

そのローマの皇帝というのも、アヴェンジャーの英霊友達なのだろうか。確かに、ローマ皇帝って拳闘士とか好きそうなイメージではあるが。

「それにしても、これはまた入り組んだ地形のアーリーナね。貴方の嫌いな坂道もそれなりには多いようすし？」

その通り。嫌がらせかと思いたくなる程に、今回も坂道があらゆる所で存在していた。

まあ、第一層に比べれば、傾斜の強さは可愛い方なのだが。

遠くに見えていたコロッセオだが、そこまでへと至る通路はまるで見当たらず、どうやらあそこへと通じる道は存在していないらしい。

前回の決戦の舞台が沈没船の甲板だった事から、もしかするとあのコロッセオが今回の決戦の舞台なのかもしれない。

「……疲れてきたね」

こうもマップ範囲の広いアーリーナだと、病み上がりの身には辛くなってくるのも無理はない。

しかし、二回戦でこの広さなら、回が進むことにもっと過酷になっていくのだろう事が容易に推測出来る。

これくらいで根を上げてなどいられないか。

「…ふむ。そうね、無理は禁物とあの保健室のAIにも言われたのだし、少し休憩を挟みながら探索を進めましょうか」

スパルタ趣向の彼女にしては珍しいと思いつつも、私はありがたいと、近くの遺跡の出っ張りに腰掛ける。少しゴツゴツしているが、休む分には支障はない。

「マスター、この際ですから一つ、貴方に言っておきたい事があります」

「なに？」

急に改まってどうしたのか。かなり真面目な話をしようという雰囲気が出て、私も無意識に姿勢を正していた。

「サーヴァントとの戦闘で、これまでのように口頭での指示は今後なるべく控えなさい。エネミーと違って、サーヴァントには考える頭が



あるのよ。バーサーカーならまだしも——いいえ、そうだとしてもマスターが居るわね。まあ、どちらにしても、今のままだとこちらの策や戦術が相手に筒抜けです」

「——あっ」

言われて、慎二やライダーと戦った時の事を思い出す。決戦の時も、アリーナで戦闘になった時も、私の指示はアヴェンジャーのみならず、彼らにも聞こえていた。

何か対策をとは思っていたが、最近は何事もない程に色んな事が起きていたため、すっかり忘れてしまっていた。

だが……、むう。いざ考えるとなると、これといって良い案が浮かばないな。

アヴェンジャーには何かないのだろうか？

「私？ 私は……そうね、かつて地上で行われていた聖杯戦争では、マスターとサーヴァントが脳内で直接会話する念話という手法もあったようだけど。でも、私もやり方までは知らないのよね」

念話……つまりはテレパシー、テレパスと呼ばれる超能力の一種か。

「厳密に言えば、念話は魔術であって、超能力と呼ぶべきは体に特殊な力を宿している事例でしょうか。例えば有名所と言えば『魔眼』とかかしらね」

魔眼。ふおお……!!

なにそれ、何というか、響きが格好いいのだけど!?

「そのままよ。その瞳に力を宿したもの。見たモノの死が線として捉えられる『直死の魔眼』や、対象を歪める『歪曲の魔眼』。見た者を魅了する『魅了の魔眼』もあれば、『天眼』なんていう一風変わったものもあるわね」

ほうほう。魔眼と言っても、一括りにするには種類が多く存在するのか……。

「あ。じゃあ、メドゥーサの眼もそうなのかな？ ほら、石化するってやつ」

「ああ、ゴルゴーンの伝説か。そうね、確か……キュベレイ、だったか

しら。魔眼の中でも宝石クラスの最上位の方に入る部類よ。魔眼にもランクが有って、ノウブルカラー、黄金、宝石、そして最高位が虹。言ってしまうえば、宝石より上は神話や伝説級のレアな代物ね」

聞いているだけなら眉睡な話だが、実際に存在するからこそ、そのような格付けも存在しているのだろう。

今後、それを持つ英霊と戦わないとも知れないし、頭の片隅にでも置いておくか。

「魔眼の話はここまで。それで、どうするのかしらマスター？ 言葉で伝えるにしても、何か暗号のようなものでなければお話にもならないわよ」

「うーん……。分かってはいるんだけど、何も良い案が無くて」  
帰ってから、凜にでも聞いてみるか？

また説教されそうな気はするが、凜なら私のような愚行は取っていないだろうし。

「ともかく、帰ってからまた考えるよ。さ、休憩終わり！ そろそろ行こう、アヴェンジャー」

少しではあったが、今のでかなり足を休められた。探索再開だ。

まだトリガーも、そしてメガネも見つけられていないのだ。休んではばかりもいられまい。

「あまり後回しにならないようになさいね。……あと、その妙なメガネ推しは辞めて。無性にイラツとくるから」

なぜ……!?

## 星を詠む者

果たして、あんな話題に触れたからだろうか。私達はそこから何度か迷いながらも、とあるオレンジ色のアイテムフォルダを発見した。「……見つけ出したよ、メガネを!!」

中から現れたものを、私は頭上に掲げる。

それは何の変哲もない、至ってシンプルかつ素朴な黒縁のメガネ。だが、話はここからだった。

「な、ん……だと……!?!」

大切な預かり物を壊してしまわないようにと、端末へと収納した際、ふとアイテム欄に目を通せば、そこには見覚えのない名前があった。

魔眼殺しの眼鏡。

「魔眼を、殺す……?」

なんとも物騒なネーミングに、私はこのメガネの持ち主に興味が湧くと同時、このメガネがどのような用途で使用されるのかが気になった。

メガネとは、掛けるもの。他者へではなく、己へと掛けるものだ。それなのに、魔眼を殺すとはどういう事だろう。掛けさせて殺すのか、それとも何か他に意図があるのか。

そんな事をグルグルと頭の中で考えながら、端末とにらめっこしていた私の隣にずっとアヴェンジャーが顔を覗かせる。

「魔眼殺し……、この眼鏡の持ち主は魔眼持ちなのかもね。まさか話題に出た途端にそれを持つかもしれない人間がマスター候補の中に居るかもだなんて。魔眼の種類にもよるけど、そのマスターとはなるべく当たりたくないわね」

「アヴェンジャーは魔眼殺しの眼鏡の使い方を知ってるの?」

眼鏡というくらいだ、当然掛けて使うものなのだろうが、それが自

分に対してなのか、それとも他者に対してなのかが分からない。

掛けるという観点からして、おそらく自分に効果があるとは思うのだが……ならば自分の魔眼を殺すとは一体どういう意味があるのだろうか？

「一応は知ってます。殺すと言っても、魔眼の能力を制限するだけのだけ」

制限するだけ？

だが、何故制限する必要がある？

「制限が必要な理由はシンプルです。例えば、見たもの全てに効果を及ぼす魔眼を持っているとして、そんな眼で日常を送れるかしら、マスター？」

「……、そうか。制御出来ないから、その眼鏡で魔眼の効力を抑えてるんだね」

常時発動しているタイプで、それこそメドゥーサのような石化の魔眼だと、意図せずとも視界に入れただけで対象を石化させてしまう。

それも、魔眼の主の意思とは関係なく、無差別に。

制御出来るかどうかの可能性を考えるだけ無意味だろう。だって、制御が困難だからこそ、そんな魔具を用いている訳なのだし。

これで納得した。それなら、魔眼殺しの眼鏡も必要というもの。

便利だとは思ったが、魔眼とは私が考えていたよりかなり厄介な代物らしい。

それから程なくして、メガネを発見した場所から程近くで二つ目のトリガーが入っているであろう緑色のアイテムフォルダを見つけた私達。

だけど、それを手に入れるためには一つの問題があった。

「目の前にあるのに……」

手を出そうにも出す事が出来ない。それもそのはず。

何故なら、アイテムフォルダのある小部屋への入り口が、もはやお

馴染みと化してきているフェンスゲートによって閉ざされていたからだ。

「面倒ね。ここに来るまでにそれを開けるスイッチらしきものは見当たらなかったし、まだ行っていない場所にあるのでしよう」

——っ。

ま、まさか……また結構な距離を歩くの？

「そうなるわね。諦めなさい、マスター。せめて近くに設置されている事を祈りなさいな？」

そんな殺生な!?

ここに来るまでも、一層の比にならないレベルのかなりの広さだったというのに、この上まだ歩き回らなければならないというのか。

セラフめ……こんな面倒なマップを用意して、私を苛めるとは度し難い小悪党だな。度し難い上に許し難いとは正にこの事だ。

「ほら、行くわよ。幸いにも出て来るエネミーは戦った事のある雑魚ばかりだし、敵サーヴァントにでも遭遇しない限りは危険も無いでしょう。ま、あるとするなら問題は——」

ジツと私の足に視線を送ってくるアヴェンジャー。

……言いたい事は、その残念なものでも見るかのような視線で大方察した。だから、どうか言わないで。

自分のスタミナ不足が情けなくなってくるから……。

うなだれながらも、私は顔を上げて歩き出す。分岐点はそれなりに距離が離れていたはずだ。とりあえずそこまで向かうとしよう。

さて、あのフェンスゲートに道を阻まれてから歩く事幾ばく。もう十数分は経っただろうか。

というよりも、今回初めてこのアリーナに足を踏み入れてから、既に1時間は経過している。端末で確認したので間違いない。

一回戦の時では、さっきのあのようないやらしい仕掛けの設置のさ

れ方などはなかったので、今回がどれだけ時間をより要するのを強い  
られているかがよく分かる。

しかも、それだけではない。時間的観念のみならず、エネミーとの  
幾度かの戦闘に、広大アリーナを歩き回って、私の体力も限界が近付  
いてきていた。

疲れが歩行にも出始めた頃、ようやく私はとある通路の果てにてス  
イツチを見つけた。

マップを見てみれば、アリーナの全域が表示されており、この広さ  
をよく踏破したものだと自分を褒めたくなる。

ちなみに、スイッチのある位置的に、今居るここはアリーナの最東  
端。トリガーが有るであろう小部屋が、アリーナ中心より少しだけ北  
寄りである事を考えれば、やはりこのスイッチの配置は何というか卑  
劣である。

まあ、先にこちらから探索を始めていればその限りではないかもし  
れないが、それでもこれは酷いと思う。

体力の無い人だつて居るのだという事を、セラフにはもつと留意し  
て欲しい。

もうね、足が辛い。足が棒のようだとは、こういうのを言うんだ  
ねっていう経験談が出来てしまったじゃないか。

「良かったわね。貴重な経験が出来て。それでは、トリガーを取りに  
戻りましょうか？」

その言葉に、ハツと私は振り返る。振り返った先では、ニマニマと  
意地の悪い笑顔を浮かべるアヴェンジャーが、親指でクイツ、クイツ  
と元来た道を指差していた。

「……………」

「い？」

「いやあああああああああああああ  
!!!!!!」

我が絶望の叫びも虚しく、結局来た道を引き返す私達。半ばアヴェンジャーに引きずられながらという、端から見ればかなりみっともない様子だろう。

再び、エネミーとの戦闘も交えて、戻ってきた時には既に2、30分の時が過ぎていた。

「……もう、歩きたく、ない」

昨日アーチャーから逃げ回る為に走った時並みの疲労感。あつちは短期的に蓄積した疲労なら、こっちは長期的に蓄積した疲労である。

たとえるなら、前者は常時全力で短距離走（200m程）をやった時で、後者は体力テストでよくやるシャトルランを100回こなした時——くらい？

いや、シャトルランを100回も走り切った事などないのだが、なんとなくそんな気がしたのだ。

と、色々言ってみたが、要は現実逃避の言い訳である。それだけの事を、私は頑張った、成し遂げたのだという自己正当化だ。

……うん。誰に褒められるでもなく、ただただひたすらに虚しいだけではあるが。

「いつまでも愚痴を言つてないで。ほら、ゲートは開いているようだし、歩くのが嫌というなら、せめてさっさと回収して帰りますよ」

「あふん!？」

言うや、私のお尻にパチンと軽く平手打ちをかましてくるアヴェンジャー。そういう不意打ちは止めてホント。思わず変な声が出たじゃない。

「はあ……トリガーを取ったら、リターンクリスタルで帰るからね」

もうこれ以上は一歩たりとて歩きたくはない。こうなったらアヴェンジャーがなんと文句を言おうとも、意地でも歩いては帰らないぞ。

「はいはい。分かったから。早く行きなさいよ」

呆れながら私を前へと押し出すアヴェンジャー。

——だから！ いちいちお尻を押さないで!! あと、若干鷲掴みされてるんだけど!? あ、こら、揉むのも禁止!!

これを手に入れるまで紆余曲折とあったが、何はともあれ『トリガーコードデルタ』——二回戦における二つ目の暗号鍵<sup>トリガー</sup>を取得した。ひとまずは安心といったところか。これで、決戦から締め出される心配は無くなったのだし。

だが、残る問題はマトリクスについてだ。

アーチャーと言うクラス、彼が持つ宝具の名前——これだけの重要であろう情報を得たというのに、私はまだその正体にまでたどり着けていないのだ。

まだ何か足りない。足りない何か、一体どのようなピースであるのかは分からない。けれど、その欠片は明日、埋まりそうな気がする——。

明日。

あのラニという少女との約束の日。彼女に、手に入れたアーチャーの遺物を見せる事で、何か新たな情報が手に入ると良いのだが……。

そして翌日。

ラニに会う前に、朝のうちに魂の改竄を済ませておこうと教会を訪れると、緑色の服に身を包んだ老人——ダンが居た。

彼も、こちらに気がついたようで、軽く頭を下げて挨拶してくる。

「昨日は済まなかったな。あの傷が命に関わらなかった事は不幸中の幸い、とは思うが」

ダンの改まった謝罪に対し、魂の改竄の為に既に現界していたアヴェンジャーが、面白くなさそうに返事をする。

「不幸中の幸い、ですか。ええ、そうですね。貴方の管理不足であの



野蛮なサーヴァントは我がマスターに、文字通り毒牙を剥き出しにしてきたのですから、貴方の騎士道精神からすれば確かに不幸中の幸いでしょうね?」

誠心誠意の謝罪に対し、皮肉十倍増しにして返すあたり、さすがは復讐の魔女と言うべきか。

いや、別に誉めてない。むしろ彼ののような高潔な人物を前に、我がサーヴァントながらアヴェンジャーの振る舞いに恥ずかしくなってくる。

「ふむ。これは手痛いな。だが、貴殿の言葉に反論出来るような立場ではない。どのような罵倒も、甘んじて受けよう。それだけの失態を私達は犯してしまったのだからな」

だが、この老騎士はそれすらも大らかに受け止めてみせた。これでは、まるでこちらの方が駄々をこねる子どものようなではないか。

それをアヴェンジャーも感じたのだろう。騎士の反応を見て、ぼつが悪そうにそっぽを向いてしまう。

「……ふん。それにしても、だからと言って自らを律するためだからとは言え、令呪まで使うなんて腑に落ちないわね。一体どういうつもりなのかしら?」

「そうだな。自分でも、どうかしていたと思っていたところだ。三つしかない令呪を、あろう事か敵を利するために使ってしまうとはな」  
令呪。

聖杯戦争の参加者に与えられる、三つの絶対命令権。

それは聖杯の可能範囲ならば、絶対の実行力として行使される。つまりは、万能の例外だ。

「だが、あの時はそれが自然に思えた。この戦いには女王陛下からたつての願い、というコトもあつたが……」

一呼吸置いてから、老騎士は迷いなく、私情を口にする。誰かに仕える騎士としてではなく、ただ一人の戦士として。

「わしにとっては久方ぶりの……いや、初めての個人的な戦いだ。軍務であれば、アーチャーを良しとしただろう。だが、あいにくと今のわしは騎士でな。そう思った時、妻の面影がよぎったのだよ。妻は、

そんなわしを喜ぶかどうかとな」

「へえ……堅物そうに見えて、妻が居たのですか。それも、その言い方からして大切にしているのでしょうか？」

「老人の昔話だがね。今は顔も声も忘れてしまった。面影すら、思い返す事が出来ない。……当然の話だ。軍人として生き、軍規に徹した。そこに己ひととしての人生こうふくなど、立ち入る余地はないのだから」

この老騎士は今、何を思い、何を感じて、敵であるはずの私達と相対しているのだろうか。

忘れたはずの妻の面影が、この戦いでうつすらとでも蘇ってきたのには、一体どんな意味があるのか。

それは私には分からない。きつと、それを理解出来るのは、目の前にいるこの老騎士だけなのだ。

「君も気をつけたまえ。結末は全て、過程の産物に過ぎん。後悔は轍わだちに咲く花のようだ。歩いた軌道に、さまざまと、そのしなびた実を結ばせる。故に、だ。お嬢さん。己に恥じぬ行為だけが、後顧の憂いから自身を解放する鍵なのだよ」

……誤りだったと感じた過程からは、何ものも生み出されない。

誇れる道程の先にこそ、聖杯を掴む道があるという事か――。

「……ハハ、らしくないな。何故だか、つい孫とでも話している気になつてしまっていた。……つまらない話に付き合わせた。老人の独り言と笑うがいい」

そう言うと、老人は再び目をつぶった。

静かに、何かに対して祈りを捧げる彼を邪魔しては悪いだろう。

魂の改竄を速やかに済ませて、静かに立ち去る事としよう。

昼になり、昼食を済ませた私は、ラニを探すためにマイルームから出る。

『マスター、分かっているとは思いますが、今日は五日目です。ラニとか言う娘の指定した日ですが、何か情報が得られるかもしれませぬ。

早速利用してやりましょうか。どうせ向こうもそのつもりなのだし」  
「分かってる。今から探しに行くところ」

さて、探すにしても、彼女が居そうな所と言えば——たいていは廊下の窓際だったり。

探すの自体はさほど難しくはないだろう。でも、どうせなら一発で見つけたい。二階なら階段前まで行けば、居るかどうかはすぐ分かる。

なので一階か三階か。どちらにしても、外せば大いに面倒なのだ。案の定、二階の廊下窓際に彼女の姿はなく、はてどちらに行こうかと、少し思案していると、

「おお、岸波か。どうだ調子は？ 壮健か？」

ちようど三階から降りてきた一成が、私へと気さくに挨拶してきた。

「うん、一昨日くらいに軽く死にかけたけど、今は元気」

「そうか。うむ、割と笑えん返答だが、元気そうで何より！」

ハツハツハ、と喝いた笑い声を上げながら、私の肩をいつものようにタンタンと叩く一成。

こういう爽やかなところが、一歩間違えば女性に触れるといったセクハラに成りかねない行為でも許せてしまうのだろう。

セクハラで思い出したが、昨日のアヴェンジャーの私への数々のセクハラ行為。忘れないでほしいが、異性からの性的嫌がらせだけがセクハラという訳ではないと知ってほしい。

同性でも、された本人が性的嫌がらせだと感じれば、それは歴としたセクハラなのだ。

なので、アヴェンジャーには今後も私のお尻を揉む事を許さないぞ！

「そういうえば、三階にいつも居る女子、ラニさんが岸波の事を気にかけていたようだが……婦女子の協力を得られるとは、羨ましい限りだな」

……おっと、思わぬところで収穫だ。

なるほど、その言い方からして、今日も三階に居るらしい。手間が

省けたというもの。

一成に軽く礼を告げて、私は三階へと向かう。登り切った所で左を見れば、やはりそこに彼女の姿があった。

「ごきげんよう。ブラックモアの遺物を持ってきてくれたのですね」

いや、多分彼というよりも、そのサーヴァントの遺物だと思うのだが——とは、あえて口にするまい。

「礼を言います。今日なら時も満ち、ブラックモアの星も詠めるでしょう」

人を知りたいのだ、と彼女は言った。

だが、いいのだろうか。

彼女もマスターの一人であり、これから戦うかもしれない自分にここまでしてくれる事には、少し違和感が残った。

「私にとって、師の言葉こそが道標。その師が言ったのです。人間<sup>ひと</sup>を知ることだと。だから、あなたが気にする事など、何も無いのです。ブラックモアを知る事は、あなたにも有益な事でしょう?」

私の顔色から、何を考えていたのかを察したらしい彼女。

私が問うよりも先に機械的に答えたラニは、アリーナに残されていたアーチャーの矢と思しき遺物を見ると、一言、二言呟き、こくん、と頷いた。

「……これならば」

ラニはそれらの品を柔らかな手付きで撫でると、目を閉じ、空を仰いだ。

「星々の引き出す因果律、その語りに耳を傾ければ、様々な事が分かるものです。ブラックモアのサーヴァント、彼を律した星もまた、今日の空に輝いています」

占星術というものは、正直、よく分からなかったが——今日という日が、それを占うのに適切で、彼女にはあのサーヴァントが見えている、というのは感じられた。

『占星術、ですか。別にそれ自体には思い入れも知識ありませんが、星と聞けばかつて見た星の大海を思い出しますね。そこで行われた、

大いなる戦い——ま、詳細については口にしません』

何か、星という単語に感じ入るものがあつたようだが、アヴェエンジャーは深くは語らない。

彼女の過去と関係のある話なのかもしれないが、いつか、それも語ってくれる日が来るかもしれない——。

「これは…森？ 深く、暗い……」

と、こうしている間にも、占星術は順調に進んでいるようで、アーチャーの矢に手を沿え、窓から虚空を睨むラニは、静かに語り出した。「とても…とても暗い色。時に汚名も負い、暗い闇に潜んだ人生……。賞賛の影には、自らの歩んだ道に対する苦渋の色が混じつた、そんな色。緑の衣装で森に溶け込み、陰から敵を射続けた姿……」

あのサーヴァントのそんな生き様が、私達を襲撃した際のように姿を一切感知させない、身を隠す宝具として、形作つたというのだろうか。

隠れ続け、卑怯者として、闇から敵を撃つ人生。

それはマスターであるダンの言う騎士たる戦いとは、あまりに対照的だ。

「……そう、だからこそ、憧憬が常にあるのかもしれないね。陽光に照らされた、偽りのない人生に」

あの飄々とした彼に、そのような薄暗い過去があつたとは……。彼の人生がそのようなものだったと考えれば、ダンのやり方に反発してしまうのも頷ける。

綺麗事では通用しないと知っているからこそ、現実主義を貫くその精神の在り方。

だけど、その人生故に、綺麗事が眩しく、羨ましいとさえ感じてしまふ——矛盾、葛藤。

占星術の結果が真実であるとするなら、それがアーチャーの根底にあるものか。

しかし、そのような英雄など居ただろうか、と頭をめぐらす。

栄光を手にした者こそ英雄の名を冠する。とは言え、その過程には様々な経緯がある、という事か。

『……なるほど。認めたくはありませんが、私にはあの男の性根が少し理解出来ました。道化を演じるしか、それしかなかった男、か』  
この、自分に味方している英霊もまた、苛烈な人生を歩んだのだろうか。

そんな事を考えていると、ラニは静かに言葉を閉めた。

「これは、私の探している者ではないかもしれませんが……。はつきりとは、分かりませんが。憧憬、それ故の亀裂。これは師からも伝えられた、私も知る人間ひとの在り様の一つ。気になるのなら、アリーナの最奥——第二層から彼の星の気配を感じます。直接問うのもいいのでは？」

「アリーナに……？」

今まさに、ダンとアーチャーはアリーナの中に居ると。まさかそんな事まで知る事が出来るとは……と思ったが、初日のアリーナでの一件をラニは知っていたのだから、何も不自然ではないか。

ありがとうございます、とラニはぺこりと頭を下げ、再び空を見上げて黙ってしまった。

「憧憬、そしてそれ故の亀裂……か」

言わば——合わない歯車。

果たして、自分は合っているのだろうか。

サーヴァントも、その他の色々な事象とも。

記憶が戻れば、それも幾らかはハッキリとするのだろうか。

## 月明かりの下に出でて

ラニと別れた私は、足をまっすぐアリーナへと向けて歩いていった。彼女の言葉が真実であるなら、アリーナには現在ダンとアーチャーが居るはず。足りないピースを埋めるためにも、こちらからも相手の前に出向くべきだろう。

「マスター」

アリーナへの扉の前まで来たところで、現界したアヴェンジャーに呼び止められる。

「どうかした？」

「あのラニとかいう娘が言う通りなら、十中八九アリーナ内で敵サーヴァントと戦闘になるでしょう。もう今日でモラトリアム猶予期間も五日目。残された時間を鑑みれば、今日が彼らと戦って情報を奪える最後のチャンスになるかもしれないという事を忘れないように」

真面目な面持ちで語るアヴェンジャー。そうだ、もう今日で二回戦が始まってから五日経っている。

明後日には決戦。情報整理は決戦当日にするとしてもだ。なら、今日と明日しかマトリクスを埋めるための機会は残っていないという事になる。

これは気を引き締めて行かないと……。

パチン、と濁いた音を鳴らせて、軽く両頬を叩き気合いを入れ直す。何が何でも、情報を手に入れなければ。

「……よし。さあ、行くよ」

意を決し、アリーナへの扉へと手をかける。向かうは第二層。彼らが居るとするなら、きつとこちらだろう——。

アリーナに入っただけ、アヴェンジャーが視線を鋭く周囲の様子を

窺い、何か感じるものがあるのか、彼方へとその視線を向ける。

「マスター、サーヴァントの気配です。距離こそありますが、この第二層に居るのは間違いありません」

私は何も感じないが、アヴェンジャーがそう言うのなら、そうなのだろう。ライダーの時と同じだ。サーヴァントにだけ感じ取る事の出来る、サーヴァントの気配。

となると、アーチャーも位置までは特定出来ずとも、こちらのアーリーナへの進入は察知されているかもしれない。

「ペナルティも負っている今なら、まさしくこちらから仕掛ける好機です」

ペナルティ——マスターに直接危害を加え、更に私が生き残ったが故に、アーチャーにはステータス面での制限が掛けられているらしい。

その上、限定的とはいえ宝具も封じているのだ。彼らの戦力は大幅に削減されたのは確実だろう。

「まだアーチャーの正体に迫るには、情報ピースが僅かに足りてない。戦う事になるだろうけど、覚悟して行こう」

「……い・マスターが自ら戦闘に臨むなんてね。あのヒヨコも少しは成長してきたのかしら？」

心底驚いたような顔をして、すぐにアヴェンジャーは茶化すように私をからかいながら笑う。

そりや成長もするというもの。目覚めてからこの僅かな期間で、何度死にかけた事か。

じゃれ合うのは程々に、私は歩を進め始める。

既にここは戦場。敵はアーチャーであり、その名の通り、遠距離からの狙撃を得意としているのだから、呑気に話していられない。

いつ、どこから、彼が私達を狙って矢を射てくるかは予測不可能なのだ。止まっただけでは、文字通り彼の良い的ではない。

ならば。

こちらから出向いてやろうではないか。もはや期日まで時間もない。戦ってでも、その情報を手に入れなければならないのに、こちら



とて変わらないのだから。

そして、帰還ポータル手前の少し開けた——部屋のような場所に、  
彼らは佇んでいた。

緑の衣装に身を包んだ瘦軀そうくの男と、彼を従えた老騎士。

ダンと彼のサーヴァントだ。

「おっと、こっちの読み通りってね。旦那、どうします？　目の前に出て来ましたけど」

ダンのアーチャーの言葉に、こちらのサーヴァントも武器たる大鎌を構えつつ、楽しげに邪悪な笑みを浮かべる。

「ハッ！　陰に潜んで敵を討つしか能のない分際で、よくもまあそんな口が利けたものですね。隠れるのならお好きにどうぞ？　でなければ、我が炎から逃れる事など出来ないでしょう、陰気な狩人さん？」  
「よく言うぜ。この前はそっちが隠れた気になってやがったクセによ。いいんだぜえ、どこに隠れてもよ。なんなら、待ってやっても良いくらいだ。どうせすぐに見つけるんだしな」

売り言葉に買い言葉。二騎のサーヴァントは互いに挑発を繰り返すが、次のアヴェンジャーの言葉により、ここで決定的な変化が表れる事になる。

「戯れ言を。隠れ続けたのはアンタの方じゃない。暗き森の狩人？」  
「っ……っ……」

アヴェンジャーの言葉はあからさまな挑発だったが、アーチャーの心の底にあった何かに触れたのだろう。

彼の涼しい顔が、見る間に紅潮していくように見えた。

「生前も隠れ続け、この海でも隠れ続け、他の彼方の世界でもお前は正面から敵と戦う事を嫌って、闇討ち以外に他人に誇れる長所もない。他の英雄共と比べても、お前のその在り方は英雄とは程遠い」

「ちよつとアヴェンジャー、いくら何でも言い過ぎじゃ……」

挑発にしても程がある。私はアヴエンジャーに止めるように口添えするも、アヴエンジャーは軽く私を一瞥するだけで、聞く耳を持たない。

「……。一瞬だけ見えたその視線には、何らかの意図があるような……。」

「ここまで言われて、それでもなおその戦い方をこの聖杯戦争でも貫くというのなら、もはや救いようありませんね。所詮、貴方はその程度の人間だった。ただそれだけの話なのだから」

「……………」

語り終えたアヴエンジャーを、アーチャーは静かに睨んでいた。視線だけで人を射殺せてしまえそうな程に、殺意の込められたその視線。

先程の顔の紅潮は、決して羞恥から来たものではない。狂おしい程に煮え立つ怒りや、言い返したくてもそれを許してくれない自身の人生かこによる憤りといった、憤怒の感情。

それが、あの紅潮をもたらしたものの正体だ。

「……テメエがどんな出自を持つかは知らねえが、ずいぶんとまあ陰険な英霊が居たもんだなあ？　なんだ、ならテメエはどうなんだ？　ああ？　アヴエンジャーなんざクラス、よつぽど誰かを憎んでなきやなりやしねえクラスだろうが。テメエこそ、憎しみにまみれて復讐を願う日陰者じゃねえのかよ!？」

初めて聞く、彼の熱情の籠もった声は、それがどれだけ彼の怒りに触れたのがよく分かるというもの。

アヴエンジャーはアーチャーにとっての逆鱗に触れてしまったのだ。それが意図してなのか、それともそうでないかは別として。

アーチャーの目が怪しく輝き、何かを——おそらくは、宝具だろう、背を覆ったマントに手をかける。

「おう、お望み通り隠れてやるぜ。シャードウツドの森の殺戮技巧、とくと味わっていきな……!？」

「冷静になればアーチャー、お前らしくもない」

犬歯を剥き出し、殺意と激情に目をギラつかせるアーチャーに、彼

のマスターであるダンが待ったを掛ける。

「あいあい、分かってますけどねえ。……サーの旦那、こいつはちよいと七面倒くさい注文ですよ？ 正攻法だけで戦えとか、オレが誰だか分かってます？ 酒とかかっくらってんすか？」

マスターの制止も今の彼には届かない。むしろ、ダンにさえ好戦的な言葉を返してみせている。

「あはは、つーか意味分かんねえ！ オレから奇襲を取ったら、何が残るんだってんだよ？ ハンサム？ この甘いハンサム顔だけつすよ！ 効果があるのは町娘だけだつーの！」

もはや聞く耳持たずとはこの事。先程のアヴェンジャーとは違い、本当の意味で、今の彼は誰の意見も受け付けないのである。

「不服か？」

「だけど、なおダンは彼に言葉を掛け続ける。

「伝え聞く狩人の力は『顔のない王』だけに頼ったものだったと？」

「顔のない王……？」

おそらくは、アーチャーにまつわる伝承、または宝具を示してのものであると思うが……。

ダンがそれを口に出した途端、アーチャーから幾分か熱が冷めたのが、なんとなくだが感じ取れる。

「あー……いや、まあ、ねえ？ そりゃあオレだって頑張ったし？ 弓に関しちやあプライドありますけど」

「では、その方向で奮戦したまえ。お前の技量は、何より狙撃手だったわしがよく知っている。それこそ背筋が寒くなるほどにな。信頼しているよ、アーチャー」

穏やかに、自らのサーヴァントを律するのではなく諭す老騎士。まるで齡よわいを重ねた、莊嚴でありながらも大地の温かさを兼ね備えた大樹のような印象をさえ受ける程に、彼からは何か大きなものを感じる。「……仕方ねえ。大いに不服だが従いますよ。旦那はオレのマスターですからねえ。幸い相手は雛鳥だ。つつても？ 怪鳥霊鳥神鳥と、トンでもないモンに化けるかもな雛鳥ではあるがね」

先程までの激情もどこへやら。アーチャーは一気にクールダウン

すると、意味ありげに私へとその視線を向けてくる。

「正攻法なんざ滅多にしませんが、ま、どうにでもなるでしょ」

その眼差しに、敵意と戦意が上乘せされる。ついさっきまでの視線が値踏みするものだとすれば、今感じるコレは、それを刈り取るためのソレに他ならない。

そう——狩人が獲物を見定め狩る時のような。

「やっとやる気になったのね？ ふん、発破を掛けた甲斐があるというものです。それにしても……アンタ、さつき私を日陰者と罵ったわね？ まさかアンタと同類呼ばわりにされるとか、侮辱にも程があつてよ？」

語り終えてから、静かに事の成り行きを傍観していたアヴェンジャーが、苛立ちを隠す事なく、アーチャーへとまた喧嘩口調でふっかける。

もう止めないよ。どうせ徒労に終わるし……。

「なんだ、その上から目線。さつきも思ったけどよ、おい、その可愛いお嬢さん。おたく、飼い犬の教育間違ってますよ？」

「うっ……痛いところを突かれた」

「……………マ・ス・ター？」

思わず声が出てしまった。

うわあ、アヴェンジャーがすつごくイイ笑顔で（だけど目は笑っていない）こっち見てる。ああ、これは帰ってからマイルームでお仕置き確定だな。

「チイツ！ この私への数々の侮辱、その命できつちりと清算してもらいましょうか？ 後悔してももう遅いから、覚悟しなさいアーチャー」

「後悔だったらもう間に合ってたんだよ。今更貫うまでもねえってね。だいたい、勝ち戦でどうやって後悔しろってんだよ魔女さんよお？」

「新手的プレイかそれ？ 興奮すんの？」

「……フフ。これはもう、文句無しに処刑ですね。ええ、怒りを通り越して、むしろ愉しくなってます。この薄汚い鼠を今から焼き殺せるかと思うとねえ!! 喜びなさい？ 鼠の丸焼き、いいえ、串

焼きにしてやるわ!!」

あ、ダメですわこれ。ここまでのブチキレは初めて見たかも。多分、今のアヴェンジャーならバーサーカーと呼んでも相違ないだろう。

バーサーク・アヴェンジャー——みたいなの？

「しまった、こりや飼いだつてより猛犬だ。清々しい程の上から目線にその陰険さ、短気っぷり……。ははあ、なんとなく読めてきたぞ？

さてはおたく、友達とか居ないだろ？ 知り合いは居ても、仲の良い間柄は一人も居ないってどこかね？」

「……………殺します。跡形もなく焼き尽くしてやる。というか、別に友人なんて私には不要だし」

え……。じゃあ、今までの知り合いの英霊と違って、本当にただの知り合いだっただけ…………？」

……………今度から、なるべくアヴェンジャーに優しく接してあげる事にしよう。私は心の奥でそう誓うのだった。

「やっぱりね。そりゃ悪口ばかり上達するつてもんだ。ま、いいさ。相手が誰だろうと、敵なら殺すだけだし？ 遠慮も容赦も一切なくズタバロにしてやるよ」

……………

アーチャーが戦闘の構えに入った。茶番は終わり、ここからは戦いで、という事か。

「アヴェンジャー！」

「やるわよ、マスター！」

結局、言葉要らずでの意思疎通の手段が無いままに、こうしてサーヴァント戦に突入してしまった。

こうなれば、ぶつつけ本番でやるしかない！

「さあ、戦の時だ、アーチャー。首尾は頭に入っているな？」

「あいよ。正々堂々、旦那のやり方でオレの長所を活かす、だろ？ 分かってるって」

瞬間、アーチャーの姿が視界から消える。

ダンという言葉に答えたと思ったら、瞬きの間に姿が無くなっていたの

だ。

「スキルか宝具か……でも、どこに!?!」

アーチャーの姿を探して、左に右に目を向けるアヴェンジャー。私はそのアヴェンジャーが見ていない方向——上を見て、アーチャーの気配を探っていた。

そして、

「上!!」

キラリと何かが光ると同時、クロスボウのような弓に矢をつがえてアーチャーがこちらに狙いを付けている姿が現れた。

光ったのは、矢尻の銀色の輝きだったのだ。

「そらよー!」

私に見られた程度、彼にとっては差異や誤差ですらないのだろう。構わずに、正確無比な狙いで、アヴェンジャーの眉間目掛けて矢が撃ち出される。

「甘いー!」

撃たれてから避けるのでは遅すぎる。故に、私の声に上を向いて、狙いが眉間だと気付いたアヴェンジャーは回避ではなく、額のサークレットで矢を弾く事を選択した。

衝撃までは殺せないが、それでも直撃しているよりは遥かに良い。「なかなか器用な真似するじゃねえの? なら、これならどうだい?」

着地するや、アーチャーはすぐさま次の矢を放つ。それも一本ではなく、目にも見えぬ早さで、次から次へと矢を装填し、連続でだ。

狙いは全て、人体の急所とも言うべき部位ばかり。心臓、脳天、または動きを阻害するために手足や腕の関節といった、地味に厭らしい箇所も。

ライダーの銃撃を凌いだアヴェンジャーではあったが、厄介なのはアーチャーが姿を消す事が出来るという点だ。

同じように防御しては、簡単にアーチャーの姿を見失ってしまう。故に、アーチャーから意識を逸らさず、的確な回避行動が必要となる。

アヴェンジャーもそれが分かっており、アーチャーを常に視界から

は離さず、矢の一つ一つではなく、致命傷に成りうるものだけを鎌で弾く。

それ以外は、少し体を反らすなどして、あえてダメージが入るのも無視していた。

「まだまだ、ここからだぜ？」

アヴェンジャーがどうにかアーチャーを視界に捉えつつ回避するのを見届けて、アーチャーは楽しみに矢を射る。

変わらないの連射に、だけどアヴェンジャーの体は少しずつ傷を増やすばかり。

このままではジリ貧となる未来が確定的だ。

「アヴェンジャー、私がコードキャストでアーチャーに隙を……、」

対抗策を彼女に伝えようとした、その時だった。

心臓を狙って放たれた矢を弾いたアヴェンジャーは、その直後、大きくぐらつき、回避がままならず肩に矢を受けてしまう。

「ぐ……これ、は」

どうにも、焦点が上手く定まらないといった風に、アヴェンジャーの目が上下左右に不安定に揺れている。

——まさか。

「そのまさかさ」

ふと、アーチャーを見る。自らの頭を指差し、彼は得意気に勝ち誇っていた。

「戦いつてのは頭も使わないとな。バカ正直に矢だけ撃つてると思ってたかい？ んなワケねえよ。おたくら、忘れた？ オレの宝具が何かをさ」

彼の、宝具。

イチイの矢という、毒を主軸に置いた武器。

そうだ。なら、アヴェンジャーを襲った異変の正体は——、

「毒、か……」

それに答えたのは、私ではなかった。

息絶え絶えといった具合に、アヴェンジャーは鎌を杖に立ち尽くして、アーチャーを睨み付ける。

「ご名答ってね。なに、オレってば毒の専門家なワケで。掠り傷でも十分なのさ」

「…そうか。連射の中に、毒矢が混ざって……!」

「ま、気付いた時にはもう遅いがね。要は使いどころだぜ？ 毒矢にもストックつつう限りがある。なら、それを最大限に活かせるタイミングで使ってやるのが、上手いやり方じゃん？」

迂闊だった……!」

彼の毒に苦しめられたのは、他でもないこの私だったのに。

彼の姿を消す能力に警戒するあまり、毒の事を失念していた。

「アーチャー。あまり手の内を明かすような事を口走るな」

「んにゃ、旦那には言われたくないんですがねえ。オレの宝具をあっさり明かしちやいましたし？」

「……ふむ。確かに、そうだな」

ここに来て、ダンとアーチャーのその何気ないやりとりが、私にはとても恐ろしく思えた。

ダンが何故、アーチャーの宝具を封じ、令呪を用いてまで騎士道を重んじたのか。

何のことはない、それだけの実力を有しているからこそ、それが出来たに他ならない。

凜も言っていたじゃないか。

彼は、ダン・ブラックモアは、疑いようのない強者であると。

「出来れば、君達とは来たるべき決戦の日に、雌雄を決したいと思っていたのだが……」

それは余裕であるのか。セラフの介入を待つまでもなく、私達をここで倒してしまえるという、絶対の自信か。

おそらく、そのどちらもなのだろう。彼は、事実のみを口にしていくのだから。

だけど、こんな所で、まだ猶予期間中だというのに、何も出来ないまま終わる訳にはいかない。

だって、私達は彼らから最後の足りない情報<sup>ピース</sup>を得るために、ここまでやってきたのだから!



「……、」

ダンはともかく、油断しているアーチャーになら、もしかしたら通じるかもしれない奇策がある。

今、とつさに思いついた、この状況下でなければ通用しなかったであろう、突発的な打開策。

もう、これに賭けるしかない。

「ここで終わるなら、いちいち決戦を待つまでもないっすからね。んじやま、さつさと仕留めますよ、旦那？」

アヴェンジャーが毒でロクに身動きが取れないと見ているのか、わざわざダンに確認を取るために振り返るアーチャー。

今しか、ない。

私はアヴェンジャーに駆け寄る素振りを見せながら、彼らにバレないように端末を操作する。

僅かな動作で済むように、最低限のタップのみで目的のものをデータから物質化させて、手に隠し持つようにして、そのままアヴェンジャーに抱きついた。

「ん？ お優しいマスターだねえお嬢さん。死ぬ時は一緒ですかい？ サーヴァント冥利に尽きるんじゃないやねえの？ 猛犬さんよ？」

未だ、私に抱きつかれてなおもフラつくアヴェンジャーに、アーチャーは余裕の笑みを浮かべながら、照準をこちらに合わせる。

狙うは、今度こそ復讐の魔女の胸——心の臓。  
「そら、仲良く逝つときな！」

そして、アーチャーが矢を撃とうとして、

「だから甘いってのよ、森の狩人!!」

突如として、毒でまともに動けなかったはずのアヴェンジャーが、目を見開き、アーチャー目掛けて手を翳す。

「なに!？」

アーチャーが矢を放つよりも早く、アヴェンジャーの手から噴き出された業火が彼を襲わんと、猛烈な勢いで突き進む。

それには流石のアーチャーも面食らい、とっさに避けるが、アヴェンジャーの方へと向けて腕を突き出す形になっていた事もあり、追尾する炎にその腕を軽く吞まれてしまう。

「アツツ!? つかなに!?! 人間火炎放射機ですかおたくは!?!」

「ハッ。そんなダサイもんじゃないっての。畏敬を込めて呼びなさい? 私には巷じゃ『炎上の魔女』って呼ばれてるのよ!!」

「いやいや! それって絶対異名とか通り名じゃなくて、悪口とかあだ名の類でしょ!?!」

うん。私もそう思う。

「うっさいわね。文字通り炎上させるわよ?」

だけど、これで形勢逆転だ。

今のでアーチャーは腕に火傷を負ったはず。さっきまでのような機敏な手付きで、矢を放つのは困難になったはずだ。

加えて、アヴェンジャーは少しの傷はあれど、気にする程ではない。

「これは我々の失態だな。だが、どうやってアーチャーの毒から脱したというのだ……?」

ダンが訝しいとばかりに、私に疑惑の目を向けてくる。と、ほぼ同時にアリーナに警告音が鳴り響く。

セラフによる介入だ。これ以上の戦闘は続行不可能だろう。

さて、どうせもう使えないのだし、ネタばらしといこうか。

「さっき、アヴェンジャーに駆け寄った時、それと並行して端末を操作して、治療薬を取り出したの。抱きついたと同時に、その手に隠し持っていた治療薬を、アヴェンジャーに使用した。それだけだよ」

アヴェンジャーが毒を受けてすぐに治療薬を使用しなかったのは、単に気が動転していただけだったのだが、それが功を奏した。

アーチャーが治療薬の有無を気にならなかったのも、それによって私が治療薬を持っていないと誤認させられた故なのかもしれないのだから、不幸中の幸いだったと言える。

「……あの僅かな間に、そんな事を」

「おお、痛い痛い。なんだ、お嬢さんも見かけによらず、なかなかの早業じゃないの。お見それしたぜ、まったく」

「今時の女子高生なら、これくらいの携帯の操作なら出来て当たり前だよ。」

「世代の差、ということか」

「……いや、多分ただけどね？」

「……あー疲れた。やっぱ柄じゃないっつーか、割りに合いませんわ、こういうの」

火傷した腕をぶらんとぶら下げて、アーチャーは気怠げに愚痴を零す。

「泣き言は禁止だアーチャー。わしのサーヴァントである以上、一人の騎士として振る舞ってもらいたい」

「げ。……ほんと旦那は暑苦しいんだから。分かってますよ、騙し討ちは禁止なんですよ。……まったく、手足もがれてるようなもんだぜ。人間には適材適所つてもんがあるんだが……。ま、必死になればなんとかなるもんだ。手足がなくなるとも歯を使い、目玉で射るのが一流の弓使い、か……」

ニヤリと口の端を曲げて、緑衣のアーチャーは真つ直ぐ前を見据える。

敵である、私達を。

「いやあロックだねえ！ OK、ご期待に応えるぜマスター。所詮はエセ騎士だが、槍の差し合いも悪くはないさ」

「その意気だ。次の戦いの準備は始まっている。意識を戦場から離すな」

そう言つて、ダンにはアーチャーと共にアリーナから離脱した。

形勢逆転されようとも取り乱さず、冷静に次を見据えるその精神。慎二とはまるで違う、戦う者の在り方を、よく分かるのが実感出来た。

「……凄いだ、わね」

ダンとアーチャーがその場を去つたのを見届けると、アヴェンジャーはようやく構えを解き、大鎌を虚空へと消す。

心なしか、その口元には笑みが見える。

「覚えていますか？ あの男、己の出自を口にしたのよ。——シャーウッドの森、と」

……そういえば、アヴエンジャーとの挑発の応酬を繰り返していた際、そんな事を口にしていたような。

「マトリクスも、これでどうにかなりそうね。それにしても——あのラニとかいう女の占星術も、割と使えるわね」

そして——ダンの口にした、顔のない王というキーワード。

戦闘中にアーチャーの姿が消えたのは、これによる効果なのかもしれない。

おそらくは、これでアーチャーの真名に迫る事が出来るはずだ。学校に戻ったら、調べてみる価値は大きいだろう。

だが、今回得るものがあつたのは、私達だけではないという事を、決して忘れてはならない。

陰から陰へと渡り、潜み、闇の中で敵を討ってきた森の狩人は、マスターと共に日の光の——否、月明かりの下へと出て、敵と戦う意思を固めた。

それが私達にとって、彼らにとってプラスになるのか、はたまたマイナスになるのかは分からない。

けれど、戦う場所が変わったのであれば、少なからずは、その心境にも変化が表れるだろう。

それを、私は忘れてはならない。

忘れては、ならない。

## 真名看破：アーチャー

ダン、アーチャーのコンビとの一悶着を経て、明くる日の朝。つまりは今日が決戦前日。猶予期間<sup>モラトリアム</sup>最後の一日である。

やり残した事があれば、今日のうちに済ませておくべきだが、トリガーは既に二つとも回収を終え、マトリクスも後はアーチャーの真名を暴くのみ。

まあ、その真名を推理するのが少々厄介ではあるのだが……。

「明日はいよいよ決戦ですね」

ふと、マイルームで寝起きに朝ご飯の焼きそばパンを頬張っていた私に、アヴェンジャーが声を掛けてくる。

どことなく、憂いを帯びたような顔つきに、茶化すべきではない雰囲気なのだというのが、起きたばかりではつきりとしめない頭でもよく分かる。

「正直に白状しますが、今回の敵はマスター、サーヴァント共に私達にとって強敵であり難敵です。認めたくはないけど、敵は私達よりも遥かに上手……」

アヴェンジャーの告白を、私は黙って聞いていた。だって、あのいつても強気な彼女がこんな弱音を吐くとは思わなかったから。

「ただ、今回は相手が令呪でステータスに自制を掛けてくれたので、勝機は十分に見出せましたが……マスター、貴方を守るためには、私もいつか、本領を發揮せざるを得ないのかもしれないかもしれません——」

それは——宝具を使わなければならない、という可能性か。いずれは当然あるべき選択肢。

だが、これまで一緒に戦ってきて感じていたが、彼女の瞳には躊躇いを感じられる。

「……どうして、それを躊躇うの？」

何を躊躇う必要があるのだろうか。マスターの力量の差は明白、打

倒出来る手段など、私達には限られているのに。

「躊躇う、か……。そうね、確かに私は躊躇いを抱いています。その理由を今の貴方に教える気はありませんが、ですが真名が露見する事を恐れているのではないという事を——それだけは覚えておいて」

どこか寂しそうに笑うアヴェンジャー。彼女の事情は解らないし、それを彼女が教えてくれる気が、今のところは無いようだが、何かあるとでも、言うのだろうか。

「いずれにしても、きつと必要に迫られる刻が来るでしょう。その時は、私の真の姿でも何でも見せてあげるから、気長に待つコトね？  
ま、それまでに敗北しなければ良いのだけど」

……。

どこか腑に落ちない、脳に微かな疑問を感じつつ、時は過ぎる。

いずれにせよ、いつの日か、一つの決断をせねばならないのかもしれない。

昼になり、私は昨日得たキーワード、『シャーウッドの森』と『顔のない王』について調べるために図書室に訪れていた。

ここに来るまでに廊下を通ってきた訳だが、明日が決戦という事もあってか、他マスターは浮き足立っている者も居れば、重苦しい空気を纏う者も居て、それだけで彼ら彼女らの状況というものが伺い知れるというもの。

「えつと……」

本棚から目的のものを探し出し、それらの記述があるものを見つける。

『シャーウッドの森——イギリス、ノッティンガム近くの森。深い森には、今も古い教会や、古の義賊が集ったと言われるオークの太木が残り、神秘的な空気を留めている。また、かつて、暴君ジョン失地王に対抗したある義賊が活躍した森。ドルイド信仰に満ちた、精霊の森』

……イギリス出身の英雄？

教会に義賊、ドルイド、そしてジョン失地王か。アーチャーと何か関連があるのかもしれない。

『顔のない王——古代ケルトにおいて、春の到来を祝うベルティーン祭に現れるもの。森の精霊とも、自然の化身とも言われる。グリーンマン、ジャツコザグリーン』

ケルト系の英雄？

森の精霊や、自然の化身——イチイの木と言い、木々と密接な関わりを持っていたのは間違いない。

ドルイドにケルト、そして森との関わりが深い英霊……。これらの情報を整理すれば、その正体に迫る事も可能かもしれない。

だが、まだ一日残っているし、可能な限り情報を集めてからにしよう。

それが出来れば、の話ではあるが。

アリーナに行く前に、一階に降りてすぐの所でタイガーの姿が視界に入る。

そういえば、この前アリーナでメガネを見つけたんだった。二回戦の間に、という事だったので返しておくのなら、今がその最後のチャンスか。

「タイ……藤村先生。これ、アリーナで見つけました。早く持ち主に返してあげて下さい」

「あ、メガネ見つかったのね。ありがとう……。何か言いかけたのが気になるけど、助かったわ」

魔眼殺しの眼鏡を手渡し、タイガーはゴソゴソとポケットに雑に突っ込むように仕舞う。

いやいや、その仕舞い方はさすがに雑過ぎるにも程が無かろうか。いや、ある。

「変な倒置法になってるけど大丈夫、岸波さん？ つとと、そうだった。じゃあ、お礼に、観葉植物をあげる。お部屋に飾ってね」

そう言つて、タイガーの指先からデータ“タイガー植木”が私の端末へと転送される。

なにげにスキルが高いような気がするぞ、この虎……。

「それじゃね。あ、メガネはしっかりと私から返しておくから、安心してね〜?」

そして、タイガーは鼻歌交じりにスキップしながら、玄関を出て校庭へと消えて行つた。

問題が解決して上機嫌にでもなつたのだろう。けつこう単純なところがあるのは、やはりその内に野生が溢れる故か……?」

「さあ今度こそ、とアリーナに行こうと方向転換をしたところで、

「きやつ」

「うおつ」

振り向き様に誰かとぶつかり、勢い余つて私は尻餅をついてしまふ。

誰かと思ひ、見上げて顔を見れば、購買でよく見かける男性マスターだつた。

このマスター、何の目的かは知らないが、いつも購買のカウンター前に居て、そのために私も彼の顔を覚えてしまったのだ。

「すまん。ちよつと注意散漫になつた。ほら、立てるか?」

差し出された手を取り、私は彼に引つ張り起こしてもらふ。それにしても、どことなく浮かれたような感じに見えるのだが、何か良い事でもあつたのだろうか。

と、私が聞くまでもなく、彼の方からその理由を語り始める。

「ところでさ、お前も聞いたか? ついにあの『激辛麻婆豆腐』の情報を掴んだんだけど、どうやら言峰神父の発案らしくてさ。次か、その次の戦いの時に購買で発売されるらしいんだ。辛い匂いだけで五杯はメシを食べる、つてレベルらしい。た…楽しみだ…これは勝ち残らないと!」

興奮を抑えきれないとばかりに、彼は鼻息荒く、言うだけ言つて購買へと降りて行つた。

麻婆豆腐、それも激辛か。ちよつと興味があるな、私も。



『ま、まさかとは思うけど、買わない……わよね……?』

「……? なんぞ?」

姿を消したまま、アヴェンジャーが訊ねてくる。が、何故か戦々恐々としたような声色なのは、一体何故?

『んん! ベ、別に何でも。ただ、私は絶対に食べませんから。絶対に』

……なんだろう。決戦の時よりも必死な気がするのは、私の気のせい?

なんだかんだとあったが、アリーナにやってきた私達。

このアリーナに来れるのも、今日で最終日なのだが、アーチャーやダンの気配はまるで感じられない。

それはアヴェンジャーも同じらしく、少しの間キョロキョロと遠くに視線を送っていたが、結局何も感じるものはなかったらしい。

どうやら、もう新たな情報を得るのは見込めないようだ。

「せっかくのアリーナです。敵サーヴァントも居ないようだし、思う存分エネミーを狩るとしましょうか。決戦前デイナーの前哨戦スウィートってところかしらね」

いや、それ逆。

でも、まあ、それもそうか。経験値は幾ら有っても良いし、それどころか私に圧倒的に不足しているものだ。

アヴェンジャーの能力を取り戻すためにも、今日だけはエネミーを倒す事だけに専念しよう。そういう日があっても、別にいいはずだから。

そして。

ひとしきりエネミーを倒し、アリーナから帰ってくる頃には、日は既に傾いていた。他のマスターの姿も最早まばらにしかなく、寂しい校舎内の風景は、嫌でも明日が決戦の日であるのだと訴えかけているようだ。

明日、ついに二回戦が終わりを迎えようとしている。

彼らの遺物を探し回り、毒には侵され、けっこう散々な猶予期間だった気がしないでもないが、それも全ては明日で結実するのだ。

「いよいよ、明日はあの老騎士との決戦ですね。ま、あまり気負いしないように。敵が何であれ誰であれ、一回戦同様に殺すだけなのだし」  
殺す、か。

明日、私とダン、そのどちらかが死ぬ。それはもう避けられない運命。

そして残る全てのマスターも同様に、決戦が終われば更に半数がこの学校から姿を消すのだ。

見知った顔も、一度二度だけしか顔を合わせた事のない者も、顔すら知らない者も、あまね遍く全てが、負ければ淘汰される。

敗者を許さぬ月の聖杯戦争。それがこの世界のルールであるのなら、果たして救いはどこにあるのか。

救われるのは、勝者だけしか、本当に許されないのだろうか……。

「……寝よう」

考えても答えは出ない。いや、答えなんて存在しないのかもしれない。

今はただ、目の前の現実を見据えよう。あれこれ考えるのは、戦いが終わってからでいい――。

「いよいよ決戦の日だが、準備は滞りなく順調かね？」

背後からの声に振り返る。

神父の服装をしているが、心の深層、脳の根幹に直接刺さるような声は、朝からでなくとも、いつも、心臓に悪い。

そう、もう翌朝。決戦当日だ。

色々と頭の中でグルグルと蠢いていたせいで、あまり快眠とは言い難いが、それでも日は巡る。マイルームで籠もっているのが嫌で、自然と足は教室に向かっていた。

「今回の君の決戦は正午からだ。時間になり、準備が出来たら、一階まで来たまえ。購買部で身支度を整える程度の時間は許されている。

……まあ、これは前日も言ったような気がするがね」

言うだけ言うと、彼は教室の扉を開けて出て行った。

それにしても、あの気配の無さは何なのだろうか。アサシン顔負けの気配遮断ぶりは、やはりあの神父がただ者ではないと認めざるを得ない。

さあ、準備を整えよう。購買も教会も、昨日アリーナから帰ってくる時に立ち寄って用事も済ませてある。

あとは、集めた情報を整理し、敵サーヴァントの真名を暴くのみ。

そして、全ての準備が整ったら、言峰の元へ行くとしよう。

マイルームへと戻った私は、既に戦闘の支度を終えていたアヴェンジャーに出迎えられる。

「戻ったのね。気負いするなど言ったけど、やっぱり無理だったかしら？　だって、貴方は魔術師やマスターである前に、一般人だものね」心配してのものか、はたまたいつもの挑発か。だけど、彼女の言葉から悪意は感じない。彼女なりに、私に気を遣ってくれているのだろう。

さて、一息ついたところで……それでは、これまでの情報を整理しよう。

ダン・ブラックモア。

今回の相手は、老練な軍人だ。経験の差は、この短時間では埋められない。マスターとしての力量では完全に負けている。

しかし、サーヴァントの差なら別だ。彼のサーヴァントのクラスは、そう……アーチャーだったはず。

あの日、アリーナで撃ち込まれた毒矢。寸分違わぬ正確さで飛来したそれは、敵のクラスをアーチャーだと理解させるに十分だった。

だが、それは同時に、彼のマスターとの溝を明らかにする一撃でもあったのだ。

毒矢の使用を知ったダンは、あろうことかそれを撃ち出した弓——  
—宝具の使用に制限を掛けたのだ。

そう、その時制限された宝具の名とは……いかなる位置に居ても、寸分変わらず命中させる必中の弓、その名は『祈りの弓』。

ダンは、猶予期間にそれを使ったアーチャーに対し——令呪を使つてまで制限を掛けた。

正々堂々と戦え、と。

誇りを持って正面から戦う事。それはアーチャーの生前の戦い方もあつて、彼に葛藤を与えていたのだろう。

それを教えてくれたのは、いつも三階で空を見ていた少女、ラニ。人を知りたいと言った彼女は、アーチャーの残した矢の残骸から、

彼の生前親しんだ森の情景を見せてくれた。

その森の名とは——そう、その名はシャーウッドの森。

そして、そこで活躍した英雄と言えば一人しかない。

『ロビンフッド』。

それがアーチャーの真名に間違いない。

マトリクスを確認すると、どうやら正解であつたらしい。アーチャーの項目に新たな書き込みが加えられているのが認められた。

ギリシャ神話のオリオンとケルト神話の妖精達、そしてドルイド信仰とが融合して誕生した義賊。モデルとなる人物は存在するが、それが複数混合した結果、『ロビンフッド』という概念——英雄が誕生し

たのである。

ロビンフッドはもともと、度重なる諸外国からの侵入を受けたイギリス人達の『祈り』から生まれた顔のない英雄。古代ヨーロッパに登場する森の人グリーンマンの化身として考えられるのは、彼が民衆が生んだ「願望」である事を示唆している。

その時代にいた小さな英雄が、人々の願いを受けて顔のある英雄・ロビンフッドの名を襲名していた。このアーチャーも、そんな「英雄を襲名した」名も無き狙撃手の一人なのだ。

言わば、名も無き人々から選出された、彼自身も名も無き英雄。人々が選んだ、ロビンフッドという名も無き誰か。

それが、このロビンフッドという英霊・アーチャーの正体に他ならない。

しかし、真名が判り、不和を感じるとは言え…自分達は勝てるのか。力を貸してくれる英霊に差があるのではない。ただ、マスターたる自分が、力を十全に引き出してやれるか――。

その一点において、聖杯戦争が始まってからというもの、私の中で常にネックとなっていた。

「どうやら、今回も無事にあのアーチャーの正体を突き止めたようですね。ロビンフッド…：村を守るために、王や軍を相手にたった一人――いいえ、独りきりで戦った孤独なる英雄。ともすれば、復讐者の資格すら持つかもしれない彼が、まさか騎士道を良しとするようなマスターのサーヴァントになるとは、正直なところ驚きでしたけど」

「アヴェンジャー、やっぱり、今回も彼の事を知ってたんだね」  
知ったように語る様を見れば、深く考えずとも理解出来る。

知ったようにはない。まさしく知っていたからこそ、彼の性格や戦い方について、今まで何度も言及出来ていたのだ。

それこそ、彼の正体を知るよりも前から。

「そうね。知っていたわ。だけど、それが何か？ 言ったわよね、英霊の知り合いが居るって。あのアーチャーに關しても、私の知る英霊の内の一人に過ぎないってだけの話よ。ま、向こうはそんな事なんて知

りもしないのだろうけど」

悪びれるでもなく、開き直っているようなアヴェンジャーの口振りに、だけど疑問を抱く。

アヴェンジャーは彼を知っていた。だけど、彼はその事を知らない？

それは、何故？

それこそが、彼女が抱えている秘密、宝具を使う事を洩る理由なのではないか。

でも、彼女がそれを話そうと思わない限り、私には真相を知る由もない。

それに、令呪を使えば無理やりにも話させる事も可能かもしれないが、そんな事をしてアヴェンジャーとの仲が悪くなるのだけは御免だ。そうなるくらいなら、このまま真実なんて知らなくても構わない。

「……うん。何でもない。ただ知ってたってだけ、だもんね？」

なら、聞かない。今はまだ、彼女の嘘に付き合おう。いつか話してくれる、その時まで。

「……そうよ。知ってるってだけ。それ以上でも、それ以下でもない。ただそれだけよ」

面白くないと言わんばかりに、アヴェンジャーは舌打ちをして、そっぽを向いた。

今ので少し機嫌を損ねてしまったようだ。

「で、一昨日にもアーチャーと戦闘があった訳だけど、今日は決戦。そろそろこちらの策がバレないようなやりとりを決めないと、奴ら相手には相当キツイわよ」

と、不機嫌ながらもアヴェンジャーが進言してくれる。

そうだった、それについても考えないといけないんだ。どうせなら、昨日は時間もたっぷり有ったのだし、昨日に考えれば良かったのだが、つい失念していた。

「うーん……どうしようっ」

「どうしようって……アンタねえ」

呆れて物も言えないとは、こういう事を言うのだろう。アヴェンジャーは大きく溜め息を吐いて、残念なものでも見るかのような視線を私に向けてくる。

だ、だって仕方ないじゃない？ 私、素人のマスターだし。

そんな急に相手にバレないようになやりとりの手段を考えるなんて言われても……。

「ちなみに決戦の時間は？」

「えっと、お昼ちようど」

「もうそんなに時間が無いじゃないの!?! このおバカ!!」

おお、復讐の魔女が天を仰ぐかのように、慌てふためいて私を罵倒してくる……。

「チイツ。こうなれば、癩だけど背に腹は代えられないわね。早速探しに行くわよ、マスター！」

……、え、何を？

「とぼけた顔してんじやないわよ！ あのトオサカリンとかいう女を探しに行くつつつてんの！ もしくはラニとかいう女！」

なにその困った時は凜頼みみたいな思考。しかもラニもとか。人を頼りしているにも程がありすぎない？

「散々相談なりでアイツ等に頼ってたクセに、今更良い子ちゃんぶつてんじやないわよ!!」

怒鳴るアヴェンジャー。そして引つ張られる私。

強引に手を掴まれ、そのままアヴェンジャーは私を引きずりながらマイルームを退室していく。

というか痛い。

「ところで、凜……カラニに何を頼むの？」

私の疑問に、またも呆れた顔で見下した眼差しを向けてくるアヴェンジャー。そんなに愚かな質問だっただろうかと反論したいところだ。

「話の流れで察しなさいよね。決まってるでしょ、敵にバレないやりとり——

『念話』の方法を聞きに行くのよ」



## 第二回戦決戦 開幕の刻、来たれり

「バカなの、アンタ？」

凜を屋上で見つけた私が、事のあらましを話しての彼女の第一声が、ソレだった。

凜は頭を片手で抱え、深く溜め息を吐くと、「あく、そういえばこういうヤツだったわー」みたいな目で私に視線を送ってくる。

そこはかたなく侮辱された気がしないでもないが、今回ばかりは反論の余地がないので、それこそ私はぐうの音も出なかった。

「あのね。仮にも私達って敵同士でしょ。それなのに、そんな敵に塩を送るような真似を思う？」

言いながら首と手を横に振ってナイナイ、とジエスチャー付きで正論を述べる凜。

いや、ホントその通りなので何も言い返せません。だけど。

「それでも、なんだかんだで教えてくれる凜なのであった。まる」  
「まるって……。あなたね、本当に私から教えてもらおうって気があるのか疑いたくなるのだけど……」

あまりの呆れの度合いからか、頭痛でも堪えるかのように額を押さえてうなだれる凜の姿から、何故か哀愁漂う気がするのは、きつと気のせいではないだろう。

もちろん、原因は私。うん、あまり誇れる事ではないな。

「はあ……。もう、何だか馬鹿馬鹿しく思えてきたわ。ま、教えてあなたが万が一にもブラックモアに勝てたなら、その分こつちにとつても厄介なライバルが一人減って儲けものだし、仕方ないから特別に教えてあげるわよ」

『……結局は教えるのね。提案しておいてアレだけど、この女かなりチヨロ——』

そこから先は言わなくてもいいと、私は凜が準備の為に何やらゴソゴソと探している間に、霊体化して姿の見えないアヴェンジャーを手で制する。

いや、凜には聞こえないだろうが、それでも全てを言い切られると、私がそこに付け込む最低な輩のように思えてならないので。

少しの間、凜は探し当てたらしいその目当ての「何か」を弄り回すと、それを私へと差し出してきた。

……小さくて紅い、これは——宝石？

「そ。小振りだけど、これでも立派なルビーよ。はい、じゃあこれを飲んでくれるかしら？」

受け取ってマジマジと見つめてみるが、特におかしな所は認められない。にしても、これを飲み込めとは、一体如何なる了見か？

「なに？ 頼んできたくせに、信用出来ないの？ 別にこの程度のサイズなら、飲み込んでも問題は無いわ。というか、この電腦世界での肉体なんて所詮は電腦体なんだし、それこそ人体への影響だって有ったとしても微々たるものよ」

影響、有るには有るのね……。

まあ、今更尻込みしても仕方ない。これが必要な行為であるのなら、ここは素直に従っておくでしょう。

「……。それじゃあ……」

意を決し、小指の爪程のサイズのソレを、私は口に放り込むと一息で飲み込む。少し喉に引っかかって嫌なイガイガ感というか、気持ちの悪い感覚があったが、それもすぐに収まった。

「よし、飲んだわね。それじゃ、サーヴァントも現界してちょうだい」  
私が飲み込めたのを確認すると、凜はアヴェンジャーに出て来るように催促する。

断る理由もないため、アヴェンジャーも凜の要求に素直に応え、その姿を現した。

「現界したわよ。それで、私は何をすれば？」

「ん。あなたにはコレね」

そう言っただけで凜がアヴェンジャーに渡したのは、さっきのルビーと同

じ大ききの蒼い宝石だ。

色合いからして、サファイアだろうか？

「正解。どういう訳か、ルビーとサファイアって対を為すには相性が良いの。同じ宝石同士でも良かったんだけど、こっちの方がそれより効果が有るから」

凜の説明に納得したのか、それとも興味がないのか、アヴェエンジャーは「ふーん」とだけ返すと、サファイアを躊躇いなく口に含んだ。

その口に入れる際の、チロリと舌を出した姿がやたら艶やかで妖艶に見えたのは、ここだけの秘密。

「……………ん。飲んだわ。で、次は？」

「オーケー。次は互いにパートナーが飲み込んだ宝石をイメージしながら、今自分が飲み込んだ宝石に魔力を通してみて」

となると、私はアヴェエンジャーの飲み込んだサファイアを。アヴェンジャーは私の飲み込んだルビーをイメージしながら、それぞれが飲み込んだ宝石に魔力を流せばいいのか。

「……………」

手を当てながら意識をお腹に集中させ、さつき見たサファイアを思い浮かべてみるが、いざやってみると、これがなかなか難しい。

そもそも、私はまだ魔術師として素人に毛が生えた程度の実力しかない新米マスター。魔力を扱うのも、コードキャストという便利なプログラムがあつてこそその為せる技なのだ。

たまらず、チラリと目を向けると、私が苦戦している横では同じように目を閉じて集中しているアヴェンジャーの姿があつた。

ただし、私とは違ってまさしく精神集中といった感じで、もはや瞑想しているのではないかと思えるくらいにその意識は研ぎ澄まされている。

しばらくアヴェンジャーを見つめていると、突然パチリと開眼し、その綺麗な黄金の瞳が露わとなる。

「魔力が通ったわ。案外簡単なのね」

「あら、流石は英霊。あつさりクリアしちゃうんだ」

ヤバい。アヴェンジャーはすぐに出来たのに、そのマスターたる私が全く成功しないとあつては、またバカにされるに決まってる。

だが、逆に焦れば焦る程に、集中が乱れてしまう。

「で、こっちは……うん、難解のようね」

私がうんうん唸っているのを見かねたか、凜がやれやれと助け舟を出してくれる。

「アヴェンジャー？ この子のお腹に手を当てて。魔力を流し込むイメージで」

凜のオーダーに、アヴェンジャーは黙って私のお腹に手を当ててくる。あつ、お腹を優しく撫でられると、すごく気持ちいい……。

——あれ？

「なんか、お腹がぽかぽかする」

内から湧き上がってくるような、暖かな感覚がお腹からしてくる。なんだかすごく不思議な気分……。

「成功ね。これで念話が出来るはずよ」

え、もう？

でも、実感が湧かないというか……。

「いい？ さっきの宝石は互いに対となっていて、あなた達の魔力に呼応して反応するようになってるの。相手の顔を思い浮かべながら、頭の中で声を発する事で念話が成立するわ。ちなみに、当然ながら念話には少量だけど魔力を要する。魔力が足りないと念話も出来ないから、それを頭の隅にでも置いておきなさい？」

じゃあね、とだけ言うと、凜はひらひらと手を振りながら屋上を去って行った。

善意と打算もあつただろうが、凜にはお世話になりっぱなしだな……。今度、何かお礼でもしようかと心に決めて、私も屋上を後にした。もう決戦まで、時間は残り僅かだ。

試運転、という訳ではないが、私は試しに念話を試してみた。実戦で使えなければ元も子もないからだ。

(アヴェンジャー、聞こえる?)

(聞こえています。どうやら、確かに成功したようね。これでひとまずは一安心、といったところかしら?)

おお……!

アヴェンジャーの声が頭に直接響いてくるようだ。これが念話——テレパシーか!!

(魔力を消費するもののようにだし、念話を使う際のルールを設けましょう。一つ、エネミー戦では用いない事。一つ、サーヴァント戦、ひいては他マスターやサーヴァントが居る前で内々の会話をする時に用いる事。なので、くれぐれも下らない事を話すために使わないように)

うぐ……念話をしながら、念話についてのルールを敷かれてしまうとは。ちよくちよくしょうもない事を念話で呟いてやろうと思っていたのに。

どうやらアヴェンジャーにはお見通しだったらしく、先手を打たれてしまったようだ。

(念話の試用はこれくらいで良いでしょう。そろそろ良い時間です。さあ、行くわよマスター。これまでの借り、その全てをあのアーチャーに返してやろうじゃない)

流石は復讐者の英霊。仕返しは彼女にとっては絶対であるらしい。でもまあ、私だつて彼には奇襲からの不意打ちと仕込み毒という借りがある。あまつさえ、死にかけたのだし、恨み言の一つでもぶつけてやろうではないか。

正午。つまりは私とダンの決戦の時間。

ついに、この時が来た。未だ実戦経験の不足する私と、戦闘も人生経験も遥かに熟練された老騎士が、その命を賭して雌雄を決する、運

命の決戦の刻。

「ようこそ、決戦の地へ。身支度は全て整えたかね？」

相も変わらず、胡散臭い神父は決戦場への入り口である、用具室の前に陣取っていた。

「扉は一つ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、コロッセオ闘技場の扉を開こう」

聞かれるまでもない。そのために、私はここへと赴いたのだから。

「いいだろう、若き闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。ささやかながら幸運を祈ろう。再びこの校舎に戻る事を。そして——存分に、殺し合い給え」

一回戦の決戦前と寸分違わぬその台詞を告げ、言峰は横へとずれて扉の前を私に譲る。

私は扉の前に立つと、端末を翳し、手に入れたトリガーでその施錠を解錠した。

扉は鍵を解かれた事で、扉からエレベーターへと姿を変えて、ゆっくりと開き、内部へと私を誘う。

まるで地獄への入り口かのように、ぽつかりと口を開けた黄泉への門であるかのように。

入れば最後、生きては帰さぬとばかりに、私を招き入れてエレベーターは扉を閉ざした。

そして、私を乗せて、箱は下へと降りていく。否、落ちていく。

これから向かうは一種の地獄。人と人、魔術師と魔術師。英雄と英雄とが、互いの存在を、もしくは欲望を懸けて殺し合う、泥沼のような死地。それこそが、この箱の行き着く終着点なのだから。

そう。だからこそ、落ちていくというのが正しい。そこは、地獄の一つに他ならないのだとすれば——。

数分の間、ひたすらに下へと降りていく感覚を味わって、やがて黒

一色だった視界は鮮明な色彩を取り戻していく。

「……………」

その中で、正面では対戦相手であるダンとアーチャーの悠然と佇む姿が視認出来た。向こうも、こちらの姿を確認したはずだが、ダンも静かに、私を見つめているのみ。

「…………ふん。余裕とでも言わんばかりのその態度、倒して当然の敵とは語る必要すらも無い——ってワケかしら？」

アヴェンジャーがダンの毅然とした立ち振る舞いに対し、かなり喧嘩腰で煽りに行く。

アヴェンジャーからしてみれば、ダンが騎士である事は勿論の事、その姿勢も態度も、何から何まで気に入らないが故に食ってかかるのだろう。

もしかすると、騎士という存在に対して何か思うところがあるのかもしれない。

「……………」

それでもなお、ダンは口を開こうとはしなかった。挑発には動じないどころか、それすらも歯牙にかけない意思の強さが、はつきりと伝わってくる。

「止めとけ止めとけ。どんだけ騒ぐうが、無駄だつて」

と、マスターを差し置いて、緑衣のアーチャーが口を挟んでくる。そういえば、どちらかと言うとこのサーヴァントは口の達者な部類だったと思い出し、アヴェンジャーも標的をダンから彼へと変更する。

「うちのダンナは無駄が無き過ぎてねえ。茶飲み話とはいかねえのよ。それこそ、挑発なんざまるで堪えない。やるだけ無意味ってなんよ」

「…………チツ。言われてみれば確かに、その老騎士がこの程度の挑発に動じるとも思えないわね」

「そういうことだ。ま、でもだ。どういう訳か、ダンナはお嬢さんには多少の関心があるようですね。どうよ、そっちのマスターさん。うちのマスターに話しかけてみないかい？ そのサーヴァントよりかは、

ちつとは気にかけてくれるかもしれないぜ?」

アーチャーの申し出に、確かに、ダンが私をジツと見つめている事から、少しは私に関心を持っているのだとは分かるが……。

さて、話すにしても、何を話そうか。ここは思った事を素直に口に出してみても良いかもしれない。

「ダン・ブラックモア。あなたは、何故戦うの?」

英国女王の騎士であるとは聞いていたが、だからといって、年老いた身でありながらどうして聖杯戦争に臨んだのか。

軍人として女王の命令に従ったにしても、死ぬかもしれない分かっていながら戦う理由が、単なる女子高生である私には、どうしても分からなかった。

これまで、このエレベーターの中で寡黙を通していたダンだったが、私の問い掛けに対し初めて口を開く。

「戦いに何故はない。戦地に赴いた以上、あるのは目的だけだ。加えるなら、わしは国に仕える軍人でもあった。個人に戦う理由は必要とされなかった」

それは、つまり……「個人としての理由はなく、軍人としての役割のみで殺し合いに参加した」という事か?

「……今は、多少違うがな。であつても、何故と自問する事はない」  
多少違う? それは何が、と聞こうとするも、彼は再び口を閉じてしまった。これ以上の詰問は無駄だろう。

「ありや、ほんの少しは口を開いてくれたが、やっぱそれ以上は無理だったか。ご苦労さん、つまみ程度には楽しめたぜ」

アーチャーは今の結果を見て、カラカラと呑気に笑う。というか、多分この結果は彼にとって想定内だったに違いない。

でなければ、無意味と分かつていて私に話相手をさせようとするはずもない。要は、からかわれたのだ。

「ハッ。趣味の悪い男ね。そんなんだから、根が善良なのにひねくれ者なんて言われるのよ」

「おいおい、誰が言つてんのよそんなコト? ってか、アレか? おたく、やっぱオレの事を知つてるのな? まったく、どこかで腐れ縁で



もあつたのかねえ」

「やっぱり……。アーチャーはアヴェンジャーについては何も知らないようだ。となると、余計にアヴェンジャーの聖杯戦争に参加するまでの経緯が気になるのだが、今は聞くべき時ではないのも確か。」

目の前の戦いに集中する事を第一にすべきだろう。

「それにしてもだ。互いに真つ当な英霊じゃないにしたって、何でもたこうもマスターに差があるかね。うちのダンナなんてちよいと潔癖すぎるもんで、英霊らしからぬオレとしちゃあ困りもんだ。ま、マスターとしても魔術師としても未熟なお嬢さんとも相性は悪いだろうけどな」

「そうね。アンタにお似合いのマスターは、それこそ暗殺者ってところかしら。うちのマスターも良い子ちゃんだし、アンタのやり口とは相容れないでしょうから」

あ、今うちのつて言ってくれた。やだ、なんかちよつと嬉しいかも……！

「ああ、なるほど。それは分かるね。どう見たって人畜無害そうな顔してんもんなあ。なら、復讐者のサーヴァントのマスターとか、正直などこ疲れるでしょ？ 王道とは正反対の立ち位置なワケだし？ なあそつちのマスターさんよ。闇討ち、不意打ち、騙し討ちは嫌いかい？ つてか、そもそも汚い殺し合いはダメ？ 卑怯な手口は認められないかい？」

気付けば話題は、いつの間にかダンから私へとチェンジしていた。

にしても、卑怯な手口か……。

「否定は出来ない、かな」

うん、言い得て妙だ。

確かに、そういつたやり方は好ましくはないが、だけでも別に全否定するでもなく。

このアーチャーの戦法だつて、一つの戦い方に過ぎないとさえ考えられている私が居る。

そもそも、これは戦争なのだから、殺し合う工夫も千差万別、人それぞれだ。私だつて、生きるためとはいえ、既にこの手を汚している。

慎二の命を奪った私が、誰かの事を否定する権利など無い。

私の答えに満足したのか、アーチャーはニヤリと小さく笑った。

「そいつあ上々。毒と女は使いようってな。いい勝負になりそうだな」  
「ずいぶんと楽しそうだな。アーチャーよ」

嬉々として語るアーチャーに、どういう事か沈黙を良しとしていたはずのダンが、彼に話し掛けた。サーヴァントの様子が、ダンからすれば奇異であったのだろうか。

だって彼らは何となくギスギスしていたし。

「おや。そう見えましたがい、ダンナ?」

「……うむ。戦いを目前に控えながら、倒すべき敵の人となりを楽しんでいる。……少なくともわしにはそう見えるな」

「ご明察。お喋りなのは、ま、大目にみていただければと。なにしろ敵と話す事自体珍しくて。あと、ダンナはもちつと若者の生の声つてのに耳い傾けるべきですよ? これ以上老けちゃったらつまんないっしょ」

「……気遣いには感謝するが、無用だよ。戦いに相互理解は、余分な荷物だ。敵を知るのは決着の後にすべきだな」

「うは、ほんつと遊びがねえよこの人! ただでさえハードな殺し合いなのに、余計ストレスが溜まつちまいそうだ。いやね、理屈は分かるんですがね? 色々話し込んで敵に情が湧いちやあやり辛いし。しかも、それが孫くらい年の離れた小娘ときちやあ、ダンナの心も痛むってもんだ」

余計な事をあれこれ考えるのは全て終わってから。ダンが言いたいのはそういう事なのだろう。アーチャーの意見も正論ではあるが、果たしてそれがダンに当てはまるのかと言えば、正直なところ分からない。

彼が、戦いにおいて一時の感情に左右されるとも思えないし。

「つつてもだ、こんなんじや次あたりに気疲れで自滅しちまいますよ? なあ、アンタもそう思うだろ?」

そして、また私に話を振ってくるアーチャー。

だが、まあ……彼の言う事も一理ある。

「せつかくなら、楽しくいきたい」

これはライダーとの一戦を経たからこそ、答える事の出来た答えだ。

彼女は消滅するその刹那まで、全てを楽しんで生きていた。慎二とのやりとりも、敵との殺し合いまでも、そして自らの死でさえも。

その在り方は、私にはとても眩しく映ったのだ。何も思い出せない空っぽの私でも、彼女のように、せめて今を楽しむ事が出来れば、少しは意味のある戦いになると思えるから。

いつ死んでもおかしくないのなら、せめて全力を尽くして、全力で楽しんで生きていたい。

虚しさだけを噛み締めてこの先も戦い続けるのは、何か間違っていると思うから。

「だろ？　なんであれクソツタレな人生だ。気持ちだけでもエンジョイしねえと、今際の際はまあ惨めなもんですよ、と」

「……やれやれ。やはり、まだ欠落しているようだな。戦う意思、その覚悟が」

「いいじゃないですかダンナ。青春、葛藤、大いに結構！　こっちの仕事が楽になる一方だからね！　その無防備な背中を後ろからシュツパーンとね。アーチャーの面目躍如ってワケですよ。理想とか騎士道とか、そんなの重苦しいだけです。死に際は身軽じゃなくっちゃね」

生前の経験からか、アーチャーは人生をそういうものだと考えているのだろう。だからこそ、マスターであるダンと相容れない、チグハグなコンビであると言えるのだが。

「……だがアーチャーよ。戦いではわしの流儀に従ってもらおうぞ」

「げ。やっぱり今回もっスか。はいはい、分かってます、了解ですよ。オーダーには従います。あーあ、かっこいいよオレのマスターは。こんな小娘相手でも騎士道精神旺盛ときた。……けどなあ。誰でも自分の人生に誇りを持てるわけじゃねえって、そろそろ分かってほしいんだけどねえ……」

最後の、ボソリと呟くようなアーチャーの主張は、突如として起き

たエレベーターの揺れにより掻き消される。

——大きな音と激しい震動が伝わり、相手の言葉に圧倒されていた意識が戻ってきた。

——どうやら到着したらしい。ついに戦う時が来てしまったのだ。

目の前の——堅き意志を持つ軍人と——。

「発つぞ、アーチャー。戦場に還る時が来たようだ」

ダンからすれば、これまで幾度となく経験した戦場だろう。

だけど、私にとってはこれで二度目ではない、未だ恐れるべき、死と隣り合わせの世界。

せめて楽しみたい——そうは言ったが、やはり私の心は、それを大っぴらに受け入れるのは難しいようだ。

そう思えばこそ、ライダーは凄い人だったんだなど、改めてあの大海賊にして英雄の凄まじさを思い知る。

ダンと連れ立って、先にエレベーターから降りていくアーチャー。

彼らに勝たねば、私には未来はない。

「行きましょう、マスター。勝つわよ」

臆する私の頬に、アヴェンジャーの冷たい指先が添えられる。

ひやりとしたその感触に、私は一人ではないのだと思い出し、その指先に自身の指を重ねて、彼女へと応えよう。

「うん。行こう、アヴェンジャー！」

## 森の賢人、無貌の王

エレベーターから降り立った私の目にまず映ったもの、それはやはりというか、アリーナからも見えていたあのコロッセオの舞台上だった。

ここから見える景色には、逆にそのアリーナの影も形も見当たらず、既にあそこが私達にとつて、後戻りの許されないもはや完全に閉ざされた世界となったのだと思ひ知らせてくるようだ。

それが意味する事——つまりはもう前に進むしかないという事を。

水底に沈んだこの闘技場。敗者は文字通り、敗北と同時にこの闘技場と共に沈みゆく運命を辿る。

すなわち、この闘技場はまさしく私達か、彼らへの戦場にして墓場であるに他ならない。

私が辺りを観察する中で、敵マスター——ダンは、既に戦闘へと意識が固定されているのか、一点をひたすら見つめていた。

そう。戦うべきである、私の事を、彼は黙って見据えていたのだ。

私を見つめるその瞳には、どこか憂いが滲んでいるようにも思えるが……？

「……これが戦争なのだと理解はしている。だが、前途ある若者の、それもまだ年端もいかぬ少女の未来を、こんな先の長くない老人が摘み取ってしまったても良いものかとさえも思ってしまう。やはり、わしも年を取ったという事か」

「おいおいダンナ、端はなから分かったたはずだぜ？ 命のやりとりに女も子どもも関係ないってもんだ。戦場に立った以上、それが誰であれ倒すべき敵であり、殺すべき敵でしかねえってよ。どの道、向こうさんが死んだって自己責任なんすって。嫌なら最初から聖杯戦争に参加するなっつうね」

「……ああ、分かっているとも。どうあれ、戦うのみ。それが礼儀であらう」

ダンにしては珍しく弱気な発言であったが、それもアーチャーからの進言により、キレイさっぱりに払拭される。

目つきが戦士のそれへと変わるのが、素人の私からでも一目で感じ取れた。

「ここで決めるぞ、アーチャー」

「ああ、そうしようか。そろそろあのひねくれたお嬢さんに、世の中の厳しさを教えてやらねえとな！」

アーチャーのその言葉に、ピクリと眉を動かしたのは、私ではなく

「……あ、あ、？」

彼の視線から、それが自分へと向けられた言葉であると認識したアヴェンジャーは、いつもの三割増でドスの利いた声を出す。

明らかに今のでアヴェンジャーの機嫌が悪くなったのは、火を見るよりも明らかだった。

「アーチャー。今、何と言いましたか？ 聞き間違いかしら……貴方が私を、世間知らずのお嬢さん、と言ったように聞こえたのだけど？」  
「ああ、言ったとも。何も間違っちゃいないね。お前さんは身の程知らずにも、オレらに勝てるかと勘違いした夢見がちな小娘じゃねえの？」

——プチン。

……、今聞こえてはならないものが、確かに聞こえた気がした。

私はアーチャーからの挑発に、俯いて動かなくなったアヴェンジャーの顔を恐る恐る覗き込む。

「……す」

「え？」

ポツリと何かを呟いたと思った瞬間、アヴェンジャーは勢いよく顔を上げると、犬歯を剥き出し、目は見開いて黄金の瞳を最大限まで覗かせて、巨大な殺意を露わにアーチャーを睨み付けた。

「殺す。貴様は殺す。是が非でも殺す。否が応でも殺す。完膚なきま

でに殺す。私が世間知らずのお嬢さん……？ 夢見がちな小娘……？ 知ったような口をきくな、薄汚い鼠風情が!! ああいいとも。ならば見せてやりましょう、この身にくすぶる深淵よりも深く醸造された憎悪の刃、煉獄で鍛えた憤怒の炎を!! その体で思い知らせてあげる……!!!」

宣言と同時に、大鎌を顕現させるアヴェンジャー。彼女がここまで怒る姿は、私も初めて目にしただけに、戸惑いを禁じ得ない。

何がアヴェンジャーの琴線に触れてしまったのか。それは明白ではあるが、その理由までは計り知れない。

今のやりとりから、彼女の生前と関係があるのかもしれないが、ともあれアーチャーはそれを刺激してしまった。それが狙っての事なのか、もしくは偶発的な事であったのか。

どつちにしろ、アヴェンジャーが本気でキレた事に変わりない。

「おっと、コイツは地雷だったか。まさかそこまでキレるとは想定外」  
「馬鹿者が。挑発は時に逆効果にもなるものだ。お前は少しやりすぎるくらいがあるな、アーチャー。多少は弁える事も覚えるのだ」

「あく……これはちつとばかり反省モンつすわ。了解、騎士様ならこんな真似はしないと覚えときますんで」

アヴェンジャーの鬼気迫る迫力を前にしても、ダンもアーチャーもまるで堪えた様子はない。マスターである私ですら、溢れ出す彼女の殺気に、手に汗握っているというのに。

「無駄口はそこまです。飼い犬の粗相は飼い主の責任。特別に、老い先短いその命をもって償いとする事を許しましょう。なに、未来ある若者の糧となれるのです。枯れた大木にはこれ以上ない誉れでしょう?」

途方もない殺気を撒き散らして、アヴェンジャーはその殺意の刃の矛先をダンへと移す。復讐の魔女に相応しい、憎悪に満ち溢れた悪意ある笑顔を浮かべて。

先程までの怒りを、その全てを憎しみへと変換させた彼女は、これまでになく最高に冷静さを保つ。怒りに身を任せて力を振るうのではなく、確実に標的を仕留めんが為に。

「ほう……。怒りに我を忘れる程、愚かではないと見える。なるほど、確かに難敵。細心の警戒を怠るな、アーチャーよ」

「あいよ。んじゃま、始めるとするかねえ!!」

挑発の応酬は、その一言で終わりを告げる。

アーチャーはマントを翻し、右腕に備え付けのボウガンのような弓を出現させた。こうしてゆっくり見るのは初めてだが、あの控えめな装飾で小振りの弓が、彼の宝具である『祈りの弓』だ。

「手加減無しだ。最初からトバすぜえ! 『無貌の王』、参る……!!」

何か仕掛けてくる。そう思い身構えた私達だったが、次の瞬間には、その顔を驚愕が支配していた。

「消えた!?!」

目の前で起きた現象に、私は思わず声を上げて驚く。それもそのはず、目の前にあったアーチャーの姿が忽然と消失したからだ。

いや、姿を隠す宝具やらスキルが有るのは知っていた。だけど、それをただ知っているのと目前で見るとでは、大きく異なってくるのも仕方ないだろう。

現実では有り得ない光景も、この魔術と電脳の世界、殊更サーヴァント達からすれば当たり前前でもある日常ふつうに、私は考え直しが必要だと思ひ知らされる。

私にとつての異常は、この世界に生きる者達にとつては通常なのである、と。

こんな事でいちいち驚いていては、この先もつと奇怪な力を持つ相手にも苦戦するだろう。驚くよりも先にまずしなければならぬ事、それは対抗策を打ち出す事に他ならない。

「やっぱり厄介な宝具を持つてるわね」

それを既に行っているようで、アヴェンジャーはアーチャーが消えた事に驚いたのも束の間、即座に警戒心全開で周囲の異変の察知に努めていた。

(マスター。聞こえてるわね?)

「!」

と、いきなりの念話に、私は全身がびくりと震えた。使い慣れてい



ない上に、念頭に置いていなければびつくりするな、コレ。

(聞こえてるよ。何か対抗策があるの、アヴェンジャー?)

(有るには有ります。おそらく、攻撃の瞬間は透明化を解除する必要があるはず。その一瞬の隙を狙うわ)

なるほど。確かに強力な宝具であれスキルにしろ、何かしらのデメリットは存在するはず。現に、共に透明化しているはずの弓と、そこから放たれたであろう矢が私を襲ったあの時、飛来する矢を私は視認出来ていた。

あの時は、先に放たれた矢のせいで気付かなかったというだけで、二発目も透明だった訳ではなかったはずだ。

アヴェンジャーの狙いは理解した。だけど――

(そうだとしても、それは現実的な案には程遠いよ)

どこから攻撃してくるかも分からない。それどころか、彼が今どこに居るのかすら分からない。そんな状態で、その一瞬の隙を突くなんて無茶にも程がある。

(なら、どうしろと? 他に策があるのかしら、マスター?)

少し苛立ちながらも問い返してくるアヴェンジャー。まあ、自分の意見を否定されたのだから、彼女の性格からすれば当然とも言えるか。

だが、いつまでも無駄口ばかりも叩いていられない。アーチャーがいつ攻撃してきても最早おかしくはないのだ。

なら、早急に立てるべき策は……、

「……そうだ」

一つだけ。たった一つだけ、彼の透明化に対抗出来るかもしれない手がある。

それで透明化を破れるかは正直言って、かなりの賭けではあるが、それでも何もやらないよりはマシだろう。

(いい、アヴェンジャー……?)

敵はこちらが姿を消してから、気配を掴めないからか動く気配はない。

無闇に当たるより、来るであろう機会を窺っている、といったところか。

だが、それは無意味。その機会を与えてやる程、こつちも甘くはない。敵に己の位置を知られずに、それも複数を仕留める時に最適な方策とは、射撃位置を悟られぬように次から次へと狙撃ポイントを変える事だ。今回は狙いが一人だが、それでもやり方に変わりはない。

この宝具は、それを簡単に可能にする。攻撃の瞬間は解除されるという難点こそあるが、それも攻撃後すぐに姿を消して場所を転々とする事でクリア出来る。

撃つては隠れ、移動してまた撃つ。そしてまた隠れ、移動して——その繰り返しで、獲物の視界も思考もいとも簡単に混乱に陥れる。あつという間に死体の一丁上がりという訳だ。

さて、そろそろ仕掛けるとしよう。脳天を狙うには、あのサークレットが邪魔になる。やるなら側頭部、それから後頭部。

サーヴァント相手に矢を射て殺すというのも、なかなか難儀だ。たいていは化け物じみた反応速度で打ち落とされる。

だが、だからこそ、『顔のない王』だ。

姿を消し、気配を絶ち、息を殺して獲物に狙いを定める。この三つが揃った状態で、突如飛来する矢に対応するのは至難の技であるだろう。

(つつても、ホンモノの化け物にや即対応されるんだろうがね。いやいや、だから決戦は面倒なんだって話。見ろよあの敵マスターのお嬢ちゃん、あんなに無防備なのに決戦での故意のマスターへの攻撃はセラフから禁止とか、オレに対するお預けにも程があるつてもんではしょ)

——だからこそ、あの時、彼女を仕留められなかった事が悔やまれる。猶予期間のみ、サーヴァントは敵マスターへの危害を加える事が許されるのだ。それをみすみす逃してしまったが故に、今こうしてス

テータス低下というハンデまで受けて決戦に臨んでいるのだから。

(あー、撃ちてえ。あんな無防備なターゲット、確実に殺せるんだがね……。ほら、決戦だつてのに片眼鏡とか取り出しちゃって。なに？

オシヤレなの？ 命のやり取りの最中でも、女にや身だしなみと化粧は大事つてか?)

どうあれ、サーヴァントを撃つ以上、あの素人マスターはほつといても問題ない。素人に『顔のない王』を攻略出来るはずもなし。

敵から見て左方の少し離れた位置に陣取り、アヴェンジャーの左側頭部に狙いを定める。

出来ればコレで死んでくれたら僥倖。外しても、すぐに死角に移動して次を射れば良い。

こちらは常に先手を許されているようなもの。後手後手に回る相手には反撃すらも許さない。

(……)

だが、何だ？

微かに感じる、妙な違和感。この場の誰もが、マスターであるダンスえもが、自分の位置を把握していないというのに。

なのに、ここに留まるべきではないと直感が告げているような、予感めいた悪寒。

(まさか)

そう思った瞬間、ふと、あの素人マスターである少女に視線を向けた。

(マジか……!!)

こちらが彼女を見ているのと同じように、彼女もまた、こちらを見ていた。

片目は閉じて、モノクルの掛かった方の瞳だけが、真っ直ぐに見つめてくる。

姿が見えないこちらの姿を、あの少女は明確に捉えているとも言えるのだろうか。

だけど、その瞳は一点を見つめて動こうとはしない。

戸惑いを隠せず、バレているのなら撃つべきか計りかねていると、

「アヴェンジャー、あっちー！」

やはりというべきか、あの敵マスター——岸波白野は、こちらを指差してサーヴァントに位置を教えてきた。

（チィッ！ やっぱ見えてやがる!!）

岸波白野の声に反応し、アヴェンジャーもこっちに振り向くや、即座に手にした大鎌を横に薙いだ。いや、振り向き様に同時に鎌を振ったというのが正しいか。

刃に炎を乗せたその一撃は、こっちに向かって炎の斬撃となつて一直線に飛来してくる。

「うおお!」

あまりの不意打ちに、無我夢中で咄嗟に回避した為に『顔のない王』が半強制的に解除される形となる。透明化が解かれ、敵に己の姿が露わとなった。

「危ねえく……。そんな事まで出来んのオタク!? 斬撃飛ばすとかマングかつての!! つうか、ちよつと多芸すぎんでしょ!」

「見つけたわよ、アーチャー。コソコソしないと戦えないとか、情けない英霊も居たものね?」

姿を視認出来た途端にこれだ。あれを看破したのはマスターであつて、彼女自身ではないのだが、それでもこう得意気にされるのは癪ではある。

「言うじゃねえの。ま、『顔のない王』を破つたのは誉めてやるよ。アంతじゃなくてそっちのお嬢さんにだがな」

だが、これは厄介だ。侮っていたが、まさかこんなにもすぐに『顔のない王』に対応する手を打つてくるとは。

やはり、仕損じたあの日に感じたアレは間違いではなかった、という事か。

頭の回転の速さも、洞察力の鋭さも、機転の良さも、戦闘での勘も、全てがこのたった一週間という短い猶予期間の間で急成長を見せている。

このマスターが、とんでもない大物へと化ける可能性をその華奢な体の内に秘めているという事実は、もはや否定のしようがないだろ

う。

「さて、どうするかね……？」

「よし、これで透明化の問題は解決だ……！」

もしもの可能性に賭けてみたが、幸いにも賭けには勝った。

片眼鏡——つまりは『聖者のモノクル』には、端末からスロットに  
装備する以外にも、直接身に着ける事で効果がある。

第一回戦の際に、慎二が仕掛けたトラップを見破った時のように、この目に見えないものを暴く力なら、アーチャーの透明化も無効に出来るかもしれない……といった、淡い期待ではあったのだが。

「……これは驚いた」

アーチャーの透明化を破ったからか、ダンはそれこそ面食らったように私へと驚愕の視線を送ってくる。

「いや、礼装を直接身に着ける事もだが、まさかそのような効力を秘めているとは。若さゆえの柔軟な発想の賜物か、それとも魔術師として未熟であるゆえの偶然の産物か。いずれにせよ、敵であれ賞賛に値する機転の良さだ」

「え……？ その、えっと、ど、どうも……？」

こいつも素直に褒められるのは、少しこそばゆいというか奇妙な感覚だ。

慎二なんかは、自分の実力とライダーの強さを過信するあまり、戦法や作戦を突破されると頑なに認めようとしなかった。

まして、私を賞賛などするはずもなく、だからこそダンにそんな言葉を掛けられて、違和感のように感じてしまったのだ。

「おいおいダンナ、敵を挑発するのは有りで、褒めるのは無しってなモンだって。いやね？ それで敵さんが調子に乗って自滅してくれる分には結構なんですよ？ でも、それも時と場合があるんすよね。ほら、そのサーヴァントの顔見てくれよ」

アーチャーに言われて、ダンと、私も釣られてアヴェンジャーの顔を窺うと、そこにはとても面白く無さそうな、明らかかな不満顔があった。

「ほら。独占欲の強いお嬢さんだコトで、他人、それも敵に自分のマスターが褒められて、しかもそのマスターもデレデレと嬉しそうにするもんだから、一気に不機嫌ってワケっすよ」

「う、うるさい!! てきとうな事を言うな!!」

指摘されたのが凶星だったのか、みるみるうちに顔を紅くして、すごい剣幕で怒鳴り立てるアヴェンジャー。かわいい。

「……。決戦であるというのに、なんとも締まらん空気なものだ。アーチャー、気を引き締めよ。これよりはふざける事も許さん。宝具の解放も認めよう。森の賢人よ、その力を余す事なく発揮するが良いい」

静かな闘志を燃やして、老騎士は弓兵へと制限の禁を解く。

そうだ、これは戦いなのだ。いつまでもお遊び気分でいる事の方が間違い。

「おっと。なら遺憾なく、オレのやり方でやれる。悪く思うなよ、これから先は毒の横行。神経毒に麻痺毒、仕込み毒に毒粉末玉と、あらゆる毒のオンパレードだぜ」

透明化を破った程度では、彼らの闘牙はまるで弱まらない。むしろ、毒こそがアーチャーの本領。一発でも喰らえば、途端に窮地に陥るは必至。

(アヴェンジャー、治療薬は多めに買ってあるけど、なるべく毒は受けないで。向こうはほぼ無限に毒を強いてくるだろうけど、こっちは解毒するにも限りがあるよ)

(分かっている。アイツ、麻痺毒と口走っていた。動きを封じられるような毒以外は治療薬を使わなくても良いわ。それと、敵の宝具の真名解放には注意して。マテリアルにあった通りなら、毒を受けたまま宝具を喰らうのは拙いでしょうから)

アーチャーの宝具……、確か対象の体内にある不浄を膨れ上がらせて爆発させる——だったか？

毒を受けた身で宝具を受ければ、体内から爆発する可能性が高い。常にいつ爆発するかも分からない爆弾を抱えながら、起爆スイッチを持った相手と戦わされるようなものだ。

「そら、美味しい毒だ。喰らうときな！」

言うや、アーチャーは早業で矢を射てきた。一発放つてからの間髪入れずの連射は、さながら西部劇のガンマンのようだ。

狙いは全てアヴェンジャーの肌が露出している部分。すなわち、甲冑やガントレットが無い箇所だ。確実に、掠り傷でも毒を与えようという意図が丸分かりである。

「フン……ナメられたもんね」

どこを狙ってくるかが分かっているなら、対応するのは難しい話ではない。アヴェンジャーは鎌を用いて飛来する数本の矢を器用に一風ぎにて打ち払う。

「……い・アヴェンジャー、下がって!!」

アーチャーがすぐに次の矢を射てくるが、その際に小さな丸い袋も投擲されているのに気付く。

「ハッ！ 気付いたところで意味無いぜ」

アーチャーは私がそれに気付くのも計算の内だと言わんばかりに、自信に満ちた顔で、鼻で笑い飛ばすと、小袋を的確に射抜いた。

矢が小袋を貫くと同時に、中に詰まっていた緑色の粉末が辺り一面へと散布される。あの粉は絶対に毒だ。

「……!!」

アヴェンジャーも毒を吸わないように手で鼻と口を塞ぐと、後ろに下がりながら炎で毒の粉末を焼き払う。

「隙だらけってねえ！」

が、毒に気を取られている間に、素早く回り込んできたアーチャーが斜め前方で弓を構えていた。

当然、回避行動真つ最中のアヴェンジャーは顔だけをそちらに向けてる事しか出来ず、頭、腕、内股に目掛けて放たれた凶刃ならぬ凶矢を、致命傷である頭のみを首を逸らして回避するだけで精一杯だった。

「あぐっ」

腕と太腿に傷を負い、更にはそこから回った毒のためか、アヴェンジャーは上手く着地出来ずに背中から地面に落ちる。

「体が……動、か……!!」

麻痺毒……!!

私は受けた毒が麻痺毒だと察知するや、アーチャーを守り刀による魔弾で牽制しながら、アヴェンジャーに治療薬を投与する。

「おっと。なんだ、アンタそんなもんなまで使えるのか。迂闊に手出しするなつての？ でもまあ、オレもナメられたもんだ、なつと!!」

「!!」

牽制の甲斐も虚しく、アーチャーはアヴェンジャーにトドメを刺そうと毒矢を射る。

ただ、私は既に治療薬を投与済みだ。故に、

「クソがッ！」

自身へと迫り来る矢を、握り直した鎌を雑に振り回し、それを払い落とした。

「チツ。解毒が間に合ってたか。んじゃあ次行くぜえ！」

トドメが刺せなかったと見るや、アーチャーはすぐに毒の詰まった小袋を数個を懐から取り出すと、さっきのように投げてからそれぞれを矢で射抜いていく。

破けた袋は宙で毒の粉末をばらまき、再び空間を、空気を毒で満たしていく。

「マスター、口を塞ぎなさい！」

言われ、私は慌てて口元を両手で覆った。幸いにも、毒が広がっているのは前方だけ。後ろはまだ毒の魔の手が及んではない。

急ぎ後ろへ下がるが、地味に厳しい状況だ。場を相手にコントロールされる上に、動ける範囲も制限され、戦い辛いことこの上ない。

炎で焼き払えるといえども、さっきのように不意を打たれる可能性も大きい。

かといって、動かなければ敵の良い的になる。

さて、この難関……どう突破するべきか？



## 毒の名手

緑色をした毒霧は、辛うじてこちらの視界を完全には奪い切れておらず、アーチャーの姿も向こう側に確認出来ている。

この状態で、対策もなく透明化を使われればゲームオーバーだろう。だが、『聖者のモノクル』により、私だけは彼が姿を消そうが見逃さないで済む。

アーチャーもそれが分かっているのだろう、透明化はせずにこちらの動きを窺って、機を見ているようだ。

(マスター、一つ提案があります)

(何?)

おもむろに、アヴェンジャーが念話にて話しかけてくる。提案があるとの事だが、この状況を打開出来るのだろうか？

警戒だけは解かず、前を向いたまま彼女は続けた。

(貴方が、敵マスターに攻撃を仕掛けなさい)

——っ。

その提案に、私は言葉が詰まる。

私が、ダンを攻撃する？

何故？ 何の為に？ それにどんな意味があるのか？

私の混乱などつゆ知らず、アヴェンジャーはお構いなしとばかりに続きを話す。

(多分、貴方は把握してないでしょうけど、この聖杯戦争の決戦には、猶予期間のものとは異なった明確なルールが二つ存在しています。一つ、サーヴァントは決戦において敵マスターに攻撃出来ない。そしてもう一つ、マスターは敵サーヴァントにも敵マスターにも攻撃出来ない)

(……………え?)

いや、待て。ちょっと待ってほしい。それだと、色々とおかしい事がある。

思い出されるのは一回戦における決戦の折の事。確かライダーは

私に向けて銃撃してきたはずだ。彼女には遠慮もなければ、そこにセ  
ラフからの制約も特になかったと記憶しているが……。

（あれは貴方が標的ではなかった。単に、貴方諸共に私を攻撃したよ  
うに見えたというだけの話。あくまで私が狙いだっただから、副次的に  
発生するマスターへの被害はルールには当てはまらない……つてと  
ころかしら）

（つまり、あの時ライダーはルールの穴を上手く突いてきた、つて事  
？）

それならなんとなくではあるが納得出来る。問題は、それにより私  
が瀕死、あるいは死んでしまう事だろう。さすがにその攻撃で私が死  
ねば、ライダーは反則となっていたはず。

おそらく、ライダーは賭けだと分かった上であの攻撃を行った。彼  
女の性格からして、そういった賭けは好きそうだし、実行しても何ら  
おかしくはない。

（そして今回。今、空气中を漂うあの毒はルール上、マスターへの攻撃  
には見なされないでしょうね。だって、これはマスターを狙った訳で  
はないのだから）

ふむ、だからアヴェンジャーは私を急いで後ろに下がらせたのか。  
アヴェンジャーの動きを阻害する事を目的としているが、それにより  
副次的に私が毒の被害に遭う可能性があったし。

死ぬまでとはいかずとも、毒により私の動きが鈍ってしまえば、ア  
ヴェンジャーのサポートもままならない。そうなれば、彼女も毒を受  
けてしまったらその時点で私達はチェックメイトとなる危険も考え  
られる。

（このように、決戦でのルールにも穴があります。敵はそこを上手く  
利用してきますが、私達は逆にそのルールに則って仕掛けるのよ）

それは……多分、向こうもまさか私が攻撃を仕掛けてくるとは思い  
もしないだろう。

しかも、マスターとしても素人、魔術師としても素人で、誰かと近  
接戦闘を行った事もないような、どこにでも居るような女子高生の私  
だ。

私が彼らの立場だったとしても、私が直接攻撃してくるとは到底思わない。

だけど。

(でも、私が攻撃したところで、ダンに届くとも思えないんだけど……)

問題なのは、私程度ではダン程の強い戦士に到底及ばぬであろうという事。それは言わば蟻が巨象に挑むにも等しい愚行。彼からしてみれば、赤子の手を捻るようなものに違いない。

(だからこそ、よ)

けれど、そんな私の迷いをバツサリと断ち切ってくるのが、この魔女なのだ。

アヴェンジャーは一切の迷いなく断言する。それで良いと。弱くても、届かなくても構わないのだと。

復讐の魔女は、自らの主人の弱さを肯定した上で、その考えを口にする。

(いい？ マスターに戦闘能力が皆無だという事は、奴らにも筒抜けでしょう。だから、そんなマスターがあのお老騎士に特攻を掛けるのは、インパクトとしては十分すぎるくらいに効果を発揮するはず)

(確かにインパクトは大きいだろうけど、その先は?)

結局、私の力ではダンには遠く及ばないのに、そこからどうしろと言うのだろうか。

(別に勝ってって言ってる訳じゃないわ。マスターには、貴方が敵のマスターを攻撃するという事象を引き起こしてほしいだけ。その上で、アーチャーへとこちらが仕掛ける手を打つよ。時間もそう無いから、手短かに説明するわよ——、)

敵は一向に動きを見せない。このままでは散布した毒霧も、無意味に霧散してしまうだろう。

停滞はすべきではない。故に、アーチャーへと出すべき指示は……。

(アーチャー、ストックしている毒粉末も全て使用してしまつて構わん。場の支配を維持し、敵の周囲を毒で囲んでしまうのだ)

(了解つと。いやあ、ダンナもエグい手を打つもんだ。逃げ場を奪つちまえば敵さんも格好の的つてね)

アーチャーはこちらの指示通り、持っていた毒粉末入りの小袋を全て取り出すと、一斉に敵サーヴァントの方へと投げ捨てる。

「む……」

アーチャーがそれらを投げ捨て、射抜くよりも先に敵マスターである少女が包囲陣より単独で脱け出す。

サーヴァントを置いて離脱する事自体は愚かではない。サーヴァント諸共毒を浴びる事を避けたのだろう事は容易に想像がつく。

だが、あれでは毒の治療など到底不可能となつてしまつたろう。見たところ、彼女にコードキャストでの治療は出来ないはずだ。

でなければ、敵の接近を許してまで直接サーヴァントに治療薬を用いるなどという危険な行為はしない。以前アリーナで見たあれは奇策ではあつたが、同時に危険な賭けでもあつたに違いない。今回とて同じ事。

ならば、何故。

岸波白野はどうして、サーヴァントだけを置いてその場を離れる事を選んだのか。

機転が利くところを見るに、賢いタイプの人間であるように見受けられる。それゆえに、その事を分かつていない訳でもあるまいに。

彼女が取った行動には何か意味がある。そう思い、アーチャーには引き続きアヴェンジャーへの攻撃を任せながらも、わしは岸波白野の動向にのみ注意を払う。

そして、やはりというべきか、彼女は完成した毒霧の包囲網から離れると同時に、こちらへ向けて一直線に走り出してきた。

「なんと……！ 狙いはわしか……!?!」

この状況での彼女の突進は、もはやそれ以外には考えられない。岸

波白野は、自ら敵であるわしへと攻撃するという手段を選んだのだ。だが、無益。あまりにも無益なり。

長年、狙撃手として戦場に身を置いていたと言えど、これでも英国騎士の端くれ。近接戦闘とて当然ながら心得ている。

あの少女は確かに機転が利くし、頭の回転も良い。されど、身体は年相応の少女のそれで、身のこなしも戦士には程遠いもの。

敵わないと分かった上での特攻か、それとも何か策があるからこそ  
の突撃か。

どちらにせよ、体術で負ける気は全くしないのだが。

しかし、迷いのないその足取り。もしや、何かこちらの想定外の戦術でも練っているというのか？

そうこうしているうちに、少女はわしとの距離を詰めてくる。近くにまで来て分かったが、手には小刀を。もう片方の手に端末を持って  
いるようだ。

小刀はまだ分かる。それを武器として戦うつもりなのだろう。だが、端末は？ 一体何のために今、武器でもない端末を手に行っているのか？

それが判断を鈍らせ、どう対応するかを決めかねている間にも、少女は既に目と鼻の先までに迫っていた。

「むう……!?!」

歳故か、岸波白野の身体が若さ溢れる故か、想像以上に距離を詰めてくるのが早い。彼女は小刀の射程圏内に入るや、ナイフでも扱うかのように、左手に持った小刀で斬り上げてくる。

「せいやああああ!!!」

気迫の乗った一撃。けれども、腰の入っていないその斬り上げを、わしは寸でのところで体を後ろに下げるようにして避ける。

振り上げきって隙だらけの胴は、打ってくれとでも言わんばかりで、無論そこにガンドを撃ち込む。

「かはっ!?!」

「脇が甘い。腰も入っておらん。刃に怯えも見える。気迫だけではわしには届かんぞ」

胸にガンドをもらに受け、岸波白野は勢いあまって後方へと弾き飛ばされていく。今の一撃はまさしくクリーンヒットだった。ダメー  
ジは軽視出来ないはず。

「……ケホッ！　ゴホッ！　……くっ!!」

なのに。苦痛に顔を歪めながらも、少女は尚も歯を食いしばって立ち上がってくる。痛みに胸を押さえ、呼吸するのも苦しいだろうに、それなのに彼女の意思は折れていない。

戦う事への恐怖はある。だが、それ以上にサーヴァントへの信頼に応えたい——そんな感情が、岸波白野の目からは読み取れた。

「戦意が失われないのは良い事だろう。しかし、君とわしでは、戦闘経験の差が大きい。単純に向かってくるだけでは、そちらに勝ち目はない。ならばサーヴァント同士の決着を静かに見守るべきではないか？」

「確かに、私には技術も経験も、圧倒的に不足している。貴方になんて遠く及ばないのも分かっている。私程度じゃ、貴方には勝てないなんて百も承知。だけど」

本物の戦士とは、その技量がそれを示すものではない。本物の戦士が何を以て“本物”と言わせしめるのか、それは——

「それでも、私は見てるだけなんて出来ない。アヴェンジャーと一緒に、この聖杯戦争を戦っていききたい」

それは、何人にも負けぬという不屈の精神。実力差などお構いなしに、ただ勝つ為だけにしがき、抗う強き意志。負けも痛みも恐れぬ鋼の心。

それらを持つ者こそ、“本物の戦士”と呼ぶべきなのである。

そんな事が、彼女——岸波白野を見て、わしの脳裏には浮かんでいた。

そして、それこそが、こちらにとっては最大の間であり、彼女にとっては唯一無二の好機となってしまうのだ。

ただ、ただただ、彼女の心の有り様に感服した。そのほんの一瞬の

僅かな隙を、岸波白野は見逃さなかった。

予期せず訪れた好機に、彼女は的確にわしの意表を突いてみせたのである。

「……………グフツ!？」

意識の外から、突如この身を襲った、決して軽くない一撃。握り拳が腹を抉ったかのような、鈍い痛みにも、思考が一時停止する。

何が起きた？ 衝撃が来た方向からして、今の一撃は正面からによるものだ。ならば、やったのは岸波白野に違いない。

しかし、どうやって……………？

腹を押さえ、其方へと目を向けてみれば、いつの間にか小刀よりも更に短い見慣れぬ刀を持って、そしていかにもそれを振り切ったような姿の岸波白野の姿があった。

先程まで手にしていたはずの小刀は、気付けば腰のチエーンベルトに差し込まれている。

「……………なるほど、流星は若さ、だな」

一連の出来事、現在の状況から読み取るに、今のは岸波白野によるコードキャストでの攻撃だろう。

かつて見せた携帯端末の素早い操作で、今彼女が手にしている短刀を取り出し、そしてそれを用以てガンドのようなものを打ち出した。

あの短刀は、彼女にとって最大の隠し種であったのだろう。何せ、こちらも予想外の不意打ちに、良いダメージをもらってしまった。

「参考までに聞かせてくれないか。今の技は何だったのだね？」

こちらの問いかけに対し、彼女は存外にも素直に答える。一度使った技はもう通用しないと分かった上での判断だろう。

「空気撃ち／＼の太刀、です」

躊躇いなく、技——コードキャストの名前を口にした少女は、どこか清々しいまでに何事かを成し遂げたかのような顔をしていた。

——そしてそれを契機に、場の流れが変化していく。

「マジかよ……!? 老いてるとは言え、ウチのマスターは騎士だぞ。なのに素人がダンナにダメージを負わせるとかどういいう見なワケかね!？」

目に見えてアーチャーの顔には驚愕が浮かび上がっていた。まさかダン・ブラックモアが素人マスター相手に一本取られるとは、夢にも思わなかったからだろう。

彼は毒粉末による牢獄で、私の動きを封じ込められたと思っているのか、背後に居る自らのマスターへと視線を送った。

アーチャーが見せた油断、そして怠慢。後方に向ける視線はほんの一瞬のつもりだったのだろう。だけど、そのほんの一瞬が命取りになる。

「……………フフッ」

マスターは上手くやった。ならば、今度は私がやらなければ。

二秒にも満たないであろう好機。魔力を指先に集中させ、アーチャーが振り向くよりも先に、私は指を鳴らすと共に魔力を解放させた。

炎を放つのではなく、火花を散らす程度の魔力。だが、それで十二分に効果を発揮する。

小さな種火、それによつて巻き起こるのは遥かに上回る大爆発。いわゆる、「粉塵爆発」と呼ばれる現象である。

「!!?」

いきなりの爆発は、最も毒粉末の近くに居た私、そしてアーチャーに否応なく襲いかかった。

しかし、私はあらかじめこの爆発を頭に入れていたので、爆風を利用した炎の噴出で上へと逃れるという算段だ。まあ、無論ながら少しは爆発のダメージは喰らうので、無傷とまではいかないが。

それでもアーチャーは違う。彼は予期せぬ爆発を、かなり間近で受けてしまった。そのダメージは計り知れないものとなったはず。

爆発の余波は、マスター達の方にも出てはいたが、少しばかり熱風に煽られるという程度のもの。問題視する程の事でもない。



私は爆発から離れた位置に着地するや、すぐに大鎌を旗へと持ち替えて、未だ轟々と燃え盛る爆発の炎を、さながらモーゼの海割りのごとく左右へと分断する。

爆発の要因こそはアーチャーの毒粉末だが、それに発火させたのは我が炎。

ならば、あの爆発で生じた火炎は全て私のものと言っても過言ではない。それを操る事など造作もなく、出来て当たり前なのだ。

炎の割れた先、爆発で吹き飛ばされたアーチャーの姿を視界に捉えた。大ダメージを負ってはいるが、それでも致命傷までには至らなかったのだろう。手について今にも起き上がろうとしている。

「隙だらけよ!!」

私は炎の裂け目を縫うように走りながら、同時に黒槍を宙で形成する。仕上がった黒槍をアーチャー目掛けて射出し、腰に提げた剣を抜いて、旗との二刀流の要領で敵へと突進した。

「チィ、このクソが!!」

黒槍を矢で相殺させ、こちらが切迫するよりも早く、全身をバネのようにして後転倒立で体勢を整えるアーチャー。

私はお構いなしに二つの得物を、目の前の獲物へと問答無用に振り抜く。

「くおっ?」

剣こそ射程不足で届かないものの、旗の凧ぎ払いはアーチャーの胴へと入り、苦悶の声を捻り出させる。

そのまま力任せに彼の体ごと、旗を大振りに振り回して、アーチャーを思い切り振り飛ばした。

放り出されたアーチャーは、運が良いのか、たまたま己のマスターであるダン・ブラックモアの方向へと転がっていき、それと入れ替わりでマスターがこちらへと駆けてくる。

「アヴェンジャー! 作戦成功だよ!!」

想像以上の成功に、マスターの声も明らかに高揚を隠せていないが、それを指摘するのも今は野暮というもの。

私はちよつかいを掛ける事もせず、次へと意識を集中する。

「マスター、まだ戦いは終わっていません。敵の動きに注意しなさい」  
「う、うん……。でも、今のでアーチャーにも相当のダメージを与えられたはず——」

マスターは、そこでハツとしたように口を紡ぐ。どうやらマスターも気付いたらしい。

アーチャーは、まだ宝具の真名解放を行っていない。

これまで散々小細工をしてきたアーチャーだったが、彼の主力とも言うべき『祈りの弓』は、単なる武器としてしか扱っていなかった。なら、この状況で考えられるのは、宝具による逆転狙い。追い詰められた今こそ、宝具を使わずして何となる。

こちらの危惧は、やはりというべきか、当たっていた。

「まさかこれほどまでに追い込まれようとはな」

「まったくつすよ。素人マスターだと侮った結果がこのザマだ。ハッ、笑えねえ」

「だが、それでこそ戦うに値する。アーチャーよ、宝具を使え。これで決着を付ける」

「おうとも。仕込みは足りないが、まあ上々だろうさ」

ダンが宝具の使用を許可した。つまり、宝具の真名解放——敵の切り札を出してくるという事。

でも、『祈りの弓』の効力がマテリアルに書いてあった通りなら、こちらが毒を受けていないと意味がないはずなのだが……？

「悪いねえ、お嬢さんが隠し玉を持ってたみたいにさ、オレにも有ったりすんだわ。これがさ。注意しな、オレの宝具の真名解放は早いぜ？」

こちらの考えが読まれたかのように、アーチャーは的確にその答えを口に、し……た？

トスン。

そんな音でも聞こえてくるくらいに小気味良い、それでいてズブツという肉を抉る感覚があった。

途端、腕に走る鋭い痛み。そして腕を通して全身に広がる鈍い痛み。

もしかしなくても、私の腕に、矢が刺さっていた。

「ど、うし、て……?!」

「アヴェンジャー!? 一体どこから……?!」

分からなかった。私も、マスターも、どこから矢を射られたのかが、まるで分からなかった。

しかし、敵も待つてはくれない。アーチャーは既にこちらへと弓を向けていた。

「我が墓地はこの矢の先に——森の恵みよ、圧政者への毒となれ。毒血、深緑より沸き出する! 隠<sup>なほり</sup>の賢人、ドルイドの秘蹟を知れ——!!」

マスターが解毒するよりも早く、言葉の通り、アーチャーの短い詠唱が終わるとほぼ同時に、彼の宝具が真の力を露わとする。

弓より出でし大樹の腕が、地を這う蛇の如く、瞬く間に私の腕を絡め取り、締め上げるようにすっぽりと覆い尽くす。

抜け出そうにも、まるで動かず、びくともしない。

「アヴェンジャー、今からでも解毒すれば——」

マスターが目には涙を溜めて、端末から治療薬を現出させるが、そんな彼女の言葉を阻むかのように、無慈悲な言葉が被せられた。

「もう手遅れだぜ、お嬢さん?」

そして、次の瞬間には、私の腕は

——弾け飛んでいた。

たとえば、腕をもがれようとも

アヴェンジャーの腕を飲み込んだ大樹の太い腕は、爆裂するように内側から弾けた。

柘榴の実が内から炸裂するように。さながら手榴弾のような威力と勢いが、幹の内部で発生し、アヴェンジャーの腕諸共に吹き飛んだのだ。

……………。

いや、違う。そうじゃない。吹き飛んだのは、内から炸裂したのは、アヴェンジャーの腕自身だ。大樹の腕は、アヴェンジャーの腕を蝕んだ毒に作用し、それに働きかける役割であったのだろう。

「——あ、」

——などと、この時の私に考えている余裕もなく、後々に思い至っただけに過ぎず。

私は、目の前の現象を信じられず、ひたすらに茫然と立ち尽くしていた。

アヴェンジャーの左腕……肘より少し上のところまでが綺麗になくなっており、その反面、無くなった腕の断面は無理矢理に引きちぎられたかのように、ズタズタになっていた。

「——ああ、」

血は絶え間なく流れ、地面を真っ赤に染め上げていく。まるで血の池の中心に立っているかのような、血の湧き出る噴水の真横に自分が居るかのような、そんなおぞましい錯覚さえもした。

「——アヴェン、ジャー」

私には、もはや渴いた声しか出せない。今この目に映っているものは幻覚なのか。それとも夢であるのか。出来ればそうであってほしい。いや、そうであるべきだ。

だけど。

「グウウウウアアアアアアアア?!?!?」

堪えきれなくなった彼女の絶叫が、私を浅ましい幻から、非情なる

現実へと引き戻した。

アヴェンジャーの腕の炸裂と共に飛び散った血液が、私の頬を垂れていくのがとても生々しく感じられる。

そうだ。これは、紛れもない現実だ。

「ウウウウウウウウ!!!」

叫びながらも、アヴェンジャーは爆ぜた腕の断裂面から、これ以上の出血を抑えるべく、まだ残っていた右の手で傷口を炎で炙った。

麻酔もなくそんな事をすれば、どれだけの痛みを伴うか。それはもう、想像を絶する激痛が待っているだろう。

苦痛に顔を歪めて、アヴェンジャーは歯を食いしばり声が出るのも必死に堪えて腕の応急処置を終える。元々色の白かった肌は、血の気が引いて更に青白くなっているように見えた。

「グウ……ハア、ハア」

息は荒く、頬を汗が滝のように伝い、今なお痛みと戦っているのが見て取れる。

「どうだい？ オレの宝具の本当の使い方ってのはさ？」

それをやった張本人、アーチャーは得意気に笑いながら、アヴェンジャーの失われた腕を指差した。もはや勝利を確信したかのような、自信に満ち足りた声、そして顔に、アヴェンジャーが殺す勢いで睨みを返す。

「おっと。怖い怖い。そういやアンタ、復讐者だったもんな。なら、仕返しには気をつけねえとな？」

「アーチャー、油断するなど何度言わせるのだ。日本には『窮鼠猫を噛む』という言葉があるように、追い詰められた敵が何をしてくるのかは分からぬ。慢心は捨て置け。注意を怠るでないぞ」

軽口を叩くアーチャーを窘めるように、ダンが叱責の言葉を述べる。今の出来事に驚きが見られないその様子から、ダンには一連の流れが全て把握出来ているらしい。

「あの矢は……どこから撃った？」

口が利けるまでにはアヴェンジャーも落ち着いてきたのだろう、先程の不可視の一撃への疑問を、アーチャーへとぶつける。

それに、何でもないと言わんばかりの口振りで彼は答えてみせた。「冥土の土産に教えてやるかね。つつても簡単な話、オレの『顔のない王』がオレだけに、人間だけに効果があるなんて、いつ言った？ 別にオレ自身だけを透明に出来るんじゃないやなくて、物にだって適用されるってコトさ」

物も適用される……。それを聞き、私はハツとモノクルを通して周囲を見渡す。すると、今まで気付かなかったもの——小型の弓のようなもの、コロッセオをグルリと囲むように点在しているのが分かった。

「いやあ、正直ハラハラもんだったね。お嬢さんがオレの透明化を見破ったから、仕掛けもバレてやしないかってさ？ でもバレてなかったようで一安心。そんなら、不意打ち狙いで一発ってね。一斉放つちまえば、それこそバレて避けられるしな」

あの時、私は隅の方までには目を向けなかった。第一にアーチャーの姿を捉える事を目的としていたが故に、細かな所まで確認していなかったのだ。

そして、アーチャーが透明化している間に、更に透明化させた仕掛けをこのフィールドに準備している事に気付かなかった。

ひとえに、アヴェンジャーの負傷の責任は私にあると言っても過言ではない。

「私をもっとよく見ていれば……」

「マスター、終わった事を悔いるのは、戦いが終わってからにしない。私達はまだ、負けていない」

大鎌を消し、大樹の爆発によって遠くに吹き飛んでしまった旗を魔力で手繰り寄せながら、アヴェンジャーは私の前に入る。

隻腕になっても、彼女の闘志は未だ衰えず、その牙を研ぎ続けている。

他人からすれば、これは彼女の痩せ我慢かのようにも、虚勢を張っているだけに見えるかもしれない。

だけど、私は知っている。彼女がどれほどしつこい性格をしているのかを、マスターたる私は嫌と言う程に知っている。

故に、強がりでも何でも無い。アヴェンジャーはまだ本気で勝つつもりでいるのだ。

その彼女のマスターである私が、深手を負ってなおも前が出るアヴェンジャーに後れをとる訳にはいかないだろう。

「……………」

私はギュツと握り拳に力を入れると、俯いていた顔を上げ、アヴェンジャーの隣にまた並び立つ。

もう弱気とはサヨナラをしよう。今からは、弱音なんて吐いたりしない。それが、アヴェンジャーのマスターである私の責任なのだから。

「ダン・ブラックモア。あなたはさつき、『窮鼠猫を噛む』と日本のことわざを口にした」

突然の私からの名指しと指摘に、彼は訝しむように視線を向けてくるが、私は構わずに続きの言葉を紡ぐ。

「言葉の意味は、絶対絶命の窮地に追い詰められれば、弱い者でも強い者へと逆襲する事もある———というもの。これは弱者へと当てはめられる言葉でしょう。そして確かに、私は弱い。多分この聖杯戦争に参加した全てのマスターの中で一番だと思う」

それはアヴェンジャーにも何度も指摘された事。そして事実、私は素人に毛が生えた程度の実力しか有していない。

だけど、彼女は違う。

「でも、弱いのは私だけであって、アヴェンジャーは違う。アヴェンジャーは決して弱くなんか無い！ 私は……アヴェンジャーとなら、きつと弱い私でも戦える！ この命懸けの聖杯戦争でも、戦い抜いていける!!」

———私はそう、信じている。

力の限りの叫びを、獣の咆哮のように声高と上げて、私は自らの意思をダン、そしてアヴェンジャーへと告げた。

これは私の覚悟の表明でもある。意味を見出せなかったこの聖杯戦争への参加にも、戦う理由も、まだはつきりとは分かっていないけど。

それでも、私が戦う理由は、アヴェンジャーにあるのだ。彼女との契約こそが、今の私の戦う理由なのである。

「……そうか」

ダン私の心からの叫びに、口を挟むでもなく、また無視をするでもなく、ただ真つ直ぐに受け止めていた。

真摯に一人の少女の叫びを聞き届けた上で、彼は私を改めて見据える。

「信頼……か。サーヴァントを信じ、そして己もまたサーヴァントと共に険しい道のりを歩もうというその強い意思。なるほど、素人だなんだと言ったが、君はマスターとして誰よりも一流であろう。ならばこそ、こちらも持てる全てを出して戦いに臨もう」

「いやいやダンナ。もう宝具の真名解放もしたし、魔力もそろそろヤバいんですけど。何よりネタ切れなもんで、それこそ正攻法で正面からかち合うしか無いんだがね」

「それで良いではないか。そもそも、お前の破壊工作のスキルはわしからすれば邪道だった。それでもそれを許したのは、こちらの全力を示さねば相手に不敬であると判断したからだ。出し惜しむモノがもう無いならば、諦めて正々堂々と戦って勝て。これは命令だ、アーチャー」

「うへえ、結局最後はそうなのかよ……。ま、深手の敵にやられる程じゃないけどさ」

アーチャーが戦闘の構えを取る。どうやら言葉の通り、もう隠している技も手も無いのだろう。

宝具の使用もあつてか、流石のアーチャーにも、顔に疲労の色が浮かんでいる。

「腕を潰したのは良いが、どうせならアレでくたばってくれてたら楽だったのにねえ。そしたら、こんな面倒な事にならずに済んでたのによ」

「ほぎげ。どうせあの状況で私に当てられたのは腕だけだったんでしよう？ 二本三本ならまだしも、一本だけしか仕掛け弓を使わなかったのが良い証拠よ。それでも腕を狙ったのは、それが確実に当た



ると踏んだから。違う?」

旗を指差し代わりにアーチャーへと向けて言うアヴェンジャー。アーチャーは彼女の指摘には返答を返さず、むしろその無言こそが返答代わりであるのだと物語っていた。

(マスター、おそろく敵も相当に消耗しているはず。こつちも余裕は無いから、私達が勝ちを取りに行くなら、これからの戦闘が最後のチャンスとなるでしょう。私が高んとしてもアーチャーの隙を作るから、貴方はそこを絶対に見逃さないで。すかさず『一の太刀』のコードキャストを撃つよ)

一の太刀のコードキャスト——マスターに使えばガンドのような効果があるが、エネミーやサーヴァントなどに当たれば、一瞬だけだがその動きを封じられる。

無論、守り刀よりはその効力は劣るが、アヴェンジャーならそれでも十分に勝機へと繋げられるのだろう。

(うん。多分ダンも魔力はそう残ってないはずだけど、彼にも注意して絶対にチャンスをものにするよ)

(よろしい。じゃ、行くわよ……!!)

念話を断ち切るや否や、先手必勝とばかりにアヴェンジャーは旗を片手に走り出す。

弓兵である彼に白兵戦は不得手だと判断したが故に、距離を一気に詰めに行ったのだ。

「うおっ!? けっこうダメージデカいだろうに、突っ込んでくるか普通!?!」

「減らず口ばかり叩くな!!」

アヴェンジャーの突進に、アーチャーはバックステップで距離を詰められないように離れつつ、同時に近付いてくるアヴェンジャーへと矢を射る。

ただ、後退しながらの射撃だけに、先程までの連射は出来ないように、アヴェンジャーも確実に射られた矢を打ち落ししながら接近を続けられた。

「チツ！ ナメんなつての!!」

このままだと、いつまでやっても無駄であると分かったのか、急ブレーキするとアーチャーは逆に自分からアヴェンジャーへと進行方向を変える。

「もらった!!」

当然ながら、二人は真正面からぶつかり合う形となり、アヴェンジャーがここぞとばかりに、旗で風ぎ払いを繰り出す。

しかし、アーチャーはそれをしやがみ込んで、頭スレスレで寸でのところでかわし、そのまま勢いよくバツク転——サマーソルトキックへと移行した。

「くっ…!」

アヴェンジャーも、顎を引いてギリギリで回避するが、すかさず着地したアーチャーからの射撃が撃ち込まれる。

それを、旗の柄でどうにか弾くも、更にアーチャーによる追い打ちのキックは避けきれず、もろに腹に受けてしまう。

それによって少し体浮いたアヴェンジャーに、度重なる追撃で、今度は回し蹴りが襲いかかった。

「ガフツ…!!?」

サマーソルトキックから始まった、流れるような四連撃のうち、後の二発の蹴りによってアヴェンジャーはダメージを受けると共に、強制的にアーチャーから距離を離されてしまう。

「貴様…!!」

「どうよ!! 暇潰し用に買ったゲームから考案した技のお味は? 名

付けて、待ちガ〇ルならぬ誘い受けガ〇ル戦法!!」

「…!!」

待ちガ〇ル、だと…!!?

噂に聞いた事がある。とある街頭決闘なるゲームに登場する、頭髪が若干パイナップルなキャラとその技の特徴から、そういった戦法が存在する…と。

まさか現実でその戦法を取る者が居ようとは…。いや、アーチャーが言っていたように、さっきのあれは彼なりの改造版、といったところか。

「バカマスター！ 感心してる場合か！」

私の考えはどうやら筒抜けだったようで、もれなくアヴェンジャーからの叱責が飛んでくる。

いや、だが存外にも今のアーチャーの攻撃は馬鹿に出来ない。

何故なら、彼が弓だけの戦士ではないという事の証明でもあるからだ。元々、弓以外の道具や宝具も持っているのは分かっていたが、それなりに格闘術もこなせるのは厄介だろう。

だが、弓を手で扱う事もあってか、足技が主体のようにも見受けられる。今の一連の動作を見ても、足運びがスムーズ過ぎた点から、やはりそう推測出来る。

違う観点から見れば、腕か脚のどちらか、それもその片方だけでも封じられれば、一気にアーチャーの行動を制限出来るという事。

腕のどちらかであっても弓はもう扱えず、脚のどちらかであっても蹴り技と移動さえも不可能に追い込める。

致命傷を与えずとも、どれかをクリアするだけで、こちらが優位に立てるのは間違いないだろう。

そう考えると、アヴェンジャーが片手でも旗を振るえるのは、まさに不幸中の幸いだったと言える。こちらはまだ、アーチャーよりもアドバンテージを取られるリスクが少ないからだ。

さて、アーチャーの現状での戦闘スタイルについては少し理解した。だけど、そこからどう攻略へと繋げていくかが問題になってくる。

アーチャーと距離を取って戦うのは愚策。わざわざ敵の戦いやすい環境を与えるべきではない。

なら、やはり接近戦しかない。足技があると言っても、彼の本質は狩人。弓程には得意ではないはずだ。であれば、まだこちらにも勝機はある。

(アヴェンジャー、なるべくアーチャーとの距離を開けすぎず、接近戦を心掛けて。アーチャーの誘い受けガールにも要注意だよ)

(了解……だけど、締まらないわね。本気でその呼び名を使ってるあたり、腕だけじゃなくて頭も痛くなってくるわ……)

呆れながらも、アヴェンジャーは私の指示を了承した。どうあれ、もう長期戦は見込めないし、そこまで持ち込む訳にもいかない。

勝負は一瞬。私がアーチャーの隙を突けなければ、勝ち目はほぼ無いに等しい。死に物狂いで集中しなければ……。

「へいへい、どうしたどうした？ そっちが来ないってんなら、こっちから仕掛けるぜ」

アーチャーの挑発かと思えた言葉は、真実アヴェンジャーへの攻撃宣言となる。

先程アヴェンジャーの腕を奪うキツカケともなった、透明化された仕掛け弓が次々に起動したのだ。

「アヴェンジャー!!」

「分かっているっての!!」

今度はさっきの二の舞にならぬよう、アーチャーだけでなく周囲にも細心の注意を払って警戒していたおかげで、仕掛け弓の起動にいち早く気付いた私は声を張り上げてアヴェンジャーに危機を伝えた。

アヴェンジャーも、私の叫びが何を意味しているのかを理解し、その場で一際強く地面に旗を突き立てると、自身の周囲を炎の壁で覆い尽くす。

数多の矢は火炎の壁に吸い込まれるように消えていき、鏃の鉄さえをも溶かして、灰も塵も残さずに燃え尽きていく。

「クソツ、つくづく相性悪いなアンタ!」

「こっちは最高に拔群よ！ 喰らえ!!」

見えない矢の雨を凌ぎ切ると、アヴェンジャーは炎の壁を渦へと形状変化させ、旗で敵を指して焼き尽くすよう命じる。

そして彼女自身も、炎を操りながらアーチャーへと再度の接近を開始した。

「ちよ、そんなんアリかよ!」

自らに襲い来る炎の渦に、アーチャーも矢では為す術もなく、後退せざるを得ない。だが、炎は彼の足よりも速く、早く、なお迅く、ともすれば次の瞬間には彼の腕を掠める程までに肉迫していた。

「アツツ!! ヤベ、もう追い付かれたか……!!」

「アーチャー、せめてサーヴァントだけでもわしが動きを止める。その間に彼女から距離を取れ」

サーヴァントのピンチに、ダンはガンドの構えでアヴェンジャーを狙う。炎は無理でも、アヴェンジャーの動きを阻害するくらいなら出来る考えたのだろう。

しかし、

「当たりません……!!」

狙いが分かっているのなら、対処するのは難しくない。放たれたピンポン玉程の大きさのガンドを、アヴェンジャーはバットでも振るかの如く、旗で打ち返し、逆にアーチャーへと軌道を変えたのだ。

無論、超速で飛んできたガンドを、それなりの近さではかわす事も困難であり、アーチャーの腹へと見事にめり込む。

「カハッ!」

「なに……!?!」

——そう。

今こそが千載一遇の好機。ダンはガンドを撃つばかりで、アーチャーはよりにもよって、アヴェンジャーの手で自らのマスターのガンドを受けてしまい隙が生じた。

マスター、サーヴァント共に次の行動に移るまでの数秒にも満たない、本当に一瞬の僅かな隙。

私は頭で考えるまでもなく、その最大の好機を前に、既に体がやるべき事を行っていた。

いつその時が来ても良いように、ずっと握りしめていたソレを、気付いた時には叫び声と共に振り下ろしていた。

「空気撃ち／＼の太刀——!!」

そして放たれる光弾は、アーチャー目掛けて一直線に飛んでいく。「マズッ……!!」

もちろん、標的であるアーチャーにも私の攻撃は気付かれる。でも、これだけは回避される訳にはいかない。

当たれ——半ば祈るように、私は自らの手から離れて、アーチャーへと飛んでいく光弾の行く末を見守っていた。

もはや、それしか私に出来る事は残されていなかったから。

「ぬおおお!!!」

けれども。アーチャーとて、それに当たれば終わりだと分かっていた。彼もまた、死に物狂いで戦いに臨んでいるのだ。

故にこそ、彼は仰け反る体を無理矢理に捻り、光弾の軌道から僅かに反れようとし、そして軌道から見事に外れる。

このまま行けば、アーチャーの体スレスレで光弾は通り抜けていくだろう。最後の最後で、私の攻撃は彼に届かなかった。

もはや万事休すか……。

「いいえ。私達の勝ちよ」

私が諦めた次の瞬間、パチンと指を鳴らす音が響いた。そして、それが合図であったかのように、アーチャーの脇辺りで小さな爆発が発生し、光弾の軌道から反れたはずの彼の体が元の位置へと押し戻される。

「ガッ!!?」

それにより、アーチャーの胸のど真ん中に光弾は命中し、彼の動きを完全に停止させた。

「目に目を。歯には歯を。それこそが、復讐の原典であると知れ」

勝ちを確信した魔女は怪しく笑う。古より語られし復讐をここに再現すべく。彼女は手にした邪悪の旗で、それを実行したのだった。

「それじゃ、貴方の腕も貰うわね？」

## 秘めたる憧憬の果て

言葉と共に突き出される旗の、槍の先端がアーチャーの右肩を貫通した。

更に、穿った穴から漏れ出すように炎が見え隠れする。アーチャーの傷口を通して、肉体の内側から彼を焼き尽くすために。

「ガアアアアアア!!」

それは苦痛から来る絶叫。内臓を焼かれ、肉を焼かれ、骨さえも焼かれ——まるで毒が蝕むように、彼の全身は内から焼き尽くされた。

あまりの凄惨さに、私は目を反らしたくさえなるが、それは許されない。私はアヴェンジャーのマスターだ。復讐者のマスターだ。サーヴァントのやり方がどんなものであれ、マスターとして見届ける責任と義務がある。

それに、一人の戦士が、戦いの果てに命の終わりを迎えようとしているのだ。たとえ、それが仮初めの命であったとしても、そこから目を反らすのは、それこそ無礼であると言えよう。

やがて、アーチャーは力無く膝をつき、その場に倒れ伏す。その拍子にアヴェンジャーは彼の肩に刺さっていた旗の先端を抜き取ると、静かにアーチャーを見下ろした。

「これで終わりです。絶望と憎悪、そして憤怒の具現である我が炎に灼かれて、安らかに死ぬると思えませんが……、一応、言っておきましょう。どうか安らかに、天に召されますように」

「……………ハハッ。……………まるで、心が籠もっちゃ、いねえぜ……………まったくよ……………」

アヴェンジャーの皮肉に、渴き切った声で笑って返すアーチャー。内から体を焼かれたというのに、まだ彼は生きている。サーヴァントの——いや、英霊の生命力というのは凄まじいものだ。

だが、それでもアーチャーの命は、もう風前の灯火程にしか残されてはいなかった。

ゆつくりと、アヴェンジャーが横たわるアーチャーから離れ、私の隣へと戻ってきた刹那。運命が決した事をセラフは無慈悲にも伝え続ける。

私達と彼らとを阻む絶対の境界線。内と外とを、生と死で克明に切り分けるファイアウォール。

慎二の時と同じだ。向こう側の空間は赤く変化し、確実なる死へとダンとアーチャーを誘っていた。

「――」

死滅へと向かう世界の中で、ダン・ブラックモアはただただ驚いていた。彼は何か、天啓を見たような面持ちで、自らを倒したアヴェンジャーを見つめている。

「まさか、負ける……とはな。すまねえ旦那。地力も決意も、旦那の方が上……だっというのに」

力無く、アーチャーは謝罪の言葉をマスターへと告げる。そして、ダンもまた地へと膝をついた。

彼の体が、ノイズに侵蝕され始めているのが、ファイアウォール越しに私の目からも見て取れる。徐々に体を分解されていく中で、ダンは倒れるアーチャーへと顔を向けた。

「……いや。そうではない。わしもまだまだ未熟だったようだ。最後の最後で、自分の心を見誤った。聖杯戦争において、意志の強さは二の次らしい。……ここでは意志の質が、前に進む力になる」

意志の……質。意志の力ではなく、何を思い、何を胸に抱いて戦うか。

私は……。

「わしは軍人である事に疑問はなかったが……後悔は、あったようだ。聖杯を求めるのは、本当のところ、騎士として英国女王の命令に応じたから、ではない。亡くした妻を、もう一度だけで良い、この手に取り戻すために――」

妻が居た――確か、彼はそう言っていた。もう何年も前に他界し、軍人として生きた自分はもはやその顔すらもはつきりとは覚えていない……と。



だが、それは本当だったのだろうか。彼は、本当は妻の事をずっと想い続けているのではないか？

「……なんと愚かな勘違いをしたものか。わしは生涯を軍に捧げ、軍人として生きるため、冷徹な無個人性を良しとした。そんな男が……軍人である事を捨て、今際いまわの際に、個人の願いに固執したのだ。今回だけは一人の男として戦いに挑む、などと——そんな言葉をかざし、柵の奥にしまっていた、騎士の誇りを持ち出すとは……」

本心だった。この独白に、言葉を飾るものなんて存在しない。心からの言葉を、彼は口にしていった。

体が崩れていつているのに、慌てる事もなく。怯える事もなく。静かな独白は、まるで自動再生する遺言であるかのように。

「……本当に愚かだ。わしは最後に、亡くしたものを取り戻したかった。だが——わしが願ったものは、一体どちらだったのか。妻か……それとも、軍人になる前、一人の人間としての——」

独白を続けるにつれて、黒衣の老騎士の姿が薄れていく。ジワジワと、黒いノイズの侵蝕はなおも続く。

彼と、そのサーヴァントであるアーチャーも、運命に殉じるように足下から霧散していく。

「……しかし、意外だ。最後の瞬間……君の一撃に迷いはなかった。平凡な少女であつただろうに、だがやはり、譲れぬものがあつたのだろう」

独白から、語りかけへと変わり、その言葉は私へと向けられている。

「わしには——他人ひとに誇れる願いはなかった。この胸にあつたものは、死人の夢だったのだ」

いや、そんな事はないはずだ。愛した人にもう一度会いたい……その願いだって立派な願いだ。他人に語っても、決して劣りはしない夢と言えるはずだ。

「あなたの願い、そして夢。私のなんかよりも崇高で尊いですよ。私は……ただ、アヴェンジャーと一緒に戦い抜きたいだけ。今はまだ、それしかこの胸に宿っていない。そんな私が、あなたが自身の夢を否定する事は見逃せない。あなたの夢は、死人の夢なんかじゃない」

私の反論を聞き、少し驚いたように咄然とするダンだったが、それもすぐに終わる。

「そうか。そう、言ってくれるか。……ありがとう。……年寄りからのつまらない餞別だ。迷いながらも生きるのがいい、若者よ。その迷いは、いずれ敵を穿つための意志になる。努々忘れぬことだ」

穏やかな笑みを浮かべて、大樹の如き老騎士は、静かに息を吐いた。もう、限界が来たとも言わんばかりに。

既に——その体の七割以上がノイズに覆われていた。

「……さて。最後に無様を晒したが——悪くないな、敗北というもの。実に意義のある戦いだったよ。はは、未来ある若者の礎になるのは、これが初めてだ」

末期の笑いは晴れやかだった。

サー・ダン・ブラックモアにかつての苛烈さは見られない。

老騎士の顔は、自らの孫を見守るような穏やかさに満ちている。

「……旦那。そうかい、満足したのか、アンタは」

自身もまたノイズに蝕まれ、体の内すらも焼かれたというのに、アーチャーはその場でふらつきながらも立ち上がり、彼のマスターへと向き合う。

「重ねて言うが、すまねえな、旦那。やっぱオレには正攻法、向いてなかったわ。無名の英雄じゃあ、アンタの器には応えられなかった。……情けねえ。他のサーヴァントなら、旦那にこんなオチをつけなかったってのに」

死に体で、立っているのもやつとだろう。それでも、アーチャーは正面からダンと向き合い、謝罪の言葉を述べる。

自分はダンに相応しいサーヴァントではなかったと、自虐を含むその謝罪。しかし、ダンはそれには領かなかった。

「いや、謝罪するのはわしの方だアーチャー。わしの我が儘ゆえに戦い方を縛り付け、お前の矜持を汚してしまった」

「……まったく、いまさら遅いですよ。苦勞掛けられたところの話じゃねえんだよ、こっちは。つうか、なに？ 謝ってんじゃねえよ。それじゃ、オレがバカみたいじゃねえか」

——バカで合ってるわよ、バカ。

隣から、そんな小さな声が聞こえた。アヴェンジャーにふと視線を送ると、彼女は黙って、何とも言えない顔をして、じっとアーチャー達を見守っていた。

倒した相手に、彼女は一体何を思っているのだろう。それは、私には計り知れない。

アーチャーはこちらに気付いた様子もなく、言葉を続ける。

「オレの事はどうでもいいんだよ。どうせ勝っても負けても、最後には消えるんだし。そりゃ願いらしきものはあつたけど、楽しけりやオツケーなんですよオレは。ま、旦那との共闘は、つまんなかったんですけどね」

「はは、ますます濟まん。騎士の誇りなど、お前には無価値だったろうに」

笑って返すダンに、アーチャーはふいと視線を反らし、背を向ける。

「んー……いや、なんだ。たまにだったら、やり馴れない事も悪くないんじゃない？ 旦那との共闘はつまんなかったけどさ。くだらない騎士の真似事は、いい経験になった。……ああ。生前、縁はなかったがね。一度ぐらいは格好つけたかったんだよ、オレも」

ダンに背を向けたまま、照れたように顔を伏せるアーチャー。聞こえないような、おそろくは聞かせるつもりもないのだろう小声で、咳く。

「……だから、謝る必要なんかねえんだ。十分、いい戦いだった。恥じるところなんかどこにもねえ。……いやあ、そもそも戦いなんて上等なもん、オレに出来るとは思わなかった。思えば、生前のオレやあ、富も、名声も、友情も、平和も、たいていのものは手に入れたけどさ。それだけは手に入れる事が出来なかった。——だから、いいんだ」

アーチャー——いや、ロビン・フッド。彼は森に潜み、暴君の軍隊を相手に、闇から敵を討っていた。そこに、騎士のような誇りはなく、清廉な戦いもなく、有るのは侵入者を殺すという事だけ。

故に、彼は死ぬまで手にする事はなかったものを、この戦いで、この聖杯戦争でダンのサーヴァントとなった事で、手にしたのだろう。

憧れて、しかし手の届かなかった夢を。

彼が生きたイギリスに伝わるアーサー王や円卓の騎士のように、誇りを持って戦う名誉を――。

「……最期に、どうしても手に入らなかったものを、掴ませてもらったさ――」

彼が口にした通り、それが最期。その姿は、存在は、この世界から完全に消失した。

消えゆく横顔に悔いはなく。かつて村を守るために英雄の衣を被り、ただ勝つただけに森の茂みに隠れ続けた青年。

村を守るために戦いながら、だがしかし一度たりとも村人達に讃えられなかった彼は――微かに、満足げに微笑んでいた。

「……すまない。ありがとう、アーチャー」

消え去ったアーチャーへと、謝罪と感謝の言葉を短く口にして、老騎士は再び私へと向き直る。

「岸波君。最後に、年寄りの戯れ言を聞いてほしい。これから先……誰を敵に迎えようとも、誰を敵として討つ事になろうとも……。必ず、その結果を受け入れてほしい。迷いも悔いも、消えないのなら消さずともいい。ただ、結果を拒む事だけはしてはならない。これから待ち受け、そして起こる全てを糧に進め。覚悟とは、そういう事だ」

「……はい」

「良い返事だ。……それを見失ったまま進めば、君は必ず未練を残すだろう。……そして可能であるのなら、戦いに意味を見出してほしい。何のために戦うのか、何のために負けられないのか、自分なりの答えを模索し――最後まで、勝ち続けた責任を、果たすのだ」

「………はい」

何故かは分からない。だけど、涙が溢れて止まらない。訳も分からず、自らの涙に戸惑う私に、ダンは変わらぬ微笑みを浮かべて、私を見つめていた。

「ハハ……我が死を悼んでくれる者がいるというのは、嬉しいものだ。……本当に、わしに孫が居たならば、君のような子であったら――。いや、妄想はもうするまい。涙を止めろとは言わん。いいかな、未来

ある若者よ。どうか、今伝えた事だけは……それだけは……。忘れるな……」

私に記憶はなく、故に祖父がいるとこんな感じなのかとか、そんな存在をこの手で倒してしまった事に、今更ながら辛い気持ちが届き上げてくる。

でも、全てはもう終わった。

ダン・ブラックモアの死は確定した。もう、この現実を変えられない。

「さて……ようやく会えそうだ。長かったな……アン……又……」

そうして、ダン・ブラックモアという一人の老騎士は、完全に世界から消滅していった。

消え去る間に呟いたのは女性の名前……。それを口にした時のダンの顔は未練も後悔もなく。

彼は静かな答えを胸に抱いたまま、ゆっくりと消えていった。

「マスター」

未だ悲しいという感情は胸の内できすぶり、私は校舎へと帰還を果たす。

さつきまでの事が、こうしてここに帰ってきた事で、夢だったかのようにさえ思える。

だが、悲しみが、あれは夢幻ではなかったのだと物語っていた。彼に託された想いを、夢なんかで済ませる訳にはいかない。

ぼんやりと、エレベーターから降りてしばらく立っていた私に、アヴエンジャーから声が掛けられた。

「アーチャーへの最後の攻撃ですが、タイミングが少し遅すぎたように思えました。私がか調整したから良いもの、もっと戦況を見極めるよう努めなさい。でもまあ……機を逃さずに的確に見抜い

たのは褒めてあげましょう。それに、少し闘士の顔つきにもなりまして」

戻った途端にダメ出しをするアヴェンジャーだが、最後に一つだけ、褒めてくれた。闘士の顔、と言われても正直分からないが、もし変化があるのだとすれば、それは――

「ダン・ブラックモア……あの老騎士との戦いに、思うところがあったのですか？」

「……うん」

はつきりとは分からない。戦いとは何か。覚悟とは何か。

彼の言葉は、確かに私の心へと響いた。それを受けて、私はこれから先、どうあるべきなのか。どう変わっていくべきなのか。

まだ、私には道の先が見通せていない。

「そうですね。貴方がそう思うのであれば、それも良いでしょう。あの戦いで得た物、得なかった物。それは後の戦いで見せてもらうとしましょう」

――後の戦い。

そう、この後には三回戦があり、その先も。

迷いは消えた訳ではない。

しかし戦うしかないのなら。せめて戦った過去に、命を奪った相手に恥じない戦いを。

そんな考え方もあるのかもしれない。

それが正しいのか、間違っているのかすらも、今の自分には分からないけれど――

闇の中で、彼は自らの鼓動で目を覚ます。

視界は黒一色で、何も映るものはない。いや、むしろその暗黒のみが見えていると言っても過言ではない。

「……………」

何も見えない中、手足を動かしてみる。動作に異常はなく、爪先までしっかりと感覚は行き届いている。

今のところ、五感で全く機能していないのは視覚に味覚のみ。自らの体に触れれば感覚があり、臭いも、自分の声も聞こえている。

異常があるのは、体ではなく、この空間だ。

何も無ければ、何も見えず、何も聞こえず、何の臭いもしない。まるで、*“無”*の世界に全身を浸しているかのようですらある。

「何だ、ここは？ つうか、オレ死んだんだけど」

彼——緑衣のアーチャーは、現状への率直な感想を口にした。

彼はさっきの戦い……岸波白野とアヴェンジャーに敗れ、もはや悔いなく消滅したはずだった。

だが、意識も自我も失われておらず、心臓も脈打っている。一体、何がどうなっているのか。

「そう。あなたは死んだ」

不意に聞こえた声。少女のものと思いき声が出た方向に目を向けるも、やはり何も見えず。

しかし、少女の声ははっきりとアーチャーへと向けられていた。まるで、向こうにはこちらの姿が見えているとでも言うかのように。

「あなたは岸波白野とアヴェンジャーに倒され、死んだ……けど、完全に消滅する前に、私が拾ったの」

少女の声は、感情が籠もっていないようでありながら、その奥には酷く醜い悪意を隠しているような、おぞましくも不思議で不気味な、奇妙な声音をしていた。

「誰だか知らんけどさ、そのままスツと死なせてくれなかつたつてコトね。いやあ、マジでいい迷惑なんですがねえ？ あんな風に旦那に語った手前、キレイに死んどきたいんだけども」

「あなたの都合なんて、私には関係ない。必要だったから、あなたをここに引き寄せた。ただそれだけ」

アーチャーの事情など興味ないと断言してのけた少女の声に、流石のアーチャーもしかめ面になる。

今のやりとりだけで、話の通じる相手ではないと判断したのだ。ともすれば、彼のマスターであつたダンよりも頭の堅い厄介な相手かもしれない。

「んで？ 何でオレを生かしたんだ？ てかさ、旦那も連れてきたワケ？」

「あなただけ。ダン・ブラックモアは要らない。私が欲しいのは、あなた」

「ビュー。言ってくれるじゃん。女にそんな事を言われちゃあ、オレも黙ってる訳にはいかない……んだけどなあ、いつもなら。でも、アンタは別だ。声からして、まだガキンチョだろ？」

「……………」

少女はその問いかけに答えない。必要以上の会話を拒むように、彼女にとつての無意味な問いには口を開かないのだろう。

「ま、ガキだろうと別にそこは問題じゃない。問題なのは、アンタが何の目的でオレだけを攫つたのかつて事だ。で、どうなの？ この質問には答えてくれんのかねえ？」

アーチャーは言いつつ、弓に手を掛ける。返答次第では文字通り少女に弓引く為だ。

アヴェンジャーに挟られたはずの右肩は、不思議と痛みもなく動いた。

それどころか、全身を炎で焼き尽くされたはずなのに、その痛みすらも消えている。

その事に、彼はもつと早く疑問を持つべきだった。

「無駄だよ、ロビン・フッド。私には届かない」



「!! テメエ、何でオレの真名を……!!?」

何故、自らの真名を少女は知っているのだろうか。知っているのは、マスターであるダンと、情報から突き止めたであろう岸波白野のみのはず。

ますます、姿の见えない少女に警戒するアーチャー。

见えないのなら、と彼は先手に打って出る。

「適当に撃つてりゃあそのうち当たるだろ!!」

方向を一定に定めるのではなく、乱雑にそこら中に矢を射るとい  
う、少々雑な手に出たのだ。

けれど。

「足搔くな、虫が」

突如、少女とは別の声が暗闇へと響いた。

その声もまた、女性のものと思われる、若々しい女の声。

そして、

「まだ居やがった、か——、」

アーチャーは声のした方へと弓を向けた。だが、次の瞬間には、弓  
を装着していた腕の感覚が丸ごと消失していた。

「グウウアアアア!!?」

激痛、そして喪失感がアーチャーを襲う。

腕は消失したのではなく、何か鋭いもので切断されたのだ。そう、

例えば剣のような——。

「フツ。これで貴様も、アヴェンジャーとお揃いだな? もつとも、左  
右の違いはあるのだが」

激痛に悶えるアーチャーを嘲笑うかのような、冷たい笑いを零すも  
う一人の女の声。

先程の少女と違い、その女の声にはあからさまな侮蔑の色が滲み出  
ていた。

「弓の無い貴様に、もはや抗う術などない。どちらにせよ、ここでは  
我々以外に自由など赦されるはずもないが……。フッフ……。光栄に

思うがいい。貴様が最も忌み嫌うもの——暴君たる余の刃を、その血で汚す事が適った事を」

「うぐ、暴君、だあ!? テメエ、何者だ……!!」

「む? やはり姿が見えねば、我が威光も判らぬか。良かろう、我が名は——」

女が名を口にしようとしたその時、制止する声があった。無論、もう一人の少女によるものだ。

「そこまで。もう終わりにしよう、アーチャー。どうあれ、あなたに未来はない。大人しく、私に食べられてね……?」

声が、先程よりも近くで聞こえた。もう目と鼻の先であるかのようにさえある。

少女の言葉に、アーチャーは本能的に後ずさる。小動物が逃げられないと分かっているにも、捕食者から逃げようとするかの如く。

「——待て。その声、どこかで……」

声は、そこで途切れた。

今までであったはずの彼の気配は、ぷつりと暗闇からさえも消え失せた。

アーチャー、ロビン・フッドは、もうそこには存在していなかった。

「ああ、感じる。体の内で迸<sup>ほとばし</sup>る魔力の胎動を。フフフ……もつと……もつと……」

幕間 『dead end (overture)』

“死”との遭遇

それは何の前触れもなく起きた。

用事を済ませたものの、忘れ物を取りに一階から二階へと戻ってきた私は、

——突然、背筋が総毛立った。

奇妙な悪寒。

サーヴァントを呼ぶ間も、構える間もない。

思考する余裕もなく、判断する事も許されず、気付いた時には圧倒的な力に引つ張られるように、前方に体が跳ね飛ばされる。前は壁――

――ぶつかる……！

……………。

壁への衝突に自然と身構えていた体は、しかし、それがいつまで経ってもやってこない事で、ゆっくりと緊張がほぐれていく。

「……は……？」

壁に衝突した感覚が無い代わりに、いつの間にか見覚えのない場所にいる。

事態が急変しすぎて思考が追いつかないが、どうも別の場所へ轉移させられたようだ。おそらくは不正規な手段で。

全く見知らぬ空間……けれど既視感がある。二度の戦いで使った

あの闘技場――。

細部ディテールは異なっているが、構造システム自体は似通っている。

もしも闘技場であるなら、ここには敵が居るはずだ。

……：そういえば、二階に上がった瞬間、廊下に何かが複数倒れるように転がっていたのを思い出す。いきなり跳ね飛ばされたから、視界の端に映った程度だったが、あれらは――、

「!!」

あれらが何であったのか。それを考える必要はなかった。周囲には、さっきの廊下と同じように転がっているそれらが——いや、聖杯戦争参加者であるマスター達の体が、力無く死んだように横たわっていた。

それに気付いた瞬間、意識が凍りついた。

……緊張で息が詰まる。

そうだ。彼らが自然とこうなったはずがない。これをやった犯人が、近くに居ても何らおかしくはないのだ。

そこへと思い至り、私は自身の近くだけではなく周囲をもっと見回すと——居た。

そこに立っていたのは、燃えるような衣装に身を包んだ鋭い目つきの偉丈夫。

恐れで指が痺れる。

怖れで歯がガチガチと音を鳴らす。

畏れで体の震えが止まらない。

殺意とはこれほど明確に、濃密に漏らす事が出来るものなのか。

その男は「死」そのものだった。

伝え聞いていただけの単語……暗殺者アサシンの名が脳裏によぎる。

一瞬でも目を離せば、命を絶たれる——!

何故、こんな事になってしまったのだろう。今日だけは、束の間の安息日であるはずだったというのに。

時は遡り、ダン・ブラックモアとの決戦から一夜が明けた、明くる日の昼下がり。

昨日の疲れからか、私は昼まで眠っていたようで、ぐう、という自

分の腹の虫の鳴き声で目を覚ました。

「……んみゅ」

微睡みは少しずつ薄れ、代わりに仮初めの空腹感がむくむくと覚醒を始める。別に電腦世界だから食べなくても死なないが、気分の問題だ。

食べて損はないのだし、ならば食事は摂るべきだろう。美味しいものはモチベーション向上にもつながってくるのだから。

「ずいぶんと遅いお目覚めだことで。私でも流石にもう起きてるわよ、寝坊助さん？」

体を伸ばしていると、後ろからアヴェンジャーの声が出た。つられて、そちらに視線を向けると、既に支度を整えていつでも外に出られる状態で、黒板に背を預けている彼女の姿が。

だが、やはりいつもの姿よりも違和感がある。いや、違和感どころではなく、もはやそれは異常と言っても差し支えないだろう。

左腕を失って、隻腕となってしまった復讐の魔女。今の姿が、私達にとって正常であるはずもなかった。

「あ……」

思わず声が漏れる。

アーチャーとの戦いによって、そして私の注意不足のために失われてしまった、アヴェンジャーの左腕。

私のせいで、彼女に隻腕となる事を強いてしまった。

申し訳なきと罪悪感。その両方が折り重なって、私の心に重責となつてのしかかっていた。

「ハア……」

そんな私を見かねてか、アヴェンジャーは分かりやすく溜め息を吐くと、ツカツカと小気味良い音を鳴らして、こちらへと近寄ってくる。

机の上でうなだれながら落ち込む私の目の前まで来ると、彼女は私の頭上で拳を構え、躊躇無くそれを下に落とした。

「イダッ!？」

脳天に落とされた拳骨の衝撃が、背骨を通して体の隅々にまで響き渡るかのようだ。

「いつまでもへこんでんじゃないわよ。当の本人である私がアンタを責めてるでもないってのに、アンタがそんなだところちまで気が滅入るじゃないの」

「で、でも……。私がもつと気を回していれば、そうはならず済んだかもしれないって思うと……」

後悔しても遅いのは重々承知している。けれど、悔やんでも悔やみきれないのが人間という生き物だ。

あの時こうしていれば、ああしていれば——なんていう、もはや有り得ないifをいつい求めてしまう。だって、そのifの先には現在いまのような状態には陥っていなかったという可能性が存在しているから。

どんなに手を伸ばそうとも、決して掴む事の出来ない「もしも」の未来。そして可能性。

それを自分のミスで逃してしまったかと思うと、余計に悔いが残るというもの。

「あのね、この際だから言っておくけど、アンタは何か勘違いをしていないかしら？ 確かにアンタは私のマスターよ。アンタという存在があるからこそ、私はここに存在出来ている。けどね、マスターだからって私が受けた負傷の全責任をアンタが背負う必要はないの。この聖杯戦争の決戦は、サーヴァントとサーヴァントが殺し合うもの。この傷だって、アーチャーが私を狙って与えたのだし、そこにマスターの責任がどうこうと言われる筋合いもないわ」

そう言つて、自らの欠けた腕の痕を指でなぞるアヴェンジャー。彼女からしてみれば、その傷はサーヴァント同士の戦いの最中に負ったというだけのものでしかないのだ。

敵の畏に掛かった。それによつて腕を失う結果となった。

ただそれだけの事なのだ。

だから、私が気に病む事はない……と彼女は言いたいのだろう。なにともしも遠回しな気遣いであることか。

それでも私は、だからと言って落ち込むのを止められる訳ではないのだが……。

「……………ハア」

結局、私がへこんだままであるのを見て、アヴェンジャーはさつきよりも深く溜め息を吐くと、拳骨の体勢からそのまま私の襟首を掴み、立てと促してくる。

え、なに？ まさか、これから校舎裏で絞められる感じ？

陰気で見ていると腹が立つからとか、そんな不良<sup>ヤンキー</sup>じみた理由でボコられる流れなの!?

私がワーギヤーと抵抗していると、アヴェンジャーの苛立ちはついに頂点に達してしまったようで、

「ああもう!! 煩いバカマスター!! そんなにいつまでもウジウジしてるんなら、さっさと問題解決してやろうじゃないのよ!! ほら行くわよマスター! 早く来なさい! とうか来い!」

グイツと片手で持ち上げられた私は、親猫に啜えられて運ばれる子猫よろしく、宙に浮いて足が地面に付かないまま、マイルームから外へと連れ出されたのだった。

「最初は何事かと思って、少しびっくりしました」

と、朗らかに微笑んでみせるのは、お馴染み保健室のAIであり私の後輩でもある間桐桜さん。後輩と言っても、予選で与えられた役割の時の話なのだが。

もう分かっているとは思いますが、アヴェンジャーに連れられて（どうか強制連行されて）来た場所は保健室だった。

何というか、最近は「困った事があれば保健室! または凜頼みに限る!」みたいな風潮が私の中で根付いてきているような気がする。

今回はアヴェンジャーに連れられて来たが、この分だと彼女にもそういう認識が根付いてきているに違いない。

そんな訳で、私は校舎裏でボコられるのではなく、マイルームから保健室までの短いようで長い距離を子猫スタイルで運搬されるといふ、むしろそれはそれでボコられるよりもかなりキツメの仕打ちを受

けて、羞恥に悶えながらここに辿り着いたという訳なのである。

途中、ラニとすれ違ったが、

『……………貴方には、そういった嗜好があるのですか?』

と、真顔で聞かれ、余計に恥ずかしい思いをした。それを見ていたレオも、

『おや、人の趣味嗜好に口を出すつもりも無いのですが……………流石に人前でそういったプレイは避けた方が賢明かと思えますよ』

などと宣う始末。もう、穴があつたら入りたい。昼時という事もあり、他にもたくさんマスターに私のみつともない姿を見られてしまった。

やはり、ボコられるよりもキツイ仕打ちであると言えよう。

「恥ずかしすぎる……………。何か、私の知名度が悪い方向で上がって行ってるような気がするのは、私の気のせい?」

そんな私の嘆きに、桜はコンソールを操作しながら苦笑いを浮かべ、

「あの……………お気の毒ですが、今セラフ運営掲示板を見たら、けっこうな数の書き込みが……………」

「えっ」

その言葉に、私は対面の桜の後ろへと回り込み、その書き込みとやらを見ると、そこには――

『きゃー!! さっきのアレなに!? 超可愛かったんですけどー!!』

『見た見た。親猫が子猫を啜えてるみたいなアレでしょ』

『画像保存した』

『マスターもだけど、サーヴァントも美人じゃね?』

『闘争と殺し合いが飛び交うこの聖杯戦争において、まさかあの様な和やかな場面に遭遇するとは、些か想定外ではあつたが……………これもまたマスターとサーヴァントの在り方の一つなのだろう。マスター達よ、彼女のようにサーヴァントと絆を深め、そして存分に殺し合い給え』

『されるがままって感じ。恥ずかしそうにしてるのがなお善し』



『あの子ってこの前のマフラーの子じゃなかった?』

『ヤバい。敵なのにファンになりそうだわ俺』

『とうにかさり気なく言峰神父交ざってて草生えるwww』

「……………」

泣けてきた。

「アハハ!! いい気味よ! 私を怒らせた罰なんだから、甘んじてこの辱めを享受なさいな?」

「ちよ、ちよつとアヴェンジャーさん!? そんな傷口に塩を塗るような事……………」

恥辱のあまり、たまらず涙を流す私を見て、元凶たる魔女が高らかに笑う。

自分のマスターが笑い物にされているというのに、なんだってこんなに機嫌が良いんだこの鬼畜サーヴァント。

桜の同情の目も、より私の心を抉ってくるし。もう踏んだり蹴ったりだ。

この際、もうさつき的事は忘れ去ろう。綺麗さっぱり、何もかも水に流して、まっさらな私こんにちは。

という事で、保健室に来た本来の目的について語ろうと思う。

理由を聞かされずに連行された私だったが、椅子に座らされてアヴェンジャーと桜のやりとりを黙って見させられたところ、どうやら腕の修復のために訪れたのだそうだ。

現在、アヴェンジャーは左腕が眩い光に包まれて、修復作業を受けていた。

「でも、本当に良かった…………。アヴェンジャーの腕も何とかかなりそうで。これで一安心だよ」

「フン。ここは電脳世界なのよ? 現実世界と違って死なない限りはある程度の修復が可能で当然でしょうに。だからマスターも悔やむ必要ないってのに…………」

呆れたように言いますがね、あなた何の説明もしてくれなかったじゃないの!?

……と心の中で呟く。反論したところで、手痛いしつぺ返しが待っているだけだし。

「確かにアヴェンジャーさんの言葉は概ね正しいです。セラフとしても、サーヴァントには召喚の際にその英霊の最盛期として再現されたベストな状態を維持して、次の対戦に臨んでもらいたいですから。なので負傷、損壊部位があれば修復しますが……それでもあまり無茶はしないでくださいね？ 霊基の損傷などは私でも修復は不可能ですから」

桜でも無理、というのはすなわち、もはや回復は見込めない状態という事なのだろう。いくら桜が上位AIでも、彼女の権限では届かない箇所に、それが該当するに違いない。

「月の聖杯戦争だけです？ 無償で、それも完全に破損した腕を再現するなんて。もしこれが地上の聖杯戦争だったなら、いくら何でも元の状態に戻すなんて無理だと思いますので。今後はこういった事のないように気をつけてくださいね？」

再三の桜からの注意に、私は力強くうなずく。

もう、あんな思いをするのは御免だし、嫌だ。アヴェンジャーに無理を強いているようで、見ているだけでも辛かった。

「……ま、善処するわよ」

未だ修復が続くため、動けないアヴェンジャーは、私と目を合わせないようにそっぽを向いて、桜の言葉に小さく頷いて返すのだった。

それから三十分程して、ようやくアヴェンジャーの左腕の修復が完了する。

腕の調子を確認めるように、しばらく動かしていたが、どうやら何も問題は無いようだ。

「さて、これでマスターの心配事も解消しました。では、昼食でも買ってからマイルームに戻りましょうか」

もう用は済んだとばかりに、桜に礼も言わずにアヴェンジャーはさっさと保健室から出て行ってしまふ。

無礼なサーヴァントで申し訳ないと、桜に謝罪と感謝を告げつつ、私もアヴェンジャーの後を追う。

多分、さっきの言葉からして行き先は購買かな？

「……あ」

階段前まで来た時、残りのPPTを確認しようとポケットに手を突っ込んで、ある事に気が付く。端末をマイルームに置き忘れてしまっているようだった。

そういえば、起きてすぐにアヴェンジャーに連れ出されたので、端末を寝た時に出したままにしていたのを忘れていた。

文句を言われるのも嫌だし、ササツと取りに戻ってから購買に向かう。わざわざその事を告げる為だけに購買に行ったら、それこそアヴェンジャーにどやされかねない。

階下に向けていた足を、二階の方へと方向転換すると、そのまま急いで上り始める。

そういえば、今は昼時だというのに、上の方がやけに静かなのは何故――

――そして、刻は今に至る。

目の前の男は、怯える私には目もくれず、周囲で倒れているマスター達をつまらなそうに見詰めては、溜め息を吐いていた。

私は、その一句一音、動作の全てを見逃すまいと、気を張り詰めて男を観察する。

隙を見せれば殺される――それが分かっているからこそ、警戒も怠らない。男が何をしてきても良いように、コードキャストを即座に発動出来るように、手に汗を握りながら待ち構える。

だが、やはり男は気にも留める事なく、そして初めてその口を開いた。

「脆弱にも程がある。魔術師とはいえ、ここまで非力では木偶にも劣ろう」

――それは、この一帯に散らばるようにして倒れていたマスター達

の事を指していた。

「鵜をくびり殺すのも飽きた。多少の手応えが欲しいところだが……」

空気が凍てつく。男から溢れ出るように漂っていた殺意が、一転して私へと向けられるのが分かる。

針で刺されるとか、そんなひ弱なものじゃない。まるで槍を心臓に突き立てられたかのような、鋭利で、剛健で、冷酷な感覚。

このままいけば間違いなく、私は一分一秒と保たずして殺される。殺意は収束し、男は拳法の構えでも取るような戦闘態勢に入ると共に、私にその氷のように冷たく、はたまた炎のように熱い殺意の眼差しを向ける。

「さて——小娘、お主はどうかかな？」

ニヤリ、と男の口元が歪んだ次の瞬間には、男の体は私との距離を半分以上も詰めていた。

動けば死ぬ。動かなくても死ぬ。

逃げないと。でも逃げられる訳がない。

戦え。いや、戦うべきではない。

一瞬にも満たない、ほんの僅かな時間の中で、あらゆる思考が全身を駆け巡る。考える余裕などない。本能で体を動かさせるしかない。何をしたところで、私では彼に勝てないと脳が理解している。

なら、私が今すべきなのは——。

信じる事。

男が迫ろうという一瞬、私はとっさにアヴェンジャーの事を思い浮かべていた。彼女の顔を、声を、性格を、その力を。全部まとめるとかなり抽象的のだが、それでも、私はアヴェンジャーを思い浮かべた。そして、思いは届く。

「させるか!!」

男が私の目の前にまで迫ろうとしたその時、突如として横合いから割り込む影が。

大きな旗を手に、炎を纏った復讐の魔女。

私のサーヴアント——アヴェンジャー。

アヴェンジャーは私を後ろへ押し出すと、男の拳を旗の柄で受け止める。続けて放たれる連続蹴りも同様に防ぎ、心臓を狙って打たれた掌底を、復活したばかりの左腕で阻止する。

「そら!!」

その場で足を勢いよく踏みしめて、地面から噴出させた炎が男を襲うが、男は軽やかに次々と湧き上がる炎の柱を避けていく。無駄のない身のこなしは、まるで舞踏を演じているかの如く、鮮やかにさえ思えた。

炎を全てかわし、こちらから距離を取った男は、感心したように、不敵な笑みを浮かべて、私とアヴェンジャーを交互に見る。

「ほう、少しは気骨のある者がおる。よく踏みとどまったな小娘」

……男の言葉の意味は考えなくても分かる。あそこで私が一歩でも動こうものなら、彼の軌道もそれに合わせてズレが生じ、アヴェンジャーが間に入ってもどうなるか分からなかっただろう。

最悪、私かアヴェンジャーのどちらかが、死んでいたという可能性もあつた。

「久方振りに満足に打ち合える敵と会えた……というのに、これはちとつまらん展開よ」

男が名残惜しそうに言ったと同時、周囲の空間に歪みが発生した。何が起こっているのか、こちらが訳も分からずにいると、男はこれまた残念そうな口振りで続ける。

「時間切れとは興醒めだが、殺し切れぬのでは仕方がない。所詮、舞台裏ではこれが限度よ。……お主とは、またいずれ闘りあう事になるかもしれないな。楽しみに待つとしよう。故に、くれぐれも負けるなよ小娘」

それだけ言い残して、男はこちらに背を向けて颯爽と歩み去っていく。

待て、と手を伸ばした時には既に遅く、まるで視界がぐにやりと歪んだように、空間そのものが捻れた。

「……は？」

——気がつくくと、元居た場所に立っていた。

しかし、安堵するのは早い。異常はまだ続いている。

さつきまで倒れていたマスター達の姿は消え、校舎に変わりなくとも、廊下に漂うこの気配は——

「その実力で、どうやって逃げ延びた？」

音もなく、数メートル先に、黒い服を着込んだ細身の男が現れた。

顔にかかる長い髪の下、刺し貫くような視線をこちらに向けるその

男……。

私は、彼を知っている。

予選の頃、藤村先生と同じく教師という役割に収まっていたはずの男。名は確か、『葛木』——。

「ただの雑魚かと思ったが。上級のサーヴァントを引き当てたか、それとも爪を隠した腕利きか——どちらにせよ、あの魔拳から生き延びたのだ」

男の纏う気配が変わる。

辺りに放たれていた強烈な殺気が、怜悯な刃物のように研ぎ澄まされて、一点に向けられる。

さっきの男とはまた別種の、とても濃厚な殺意は、隠す事もなく私へと向いていた。

「ならば、ここで始末するに越した事はない」

視線は私の首に向けられている。汗が、頬を伝って床に落ちる。男が静かに一歩踏み出した時——

「ふうん。やっぱり貴方がマスターを殺して回ってる、放課後の殺人

鬼だったのね」

向かいの教室から現れたのは、あの赤い服の少女——遠坂凜だった。

「……遠坂凜か」

彼女の登場に、男は振り返る事なく、しかしピタリとその歩みが止まる。

凜の方もまた、動こうとはせず、横目に彼を静かに見つめていた。

「あら、私の事はご存知なのね。さすが世界に誇る、ハーウェイ財団の情報網。それとも、ちよつとハゲにやりすぎたかしら。ねえ？ 叛乱分子対策の大本、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイさん？」

葛木——否。『ユリウス』と呼ばれた葛木だった男は、薄い唇を歪めて微かに笑う。

「……敵を援けるとは、随分と気が多いな。この女を味方に引き入れるつもりか？」

「まさか。そいつは私の仕事とは無関係よ。殺したいなら勝手にしたら？」

「——テロ屋め。その隙に後ろから刺されるのでは堪らん」

唇の端に皮肉な笑みを浮かべたまま、男はゆっくりと、廊下の壁に向かって歩を進めた。

ふと振り返り、その凍てつく視線が、こちらに向けられる。

「確か——岸波、と言ったな。……覚えておこう」

殺意の籠もった瞳をこの身に据えたまま、男は壁に溶け込むように消えていった。

それと同時に、殺意が消え、ドツと緊張の糸がほぐれてバラバラになっっていく。

さっきの襲撃もだが、今の一連の出来事でもう精神的にかなり疲れが来ているように思える。まだ昼間だというのに、何という災難であろうか。今日は厄日に違いない。

「行った、わね。管理者側のキャラクタープロフィールをハッキングして好き放題やってた、か。この手の反則を平気でやってくるのなら、校内でも気を抜いてられないわね」

男の気配が消えたと分かると、凜は独り言のように呟いて、こちらを振り返った。

その視線は冷たく、さつきまで男に向けられていたものと変わらなかった。

「……なによ、その目は。もしかして本当に助けに来ただけでも？別に、私はただハーウェイの殺し屋に挨拶したかっただけ。結果的に助けたみたいな形にはなったけど、あなたも私にとってはただの敵。どこで死のうと知った事じゃないし」

屋上で相談に乗ってくれる彼女とは、全く異なる側面。お人好しの彼女も、そしてこの敵に冷酷なまでに非情な彼女も、どちらも彼女が持つ側面の一つに過ぎないという事なのだろう。

が、それとは別として、凜はバツの悪そうな顔をして、小さな声で続ける。

「……ま、二回戦を勝ち抜いたのは意外だったけど。ちよつと見直したわ。あなたとは、ほら、ヘンなトラブルとかあったじゃない？だから、なんていうか——つて、なに言ってるんだろ私」

途中で、自分で言っていて頭を抱え出す凜。なんだろう……面白い、この人。

「それじゃあね。せつかく拾った命、次の第三回戦まで無くさないよう、気をつけなさい」

少女は最後に小さく笑うと、足早にその場を立ち去った。

瞬く間に過ぎ去っていった出来事の数々。何がなんだか分からなibaかりか、命の危険さえもあった。

これから先の聖杯戦争——その行く末に、一抹の不安を抱かせるには、十分過ぎるくらいには、私に衝撃を残していったのだった。

『嫌な予感がしたから来てみれば、まさかあの英霊までこの聖杯戦争に参加しているとはね。……マスター、あの男とそのサーヴァント……、対戦カードが当たらない事を願いましょう』

と、霊体化したままのアヴェンジャーが、彼女にしては珍しく弱気な発言をしてくる。一体どうしたのだろうか。

『マスターも危険ですが、あのサーヴァントはもっと危険です。今の



ままだと最悪、少しもダメージを与えられないまま、私達は負けるでしょう』

あの負けず嫌いのアヴェンジャーをして、確実に負けると言わせるサーヴァント。その実力は、多くのマスターを屠っているという時点で察しがつく。

なるほど確かに、このままの私達では勝てる見込みもない、か。

「ユリウス……そしてハーウェイ、か」

葛木という名は偽りのものだった。彼の正体は、レオと同じく、西欧財閥に連なる者の一人。レオ本人とはどのような関係かは分からないが、十中八九身内同士なのは間違いないだろう。

今日は安息日だったはずなのに、まさか死と隣り合わせになるだけではなく、新たな悩みの種が増えようとは……。

気分も足取りも悪く、私達はマイルームに置き忘れた端末を持って、購買へと向かうのだった。

第三章 『disillusion/coma by』

不思議の国の少女（ありす）

そして翌日。

あの男達——ユリウスと、おそらく彼のサーヴァントである剛の者による襲撃から一夜が明けた。

あれから特に何かあったりはせず、平穏無事に過ごす事が出来たのだが、やはり昨日の一件が尾を引いており、気は重いままだった。

昼を済ませて、手持ち無沙汰になった私は教室で時間を潰している  
と、いきなり端末から電子音が鳴り響く。

『……二階掲示板にて、次の対戦者を発表する』

もはやお馴染みの、セラフからの新たな対戦カードの発表を報せる  
ものだった。

もう今回でこれも三回目となる。一回戦には128人居たマスター達も、今や32人にまで減った。戦いが回を重ねる度に、マスターの数も比例して半分ずつ消えていく。

この間までは多くに見えていた校舎内の人影も、今や教室一クラス分に収まる程しか居らず、校舎の中が急激に淋しさに包まれたかのようだ。

私は足取り重く、教室を出て掲示板前にまで赴く。掲示板には、いつもと同じように二つの名前。

自分の物ではないもう一つの名は——

『マスター：ありす 決戦場：三の月想海』

「…………こんどの遊びあいては、お姉ちゃんなんだ」

突然、背後からピッタリとくっつくように聞こえた幼い声に、私はびくりと顔だけを振り返る。

私の腰辺りに腰巾着のように張り付く小さな少女が、澄んだ瞳でこちらをじいっと見つめていた。

二回戦の相手からは一気に年齢は下がって、おそらくは十に満たない少女だった。

…………いや、待て。この少女、どこかで見覚えがあるような…………。「お姉ちゃん、…………あたしありすのここと覚えてる？」

覚えているか、という質問は、つまりは私とこの少女に面識が少なからずあったという事なのだろう。確かに、なんとなく見覚えはあるが、それがいつだったのか…………。正確な日付までは把握していないので、はつきりと答えられないでいると、

「もしかすると、気付いてもなかったかな。あたしはただ、見つめてるだけだったから…………。直接お話ししたのも、ここに來てから、それもずっと前に一度きりだったものね。あたしありす、お姉ちゃんなら、お友達ありすになってくれそうな気がしてたの。やっとあたしありすも、お友達が出来るって…………」

やはり、私はこの子と会った事があるようだ。あまつさえ、一度とはいえ会話もしているらしい。

けれど、ここ最近の目まぐるしいまでの出来事の連続で、聖杯戦争に關しない事についての細かな記憶は、風化していくように曖昧とありすなっていた。

記憶喪失の私が、目覚めてから経験した記憶について曖昧だなんて、なんたる皮肉だろう。

少女は儂げな笑みを浮かべ、私の目を一点に見つめてくる。私も、少女の目を見つめ返した。その瞳には、寂しさとどこことなく辛さが滲み出ているように見えるのは、気のせいではないだろう。

「だからお姉ちゃんが行っちゃったときは…………かなしかったし、さび

しかった。でもね……ここに来るとちゅうで、あたしはあたしに出会ったの」

……、あたしはあたしに出会った？

文面だけで見れば、かなり哲学的な事を言っているように思えるが、この少女は見た目が十にも満たない少女にしか見え、言動も年相応のそれだ。とてもではないが、そんな哲学的な言葉を意図して口に出しているとは到底思えないが……。

「あたしはあたしのただ一人のお友達。やっと出来たあたしの、あたしだけのお友達。だからお姉ちゃんのこととはもういいの。あたしさえいれば、あたしはまんぞくだから」

儂げな笑みは、どこか吹っ切れたような微笑みへと変わる。言葉通りなら、少女の私への関心はもうそれほどでもない、という事になるだろうか。

「でも、次の遊びあいてなんだよね。……しようがないから、遊んであげる」

少女は笑う。無邪気に、無垢に、そして無慈悲に。自分こそが、私よりも上なのだとでも告げるかのように。

「おねがいだから、すぐにきえないでね。あたしはかなしいし、あたしはつまんないから」

見た感じは、儂げな印象のする、まるで砂糖菓子か、はたまた人形のような少女。ダン卿のような凄みは感じられないが――。

何故だろう。この少女から、何か底知れないものを感じて仕方がないのは。

少女が去り、一人取り残された私は、アヴェンジャーにも意見を求めようと声を掛ける。

「アヴェンジャー、今度の相手は……、アヴェンジャー？」

話しかけても、返事がない。いや、気配は感じるので、居ないという訳ではない。

なのに、返事をしようとしなない。

「アヴェンジャー、何かあった？」

『……………』

無視——ではない。何かに驚き、息を呑んでいるのが分かる。だが、一体何に驚いたというのだろう。今回の対戦相手である、ありすの幼さ……に、驚いたとか？

いつまで経っても、何も答えないアヴェンジャーだったが、しばらくして現界したかと思うと、ようやく口を開く。

「——なんで、あの子が……!? でも、違う……。あの子は、違う……。私の知ってる、あの子じゃ、ない」

目を見開き、その黄金の瞳には困惑と動揺、そして拒絶が、次から次へと浮かんでは沈んでを繰り返していた。

この現界も、自らの意思でというよりも、たまらず現界してしまったというように見える。

「アヴェンジャー……？」

私は再三、彼女を呼ぶ。どうしようもない不安に駆られ、放っておけば彼女がこのまま消えてしまいそうな、そんな嫌なヴィジョンが私の頭を掠めたから。

私の呼びかけに、ようやく我に帰ったのか、アヴェンジャーは首を何度も横に振り、何かを振り払う素振りをする。まるで、悪い夢でも見てしまったかのように。

「……………大丈夫。大丈夫よ。私には関係ないから。そう、私は違う……私は、あの子とは違う。だから、関係ない……」

あの子、とは一体誰なのか。今の少女の事を指すのか。それとも別の誰かの事を指すのか。

言葉を聞く限りでは、アヴェンジャーが今言った「あの子」と、さつき言った「あの子」では意味合いが異なるように感じられたのだが、果たして……？

それについて聞くこうにも、アヴェンジャーの思い詰めたような顔に、どうにも話を切り出せなかった。

ただただ、互いが無言のままに、時間だけが過ぎ去っていく。それ

が、私には怖くさえ思えるまでに苦痛だったというのに。けれど、私にはこの沈黙を破る事が出来なかった。

「……………ありす、か」

私は、ポツリとその名を小さく口にする。アヴェンジャーの事も気になるが、それ以外でも気になる事があった。

あの子も、マスターなのだ。それも、ここまで勝ち残ってきたという事から考えても、容易な相手ではないだろう。あるいはダン以上の強敵なのかも。

だが、それ以前の問題として、自分は本気で戦えるのか。

これまでは相手が同等、ないし強大だったからこそ、必死にマスターとして戦えた。

……………今回は立場が逆だ。あんな年端もいかない少女相手に、私はこれまでのように戦えるのか。言い知れぬ不安を胸に、私はまた掲示板に目を移し、そこに刻まれた対戦相手の名前を見つめるのだった。

私の心境がどうあれ、時は待つてはくれないし、セラフも怠惰を許してはくれない。

ありすとの邂逅から少し経った頃、教室に居た私だったが、急に携帯端末から電子音が鳴り響いた。恒例のアレだろう。

『……………第一暗号鍵を生成。第一層にて取得されたし』

対戦相手が如何なる相手であったとしても、セラフは平等に時を刻む。

暗号鍵トリガーの獲得と対戦相手の情報収集をしなければ、消滅を迎えるのが自分である事を、端末は冷酷に告げていた。

「……………」

脳裏を掠めた、先程の少女の視線を振り払い、情報を得るための思考に切り替える。

まずは——誰かに相談してみるのがいだろうか？ とは言え、私にとっての頼れる知人など限られてはいるのだが。

その人物を探しに行こうとして、教室の扉に手を掛けたところで、

私が開くよりも先に向こうから扉が開けられる。

先に扉を開けた人物は――

「ん？ あ……。はは、やっぱりお前も勝ち進んできたな、岸波」

見覚えのある男子生徒――いや、マスターが気さくに話し掛けてくる。彼は確か……。以前、正面から私の事を可愛いと言つてのけたマスターだ。

「こりゃ、いよいよ、お前と当たる覚悟をしないとイケないかもな」

なんて、そんな事をいたずらな笑みを浮かべて言うものだから、こちらまで沈んでいた気持ちも、少し軽くなる。悩んでいるのがバカバカしいときえ思えてくる程に。

そして、それは顔に出っていたのだろう。私の顔を見て、彼は嬉しそうに笑った。

「そうそう！ お前は笑った顔が一番可愛いんだからさ、もつと笑つてけ。知ってるか？ 岸波って予選の頃から結構人気あつたんだぞ。クラスで三番目くらいに美人つてな」

……。む。別に自分の美貌に自負や自信がある訳ではないのだが、三番目とはこれまた何とも微妙な位置に……。

参考までに、基準を聞いておくとしよう。別に他意があつての事ではない。断じて、違う。

「ちなみに、一番と二番は？ それと、何で三番目？」

「一番か？ そりゃ、もちろん遠坂だろうな。予選の話だけど、成績優秀、眉目秀麗、スポーツ万能、そんなもつて人当たりも良いと、非の打ち所が無いくらい完璧美人つて評判だった」

ふむ。凜の素を知ってるだけに、納得したくはないが、彼女の評判に頷いている自分が居る。猫を被っていたのだろうか、それも世を渡る上で無視出来ない技術と言えるし、否定は出来ない。

「で、二番目。これは……。うーん、難しいところだけど、言つてしまえば可愛い、美人、だけど遠坂には及ばないレベルつてとこかな。何しろ遠坂が女として太鼓判以上のレベルだから、簡単には越えられない壁とでも言うか……」

永遠の二番手的な事だろうか？ 緑のヒゲも人気はあるが、赤いヒ

ゲには及ばない、みたいなの？

「そんな感じかもな。でだ。お前が三番目なのは、圧倒的に足りないものが、お前にはあるからだ」

「私に足りないもの？ それも、圧倒的に……？」

何だろう。思い当たる節はないのだが。自分の事なんて、自分の中の範疇でしか把握出来ないのだから、他人から見た私もまた、私には自覚出来ないもの。

つまり、客観的に見た自分を一番よく知るのは、自分ではなく他人らぬ他人であるという事か。

彼は私のオウム返しの問題掛けに、一つ頷いて返すと、それを口にした。

「ズバリ、『愛想』だな。お前、予選の頃なんてヒドいもんだったぞ？ とにかく無表情で、あまり感情が顔に出る事なんてなかったからな。最近はずきみに笑うところもよく見るようになってきたけど。多分、愛想良くさえなったら、文句無しで一番二番に食い込んでいけるだろうと思う」

愛想……か。別にそんなつもりはなかったのだが、外から見れば私はそう見えているのだろう。

自分では知覚出来ない無意識。言われて、「ああ、そうだったのか」とようやく気付けるくらいの意識の死角と言うべきか。

「ま、ともあれ、だ。俺はそのままのお前で良いと思う。たまにお前の笑った顔が見られるってのも、何か良いもの見られたって感じがして嬉しくなるしさ」

ぽんぽん、と頭を軽く撫でられ、じゃあなと彼は教室の奥へと歩いて行った。今から戦略でも練るのかもしれない。

私もまた、彼と行き違いで、教室の外へと出る。さて、探し人はどこへやら……。

彼女を探してやって来たのは、校舎の屋上。彼女こと言わずもがな



の赤い少女——遠坂凜は、やはりここに居た。

もはや、ここは彼女の占有地と言ってしまっても良いのではないだろうか。

「誰か来たの……って。なんだ、あなただったの。どう？ 戦いの疲れはとれた？」

私に気付いた凜は、知人に挨拶でもするかのように、こちらの調子を尋ねてくる。

「うん、どうにか」

「……ふうん。少しはマシな顔になってきたわね。なら、ここからは完全に敵同士ね。まぐれとは言え、あのサー・ダン・ブラックモアと戦って勝ちを拾ったのは事実なんだから」

……などと言いつつ、凜は楽しげに話しかけてくる。敵であろうと憎まないのか、それとも、対等の敵だからこそ、友人のように接するのか。

彼女の考えは、やっぱり普通の女の子とは違う気がする。

「ところで、さつきチラツとあなた達を見かけたんだけど、あの小さい女の子が次の対戦相手？ あなたも、厄介な相手ばかり引くわね……」

気の毒そうに苦笑する凜。まったく、本当にその通りなのだから、思わず溜め息が出る。

「別に。自分で選んだ訳じゃないよ」

「そうね。とは言え、一回戦の間桐くんはともかく、二回戦のブラックモア卿、そして今回の……あります、だっけ。正直、あなたの運の無さに驚くわ。さすがに三回戦まで来れば、相手の見た目で油断するような事はないと思うけど、ま、頑張っただけ」

油断など、出来るはずはない。ダンも、そして慎二も——私などより、遥かに聖杯に近い者達だった。

そして、今回の相手。遠坂凜に言われるまでもなく、戦いにくい相手。

私に、あの子を倒す事ことなど果たして出来るだろうか。

と。そんな事を考えている矢先の事だった。一階へと降り立った直後、横合いから、何かが私の腰辺りにペタンと突進さながらに抱き付いてくる。

勢いの割に小さなその衝撃。正体を確かめるべく、視線を下へ向けると、白いエプロンドレスに身を包んだ小さな女の子——今回、自分が倒すべき敵が、私に無邪気な笑顔を投げかけながら、しがみついていた。

「お姉ちゃん、遊ぼう！ おにごっこがいいな。ねえ、おにごっこ！」

一瞬、何かの策略を想像しては見たものの、その悪意の欠片も感じられない瞳に、強張った心の障壁ガードを下げてしまう。

「ね、いいでしよ？」

せがむ少女の声に、逆らう術も、断る必要も見つからない私は、自然と口が動いていた。

「いいよ。鬼ごっこ…だったよね？」

「やったあー！ お姉ちゃんなら、きつと遊んでくれると思ったんだ。だっておんなじだもんね、あたしたち！」

少女は屈託ない笑顔で、私の両手を取って、上下にブンブンと振る。それほどまでに嬉しかったのかと、子どもは感情表現が率直な分、こちらもつられて嬉しくなってくる。

「ところで、おんなじって何が——」

「じゃあ、お姉ちゃんが鬼だよ。あたしありす、アリーナで待つてるから。早く来てね」

こちらの質問を最後まで聞く事なく、ありすは楽しそうにアリーナの方へと走り去って行った。

しかし……、一緒に遊ぶと言ったからには、アリーナの方へ向かった彼女を追うべきだろう。

つくづく、自分が女で良かったと今は思う。もし、これが男だったものなら、幼女を追い掛け回す変態の凶の出来上がり、だ。

まあ、世の中いろんな人が居るから、女性でも幼女好きとかあるか

もだし。第三者からそう見えないように振る舞うように気をつけようか。

間違っても、「ふひひ☆ありすちゃん、ちっちゃくて可愛い♪」とか言わない。絶対に。

とにかく、結果的に何らかの情報が得られれば良いのだが。

「アヴェンジャー、追いかけてよう」

『……ええ』

力無い返事を返すアヴェンジャー。アヴェンジャーも、あの少女を見てからというもの、未だにこの調子である。一体何が彼女をこんな風にしてしまったのか。それを解決する糸口にもなってくれれば……。

そんな淡い期待も抱きつつ、私はありすを追って走るのであった。

「……そういえば、決戦だなんだで忘れていたわね」

岸波白野が去った後も屋上に残り空を眺めていた少女——遠坂凜は、誰に言うでもなく、独り言のように言葉を紡ぐ。

「桜から(強引に)聞き出した、現在セラフに発生している不具合……。順当に戦いは消化されているはずなのに、残ったマスター数は33人。これは聖杯戦争のルールと照らし合わせても、明らかに異常ね」  
猶予期間でマスターが何らかの要因で退場した時、相手はその時点で不戦勝として扱われる。決戦においては、どちらか一方が勝ち進むか、または同士討ちとなって両者共に消滅する可能性が存在している。

要は、いずれにしてもマスターは必ず減少するようにルールが敷かれているのだ。

故に、マスターの総数は常に倍々の反対の要領で、必ずその数値以下にならなければおかしいのである。

「考えられるとするなら、敗退してもなお、消滅せずに校舎に残っているマスターが居る……。ま、その場合は敗退が確定のものだから、後からどうこう出来るなんて事は不可能でしょうけど」

セラフは管理の怪物と呼ばれる程だ。なので、生き残った敗退者が居たとして、どう足掻いても、本戦に再度割り込む事は無理だろう。

「……………」問題は、それだけじゃないってのがネックなのよね」

遠坂凜は、セラフの不具合について耳にした際に、可能な限りの独自調査を行っていた。その時に彼女が得た、謎とでも呼ぶべき他の異常現象が、多くのマスターに知られる事なく、ひっそりと存在していたのである。

「NPCが関与しない購買の追加発注。マスターのはずなのにサーヴァントと契約出来なかった魔術師。サーヴァントの人格に変化が発生するケース——どれも単体としてはバグでしかない。けれど、本当にそうなのかしら…………？」

もしくは、それら異常の全てが、何らかの要因で繋がっている可能性はないだろうか。何か、セラフですら計り知る事の出来ない場所で、静かに侵食するように蠢くモノがある……。

そこまで考えたところで、彼女は首を横に振った。そんなモノ、存在する根拠がない。そもそも、管理の怪物がそんなモノを見逃すはずもないのだ。

ただの考えすぎ。思考が深みに嵌まってしまった。あるはずもない妄想をいつまでも考えていられる程、彼女も暇ではない。

次の対戦相手がどんなサーヴァントを従えているのか、どのような対策を立てねばならないのか、どうやって情報を手に入れるか。考えなければならぬ事は、他に山ほどある。

確固たる情報を得るでもない限り、余計な推測は無意味で不要。そんな事を考えるくらいなら、戦いの事を考えた方が百倍マシだ。「さーて。そろそろ私も敵情視察にでも行くかしらね？　行くわよ、ランサー」

霊体化したサーヴァントを連れ、遠坂凜もまた屋上を後にする。問題が解決した訳ではないけれど。そのための手段も情報も不足

している今は、手の出しようがないと、彼女は理解していた。  
だから、今出来る事、すべき事に向けて邁進するのみ。  
それが遠坂凛という少女の在り方であるが故に。

あたし（ありす）とあたし（アリス）？

「ところがどっこい。そうは問屋が卸さない！　がおー!!」

「ぐえっ」

走る私の横合いの教室、その扉からにゅっと伸びてきた手が私の襟首を勢いよく掴み、たまらず条件反射で蛙の鳴き声のような濁声だみが出てしまう。

走る人間を、それも片手だけで軽く止めてみせるとは、ただ者ではない——

「というか、そもそもの話、廊下は走っちゃいけないのよー。先生、そういうのは見逃さないんだから」

——ただ者ではなかった。虎、もしくはタイガー。そんな猛獣とでも呼ぶべき存在が、とても善い笑顔で私を見つめていたのだ。

「むむ？　ちよつと岸波さん、今すごく失礼な事を考えてなかったかなー？」

「いいえ、決してそのような事はありません」

なんと勘の鋭い事……。やはり獣じみた第六感の持ち主でいらっしやる、この御仁。

「そう？　なら、いいんだけど。それでね、岸波さん。子どもの相手もいいけど、今日は重要なミッションがあるの。引き受けてくれないかしら？」

……。なんとなくね、なんとなくだけど分かったの。多分、また何か取って来いっていう話なんだとね？

どうせついでのだし、断る理由もない。加えて、今回は廊下を走るといふ校内マナー違反を現行犯で咎められた手前、断り辛いというものもあるし。

「イエス　ママ」

私の返答に、タイガーはたいへん満足といった様子で、笑顔で親指を立てた。

「よろしい。では、ミッション内容を伝えるわ。実はね、学校内に、禁止されてる雑誌を持ち込んだ生徒がいるらしいの。だからね、雑誌を持つてる生徒を探し出して、回収してきてほしいの。なお、このミッションが可能なのは三日間よ。四日目に成果を聞きに来るから、お願いね」

早口に伝えるだけ伝えて、タイガーは颯爽と職員室へと去って行った。

それにしても、アリーナを探すのならまだしも、校舎に居るであろうその生徒を探せときたか。それはそれで面倒——

「……………」

ふと、視界の端、具体的には廊下の窓の外で、男子生徒が何やら立ち読みしながら歩いている姿が映った。

……まさか、ね。そんなに早く見つかる訳がない。まあ、念のため、聞きに行くけども。ありすを待たせているし、手早く聞きに行くとしよう。

「雑誌の回収だと？ 俺の少年サンデーを持っていこうってのか？」

おう……ドンピシャとは、恐れ入ったぞ私の運<sup>ラック</sup>。

だが、素直に応じてくれるとは思えない。ここからが正念場だ。

「タイガー——もとい、藤村先生からのお達しなの。だから、渡してくれると助かるんだけど……………」

「うぐつ!?! な、なんだその上目遣いは…………!?! ま、まあ？ 応じてやってもいいが?！」

よしっ。これで早々にミッションクリア——

「でも、代わりに一つ条件がある」

——では無かった。ぬか喜びにも程がある。

「俺のサーヴァントが、大きな鍋を欲しがってるんだ。それを持ってきたら、雑誌を渡してもいいぜ。アリーナは漂流物の宝庫だし、もしもアリーナで見つけられたら、その鍋と交換してやるよ」

「……結局、そうなるのね」

色々と経由しなければいけない分、今回のミッションは全く以て面倒だ。

寄り道を経て、私とアヴェンジャーはようやく、あの少女の待つアリーナへとやってきた。

三の月、想海。その一層。また、新しい戦いが始まった事を告げているかのように、無機質なアリーナの色合いも少し変わっているのが分かる。

「……………」

アヴェンジャーは変わらず、晴れない表情のまま。何も話さないし、視線もジツと下を向きがちになっていた。

やはり、彼女の様子は明らかにおかしい。これほどまでに沈み込んだのは初めて目にする。あの少女との戦いに、何か思うところがあるのだろうか。

「アヴェンジャー、行こう。ありすを探さない」と

「……………ええ、そうね」

声に張りはなく、気が乗らないというような返答。どうにも、この変貌ぶりがありすを見た時から始まっているようなので、その理由を突き止める意味でも、早く彼女を見つけなければ。

ポータルから少し歩いて、探すまでもなく、その少女の姿を視界に入れる。どうやら、私が来るのを待っていたらしい。

今か今かと、待ち望んでいた私の到着に、ありすの顔が花開くようにぱーっと明るくなる。



「あ、お姉ちゃん、こつち、こつち！ お姉ちゃんが鬼だからね。ありすのこと、捕まえられたら、お姉ちゃんの勝ちだよ！ じゃあ、よい。どん！」

よほど楽しみにして待っていたのだろう。ありすは私が側に行くよりも早く、今からする遊びを軽く説明するや、すぐさまアリーナの奥へと駆けて行ってしまった。

鬼ごっこ、と言っていた。どうやら私が鬼なのは確定のようだ。幼女を追い掛け回す凶は、見方によっては即通報ものだが、幼子と戯れる少女を通報する人間などそうそうは居るまい。

そもそも、通報するような人物が存在していないのではあるが……。

とにかく、ありすを追いかけなくては。

「追いかけてようアヴェンジャー！」

私は、先程のありすと同じく、アヴェンジャーの確認も取らずにありすを追って走り出す。アヴェンジャーのテンションが低かろうと、止まっただけでは始まらない。それは彼女とて分かっているはずだから。

心配せずとも、やはりアヴェンジャーは私に追従して走り始める。立ち止まるのは、彼女にとっても無意味。ならば進むしかない。

さて、今回のアリーナについてここで軽く補足というか説明をしよう。

今までは、きちんと道が目に見える形で示されていた。たまに隠し通路のようなものがあつたが、それも微々たるもの。量も数が知れているくらい、気にはならなかった。

だけど、今回はその限りではない。一つ目の小部屋にたどり着いたところで、いきなりの袋小路になったかと思いきや、少し離れた位置に同じく、道が存在しない閉ざされた小部屋が見えていた。

もしやと思い、壁に手を添えてゆつくりと歩き確認する。すると、壁の真ん中辺りで、いきなりスツと手がすり抜ける。

そう。つまりは、今回のアリーナは隠し通路の巣窟であり、目に見えない道が広がる、まさしく迷宮だったのである。

救いだつたのは、端末に通つた道がマップピングされていく事だろうか。それが無ければ泣く泣く迷子の迷子の白野ちゃん子猫と化していたに違いない。

「隠し通路を探しながら、あの子も追いかけないといけなのか……。たいへんそうだけど、それも最初だけだね」

「……そうね。マップピングが終われば、あとはいつものアリーナと同じように進めるのだし」

活気の無いアヴェンジャーからの御墨付きも得られた事だし、早速アリーナ探索と少女搜索を開始しよう。

調べたところ、最初にたどり着いた一見袋小路の小部屋は、左右で二つの隠し通路があった。とりあえず右を選ぶとする。

道無き道——要は、見えない道を進むと、行き止まりでアイテムフォルダがポツンと存在していた。周りがこうだと、まるで宙に浮いているように見える。そして、それは私自身にも言える事でもあるが。

「…………、風？」

行き止まりから引き返そうとしたところで、どこからか吹いてきた微かな風が私の頬を撫でる。

その方向に目を向けると、そこには隔絶された小部屋があった。

否、あれは隔絶されているように見えているだけ。見えない道に、更に隠し通路が存在していて、それこそがその小部屋へと繋がっているのだ。

「エネミーが居る。それも、初めて見るタイプ。……鳥？」

私は、道の先にある小部屋の中にエネミーが飛行している事を確認した。エネミー故にデータが形骸化したような見た目をしているが、それでもはつきりと鳥のような姿に見える事から、軽快に動き回ってこちらを翻弄してくるタイプかも、と予測する。

少女との鬼ごっこもあるし、加えて初見のタイプだ。あまりあのエネミーと戦いたくはないが、先に進む為にも戦闘は必須だし、避けては通れないだろう。

「…………よし。行こう、アヴェンジャー」

私は、覚悟決めて小部屋へと足を踏み入れる。すると、外部からの侵入を感知したのか、エネミーは旋回から真っ直ぐこつちに向かつて直進してきた。

「先手必勝！ 空気撃ち／＼の太刀!!」

敵がこちらに到達する前に、手にした小刀から小さな魔力弾を発射する。が、

『●●●●●●○○○!!』

鳥型のエネミーは形容し難い鳴き声を発しながら、ひらりと私の放った魔力弾を回避する。しかも、行進を続けた上で。

「くっ、かわされた……! アヴェンジャー!!」

初撃が外れ、すぐにアヴェンジャーへと警戒を促す。しかし、アヴェンジャーの動き出しは普段よりも三割増しで遅く、対応する前に、諸に腹へと突進を受けてしまう。

「ぐっ」

「アヴェンジャー!?!」

勢いよく体当たりをかましたエネミーは反動で少しのけぞっており、アヴェンジャーも少し後退させられる程度だが、それでもダメージは確実に入っている。

口角の端からは、血の筋が白い肌を沿うようにツーツと流れていた。

「この、ゴミクスがツ!!」

口の端についた血を指で拭くと、アヴェンジャーは鬼のような形相で旗を振るう。魔女というよりも、まさしく荒ぶる鬼神の如く。

旗は炎を纏い、その軌道は紅蓮に輝き。

炎は獲物へと這いずる二匹の蛇のように分かれ、逃げられぬようにエネミーの周囲をグルグルと回転する。

やがて、炎で作られた二つの蛇は、収束するように中心へと狭まっ  
ていき、エネミーすらもその炎の腹の内に飲み込んだ。

炎はエネミーが完全に焼失するまで燃え盛り、エネミー消滅から少ししてようやく消え去る。

「クソが……!!」

プスプスと焦げ付いた床を眺め、敵はもう居ないというのに、未だにその冷酷な瞳はエネミーに向いていた。

「どうしたの、アヴェンジャー……？　いくら何でも、様子がおかしすぎるよ」

いつもなら、初見だろうと簡単にダメージを受ける彼女ではないはずだ。それに、サバサバしたところのあるアヴェンジャーの性格からして、倒したエネミーに未だ憎しみを向けているのもおかしい。

私は、流石にこれは見逃すべきではないと思い、アヴェンジャーに直球で意見をぶつけた。

「うるさい!!　お前には関係ない!!」  
「え……」

アヴェンジャーの黄金の瞳が、美しくも凶暴な視線を伴って私へと向けられていた。

初めて彼女から向けられる、拒絶と敵意の込められた視線に、私は足が竦む。

怖い。

それが、最初に浮かんだ率直な感想だった。

これまで近く感じていた彼女との距離が急に遠ざかったような、肉親から敵意を向けられたかのような——孤独な恐怖。

勘違いしていたのだ、私は。

彼女は私のサーヴァント。だけど、契約関係にあるだけであって、血の繋がった家族でもなければ、互いに互いの過去を知る旧知の仲間もなく。

知り合ってまだ日の浅い他人同士。二度の殺し合いを共に生き抜いたというだけの協力関係。

それが、今の私達。

私は、それ以上の関係をアヴェンジャーと築きたいと思っている。でも、彼女も同じだとは断言出来ない。これは私の独りよがりではないのかもしれない。

ああ。そうだ。今の彼女の反応は、何よりの証左であろう。

彼女は、私が心に踏み入ってくる事を拒んでいるのだ——。

だから、私は怖いと感じた。

記憶のない私は、彼女にさえ拒絶されたら、一体誰を、何を抛り所にしてこの先を歩いていけば良いというのか。

「……あつ、その……今のは、別にマスターを嫌ってでは——」

私の顔を見ていたアヴェンジャーが、我に返ったように、みるみるうちに顔を青くして謝罪の言葉を述べようとする。

「……ううん。私こそ、アヴェンジャーの事情に無理に踏み入ろうとして、ゴメン。そうだよ。アヴェンジャーにだって、色々事情があるよね。誰にも知られたくない事だって、当然あるに決まってる」  
そう言って、私は無理にでも笑顔を作る。そうでもしないと、泣いてしまうかもしれないから。

作った笑顔という仮面で、私は心に蓋をした。自己防衛本能がそうさせた。

うん。私は大丈夫。もともと、心を形作る思い出もない私だ。これくらいで空っぽの心が死んだりするもんか。

「行こう、アヴェンジャー。ありすを探さないと」

「あ……マスター」

私はアヴェンジャーに背を向け、小部屋の壁に隠し通路が無いか探し始める。

どうにも、今は彼女と顔を合わせる事が出来そうになかったから。だから、今アヴェンジャーがどんな顔をしているのか。それは私には分からない。分かつらうと、しなかった。

それから、私は隠し通路を見つけたものの、そこには隠されたアイテムフォルダしか見つけれられず、結局来た道を引き返す事となった。なので、今度は今行った方とは逆の隠し通路に足を向ける訳だ。

その間、道中は互いに気まずい空気が漂っており、どちらも口を開かなかった。

ただ、流石にエネミーと遭遇した際はそういう訳にもいかず、指示でのやりとりは行う。

そうして、最初の小部屋に戻ってきた私達。いぎ、もう片方の隠し通路を進んで程なくの所で——居た。

あの白いフリルは、間違いなく、ありすだ。本当にすぐそこと言える程の距離に、その小さな姿が見えた。

「見つけた……!」

ありすもこちらに気付いたようで、くすくすと小さく笑い声を零して、再びこちらに背を向けて走り去ってしまう。

せつかく姿を視界に捉えたのだ。このまま逃がすものか——、

『■■▼▼▼■■!!』

——と、息巻くも、すぐにエネミーが目の前を阻む。ボックス型のエネミー、知っているものと色こそ違うが、行動パターンはある程度読めている。対処するのは難しくはない。

だが、このまるで時間稼ぎかのような阻み方。なんだか、あの少女の思惑通りにエネミーが動いているように思えなくもないが……?

「ううん。そんな事、今はどうでもいい。邪魔をするなら、押し通るまで……!! アヴェンジャー!」

戦闘開始の合図をアヴェンジャーに出し、彼女もそれに応じるように、今度は大鎌を片手に敵前へと踊り出た。

さつきよりは、少し動きも良くなっているように思える。迷いは有れど、戦闘には持ち込まない事にしたのだろうか。

「邪魔立てするなら容赦はしません。……ええ。私にも、あの子に聞くべき事がありますから」

鋭い睨みを利かせ、アヴェンジャーはエネミーを見据える。いや、その視線が見据えているのは、走り去ってしまったあの少女の、今はまた見えなくなってしまった後ろ姿なのかもしれない。

「さあ、マスター。雑魚に構っている暇などありません。さつきと始末して、あの子を捕まえますよ」

「……うん。やろうー!」

未だ気まずさは払拭しきれていないけれど、戦闘においては、やはりアヴェンジャーは頼れる存在だ。この一点に関してのみは、今は何の不安も抱かないで良いのだから。

さて、エネミーを難なく倒した私達だったが、ありすの行方が分からず仕舞。このたどり着いた小部屋の壁を確認すると、面倒な事に三つの隠し通路が見つかった。

ありすは一体どの道を進んだのか。半ば転移にも近い形で走っている後ろ姿は消えてしまったため、どちらに行ったかまでは検討もつかない。

「厄介ね。こうなれば、虱潰しに探す方が早いでしょう」

少し遠慮がちではあるが、アヴェンジャーが意見を述べてくる。

確かに、考えるよりも足を動かした方が手っ取り早いし、何よりの解決策でもある。なので、その意見には全面的に賛成だ。

「そうだね。じゃあ、とりあえず左から探してみよう」

一応の方向性が決まり、なんとなく私は左に足を向ける。別にありすが選んだ道の先に居なくても、マップピングは出来るので、全くの無意味という訳でもない。

故に、てきとうに選んだ結果が左なのであった。そこに特に深い意味はもちろん無い。

進んだ先では、またも小部屋が存在しており、鳥型のエネミーも我が物顔で闊歩していた。部屋の主を容易く討伐し、ここでも隠し通路を探し出す。

まあ、案の定やはり隠し通路を見つけられた。今度は一つだけで、マップを見てみると、なんとなくアリの巣でも見ているかのような気分になる。

「なんというか、今回のアリーナの構造……すごく疲れる」

というのも、隠し通路は目に見えないだけあり、通過する際は、宙を歩かされているみたいで、とにかく心臓に悪いのだ。大丈夫と分かってはいても、心のどこかで「本当に？」と感じてしまう弱い私が居る。

人間なのだから、そういう事もあると言い聞かせ、どうにか精神的疲労を誤魔化すのが、私なりの精一杯の抵抗でもあった。

「小部屋二つ二つの大きさは大した事はないけれど、こうも距離を歩かされると流石にイラつくわね……」

「どうやら、アヴェンジャーの機嫌もまた悪くなってきたらしい。い。」

「ん？ あれは……」

次の隠し通路の先に見えた小部屋の中央に、オレンジ色のアイテムフォルダが設置されているのが確認出来る。

これまでの経験から、あのタイプは基本レアモノが入っていると相場が決まっているので、逸る気持ちで開封しに行くと、中から出て来たのは――

「あー……うん。そういうえば、そんな話もあったっけ。わかるわかる。アレだね。例のアレ。というか重い！ 前が見えない！」

私の両手にポンと乗せられた、それはもう巨大な鍋。人が一人入れるのではないかと言える程のサイズのそれは、フォルダが開封されると同時、何の前触れもなく私の両腕の中に収まっていた。

「ぐぬ、ぬぬにゅにゅ……!!」

とてもではないが、重すぎて持って歩くなると到底不可能。しかし、両手は鍋でふさがっており、端末に収納も叶わない。

「あの、アヴェンジャー。悪いんだけど、私のポケットから端末出して、これを端末に入れてくれない？」

「……ええ。こんなデカイ鍋、一体何に使うのかしらね。……生贄用？」

いや、そこは普通に料理でしょう。

物騒な推測を口にしながらも、アヴェンジャーは私のポケットから端末を取り出すと、少し操作に悪戦苦闘した後、鍋を収納する。

かなりの重量感から解放され、私は大きく息をつくとき、アヴェンジャーから端末を受け取ってさっきの鍋を確認する。

解説は、〃神々の宴会に使用されたという大鍋〃との事。案外、アヴェンジャーの推測は間違っていないのかもしれない。

いや、そうだとするならゾツとするけど、あのマスターは自分のサーヴァントが大食らいと言っていたし、単に調理用なのだろう。そ



うであると信じたい。

それから結局、更に見つけた隠し通路を進んでも、そこは行き止まりで、盾型エネミーが居るのみ。加えて、アイテムフォルダが存在する隠し通路があったのみだった。

来た道に戻り、分岐路の小部屋へと戻ってきた私達。結論から言おう。正解の道は、最初に入ってきた時から見て真っ直ぐの前の道だった。

右の道も進んだのだが、こちらはすぐに行き止まりとなっていて、エネミーと戦う羽目になったのみ。アイテムもシヨボいものが置いてあるのみだった。

正解のルートは、他の小部屋を大回りするような配置であり、今回一番長い疑似空中歩行を味合わされた。

すごく吐きそうだが、なんとか堪えて進むと、ようやくありすらしき姿を見つけた——が、遠い！

距離的に考えて、これは、本気で追わないと、逃げ切られてしまうかもしれない。

「……！ 待ちなさい、貴方には聞きたい事があるのよ!!」

「あたしは今、お姉ちゃんと鬼ごっこをしているの。だから、あたしを捕まえられたら、何でも聞いてもいいよ。あははっ、鬼がきたーっ！

逃げるのよ、あたし！」

真剣なアヴェンジャーの呼びかけにも、ありすは我関せず、むしろ捕まえられたら言う事を聞くと宣言し、また走り出してしまう。

「ちっ……！」

「また逃げられちゃった。でも、これまでの第一層から考えても、そろそろ帰還ポータルがあるはず……となると、ありすの逃げた先にトリガーもあるかも……？」

ゴール、トリガー、そしてありす。目標がまとめてクリア出来そうなのだ。自然と足にも力が入る。

幸い、今度是有りすの姿は最後まで視界に捉えていたので、彼女が走って行った隠し通路も同時に視認していた。

私はアヴェンジャーに声を掛け、ありすを追って全力で走り出す。

しばらく真っ直ぐ道なりに走ると、また開けた空間に出る。が、この小部屋には目に見える道があった。そして、その先に――

「やっと追いついた！ しかも、トリガーもある!!」

待ち構えるように、道を塞いで立っている少女の姿。その背後には、緑色のアイテムフォルダ。つまり、今回の一つ目のトリガーが鎮座していた。

「あーあ、見つかったちゃった。この遊び場もここでおしまいだし、鬼ごっこはもう終わりだね。でも、楽しかったよ。お姉ちゃん!」

満足したように、可愛らしい笑顔を私に向けてくるありす。無邪気なその笑顔からは、まるで敵意も、悪意も感じられない。

……これまでの対戦相手とは、何もかもが違っている。

そんなありすだったが、ひとしきり笑った後、不意に真剣で尚且つ哀しげな表情へと切り替わる。

子どもは感情の変化が激しいとはいうが、これはそれとはまた違うように感じられた。

「ねえ、お姉ちゃん……あたしのお話聞いてくれる?」

「お話……?」

まだ距離があるが、聞き取れない事もないその今にも消え入りそうな声に、私はオウム返しのように言葉を返す。

「あのね……あたし、ずっとむかしは、こことは、ちがう国にいたの……」

『そしたらね、』

異変は、突然に起こった

途中で、一瞬ありすの声が二重に重なったように聞こえたかと思っただ次の瞬間。

瞬きの間に、ありすが、増えていた。

黒いエプロンドレスに身を包んだ、『ありす』そのもの。顔も、背丈も。唯一違うとするなら、服の色の違いくらいなものだ。

幻覚。ありすのコードキャストか何かだろうか?

いや、この感じは、そんなんじゃない。あれは、虚像なんかでは決してない。その証拠に、私は突如として現れたもう一人のありすに、恐ろしい程の魔力の波動を感じたのだ。

確実に、あれは実体を持った存在だ。

だが、だとしたら——？

増えた少女は驚く私に構う事なく、黒い服のありすは、冷たい眼差しを携えて続きを口にする。

「そしたらね、戦車とか飛行機とか、鉄のかぶとと鉄のてっぽう、黒いしかくの国がやってきて……空はまっかつか、おうちまっくろくろくなって、きがついたら、まっしろの部屋にいたの」

白い服のありすとは違って、黒い服のありすは淡々と、無表情を貫いたまま話し続ける。それが、今まで見たありすの姿からは想像出来ない程に、不気味で、冷たかった。

「まいにち変わらなくて、おともだちはいなくて、ママもパパもいなくて、」

「あたし、ころんでも、けがをしても、おぎょうぎ良くがまんできるの。いたいっていうと、パパがおこるから」

白と黒のありすは、交互に絵本でも読むかのように、代わる代わる言葉を紡ぐ。

「でも、がまんできないぐらい、いたいコトがあつて。気づいたらここにいたの。でもいいんだ。だって、ここはとっても楽しいわ。いろんな人がいて、みんなみんな、あたしにやさしくしてくれるの」

「ええ、そうねありす。ここなら力いっぱい遊べると思ったでしょう？」

「でも、思いつきり遊んだら壊しちゃうかも。くびもおててもとれちゃうかも。取れちゃったら大変だわ」

「壊しちゃったら直せばいいよ。ママからもらった針と糸があるもの。ちやちやと縫っておしまいよ。ママみたいにお上手じゃないけど、ちゃんとかくつつくわ」

いやいやいや。

いやいやいやいや!!

なんだか、物騒な方向に話が転がっていつているが、可愛らしいあの少女達が口にいよいよ内容ではない事だけは確かだ。

「くつつければだいじょうぶだもんね」

「だいじょうぶじゃない？」

「よかったーっ！ またママに怒られるかとおもった」

「じゃあ、力いっぱい遊びましょう。だってこのお姉ちゃんは、ようやく出会えた仲間なもの。前の二人のマスターとはちがう。今度はちゃんと触れあえるの。真っ赤な血も、あたたかいの」

「ッ!!」

黒のありすが、口角を吊り上げる。その冷たい笑みは、冷たい眼差しは、冷たい殺意は、完全に私に向かっている。舌なめずりする悪鬼が如く、死を手向ける幽鬼の如く。

無邪気で冷酷な殺気が、私の全身を包み込む。

「さあ—— 『あの子』 を呼ぶとしましょうっ？」

「うん！ それがいいよ」

そう言つて、ありすがその手を振り上げる。すると——

『■■■■■■■■■■』  
『!!!』

アリーナの床が、壁が、空が鳴動する。規格外の力の出現に、自分だけでなく、アリーナすら震えていた。

ありす達の背後に顕現したモノ——それは、まさしく怪物。人型をして、筋骨隆々で、人間が二人分程の身の丈に、顔はのっぺらぼう、何より背中に生えた二振りの異形の翼。

全身の感覚が警報を鳴らす。魂が警鐘を告げる。本能が警笛を鳴らしている。

逃げろ……!!

アレは、触れてはいけない害敵だ……!!

「あはっ。すごいでしょ。この子、あたしのお友達なんだよ」

「ねえ、お姉ちゃん。この子とも遊んであげて」

二人のありすは、無邪気に無垢な笑顔で、私を誘う。しかし、その

先は避けようのない死が待つのは想像に難くない。

「ここは――」

「――逃げるよ、アヴェンジャー」

私はゆっくりと後ずさり、アヴェンジャーに撤退の指示を出す。

冗談じゃない。あんなもの相手にして、無事で済むはずがない。

「ここは、一時撤退するのが正解だ。」

「一時、撤退ですか。私も、同じ事を考えていました。あの少女達には聞きたい事がありました……今ここで向かって行っても、無駄死にするだけでしよう」

流石のアヴェンジャーも、圧倒的な脅威を前に、ありすを眼前にしても普段通りの冷静さを保てているらしい。

「よし……」

そうと決まれば話は早い。サーヴァントと二人、全力でこの場から逃げ出す事にした。

なりふり構わず、すぐに振り返って走り出す。と、背後から、ありすの声がある。

「あれー、お姉ちゃん。行っちゃうの？ つまんないの……。この子は、分けてあげた魔力がなくなるまでここににいるから、また遊んであげてねー！」

なんて事だ。トリガーはあの怪物の向こう……。たとえありすがこの場を去ったとしても、アレは期限はいつまでか分からないが、長期間に渡ってあの場に君臨し続けるという。

アレを何とかしなければ、取る事が出来ない――

走り去る中で、少女の楽しげな笑い声だけが、私の耳に嫌に鮮明に届いていた。

## 怪物退治の手掛かり

なりふり構わずに全力で逃げ出してきたので、息が上がっている。逃げるのに夢中で、かなり戻ってきていたのに今気付いた。

加えて、アリーナの中で起きた不可解な出来事で、未だに頭が混乱している。

「ありすが二人……とは一体どうなっている？」

そして、彼女たちが呼び出した凶悪な気配の怪物。あれこそが、あの少女のサーヴァントなのだろうか――。

「――違う。アレはサーヴァントじゃない。サーヴァントは確実にあの少女のどちらかのはずよ」

はつきりと、アヴェンジャーが告げた。あの怪物はサーヴァントではない、と。

「どうして、そう思うの？」

「知ってるからよ。私は、あの子の顔を知ってる。でも、だからこそ意味が分からない。どうして二人も居るの？ あの子の事は顔を知ってる程度で、それ以外はほとんど知らない。それが悔やまれるわね……。もつと知っておけば良かった……！」

どうにも、アヴェンジャーは本気で悔しがっているようで、爪を噛んで何事かをブツブツと呟いている。

しかし、あの怪物が居ては、これ以上のアリーナ探索は困難だろう。マップを見る限り、結構な割合を埋められているが、如何せん暗号鍵トリガーが怪物の傍に設置されているのが見えていたため、どうあっても怪物と戦う羽目になる。

戦って勝てるか。いや、とにかく存在感が凄まじい怪物だったし、感じた魔力も底が知れなかった。

多分、このままぶつかっても勝てない。アヴェンジャーが本来の力を取り戻せていないのなら尚更だ。勝てる見込みもなく無謀に挑むのは、愚行でしかない。

「……長居は無用、かな。今日のところは帰ろう、アヴェンジャー。あ

の怪物をどうするのかは、明日考えよう」

どっちにしても、今日はもう出来る事はない。尻尾を巻いて帰るか、今は出来ないのだ。

アリーナから帰つてくると、外のロケーションはもう夕暮れへと変化していた。

校舎の廊下も、人がチラホラと見かけられるが、ほとんどがマイルームか食堂へ向かっている。

一日の終わり。この時間帯は、明日への備えの為の行動が主となる。

足取り重くマイルームへと帰ってきた私たち。今日は色々とありすぎて、まだ頭の整理が追いつかない。

敵である幼いマスター。同じ顔をした二人の少女。彼女らに呼び出された怪物。

……。

そして、アヴェンジャーと――。

「……」

アヴェンジャーは帰ってくるなり、いつものように鎧を脱ぎ捨てず、そのままの格好で膝を抱えて座り込んでいた。

虚空を見つめる黄金の瞳は、いつになく弱々しく揺らいでいる。普段から強気な彼女にしては、珍しい姿ではある。

「……、」

私も、いざ帰ってきてみると、アヴェンジャーとのアリーナでの一件が思い出され、とてもではないが声を掛けられるような気分にはなれなかった。

食事も気が乗らないので、今日は早めに休むことにする。あの怪物の対策は、明日にでも図書室で調べてみるか。それとも凜やラニに相

談してみるか？

気まずいままに、それでも小さく「おやすみ」とアヴェンジャーに告げ、私は眠りに落ちる。

明日は、また元通りにアヴェンジャーと話せるといいなあ……などと、子どもじみた願望を胸に抱いて。

マスターからの就寝の挨拶から少しして、彼女の寝息が聞こえた事から、本当に眠ったようだ。

「……マスター」

音を立てず、彼女を起こさないように近寄る。

常日頃から思っているが、私のマスターは愛らしい顔をしている。特に無防備な寝顔は、思わず頬が緩んでくるくらい。

いや、別に私はそんな醜態を晒すなど有り得ないのだが。

思えば、彼女は記憶が無く、訳も分からない状態で聖杯戦争へと参加せざるを得なかった。他のマスターたちのように、目的があつて参加しているのではなく、ただ生きるために、彼女は望まぬ生存競争を強いられている。

そんな中で出逢ったのが、私。

今だからこそ、考える事がある。この子は、私に依存するしかなかったのではないかと。

命の危機に瀕し、窮地を救ったとはいえ、最初は私を恐れはしただろう。

けれど、時を重ねるごとに、その恐れも親愛へと変化してきているのが、嫌でも分かる。分かっってしまう。

だって、この子は、アイツとどうしようもなく似ているから。邪険に扱う私に、尚も交友を結ぼうとした、アイツに。

でも、彼女は置かれた状況が違う。彼女には私しか居ない。

マスターにとって、サーヴァントは私だけなのだ。故に、忖度なく私に頼るしかないのに。

そんなマスターに、私は殺意を向けてしまった。敵意を、放ってし



まった。

ほんの僅かではあったけれど。それでも、私を見るあの時のマスターの目は、恐怖が滲み出ていた。

「……だって、仕方ないじゃない。私はアヴェンジャー。復讐者だもの。幸せから背を向けた、暖かな世界を自ら放棄した愚か者なのよ？ それなのに、憎しみに囚われた私の心に、土足で踏み込んでくるから……」

いや、それは言い訳か。何故ならマスターに非はないのだから。

悪いのは私だ。あの少女が幼い自分にとつての友達だからと言って、ここではそんな事は関係ない。

敵として立つというのなら、倒すだけの事。それだけだ。

「勝つわ。敵に情けをかけるなんて、そもそも私らしくもない。いつものように戦って、いつものように殺す。それしか、私とマスターには選択肢が無いのだから」

夢の中に居るマスターの頭を撫でながら、決意する。あの少女が相手だろうとも、容赦はしない。私情は持ち込まない。

聖杯戦争とは、そういうものなのだ。

不思議と心地良い目覚め。なんだか、寝ているあいだ、頭に優しい感触があつたような気がする。アヴェンジャーは……いつものように、甲冑を脱ぎ捨てて眠っていた。

何だろう、眠っているのに、少しだけ晴れやかな顔になったような……。

時刻はまだ早朝。無理にアヴェンジャーを起こす必要もないので、私は彼女を起こさぬようにマイルームを出る。

朝から細かな文字の群と睨めっこするのは、まだ眠気が残るので避けたいところ。

凜は……なんとなくだが、朝に弱そうな気がするので、相談するな

ら昼か。

なら、ラニは？ おそらく彼女の気質から、朝は早い気がする。もう起きてるかもしれないので、いつも彼女が居る三階の廊下、その窓際に探しに行ってみよう。

三階まで上がったところで、ふと誰かに呼ばれた様な気がした。普段は滅多に通らない三階の廊下。何の変哲も無い、退屈な廊下。加えて言えば、かなり朝早い時間帯だ。

何故か無性に気になる。

見渡してみると、遠くに人影が見えた気がした。

気のせいか。いや、よく目を凝らしてみると、確かに人が立っている。

ラニ——ではない。

白衣を着た、存在感の薄い男。

ゆっくりと、こちらへ向かって歩いてくる。

「……!!」

間もなくすれ違うかというところで、彼は私のすぐ近くまで来たのに、そのまま消えてしまった。元々、最初から何も、誰も居なかったように。

跡形もなく消えていったのである。

「『サイバーゴースト』ですね」

凜とした声で、現実を引き戻される。

気が付くと横には、レオが居た。彼も今の幻——だろうか？ を見たのだろうか。

「おはようございます、ハクノさん。貴女も、朝がお早いようで素晴らしいですね。健康的かつ体の資本は早寝早起きです。聖杯戦争に参加するのなら、常に万全のコンディションを整えたいものですからね」

「レオ、今の……サイバーゴースト？ っていうの？」

「セラフには何兆、何京という生命の記憶が保存されています。細菌一つから、もちろん人間に至るまで。原子海洋の有機物の中から単細胞生物が生まれ、生と死の連鎖がやがて人を生み出した奇跡に比べれば——あらかじめ設計図が用意されているセラフの中で、擬似的生命が生まれる事は、そう不思議ではないのかも知れません。あれは恐らく、そういう類のものでしよう。生きた肉体を持たない死者の記録……無害なデータです。気にする事はありませんよ」

かつての人間の記録が、実体にも似た形で現れたもの、という事か。だが、声を掛けられたのは何故なのか、それが気になる。何か私に訴えたい事でもあったの？

でも、もう消えてしまったし、それを彼に問い質すのは不可能だ。レオの言うように、気にする必要は無いのかもしれない。また、あのサイバーゴーストに会えるかも分からないのだから。

「それでは失礼しますね。僕は日課の散歩の途中ですので。そうだが、良ければご一緒に如何ですか？」

「け、結構です……」  
「そうですね。それでは、ごきげんよう」

良い笑顔でお辞儀をすると、彼はそのまま去って行った。そういえば、いつも彼に付き添っている騎士の姿を見かけなかったが、何か用事でもあったのだろうか。

結局、ラニはまだ居なかつたので、私も購買に寄って朝食を調達してから、マイルームへと戻る事にした。

ご機嫌取りというワケではないが、アヴェンジャーにも何か買っついてあげよう。

朝が過ぎ、昼になる。アヴェンジャーとの関係は未だきこちないが、それでも昨日よりは幾分改善されたように思う。

なんというか、私からもではあるが、彼女からの歩み寄りらしきものが、ほんの心持ち僅かにだが感じられた気がするのだ。

「さてマスター。例によって、敵の情報集めを始めるわよ。あの怪物はサーヴァントではないけど、それでも打ち倒す為の手掛かりは探らないといけませんからね」

「アヴェンジャーはあの子を知ってるんだよね？ だったら、あの怪物が何か分らないの？」

これまでのように、アヴェンジャーは一回戦、二回戦でも敵サーヴァントについて知っていたようだし、今回もそうなのは、と期待してみたのだが、

「残念。私もサーヴァントの真名こそ知ってるけど、その特性や性質については無知もイイところ。予想は出来ても確証が持てないから、迂闊な事も言えないのよ」

首を振り、困ったとばかりに溜め息を吐くアヴェンジャー。

しかし、そうなると敵サーヴァントの正体がまるで掴めない。アヴェンジャーのスタンスからして、私に敵サーヴァントの真名を突き止めさせる方針なので、やはり自分の足で情報を稼ぐしかないか。

それにしたって、サーヴァントがマスターと瓜二つだなんて、正直なところ意味が分からない。そんな英霊が存在しうるのだろうか。

まさか、双子のサーヴァントで、片方が最新の英雄で、片方がそのマスターであるなんて事は無いだろうし。

こうなれば、ありす本人を探して聞いてみるか。あの子、案外私に懐いてくれるし。

……本当なら、妹が出来たみたいで嬉しかったんだけど、そんな彼女と戦わされる運命にあるなんて、セラフも悪趣味甚だしい。

もしありすが見つからない時の代案としては、誰かに双子について聞いてみるか。

何にせよ、慎重に行動するべきだろう。白いありすはともかく、黒いアリスは私に対して敵意を剥き出しにした目をしていた。

下手に刺激するのは危険かもしれない。

マイルームから教室へと移動する。ありすが居ないかとも思ったが、どうやら居ないようだ。

というか、よく考えれば、遊び盛りの年頃のようにだったし、こんな

堅苦しい場所に、ましてや勉学の象徴たる教室に足を運ぶとは思えない。

次の場所に行くでしょう。

「なあ、岸波……」

と、教室から出ようしたら、後ろから声を掛けられる。振り返り、ここに立っていた男性マスターを見て、合点が行く。彼は教室に居るとよく話しかけるマスターだ。

……その彼だが、若干引いたような顔で、私を見ている。何か知らないうちにしてしまったのだろうか。心当たりは特に無いが……。

が、聞かずとも、その理由を彼の口から聞かされる事になる。

「お前の趣味にどうこう言うつもりはないがな——対戦相手と遊び回るのだけは、不健全だと思うぞ。さすがに……。しかも、それが幼女相手とか」

「な……!!?」

そ、そそ、それは何か？ 私が幼女趣味の変態女子高生だとしても！勘違いにも程がある。とんでもない風評被害だ！

世が世なら、訴訟問題にまで発展させる自信がある。というか失礼過ぎやしないだろうか。

花の女子高生を捕まえて変態趣味と指摘としてくるとか。デリカシーというものをだね……!!

「……なあ、動揺しまくってるのは、俺の気のせいだよな？ いや、そうであってくれ、頼む。俺の中の岸波のイメージを壊さないでくれ。後生だから」

拜むように両手を合わせ、僧侶のように頭を下げた礼の形を取るや、彼はそそくさと去ってしまった。

……、誤解解けてなくない!?

ありす搜索のため、私は校舎を回っているのだが、他のマスターからの視線が痛い。

さっきの彼から聞いた私の風評は、あらぬ誤解と要らぬ噂となって

校舎全体へ駆け巡っていたらしい。

「見て、アレが例の……」

「あんな可愛い顔して、人は見た目で判断出来ないってのは本当だな……」

「幼女趣味 k t k r !! 羨ましいぞ同志よ！ 我が輩も幼女の対戦相手になりたいでござるう!!」

「いやはや、君は計り知れないマスターだな。これまで様々なマスターの記録がセラフには集積されてきたが、こうも偏った多趣味を持ったマスターは初めて拝見する。まったくもって愉悦だよ」

「対戦相手と遊ぶとか、どんな神経してんだよ……。殺し合う相手だつてのに」

などと、私を見ては言いたい放題好き勝手言ってくれる。

あと、いつも思うのだが、野次馬の中に愉悦神父や変な人が交ざるのは何なの？ 暇なの死ぬの？

何よりシヨックだったのは、三階で一成と会って開口一番に、

「お前が相手のマスターと遊んでいる様子は、はつきり言ってたかなり異常と言わざるを得ない……。日々の戦いの連続に、心身共に疲れしているのやも知れん。一度、保健室に行く事をお勧めするぞ」

と、本気で心配された事だ。あの生真面目な彼にそう言われて、心に大きなダメージを負ってしまった。

これ以上のありす搜索は、余計な精神的ダメージに繋がりがかねない。早く見つけるか、違う方法に切り替えないと。

「おかえりなさい、岸波さん。無事に帰ってきて良かったです」

柔らかな笑みと共に迎え入れてくれるのは、保健室の主である桜。こうして足繁く保健室に通うのは、彼女の笑顔を見る為でもある。

決して。決して一成の言葉を真に受けてここに来たワケではない事だけは宣言しておく。

「支給品をわたしますね。今回も頑張ってください」

手渡されたのは『魔術結晶の欠片』。占い師が使うような水晶の欠片に、魔術師の魔力が少量封じ込められたものだ。

これを服用（※電腦世界なので飲んでも大丈夫です。現実世界では危険なので、良い子は絶対に真似しないでネ！）すれば、マスターの魔力を僅かに回復する事が出来る代物である。

コードキャストの使い過ぎなどで、魔力を消費した時などが主な使い道だ。ただ、電腦世界だからと言って過信は禁物。欠片とはいえ多く飲み過ぎると、胃の調子がヤバくなるので、使用する際は用量を守りましょう。

ところで、ありますがここに来なかったか聞いてみたが、桜はずっとここに居たそうだが、これまで一度も来た事はないらしい。

まだまだ幼い子どもようだし、病院を想起させる保健室は忌避しているのかも。

保健室を後にし、今度は校庭に出てみる。その際、マンガ雑誌回収の交換条件として頼まれていた大鍋を、アリーナでちようど拾っていたので取引し、どうにかタイガークエストは完了した。タイガーに渡すだけは忘れないようにしよう。

ちなみに、マンガ雑誌は『少年サンデー』という名前で、特に人氣作品なのは『ロジウラ!』というものらしい。タイトルにパクリ感が半端ないが、放課後の路地裏で登場人物である三人娘がだべるという内容で、何が面白いのかよく分からなかった。

ただ、一人だけ女子高生の格好の女の子は不思議と応援したくなる。何故かは分からないのだが。

一通り探したはずなのだが、一向にありすの姿が見当たらない。昨日は鬼ごっこだったが、これじゃあまるで、今日はかくれんぼをさせられている気分だ。

諦めて図書室にでも向かおうかと、校舎の二階に上がったところで、ようやく探していた白いフリルが目映った。

「やっと見つけた……」

あちらも、私が階段のほうから現れたのに気付いたようで、私の顔を見るなりパーツと笑顔を輝かせて、こちらへと走ってくる。

その勢いのまま、腰あたりに抱き付いてきた少女は、純粹無垢に笑っている。すりすりと頭をこすりつけるように甘えてくるあたりすだったが、私は周囲の視線に、撫でるに撫でられず困ってしまった。そんな私の気持ちはつゆ知らず、ありすは無邪気をお願いをしている。

「お姉ちゃん、今日も遊ぼう！ 今日学校で、かくれんぼがしたいな」

……えー。散々探し回って、もはやアレが半ばかくれんぼじみしていたのに、ここに来て本当にかくれんぼをさせられる羽目になるとは。が、ありすは無邪気を言わずに、さっさとかくれんぼを始めてしまおう。

「じゃあ、あたしありす隠れるから、ちゃんと見つけにきてよ！」

と、言い終わると同時に、彼女は転移で姿を眩ました。というか、セーフであるかくれんぼは未来感が凄まじいな。数える必要もなく、即座にかくれんぼスタートとか。

「ちようどいいじゃない。あの様子なら、かなり素直な性格みたいだし、遊びに応じて何か探つてやれば？」

アヴェンジャーが現界し、遊びに乗ってやれと諭してくる。まあ、魂胆が見え見えだけど。

なんだか、ありすの純心さにつけ込みみたいで気が引けるけど、確かに情報を得られるまたとないチャンスでもある。

ここは乗じてみるのも良いだろう。

「まあ？ また妙な噂が広まる事にはなるでしょうけど」

からかうように、意地の悪い笑顔で言ってくるアヴェンジャー。せっかく忘れてたのに、思い出してしまったじゃないか！ もう！

……こほん。かくれんぼ、と言うなら、この校内のどこかに潜んで



いるはずだ。早速探してみようか……。

そして、方々探し回る事10分。小さな子が隠れそうな所を走り走って探していたが、これが全然見つからない。

もしや、着眼点に問題があるのでは、と思い至り、趣向を変えてシンプルに廊下の奥などを探してみると、アリーナの入り口がある死角に、彼女は居た。

……茂みや弓道場にまで行った私の努力は一体？

ともあれ、かくれんぼならルールに則った方法で終わらせよう。

「ありす、みーつけた」

「あー！ みつかっちゃった。残念……ありすあたしの負けだね」

うん、やっぱり素直な子だ。すんなりと負けを認めるあたり、非常に好感を持てる。

「うーん、お姉ちゃんが勝ったから……そうだ！ じゃあね、お姉ちゃんのお願いごと、何か聞いてあげる！ 何がいい？」

何の裏もない、心からの提案。これはチャンスだが、お願い事……どうしようか——。

二人のありすについて教えてもらう？

それとも、あの怪物を居なくならせてもらう？

……、ひとまずは確実なほうを選ぶべきか。トリガーの入手は何より重要だし。

「じゃあ、お友達をどかしてくれる？」

「お友達？ それはあの子に聞かないと分からないわ」

む、どうやらこのお願い事はクリア出来る範疇に無かったらしい。あの子——とは、黒いアリスの事なのだろうか。

悩んでいたらしいありすだったが、何か思いついたのか、ポンと手を叩いて、それを口にする。

「あ、そうだ……じゃ、今度は宝探しね！ 『ヴォーパルの剣』を見つけてられたら、きつと、あの子もどいてくれるわ」

『ヴォーパルの剣』……？ どこかで聞いた事があるような気もするが、何だったか。はつきりと思い出せない。

そんな私を見かねてか、ありすは更にヒントを出す。

「えつとね、特別にヒントをあげる！ 『ヴォーパルの剣』は、ただアリーナに行っても見つからないよ。それは、どこにあるとも知れない架空の剣——さあ、どうやって見つけたらいいでしょう？ じゃあ、がんばってね。ばいばい。お姉ちゃん」

ヒントの後に別れを告げると、彼女はさっさとアリーナへと姿を消した。

『上手く情報を引き出せたようね。さて、今度はその『ヴォーパルの剣』とやらを探しましょうか』

霊体化したままでアヴェンジャーが提案してくる。確かに、このままありすを追ってアリーナに入ったところで、あの怪物をどうにも出来ないなら意味はない。

おとなしく宝探しに興じるしかないだろう。

それにしても、『ヴォーパルの剣』か。まさかありすが剣などと物騒な感じのする物をお題に出してくるとは、意外も意外。

引っ掛かるのは、彼女が口にした『架空の剣』というキーワード。何を以て架空とするのか。まさか、実在しないと言わないよね……？

え、まさかね？ ねえ………？

……なんか、自信無くなってきた。

## ヴオーパルの剣を求めて

さてさて、『ヴオーパルの剣』を探すのはいいが、取っ掛かりがこれといってまるでない。

こういう時はやはり、困った時の図書室だ。あそこはムーンセルに収められた膨大なデータを検索出来る唯一の場所。

さすがに、聖杯戦争に直接関わってくるような機密情報にはアクセス出来ないが、対戦相手のサーヴァントの正体を探るくらいなら許可されている。

メジャーな英霊ならまだしも、もしもマイナー過ぎる英霊が相手であるなら、調べるのは必要不可欠だろう。

特に私は、凜やレオのように知識が豊富というワケではないし、尚のこと図書室の利用頻度は多くなる。

……まあ、それ以外にもマンガを漁りに行くのが専らなのだが。

「あら、どうしたの？ 難しい顔して」

図書室に行こうと二階に戻ってくると、凜とぼったり出くわした。どうやら彼女も図書室に行っていたようで、その帰りであるらしい。

「そうそう、聞いたわよ、あの子と遊び回ってるって」

「いやあ、楽しくって……つい」  
「……はあ」

あ、ついつい反射的に答えてしまった。ああ、凜の私を見る目がみるみるうちに蔑むものへと変わっていく。

「あなたを見てると、ここが戦場だつて忘れそうになるわ。ま、平和ボケのまま、勝手に死ぬのは止めないけどね」

相変わらず優しいのか厳しいのか、どちらとも分からない対応だ。いや、どちらでもあるのか。

それよりも、せっかく凜に会えたのだし、図書室に行く前に聞いて

みよう。

「凜に尋ねたい事があるの。『ヴォーパルの剣』って聞いたことない？」

「『ヴォーパルの剣』？」

少し考え込むが、すぐに思い当たるものがあつたらしく、

「たしか……理性のない怪物に有効な概念武装<sup>ロジックカンサー</sup>……だったかしら。それがどうしたの？ あんな汎用性の無いもの、大して役に立たないと思うけど」

「いやね、ちよつとありすと宝探しをしてて。それでその課題がソレなんだ」

「ふーん……。子どもの遊びに付き合つてあげる必要ないと思うけど。というか、そもそもあの子のアバターがアレだからって、本当に中身が子どもかも疑問じゃないの？」

やめて。それだけは想像したくない。幼い女の子だと思っていた対戦相手が、実はその中身が油ギツシユな中年男性だった——なんて、おぞましいにも程がある。

しかも、そんな相手と意気揚々と遊んでいた私って……。

首を振つて、残念な思考を外へ追い出す。考えないようにしよう。ありすは、可愛らしい女の子。きつとそうに違いない。

「……あー。言つて私も少し気分が悪くなつたわ。ごめんなさい。それで『ヴォーパルの剣』だっけ？ まあ、それでも必要だつて言うのなら……そうねえ、錬金術<sup>アルケミー</sup>の領域なのよね。残念だけど、私には練成できないわ」

なんと。あの天才ハッカーで高名（らしい）。私はよく知らないのだが……）である凜にも、出来ない事があつたとは。

「あのね、私だつて何でも出来る万能人間じゃないんだから。そりゃあ、私にも得意不得意だつてあるわよ。だから今回は助けを求められなくても無理。誰か錬金術に通じたマスターでも探して、交渉してみたら？」

——錬金術、か。

うーむ、凜に頼れないとなると、これは困つた。心当たりがあるわ

けでもないし、他のマスターたちにも聞いてみるとしようか。

凜と別れ、ひとまず図書室へと行ってみたが、これといって収穫もなく、どうしたものかと悩む私。

とりあえず、『ヴォーパルの剣』が童話——『鏡の国のアリス』において『ジャバウオックの詩』に登場するものだという事は分かった。だが、それだけだ。敵のサーヴァントが、童話に関係する英霊であるかとも考えられたが、確信が持てない。

あの怪物がジャバウオックだとして、それを呼び出したサーヴァントは何だ？

ルイス・キャロル……？ いや、それでは、あの瓜二つの少女たちの説明がつかない。

決めつけるのは早計か。もっと情報を集めてからでないと、決め打ちには難しい。

図書室を出て、文字を見つめ過ぎて疲れた心を癒やすため、屋上へと向かう。高い所で風に当たりたい気分になったからだ。

途中、三階の廊下を覗くが、やはりラニの姿はない。あと、朝に見かけたサイバーストも、やはり現れる事はなかった。

が、ラニやサイバーストは居なかったが、一成は居たようで、私を見かけると声を掛けてくる。

「おお、岸波。息災か？ それはそうと、保健室には立ち寄ったか？

精神の疲れは早めに取りっておいたほうが良いからな。心のゆとりの無さから、正常な判断を怠ってしまう事もままある。案外、馬鹿に出来ないものだぞ」

「まだ言ってるの？ だから、私はロリコンでも異常性癖者でもないからね？ ……あ、そうだ」

AIである彼が知っているとも限らないが、せっかくだ。この際、一成にも錬金術師について聞いてみよう。

「ねえ、錬金術師について心当たりとかってない？ 今探してるとこ

ろなの」

「む、錬金術師を探している？ ふむ……。すまん。残念ながら心当たりは無いが……。たしか、アトラス院と言う所では、占星術と錬金術に通じている、と聞いた事がある」

アトラス院……。それって、たしかラニの所属していた所では。

「ああ、そうだったそうだった。ラニさん、だったか？ 彼女なら今は屋上に居ると思うぞ。何やら今日は星を見るには良い空をしているそうだ」

なるほど。聞いてみるものだ。まさかこんな有益な情報を得られるとは。

一成に礼を言い、私も屋上へと向かう。心なしか、足取りが図書室を出た時よりも軽いような気がする。

予想外にも、とんとん拍子にコトが進んだからかもしれない。

階段を上りきり、外へと出る。作り物であると分かっているが、しかし本物そっくりの太陽の眩しさに少し目が眩む。

「えーと……。居たー」

と、眩しさも治まり、見渡してみると、彼女は居た。ちょうど凜が屋上でいつも居る時とは反対の所に立って、空を見上げている。

早速ラニの下へ向かい、声を掛ける……。つもりだったのだが、それよりも早く、いきなりラニが振り返り、真顔で私を見つめてきた。

「星は常に事象を照らす……。ごきげんよう、岸波さん。あなたがここに来る事は、分かっていました。それで、私に何かご用ですか？」  
いや、そこは分からないのかよ！

というツツコミは心の中だけにして、本題をぶつけよう。

「アトラスの錬金術師って、ラニのこと？」

「——はい。多少なら錬金の術も心得てはいます。正確には、私の師が錬金術師で、私はその従者に過ぎませんが。それが、何か？」

ビンゴ！ 従者であろうと、錬金術の心得が少しでもあるのなら大助かりだ。

「じゃあ、『ヴォーパルの剣』って聞いたことない？」

「『ヴォーパルの剣』……。師から聞いたことがあります。特定対象に

のみ有効な魔術礼装——」

あ、マジで実在するものなんだ。てつきり、童話に基づいたモノかと思っていたのだが、本当に存在するものらしい。

思い出すようにして語るラニ。知識を見せびらかすようにひけらかさないの、聞いていて嫌にならない。

「錬金の素材、たとえばマラカイトなどがあれば練成することも出来るでしょう。ですが——」

そこで唐突に言葉を区切るラニ。

そう、とは言え、ラニはいずれ対戦相手となるかもしれない、マスタリーの一人なのだ。

たとえばマラカイトを持ってきて、ラニに『ヴォーパルの剣』を練成する術があつたとしても、前回とは違い、こちらを助ける理由はないのだ。

「……そうだよ。別に、私を助けたってラニに益は無いもの。ごめん。変な事を聞いて……」

自分勝手に盛り上がっていたが、よく考えてみれば、普通は助けてくれるワケがないのだ。

諦め、他に手立てが無いかを考えようと、その場を去ろうとした、その時だった。

「いえ、いいでしょう。あなたには他のマスターとは違う星を見ました。ひよつとしたら、あなたが師の言う者なのかもしれない——」

考え直したのか、師の言う者“などと何やら呟いていたが、どうやらラニはこちらの手助けをしてくれる気になったようだ。

「マラカイトを持ってきたら、『ヴォーパルの剣』を練成してみましよう。確か、マラカイトは、校内のどこかで見た気がするのですが」

とにかく、協力してくれるのなら、彼女の考えが変わらないうちにマラカイトを探して持って来よう。

それにしても、マラカイト……。ラニは校内のどこかで見た、と

言っていたが、私はそれらしき物を見た記憶がまるでない。

なんだか探し物ばかりしている気がしないでもないが、果たしてどこにあるのだろうか。

有る、というのがラニの目撃証言から分かっているだけ、まだマシではあるのだが……。

うーん。頭と体を使っただけで、脳と胃袋が糖分を欲している。ここは一度、購買にでも行って、腹拵えをしてくるか。

ひとまずの目的地が決まり、私は一階へと降りる。探し物プラス、階段の上り下りばかりしているのは確かだ。

と、そこで購買のある地下へと降りようとした際、またしても凜と鉢合わせになる。

「あら？　また会ったわね。それでまた難しい顔して、どうしたの？」  
「実は……」

『ヴォーパルの剣』の練成にマラカイトが必要だと説明すると、意外なことを凜は口にした。

「マラカイト、ねえ。持っていないこともないけど……」

なんと。今まさに探している最中のマラカイトを、凜は持っていると言うではないか。これは是が非でも欲しいところ。

「凜、お願い。譲ってくれる……？」

ダメ元で、思い切って聞いてみた。——譲ってはくれないだろうか。

断られるかとも思ったが、凜は意地の悪い笑みを浮かべる。美人のこういう笑みほど、怖いものは無いと思う。ホント。

「まさか無料で、とか、虫のいいことを考えてないでしょうね。いい？　あなたと私は敵同士。欲しいなら……何か代償は必要だわ」

すんなり貰えるとは思っていなかったが、どんな条件なのか……。思わず全身に緊張が走る。

「マラカイトが欲しいなら、そうね——代わりの宝石を用意して。例えば、大粒のルビーなんてどう？　そのぐらいは欲しいわね」

ルビー……。当然、そんなものは持ち合わせているはずがない。

思わずそんな思考が表に出ていたのだろう、それを楽しむように凜



は続ける。

「さつき、ちよつと宝石を補充しようと思って、購買部のデータベースをハッキングしてみたんだけど——」

ああ、だから購買のほうから上がってきたのか。……って、購買をハッキングとか、いい度胸をしているな。

「あるにはあったんだけど、これが意外と高くてね……」

言い終えると、少しして後ろを振り返る凜。誰も居ないが、どうしたのか、と思っていると、

「ちよつと、まさかあんなポツタクリ価格だとは思わなかったのよ！  
ありえないでしょ、あれは！」

自身のサーヴァントにからかわれたのだろう、そこまで言ったところで、凜はバツの悪そうな顔で続けた。

「ま、まあそんなわけだから、購買部に行けば……一応はあるみたいよ。大粒のルビー。どうするかはあなた次第だけど」

何やら……あまりいい取引でもないような気はしたが、背に腹は代えられない。

凜の商売上手を恨めしく思いつつ、とりあえず、購買部に行ってみるとしよう。

「いらつしやいませー。地獄の沙汰も金次第。月海原学園購買部です！」

購買のお姉さんの元気な声に迎えられ、早速陳列する商品の名前を確認していく。

「えー、ルビールビーつと……あ、あった」

さて、凜が舌を巻くほどのお値段はつと……、ぬわ!?

「(´Д`;) 5000000PPT……だと……!!?」

見間違いかと思い、目をこすつてもう一度見る。

が、変わらず、0は六個のまま。

「あ、あのう……、お姉さん？　これ、お値段間違ってますか……？」

おどおどと自信なく聞いてみるが、購買のお姉さんはキョトンとした様子で、

「ルビーですか？　ああ、確かに入荷してますね……。うーん、発注した覚え、ないんだけどなあ。えっと、お値段ですよ？　間違ってますよ。あ、ご購入ですか？　5000000PPTになりますけどっ！　お金持ちですねえ」

「仕方ない……買うか！」

血涙が思わず流れるほどの高額（：言峰神父のセラフからの給料三ヶ月分くらい。私調べ）だが……『ヴォーパルの剣』を手に入れるためには仕方が無い。

断腸の思いで端末のクレジットを確認するが、所持金は約500000PPTちょい。

……。圧倒的不足だ。

これはもう、残り4950000PPTは体で稼ぐしかないのか……!!

「アホか！　そんな時間無いし、させないわよ！」

「あいたっ！」

いきなり現界したアヴェンジャーに思い切り頭を叩かれる。

やだ、私の心配をしてくれるなんて、嬉しい……！

「漫才してるんじゃないっての！　だいたい、そんな方法でどれだけ時間を掛けるつもりなのよ!?　まだ他に手っ取り早い手段があるかもでしょうが！」

とは言いつつ、全力のツツコミでしたごちそうさまです。

流れで買うと意気込んだは良いものの、確かにこれだけの大金だ。そう簡単には用立てられない。

アリーナでエネミー狩りに勤しんだとしても、一体何ヶ月、何年掛かる事か。

「やっぱりお高いですよねえ。じゃあ、こうしましょう」

唸る私を見かねてか、お姉さんは思い出したように言った。

「実は今、私たち執行部では、保健室の間桐さんの……お弁当がブームなんですよね。でもあれって、マスターの皆さんしか貰う事の出来ない、レアアイテムなんですよ。一度……食べてみたいな……。なーんて」

弁当!?

そんなものでいいのか……。いやいや、手作りともなれば、そのぐらいの価値はあるのか？

よくよく考えると、女の子の、それも桜のお手製である事に多大な付加価値があるのかもしれない。

私だってまだ食べてないし、食べてみたい。

だが、私とアヴエンジャーの行く末が掛かっている。私がいただくのは諦めるしかないだろう。

などと思ったが、とりあえず保健室に行かなければ始まらない。すぐに行ってみよう。

はい。さつきも来た保健室。またやってきました。

……本当に、今日は行ったり来たりの繰り返しである。筋肉痛になりそう……。

「あれ、先輩？ どうしました？」

さつき来てまだ1時間と経っていないのに、私の再訪に疑問符を浮かべる桜。でも、私の顔を見た瞬間の彼女は、どことなく嬉しそうに見えた。

「実はお願いがあつて……」

「お願い、ですか？」

思った以上に真剣な顔だったのだろう、桜と二人、しばらく目が合ったまま黙ってしまふ。

少し空気が気まぎれになり始める中、私は意を決し、用件を口にした。

「——お弁当、作ってくれませんか？」

自然と言葉が丁寧になったが、我ながら間抜けな言葉であると自覚する。

けど、桜はにっこりと微笑んでくれた。

「はい。実はこの先の回戦で配ろうと思つて、練習してたんですよ。味はまだ自信ないですけど……」

——はい、どうぞ。

と、渡されたのは、桜の花柄の包みに覆われた弁当箱。さながら、桜特製弁当・試作型”とでも名付けようか。

気になったので、桜に断つてその場で中身を開封してみる。

思つた以上に豪華そうな重箱に、色とりどりのおかずが詰まったその弁当は、思わずその場で食べてしまいそうな衝動に駆られてしまふ。

「おバカ！ その衝動とやらに負けてんのよ！」

「あいた!? って、さっきもやったこのやりとり！」

自分でも無意識のうちに、手が桜お手製のお弁当に伸びていたようで、アヴェンジャーがまた急に現界して私の頭を叩いて止めた。

さすがは魔性の魅力を持つ桜特性弁当……。本能が抗う事が出来ないとは。

アヴェンジャーに活を入れられた事もあり、食べなくなるのをグツと我慢し、桜に礼を言う。

「いえいえ。これくらい、どうってこともありませんから。……、何かに必要なだったから、先輩がそれを食べられないんですよね？ そんなに、食べたかったですか……?」

「もちろん。それこそ、喉から手が出るくらい」

それは心からの意見だ。出来る事なら、私が食べてあげたいのが本音だが、それは今だけは許されない行為。

購買のお姉さんのせつかくの譲歩もとい厚意を、私のワガママで無碍にしてはいけない。

「そう、ですか。……、すごく、嬉しいなあ……」

柔らかな微笑みを浮かべ、口元の綻ぶ彼女にもう一度礼を言い、保健室を後にする。

「さあ、購買部に急ごう！」

「お……おおっ！ それは伝説の桜弁当じゃないですか！」

再びの断腸の思いで差し出したお弁当を見るや、ものすごい勢いで食いついてきた購買のお姉さん。

「いやあ、まさか本当に持ってきてくれるなんて、ちょっと感動です。確かに、いただきました。では——約束のアイテムを渡しますね」  
代わりに、お姉さんから大粒のルビー——“天然ルビー”（商品名）を受け取る。

これで良かったのだろうか、とかなり思いもしたが、どうあれ目的の品は手に入れたのだ。

さあ、後はゼニゲバの凧にこれを渡せば、マラカイトを手に入れられそうだ。

凧を探して歩き回り、教会前の噴水広場にて食事を摂っている最中の彼女を発見する。

「あら、どうしたの？ ひよつとして……」

まさかあ、と油断している凧に、自信満々に購買部で貰ったルビーを出して見せた。

半ば冗談でしかかけたのであろう物が差し出され、しかも手元に渡された事が意外だったのか、彼女は目を丸くしながらも、マラカイトを渡してくれた。

「まさか、本当に持ってくるとは思わなかったけど、一応約束だしね。何個もあるものじゃないから、大切に使いなさいよ」

ありがたい。けっこう法外な取引であった感は否めなかったが、何とかこれで、ラニに練成してもらえるといいのだが——。

まだ屋上に居るだろうかと心配だったが、赴くと彼女は変わらず、

空を見上げていた。

「ラニ、お待たせ」

くるり、と私の声に振り返る。今度は私のほうが早かった。

「マラカイトをお持ちですね。それを練成すれば、錬金自体はそう難しいものではありません」

ラニにマラカイトを手渡す。彼女は目を閉じ、片手で持ったマラカイトに、もう片方の手を翳す。

触媒となったマラカイトが爆ぜて消えると、ラニは静かに目を開けた。

そしてその手には、一本の剣が現れている。

「これが『ヴォーパルの剣』。ですが、私の力では、これを使えるのはおそらく一度きり。よく考えてお使いください。二度は練成出来ないでしょうから。では、星の導きがあらん事を……」

そう言っただけで差し出された『ヴォーパルの剣』を受け取る。

ありがたい。

これである怪物に太刀打ち出来るかもしれない。早速アリーナに向かうでしょう。おそらく、ありすもまだアリーナに居るはず。

宝探しの答え合わせと行こうじゃないか。

## 怪物退治とお茶会への誘い

ありすよりかなり遅れる形で、アリーナへと入る私たち。

昨日の時点で、アリーナ第一層はほぼ探索が済んでいる。なので、今日はありすたちが呼び出したあの怪物を倒す事が主目的となる。

苦勞して手に入れた『ヴォーパルの剣』ではあるが、本当に役に立つと良いのだが……。

「まあ、そこは何とも言えないわね。ひとまずあの怪物の所まで行ってみるしかないでしょう」

アヴェンジャーは、真剣な眼差しで、あの怪物が居るであろう方向を見つめていた。

怪物を呼び出したとうの本人である、ありすに与えられたヒント。信じてても良いものか、そう思ったりもしたが、結局のところ今はこれに賭けるしかない。他に選択肢は存在しないのだ。

道中、襲い来るエネミーを難無く退け、私たちは昨日は引き返さざるを得なかった通路までやってくる。

遠目にも分かる、あの人型をした怪物の姿。本当に、目を跨いでもまだ消えずに存在し続けて、異様な存在感を放っていた。

渦巻く魔力。近付くと、より強くあの巨人の気配を感じる。

「さて、ここまで来たはいいけど、どうしたものかしらね？」

「うーん……。これって、そのまま武器として使うのかな？」

何気なしに『ヴォーパルの剣』を取り出す。

——と、その時、手元の『ヴォーパルの剣』から鋭い魔力が発散された。

『■■■■■■——ッ!!!』

魔力の解放と共に聞こえた、呻くような声……と思しきものを上げ、あの怪物が苦しみます。……あの凶悪な気配も急速にしぼんでいった。

「マスター！ 敵が弱体化したわよ！ あの女の用意したものなん

て、信用出来るか正直疑ってたけど、思いの外、それなりに強力な魔具だったようね。今なら、あの化け物をぶち殺せるわよ！」

物騒な物言いはアレだが、今だけはアヴェンジャーの言葉に賛成だ。『ヴォーパルの剣』の効力が永続なのか分からない以上、弱ったヤツを倒す機会はこれが最後かつ唯一になるかもしれない。

先手必勝、苦しんでいる最中なら、ガードもままならないはず。

「アヴェンジャー、最初から全力でトばしていくよ!!」

「了解。焼き殺してやるわ……!!」

後先考えるより、まずは怪物退治を優先する。

アヴェンジャーは私から全力戦闘の許可が出るや、即座に巨人へ向けて走り出す。

走りながら大鎌を現出させ、両手に旗と鎌の二刀の構えを取ると、まずは炎で攻撃すると同時に、敵の視界を遮る。

苦しんでいたところに突然の奇襲。ダメージに加えて視界を奪われた巨人は、闇雲にその凶腕を振り回す。

「火加減は如何かしら？ そら、もつとくれてやるわ！」

乱雑な攻撃を何食わぬ顔で避けると、そのまま巨人の背後に回るアヴェンジャー。

旗で炎を操り、敵の全身を覆い尽くす。そして背後から鎌の鋭い一撃が繰り出され、巨人の背を、翼を一閃した。

『■■■■■■■■!!!!』

その斬撃は両翼を切り落とし、巨人の悲痛な雄叫びが鳴り響く。

さりとて、巨人はまだ倒れない。背後から来た攻撃で、アヴェンジャーの位置を知るや否や、炎を強引にも無視して両腕を地面に勢よく振り下ろした。

着弾した地面から、アヴェンジャーへ向けて衝撃波——いわゆるシヨックウェーブ——が放たれる。

「そんなモノツ!!」

襲い来る衝撃波に対し、アヴェンジャーは目の前で爆発を発生させて、それを相殺させる。

衝撃波と爆発のぶつかり合い。それは大きな余波となって、アヴェ



ンジャーと巨人、互いへと熱風と化して襲い掛かった。

少し離れている私でも熱いと感じるのだ。直接、それも間近で受けるアヴェンジャーへのダメージが心配されたが、

「あつつ……くくない！ 別に熱くなんてないし！ ちよつと生ぬるい程度だし！」

と、少し痩せ我慢は見られるが、概ね大丈夫そうでホッと一安心。熱風に煽られた巨人は、アヴェンジャーとは違って大きいのけぞっており、多大な隙を生じさせていた。

弱体化しているとは言え、どんな奥の手を隠しているかも分からない。この勢いのままに早々に倒しきってしまったほうが良い。

「アヴェンジャー、一気に畳み掛けよう！」

「分かってるわよ！ さつさと魔力を回しなさい、ここで仕留めるわよ！ マスター！」

私の了承を得るまでもなく、アヴェンジャーは私から大量の魔力を吸い上げていく。

ありつたけの魔力が、炎へと変換され、彼女の持つ大鎌を覆っている。

巨人も、やつと体勢を整えようといったところで、既に走り出したアヴェンジャーの攻撃を、もはや防ぐ事は出来ない。

走る勢いを利用して、巨人の少し手前で大きく飛び跳ねると、炎を纏った大鎌をそのまま振り下ろす。

スピードと落下に伴う重力、そしてアヴェンジャーの筋力による三重奏により、とてつもない重さの込められた一撃が、巨人の体を縦に斬り裂いた。

鮮烈に、熾烈に、炎の斬撃は巨人を真っ二つに分断したのだ。だが、

名状しがたい叫びを上げながら、縦に半分に分れた巨人は、しかし未だにもがいている。

恐ろしいまでの生命力だ。まさか、まだ戦えるところまで言うのだろうか。

悲痛な絶叫のようにも聞こえ、執念の雄叫びのようにも聞こえる、

怪物の叫び。

アレは、間違いなく危険な存在だ。弱体化しようとも、敵対者を滅ぼす意思は全く衰えていない。

事実、巨人はまだ動いている。真つ二つになっても。敵を倒そうと機械的に動き続けているのだ。

「まだ動くワケ!? しぶとい……!!」

多大な魔力の放出により、アヴェンジャーはすぐに動けずにいた。あまつさえ、疲労が一気に押し寄せ、前へと倒れかける。ちようど、割けた巨人の体の真ん中に来るように。

それが致命的だと気付いたのは、巨人に異変が起きてからだだった。

「■■■■▲▲▲▲!!」

巨人の声の質が変わる。と、次の瞬間、左右に割れた断面が、互いに元に戻るかのように結びつき始めた。

再生——。その可能性を私は考慮していなかったのだ。

しかも、その断面の間にはアヴェンジャーがまだ取り残されている。彼女を諸共に自身へと取り込むつもりか……!?

「く、気持ち悪い! 離せっ、このっ……!!」

腕に、足に。襞ひだのようなものがアヴェンジャーの四肢に絡みついて、逃げる事を阻んでいるのだ。

このままでは、アヴェンジャーが巨人の体に飲み込まれてしまう。

「どうしたら……!?!」

アヴェンジャーは必死に抵抗しているが、それが余計に逆効果となる。彼女がもがけばもがく程、締め付けが強さを増しているようだった。

助けようにも、私の力があの怪物に通用するとも思えない。コードキヤストも決定打には成り得ない。

ふと、手に熱い感触を覚えた。

さつきまで『ヴォーパルの剣』があつた手に、ボロボロに擦り切れ、少し縮んでガラス片程度の大きさになった、言わば『ヴォーパルの欠片』とでも言うべきものが握られていた。

「……………」

可能性が有るとするならば、コレがまだ効力をその身に宿していると信じ、私自身の手で、あの怪物を斬りつける事。

直に触れずとも、離れた位置から怪物を弱体化させる程だ。直接触れたら、一体どうなるのか。

それは無謀とも言える、勝機の薄い賭けに近い。失敗すれば、私も取り込まれるか、殺される。

だけど、そんな事は関係なかった。

だって、私は手にしていた欠片を見た次の瞬間には、既に巨人へと向けて走り出していたのだから。

「あああああああああああああ!!!」

がむしゃらに走る。構えと呼ぶには不格好だが、手に持った欠片を突き出しながら、狙いも付けないで私は、巨人へとソレを乱雑に振った。

『▲▲▲、■■■■——』

再生中だったためか、特に阻害もなく、巨人の体に手が触れた感触がすると、遅れて悲鳴が上がる。その金切り声のような悲鳴は私やアヴェンジャーからではなく、巨人のものだった。

巨人の動きがピタリと止まり、アヴェンジャーに取り付いていた壁も停止した。いや、それどころかボロボロと端から徐々に崩れていく。

崩れた先から塵へと変わり、やがて真っ赤だった巨人の体は、その全身を灰色へと変貌させ、砂塵が舞うが如く、跡形もなく消え去った。

「……………倒せ、た？」

「そう、みたいね。危機一髪つてとこだったわ…………」

脅威が去って、互いに思わず尻餅をつく私たち。手に持っていた欠片は、今度こそ完全に消えて無くなっていった。

あとでラニに心からの感謝の言葉を贈ろう。ラニが居なければ、こうして怪物を倒せなかったのだし。

凜は…………一応、てきとうにでも礼を言えればいいか。

とにもかくにも、ひとまずはこれで一安心——。

「あらら、本当に『ヴォーパルの剣』を手に入れるなんて」

「ふふ、本当ね。いったいどうやったのかしら」

一安心も束の間、幼い少女の声がした。

見ると、あの巨人が塞いでいた通路の先で、昨日と同じように、瓜二つの少女が並んで立っている。

「宝探しはお姉ちゃんの勝ちだね」

「そうね、じゃあ、次は何をして遊ぼうかしら？」

……まさか、またあんな怪物を出すつもりか。

と、危惧したのだが、ありすはあっさりと踵を返し、

「次の遊びはまた考えておくね。じゃあ、お姉ちゃん、ばいばい」

そのまま転移によって姿を消した。気配も同じように一切が途絶え、ありすはアリーナからも出てしまったらしい。

「どうやら帰ったみたいね。子どもの考えるコトって、ホントよく分からないわ……」

緊張の糸が切れ、一気に脱力するアヴェンジャー。幸い、近辺に他のエネミーは確認できない。もしかすると、あの巨人が手当たり次第に近づくエネミーすらも倒していたのかもしれない。

私も一連の騒動と、アリーナに入るまでのドタバタで完全に気が抜けてしまった。今日はもう暗号鍵トリガーを取ったら帰ってしまおう。

「それにしても、あの怪物を倒されたっていうのに、何一つ堪えた様子が無かったわね」

よつこらせ、と立ち上がりながら、ありすたちのさっきの様子を思い出す。

確かに、サーヴァントと同様、もしくはそれ以上の力を持っていたと思わせるあの怪物を倒されたというのに、特に気にした素振りは見えなかった。

動揺すらしておらず、逆にこちらに対して感心していた程である。しかも、それは怪物を倒した事ではなく、私が『ヴォーパルの剣』を手に入れられた事に対しての感心だった。

まさか本当に、あの怪物も、私を試すかのような遊びの誘いも、彼女たちにとつては本当の意味で、単なる遊戯に過ぎない、とでも言うのだろうか……。

「さて、ようやく開けた暗号鍵トリガーへの道。さっさと回収して帰りましょうか。今日はもうこれ以上は戦う気分じゃないし。というか疲労困憊よ」

アヴェンジャーが顎で示す先、もう見える所に緑色のアイテムフォルダが設置されていた。これさえ手に入れてしまえば、このアリーナは完全攻略となる。

疲れた足取りのままに、私はアイテムフォルダを開封した。中から現れたのは、『トリガーコードイプシロン』。

これで次の暗号鍵トリガーが現れるであろう、第二層の構築が待たれるばかりだ。

結局、帰って早々に寝てしまった私たちは、昨日の疲れがまだ少し残る中で次の朝を迎えていた。

「……ふう」

朝早くから一人、誰も居ない教室で私は昨日の出来事へと思考を巡らせる。

昨日の出来事は、一体何だったんだろう。

慎二やダン卿の時とは、根本的に謎の種類が違う。

サーヴァントの正体。瓜二つの姿をした二人のありす。どうにか倒す事の出来たものの正体の分からぬ巨人。

だが、確実に分かったのは、マスターとしてのありすの力が絶大で

あるという事。

サーヴァントを軽く凌駕してみせたあの怪物とて、また現れないとも限らない。

これらの謎を解明できなければ、私たちに勝ち目は無い。

また誰かに相談に乗ってもらおうか……。

それから時間が過ぎ、早めの昼食を終えた私たちは、ありすについて他のマスターに意見を求めようと、購買部へと向かう。

ラニも凜も、いつもの場所に居なかつたので、食事の調達にでも行っていると考えたからだ。

なるべくありすに見つからないように、慎重に周辺を確認しながらの進行。当の本人たちに、自分たちの事を嗅ぎ回っていると悟られるのを避けるためだ。

そして、地下に続く階段を下りようとしたところで、

「みつけたー!」

「みつけた」

いきなり声を掛けられた。二つの幼い少女の声は、私を挟むようにして、前触れもなく発されている。

一つはすぐ後ろから。黒い服のアリスが立っていた。

もう一つは、私より少し下、階段の踊場から。白い服のありすがこちらを見上げるように立っていた。

「なんでココソコソするのかしら、お姉ちゃん?」

「あそぼう! あたらしい遊び、かんがえたの」

まるで挟み撃ちにでもされているように、黒いアリスの責め立てるような問いかけと、白いありすの遊びの催促を受ける。

内容がまるで違う二人の言葉に、どう答えたものかと言ひ淀む――

――いや、口が上手く動かない。

驚くことに、極度の緊張に体が支配されていたのである。

白いありすが、いつまでも何も言わない私の言葉を待たずして、その続きを紡ぐ。

「とつても楽しい遊びなのよ！ そうだわ、新しい穴の中でなら、きつと見せられるわ。だから、ぜったいきてね！」

言うや、白いありすの姿がその場から掻き消える。おそらく転移したのだろう。

「ふふ……やくそく、だからね」

黒いアリスは、貼り付けたような笑顔で、それだけ言って白いありす同様にどこかに転移してしまう。

「……ハアッ」

知らぬ間に、息を止めていたらしく、一気に肺に空気が入って軽い呼吸困難に陥る。

動けなかった。

二人の少女に挟まれている……ただそれだけの事なのに、手足が痺れて、意識が凍りついてしまったのだ。

そんな体を現実に引き戻すかのように、無機質な電子音が鳴り響く。

見れば、いつものように、第二層と第二の暗号鍵トリガー生成が済んだ事を伝える連絡。

そうだ、期日は淡々と、しかし確実に迫ってきている。

頭にまとわり付く二人の幼い少女の幻像を振り払い、ひとまずアリーナへ向かう事にする。さっきのありすの口振りからして、新しいアリーナで待っているはず。

手掛かりを得るなら、他の誰かに相談するよりも、当事者である本人たちから得るのが手っ取り早い。

それに、待っていると言われては、行かないワケにもいかない。約束を破られた子ども程、厄介な存在はないだろうから。

はてさて、少女を追いかけてやって来たるは『三の月 想海二層』。

基本的にアリーナ第二層では、第一層の無機質な風景から一転して、幻想的な光景が広がっているのが常であるが、今回も例に漏れず凄まじい。

前回は水没した古代遺跡を思わせたなら、今回は氷海に閉ざされた氷結晶の城。上を見上げると、海面を氷塊が満遍なく流れているように見える。

氷の海が、第三回戦での舞台である事は明白だった。

そんな、神秘と幻想に満ち溢れたアリーナに降り立ってすぐ、私は美しい光景から現実へと引き戻される。

何故ならば、二人の少女が待ち構えるようにして、目の前に立っていたからだ。

「あ、お姉ちゃん！ 遊びに来てくれたんだ！」

「やっぱり、お姉ちゃんは優しいね」

無邪気に笑う白と黒の少女たち。

片や、飛び跳ねて全身で嬉しさを表現し、片や、穏やかに笑みを浮かべて私を見つめている。

同じ見た目ののに、何故だか受ける印象が異なるように感じる。

「ここはね、ちよつと待っててね、今新しい遊び場を作るからー」

——え？

どういう事か、それを聞く暇もなく、少女はそれらしくポージングを取る。

「ここでは、鳥はただの鳥」

「ここでは、人はただの人」

言い終え、少女たちが背中合わせに手を重ねる。その刹那、世界が変わる。

比喻や例えではなく、物理的に、現実的に、世界を違和感が支配し浸透していた。瞬く間もないほどに、それはまさしく一瞬の出来事だ。

視界が歪む。目に映るもの全ての色が反転している。空間がねじれ、焦点を合わせられない。

「お姉ちゃん、ようこそでありすのお茶会へ！」



白い少女が楽しげに言う。まるで、この狂った世界が彼女には普通であると言わんばかりに。

「これは……固有結界!? まさか、こんな隠し玉を持ってたってワケ!?」

世界に起きたこの異常に心当たりの有るらしいアヴェンジャー。固有結界とは一体……?

「ここではみんな平等なの。アナタとかオマエとか、ヤマダさんとかスズキさんとか、いちいち付けた名前なんて、みーんな思い出せなくなっちゃうの。お姉ちゃんもすぐにそうなるわ」

「それだけじゃないよ。だんだん、自分が誰だか分からなくなっていくって——最後には、お姉ちゃんもサーヴァントも無くなっちゃうんだから」

「おもしろいでしょ!」

………、待て。ちよつと待つてくれ。それは、非常に拙いのでは。そもそも、この世界の異変に付いていけないのに、その上で大変な状況下に半ば強制的に置かれている。考える余裕も与えてくれないと言うのか。

そんな、私の思考を読んで嘲笑うかのように、黒い少女が提案を口にしてくる。

「じゃあ、ここで鬼ごっこをしましょ。鬼はお姉ちゃんだよ!」

「いくよ。よーい、どん!」

有無を言わず、子どもならではの自分勝手な言い分で、私を鬼に指名した二人。止める間もなく、二人はその場を走り去ってしまう。「自我を薄める事で存在を消そうとする固有結界、ね……。子どものクセに、ナメた真似してくれるじゃないの。いいわ、さっさととっつかまえて、このムカつく結界を解かせてやろうじゃない」

いつになくやる気なアヴェンジャー。日が経つ毎に、徐々にいつもの調子を取り戻しているようだ。そんな彼女の様子に、私は内心で安堵する。

「うん。これまでもアリーナには行き止まりがあつたし、そこまで追い詰めれば捕まえられるはずだよ」

そうと決まれば、すぐにでも動き出さねば。

自我が薄れる——それが何を意味するのか、まだはつきりと理解していないが、悠長に構えている場合でないのは確かだろう。

少女たちを追って、その姿を探しながら走る私たち。

走る中で一つ気付いたのだが、時間が経つ程に意識が朦朧としてくる。思考がぼやけ、認識機能にすら影響を及ぼしているのだ。

自我の薄れ、その進行により自我が消失する。もしかすると、自我が完全に途絶えたその時こそ、自身すら消滅してしまうのだろうか。ならば、やはりこの結界の中で長時間過ごすのは危険でしかない。

「見つけた！ このっ……!!」

ようやく見つけたありすたち。けれど、

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ！」

黒いアリスが手をパン、と叩くと、届いたと思って伸ばした手は、虚しく空を掴むのみ。

見渡して探すと、クスクスと笑って走る二人の姿が見える。完全に遊ばれている。

「チィッ！ めんどくさいわね……!!」

からかわれ、怒りを抑えきれないのか、黒い甲冑の女性が拳を震わせ、少女たちを強く睨んでいる。それすらも、あの二人は楽しんでいるように見えた。

何度も何度も、追い付きそうまで追い付けない。手が届きそうで届かない。そんなやりとりを繰り返し、それでも、やっと少女たちを袋小路に追い詰める事に成功する。

「追い詰めたわよ。クソガキにはキツイいお仕置が必要よね？」

「ふふ……つかまつちやった……？」

「すごい！ お姉ちゃんたち、素早いー！」

「でも、そろそろ名前も忘れた頃じゃない？」

名前？ 何を言って——、

「思い出せないでしょう、お姉ちゃん！」

自分の名前。

少女たち……あれは、誰だったか……に指摘されたが、頭の中が真つ黒い石になったかのように、“知識を引き出す”機能が失われている！

……いや、そうじゃない。

そもそも、はじめから、自分に『名前』とか無かったんじゃないか？ たっけ？

それを認識しかけた途端、体から力が抜けていく。指先の感覚が薄れる。立っている感触すら希薄に感じる。

「ちよ……!?! 今アンタの体、一瞬だけど透けてたわよ！ しつかりしなさいマスター！ 気を確かに持ちなさい、呑まれるわよ！」

隣で誰かが大声を出している。マスター……？ 一体何の事だろう……。

「ふふふ……はやく捕まえないと、次は体も消えちゃうよ！」

「うふふ、捕まえられるかしら、お姉ちゃん？」

パン、と手を叩くと、少女たちの姿が消えた。どこに行っただろう、と思っていると、隣の女の人が先に見つけたらしく、そちらへと走り出す。

何故か私の手を引っ張っているが、この人は誰なんだろう。それにしても、綺麗な人だなあ……。

そうして おいかけている と しようじよ たちが たちどまる。

どうやら、また、イキどまりダツタようだ。

「よくもまあ、ちよこまかと逃げてくれたじゃない？ さて、今度こそ追い詰めたわよ！」

「何か怖いよ、どうしたのお姉ちゃん？ ひよつとして……怒ってる？」

「どうして怒るの？ ああ……身体が消えかかっているから？」

からだ、きえる？ そういえば てガ すけてル。

「ちよつとヤバいわよマジでヤバいわよ!! 透けてるところか消えか

けてるじゃないの!? もう待った無し、その小娘共、早くこの固有  
境界を解かないと、痛いどころじゃ済まさないわよ!!」

「怖いわ、あたし。<sup>アリス</sup>何で怒っているの……?」

「わからないわ、あたし。<sup>ありす</sup>少し遊んでいただけなのに……」

おびえる しようじよ たちが また、きえた。さつき と お  
なじ だ。

「クソツッ! どんどんマスターが阿呆になっていくわ……! 脳味噌  
が空っぽになるのも時間の問題か。もう猶予は無いつてワケね……」

また、テを ヒカレて はしる。

そして また、しようじよ たちが とマツタ。

「……なんでそんなに怒っているの? ……ひつく……お姉ちゃんと遊  
びたかっただけなのに……」

「ここはもう、危ないかもしれないわ。いきましよう、あたし。<sup>ありす</sup>」

「うつく……ひつく……ごめんなさい……お姉ちゃん……」

あ。 また キエた。

「チッ。逃がしたか。……そろそろマスターも限界だろうし、今日は  
私たちも退くしかないかしらね。……ん?」

だけれが、しようじよ たちが キエたところで、なにかをヒロつ  
ている。

「ばぶう」

「……自我の消失って言ってなかった? なんて幼児退行してんのよ  
!？」

「あく、生き返るう」

どうかアヴェンジャーに連れられ、校舎へと帰還を果たした私。  
言語も思考も、校舎に戻った時点で機能を取り戻していた。

現在、購買で夕食を仕入れている最中で、私は一足先に購入した飴

を舐めていた。金色のゴージャスな飴玉は、味さえもゴージャス。何となく因縁がある気がするのは、きつと気のせいだ。

「オツサン臭いわよ……。にしても、まさか固有結界とはね。想定外にも程があるわよ。しかも中身が凶悪過ぎとか。私が言うのも何だけど、エグいったらないわ」

メニューを品定めしながら、アヴェンジャーが愚痴を言う。いや、確かにアレは強烈すぎる。対策を立てないと、今後も消滅の危機と常に隣り合わせでアーリーナに潜らないといけなくなるし。

ありすが退去してからも効力が残り続けた点から推測するに、アレもあの怪物と同じ原理で、長期間の展開が可能なのだろう。

「あの怪物の時みたいは、何か攻略法があると良いんだけど……」

それが分かれば苦労はしない。……と、そう言えば、私が薄れゆく意識の中で行った渾身のギャグの直前にアヴェンジャーが何か拾っていたような気がするが、あれは何だったんだろう。

一度思い出すと、気になって仕方がない。聞いて困るでもなし、素直に尋ねてみるとしよう。

「ねえアヴェンジャー。アーリーナから帰る前に、何か拾ってたよね？」

あれ何？」

「あれ？ 何かのメモっぽかったけど……。今日は疲れたし、アンタもお疲れでしょうから、確認は明日の朝一にしましょうか」

早々に話題を切り上げると、何を買うか決めたらしいアヴェンジャーにお金を要求される。

まあ、疲れているのは本当なので、とりあえず横になって休みたい……。

「というか、高!? もうちよつと財布に優しいやつにして!？」

「何よ。今日一日頑張った私へのご褒美です。それくらい大目に見なさいな」

「くっ……。食費が嵩む。金持ちが羨ましい……」

ともあれ、何か手を考えないと。今日はもう遅いし、メモ? の確認も、誰かに相談するのもまた明日にして、早めに休むとしよう……。

「ところで、帰る直前のアレ。　ぼぶう」に関して、ちよつとゆっくり語り合いましよう？」

あ、目が据わってらっしゃる。ボコボコにされるのを覚悟しておくか……。

## 私の名前は――

そして翌日。

昨晚受けたアヴェンジャーからの折檻によるダメージがまだ少し尾を引いているが、泣き言を言ってもらえないのが現状だ。

ありすが残した固有結界。アレをどうにかしなければ、本当の意味で手も足も出せない。いや、彼女たちに手が届きすらないだろう。

そして、今のところ唯一の手がかりになるかもしれない、これ。

「さて、このメモには何が書いてあるのかしら？ ……、ハア？」

昨日ありすたちを追い詰めた場所で拾った、小さな一枚のメモ。拾った当の本人であるアヴェンジャーが真っ先に目を通していた――のだが、走り書きを見つめて、しばらくポカンとしていた。

何が書かれていたのか気になるが、一向にそれを口にしようとしないので、私は待ちきれずにメモの文字を覗き込む。

アヴェンジャーの手にあったメモには一言――

『あなたの名前はなあに？』

とだけ記されていた。

「あなた……って私？ いや、違うわね。私よりもアンタのほうが固有結界の影響が顕著だったし。でも、なんでマスターの名前なのかしら？ あの固有結界の中でなら分かるけど、そんなものを問う理由なんてある？」

悩むアヴェンジャーと私。これが固有結界を解く術だというのだろうか？

しかし、どうやって。あの中では、真っ先に名前を失ってしまうのには？

……試す価値はありそうだが、どうやって忘れた名前を口にするのか、その対策を練らないと。

昨日は結局できなかったし、今日こそは誰かに相談してみようか

……？

case. 1 ラニⅡⅧ

「名前を忘れずに済む方法、ですか？ 師ならば錬金の術を以て、魂に刻む事も出来るでしょうが……そうですね……。それでは、あなたの身体に呪印を刻むというのはどうでしょう？ 大丈夫、痛いのは一瞬ですから。魂まで碎かれるほどではありませんし」

「……丁重にお断りします」

「そうですね。では、星の導きがあらん事を……」

case. 2 柳洞 一成

「なに？ 名前を忘れない方法だと……？ ふむ、それはやはり、繰り返し口に出して覚えるしかあるまい。暗記という言葉に出して覚えるものだからな。何事も一朝一夕で身に付くものではない、という事だな。……ん？ そうじゃない？ 固有結界の中で名前を忘れない方法が知りたい？ ……むう、すまんが俺では力になれそうもない。聖杯戦争の運営を担う身ではあるが、魔術とやらにはサツパリでな。助力できずに申し訳ない。おお、そうだ！ ならば、あそこにいるラニさんに聞いてみるのは——」

「結構です。痛いのは、イヤ」

「痛い……？ ふむ、まあ壮健になー」

case. 3 レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ

「名前を忘れない方法、ですか……。そうですね、人間というのは一度



経験した衝撃はずっと記憶しているものです。ですので、何かインパクトのある事と名前を結び付けて記憶する、というのはどうでしょう？ 例えばですが、覚えたい単語を口にしながら誰かにビンタしてもらおう、とか。ビンタという衝撃に単語が結び付き、より印象も深くなるという寸法です」

「ビンタ……？ いや、アヴェンジャーにビンタされると後遺症が残りそうで、ちよつと……」

「まあまあ。物の例えですよ。あ、そうだ。岸波さんは兄さんを知っていましたよね？ 実は一つ、お勧めしたい方法があります。ああ見えて兄さんはカレー作りが得意と自称してしまして、そこで兄さん特製ドラム缶カレーをですね……」

「食うか、んなゲテモノカレーなんて！ マスターにだって食べさせないわよ!!」

「おっと。貴女のサーヴァントに止められてしまつては、これは諦めるほかにありませんね。ちなみに、これまでお伝えした話は全て冗談ですので、真に受けなくてくださいね？ ああ、兄さんのカレーに関しては本当の事だと断言しておきますが」

case. 4 遠坂 凛

「名前を忘れない方法？ あなた、ついにそんな情報まで消えてきちゃつたの？」

呆れたような、多少は心配するような声をあげた凛に、事情とこれまでの経緯を説明する。

「それはまた……愁傷様、つてところかしらね。で、自分の名前が分からなくなる固有結界の中で、自分の名前を言う方法ですつて？ つていうか固有結界つて何よ!? あの子のサーヴァントは、そんなもの使つたの!？」

凛のこの驚きぶりから見ても、やはり固有結界を使うという事は、常識では考えられない代物のようだ。

「しかもアリーナ全体を、そんな長い時間書き換えるなんて……。  
……きな臭いわね。真つ当な英霊とは思えない。何か、反則じみた特  
例と見たわ。……ここで潰れてくれないかしら……」

……何か不穏な言葉が聞こえた気がしないでもないが、と、とにかく、固有結界の解き方に関して、何か思いつく事はないだろうか？

そんな私の問いかけに対し、凜は呆気にとられた顔で答えた。

「へ？ メモにはメモでしょ？ そんなの、手にでも書いとけばいいんじゃないの？」

「……………手に？」

しばらく間抜けな時間が流れる。

沈黙を破ったのは、突然に現界したアヴェンジャーだった。

「そうよ！ なんて迂闊……!! 単純な話、見えるところに書いておけばいいだけの事じゃない！」

興奮しながら私と凜、交互に肩を掴んで揺さぶるアヴェンジャー。悲しいかな、私にも凜にも、アヴェンジャーほど揺さぶられて揺れる果実は実っていないかった。

親の仇でも見るかのように、そのたわわな二つの肉まんを私たちが睨みつけている事を、彼女は全く気付いていない。

「……………うん、そうだね。それが何なのか分からなくなっても、手に書いた文字を読めばいい事だけを覚えておけば、名前を言う事は可能だも  
んね」

「……………ま、そういうコト。子どもだましには子どもだましよ。メモを残すつていうのも、結界を作るのに必要な条件なんですよ。遊びには遊びのルールが必要なの。ほら、鬼ごっこやかくれんぼ、色んな子どもの遊びがあるけれど、どれも一応のルールは定義されているでしょう？ それと同じってワケ」

こんな簡単な事にも気づかないとは……。何だか、自分が恥ずかしくなる。

とりあえず、彼女にはお礼を言っておこう。

「ありがとう、凜。助かったよ」

彼女の手を両手で握り、真摯に目を見つめて礼を言う。

凜は、少し照れたように顔を僅かに赤く上気させ、しどろもどろに返事をした。

「っ、バ、バカじゃない？ こんな事でお礼を言われてたら、わたしは今ごろ女王さまだっというの」

それでも、まあやはりと言うか、彼女の対応は、そっけなかった。自分とは、いずれ殺し合うかも知れないのだから当然ではあるが、やはり少し寂しい――。

……さて、とにかく忘れないうちに、手に名前を書いておこう。

「任せなさい。私が書いてあげます。しっかりと、消えないように油性でね。フッフッフ……文字書きの特訓の成果を、まさかこんな所で披露もとい発揮するなんてね。腕が鳴るわ……!!」

アヴェンジャーさん、別に油性で書く必要はないのでは……？ そして、あなたフランス出身のサーヴァントだったよね？ 日本語で書けるの？

——などという心配を余所に、しっかりと私の手のひらに油性ペンで『きしなみ はくの』と、ひらがなで刻み込んだアヴェンジャーなのであった。

「おおー。それこそまさしく漫画雑誌ー！」

一階に降りてくるや否や、もの凄い速度で駆け寄ってきた藤村先生<sup>タイガー</sup>。そういえば、と私は彼女から依頼を受けていた事を思い出し、とあるマスターから交換してもらった漫画雑誌を手渡した。

「よく、回収してくれたわね。じゃあ、先生が預かつとくわ。あ、それでねー……」

何だろう、嫌な予感がする。

「もう一つ、先生のお願ひ、聞いてくれないかなー？」

やっぱり。期待を裏切らないのがタイガーだ。いや、悪い意味で。

「(子どもは一人で手一杯だけ) いいですよ」

「わあ、ありがとう。何だか妙な間があった気がするけど。あのね、何でも今度のアリーナの第二層には、流水が漂ってるって話じゃない。だからねー、氷を取ってきてほしいの。かち割り氷。何に使うかは、大人の秘密よ」

「……まさか、いい大人が流水を使ってかき氷……なんて、言わないですよね？」

「あははー……とにかく！ 取ってきてくれたら、先生の秘蔵の品を進呈するわ。じゃあ、三回戦のうちにお願いな」

あ。ごまかした。しかも追及されるのを避けて職員室に走って逃げ込んだ。これは当たりだろう。

まあ、請け負った以上、やり遂げるしかないか。

藤村先生との会話の後、購買部にて必要物資を調達した私たちは、アリーナ入り口の前に立っていた。

扉に手を掛ける前に、再度手のひらを確認する。アヴェンジャーに書かれた、私の名前。手を洗っても簡単には落ちなかつたので、きつと大丈夫。ちなみに、少しだけ薄れてしまったので書き直してある。名前の上には意味不明なはずら書きもされてしまったが、まあ問題はないだろう。

それに、意図してかは分からないが、ひらがなで書いてあるおかげで、もし漢字を思い出せなくて読めない事になっても、ひらがな程度なら大丈夫なはずだ。

確認を終え、扉へと手を掛ける。そんな私に、アヴェンジャーからアリーナへと入る前に最後のアドバイスが。

「マスター。アリーナに入ったら、まずは自分の手を見なさい。名前を忘れてしまうのなら、名前を言おうとする事が既に不可能になるはずよ。なら、まず目に入った文字を口にしなさい。意味が分からなくともいい。もし、それで固有結界を解けなくても、また引き返して対策を立てれば良いだけなんだから」

「うん。でも、一応は声を掛けてね？ 手を見るのも忘れてしまうかもしれないから」

「当然よ。さあ、行くわよ。あの鬱陶しい固有結界を木っ端微塵に粉砕してやろうじゃないの？」

アリーナへと降り立つ私たち。

やはりと言うべきか、アリーナは前回と変わらず、全てが異様な雰囲気にも包まれたままだ。

さて、何をしたらいいんだっけ？

「マスター、私が書いてあげたその名前、今こそ高らかに読み上げる時よ！」

隣の女性に促され、手を見つめる。手の甲には何もない。裏返し、手のひらを見ると、何か書いてある。

この事、だろうか……。

息を吸う。深く、そして吐き出し、また息を吸って、口を開く――

私の、名前は――

「フランシスコ…ザビ…!?!」

――待て。落ち着け、まだ慌てる時間じゃない。この単語が何なのかは不明だが、間違いなく、致命的に間違っている。

このフランシスコな単語の下に書いてある、控えめな単語の方を口にしよう。

「フラ……、『きしなみ はくの』!!」

今は意味の分からない文字を読み上げる。

すると、侵入者を拒むように張り詰めていた空気が一瞬で変わった。

視界の歪みは無くなり、反転していた色も元通りになる。固有結界は、跡形もなく消失していた。

「よしっ。これで邪魔なものは消え去った。というか、イタズラに引つ掛かるとか焦ったっての。まあ、私が悪いんだけど。それよりもマスター、先を急ぐわよ！」

隣の女性……いや、アヴェンジャーが意気揚々と私の手を引いて歩き始める。

本当に、固有結界はその効力すらも完全に抹消されているようだ。というか、やっぱりイタズラの自覚はあったのね……。

「ああ……名無しの森が消えてしまったわ」

「名無しの森が消えてしまったわね」

……！

ありすと、アリス！ 少女たちが、昨日と同じように通路の先で、いつの間にか立っていた。

「残念だわ。別の遊びを考えなくちゃ」

「大丈夫よ、あ<sup>ありす</sup>たし。もう少しで時計が鳴ってしまうもの。その時は、思い切り遊べるわ」

時計……？ それは、どういう——、

「本当？ 壊しちゃっても大丈夫？」

「大丈夫だわ、あ<sup>ありす</sup>たし。でも、今は少し我慢しましょう。楽しみは取っておくものよ」

「そうね、取っておくものね。じゃあね、お姉ちゃん」

「さようなら、お姉ちゃん」

別れの言葉を告げて、二人は消えた。おそらく転移したのだろうが、あの口振りから察するに、今日はもう手出しはしてこないのかもしれない。

「……名無しの森、ね。それが固有結界の名前かしら。なるほど、確かにあの子らしいというか何というか」

何やら思い詰めたような顔で呟くアヴェンジャーであったが、すぐにいつも通りになる。どうやら心配する必要は無いらしい。

「さてと。今日のうちに行ける所まで進むわよ、マスター。昨日の遅れを取り戻さないと。何なら、今日のうちに暗号鍵トリガーも手に入れましょうか？」

やる気に満ち溢れるアヴェンジャー。不思議と、私まで自信が出てくる気がする。やっぱり、アヴェンジャーはこうでなくっちゃ。

「よし、行こう！ アヴェンジャー！」

昨日、固有結界が展開されている時には居なかったエネミーを討伐しつつ、奥へと進む私たち。改めて、正常な自我を保てたまま進んでいると分かるが、今回のアリーナはまるで迷路のようだ。前回の比ではない広大さ、入り組んだ通路、そして数々の行き止まり。

これを迷路と言わずして何と言うのか。

「どんだんアリーナの構造も複雑になっていくわね。エネミーの強さだって、一部は馬鹿にできないレベルになってるし」

長い距離を歩き、しかもエネミーとの戦闘もこなしているアヴェンジャーが気怠げに愚痴をこぼす。

指示を出しているだけの私ですら、流石に疲れてきていたのだから、彼女の疲労度は計り知れないだろう。

「そうだね。トリガーを守るように新型エネミーが二体も配置された時は、息が止まるかと思っただし」

あからさまな配置だったが、片方をアヴェンジャーが対処している間は、私もう片方を引き付ける。そしてアヴェンジャーの対処が終了次第、私と入れ替わり次のエネミーへ……。

アヴェンジャーと代わるまでの間、どうにかアヴェンジャーへと狙いが集中しないようにコードキャストでエネミーを挑発していたの

だが、正直死ぬ思いで立ち回っていた。というか、逃げ回っていた。もう少しアヴェンジャーが遅かったら、私はきつと死んでいたに違いない。

「トリガーコードゼータ。これで二つ揃った。後はマトリクスだけ、か」

「言っておくけど、今回も私は何も教えないから。これはマスターである貴女が辿り着くべき答えであって、私がおいそれと口出ししても貴女の成長には繋がらないのだから」

分かってている。何も、アヴェンジャーに教えてくれと頼むつもりは、これっぽっちもない。

前回は、前々回も、アヴェンジャーは対戦相手のサーヴァントを知っていた。

けれど、私は彼女の知る記憶に頼らずに、自らの足で情報を得てきた。

なら、やはり今回も、そしてその次も変わらない。アヴェンジャーに頼り切るばかりでは、きつと私は墮落する一方なのだろうから。

「大丈夫。私のためを思ってくれて、ありがとう」

「べ、べべ別に？ 貴女の事を思ってたとか、そんなんじゃないから!? 自意識過剰とかキモいんですけど!」

激しい照れ隠しですねごちそうさまでした。

まあ、あれだ。こんな風に、前みたいに馬鹿げたやりとりができるというのは、嬉しく思う。

ありすを見てからというものの、最近のアヴェンジャーはどこか辛そうに見えた。望まない戦いに身を投じようとしているかのようで、心配で不安でたまらなかったが、この分だと吹っ切れたかな？

いや、完全に払拭できてはいないだろうが、それでも前を向いてくれている。ずっと下ばかり向いているのは、彼女には似合わないのだから。

「ところで、今回は氷のお城が舞台なワケだけど、すごく幻想的だね」

「まあそうね。かなり前にどこかで見た覚えがあるのだけど、何かの



映画で出てきそうなお城ではあるわね。私は炎系のサーヴァントだから、氷系のサーヴァントも格好良くて気に入ってるんだけど、もし私に氷系スキルが加わったら、炎と氷が合わさって最強に見えるわよね」

助け舟的に話題変更をしてあげる私。すると、すぐさま食いついてくるアヴェンジャー。彼女としても、この話題には興味があったのだろうが、勢いがハンパない。というか、途中から話が変にズレているのだが。

「でも、実際問題住むとなると話は別よね、コレ。氷の城とか、移動するにも足が滑って一苦労しそうだし、そもそも寒いのはイヤだし。私だったら間違っても住んでみたいとは思わないかしらね。ま、見る分には綺麗だし、構わないんだけど」

今度は氷の城の機能性について語り出したアヴェンジャー。何か文句を言わないと気が済まないのか、このお嬢様は。

「住む住まないは、この際どうでもいいわ。それより、多分だけど今回の決戦場はあの城でしょうね。これまでの事を考えれば、他に思い当たらないもの」

「そうだね。お城、かあ……。氷で出来てるけど、対戦相手の名前があります。まるで本当に『不思議の国のアリス』の世界に入った気分」

ジャバウオックに関連するであろう怪物と、それを倒すために用意した礼装、『ヴォーパルの剣』。

どちらも『鏡の国のアリス』に登場するとされる要素。

何かしら、童話に登場する『アリス』と関連性を持った魔術が使われているので、無関係ではないはずだ。

あの固有結界の事であろう『名無しの森』。これも、調べれば何かしらの繋がりを見つけられるかもしれない。帰ってから調べてみるか……。

「それじゃ、帰ろうか。藤村先生に頼まれたかち割り氷も手に入れてあるし、マップも埋めてあるしね」

「オツケー。私も今日は疲れたわ。帰って速攻シャワー浴びて寝たい気分」

トリガーは揃った。あとは、マトリクスを埋めるのみだ。  
流石に今日は疲れたし、明日にでも凜に固有結界を解くヒントをくれた礼でも言いに行こう。

——サイバーゴースト。

実体を持つても、本来は現実世界に影響を与える事はない。それが  
電脳世界であつたとしても。

いや、そもそもサイバーゴーストはその名の通り、電脳世界にしか  
存在できない。

電脳世界でしか存在を許されない、彷徨するだけの虚ろな影……。  
けれど、それにも利用価値はある。

生者に干渉する権利を得た彼女には、十二分以上の利用価値があ  
る。

これまでとは違う。十分なりソースは得た。そして現実に戻るべ  
き体が無いのであれば、私にも彼女の電脳体に干渉する事が可能とな  
る。

肉体と繋がりを持たない電脳体など、私にとってはオモチャでしか  
ないのだ。

さあ、可愛いお人形さん。私のために、踊らせてあげましょう……。  
どうか、お願いだから簡単には壊れないでくださいな……？

## おとぎの国の住人？

早速次の日の朝、固有結界を解くヒントをくれたお礼を言いに、屋上に居るであろう凜の元へ向かう。

単純な仕掛けではあったが、手に書いた名前が無ければ、今頃は自分の名も、身体も、全て消えていたかもしれないのだ。

と、屋上に着くと、やはり凜はいつもの場所に佇んでいた。何とていうか、もはや定位置な感じがする。

向こうも、誰かが扉を開いて屋上へと来た事に気付いたようで、こちらに振り向く。

「あら、誰かと思えばヒヨコマスターさんじゃない。どう？　ありすって子のサーヴァントの固有結界は解けた？」

「うん。凜のおかげで、無事に解く事が出来たよ」

頭を下げた礼を言うと、凜は「そういうのはいいから」と本当にどうでもいいたばかりに受け流す。

……あと、名前を言い間違えそうになった事は言わないでおこう。なんだか恥ずかしいし。

さて、わざわざお礼だけを言いに来たのもアレだし、ちよūdい機会だ。ありすの力自体についても、凜に相談してみよう。

彼女のような一流の霊子ハッカーは、ありすの固有結界によって、何か、異常な事を感じしていないだろうか。

思った事を率直に聞いてみると、凜は考えるようにして答えてくれた。

「異常？　そうね……。少なくとも、学園サイドへの違法な干渉は感じられなかったわ。仮に、サーヴァントが異界を作るコトに特化した英霊だとしても、結局、その負荷はマスターに掛かる。サーヴァントに局地的な事象書き換え能力があるにしても、それはそういう機能エンジンがあるだけ。動かすには、それに見合った燃料まりよくが要るわ。正直、人間の脳や魔術回路程度じゃ、不足のはずよ」

「その話が正しいとすれば、ありすという存在自体が人の域を超えて

いる——という事になる？」

それは——あり得る、のだろうか？

あんな若い少女が、人知を超えた力を身に宿しているとは到底思えないのだが……。

ふと、人の域という言葉で思い出した事がある。

「そういうえば、セラフに記録された死者のデータが、精神だけの存在としてさまよう事があるって聞いたけど——」

「死者のデータ……ああ、ゴーストか。地上のネットワークならともかく、ムーンセルにゴーストは居ないけどね」

え、そうなの？　と思わず素で聞き直す。

「ゴーストは未練や怨念を残したハッカーが電子上に“焼き付いた”痕跡よ。でも、ここでは人間は“死ぬ”ことはない。当然でしょ？　だってここは、もともと人間の住む世界じゃないんだから」

……そうか。セラフには生者も死者も……そもそも人間が居ない。ここにあるのは情報だけだ。

あるいは、地上から霊子化して侵入した、凜のような魔術師達だけ。「そもそも生きているものが居ないから、死ぬものも居ない……って事か」

「そ。それにマスター達だって、死んでもゴーストにはならないわ。敗れたマスターはムーンセルそのものが消滅させる。管理の怪物であるムーンセルは不正なデータを許さない。人間から亡霊に変革したデータなんて、見つかったら即座に解体されるでしょうね。だから——」

前置きの前にコホンと咳払いをして、凜は続けた。

「もし可能性があったら、それは初めから“死んでいた”マスターだけ。デフォルトの状態が『既に死んでいた』のなら、ムーンセルもゴーストを許容するかもしれない」

「亡霊……」

デフォルト  
始まりで、既に死んでいた。

それは、つまり。

「さ、無駄話はここらでおしまい。考え込むのは自分でなさい。私た

ちが敵同士だつてこと、忘れないでよね」

思考の袋小路に入りかける一步手前で、凜が無理やり話を切った。シツシツと手払いで、わかりやすくあつちへ行けと示されては、退散するしかない。

まだ気になる事はあるけれど、ここは潔く帰る事にする。

もう一度だけ軽く礼を告げて、私は屋上を後にしたのだった。

「……ゴースト、か。まさか……ねえ？」

時間は進み正午。朝に凜に言われた事を思い出す。

『サイバーゴースト』

それが事実であるとすれば、地上にあるだろうありすの本体は、とつくに……。

「……、」

「相手が子どもとは言え、所詮は他人でしょう？ アンタが気にする必要なんて欠片もないわよ」

よほど暗い顔をしていたのだろう、現界したアヴェンジャーが私の頭を軽く小突きながら言う。励まし……ではないだろうけど、彼女なりに私に気を遣ってくれているのだろう。

「どつちにしろ、厄介事には変わりないわね。もし、あの子が魂だけの存在かもしれないとして、気が乗らないけど教会で聞いてみたら？」

あの姉妹、『魂の改竄』というくらいだし、何か知ってるかもしれないわよ」

教会か。確かに、魂の改竄をしている彼女達なら、何かを知っているかもしれない。

すぐにでも行ってみるか……。

それは教会へと向かう道の途中での事だった。

「マスター」

急にアヴェンジャーに呼び止められ、何かと振り返ると、神妙な顔付きで彼女はそこに立ち止まっていた。

「どうしたの、アヴェンジャー?」

私の問いかけに、アヴェンジャーはどうしようかと悩んでいるようだったが、意を決したのか、堅い表情で口を開く。

「少し、話をしましょうか……?」

教会前の噴水広場にやってくる。そこに備え付けのベンチに、アヴェンジャーと二人並んで腰掛ける私。

何か話をするとの事で、教会に入る前に小休止する形を取ったのだが、アヴェンジャーは視線をあちらこちらへ泳がせるばかりで、一向に話そうとしない。

煮えきらず、私は自分から切り出す事にした。

「何か話があったんじゃないの? なんだか恥ずかしそうにしてるけど、もしかして『そういう系』の話?」

「そういう系って何よ。その、あれよ……。これまでもそうだったけど、アンタ、私の事情について聞いてこないでしよう?」

事情、とは……。もしかしてアレの事だろうか。

どうしてアヴェンジャーは、これまでの対戦相手のサーヴァントについて知っているのか、という事。

「だって、話し辛い事情が有るんだと思ったから。アヴェンジャーが話してくれる気になったのなら、いつか聞こうとは思ってたけど」

「……やっぱりお人好しね、あなた。そういうところ、ホントにアイツそっくり……」

そう言つて、懐かしむように空を見上げる彼女の横顔は、何故だか儂げで、それなのに美しいとも感じた。

「……ほら。今回って、特に取り乱してたじゃない、私? あなたと喧嘩にもなった。なのに、何も聞いてこないから、少し気になったのよ」  
それは、うん。確かに喧嘩した時は悲しくなったし、怖くもなった。

もし、アヴェンジャーがその殺意を、敵意を私にぶつけてきたら――

怖くて怖くて、たまらなかった。死ぬのが、ではない。アヴェンジャーに切り捨てられるのが、だ。

一回戦、そして二回戦。死ぬ思いをして、ここまで二人でやってきた。私の中では、既にアヴェンジャーは心の拠り所になりつつある。その彼女に見放されたらと思うと、それだけで泣いてしまいそうだった。

だから、怖かったのだ。孤独のままに死んでいくのが。とても。

「アヴェンジャー、もし今、私が聞いたとしたら、全部話してくれる？」  
「……………それ、は」

言いよどむアヴェンジャー。

ああ……………きつと私は卑怯な質問をしている。答えられないからこそ、ずっと話そうとしなかったはずなのに、今それを言えるはずがない。

アヴェンジャーはばつが悪そうに、そのまま俯いてしまう。

だけど、私は別にそれでも構わなかった。私にそれを言えない事、私がそれを聞いてこない事。

どちらにしても、アヴェンジャーは私の事を気に掛けてくれている事に違いはないのだから。

今はそれだけで、十分だ。

「私は……………今それを言えば、どうなるか分からない。だから、まだ言うのは無理。でも、いずれ伝えるべき時はくる。だから、その時はちゃんとと言う。私が何を抱えて、どうやってここに来て、何のためにここに居るのか。きつと伝える。それが契約を結んだマスターへの、せめてもの礼儀でしょうから」

真摯に、私の目を見つめて告げるアヴェンジャー。その言葉は、これまで彼女が口にしたどの言葉よりも重く、そして温かなものであるように思えた。

アヴェンジャーも自分で言っただけで恥ずかしくなったのか、すぐに顔を真っ赤にして、私から顔を背けてしまう。

なんだか、それがとても貴く感じてしまう私は、もしかしたら既に彼女が持つ人間性に魅了されてしまっているのかもしれない。

「……なに笑ってんのよ」

おや？ つい口元が綻んでいた。無意識に小さく笑い声をこぼしてしまったようだ。

顔を背けていたというのに、アヴェンジャーは耳聡いなあ。

「何でもないよ、何でも」

「ムカつくわね、その『ああはいはい。私はあなたの事をきちんと分かっているからね』的な態度と余裕。何様よアンタ!?!」

「ん〜……マスター様、もしくはご主人様?」

「そんな呼称をするのは、どこぞのピンク頭狐だけで十分よ!!」

ピンク頭狐……何だろう、その名前を聞くと、何故だが、そこはかとなく貞操の危機を覚える。

とまあ、湿っぽい空気はこれでサヨナラできたし、教会はもう目の前。早く用件を済ませてしまおう。

「改竄に来た……訳ではなさそうだな。どうした？ 私も暇ではないのだが」

真っ先に蒼崎橙子に声を掛けたところ、すぐに用事が他にあると気付いたらしく、彼女は面倒そうに応えた。

彼女の気が変わらぬうちに、二人のありすと、亡霊………についての疑問を投げ掛ける。

「私の対戦相手が……もしかすると亡霊ゴーストかもしれないなくて、少し話を聞かせてもらおうと思ったの」

「亡霊ゴーストか。また、前時代的な事を言うな、君は」

亡霊というワードで、ようやく多少興味を示したのか、蒼崎橙子はこちらに向き直ると話を続けた。

「私たちがマスターを通して、サーヴァントに施しているのは、詰まる所、魔術回路の変革だ。君らの霊体を改造し、サーヴァントの力をよ



り効率的に具現化できるようにする。それが改竄だ。あの、ありすという娘も何度か見たよ。あれが双子かどうかを調べるのは君の仕事だ、私が口を出すコトじゃないが——」

少し考える素振りを見せた蒼崎橙子だったが、言っても良いと判断したのだろう、私の求めた結論を口にした。

「あの少女は十中八九、君たちの言う『精神体』と見て間違いない」

……やっぱり。プロの目から見て、そうだと捉えたのだから、これはもう確定事項だろう。第三者から断言された事で、私の中でのありすへの疑念が確信に変わると同時に、とある事実も突き付けられる。

つまり、ありすの帰るべき肉体は、もう——。

「確かにサイバーゴーストなら、身体的制約を受けずに、巨大な魔力を扱える。脳が焼き切れるコトがないからね。リミッターがないんだ。いずれ壊れるとしても、魂の限界、魂が燃え尽きるまで魔力を生み出せる」

それは、なんて——救いのない。幼さの残るありすに、自らの限度が測れるとも思えない。あの様子では、魔力の消費量に加減ができていないはずだ。

もし聖杯戦争に勝ち進んだとしても、遠くない未来、破滅は免れないはず。

「……しかし。ただのゴーストがあればどの魔力量を持ち合わせるとは、よほどサーヴァントと相性がいいのだろう。相手のサーヴァントのクラスは分かるか？」

クラス……。あの怪物がそうであるならば、おそらくはバーサーカー。けれど、アレは本当にサーヴァントと言えるのか？

倒して以来、その姿を見せていないが、どうにも違うような気がする。

「今はまだ……。ありすが使役してたバーサーカーっぽいのなら、倒したんですけど」

「バーサーカー？ それも倒したけど？ だとすれば奇妙な話だ。ならば、その時点で君たちは自動的に勝ち上がりとなり、モラトリウム猶予期間もト

リガーさえ集めれば、あとは消化するだけのはず。そもそも、あつちは固有結界を使ったのだろうか？ バーサーカーにそこまで大規模な固有結界はそぐわないだろう。固有結界は最高位の魔術だ。順当に考えれば、クラスはキャスターになると思うがね。……ま。そこにもう一つぐらいは、カラクリはあるだろうが」

バーサーカーに固有結界は使えない？ 無論、例外もあるにはあるだろうが、それが有りすの呼び出した怪物に当てはまるとは、とてもではないが思えない。

「どういふことだ……。」

しかし、そうだとしたら、ありすのサーヴァントは、一体――

双子についての疑問が解けたワケではないが、ありすが特殊な存在らしい……という事は臆気に理解できた。

「質問は終わりか？ なら私は仕事に戻るぞ。こう見えても絶賛雑務中なんだ。……まったく。腕が良くて、気が利いて、美味しい珈琲を淹れる社員が恋しいよ」

それきり、蒼崎橙子は再び書類に目を移すと、こちらには何も居ないかのよう黙ってしまった。

「愚姉がごめんね。コイツったら、興味を無くすとトコトン無反応になっちゃうから。話は済んだみたいだし、せつかく来たんだから改竄やってみて？」

祭壇を挟んで橙子の反対に座る蒼崎青子が、厄介払いされて立ち尽くしていた私に声を掛けてくる。彼女なりにフォローを入れてくれているのかもしれない。

「じゃあ、せつかくなので。お願いします」

「よし、任された！ お姉さん張り切っちゃおう！」

「ほ、程々にてお願いします……。」

改竄を終え、どうにかアヴェンジャーの巨大化も消滅もなく教会を出た私たち。だが、物事というのはこちらの都合など無視するように進行するものだ。

息つく間もなく、外に出た瞬間に私は少女たちに捕まった。

「あ、お姉ちゃんだ」

「また怖いことをされたら大変だわ。逃げましょう、ありすあたし」

「そうね、早く逃げなくちゃ」

不意の邂逅に身構える私ではあったが、どうやら彼女らも予想外の邂逅だったらしく、黒いアリスが白いありすに逃げるよう諭す。

なんだろう、白のありすは私に対し、まだ友好的に見えるのだが、黒のアリスはその真逆。私への友好的な態度など、これまで一度も感じた事がない。

「どこに行こうか？」

「お話が読みたいわ、アリスあたし」

「いいわね、お話を読みましょう、ありすあたし」

行き先が決まったのだろう、ありすたちはその場から消えてしまった。私から逃げる、というよりは、物語を読むという方向に興味があったが故に去った、といった感じ。

サイバーゴーストの話もある。それを確かめるためにも、ありすと話したほうがいいだろう。

果たして、どこに消えたのか、ヒントはありすの言い残した『お話が読みたい』という言葉――。

「なるほど。あそこか」

ありすが去ってすぐ、私は目的地に辿り着く。

そこは図書室。お話が読みたいのなら、たくさんのお話を綴った本の保管所に向かうのが妥当だ。

そして案の定、二人は居た。本棚の端から端、並んだ本に指を添え、なぞりながら横にスライドするように。何か本を探しているように

見える。

「白いウサギ、ここにはいないよね」

「そのウサギ、三月ウサギの見間違い？」  
マーチ・ヘアー

目当てのものが見つからないのか、二人の機嫌はあまりよろしくない様子である。検索すれば早い話だろうに、如何せん子どもであるからか、そこに思い至らないらしい。

「三月ウサギって、きつとあなたのことよ」  
マーチ・ヘアー

「ひどい」

黒いアリスにしては珍しく、目に涙を浮かべていた。仲の良い二人が言い争うのは、不思議と胸が痛む。……はて？ これは本当に言い争いなのだろうか？

「白いウサギ、つかまえてどうするの？」

「くびをちよんぎつちやうの」

「きやあつ！ ウサギさん、いそいでにげなきや！」

先程とは一転、笑顔で物騒な言い出す黒のアリス。喜怒哀楽の振れ幅が異様の一言に尽きる。

何より、恐ろしいと感じたのは、次の瞬間にはその顔から喜怒哀楽の全てが消え失せ、淡々とある事を口にした事。

「でもね、白いウサギは、きつとここにいるの」

「どうしてわかるの？」

「わたしたちのこと、じつと見てるもの」

本を探すのに夢中で、私に気付いていないかと思っていた。だが、その瞳はじつとこちらに向けられている。

感情の宿らない、冷たい眼差しが、私を真っ直ぐに射ぬく。

「じつと見てるなら、一緒に遊べばいいのに」

「だめよ、遊ぶのはもう取っておかなくちゃ」

「そうだったわね。じゃあね、お姉ちゃん。今度遊びましょう」

そう言うのと、二人のありすは一瞬で姿を消した。予備動作など、一切見せずの転移。

改めて思う。霊子ハッカーとして考えると、桁違いの能力だ。慎二など比較にならない。

学園サイドのプロトコルなど、まるで存在しないように、一瞬で目の前に現れ、一瞬で消える。

その行動はどう見ても亡霊のそれと同じ。

勝つための道筋がまったく見えない。いや、あの相手に勝てるマスターなど居るのだろうか。

「……………、？」

結局、サイバーゴーストについての話を聞けず仕舞いで、呆然と立ち尽くす私だったが、ふと、気が付くと、ありすたちの立っていた辺りに1枚の紙切れが落ちていた。

手に取り、見れば何か書かれている――

『t h g u o h t   h s i f f u   n i   s a   d n A   k c o w r  
e b b a J   e h T ,   d o o t s   e h   e m a C ,   e m a l f  
f o   s e y e   h t i w ,   e h t   h g u o r h t   g n i l  
f f i h w   s a   d e l b r u b   d n A ,   d o o w   y e g l  
u t   e m a c   t i ……』

……………???

紙切れは意味不明の言葉コピーで埋め尽くされていた。

『ナニソレ。意味わかんないわね。またさっきの女にでも聞いてみれば？ 如何にも文字に強そうな見た目してるし』

メガネⅡ頭良い、というイメージでもあるのだろうか、アヴェンジャーが提案してくる。まあ、暗号系の解読とか得意そうな感じはするので、もう一度、蒼崎橙子に聞いてみようか。何か、分かるかもしれない。

「なんだ、また君か。私は忙しいんだ。質問があるのなら手短にな」  
教会に足を運び、開口一番に面倒そうに応える蒼崎橙子。迷惑をかける訳にもいかないので、先程の図書室での一件を手短に伝え、そして拾ったコードを見せる。

「うん？ これはまた懐かしいものを。コレ、鏡文字だよ。ミラーラ

イテイング。鏡があれば誰にでも読める。鏡くらいは自分で探してくれ」

「鏡……ですか」

鏡……：そういえば、長らく見ていない気がする。どこかに無いか探してみよう。

橙子に礼を言い、早速鏡探しに行こうとしたところ、そういえば、と橙子に呼び止められる。

「そうそう。この前、敵のサーヴァントらしきバーサーカーのようなものを倒したと言っていたが。物の見方を変えてみる。バーサーカーに固有結界はそぐわない。一方、固有結界作成に特化したサーヴァントは、戦闘能力が備わらない。順番が逆なんだよ。呼び出したか、作り出したか。はたして、先だったのはどちらかな？」

「順番……」

言われて、改めて気付かされる。固有結界とあのバーサーカーらしきものは、切り離して考えていいものではない。アレは、きつと同じ『逸話』ではないのか。

だが、まずはこのコードの謎を解き明かそう。鏡を探さなくては。

端的に言おう。探さずとも、鏡は見つかった。

考えるまでもなく、学校で必ずと言って良いほどに鏡が設置されている場所。それはどこか。

即ち、廁。言い換えればトイレ、である。

女子なら一度と言わず毎回のように、トイレの鏡の前で身だしなみを整えるはずだ。気になる男子が居るならなおさら、見た目を気にするだろう。まあ、この学園での生徒はマスターもしくは聖杯戦争運営NPCなので、関係ないのだが。

「よし、行こう」

「待ちなさい。何を淀みなく男子トイレに突入しようとしてんのよ。それは蛮勇と書いてバカと読むのよ。もしくは痴女」

襟首を捕まれ、危うく窒息しかける私。振り返ると、ゴミでも見るかのように私を見つめるアヴェンジャーの姿が。

「冗談冗談。ほら、お約束ってやつ」

「……アンタ、もしアンタが男だったとして、逆の事をしてたら完全にアウトだから。もう単純に変質者よ」

……頼むからもう言わないでお願いします。そこまで言われると恥ずかしさが今更ながら込み上げてくるから。

「分かっただらさっさと行く！　いつまでもトイレの前で留まっていたら、変に思われるでしょうが！」

急かされ、強引に女子トイレに押し込められる。

やはり、トイレには当たり前のように鏡が設置されていた。謎のコードを鏡に映して読んでみた。英文だ。これなら、私でも何とか翻訳できそうだ。

「えー、何々……」

直訳すると、こうだ。

『荒ぶる思いで歩みを止めれば、燃え滾る炎を瞳に宿したジャバウオック、鼻息荒々しくタルジの森を駆け下り、眼前に嵐の如く現れる。一撃、二撃！　一撃、二撃！　ヴォーパルの剣で切り裂いて、悪たる獣が死するとき、その首をもつて、意気揚々と帰路につかん』

「ジャバウオック、ねえ……？　少しずつ謎が掴めてきたかしらね」

ヴォーパルの剣で刈られる怪物、ジャバウオック？

アリスが落としたメモにある怪物の名……。これが……。彼女の「お友達」の名だろうか――。

ジャバウオックと言えば、『鏡の国のアリス』に関連のある怪物だが、図書室へ行けば、もっと詳しい事が分かるかもしれない。

『』

去り際、ふと視界の端に映った、鏡に映る自分の姿。僅かに違和感を感じたような気がしたが、アヴェンジャーに引っ張られ、確認する間もなくトイレから連れ出されたのだった。





## 狂い始めるお茶会

図書室に到着した私は、すぐに目的のものを探し始める。狙い目は童話などのジャンルが置かれた本棚。

一列ずつ本棚のジャンルを確認し、気になって手に取った一冊の文学関連の事典に、ジャバウオックに関する記述を見つけた。

書に曰く——ジャバウオックは、ルイスキャロルの小説『鏡の国のアリス』のジャバウオックの詩に登場する、正体不明の怪物の名前。詩の中でジャバウオックは、名も無き一人の勇者によって倒される怪物として描かれる……。

「あ、お姉ちゃん！ ご本読んでる！」

——そこまで読んで、突然、背後から、ありすに声をかけられた。不意打ちに暴れる心臓をどうにか諫め、振り返ると、そこには白いありす一人が立っていた。もう一人の姿は近くには見当たらない。

いつもセツトのイメージなので、単独行動とは珍しい、などと思っ  
ていると、ありすが本を持つ私の腕に抱きついてくる。

「あたしもね、ウサギやねずみの出てくるご本が大好きだったんだよ」  
腕に抱きつかれているので、必然的にありすが上目遣いで私を見つめてくる。なんだこの愛くるしい生き物は。今すぐにも抱き締めたい……という欲求を鋼の理性で抑え込み、どうせなので今調べたジャバウオックのことを、ありす自身に聞いてみる事にした。

「ねえ、ありす。あなたのサーヴァントの名前って、ジャバウオックなの？」

「え？ ジャバウオックはサーヴァントじゃないよ？ ジャバウオックは——」

「しっ！ あたし！ それ以上はいけないわ！」

謎の核心へと至ろうとしていた当にその瞬間。しかし、その言葉は突如現れた黒いアリスによって遮られてしまう。

「え？」

「さ、もう行きましょう。あんまりしゃべると、夢から覚めてしまうか

ら」

有無を言わさぬ黒いアリスの重圧に耐えかね、白いありすは項垂れ、小さく頷く。

「うん……じゃあね、お姉ちゃん、ばいばい」

それだけ言つて、黒いアリスと共に白いありすは消えてしまった。おそらくは転移だろうが、無制限で転移できるのは脅威だ。決戦時には関係ないが、モラトリアム猶予期間中であれば奇襲も撤退も容易に行えるのだから。

ありすは行つてしまった。しかし、あの怪物の名がジャバウオックであり、サーヴァントでない事は確かなようだ。

とすると、蒼崎橙子の言つた通り、ありすのサーヴァントは……。

「アヴェンジャー、ありすのサーヴァントつて多分……」

『黒い方、でしょうね。教会のあの女の言うように、キヤスターなのは間違いないでしょう』

アヴェンジャーも、私と同じ意見のようだ。

だとすれば、考えられるのは、あの少女は双子ではなく、鏡のようにそっくりな“自分”を生み出すサーヴァント……なのだろうか。

まだ核心には触れていないが、大まかな正体はこの方向で間違いないはずだ。

あともう一步、もう一步でその真実へと迫れると思うのだが……。

結局、この日はそれ以降ありすと出会う事もなく、残った時間をアリーナでの特訓へと充てた。能力の底上げは、私とアヴェンジャーには必須であり、マトリクス埋めと同じくらい重要なのだ。

とはいえ、トリガーは手に入れたが、やはりまだ情報に不安が残る。猶予期間も明日で最後。何か、決定的な手掛かりがほしいところだが……。

そして日は跨ぎ、猶予期間最終日。

ありすを探し出し、頭に浮かんだ結論を確定する。

サーヴァントの正体のみならず、ありすがサイバーゴーストではないかという疑惑もはつきりさせたいところではあるが、欲張り過ぎるのは危険か。

ともあれ、急がなければ、もう時間はあまり残されていないのだ。

「わあ！　大きなかち割り氷。ありがとー！」

時間が無いというのに、藤村先生タイガーに目敏く見つかかり、捕まってしまう私。そういえば、と昨日のアーリーナでの特訓の際にかち割り氷を取得していたので、依頼の通り納品した次第である。

「じゃあ、約束通り、私の秘蔵の品、アロマな香炉をあげるわ。癒されるわよ」

かち割り氷と交換で、データ化された香炉を端末で受け取る。割と良さそうなものを報酬で貰えたので、若干嬉しかったり。

「さーて、早速宿直室に直行ね！　やっぱ、大人はロツクよねー。……あ。ううん。なんでもない。お酒の話なんかじゃないわよ。全然」

この虎、酒盛りする気満々である。もはや誤魔化しきれていないのだが、どうにか話を逸らそうとしてか、彼女はこんな事を口走った。「そ、そういえば、購買で今日だけ限定で発売してる商品があるらしいわよー？」

「今日だけ限定……？」

タイガーの言葉が気になり、購買へと足を運んだ私。何故、人はこゝも期間限定という言葉に弱いのだろう。

それは語るまでもない。期間が定められ、その機を逃せば次にいつ機会がやってくるか分からないからだ。限定、という甘い誘惑は、人の意欲を駆り立てる悪魔のような単語なのである。

「いらっしやいませー!」

元気の良い店員の声に迎えられ、足は勝手にショーウィンドウへと向けて歩いていく。

「あ、この前は間桐さんのお弁当をどうもありがとうございます。美味しく頂きました」

「それは良かったです。ところで、今日だけの限定商品があるって聞いたんだけど……?」

「ああ、アレのことですね。ありますよー!」

そう言つて、店員が裏から何かを取ってくる。その手に持たれていたのは、とある料理の盛られたお皿だった。

「なんと! 言峰神父イチオシの辛さの中にまろやかさを兼ね備えた一品! その名も『激辛麻婆豆腐』!!」

皿の上に広がるのは、赤く、紅く、より朱く染め上げられた、まるで溶岩のような色合いの麻婆豆腐。熱い湯気から香る、香ばしくも刺激的な匂いが、ちょうど小腹の空いていた私の食欲をそそる。

「ぐくり……。一皿、おいくら?」

「480PPPTです。お買い上げになります?」

端末サイフを見る。現在の貯金額は三万弱PPPTといったところか。あの麻婆豆腐の辛さが如何ほどかにもよるが、ここは冒険してみるのも悪くはない。

よく言うだろう、何事もチャレンジあるのみ、と!

「じゃあ、50人前下さい」

「24000PPPTになりませー」

「つてアホかあ!!」

何の躊躇いもなく意気揚々と代金を支払おうとしたところ、即座にアヴェンジャーによる強烈なストレートが私の鳩尾を抉った。

「あぐう……!!」

「アホなの死ぬの? まず見た目からして、どこからどう見ても地獄産の食べ物でしょうが! 第一、あの性悪愉悦神父がイチオシしてる時点で胡散臭いにも程があるわよ! イチオシっていうかコレ作つたの、あの腐れ外道神父でしょ絶対!? よく厨房に消えていくのを見

かけたし！」

「サーヴァントさんだったら、よく知ってますね。確かに、コレを作ったのは言峰神父ですよ。厨房の余ったリソースを分けてもらって、言峰神父の元となった人物が愛好していた嗜好の料理の開発に打ち込んでいたのは、NPCやAIの間では有名ですから。言峰神父曰く、『これは趣味と実益を兼ねている。決して損をさせるつもりはないがね』——とか」

「ほら見たことか！ 絶対にろくでもないから、食べないほうがいいに決まってるわ」

ぐ……、アヴェンジャーは全否定しているが、そんなもの食べてみない事には分らない。もしかしたら、普通に美味しいだけかもしれないし。

「50は流石に多すぎた。それじゃ30食でお願いします」

「だから！ 食べる前からどんだけチャレンジャーなのよ!？」

ツツコミに次ぐツツコミの連続ツツコミ。流石のアヴェンジャーも疲れたのか、もう私に買わせせない気力までは残っていないようだった。

「毎度ありがとうございますー！ きつと言峰神父も喜びますよ。作った甲斐があるって」

資金が割とごっそり減ったが、後悔はしていない。

「……アンタ、そんなに買ってどうするつもり？ 後で、食べきれなかったら、とか言って残すのは無しですからね。資金を無駄に使うだけ使って単なる持ち腐れにするとか、冗談じゃないっての。言つとくけど、もし食べきれなくても私は処理の手伝いなんか一切しないから、そのつもりで」

「えー？ 匂いも見た目も美味しそうなのに。大丈夫。絶対に全部食べるから。何なら賭けてもいい」

「言ったわね？ なら、もし泣き言をぬかしたら、一週間毎日プレミアムロールケーキおごりだから。覚悟するコトね？ アンタが勝ったら……そうね、一つだけ、可能な範囲で言う事を聞いてあげましょう。ただし下品なのはナシで。ま、マスターの勝ちなんて無いだろうけ

ど。ああ、今から楽しみだわ」

むむ。アヴェンジャーめ。私が食べきれずに残すとハナから決めつけてるな。まあ、確かに30食は多過ぎたかなあ、とか思いもしないくもないが、今に見ているといいよ。絶対食べ尽くしてやる！

アヴェンジャーとの賭けに絶対に勝ってみせるといふ決意を胸に、私はアリーナへと足を運ぶ。賭け云々も大切だが、まだ足りていないマトリクス埋めも次いで重要だ。

「……！」

倉庫の手前まで来た時、私は誰かの気配がそこにある事に気付き、息を潜めて角から覗き込む。

そして、そこには見覚えのある、大きなフリルのスカートが。今の私の探し人でもある、ありすがそこに居た。

この機を逃すべきではない。問わなければ。答えてくれるかは、分からないけれど。

「こんにちは。ありす」

「あ、お姉ちゃん。……どうしたの？ お顔が、怖いわ」

怪訝な顔をするありすに、頭に浮かんだ言葉を突きつける。

「聞きたい事があるの。きみは、鏡の——、!!」

だが、最後まで言い切る直前で、やはり遮る存在があった。

黒いアリス。姿は見えなかったが、霊体化して近くに控えていたのだろう。突然現れた彼女に、私は背後を取られていた。

「……。あたしはありすの夢。ありすが読んだお話の姿」

心臓を鷲掴みにされたような、全く予期していなかった方向からの答え。

本人ではなく、私の背後に立つもう一人のアリスからの言葉は、感情がまるで込もっていないように聞こえる。

「ありすが望んで、聖杯が応えた、お友達」

「ジャバウォックもお友達だよ」

「そう。けれど、あの子はサーヴァントじゃない。ありすの力で、あり

すが生んだの」

……アリスが明言した。ジャバウオック——あのバーサーカーのような怪物が、サーヴァントではない、と。

だが、やはりそうになると、黒いアリスがサーヴァントという事になる。ならば、その正体は？

「あの子はアリス」

「アリスはありす」

交互に話しかけられているが、どちらも同じ顔で同じ声のため、どちらと話しているのか、最後には感覚が混濁する。

——鏡。

まさに、その姿は一枚の鏡に見える。

鏡の国に映ったありす自身。あるいは、彼女が夢見た、物語の主人公。

それが彼女のサーヴァント。

……では、やはり。彼女のサーヴァントは、物語が生み出した架空の存在。

いや、架空の存在を英霊にしたサーヴァント……!!

そんな事には構わず、目の前の少女はにこりと笑った。

「いよいよ明日だね、お姉ちゃん。新しい遊び、楽しみにしててね！」

「楽しみにしててね！」

ありすたちはそんな言葉と無垢な笑顔を残してその場から消えた。

——倒せるのか？

実力がどうかの話ではなく、あの愛らしい無垢な笑顔の少女を、私は……殺せるのか？

しかし、乗り越えなければ、消えるのは自分なのだ。

挫けそうにもなる心に活を入れ、アリーナの扉を見た。

「いよいよ明日、か」

「あーあ。早く明日が来ないかしら？　楽しみで楽しみでたまらないわ。ね、あたしもそう思うでしょう？」

「うふふ。そうね、あたし。お姉ちゃんたちをどうしてあげようかしら？　時計ウサギを追いかけみたいに追い回す？　それともお人形みたいに手足をバラバラにして付け直す？　もちろん、組み合わせはあたしが考えるのよ」

白野の前から姿を消したありすたちは、そのままアリーナへと転移していた。二人して、エネミーを弄ぶように、もしくは嫌がる相手と一方的に遊んでいるように戦うその姿は、およそ戦闘しているようには見えない。

どちらかと言えば、黒いアリスのほうがエネミーをいたぶっているのだが、白いありすは止める様子もない。むしろ、楽しそうにアリスの遊ぶ様子を眺めていた。

「この子たちと遊ぶのは楽しいけれど、お話はできないし、お返事もしてくれない。そろそろ飽きてきたから、あたしも早く明日が来てほしくて待ち遠しいわ」

白野との決戦日に思いを馳せる少女たち。彼女らにとって、聖杯戦争とは戦いではない。単なる遊びの延長でしかないのだ。

遊んで遊んで、飽きるまで遊び尽くしたその果てに、願いが叶うというのなら、これ以上ない最高の夢と言えるだろう――。

彼女らにとっての戦争戦争とは、その程度の認識でしかなかった。

だから、気付けない。悪意を持って、自分たちを利用しようとする者が存在するなどは、到底思いもしていない。

「……？　何かしら、何か落ちているわあたし」

「……黒い、水晶玉？」

アリーナの通路を歩く少女たちの前に、小さな黒い球体が一つ、ポツンと落ちていた。



黒いながらもキラリと輝く、妖しくも美しい、黒水晶の玉。怪しむこともなく、白い少女はそれを拾い上げると、目の前に掲げて水晶玉を覗き込む。

何故だか分からないが、見つめていると不思議と懐かしさや恐ろしさという相反する感情が小さな胸の内に込み上げてくる。

「きれいだけど、なんだか怖いわ……。お姉ちゃんが怒った時の顔を見ているみたい」

「……見せて、あたし」

白い少女から水晶玉を受け取ると、黒い少女も水晶玉をじつと見つめる。ありすが感じたという恐怖は無かったが、アリスには黒い水晶の中で何かが蠢いているように見えた気がした。

「誰かの落とし物かしら？ なら、届けてあげましょう、あたし？」

そも、アリーナではたとえ落とし物であろうと、時間が経てばアイテムフォルダに収納されてしまうのだが、彼女らがそれを知る由もなく、黒い水晶玉に何ら違和感を持たなかった。

アイテムフォルダではなく、普通に落ちているという異常に、少女たちは疑問を抱くことができなかつたのである。

「そう——ね。あたし……う、あ」

「あたし？」

「……いいえ、あたし。やっぱりやめておきましょう。だって、持ち主が本当にいるかも分からないのに、返しちゃうなんてもつたいたいわ。それにこれを使えば、もつと楽しい遊びができそうなもの。これはもう、拾ったあたしたちのモノなのよ」

黒い少女は先程、白野に見せたものと同じ笑顔を浮かべる。ただ、違う点があるとするとするなら、笑顔の奥に隠した何かがあるという事か。

愛らしい笑顔。なのに、それは表面上だけで、ドロドロとした黒い感情、悪意といったものが秘められているように思えてならない。

ありすは、それが何なのか理解はできなかったが、アリスが言うなら、と彼女の提案を受け入れる。ありすにとって、アリスは世界中の誰よりも信頼でき、安心できる存在であるが故に。

「うふふ。早くお姉ちゃんと遊びたいわ。これを使って、最高に楽し

いお茶会にしてあげるの。ぜったい、これまでのどんな遊びより楽しくなるわ……!!」

黒い少女は笑う。困惑する白い少女を置き去りに、その視線はひたすら黒い水晶玉へと注がれていた。

人知れず、どす黒い邪悪な何か、裏側から表側へと侵食を始め、気付いた時には手遅れになっている。これは、その序章に過ぎない。

幼い少女の願いすらも呑み込んで、悪意は孵化への準備に入った。決して、孵してはならない悪意の卵を拾い上げた事に、ありすは、そして白野はまだ、気付いていない……。

## 真名看破：キヤスター

最終日のアリーナ探索、もとい特訓も終了し、私たちはマイルームへと帰ってきた。

明日。泣いても笑っても、明日で最後となる。

私が敗れて消えるか。それとも私が勝ってありすを殺すのか。

どちらの結果であろうと、私には苦痛が待ち受けているだろう事は想像に難くない。

「……さて。決戦前に、あの子の正体が分かったわね。いい？ 亡霊であれ、アンタにとっては戦う相手。妙な情けは不要よ」

ありすに思うところのあったらしかったアヴェンジャーも、もはや吹っ切れたのか、私情を挟まず戦うつもりらしい。

でも、私は私情とか関係なしに、あの子を殺すという事実を受け入れられずにいる。私も、アヴェンジャーみたいに割り切れたらどれだけ気が楽か……。

決戦に備え英気を養うためだろう。アヴェンジャーは帰るなり、言う事を言っただけに寝てしまった。

私も今日は早めに休む。昼に買った麻婆豆腐も、今は食べる気にはなれなかった。いや、何であれ食べる気がしない。無理にお腹に入れて吐くよりかは、このまま食事を抜いて寝たほうがまだいいだろう。

「……」

アヴェンジャーの寝息が聞こえる。私はといえば、なかなか寝付けないでいた。

まあ、それもそうか。苦悩を抱えたまま簡単に寝れるほど、私はバカじゃないつもりだ。

でも、しつかり寝ないと。あれこれと考えたところで解決しない悩みで寝不足になり、明日に響いては元も子もないのだから。

「いよいよ決戦の日だが、準備は滞りなく順調かね？」

もうこれで三度目になるやり取り。例のごとく、教室でかつての自分の席に座って、時間が来るのを静かに待っていると、横合いから声がした。

神父の服装をしているが、心の深層、脳の根幹に直接刺さるような声は、いつも心臓に悪い。

「準備が出来たら、一階まで来たまえ。購買部で身支度を整える程度の時間は許されている。……鼻肩するつもりはないのだがね。キミには個人的に期待しているのだよ。私が長い期間をかけて作り上げた——再現したと言うべきか——あの麻婆豆腐を購入したのは、今のところキミを含め僅か数人だけだ。あの至高の一品を30食分も買い上げた猛者はキミが唯一ではあるが……。……私とした事が、つい熱が入ってしまった。話は以上だ。健闘を祈っているよ、若きマスター」

言うだけ言うと、彼は教室の扉を開けて出て行った。

麻婆の神に祈る勢いさえあったが、彼の助言通り購買部にでも行っておいたほうがいいだろうか。あと、神父の服装で思い出したが、教会にも最終調整として念のため行っておくか……。

それと、忘れてはならないのは、敵サーヴァントの情報を整理する事だ。これはいつものように自室で行おう。

そして、全ての準備が整ったら、言峰の元へ行くとしよう。

たとえば、ありすを殺す覚悟がまだできていないとしても。

購買部で必要な物資を調達し、教会で魂の改竄も済ませた。あとは、マトリクスを完全なものにするだけ。自室へと戻り端末を手にする。

……いよいよだ。

あの、無邪気な笑顔を向けてくれた小さな相手を乗り越えなければ、命の灯を消されるのは、自分だ。

突き付けられた二者択一の現実には、幾度考えても眩暈がするほど残酷だが、負けるわけには……いけない。

一つずつ、今までの出来事を整理していこう。

まず、ありますが「お友達」と呼んだ怪物——。それを私は……バーサーカーだと思った。

あの巨体、凶暴さから、はじめはバーサーカーだと思ったのだ。

そして、ありすはアリーナに固有結界を展開した。アリーナの半分を覆うほどの巨大な固有結界——。

その力は……自我と共に存在を消すものだった。

ありすは人の名前が分からなくなる、とだけしか言わなかったが——あれは、対象者の自我と共に存在が消されるという恐ろしいものだった。

しかし、仮にあの怪物をサーヴァントとするなら、ありすは双子のマスターということになってしまう。

聖杯の定めた規定では、マスターとサーヴァントは一对。にもかかわらず、ありすは二人存在し、怪物は呼び出された。

その疑問に対する答えは……一方のありすがサーヴァントである、という事。

蒼崎橙子が指摘した、バーサーカーに固有結界は使えないという点。そして、図書室でジャバウオックという、あの怪物の名前を調べ当てた時、ありす自身が言った、ジャバウオックはサーヴァントではないという言葉。

それらから導き出される解答は——「全てが同じモノ」であるコト。

ジャバウオックも固有結界も、もう一方のありすが使った『宝具』だったのだ。

……そして。

おそらく、あの少女の在り方自体、既にサーヴァントに取り込まれている。

ありすのサーヴァントは、ありすの夢が無ければ動かないが、あのありすも、サーヴァントが居なければ生きていられない。

死に伏した、あるいは、既に死亡した少女の想いの終着点。

最期の希望、最期の夢を叶える泡沫の夢。

それがあのサーヴァントの正体だ。アレが何と呼称されるかは定かではないが、あえて名付けるのなら、それは――

「誰かの為の物語。ナーサリー・ライム。それが、あの子の――いいえ。黒いアリスの正体であり真名です」

「アヴェンジャー……？」

「ここまで、自分だけの力でたどり着いた事へのご褒美よ。本当は真名に関してだけは口出ししないつもりだったけど……。今回だけは特別。あのサーヴァントの正体を言い当てるのは、この聖杯戦争に参加した全てのマスターでも困難極まるでしょうから。それに、どうせマトリクスはさっきの推測で埋まっただろうしね」

確かに、マトリクスは私の推測が正しかったと示すように、最大レベルにまで上がっている。

それにしても……まさか、黒いアリスの正体が、ナーサリー・ライムだったとは。架空の存在を英霊にしたサーヴァントだとは予想していたが、そもそも英雄、人ですらない存在だとは思わなかった。

ナーサリー・ライムは実在の英雄ではなく、実在する絵本の総称だ。先の対戦相手だったダン・ブラックモアの祖国でもあるイギリスで、深く愛されたこのジャンルは、多くの子どもたちの夢を受け止めていたと思われる。

ここから想定されるのは、子どもたちの夢を受け止めていくうちに一つの概念として成立し、「子どもたちの英雄」としてサーヴァント化したのではないか、という事。

二回戦で戦ったアーチャー、あのロビンフッドは「ロビンフッドを名乗った数多くいるうちの誰か」だった。ロビンフッドという概念を纏った、名も知れぬ青年。それこそが彼の正体。

彼もまた、ロビンフッドという英雄の概念で自身を覆う事でサーヴァントとして成立していた訳だが、ナーサリー・ライムはそれとは

別種の、異例な英霊としての成り立ちをしていると思われる。

物語がサーヴァントと化した存在。子どもたちの英雄。

なるほど、ならば納得できる。

ありすの素性も、彼女の歩んだ短かつたであろう人生も、私には分からない。けれど、彼女がサイバーゴーストであるのなら、きつと幸せな最期を迎えた、とはとても思えない。

あの幼さで、ネットワークを漂うだけの虚ろな存在になるなんて、あまりに悲しすぎるからだ。

そんな悲しい少女に寄り添ったのが、子どもたちの英雄であるナーサリー・ライムだったのだろう。

子どもたちの夢を受け止め続け生まれた英雄が、ありすを見過ごすはずもなく、そして契約は結ばれた。

あの姿になった理由までは分からないが、それでも、アリスは倒さなければならぬ。たとえマスターと同じ、儂くも愛らしい少女の姿を取っていても、その在り方がありす自身をも取り込んでしまっているのなら、いずれマスターとサーヴァントの区別が本人たちでさえもつかなくなってしまうだろう。

そうなってしまうと、おそらく正気を保てない。あとは自壊していくのを苦痛と共に待ち続けるだけ。

でも、私にはありすに苦痛無く旅立ってほしいと願わずにはいられないのだ。

——ならばこそ、彼女らが本物の怪物と化してしまう前に、私の手で引導を渡す。

それが、私なりの、彼女たちの対戦相手となった者としての、せめぎ合のケジメである。

「……決心はついたみたいですね。じゃあ、行きましょつかマスター。夢はいつか終わるもの。あの子の夢が怪物に成り果ててしまう前に、私たちがあの子たちの夢を壊すのよ」

「……うん。行こう、アヴェンジャー。私たちが、ありすの夢を終わらせよう」

殺したくないけれど、それしかサイバーゴーストであろう彼女を

解放する術がないのなら、私は心を殺してでも戦おう。

部屋を出ていくアヴェンジャーの後を追う。

ふと、私はマトリクスに追加された文章を思い出した。意味までは理解できなかったけれど、きつと、ありすたちの事を綴っているのだろう。

『ナーサリーライムは童歌。トミーサムの可愛い絵本。マザーグースのさいしよのカタチ。寂しいアナタに悲しいワタシ。』

最期の望みを、叶えましょう』

もう三度目の決戦日。静けさに包まれた校舎内で、私はもはや見慣れた少女に遭遇した。

「狭い校舎と言えど、よくよく出会うものよね、私たち」

遠坂 凜。助言を乞う形で何度か助けてもらった彼女もまた、間もなく誰かとの決戦が待ち受けている。

「まさかあなたが三回戦にまで勝ち進むなんて、初めて会った頃を思うと信じられない話だわ。能ある鷹は爪を隠す、とは言うけど、あなたの場合は卵から孵化したばかりのまだまだヒヨコだったっていうのに。ヒヨコはヒヨコでも、もしかして魔獣の類이었다のかしら。それとも、ただの偶然？ 運が良かっただけでここまで勝ち残れたとでも?。」

確かに、私に実力が伴っているとは思わない。慎二に勝つたのも、ダンを倒せたのも、全てはアヴェンジャーの活躍有ってこそ。

どちらの戦いでも、文字通り彼女が身を削ってでも戦ったからこそ勝利であり、結果だ。

そう考えると、私は運が良かったのだろう。アヴェンジャーと契約できたから、私はこうして今も生きる事が叶っているのだから。



「だけど、そんな私の思考を、いま自分が口にした言葉すらも、凜は否定した。」

「いいえ、それは違う。シンジはあんなだったけど、マスターとしては優秀なほうだった。ダン・ブラックモアだって魔術師としてはともかく、マスターとしてなら優勝候補の一角に数えられる実力の持ち主よ。その二人を、単に運が良かっただけで倒せる訳がないじゃない？

サーヴァントはマスターがあつてこそ、その力を引き出せるもの。それこそ、相性の良いペアなら、その能力も十全にだって引き出せる。そして、あなたの存在がそれを証明しているとも言える。——ここにあらためて宣言するわ。岸波白野、私はあなたを一人の敵として、マスターとして警戒する。一人の強力なライバルであるのだと認識するわ」

「凜……」

お前は敵に値する。凜は私に対しそう断言した。

敵認定されたというのに、何故だか分からないが嫌悪感よりも不思議と嬉しさがあつた。これまで未熟者としてでしか接してもらえていなかったのに、私は凜にとつて彼女の敵足り得るのだと。ライバルとして認めてもらえたのだと。

一人前とはいかなくとも、私自身を彼女ほどの人間に認められたという事実に対し、沸々と胸の奥底から高揚感が沸き上がってくる。

「……ま、そういうコトだから。せいぜい頑張りなさい？ 私としては、ここで負けてくれたほうがライバルが減ってありがたいんだけど！」

自分の台詞に恥ずかしくなってしまうのだろう、凜は早口に話を切り上げ、そっぽを向いてしまう。

いい話風だったのに、ここにきてなんとというツンデレのテンプレートか。

そのまま立ち去るのかと思っていると、凜は振り返り、何かを思い出したように口を開く。

「そうそう。最近セラフで不穏な空気が漂ってるのは知ってるわよね。ほら、運営でも様々な不具合を関知してるって話。アレ、今のと

ころは聖杯戦争に大きな影響は出てないけど、あまり看過していい問題じゃないと私は思うのよ。長年レジスタンスやってるワケだし、そういうったキナ臭いのは敏感なのよね私」

「……何か知ってるの？」

「……多分それとは関係ないとは思うけど、あなたの対戦相手のありすって子、正確には黒いほうの。さつきチラツと見かけたけど、ちよつと様子が変だったの。最初から浮いた存在ではあったけど、今日はいつにもまして異常さが際立ってたっていうか……。正直あの子と当たりたくないから、さつきはああ言っただけど、あなたには勝ってほしいかも」

話はそれだけよ。と言い残し、凜は去っていった。

それにしても、アリスの様子が変だった……。昨日は特にいつもとそこまで変わりなかったと思うが、あの後に何かあったのだろうか。

『この場面でライバル認定宣言とか、何ともフラグ感が否めないわね。もしかしたら三回戦で敗退するんじゃないアイツ？ まあ、そっちはどうでもいいとして、あの女が言っていたこと、少し気になるわ。不穏な空気云々はともかく、キャスターの様子がおかしいのは、一体どういう事かしらね？』

アヴェンジャーも凜の言っていた事が気にかかるらしく、霊体化したままで話しかけてくる。

「分からない。でも、注意だけはしておこう、アヴェンジャー」

『……フン。サーヴァントと戦うのよ？ どんな相手であれ、警戒は怠らないわ。それがたとえ幼子の姿をしていても。知っている顔だったとしても、ね』

気掛かりではあるが、実際に目にしてみない事には分からない。どのみち、決戦場へと向かうには必然的にありすたちと顔を合わせるのだ。

凜が嘘を言っているとは思わないが、彼女の言葉の真偽を確かめるためにも、とにかく今は先を急ごう――。

### 第三回戦決戦 開幕の刻、来たれり

凜と別れ、私は一階にやってきた。

ロックされているエレベーターの前では、例の如く言峰神父が決戦へと向かうマスターを待ち構えるようにして待機していた。

「ようこそ、決戦の地へ。身支度は全て整えたかね？」

無論だ。先程の彼の忠告に従い、購買部でアイテムも揃え、教会で魂の改竄も済ませてきた。マトリクスもさっきの考察で既に埋まっている。

あとは、この扉をくぐるだけ。

「扉は一つ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、コロッセオ闘技場の扉を開こう」

「お願いします」

「いいだろう、若き闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。ささやかながら武運を祈ろう、麻婆の同志よ。君が再びこの校舎に戻る事を。そして——存分に、殺し合い給え」

私は扉へと端末をかざす。手に入れたトリガーにより、エレベーターが開いた。

唇をきゅつと結び、私は足を踏み入れる——。

エレベーターに乗ってすぐは視界を闇で覆われていたが、次第に明るさが戻ってくる。

そして、ファイアーウォールで阻まれた正面。私たちの反対側に、変わらぬ姿でありすとアリスは立っていた。

向かい合い、幼い笑顔を互いに交わす少女たち。凜が言っていたおかしな様子など、これと違って見受けられないのだが……。

「きょうもまた遊べるね」

「きようはなにを<sup>を</sup>して遊ぶの？　かくれんぼ？　オニごっこ？　おま<sup>ま</sup>まご？」

二人の<sup>あり</sup>すが、私に<sup>問</sup>うてくる。今<sup>挙</sup>げたうちのどれかを選<sup>べ</sup>、という事らしい。

「それじゃあ……おま<sup>ま</sup>まご、とか？」

これから殺し合うというのに、何故私はそんな平和的な遊びをあえて選んでしまったのか。

ありすは私の選<sup>択</sup>が不<sup>服</sup>だったようで、小さく頬を膨らませて反対した。

「あ<sup>あ</sup>たしはオニごっこがいいな。お姉ちゃんをおいかけるの」

「うん。にげてたらおいかけたくな<sup>な</sup>つちやようよね。ウサギとか」

「にげられちゃったらさびしいもの」

「にげられないように、いっぱい走らな<sup>き</sup>や」

くるくるくるくる。二人は決して広<sup>く</sup>はないエレベーター内で、円を描くようにして行<sup>進</sup>する。そこには、まるでマーチングバンドのよ<sup>う</sup>な可愛らし<sup>さ</sup>があ<sup>あ</sup>った。

「あ<sup>あ</sup>たし、走<sup>る</sup>の<sup>つ</sup>て大好き」

「あ<sup>あ</sup>たしはず<sup>つ</sup>とず<sup>つ</sup>と、走<sup>つ</sup>たり出<sup>来</sup>な<sup>か</sup>ったも<sup>ん</sup>ね」

「走<sup>る</sup>の<sup>楽</sup>しい<sup>け</sup>ど……お姉<sup>ち</sup>ゃん、つ<sup>か</sup>まる<sup>か</sup>な<sup>あ</sup>」

「つ<sup>か</sup>まる<sup>よ</sup>。そ<sup>し</sup>たら首<sup>を</sup>ちよんぎ<sup>つ</sup>ちやうの」

黒いアリス——キャスターは、笑<sup>顔</sup>でそれを口にした。物騒<sup>にも</sup>程<sup>が</sup>ある言<sup>葉</sup>を、幼<sup>い</sup>容<sup>姿</sup>をした少女は事<sup>も</sup>無<sup>げ</sup>に語<sup>っ</sup>ているのだ。

子どもの無邪<sup>気</sup>さとか、そんな次元<sup>で</sup>はない。顔<sup>を</sup>見<sup>れ</sup>ば分<sup>か</sup>る。キャスターは本<sup>気</sup>で、私の首<sup>を</sup>胴<sup>体</sup>から切<sup>り</sup>離<sup>す</sup>つも<sup>り</sup>だ。

「ちよんぎ<sup>つ</sup>ちやう<sup>つ</sup>てこわ<sup>く</sup>ない？　……でもオニ<sup>だ</sup>も<sup>ん</sup>ね」

「うん。女<sup>王</sup>さま<sup>と</sup>かオニ<sup>と</sup>か<sup>つ</sup>てこわ<sup>く</sup>な<sup>き</sup>や」

どうやら、オニごっこ<sup>の</sup>オニは、彼女<sup>ら</sup>で確<sup>定</sup>して<sup>い</sup>るらしい。それ<sup>に</sup>しても、なんと子<sup>ど</sup>も<sup>ら</sup>しく<sup>な</sup>い会<sup>話</sup>内<sup>容</sup>だ<sup>ら</sup>うか。いや、言<sup>っ</sup>ている事<sup>が</sup>極<sup>め</sup>て物<sup>騒</sup>な<sup>だ</sup>けで、話<sup>し</sup>方<sup>は</sup>ま<sup>る</sup>つき<sup>り</sup>子<sup>ど</sup>も<sup>の</sup>それ<sup>な</sup>のだが。

もはや私の意<sup>思</sup>な<sup>ど</sup>関<sup>係</sup>な<sup>く</sup>、話<sup>は</sup>少<sup>女</sup>た<sup>ち</sup>だ<sup>け</sup>で進<sup>行</sup>して<sup>い</sup>く。

「じゃあ、いっぱいこわがってもらわないといけないのかなあ」  
「うん。なみだで池が出来ちゃうくらいにいっぱいこわがってもらおうね」

子どもはその無邪気さゆえに、時に残酷であるというが、これはどう見てもキャスターがそれを助長させている。ありすは上手く誘導され、ありす自身がそれを拒んでいないため、なおのこと質が悪い。「ゴメン。首をちょんぎるのは勘弁して？」

最初に私に話を振られた事もあり、同じように私は口を挟んだ。だが、予想外の反応が返ってくる事となる。

「じゃましないでよ。お姉ちゃんとは話してないよ」

「ええ。あたしはあたしと話しているのだから」

「そうだよ。あたしはあたしだけと話すの」

これまでとは真逆の、冷たく突き放すが如く、ありすの態度が豹変する。キャスターは、ありすの言葉を嬉しそうに肯定していた。

凜が様子が変わったと言っていたのは、キャスターだろう黒いアリスのほうだったのに、今やありすまでもがいつもとは完全に違っていた。

「せっかく、おなじだとおもったのに。ようやく、おなじひとだとおもったのに。やっとやっと、さみしくなくなるとおもったのに！わたしのコトをきらうなら、お姉ちゃんなんていららないの」

「そうよ。あたしはあたしだけいればいいの。だってあたしはあたしだけのあたしだけの」

ありすの笑顔は既に消え、私を見つめる瞳には、私への一切の関心も興味も失せていた。

「お姉ちゃんはあたしだけのあたしじゃない。だからお姉ちゃんもういらぬの」

「もうじゃまなの」

冷たい顔をしたありすとは対照的に、キャスターは笑顔に満ちていた。ありすの答えを、その選択を、ずっと待っていたとばかりに。

ありすの変貌ぶりに、ずっと黙って聞くだけだったアヴェンジャーも、ようやく重い口を開く。

「清々しいまでに二人だけで完結してるわね。あそこまで行くと、もう何を言ってもこちらの言葉なんて響きもしないか。……でも、哀れなものですね。どれだけ夢に焦がれようと、所詮は死者の妄念ではないのだから」

……そうだ。これまで、ありすとは何度も遊んできた。けど、それは私にとつても、ありすにとつても、泡沫の夢でしかない。

既に肉体を持たず、魂だけが電子の世界を宛てもなくさまよい続け、その果てに摩耗し消えていく。

放つておいても、いずれは消え行く哀れな存在。

それでも、このまま怪物と化して消えていくより、まだ完全に狂ってしまう前に昇天させてやりたいとも思ってしまう。

——いや。それは綺麗事に過ぎない。

ここで負ければ、私が死ぬ。慎二とダンの命を奪つてでもここまで勝ち進んできたのは何のため？

本当のところ、ありすの境遇云々ではなく、私の生存本能が勝っているだけではない。だから、私は死なぬためには、ありすに勝つしかない。たとえ、それで彼女を殺す事になったとしても。

ただ、ありすの魂を救済したいという想いは、紛れもなく真実である。

ありすは変わらず、無機質な表情のまま私を見ていたが、その口元が微かに綻ぶのを私は見逃さなかった。

「……でも、お姉ちゃんが遊びたいって言うんなら、きょうだけはいっしょに遊んであげるね」

「やさしいね、あたし。だからあたしも遊んだげる」

「いっぱい遊ぼうね。もうにげだしちやイヤだよ」

まだ、ありすにとつてこの殺し合いは遊びの感覚でしかない。そして、それはこの先も変わらない。

もう、戯れは終わりにしよう。いつまでも遊び気分だと、決心が鈍ってしまう。だから、私はハッキリと彼女の言葉を拒絶する。

「遊ばない。私はもう、あなたとは遊んであげられない」

「え……？ そんないじわる言っちゃイヤだよ、お姉ちゃん」

「お姉ちゃんおこってる？ なんてかな。コシヨウでもすいこんじやった？」

「コシヨウでおこっちゃうんだ。じゃあ、なになら楽しくなるのかな」「きつとサトウだよ。あたしたちはサトウをなめて楽しく遊ぼう」

「うん。あたしはあたしとっぴい遊ぶの。いつまでも遊ぶの。とっても楽しい。とっぴいあわせ」

「きようはお姉ちゃんもまげてあげる。とっても楽しい。とっぴいあわせ」

何を言ったところで、やはりありすの心に私の声は届かない。会話すら成り立たない。

結局最後までまともな話すら出来ぬまま、エレベーターの発する控えめな電子音が現実へと意識を引き戻す。それにわずかな振動が、戦場への到着を伝える。

間もなく開かれる扉。ありすたちは一目散に外へと駆け出ししていく。

私たちも、二人を追うように決戦場へと降り立った。目の前に広がる光景は、やはり第二層でも遠くに見えていた、あの氷の城のお膝元とでも言うべき場所だった。

先に降りていたありすたちは、後から降りた私たちの周りを、大きくグルリと互いに交差するように周回し始める。

「ありがとね、お姉ちゃん。あたし、お姉ちゃんと遊ぶの、とっても楽しかったよ」

「ええ、いままでのだれよりも楽しかった。ありがとう。あたしもうれしいな」

「でも、もうお姉ちゃんとはいいの。あとはあたしとだけで遊ぶね」「お姉ちゃんはもういらない。なごりおいしいけど、さよならのじかなの」

一見、グルグルと回る彼女たちの遊びのようにも見える動きだが、見方を変えれば私たちを取り囲む動きともとれる。

油断は出来ない。アヴェンジャーに念話で戦闘態勢に入るように

指示を出しておく。

「こういうときは……なんて言うんだっけ？」

「わすれちゃったの？　こう言うの」

二人は周回をやめ、私たちの正面で並んで立つと、小さな体に相応な小さな両腕を精一杯に広げて言葉を紡ぐ。

「あわれで可愛いトミーサム、いろいろここまでご苦労さま。でも、ぼうけんはおしまいよ。だってもうじき夢の中。夜のとばりは落ちきった。アナタの首も、ポトンと落ちるぞ」

そして、最期の言葉を皮切りに、急速にキャスターへと魔力が収束していく。……来る!!

「ッさあ——嘘みたいに殺してあげる。ページを閉じて、さよならね!」

言い終わると同時、キャスターの指先から真空の刃が放たれた。空を裂き、鋭い風の刃が、アヴェンジャーの首を目掛けて真っ直ぐに飛来し——、

「……そうね。何事にも終わりは等しくやってくる。でも、」

真空の刃は、アヴェンジャーの首を落とす事もなく、より強い力によって掻き消される。アヴェンジャーの手にした、大鎌の一振りによって。

「まだ、マスターの番じゃないわ。ここで終わるのは、あなたたちの脆き夢。どうせいつか壊れてしまうのなら、今ここで儚く無惨に散らせてあげましょう。それでこそ、竜の魔女たる私に相応しい悪道つてものでしょうか?」

久しぶりを見る、アヴェンジャーの邪悪な微笑み。魔女に笑みを向けられて、ありすは少しすくんでいるが、キャスターは平気な顔でアヴェンジャーと視線を交わしていた。

「やだわ。魔女だなんてこわいもの。こわいものには、ふたをしてあげなくちゃ!」

ありすを後ろに下がらせると、キャスターは手を真上に掲げた。何かをしてくるのは分かるが、一体何を……。

(ふたをして……!!　アヴェンジャー、上!)



さつきのキャスターの言葉をヒントに、私は上を見上げる。が、間髪入れず上空から巨大な金属製の鍋の蓋のようなものが、アヴェンジャーを押し潰さんと急速に落下してきていた。

「チッー」

とつさに回避するには、蓋が大きすぎて避けきれない。回避するのではなく、両手で炎を最大出力で蓋に向けて噴出させ、落下の勢いを殺すと、即座に片手を真横に向けて自身も炎の噴出の勢いを利用して一気に蓋の範囲外へと脱出する。

童話自体が英霊と化した存在であるキャスター。その攻撃手段は、通常の戦闘とはまるで異なる。予想外な攻撃が幾つも出てきても、何ら不思議ではない。

「ッさあみんな、女王の敵がやってきた。みんなで女王を守るんだ。てごわい敵でも、みんなでかかればこわくない！」

こちらの態勢が整う前に、キャスターの次の詠唱が終わる。すると、いつの間にか彼女の手にはトランプの束が握られ、それを一枚一枚バラバラに地面へと投げていく。

地面に落ちたトランプはみるみるうちに巨大化し、人と同じサイズに——いや、これは、それどころではない。人間と同じサイズのトランプの兵士の軍勢が、瞬く間に構築されている！

「ハートの女王のトランプ兵……!?!」

体はトランプに手足が生えた程度のものだが、一体一体の魔力量は並のエネミーを遥かに凌駕している。手にした剣、槍、斧は飾りではなく、間違いなく殺傷能力を備えているだろう。

「さあ、行ってきて、あたしのたくさんのおともだち！」

それを合図に、トランプ兵が一斉にアヴェンジャーへと詰め寄せらる。トランプ兵の出現が完了するまでに、幾ばくかの猶予を得たアヴェンジャーは、既に態勢を直し、襲い来る雑兵の大群を迎撃する。

両手を使ってトランプ兵を次々と葬っていく。片方の手の大鎌で斬り裂き、片方の手の旗で風ぎ払う。時には足で地面を踏み鳴らして炎を撃ち出し、敵の全身を焼き尽くす。

紙の体を持つトランプ兵は、アヴェンジャーとの相性がすこぶる悪

かった。紙は刃物や火に弱いもの。その両方の攻撃手段を持つアヴェンジャーにとつて敵ではない。

数は多いが、確実に対処しきれている。

トランプになぞらえてか、トランプ兵の数は全部で52体ほど。まさかこれ以上は増えないだろう。

「私もナメられたものね。この程度の雑魚で私が抑えられると思われているなんて!」

実際、アヴェンジャーは余裕を崩していない。嬉々としてトランプ兵は討ち取っていた。エネミーよりは強いが、知能は同程度らしく、連携も無ければ搦め手も使ってこない。

ものの数分と掛からず、残り10体にまで数を減らしたところで、私はようやくトランプ兵に隠れて見えなくなっていたキャスターの姿を再度視認した。

「え……?」

次々と倒されていくトランプ兵たち。自身の駒を潰されているというのに、キャスターは微笑んでいる。

何故……、そう思った時、私は見落としがある事に気付いた。

(トランプはジョーカーを入れると53枚……。という事は、あと一体まだ存在する!?)

すぐに周囲を確認するが、それらしき姿は見当たらない。だが、キャスターの様子から察するに、何か隠し玉を持っていてもおかしくない。

アヴェンジャーにも念話で伏兵の可能性を伝える。私の懸念を否定せず、残ったトランプ兵に異物が交ざっていないか注意深く観察するアヴェンジャー。しかし、やはりそれらしきモノは居ない。

(……あれ? アヴェンジャーの影が濃いような……。?)

ふと、周囲を観察していて違和感を覚える。自分の影やトランプ兵の影と見比べてみても、明らかにアヴェンジャーの影だけ色が濃いと、その時だった。

「なっ!?!」

唐突に、アヴェンジャーの動きが止まったのだ。いや、止められた。

自分で止まったのではなく、不自然に動きが阻害されたかのように見えたが……。

「つーかまーえたー！」

クスクスと楽しげに笑うキャスター。彼女の視線を追ってアヴェンジャーの足元を見れば、その影から彼女の足首を掴むように、真っ黒な手が伸びているのが分かる。

伏兵であろうジョーカーを冠するトランプ兵は、他のトランプ兵の軍勢に紛れてアヴェンジャーの影へと潜んでいたのだ。

「まさか、そんな所に……！」

足を引つ張られ、思うように動けないアヴェンジャー。それどころか、姿勢を崩された彼女の元に、倒しきれないトランプ兵が殺到する。

取るに足らない敵とはいえど、その場から動けないのであつてはアヴェンジャーであつても全ての攻撃を捌ききれない。ダメージを負うのは覚悟の上で、アヴェンジャーは旗を地面に突き立て、自身を中心とした炎のサークルを作り上げる。

無論、アヴェンジャーが起点となる炎の円陣であるが故に、アヴェンジャー自身も炎のダメージを負うのが必定だった。

防御も兼ねた攻撃は、アヴェンジャーの足首を掴んでいた黒い手にも及び、手は影の中へと引つ込んでいく。迫っていたトランプ兵も、ほとんどが炎の餌食となり、残ったのはたったの3体のみ。

影に隠れた敵への追撃として、影に向かって炎を撃ち出すが、その寸前でアヴェンジャーの影から何かが飛び出し、トランプ兵の背後へと位置取る。

「仕留め損ねたけど、やっと影から出てきたわね。隠れて攻撃するしかないような情けないヤツなんて、軽く捻ってやるわ」

さっきの妨害から、おそらくはジョーカーを冠するであろう影の存在が雑魚だと判断したアヴェンジャー。だが、影は思わぬ形へと転じていった。

形を何度も変えながら、ぐねぐねと蠢いていた黒い物体は、やがて人型へと形状が整えられていき、その姿は私たちのよく知るものへと

変貌する。

肌も、髪も、衣服も、全身余すところ無く真つ黒だけれど、その姿は紛れもないアヴェンジャーそのものだった。

「変身するわ、変身するの。私は貴方、貴方は私。変身するぞ、変身したぞ。俺はおまえで、おまえは俺だ。……こつちのお姉ちゃんはアリス<sup>アリス</sup>あたし<sup>ありす</sup>とおたしのおともだち。だから、そつちのお姉ちゃんももういらないわ！」

キャスターが宣言するや否や、黒塗りのアヴェンジャー？らしきモノがトランプ兵を押し退けて突進してくる。大鎌も、旗も、どちらもアヴェンジャーと全く同じ武装で。

「贋作の贋作とか、反吐が出るわ。その上、武器まで真似るとか。……虫酸が走る!!」

ジョーカーのトランプ兵が自分の似姿をとった事に憤怒するアヴェンジャー。これまでに見たどんな顔よりも、その表情は憎悪に満ちていた。

アヴェンジャーは真つ向から、偽物の振り下ろした大鎌を、同じく大鎌で受け止める。力もアヴェンジャーと同等なのか、押さず引かすの攻防を繰り返していた。

姿や武装だけでなく、ステータスまで同じだというのだろうか。それではまるでコピーだ。

まるつきり同じ姿と同じ能力をコピーする。それもサーヴァントに対しての行使すらも可能とするキャスター。はつきり言って、キャスターの能力は度を越えている。並の範疇の域を遥かに逸している。存在そのものが英霊として異質なのは承知していたが、その能力までも常識の外にある。

このコピーを倒すには、アヴェンジャー自身が己を越えるしかない。もしくは、マスターの私が頑張らなければならない。

なら、やることは決まっている。少年漫画みたいにそう簡単に自分の力を越えられるものではない。故に選ぶのは後者。アヴェンジャーへの魔力供給を増加するのだ。私の負担は大きくなるが、ジョーカーを倒すためには仕方ないだろう。

(アヴェンジャー、魔力多めに送ってパワーをブーストするよ)

(良い判断です。さあ魔力をもっと寄越しなさい?)

途端、私が魔力を送るよりも早く、アヴェンジャーから急激に魔力を吸い上げられていく。その吸引力は、ダイオンもかくやというものすごい勢いで、私の魔力が急速に減っていくのが分かる。

一気に魔力を持っていかれたので、ドツと疲労感が押し寄せてくるが、その甲斐あつてか、吸い上げた魔力量に比例して、アヴェンジャーの出力も強大なものへと変化する。

「力が滾る……!! そおら!!」

アヴェンジャーは偽物押し返すと、その腹に容赦なく旗の柄を叩き込む。ブーストされた筋力から繰り出された一撃は、偽物をキヤスターのすぐ隣にまで吹っ飛ばした。

ただ、やはり元がアヴェンジャーのコピーであるためか、ダメージはあるが倒すまでには及ばなかったらしく、受け身を取ってすぐに立ち上がる。

表情がまるで変わらないので、どれほどのダメージを与えられたのか判別できない。

「まあ！ 乱暴なヒトね？ そんなひとには、女王さまのオシオキがひつようだわ！」

アヴェンジャーが攻撃の全てに対処できているのが面白くないのだろう。キヤスターは、その容姿のために決して恐くないが、こちらに睨みを利かせると、ジョーカーと並び立ち、詠唱を始める。

「『寒い寒い冬の国。積もった雪、広がる一面の白い世界。ペタペタ形を整えて、真つ白な雪の像の出来上がり!!』」

詠唱が終わると同時、キヤスターが両手を前に押し出すように掲げると、その動きに応じるように、猛烈な吹雪がアヴェンジャーへと吹き寄せる。

氷雪は刃となり、無数のダイヤモンドカッターが襲い来る。

「炎を操る魔女に吹雪で攻撃とか、バカなのかしら？」

だが、アヴェンジャーは炎で壁を形成し、難なく吹雪を防いでみせた。……でも、腑に落ちない。アヴェンジャーが炎を使うのは分かっ

ていたはず。なのに、何故キャスターは分かった上で吹雪を放った？  
私の疑念は、悪い形で現実のものとなる。

キャスターの隣に立っていたアヴェンジャーのコピー体が、パチンと指を鳴らした。その直後、突如としてアヴェンジャーの背中辺りで小さな爆発が起き、爆風はアヴェンジャーを自らの作り出した炎の壁へと押し出したのだ。

「ぐ、ああああ、あ、あ、あ、あ!!?」

炎を操るとはいえ、アヴェンジャー自身に完全な炎の耐性が備わっているわけではない。不意打ちでまともに防御する余裕があるはずもなく、無防備のままに肌を焼かれるアヴェンジャー。

吹雪による攻撃は、アヴェンジャーがそれを炎で防ぐと読んでいたから。炎の壁は吹雪を防ぐにはもってこいだだったが、同時に視界もそれに遮られる。その隙を、キャスターは突いてきたのだ。

彼女自身が作り出した炎で、アヴェンジャーを自滅させるために。言動も容姿も幼い彼女だが、やはりサーヴァント。見た目にそぐわぬ計算高さを、あのキャスターは備えている。

「アヴェンジャー!」

炎の壁を突き抜けたアヴェンジャーは、そのまま吹雪に身を晒される。極寒の刃が、焼かれた肌を切り裂いていく。

「あ、がッ……、アアアアアアアアア!!」

アヴェンジャーの凄絶な絶叫が響く。しかし、それは耐え難い苦痛から来るものではない。

雄叫びを上げながら、アヴェンジャーは火傷で痛み、吹雪に凍える体に鞭打ち、再び炎で吹雪を掻き消す。今度は壁ではなく、放射する形でキャスターに反撃したのである。

「きやつ!?!」

さつきはアヴェンジャーの行動を読んだキャスターも、流石に意図せぬ反撃には対応が遅れ、回避する間もなく眼前にまで炎が迫る。

一矢報いたかと思われた、アヴェンジャーの決死の反撃。だがしかし、思わぬ妨害により妨げられる。

キャスターの隣に居たジョーカーが、彼女の代わりに炎をその身で

受け止めたのである。

ジョーカーの全身を一瞬で炎が包みこんでいく。がむしやらに放ったであろうアヴェンジャーの全力による火炎放射は、すぐさまジョーカーを完全に燃やし尽くし、後に残ったのは灰だけだった。

「ああ。せつかくの新しいおともだちが消えちやった。つまらないつままない！　せつかく楽しく遊んでるのに、お姉ちゃんたらじゃまばっかり！　そんなわるいおとなは騎士さまに成敗してもらわなくちや。〴〵二人の女王が白黒マス目の陣取り合戦。勝つのはどっち？

あつち、こつちに行つたり来たり。頭を使って追い詰める！」  
戦いが始まってまだ数分、既にアヴェンジャーは傷だらけのボロボロで満身創痍だというのに、キャスターは傷一つ負うことなく、ケロッとした顔でもう次の手を打ってくる。

詠唱の後に、彼女の前に降り注ぐのはおよそ10体程のチェスの駒。それも、先程のトランプ兵同様、信じられないくらい巨大化している兵隊として、だ。

「はあ…はあ……。一体いくつ、手駒を隠し持つてんのよ…?!」  
「うふふふふー！」

にこやかに、和やかに、朗らかに、キャスターは笑う。さしずめ彼女は獲物をいたぶって楽しむ狡猾な猛禽類。そしてアヴェンジャーは否応なく弄ばれるしかない小動物——今や、そんな構図が出来上がりにつつあった。

「アリスのお茶会は始まったばかり。もつともつと、楽しましよう？」

それは決して参加すべきではないパーティーへの誘い。それすなわち、死への誘いである——。

砂糖菓子の少女は歌い、竜の魔女は囁う

キャスターの前にズシリと重量感のある10体のチェス駒が並ぶ。白黒で交互に並んだ駒は、それぞれの色でポーン2体、あとはナイト、ルーク、キングが一体ずつ存在していた。

チェスになぞらえるとして、白黒の両方ともが敵とかルール無視の度が過ぎるが……。それが彼女らのルール、という事なのだろう。

見たところ、駒は硬質な物質で構築されているような光沢がある。金属製なのだろうか？

チェス駒だけに気を取られてはいけない。キャスター、それにまだ残っている3体のランプ兵の動向にも注意しなければ。

ひとまず、傷だらけのアヴェンジャーをコードキャストで回復し、敵の動きに備える。さつきごっつそり魔力を持つていかれたので、回復もそう何度も使えない。ここからは、更に慎重にならなければ。無駄にダメージを受けている余裕はもう既がないのだ。

(アヴェンジャー。今は様子見に徹しよう)

(それもいいけど、防戦一方だと消耗が激しいだけになるわよ?)

確かに、まだ敵の宝具も謎に包まれたままで、ただ守っているばかりでは、魔力不足でやがてこちらが自滅しかねない。

アヴェンジャーの『自己回復(魔力)』スキルがあるとはいえ、戦闘中ともなれば、それだけでは追い付かなくなってくる。

様子見も、早めに切り上げる必要があるだろう。

(……なら、そうね。マスター、私に考えがあります)

(アヴェンジャー……?)

私たちがなかなか動き出さない事に痺れを切らしたのか、キャスターは不満そうに眉を吊り上げ、駄々をこねる幼子のようにランプ



兵へと当たり散らす。

「お姉ちゃんたちはのんびりやね！ こないんなら、こっちからいくもん！ いけー、兵隊さんに騎士さま!!」

キャスターの声に反応し、チエス駒とトランプ兵が動き出す。自由に動き回るトランプ兵とは対照的に、チエス駒は一体ずつ、そして白黒交互に進行してくる。

白と黒が仲間であるという例外はあるが、どうやら動きに関しては元々のルールに則る必要があるといった制限も存在するのかもしれない。

だからといって、油断は禁物だ。

馬の頭部を模した黒のナイトの駒が、一足跳びで一気に距離を詰めてくると、その口が開き、轟々と燃え盛る炎を噴出した。

放射された炎はその場に広がるのではなく、一直線にアヴェンジャーへと向けて加速的に迫る。

「……フッー」

迫り来る炎を鎌で切り裂き、鎌を振り抜く際に、逆に自らの黒い炎をナイトの開いた口へと素早く撃ち込む。アヴェンジャーの黒炎を飲み込み、黒のナイトはすぐさま内側から拡散するように勢いよく弾けた。金属製だったのは正解のようで、散りぢりに弾け飛んだ破片は重い音を鳴らせながら地面へと落下していく。

攻撃はまだ止まらない。黒のナイトが炸裂するや、次は白のポーンが突進してくる。それも、側面からは数本の刃が飛び出し、更にはポーン自体が高速回転する事で、音速の全方位ブレードと化している。さながらチェンソーを持った大男の突撃である。

はつきり言つて、さっきの火炎放射よりも殺傷能力的に危険度が段違いに高い。

「あれはマズイわね……!!」

アヴェンジャーも、白のポーンを見るや、その危険度をすぐさま理解し、ポーンから距離を取る。

「というか、ポーンってチエスだと一番の雑魚なんじゃないの？ さっきのより明らかにヤバさが違うんだけど!？」

その物言いには私も大手を振って同意したいところだが、日本には「塵も積もれば山となる」という諺もある。どんなに小さくとも、弱くとも、それを侮ってはいけないのだろう。

……あのポーンは決して小さくはないのだが。

白のポーンは、ブレード付きの殺人独楽となつて直進を続ける。幸い、凶体と重さからか進行速度はたいした事もないので、かわすだけなら何ら問題はない。

むしろ問題なのは、他にあった。

「オニゴっこよ！　じょうずによけないと、お姉ちゃんの首がちよんぎれちゃうよ！」

笑顔で宣いながら、キャスターは次々と真空の刃を生み出してはアヴェンジャーに投げつける。ポーンの追尾から逃れつつ、キャスターの攻撃からも回避を要求されるという、とんでもなくハードな動きは、当然のようにアヴェンジャーのスタミナをじわじわと奪っていく。

（これじゃいつまで経つてもじり貧だ……。なんとかしないと……！）

回復用に魔力は温存しておきたいが、そうも言つてられない。出し惜しみて負傷させるよりは幾分良い。

アヴェンジャーに気を取られているキャスターに、指を銃のようにして照準を合わせる。詠唱不要で即座に放てる簡易術式——ガンドを放つ。

指先から撃ち出された小さな黒い魔力弾は、それこそ拳銃から発砲されたかのような弾速でキャスターへと飛来した。

ただ、私の技量では音までは掻き消せず、放つたと同時にキャスターに気取られてしまい、脳天を狙った魔弾は少女の柔らかな頬を掠めたに留まる。

「外した……！」

できればクリーンヒットが望ましかったが、人間より高次の存在であるサーヴァント相手にそれは高望みか。

見れば、頬から僅かに血を流したキャスターに、本人よりもありす

が取り乱している。

「だいじょうぶ、あたし!? ほっぺから血がでてる! あたし、痛いのもきらいだし、血なんてだいじらい!! それなのにお姉ちゃん、ひどいわ!! どうしてこんなことするの?」

「だいじょうぶ、だいじょうぶだからおちついて、あたし。こんなの、どうせすぐになかったことになるんだもの」

混乱するありすを宥めるキヤスターは、頬に付いた一筋の赤い線を指でなぞりながら、こちらを睨み付けている。

私の攻撃は失敗に終わったが、アヴェンジャーへの意識を逸らす事には成功したようだ。だが、なかつたことになるとは一体何を意味しているのだろうか?

スキルや宝具による回復? それとも、この戦いが終わった後の事を言っている……?

分からない。ただでさえ特殊な成り立ちをした英霊だ。その宝具がどんなものかも、未だに推測すらも困難。何が来るかなんて想像もできないのだ。

キヤスターの意識から外れたアヴェンジャーは、ここぞとばかりに襲い来るポーンへの逆襲に転じる。

大鎌の刀身に炎を纏わせ、白のポーンのブレード目掛けて横に薙いだ。斬撃の威力を熱で向上させた事により、ブレードは悉くへし折られていく。

「お返しよ!!」

散々回転しながら襲ってきたポイントに対し、アヴェンジャーもまた体を回転させて、力任せに大鎌を振り抜いた。

大鎌の元々の切れ味に、更に炎と遠心力が加えられた事で、金属製であるポーンを、いとも簡単に横に真っ二つへと切断してしまった。

上下に二分されたポーンが、鈍い音を立てて地面に落下する。これで一つ分かったのは、金属製であつてもアヴェンジャーならあの巨大なチェス駒を切断できるという事。

ナイトのように口から内部破壊しなくてはいけない——みたいな事が無いのなら、他のチェス駒も破壊可能であると分かる。

「まるで鉄がバターのようになれりて！」

「それどころの魔剣の謳い文句？ その例えは何か安っぽいから止めて」

褒めてるのに叱られた。軽口に文句で返せる余裕はあると確認したところで、アヴェンジャーに指示を出す。

（無茶だと承知の上でお願い。キャスターが何かしてくる前に、速攻で取り巻きを倒して。さっきのキャスターの言葉……嫌な予感がある）

（……確かに無茶を押し付けてくるわね。でも、ようやくマスターらしい事を言うようにもなったわ。この私の——アヴェンジャーのマスターなら、それくらい傲慢で強欲であるくらいが丁度いい！）

ニヤリ、とほくそ笑みながらアヴェンジャーは構えを取る。鎌が纏うは先程のような普通の炎ではなく、魔を思わせる黒き炎。

それが意味するのは、アヴェンジャーが編みだし、私を知る限り最高の威力を有するスキルの発動……！

魔力が鎌、そして黒炎へと圧縮されていく。肌で分かる程の濃厚で邪悪な魔力と、離れていても熱く感じる程の熱量が、アヴェンジャーから発されていく。

「久々のお目見えよ。黒炎よ、あまねく全ての罪を灼き斬れ！」

デュランダール・ノワール  
『祖国断つ黒刃』!!」

最大限にまで高められた魔力と熱量が、大鎌による一太刀を以て解き放たれた。いつも以上に魔力の込められたそれは、巨大な弧を描き、猛速で飛んでいく。黒い炎の斬撃は、残っていた三体のポーンを容易く断ち切り、白のナイトも粉碎され、トランプ兵はあまりの高熱に塵すら残さず燃え尽きる。黒い三日月が通り過ぎた跡には、もはや何を残さぬとばかりの蹂躪だ。

その威力の高さを鑑みてか、二つのルークが壁となるようにしてキングを護る壁として黒炎の刃を正面から受け止める。勢いを殺せず、ルークたちは後退を余儀なくされていた。

驚くべきは、他の駒が簡単に焼き切られたというのに、ルークたちはそれに耐えているという点だ。ルークだけは他の駒とは材質が違

うのだろうか。

並んだ二つのキングを背後に巻き込みながらも、勢いに押されキャスターの目の前まで後退させられながらも、結局ルークはキングを守り抜き、炎が消え去る最後の時まで耐え抜いたのである。

黒炎の刃が霧散し、それとほぼ同時に二つのルークは全身がひび割れ、ボロボロと崩れ落ちていった。崩れはしたが、その防御力は敵ながら称賛に値する。

「全部は仕留め損ねたけど、これで残すは二体だけ。コイツらが終わったら、次こそアンタよ？」

アヴェンジャーはこう言っているが、ある意味で虚勢に近い。今の本当に信じられない程に魔力を大量に消費した。もう一度、今のスキルを使用するのは、多分もう無理だ。

アヴェンジャーの持つスキルだけでは、この戦闘中に失っただけの魔力を補充するのは、時間的にも不可能。魔力回復の手段でもあれば話は別だが、そんな美味しい話がほいほいと転がっているはずもなし。

残った二体の白と黒のキングが、攻略不能な存在でない事を祈るばかりだった。

「あーあ。みーんな、やられちゃった。残ったのは王様だけなのね」

召喚したもののへの不甲斐なさに、キャスターは不満を隠そうともしない。だが、焦りすらも感じられない。むしろ余裕すら有るように思われる。

「でも、王様は残ってるよ？」

「そうね。王様は王様だもの。居るだけでいいなんて、ぜいたくな話よね？」

「王様はぜいたくしたり、おかねとか、いろんなものを集めるのがしごとだもの。だから、しかたないわ？」

「じゃあ、その集めたものは、あたくしとあたくしありすで使っちゃえばいいんだわ！」

「うん！ それはいい考えだわ！ だって、そろそろお茶会のじかんだもの！」

急にクスクスと笑い始める少女たち。ありすとキャスターが、二体のキングの周りをぐるぐると歩き始める。

一体何のつもりか——そう思った次の瞬間には、私は事態の重大さに気付かされていた。

「魔力を……吸収してる!?!」

ただ周回しているのではない。少女たちは、キングの駒から流れ出した魔力を取り込んでいたのだ。魔力の流れが目に見えて分かる程の量だ。その全てを取り込まれてしまえば、とんでもないエネルギーを少女たちは手にする事になる。

「アヴェンジャー、すぐに二人を止めて!!」

「言われなくてもー」

アヴェンジャーも、流星に不味いと判断したのだろう。私が指示を出すのとほぼ同じタイミングで、既に走り出していた。

もっと早く気付くべきだった。ポーンは突撃し、ナイトは奇襲を仕掛け、ルークは王を守り、キングは魔力を蓄える。

ありすの言葉を正しく捉えるなら、キングは居るだけでいい。ただそこに存在しているだけで、魔力を生み出し貯蔵し続ける魔力タンクの役割を持つのだろう。

こちらが雑兵に手間取っている間に、十分な魔力をキングに溜め込ませ、それを取り込むのがキャスターの狙いだったのだ。

アヴェンジャーの鎌が白のキングの胴を捉えるが、一撃で破壊しきれない。さっきの大技による消耗がまだ尾を引いていた。

なけなしの魔力を振り絞って、炎を纏った大鎌で白と黒のキングを連続で破壊したアヴェンジャーだが、既に相当な量の魔力がありすとキャスターに吸収されてしまっていた。

「チィッ! 面倒な……!」

「お姉ちゃん、いまからお茶会のじゅんびをするから、あっちに行つて!」

「ッ!?!」

キャスターが指をぱちんと鳴らすと、嵐の如く強風が吹き荒れ、アヴェンジャーを一気に私の所にまで押し返す。

距離を詰めるにしても、離されすぎてしまった。これではキャスターが何かしてきても、即座に対応するのは難しい。

「〴〵みじめで哀れなトミーサム。だけどうれしいお知らせよ？　これから始めるのはとても楽しくてステキなお茶会。わたしとあなた、そしてたくさんのステキなおともだちが集まるの！　招待状にはスノウホワイトをちりばめて、これならきつと雪の女王さまも喜ぶわ！  
〴〵」

キャスターが詠唱らしきもの口ずさむ。それに合わせるように、あまりすがキャスターと手を繋ぎ、踊るようにポーズを取っていく。

「さあ、わたしありす！　じゅんびはぜーんぶととのった。いまからお茶会を始めましょう？」

今度こそ、本命が来る。先程キングから吸収した魔力が、氾濫した川のようにキャスターから溢れだしていた。おそらくは宝具の開帳  
——！！

「止めないとー！」

「分かってる！　けど、魔力不足でろくに走れもしない……！！」

見れば、アヴェンジャーの足が僅かに震えていた。キングを破壊するので精一杯だったのだろう。とうとう魔力が底をついたのだ。

最悪な状況下にある私たちを嘲笑うかのように、少女たちの言葉は止めどなく続けられていく。

「〴〵越えて越えて虹色草原、白黒マス目の王様ゲーム——走って走って鏡の迷宮。みじめなウサギはサヨナラね〴〵」

王冠と、背景に交差する鍵を模したような巨大な紋章がありすたちを中心に浮かび上がる。光を放つ紋章は徐々に輝きを増していき、あまりの眩しさに目を閉じる私に、不意にアヴェンジャーの苦悶の声が聞こえた。

「ぐ、ううううう！！！！」

やっと光が収まり、目を開けると、全身から煙を上げて、肌は焼かれたかのように赤く染まり、その場で力無く立ち尽くすアヴェンジャーの姿が目に入った。

「アヴェンジャー!?!」

今、私が目を閉じていた僅かな間に何が起こったのか。パニックになり、目の前の現実には嘔然とする私に、フラフラになりながらもアヴェンジャーは手で制する。

「油断、した……。あの光、魔力で直接ダメージを、与えてきたわ……」  
「ちよつと待つてて。すぐに回復するから！」

私もコードキャストを使う余裕はない。アイテム覧からエーテルの塊を取り出すと、すぐにアヴェンジャーに手渡し、それを握り潰させる。

砕けたエーテルの塊からエネルギーが溢れだし、アヴェンジャーの傷を少しだが回復させていく。

「ふう……。アイテムに頼らないといけなくらい、私もアンタも、もう魔力切れってワケね」

「魔力を補充できる手段が何かあるといいんだけど……」

無い物ねだりをしては仕方ない。だが、私たちも限界ギリギリなのだから、今の攻撃で流石にありすたちも魔力をかなり消費したはず

——。  
「ようこそ、ありすのお茶会へ!!」

私は目を疑った。

消耗どころか、ピンピンした様子のキャスター、しかも彼女の眼前では倒したはずのチェス駒たちが横一列に並んでいた。

「え……。なんで」

訳が分からない。召喚した素振りも、詠唱もなかったはずなのに、何故またアレらはさつきと同じようにあそこに存在している？

困惑を隠せない私を余所に、アヴェンジャーは鋭くキャスターを睨み付け、納得の息を漏らす。

「なるほどね。さっきのアレは攻撃が目的じゃなかったってワケ」

「アヴェンジャー、一体どういう……、」

「見なさい、キャスターの頬のところを」

言われて、少し遠いが目を凝らしてキャスターの顔——頬を直視



する。そして、違和感に気付く。

さつきまでであったはずのものが無くなっている。キャスターの頬に走った一筋の赤い線。私自身が彼女に付けたはずの傷が、綺麗さっぱり消えていたのだ。

「傷が消え、倒したはずのチェス駒が復活……オマケにアレも甦っているわね」

アヴェンジャーの視線の先に、彼女の指すアレが立っていた。

「ジョーカー……!!?」

キャスターの影から現れたのは、これまた倒したはずのアヴェンジャーのコピー体だった。先程の攻撃が、攻撃そのものが目的ではなかったのだとしたら、その真の目的は——

「大方、時間の巻き戻しってどこかしらね？ それも都合の良い事に、その巻き戻しはキャスターだけに適用される、と。だからアイツに傷を与えても、たとえアイツが召喚した雑魚どもを倒しても、さつきの——おそらく宝具を発動すれば、全て無かった事にできる。その上でこちらには巻き戻しが適用されないから、私たちの消耗は継続されてしまう。……厄介な事この上ないわ」

……絶句する。私たちが幾ら頑張ってキャスターにダメージを与えても、キャスターの召喚したものを倒したとしても、あの宝具が発動すれば全ての努力が無に帰すなんて。

それこそ努力が全て水の泡であろう。

時間の巻き戻し。まさに常識外れの反則技だ。こと戦闘に関して、相手にダメージを与える副次効果付きの、自分だけ体力満タンからやり直しできるといふチート級の特権をキャスターは有しているのだから。

「トランプ兵が出て来ないのが気にかかるけど……。いずれにせよ対抗手段を打とうにも、魔力が足りなさ過ぎる。万事休すとはよく言つたものね」

ここまで酷い絶望的状况は、おそらく今回が初めてだ。これまでの戦いではまだ勝ちの目が完全には潰えていなかったが、今回は違う。

こちらが全力を出しきった上で、あちらは万全の状態に逆戻り。な

んだこの無理ゲー、もはや笑うしかない。

こうなれば、死ぬ前にやけ食いでもしてやろうかと、私は半ば自暴自棄に買いだめしていた麻婆豆腐を端末から引き出した。

「この状況で何か食べるとか、ついにマスターも壊れましたか？」

アヴェンジャーは諦めたように、彼女もまた自棄になって私を貶していた。

私はというと、何故か分からないが、不思議と力を取り戻していた。麻婆豆腐は確かに辛いかもしれないが、それ以上に美味しい。むしろこの辛味が私に元気を与えるというか。この辛味がクセになるというか……。

——いや、違う！

実際、私は力を取り戻しつつある。正確には力ではなく、魔力を。

まさか、この麻婆豆腐を食べる事で、魔力を補充できている……？

アヴェンジャーも、私の異変に気付いたようで、今度は茶々を挟まずにキャスターへの警戒に専念していた。

(マスター、もしかして魔力回復してる？)

(う、うん。麻婆豆腐食べてたら、何か元気が湧いてきた)

(そ、そう……。まさかそんなゲテモノに、そんな効能があったなんて……。……後で私も食べてみようかしら)

“後で”。すなわち、この戦いに勝利した後という事は、アヴェンジャーもやる気を取り戻したという証拠だ。

(マスター、今ある魔力を少しでいいから私に回しなさい。それで少しは動きもマシになるから。私が時間を稼いでる間に、可能な限り魔力を回復させるのよ)

(いいけど、それって、つまり……？)

(麻婆豆腐のドカ食いヨロシク)

問答無用で私から少量の魔力を吸い上げると、アヴェンジャーは鎌を構え直し、キャスターの動きに細心の注意を払って身構える。

私はお腹がたぽたぽになるのが確定し、覚悟を決めて今食べている分を掻き込むと、すぐに次の分を端末から取り出し食べ始める。

「お姉ちゃん、お腹すいたのかな？」

「いいえ、ちがうわあたし。<sup>ありす</sup>お姉ちゃんたら元気になろうとしてるのよ」

急な私の異常とも言える行動に、ありすは疑問符を浮かべるのみだが、キヤスターは明らかに私たちの意図に感付いた様子で、すぐにチエス駒とジョーカーを稼働させた。

私が魔力を補充しきる前にアヴェンジャーを倒してしまおうというのだろうか。

「そろそろ遊びもあきてきたし、もうさよならしましょ。ねえ、お姉ちゃん。死んでくれる?」

「!!」

ジョーカーの突撃がアヴェンジャーの十歩手前辺りで急停止するや、アヴェンジャー周辺が大きな影に覆われた。見上げれば、全てのトランプ兵が槍を下に向けて落下しようとしていたのだ。まるでトゲの付いた釣天井が降ってくるかの如く、広範囲に渡り串刺しにするために。

範囲外から無事に出るのは至難の技だろう。

「だから、紙風情が竜の魔女をナメるなつての!!」

無論、トランプ兵の弱点は承知している。特大の炎を地面から噴出させ、頭上全てを炎の柱で覆い尽くす。空中で為す術もないトランプ兵たちは、悉く燃やされていく。

自分を囲うように立ち上げた炎の柱だったが、その壁を突っ切るようにしてジョーカーは突破し、アヴェンジャーと鎌を打ち付け合う。万全のアヴェンジャーをコピーしたジョーカーが優勢なのは当然で、鏢競り合うが押され負けしそうになるのを、どうにか根性で堪えるアヴェンジャー。

「やっとな殺せたと思ったら、また自分の顔したヤツとご対面とか。最高の嫌がらせよ、まったく!」

悪態をつきながらも、どこか楽しそうなアヴェンジャーの声。ようやくこの戦いに希望を見出させたからなのかもしれない。けど、魔力を回復しきったとして、何か勝算のある手札でもアヴェンジャーにはあるのだろうか?

炎の柱も消え、ジョーカーと打ち合っている間にもチェス駒の進行は止まらない。離れようにも、ジョーカーの追撃がしつこく、アヴェンジャーは上手く抜け出せずにいた。

私とは言えば、既に満腹を通り越していたが、ちょうど三皿目を胃袋に無理矢理に流し込んだところだ。吐きそうになるのを堪え、体がこれ以上の食事を拒絶するのを無視して四皿目に手をつける。我ながら、この拷問じみた作業に涙が零れてくるが、まだ魔力の完全回復には足りない。せめて、五皿目までは食べないと。

(マスター、まだなの!?)

アヴェンジャーが催促してくるのを聞き流し、四皿目をもはや飲む勢いで腹に収めると、すぐに五皿目を取り出す。魔力はだいぶ回復してきたが、最後の一押しはやはり必要だった。アヴェンジャーの様子から見るに、おそらく時間も残り僅か。私は嘔吐感を必死に我慢しながら、麻婆豆腐最後の一皿を一気に口に運んだ。

口に溜めず、すぐに流し込んでいく。流しこむための水も無いので、口の中が麻婆豆腐のトロミでドロドロになるし、それにより辛味が長居し続けるので刺激が多すぎて痛みでヒリヒリする。

口から溢れだしそうになるのを強引に手で押さえ、吐き出す事だけはしないよう堪えた。

(うぷっ……。食べたよ……。アヴェンジャー……)

私の胃袋の許容範囲を軽くオーバーしている量を平らげたのだ。当然、私のお腹はパンパンに膨れ上がっていた。妊娠後半に入った妊婦並みにお腹が出ている。これで体重がとてつもなく増えてたらどうしよう……。とか考える余裕もなく、待つてましたとばかりにアヴェンジャーが魔力を急激に吸い上げていく。

悲しいかな、魔力は吸われていくが、お腹は一向にへこまない。

「遊びは終わりよ！　これで終わらせてやる!!」

十全に魔力を得たアヴェンジャーが、ギリギリで競り合っていたジョーカーを力任せに思い切り尻ぎ払うと、すぐに後退しチェス駒たちとも距離を取る。

「この霊基だと一回で魔力切れになるくらい燃費が悪いから、本当は

使いたくなかったけど——トドメの一発をぶちかますには丁度いいわ」

鎌を宙高く投げ捨てる時、アヴェンジャーは左手で下に向けていた右手の首を押さえ、そこから大量の黒い炎が噴出する。

炎はやがて、とある形へと変わっていき、顛れたのは身体を黒い炎で形成した三つの首を持つ竜。

それは、これまでアヴェンジャーが放っていた炎とはまるで異なり、黒炎の竜は獲物を品定めするかのよう蠢き、炎そのものが生きているかのように見えた。

「炎は獣に、竜は我が手に。三首の黒竜よ、楔を破壊し、命の鎖を引きちぎれ！ 斬撃一殺、『フェルカーモルト・フォイアドラツヘ焼却天理・鏖殺竜』!!」

竜の魔女の命令が下る。三首の黒竜は、大蛇の如く獲物へと長い肢体を高速で這わせ、その炎の腮アキトで敵を食い破る。

一つ目の首がジョーカーを丸呑みにして焼き尽くし、二つ目の首が並み居るチェス駒をその牙で噛み砕き、三つ目の首がキャスターへと直進する——。

「そんなの、聞いてない。聞いてない聞いてない聞いてない!! ダメ、ダメだわダメだわ! あたしが死んだら、アリスあたしも死んじゃう! なんであたしありすばっかり痛い思いをしなくちゃいけないの? なんてあたしありすばっかり悲しい思いをしなくちゃいけないの? どうして、どうして——どうしてみんなあたしありすばっかりをいじめの!?!」

眼前にまで迫った黒竜の頭を前にして、キャスターの悲しい叫びが木霊する。けれど、黒竜は無惨にもその叫びですらも飲み込んで、キャスターの全身を口の中へと収めた。

「知らないわよ、そんな事。一つ言えるとしたら、あなたが私とマスターの前に敵として立ち塞がったから殺す、ただそれだけの事よ。だから——」

黒竜の炎の体内を走り抜けたアヴェンジャーは、自身もキャスターの目の前にまで到達し、いつの間にか再びその手にした大鎌を横に向けて持ち、躊躇なく振り抜いた。

「——目障りよ。諸供死ね」

冷酷な魔女の刃は、炎に包まれた少女の脆く柔い肉を、容易く引き裂いたのだった。

## 夢の終わり

一閃。

アヴェンジャーの大鎌が、少女の身体を斬り裂いた。傷口からは血飛沫が上がり、勢いのあまり白い少女の服にまで飛び散った。

パタパタ、と付着した血液はドレスに赤い染みを生み、少女は呆然とそれを眺めていた。

「今度こそ本当に終わりね。もう立てやしないでしょう」

アヴェンジャーは鎌を消し、疲れきったようにゆっくりとこちらへ戻ってくる。服の所々が焦げており、髪も同様に少し焦げて黒くなっていた。炎の黒竜に飛び込むなんて無茶な真似をしたからなのだろう。

と、アヴェンジャーが戻ってきたその刹那、世界が二つに区切られる。

先程まで変わらない景色の中に佇む私たちと、反対側には全てが赤く染まった世界の中で、血の海に沈むキャスターと、彼女に駆け寄りあります。

勝敗は決した。これから彼女たちに待ち受けるのは、消滅という避けられぬ運命。

「あります……」

「情けの言葉でも掛けるつもり？ それこそ残酷よ。もう死んでるあなたの子に、私たちが二度目の死を与えたというのに。その張本人から慰めの言葉をもらって、嬉しいとでも？」

それは……確かにその通りだった。

私たちが生き残るために、ゴーストであるとは言えありすを、私はこの手にかけてのだ。たとえ、既に死した存在であろうとも、ゴーストであったとしても、彼女は今ここに居て、確かに生きていた。

狂い、消滅していく運命にあったのだとしても、私は彼女らを殺すと決めたのだ。覚悟を持ってこの戦いに臨み、そして彼女らを降した。

そんな私がありすに同情するなんて、傲慢にも程があるだろう。  
私はアヴェンジャーの正論に、どうしても言葉が出てこなかった。

刻一刻と、ありすの、そしてキヤスターの身体が解けていく。

「あれ……きえていくよ……う？　そうか、もう……終わりなんだね」  
「……なんで？」

消えかけていく主人の<sup>ありす</sup>手を、倒れ伏しながらも<sup>アリス</sup>従者はしつかりと握り締める。握り締め、悲痛な声を上げる。

こんな結末、キヤスターには到底受け入れられないというのに、ありすは逆に落ち着いてキヤスターの手を取っていた。

「あたしはずっと一人で。だれも見えてくれなくて。居場所がなくて。さびしくて。ずっと、ずっと」

「やっと見つけたのに。あたしだけの<sup>ありす</sup>あたしを。居場所を。しあわせを。それだけでよかったのに。ずっとこのままで、ずっと、ずっと。それだけでよかったのに。なんで終わっちゃうの？　どうして、こんな小さなしあわせも持つてられないの？　どうして……」

泣きじやくるキヤスターの頭を、ありすは優しく撫でて、そして小さく微笑む。

「いいんだ……もう。あたし……わかってたよ、きつと……。なんにもかも、なくなっちゃうって。だって……よく覚えてはないけれど、<sup>ありす</sup>あたしはたぶんもう死んでるもの……。あのびょういんに、<sup>ありす</sup>あたしの体はないの。ここに<sup>ありす</sup>いるあたしは、ぬげがらだから……。さいしょからなにもなかったんだ。ううん、もつとずつとはじめ……あのびょういんにいたころから、<sup>ありす</sup>あたしにはなにもなかった……」

少女は独白を続ける。微笑みは変わらず絶やす事なく。けれど、その大きな瞳からは涙が次々と零れ落ちていた。

「だれも<sup>ありす</sup>あたしを見てくれなかった。一人だった。いたかった。誰も、<sup>ありす</sup>あたしを、人間として扱ってくれなかった。ふしぎなせかいに<sup>ワンダーランド</sup>来てもずっと同じ……。<sup>ありす</sup>あたしは一人で、さびしくて。だからね、わかってた……。<sup>アリス</sup>あたしも……居場所も……。きつとすぐになくなっちゃうって……。でもね……」



顔を上げて、こちらへと視線を向けるありすと目が合った。ありすの悲しい笑顔を直視するのが辛かったが、何故か私は目を背けられなかった。

「ねえ、お姉ちゃんは、ありすのこと……見てくれた？」

……見ていたとも。ずっと、ずっと。三回戦の相手になったその時から。

——いいや。それよりも、もっと前から。私は、あなたと会っていた。おそらくは、予選の頃には。覚えていないだけで、私はありすを知っているはずだったのだ。

「もちろん……見てたよ」

返すべき言葉は一つしかない。ありのままの事実を、私は彼女へとまっすぐに伝えた。

私の返答に満足したのだろう、ありすは精一杯の笑顔を私へと向けてくれていた。

「やっぱり……お姉ちゃんなら、見てくれると思ってた。お姉ちゃん  
はあたしに似てるから。……あたしとちがって、ちゃんと居場所があるけれど……」

そして、ありすの視線は再びアリスへと戻る。もう、身体の半分以上をノイズに侵食されながらも、繋いだ手を決して離さないように、小さな手にできる限りの力を込めて。

「ありがとう、あたし……。いつもいっしょにいてくれて。お友達になっ  
てくれて……」

「あたし……！」

防波堤が決壊したかのように、アリスの目からも大量の涙が溢れだす。まだ幼いというのに、消滅を、死を恐れる事もなく受け入れるそのありすの在り方は、どうしようもなく儂くも美しく思えた。

「それにありがとう、お姉ちゃん……。あたしと遊んでくれて……。  
あたしのことを見てくれて……。ほんとは……。もうちよつとだけ遊んで  
いたかったけど……」

……身体のほぼ全てをノイズに覆われながらも、少女はこれまでで一番の笑顔で、この場に居た全員に対し、

「……バイバイ」

そう一言だけを告げて、完全に消え去った。砂糖菓子の細工が砕けるような、音ときらめきだけが一瞬残り。もう、そこには何もなかった。

繋いでいたアリスの手が、支えを失って地面へと力無く落ちる。アリスは、もう居ない主人ありすが先程まで居た場所を、じっと見つめていた。その瞳が映すのは、虚空だけ。もしくは、消えた少女の残像か。

「……あたしはあたしが見てるゆめだから。かがみの中のあたしありすだから。あたしがきえたら、このあたしもきえちゃう。次のせいはいせんそうだよばれても、あたしはあたしじゃない」

ナーサリー・ライムがマスターの願望に沿った姿形を取るのなら、彼／彼女はサーヴァントとして喚ばれる度に、その姿を変える事になる。

アリスの言う通り、ありすの姿で居られるのは、ありすが存在している間だけの話。まさしく、アリスにとって今の姿は泡沫の夢なのだ。決して二度と見る事は叶わない、最初で最後の夢……。

「……いつもあたしはだれかのゆめ。ほんとのあたしはだれも知らないもの。あたしありすのあたしアリス。でもしあわせだったけど」

アリスは震える手で、自らの頬に触れた。涙が指を伝い、その時初めて、自分が泣いているという事に気付いたようだった。

「あれ……あたし、泣いてたの……？　なんで泣いてるのかな。おかしいな。わかってるのに。泣いてもほんものになんかなれないって……」

その言葉を最期に、もう一人のアリスは溶けるように霧散した。頭に被っていた帽子の飾りであるリボンと、彼女が持っていたであろう鈍く輝く小さな黒い水晶が僅かな間、血溜まりの上で消えずに残っていたが、それもすぐに消えてなくなった。血の海も、最初から何もなかったかのように、綺麗に無くなっていった。

……黒の砂糖菓子も主人の後を追った。

……これが聖杯戦争のルール。何度も経験しているとは言え、こんなものが当然なのだと思いたくなかった。

これが当然であるのなら——このシステムは、根本から歪んでいる。

「……………」

唇を強く噛む。そうしていないと、今にも叫び出しそうだったから。

先程まであった満腹感とか吐き気とか、もう既に全て失せてしまっている。そんなどうでもいい事なんか、今は重要ではない。

唇が切れ、痛みを感じた。血がツーツと顎を伝い、地面へと滴り落ちる。

こんな痛み、私がありすに与えた苦痛を思えば、比べるべくもないだろう。

少女は消えた。

少女の死を望んだわけではなく、何を望んだわけでもない。

そんな自分が、彼女を死へと追いやった。

放置しても消滅するしかない運命とか、放っておけば怪物に成り果てるからとか、そんなものの結局は私にとって都合の良いように言葉を取り繕っただけ。

私は彼女を殺す事を正当化する理由が欲しかっただけなのだ。

既に三度目の結末だ。

これが聖杯戦争の、ひいては戦いの道理である事は理解している。

ただ、あの少女は二度と還らないだけ。その事実が胸に重い。

「……………帰るわよ、マスター」

泣き出すのを必死に堪えるがやっとだった私は、声は出さず頷いて返すだけに留める。

アヴェエンジャーも、今回ばかりは後味が悪そうな顔をして、黙って私の手を引いてエレベーターに向けて歩き出していた。

「死を悼んでいるのですね」

エレベーターから降りた直後の事だ。

沈んだ心に、暖かい声が掛けられた。見上げれば、目の前にはレオが立っていた。

「命が失われるのは悲しい事です。それが、このような無慈悲な戦いであれば、なおの事」

無慈悲？ 無意味ではなく？

顔に出ていたのだろう。私が聞く前に、レオは頷いてみせる。

「ええ。憎しみによって殺し合うのではなく、互いに同じ目的を持つたまま、相容れず闘うしかなかった。無慈悲です。人としての心を持ったまま、人を殺めるのは悲しい。何かを渴望するから、人は聖杯へと手を伸ばす。自分以上のものに采配を委ねる。誰しも——自分がこの世で一番正しいと、信じる事ができないから」

……それが悲しいと少年は言った。

いや、哀れだと。救いのない人間が、救われる事のない我々が。

それは混迷した世を導く、完成した救い主の言葉だ。

「待つていてください。僕は世界の王になるために生まれた。あなたの悼みも彼女の痛みも認めます。いずれ、誰も無意味な死を迎えないように。地上の貧困も、ここの戦いも同じですよ。足りていないから奪うしかない。その調停をするため、僕はここに来た。徹底した管理と秩序を。欠乏がなければ争いはありません。そうでしょう？ 彼女の消滅を悼んだあなたなら、賛同してもらえるはずだ。人々に、完全な平等を。それがこの世界のあるべき姿、理想社会なのだ」と

少年の言葉は抗いがたい毒のようだ。あるいは癒しの薬か。

ありすの死で沈み込んだ心に、少年の声は穏やかに染み込んでいき

「残念だったわね。私がコイツと契約している限り、その手の誘いに乗るのは私が認めません」

アヴェエンジャーが、私とレオの間に遮るようにして立ち塞がる。

「完全な平等？ 理想社会？ ふざけるのも大概にしろ。平等なんて糞食らえよ。人々の誰しもが平等に、だなんて謳うクセして、自分は

その枠に入れてない時点で平等も何もあつたもんじやない」

「そうそう。彼女の言う通り。それにしてもひどい勧誘なこと。右も左もわからないソイツに、よくもまあ堂々としてつけこめるもんだわ」  
更に割って入ってくるのは凜だった。声には、その瞳に負けぬ敵意がこもっている。

「話は聞かせてもらったけど。今のはあくまでハーウェイの、西欧財閥にとっての理想、よね」

「万人にとっての、ですよ。理不尽な死が待つ世界は、誰しもが避けたいものでしょう」

「はあ？ 資源を独占されて、生き死にまでアンタらに管理される社会が、万人にとっての理想っていうの？ 産まれた子どもを、平気で飢え死にさせる世界が？ 十年先の人生まで、寿命までデザインされる人間が？ 余計なお世話よ。何百、何千年と今のままで生き続けたいのなら勝手にどうぞ。わたしはいつまでも同じ生活なんてまっぴら御免よ。聖人君子の国を作りたいなら、アンタたちだけでやっつてろつての」

凜の言い分に満足したのか、アヴェンジャーはこれ以上は口を挟まず、ただウンウンと頷いてまた霊体化した。

「噂通りの人ですね、ミス遠坂。国連からその将来を期待されながら、中東の武装集団に身を投じた若き魔術師——。あなたの言い分も、わからないではありませんが——資源の管理は、効率の良い配分をするためのもの。富むための富、支配欲から生まれた資源の独占は、決して行われません。僕らの支配圏の実態を見ていただければ、わかると思います」

「はん。ハーウェイの管理都市なら知ってるわ。階級に応じた生活が保障されている。不安要素のない、平穏な世界。何処にも行けない、何処に行く必要もない楽園。けれど、あそこには未来がない。希望も。幸せも。人はただ生きていくだけだわ」

——、それは……。果たして、人間として生きていくと、本当に言えるのだろうか。

人は楽をしたいとか、最善なのはどうすべきかとか、試行錯誤しな

がら生きるからこそ、これまで文明も発達してきた。なのに、変わらない平穩が約束されているからと言って、考える事を止めてしまえば、それは未来を作る事を放棄しているのと同じ。

凜が言ったような事が本当に真実なのだとしたら、西欧財閥の庇護下で暮らす人々は、それこそ家畜と何ら変わらない。

「笑わせるわ。娯楽あつての人間じゃない。わたし、見ての通り肉食なの。農場暮らしは性に合わない」

「ミス遠坂。それはあなたの強さあつてこそその生き方です。生きるための戦いを肯定するのもいいでしょう。——ですが。あなたは全ての人間に、自分と同じ強さを求められますか？」

「っ——それは——」

だが、レオとして言い負かされるようなタマじゃない。正論には完膚なきまでの正論で返し、凜もたまらず言い淀んでしまう。

「できませんね。あなたは自分の身勝手さも、傲慢さもわかっています。だからこそ、その苦しみを共有できない。全ての力無き人々の、自分と同じ苦悩を負えと強制できない」

「で、できるわよ。わたし、そんなお人好しじゃない、し」

……いや、凜は十分、というかすごくお人好しだと思うのだが。

「ええ。脱落する人間がいるのなら、自分が助ければいいと思っっている。だから、あなたでは僕には勝てない」

「なんですって……？」

レオの発言が凜の琴線に触れたのだろう。途端に凜の表情が険しくなるが、レオは気にする様子もなく続けた。

「あなたの言う幸せは狭いのです。人間を救いたければ、まず人間を捨てねばなりません。支配者は必要なんです、ミス遠坂。あなたでは無理だ。そして今の僕にも。けれど聖杯の力があれば——」

地上の全て。この星を照らす光になれると、少年王は断言する。そこには一切の疑い余地はなく、確信しか無いとばかりに自信に満ちた言葉だ。

「西欧財閥の支配地域は、世界の3割に達しています。その市民たちからは不満の声は出てきていません。反抗は常に域外から発生する

もの。あなたの言うファームが完全である事の証です。ですから——羊になれないのなら死んでください。申し訳ありませんが、アジア圏の6割は、人類には不要な世界です。もちろん、受け入れ態勢は万全です。共に人類の未来を守ろうというのなら、いつでもあなた方を歓迎します」

毅然であり、悠然であり、そして当然とばかりの王者としての言葉。一連のやり取りだけで分かる。レオという少年王は、たとえどんな事があるうとも、彼の中の確固たるその王道を曲げる事は不可能なのだと。

「…………ふん。ま、平行線だとは思ってたけど。OK、よくわかったわ」

「わかっていただけましたか?」

「ええ。わたしがこの聖杯戦争に参加したのは間違っていないかつてね!」

散々言い負かされた凜だったが、今は逆に笑っていた。『吹っ切れた』、そんな風に。

「ハーウェイ財閥次期当主、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。アンタの理想とやらは、ここでわたしが握り潰す」

「つまり、僕を殺すと?」

「それでもしなけりや、アンタを止められないんならね」

凜の言ったように、この二人の立ち位置は平行線。それはどこまで行こうと、決して変わる事はないだろう。この二人が同じ道を歩く事は、どんな未来をも演算するムーンセルですらも予測できないに違いない。

レオも、これ以上の議論は無駄だと判断したのだろう。軽く息を吐き、諦めたように言葉を紡ぐ。

「…………そうですか。でも、聡明なあなたなら、いつかはわかっていたでけるでしょう。——あるいは、既に」

「…………筋金入りね。その王様ぶりだけは褒めてあげるわ」

凜の宣戦布告。…………それはユリウスのように、この場で戦端を開くものではない。

レオが王道なら、彼女の選択もまた王道なのだ。  
戦うは聖杯戦争の決戦場。どの道、勝ち残るのはただ一人なのだ  
ら。

そして二人は去り、何も無い自分だけが残される。

レオの理想。凜の決意。

自分には何も無く、何もないまま、人の命の奪い続ける。

現実の世界どころか、この仮想世界すら重く感じる。

それでも――

「それでも戦うしかない」

そう。結局は戦うしかない。でなければ死ぬだけなのだから。

それがどこまで続けられるのか。耐えられず、足が止まった時が  
きつと――。

闇の中。誰の姿も見えず、温度も感じず、空気の流れすらもない。  
無に支配された空間に、少女は一人目を覚ます。

「……ふ。ふひ、ひひ……ふ。」

黒い砂糖菓子の少女は、ポツリと闇の中に佇んでいた。ありすの姿  
を探して周囲を見渡すが、その視界は何も映さない。

いいや。そもそも自分は消滅したはずだ。さつき、主人がありすお姉  
ちゃん”と呼び親しんでいた少女との戦いに敗れ、死んだはずなの



だ。

なのに、どうして意識を保っているのだろう。

「こんばんは。はじめまして。こうして会うのは初めてね?」

不意に、どこからか声が響いた。

声は反響し、どこから発せられているのか判別できない。

ただ、その声はアリスには聞き覚えがあった。

「……なんで」

「さあ? 私がそれに答える義理はないよ。でも、強いて言うなら——返してもらおうかなって」

その刹那だった。いきなり全身が痺れ、指先は凍りついたように動かない。力を込めようとしても、自分の意思に反して全く言うことを聞かなかった。

むしろ、力が入らなかった。

混乱し、戸惑うアリスに、声の主は嗤いながら続ける。

「ほら、貸してあげてたアレを派手に使ってくれたでしょう? 私の魔力を封じておいた黒水晶。アレがあったから、自己改造と変化のスキルを眷属にも使えたんだものね」

「……あ、ああ……!?!」

「改めて、お礼を言うね。ありがとう、アレを使ってくれて。おかげで、新しい身体に私の魔力を馴染ませられた。安心して? あなたの主人も、あなたも、私が有効に使ってあげるから」

言葉とは裏腹に、少女の声は終始、嘲笑交じりのものだった。

アリスには、彼女が何を言っているのか理解できない。否、理解しなくなかった。だって、それが本当なら——

「や、め……て……!! あたし、に……さわ、らない……で……!!」

「ふふ……。アハ。アハハハハハハハハ!!」

アリスの願いも虚しく、少女の嘲り嗤う声が響きわたる。そして、嗤い声が途絶えた直後に、コツコツ、と歩く音が。

「サヨウナラ、あたし。これから私の養分となるだけの、哀れなあたし



## 彼女たちの戦い

ありすとの戦いから一日が過ぎ、私は重い心のままに朝を迎えていた。

見えかけていたはずの何かは、依然として真つ暗となり、自分が本当は何者なのかも自覚できない。そんな自分がどんどん嫌になっていくのを感じていた。

何も食べる気がしない。朝だから、とかそんな理由ではなく、ただありすの事を想えばこそ、食事も喉を通らないといった感じだ。

覚悟して臨んだ決戦だったはずなのに。明確な目的も動機もなく、こうして自分が生き残るためだけに他者の命を奪っている現状を、現実を、昨日の戦いで嫌という程に再認識させられた。

でも、死なないためには、やはりこれまでのように、他人の命を、夢を、希望を奪ってでも戦い勝つしかないという事も理解している。

非情な現実には、心が押し潰されそうだった。

気分は乗らなかつたが、マイルームに引きこもっているだけでは、心を病んでしまいそうな気がしたので、重い身体を無理矢理にでも動かして、私は外へと出ていく。

朝とは言っても、あと二、三時間もすれば午後になる。少し遅めの起床に、我ながら情けない。

「……う？」

そして、掲示板前を通りかかった時の事だった。

そこは緊張に支配されていた。

この空気には覚えがある。対戦の組み合わせ発表のものだ。

しかし、自分の組み合わせ呼び出しはまだ来ない。

「……あ、」

そして気付く。掲示板の前には、見知った顔の二人。

一人は赤い服の少女、遠坂 凛。

もう一人は白い制服姿に褐色の肌。凛と同じか、少し年上くらいだろうか。——言わずもがな、その人物とはラニだった。

彼女らは一瞬だけ互いを確認しあい、殺気や会話の応酬もなく、ごく自然に視線を外し、左右に分かれた。

静かに、しかし運命は定められた。その日が来れば、彼女らのどちらかは死ぬのだ。確実に。

「……遠坂凜にラニィヴィィト。実力伯仲だな。このレベルの敵が潰し合ってくれるとは都合がいい」

目撃者は自分だけではなかったようだ。

ユリウス。あの不気味な暗殺者<sup>アサシン</sup>が、いつの間にか私のすぐ後ろに立ち、二人の去ったあの掲示板を見つめている。

「勝者も手の内を隠せる戦いではなからう。見る事が出来れば、有益な情報になるな」

一人言、だったのだろうか。彼はこちらには一瞥もせず、去っていった。もしかしたら、彼のサーヴァントと話していたのかもしれない。

眩いた言葉の意味はよくわからないまでも、その姿は何故か不穏な物を感じさせる……。

その後も結局、特に何かをするでもなく、私は校舎をフラフラと宛もなく徘徊していた。

意識して行き先を決めていなかったが、気付いた時に居た場所を拳げるなら、教室、教会前の噴水広場、そして図書室——どれも、これまで私が戦ってきた対戦相手との関わりが印象深い場所ばかりだった。

予選の頃とはいえ、慎二と一緒によく過ごしていた教室。

初めてダンを目にしたのは、教会の前で慎二と口論をしているところだった。

ありすとは、図書室でジャバウオックや彼女のサーヴァントに関する話をした。

……。

何故、これらの場所を私は訪れたのだろうか。自分自身の手で命を奪ってきた彼らに、私は無意識に救いを求めているのか……？

分からない。誰か教えてほしい。私は、このまま進んで良いのだろうか。進むべきなのだろうか。

——もしくは、立ち止まってしまふべきなのだろうか？

しばらく校舎をさまよひ、何も答えを得られないまま、私はマイルームに戻ってきていた。

「……満足したかしら？」

「アヴェンジャー……」

マイルーム入り口である扉を背にして、アヴェンジャーは立っていた。

そういえば、朝から私はずっと一人で行動していた。いつもなら茶々を入れてくる彼女の存在がなかったので、つい忘れていたが、彼女は私に同行していなかったらしい。

「マスター。前にも言ったと思うけど、アヴェンジャーである私を従えるのなら、この私に相応しいマスターで居続けなさい。道に迷ったって別に構いやしないわ。アンタが人の道から逸れるのも、果ては外道に堕ちたとしても。私は一向に構わない。かくいう私だって自分が外道な自覚はあるんだし」

彼女にしては珍しい慰めかと思えば、そうではなかった。その目には、冷たさしか込められていないからだ。

「けどね、」

胸ぐらを掴まれ、私は体を軽く宙に浮かされ息苦しくなるが、彼女はそんな事には気にも留めないで続けた。

「いつまでもウジウジぐだぐだと悩んで、ただでさえ遅い歩みを止める事だけは許さない。迷いがあるなら、それを抱えたまま前に進め。聖杯戦争なんて極論を言えば単なる殺し合いでしかないのよ。そしてアンタは、その渦中に居る。たとえ訳も分からずに参加させられているのだとしても、参加した以上はもう逃げられない。勝って敵を殺

すしか、それ以外に道はない。そうしてここまで勝ち進んで、殺した奴らの分までアンタは前に進む責任があるの。それを放棄するのは、単なる責任逃れ。そんなもの見苦しさしかないのよ」

それは、慰めでもなければ、激励でもなかった。

彼女が私へ抱く感情。それは怒りや憤りだ。彼女の言葉全てが、私の不甲斐ない現状への叱咤のように感じられた。

私がマスターとして相応しくないと見限れば、契約を切って主従なんてあっさり捨てるだろうに。だがアヴェンジャーはそれをせず、まだ私を見捨てずに叱ってくれている。

迷いはある。でも、それを抱えたままでも良いとアヴェンジャーは言ってくれている。

……サーヴァントに要らぬ心配をかけて、私はなんと情けないマスターなんだ。

「ごめん……。私は生きるためにも、この先も勝たなくちゃいけない。負ければそれで全て終わる。私が殺したマスターたちの分も、私はその彼らの死を背負って進まないといけないんだね。それが、殺した私が負うべき責任……」

義務ではなく、責任。

私は自分の意思で、彼らを倒した。仕方なかったとしても、私が自分で選んだ事なのだ。それから目を背けては、死んでいった彼らがあまりに報われない。

「迷いはあるよ。でも、私はこのまま進む。進んで、進んで、進んだその先に何かあるのか分からないけれど。それでも、命を懸けて、命を奪ってまで戦ってきた理由を、私は見つけたい」

「それでいいのよ。私もアンタも、悩んで立ち止まってる暇はないんだから。がむしやらにでも、ただひたすら前にだけ進めばいい。結果は後から付いてくるし。それは私が保証するわ」

先程まで燃えていた静かな怒りは何処へやら。一転、アヴェンジャーは得意気に胸を張っていた。まるでそういった体験談でもあるかのようだ。

「さて、いつまでも立ち話してないで、マイルームに戻って遅めの昼食

にでもしまししょうか。どうせ昼は食べてないでしょ？ アンタが帰ってくるのが遅いから、私もまだ食べてないのよ。いくら呆けてたからって、時計くらいは見なさいな。もうとっくに正午なんて過ぎてるわよ？」

言われて端末で時間を確認すると、確かに昼なんてとっくに過ぎていた。正解もとい正確に言うなら、今はおやつ時間である。

人体とは不思議なもので、意識しだすと急に空腹感が湧いてきた。せつかく麻婆豆腐を買いだめしてあるのだし、麻婆パーティーと洒落こむのも一興か。

「あ、そうだ。アヴェンジャー、麻婆豆腐食べてみる？ キャスターとの決戦の時に興味ありそうな口振りだったし」

「誰がそんなコト……言った、わね。念話でだったけど、うん。言ったわ私。言ったけど、本当に美味しいのアレ……？」

「うん。美味しいよ、辛いけど。でも逆にそれが癖になる味というか……。まあ、何はともあれ物は試しだし、アヴェンジャーも食べてみよう。何事も挑戦あるのみ！ チャレンジの精神で行ってみよう！」  
「なにその熱い推し……。ま、まあ？ マスターがそこまで言うのなら、私も食べてみようかしら……」

麻婆豆腐に対し懐疑的なアヴェンジャーをどうにか説得し、私たちはマイルームへと帰還する。

重い気持ちも、あの辛さが払拭してくれるだろうと信じて。

——まことに残念ながら、アヴェンジャーは麻婆豆腐を口にしたその瞬間、発狂したのだった。

月の聖杯戦争。それは、かつて行われていた地上のソレとはまるで仕様が異なっている。

ムーンセルと呼ばれ、月に遙か昔から存在する人類史最古の巨大アーティファクト。——正確には、人類史が始まるより以前から存在し、異星の存在により設置されたと言われる『天の匣』<sup>はこ</sup>。

人類を観測するという目的の為にだけに稼働するムーンセルは、より効率的に人間という種を測るためにある様式を用いる事を選択した。それこそが聖杯戦争だ。

人間社会に争いが絶える事はない。故に、人間性を観察するには争いこそが最適な要素であると判断し、地上で行われた聖杯戦争を参考に、ムーンセルは独自の聖杯戦争を作り上げた。

本来の聖杯戦争では、七人のマスターがそれぞれにサーヴァントを召喚し、最後の一人になるまで殺し合うというものだった。

だが、月の聖杯戦争は規模がまるで異なる。予選で篩<sup>ふるい</sup>に掛けるとはいえ、128人もマスターを内に招き、一対一で競い合わせ、最終的に最後の一人を決めるというもの。

地上では共闘有り裏切り有りのバトルロワイアルだが、月ではトーナメントの形式を取る。そのためルールも細かに規定されており、地上のものとは比べて縛りが多いと言えるだろう。

加えて、こちらはより厳しい現実が待ち受けている。月の聖杯戦争の参加者は、最後の一人——たった一人きりの勝利者以外は全員死ぬ運命にある。地上であれば、マスターが絶対に死ぬという事はないが（大概は死んでいるので、一概に絶対死なないとは言い切れないが）、月では敗北が決定した時点で脳を焼き切られる事が確定事項となっている。

極めて例外的事例でもない限りは、確実に敗者は死ぬのだ。嘘だ、冗談だとナめて掛かってても、否応なく死という現実是非情にもやってくる。

たとえば、一回戦で消えていったシンジ。彼も、この月の聖杯戦争を単なるゲームとしてしか捉えていなかった。だから命懸けになれずに岸波白野というルーキー相手に慢心し、あまつさえ油断して負け



て死んでいった。

これはお遊びではない。人間同士の殺し合いと何も変わらない。その手段が普通と少し違うだけなのだ。

はてさて、そんな聖杯戦争に酔狂にも参加したマスターの一人でもある私だが、今日ようやく三回戦の相手が発表された。

トーナメント形式ではあるけれど、全ての戦いが同時に行われる訳ではない。猶予期間を待たずして脱落する者も居るのだ。その影響で、戦いが始まるのにマスター毎に差異が生まれるのは必然。

同時進行ではなく、戦いの全てが並行して聖杯戦争は進んでいく。

その証拠に、昨日決戦を終えて校舎に帰還したマスターを私は目にしている。私の三回戦がまだ始まる前に、だ。

まあ、そんなコトはどうでもいい。

問題は、私の次の対戦相手。アトラス院最後の錬金術師にして、ウィザード魔術師としても非常に優れた能力を持つホムンクルス——ラニⅡ  
VIII。

アトラス院の連中はヤバい、というのが私たちの世界では有名な話だ。

一体何がヤバいのか。それは彼らのほぼ全員が持つキチガイな思想発想と、それを行動に移すトンデモな実行力。そしてその実績が彼らのヤバさを物語っている。

噂では、世界を七度は滅ぼす兵器を開発したとか。しかもそれが一つや二つどころではないとか。

だが、先程も述べたようにアトラス院は、既にラニを残して壊滅している。比喻でも何でもなく、ラニこそがアトラス院に属するただ一人のメンバーなのだ。

彼女が聖杯戦争に参加した目的は知らない。彼女を鑄造した錬金術師は既に没していると聞くが、その創造主の指示で聖杯戦争に参加したのではと噂されている。

アトラスが生み出した最後の稚児とは言え、いや、だからこそ何かしらの隠し玉を持っていてもおかしくはない。

単なる三回戦と捉えていれば、足元を掬われかねないだろう。

油断はしない。慢心もしない。手加減なんて論外。ここが決勝戦だ——と臨んで然るべき相手である事は間違いないだろう。

「アトラス院ねえ……。あそこは情報の秘匿を徹底してたから、たいしたデータはどこにも転がってないのよね。ラニがホムンクルスでアトラス院の錬金術師——ってコトくらいしか知らないし。三回戦の方針はサーヴァントから探っていくか。それともラニについて先に調べておくか……。どうしようかしら？」

『まずはアレだろ？ マトリクスとやらを埋めるのが先決なんじゃねえの。有利に事を運ぶに越した事はねえからな。ま、先入観無しで殺し合いに臨むってのもオレとしちゃ本望なんだがね』

ハッキリとは言葉にせずとも、私が意見を求めているという事を汲んでサーヴァント——ランサーがマトリクス収集を優先する提案をしてくる。

そう、私のサーヴァントはランサーのクラスを割り当てられた英霊だ。聖杯戦争で召喚されるサーヴァントは通常七騎のクラスに分類される。

主に剣を武器として戦う『セイバー』。

弓、投擲物などの遠隔系宝具や逸話を有する『アーチャー』。

槍やそれに類する武具を用いて戦う『ランサー』。

生物や無機物を問わず乗り物であれば何でも乗りこなす『ライダー』。

魔術を得意とするが直接戦闘には不向きな『キャスター』。

暗殺、気配を殺す事に長けた、影に生きる『アサシン』。

理性を棄てる代償に、全クラス随一の優れたステータス補正を得る

『バーサーカー』。

中でもセイバー、アーチャー、ランサーは聖杯戦争においては当たりのクラスと言われ、『三騎士』と称されている。

戦う、という点で真っ向からの戦闘に向いているのがこれらであるのが理由の一つだ。

バーサーカーはステータス的には最強に近いのだが、魔力の消耗が

激しいためにマスターの負担も大きいという無視できないリスクがある。それに理性が無い……つまり制御できれば意のままに操れるという事でもあるが、制御を失えば自滅しかねない。

バーサーカーというクラスは一種の賭けであると言えよう。故に、よほど優秀なマスターでもなければ扱い切れないのだ。

そして、これら七騎のクラス以外にも、岸波白野の契約する『アヴェンジャー』のような例外、エクストラクラスも存在するが、これらは数も少なければ該当する英霊も少なく、情報がほとんど無い。

故に、契約に関するメリットデメリットがまるで読めない。その点では対戦相手にとっては悩みの種と言えるだろう。

話を戻すと、ランサーの提案は妥当だ。マトリクスを埋めねば、戦いで立ち回りも大きく変わってくる。相手のサーヴァントのクラス、そしてそのサーヴァントの真名。その英霊の持つ伝承に何かしらの弱点を見つけられるなら尚良し。

ラニ自身の事はマトリクスを埋めた後でも問題はない。むしろそうするべきとも言える。

結局のところ、決戦はサーヴァント同士で行うのだし、マスターが何かしらの切り札を隠し持つとしても、それが致命的になるという事はそうそうないのだから。

「……よし！　じゃあ、マトリクスから集めましょうか。相手がアトラス院出身つてのはちよつと怖いけど、まさかトンデモな切り札を月に持ち込めるとも思えないし。そんなの使おうとしたらセラフが黙ってないでしょ。世界を滅ぼす級のアイテムなんて、ムーンセルそのものを壊しかねないのだし？」

『んじゃまあ、方向性が決まったんならさっさとアリーナに行こうや。猶予期間初日で、情報も何も無いのは向こうも同じだ。奴やつしさんも繰り出して来るだろうさ』

ランサーは戦いたいという衝動を隠そうともしない。まったく、我がサーヴァントながら血気盛んで頭が痛い。

……まあ、それに見合う実力を持つサーヴァントなので、戦闘に関しては何ら心配はしていないのだけだ。

三回戦の対戦相手がようやく決まった。

相手の名は遠坂 凛。この聖杯戦争に参加するマスターの中でも随一の実力者と噂されている。

彼女の事は月に来るまで知らなかった。いや、厳密に言えば、名を聞いた事がある程度の認識だ。

産みの親である我が師父は、ホムンクルスである私を除けば、あの人がアトラス院最後の錬金術師と言えた。その師父から、彼女が亡くなった後の事を考慮したのだろう、私は世界情勢について少し聞き及んでいた。

あの人が死んだ時。それはアトラス院最後の錬金術師が私になるから。

そして、魔力の枯渇した大地、そこに生きる人々。西欧財閥やその運営方針に反抗するレジスタンスについて、私は情報を聞き得ていた。

遠坂 凛については、レジスタンスの中でも特に過激かつ優れた<sup>ウィザード</sup>魔術師であるとだけ知っていた。その程度の認識だった。

だが、この月の電脳世界において邂逅し、よもや対戦相手になるとは思いもしなかった。

交流はほとんど無い。たいした会話すらしていない。そもそも、二人きりで居た時間など皆無。

彼女がどんな人物で、どんな人生を歩んできたか。何を目的として月の聖杯戦争に参加したのか。何も。何も知らない。

でも、それは彼女にしても同じだろう。私が聖杯戦争に参加した理由を、目的を、その意味を彼女が知るはずもない。

互いに、決して無名という訳ではない。自分で言うのは憚られる

が、どちらかといえば有名な部類に入るだろう。

片やレジスタンスのホープ。片やアトラス最後の錬金術師。

けれど、私たちはお互いの事をほとんど理解し合えていない。

友好というものが何か、私には良く分からない。我が師父は親であり師であり、決して友人ではなかった。

ただ、私はそれを知らなくて良かったとも思う。どうせ最後まで残るのはたった一人きり。友情などというものを理解し、育んでしまえば、私の意思は鈍っていたのかもしれないのだから。

友人……という単語で思い出したが、彼女——岸波白野。アヴェンジャーという特殊なクラスのサーヴァントと契約を結んだマスター。

彼女とは他のマスターと比べて、幾分交流が多かったように思う。いや……、むしろ彼女とのみ会話が続いたと記憶している。

師父は言った。新たに生まれ来る鳥を探せ、と。それが何を意味しているのかは分からない。そしてこうも言っていた。そのために星を詠め、とも。

聖杯戦争に参加した全てのマスター。その中で唯一霞が掛かり何も見通せなかったのは、岸波白野だけ。

彼女が私の探している人物なのか。それとも——。

いや。まだそれを決めるのは早計だろう。彼女がそうなのか、それとも違うのか。それを見定める為にも、そして我が師より授かった使命を全うするためにも、私は勝ち続けなくてはならない。

故に負ける訳にはいかないのだ。

たとえば、この命を睹してでも——。

気付けば、三回戦が終わってからもう一週間が経とうしている。凜

とラニ、二人の決戦もそろそろだろうか。

——消える。これまで何度も私に助言をくれた二人。そのどちらかが確実に――

凜は割り切っていたが、私は彼女とは違う。そんな簡単には割り切れない。世話になり、恩のある人との別れ。まして恩人同士が殺し合うなんて、普通なら受け入れられるものではない。

……だがもし、私が彼女らと対戦相手として当たっていたら？

私はその時、凜やラニと戦えるのだろうか。ありすとでさえ、あんなに心を痛めたというのに、もし凜やラニとの戦いが実現してしまえば……私は、平静を保てるのだろうか？

四回戦の相手が決まるまでの間、私たちはまだ開放されていた三回戦時のアリーナで鍛練を続けていた。

迷いが無くなった訳ではなく、アリーナへと赴くのは余計な事を考えないようにするためという意味合いでも有った。

がむしやらに。ひたすら無心に。経験値だけをまるで機械のように黙々と蓄積させていくだけの日々。

穏やかな日常ではある。それがこの月面世界においての非日常であるのだと理解もしている。まだ、次の殺し合いが始まっていないだけという事も分かっている。

私は、戦闘をこなす事で思考を制限しているに過ぎない。否応なし且つ確実に迫る四回戦。

せめて、それまでは……また思考の沼に沈まないように心掛けよう。

そんな、他人にとってはどうでもいいような決意をして、アリーナから帰ってきた時の事だ。

凜を見かけた。ただ、話し掛けられるような雰囲気ではなかった。ピリピリとした空気を纏い、私は肌でそれを感じ取る。

私は凜を見かけた瞬間、その時が来たのだと知った。

特別な素振りはないが、その冷淡な眼差しで伝わってくる。

戦いの日。どちらかが死ぬ戦いへ赴くのだと。

『……どうやら今日がそうみたいね。ツンデレ娘と褐色娘、一体どちらが消えるのかしら?』

特に感慨も無いといった具合に、アヴェンジャーは淡々とした口調で彼女らの結末を予想する。

いつもの調子なアヴェンジャーを不謹慎に思うと同時に、何故か彼女の態度に安心感を覚える私も、彼女に毒されてきたと言えるのかもしれない。

「……そういえば」

ふと、凜とラニが戦うと決まった日の事を思い出す。あの場に居たもう一人の存在——ユリウス。

そういえば、今日はユリウスの姿を見ない。……いつもの事なのに、何故か今日に限っては気にかかる。

凜とラニの対戦が発表された掲示板。あの時のユリウスの振る舞いが、今も心に引っ掛かっているのだ。

「アヴェンジャー、今日はユリウスを見かけた?」

『ん? あのアサシンのマスターの暗殺者? 見てないけど。……言われてみれば、あの陰険暗殺者が優勝候補同士の決戦だったのに何もしないってのは変よね』

そうだ。闇討ちでマスターを幾人も葬り、私でさえも殺されかけた。堂々とルールブレイクしてくるような彼が、手をこまねいているだけなんて考えられない。

……ユリウスを探してみたほうがいいだろうか?

なんとなく、思い立ったままにユリウスの姿を探し校舎を歩き回る。

教室、購買部、保健室、図書室——それらしい姿は見当たらない。

では屋上は? そう思い、三階へ上がってきた私だったが、まだ三階はどこも見えていない。屋上に行く前に三階も探してみようか……。

ラニがよく窓から空を見上げていた所にまで来た時だ。彼女が居たであろう後ろ辺りの教室。正確には視聴覚室の前、微かだが声を聞いた。

戸に耳をつけ、中の様子を伺う。

「……！」

声はやはりユリウス。正確な内容までは分からないが、呪文の詠唱魔術のようだ。

『……やはり決戦場ともなると、セキュリティは最高レベルか。この障ファイアウォール壁はさすがに……』

ぶつぶつと何かを呟き、そして次の瞬間には動く気配が。慌てて戸の傍から離れるが、隠れるまでの時間はない。

扉が開かれ、姿を現したユリウスと目が合う。

「気配があると思えば……貴様か」

心臓が凍りつくような殺気だったが、黒衣はあつさり立ち去った。

一度は暗殺を試みた相手を前に、攻撃も、警告も、目を留める事すらなく、ユリウスは去った。

校内で戦う事のデメリットを考えたのか。あるいは彼にとって自分分は、再度命を狙う程、意味のある相手ではないのだろうか。

『案外何も無く帰って行ったわね。でも、明らかにここで何かしようとしていたのは確かでしょう。どうせだし、アイツが何をしていたか確認してみる？』

私もユリウスが何の目的で視聴覚室に足を運んでいたのか気になっていった。アヴェンジャーに促された事もあり、戸に手を掛けの中に入る。戸には特に仕掛けもされておらず、すんなりと進入する事ができた。

視聴覚室は、普通の教室より幾分か大きい。前には黒板を覆い隠すようにスクリーンが下りている。

本来なら天井にプロジェクターがありそうなものだが、代わりに置かれたのは旧式の映写機。電脳世界のくせに妙にレトロだ。

聖杯戦争に何ら関わりが無く、存在する意味すらも疑問なため訪れる機会もない場所なので、普段の状態はよく分からないが。見た感じは、特に変わった所も――

「古い映画館かっつくらいレトロな映写機ね。……ちよっと待った。



コレ、細工された跡があるわよ」

アヴェンジャーの指差す通り。部屋の中央に陣取るあの映写機。その周りの空気データに異常がある。

彼女が言うように、何かの細工がされたのだ。おそらくはユリウスによって。

何が目的なのか。調べれば分かるだろうか、とつい手を出して――

「ちよつと！ 不用意に手を出したら……!!」

アヴェンジャーの警告は既に遅かった。私が彼女の声に振り向いたのは、既に映写機に触つたのとほぼ同時だった。

「……ッ!!?」

纏転▲摩語螺CEL縫★務撥ネ戀ウ覧○♂角ひ隙夕総縲bユΦ◇  
髻√a縲闇呪獄楽S封・紋縲塵←纏四◎纏窪左纏イ雲よ《纏。雌▲  
縛才縲——!!

「っ……あ、ウ」

突然の不意打ちに、たまらず膝をついて座り込む。もつと言うと、立っていられない。

……何かおかしな物に触れたらしい。攻撃的な呪プログラムいが脳内に飛び込んで掻き回し、火花を散らす。

「なに?! なんなのよ?! マスター、アンタ何かやられたの?!」  
「………フウ?」

アヴェンジャーが見た事が無いくらい取り乱して、私の顔を除き込んでいる。私はほんの少しの間だけ呆然していたが、しかし、先程のアレは突然に抜けていった。後は静かなもので、多少クラクラとはしたが、ダメージは全くない。

……なんだっただろう?

ユリウスが残した罠……ではないようだ。

』!!

』!!

思索から、強引に引き戻したのは剣戟の音。振るわれた武器の、空

を裂き地を割るその勢いには、必殺の意志がある。

ユリウスが戻ってきたのか、と身構えるが、彼の姿はここにはない。網膜越しではなく、直接、電脳に映るのは――

ラニ。褐色の肌の美少女と、偉丈夫のサーヴァント。

受けるのは、遠坂 凛とそのサーヴァント。

コレは――二人の決戦場での戦いだ。

先程まで何も映していなかった映写機が、いつの間にかその光景をスクリーンへと映し出していた。

巨漢なサーヴァントは、見た目通りの凄まじいパワーを有しており、彼が振るう大きな槍らしき武器は、たとえ敵に直撃しなくとも強い風圧が巻き起こり敵を威圧する。

武器の叩きつけられた地面には、広範囲に渡り亀裂が生じる。彼が暴れるだけで地盤沈下が起きてしまうのではないかとさえ思わせる豪快さである。

反対に、凛のサーヴァントだが、相手に比べてスマートな印象を受ける。

――だが、勘違いしてはいけない。粗い画面越しでも分かる、引き締まった筋肉。その鍛え上げられた肉体は、一切の無駄が無かった。

彼の得物もまた朱い槍。刺々しくも美しいその槍から繰り出されるのは、敵の急所を次々と的確に狙って放たれる鋭い突き。時には相手の力強い攻撃を流し、隙を見ては胴に放たれる風ぎ払い。

流れるような怒涛の連続攻撃は、見ている見惚れてしまう程。彼にラニのサーヴァント程の豪快さは無い。だがその代わりに、彼の槍を扱う技術は敵よりも遥か上と言えるだろう。

それにしても……。

他者の戦いを見る。これは、敵の情報無しに戦わされる聖杯戦争において、圧倒的優位と言える。

無論、言うまでもなく違法だ。これは闇討ちなど反則も辞さない、ユリウスの企みだろう。

——しかし、それなら何故ユリウスは、半ばで立ち去ってしまったのか。

何か意図があるのか、それとも問題が——

「あれこれ考える余裕があるくらいには大丈夫だったみたいね。なら思索は後よ、アレを見なさいマスター。せつかく他人の戦いが見られるのだし、見逃す手は無いわ」

アヴェンジャーの言葉に、はっとして、画面に意識を戻す。

対峙する凜とラニ。そしてそのサーヴァント。不思議な事に、さつきは明晰に見えた映像は、今やノイズが酷くなっており、女性二人はともかく、その従者の姿は判然としなくなっていた。

画像が悪い——というより、処理が掛かっているのだろう。おそらくセキュリティの一環だ。

接続した直後だったから、僅かでもハッキリと見えていたのだろうか……？

ともあれ、二人のサーヴァント、どちらも槍を武器にしている。であれば、双方ともランサーという事になるが……。

その武器で互いに突き、弾き、薙ぎ払い、受け。軌跡を目で追う事も難しく、刃の散らす火花が戦いの熾烈さを証明している。

筋力においてはラニ側が勝っているが、凜のほうも押されてはおらず、勝負は全くの互角と思えるが——。

「凜って小娘の勝ちね、アレ。柔よく剛を制す、つてヤツ」

アヴェンジャーは、あつさりと凜の勝利を宣言した。

「サーヴァントは互角。でも言っちゃなんだけどマスターに差があるわ。あの女のが柔軟さでは勝ってる。搦め手が上手いのよ、アイツも、そのサーヴァントも。あんな細い成りで大男の猛攻をあんだけ捌けているのが良い証拠ね。ラニもそれは分かっているでしょう。分かっているけど、それを覆す術がない。だから、どうしても押しきれない。さぞ歯痒い事でしょうね、フフフフ……!!」

アヴェンジャーの言葉通り、画面の凜には確かな自信が見える。

一方のラニは、無表情の中にも焦りの色が――

と。突然、剣戟が止んだ。

不鮮明な画像で、何が起きたのかは分からないが、両者の距離が開く。

動きがあつたのは、ラニ。

サーヴァントが構え、力が、エネルギーが集まっていく。それは、この荒れた画面からさえ見て取れる。桁外れの力だった。

「……アレ、ヤバいわね」

アヴェンジャーの視線が鋭くなる。さつきまでラニの劣勢に笑っていた彼女は、今やラニを侮っていないかった。

「ヤバい……？ ラニ、何を……」

画面の中の彼女に、私の声は届かない。そうする間にも、ラニのサーヴァントへと魔力は集まり続けている――。

覗き見られているなど、決戦に臨む二人は露知らず。

凜が優勢に押していた戦いだつたが、状況はラニの選択により一変する。

「……申し訳ありません、師よ。あなたにいただいたからだ筐体と命を、お返しします」

悔やむ言葉を最後に、彼女の言葉から完全に感情が消え去り、機械的に言葉を紡ぎ始める。

「全高速思考、乗速、無制限。モード・オンリス北天に舵を。任務継続を不可能と判断。入手が叶わぬ場合、月と共に自壊せよ――」

システムアナウンスのような、抑揚の無い平坦な声。それに合わせるかのように、少女は胸元から光を発し、その輝きは徐々に強さを増していく。

いや、それだけに留まらず、魔力も光へと吸い寄せられるかの如く

極端に高まりつつあった。

「これより、最後の命令を実行します」

これ以上ないまでに濃密な魔力を発しているラニ。その尋常ならざる様子に、凜も焦りを見せ始める。

「ちよつ、なにそれ……!!? もしかしたらアトラス製のトンデモ礼装でも持ち込んだるかと思つてたけど、これまでそんな素振りも無かつたから安心してたのに、ここに来てまさかの展開!!? とうかソレ、自爆しようとしてる!?! アトラスのホムンクルスつてのはそこまでデタラメなの!!?」

慌てふためく凜。それもそのはず、彼女の言うように、ラニは今まさに自爆しようとしている。

……馬鹿げている。自殺行為、なんてちやちなレベルではない。

凜に追い込まれて奥の手を使おうというのだろうが、あれでは凜どころか、決戦場に居るもの、全てが融解するのではないか……?」

それほどまでに、ラニの発する魔力は異常であり異様なまでの濃度を放っていた。

「令呪を使ったみたいね」

状況の読めない私とは対照的に、アヴェンジャーはずっとスクリーンを凝視しており、ラニが何をしたのか理解を示す。

全ての戦いを通して、たった二回だけの切り札。ラニはそのカードをここで切つたのだ。

……いや、それではまだ足りない。この恐ろしいまでの力は、ラニの体の中にあるもの。

彼女の心臓は、爆発寸前の炉そのものだ。この状況を目の当たりにすれば、誰にだって分かる。

ラニの体には、もともとからこういった機能があつたのだ、と。

無論、それを間近で見ている凜もすぐに状況を理解していた。

「魔術回路の臨界収束……！ 捨て身にもほどがある、下手したらムーンセルそのものが吹っ飛ぶ可能性だってあるわよ！」

「ヒュウ、カミカゼってヤツか！ さて、どうするかねお嬢ちゃん？ 確かアンタらの専売特許だろ、ありやあ？」

凜のサーヴァントが、緊迫した状況には不釣り合いな、飄々とした口調で尋ねる。

「いつの時代の話だつてのよそれ！ 軽口は後よランサー、相手がその気なら、こつちも全力出してやろうじゃない！ ラニの心臓、アレ、本物の第五<sup>エーテライト</sup>真説要素よ！ 爆縮させたらアリーナぐらい訳なく吹っ飛ぶわ！ その前に——宝具で、中心を穿ちきつて！」

「おう、らしくなく大盤振る舞いか！ いいね、いよいよ決着だ！」

彼女の檄を受け、槍兵も構えを取り、力を溜める。

高まる力と力。その結果は——

「次で決着ね。あれだけの魔力の衝突ですし、令呪の剥奪を待つまでもなく、敗者は消滅するでしょうね。でも、だからといって勝者も無事で済むかしら？ もしかすると、どちらも死ぬかも——」

そこまで言うと、アヴェンジャーは言葉を切り、こつちの顔を見つめると、つまらなそうに言った。

「……珍妙な顔をしていますね。まさかとは思うけど、アンタ、助けたいとか言い出したりしないでしょうね？」

いつの間にか、そんな表情をしていたのか。しかし今はそれよりも気になる事があった。アヴェンジャーの言葉の微妙なニュアンス。

救う手段などない。そういう言い方ではなかった。

……何か、あるのだろうか？

「……はあ。言わなくても顔で分かったわ。ほら、あるじゃないの、そ

ここに。……言いたくなかったけど、どうせ隠しても無駄だったでしょうし」

相当に嫌そうな顔をしつつも、少女は指差す。左手を。そこに浮かぶ令呪を。

「……令呪を？」

「そのスクリーンを通して繋がっている以上、あそこへ移動して、どちらかを救う事は可能よ。でも、実際には隔絶された場所。そこへ瞬間移動するとなったら、神霊クラスのサーヴァントでもない限りは令呪のサポートが必須でしょうね」

そう。そもそもは不可能な話。そんな不可能を可能にする、たった二回きりの奇跡。それが令呪だ。

「ここで行けば、帰りの分も要るかもね。この一時で二つの令呪を失う可能性がある、という事になるわ」

回数に限りのある切り札を全て失うかもしれない……と。

私、は……

「……はあく。そんな顔しないでくれる？ こんな問いかけ、本当ならするの吐き気がするんだけど、仕方ないわね」

もはや諦めたとばかりに溜め息を吐くアヴェンジャー。そのあらゆる万物を射抜くかのような、冷たい黄金の瞳の中に私を映して彼女は選択を迫る。

蘇いばの道を歩く覚悟は有るのか、と。

「……敢えて聞くわよ。アンタ、本当にあの女どもを救う気？」

## 招かれざる復讐者

「……………」

言葉に詰まる。本来ならば、彼女たちはいつか私の対戦相手に当たるかもしれない競争相手であり、助けるべきではないのだろう。

どちらも実力者であり、私より優れたマスターであり魔術師<sup>ウィザード</sup>。ここで共倒れするならば、それは聖杯戦争優勝候補者が一度に二人も消える事となる。

私が彼女らのどちらかと戦う事になったとしても、こちらに勝ち目はほとんど無いだろう。なら、ここで二人とも敗退してもらおうのは、私にとつても都合が良いと言えるのは、誰の目から見ても当然の事だ。

「……………私は」

けれど。

本当にそれで良いのか？ 私は、本当に彼女らの危機を前にして、目を瞑ってしまえるのか？

答えは——否だ。

凜とラニ。私は二人共に恩がある。彼女らの助けが無ければ、今こうして私は生きてここに立っていなかっただろう。

命の恩人とも言える彼女らを見捨てるなんて、私には出来ない。魔術師としては失格だろうが、人として道を踏み外すような真似はしたくない。

「……………助ける。助けられるのなら、私は助きたい」

「……………ふん。まあいいわ。で、どうするの？ 言っとくけど、二人共助けるなんて無理よ。救えるとして、せいぜいが一人。私はサーヴァントを警戒する必要があるし、アンタがイツらのどちらかの手を引くしかないわ。さあ、時間も無いし、さっさと選びなさいな」

アヴェンジャーはつまらなさそうに言う。助けられるのは一人だけ。どちらを助けるのかを今すぐ選べ、と。

凜か、ラニか……。出来る事なら二人の手を取って両方を救いた



い。でも、それが到底不可能であると、私は嫌でも理解していた。もはや融解の時は近い。これ以上、熟考している時間はない。今は心の赴くままに。令呪を失ってでも――

「ラニを救う」

意思、そして私の言葉に従うように、左手にとっても強い熱さを感じた。三画しかない令呪、赤い煌めきを発しながらその一画が消えていく。

「アヴェンジャー!」

命令を下すとアヴェンジャーは、いつ動いてもいいように備えていたのだろう、不満の声も表情すら見せる事なく、即座に動いた。

もはや一刻の猶予もないのだ。

全ての力は両の足に。爆発しそうな滾りに、床がたわむ。空間が歪んでいく。

歪みが広がり、スクリーンに穴を穿つ。空間を歪ませる程の強烈かつ濃厚な魔力の放出。これが切り札たる令呪の力。

瞬間、アヴェンジャーが跳ねた。全ての世界が後方へ流れ去った。急速な加速の結果か、視界は暗闇が占め、失った令呪の熱だけが手の上で疼く。

目を開けると、そこは決戦場だった。

まるでフライパンの上だ。大気中に放電する魔力の火花。ラニを中心に、アリーナは融解しだしている。

「はっ……!?!」

「貴方は……!?!」

突然現れた闖入者に驚いたのか、ラニの体で渦巻いていた魔力が、微かに緩む。

「!」

一方。偉丈夫のサーヴァントは、躊躇う事なく、その矛をこちらに振り上げてくる。

「だめ、止まりなさい、バーサーカー……！ その人は、敵ではない……！」

ラニの制止の声も聞かない。さもありません。彼女のサーヴァントがバーサーカーだと言うのなら、主以外のマスターとサーヴァントは、ただ粉碎するだけの敵に過ぎない……！

「……っ」

私は目の前にして初めて理解する。ラニのサーヴァントの、その圧倒的なまでの存在感を。ただそこに在るというだけで、否が応でも気圧される。その暴力的なまでの圧迫感、私の腹の底にまで響いていた。

とてもではないが、今の私たちでは太刀打ち出来る相手ではないと、肌で感じたのだ。

「分かってるわよね。今の私たちではコイツには届かない！ マスター、令呪を使いなさい！ 一瞬でいいわ、凌ぐわよ！ セラフの強制終了さえ機能すれば、この窮地から抜け出せるはずよ!!」

彼女が言い終わるよりも早く、バーサーカーの矛がアヴェンジャーの頭上に振り下ろされる。すかさず旗の柄で受け止めるが、いかんせん力の差が大きすぎる。叩きつけられた勢いを殺せず、そのまま足で地盤を抉る。アヴェンジャーの足首辺りまで、地面が沈み込んでいた。

「ぬ、ぐぐ……!! ンなのよ、このクソ怪力は……ッ?！」

アヴェンジャーは寸でのところで耐えている。足の骨が折れてもおかしくない一撃を受け止め、今もなお続く圧力に歯を食い縛りながら。

さながら、降りてくるプレス機を全身全霊で受け止めるような感覚を、彼女は必然的に味わっていた。

「アヴェンジャー、令呪を以て命じる！ 耐えて!!」

迷うべくもない。すぐさま令呪を切り、先程と同じように一画が光を発しながら消えていった。

令呪とはサーヴァントへの絶対命令権であり、行使すればサーヴァントが嫌がる命令であったとしても遂行させられる。ただし、それが

今のような抽象的な命令内容であれば、少し話が変わってくる。

相手との実力差が絶望的である現状で、それを覆せる訳もなく、そして絶対に耐えきれぬ確証など無いのだ。

それでも、魔力に令呪一画分のブーストが乗るのは大きい。不可能を可能にするのではなく、不可能のままに可能にし得る。それが令呪の行使。一発逆転も狙えるかもしれない切り札たる所以である。

溢れ返る魔力が、アヴェンジャーの全身へと行き渡る。魔力の向上により、一時的ではあるがステータスにバフが上乘せされる。

「……つらあ!!」

魔力の一点集中。両手にエネルギーの全てを回して、アヴェンジャーは矛を全力で振り払う。思わぬ抵抗に、バーサーカーはほんの僅かにだが仰け反った。

その隙を逃がす手はない――!

「お返しよ!!」

すぐさま旗の柄を放した片手から、バーサーカーの胴体目掛けて炎が噴出された。アヴェンジャーの最も得意とする火炎放射が彼を襲う。

「!!」

だが。

まるで炎をもものとしめないかの如く、彼は正面から火炎放射を受け止めてみせ、そしてなおも矛を振るう。

「!!」

言葉にすらならない咆哮を轟かせ、嵐のような勢いを持った薙ぎ払いが、アヴェンジャーを屠らんと放たれる。

剛撃。もはや攻撃の域を遙かに逸したその一撃は、攻撃と言うよりむしろ破壊と言うに相応しい威力があった。

「チィッ! これだからバーサーカー相手は面倒なのよ!」

まともに受けては、いくら令呪によるブーストがあれども、無事では済まないだろう。アヴェンジャーもそう判断したようで、ギリギリのところではやがんで回避する。かすった髪が切断され、宙を舞う。

パラパラと舞うそれが地面に落ちるよりも早く、アヴェンジャーは

反撃に転じる。しゃがんだ際に地面に手を付いた彼女は、火柱をバーサーカーの足元から発生させた。

業々と燃え盛る炎はバーサーカーの全身を包み、その姿を丸呑みにしてしまう。

「生きたまま焼かれる気分はどう？ ……まあ、サーヴァントだし元々死んでるんだけど。 ……って、そう上手くいくワケないわよね」

そう言つて、すぐさま炎の柱から距離を取るアヴェンジャー。普通に考えれば、全身を炎に灼かれて無事なはずがない。 ……普通であれば、だ。

その時。炎の柱は一閃の下に掻き消される。炎柱の内にありながら、ダメージなどまるで無いとばかりに槍を振るつた彼は、悠々と炎柱から出てみせたのだ。

「これが、バーサーカー…！」

あらためて、私をバーサーカーというクラスの脅威を思い知らされる。なるほど、狂戦士とは納得だ。こんなの、通常の思考で測れる相手では到底ない！

「!!!」

再びの雄叫びに、空間そのものが震える。今ので空気が変わった。何か、仕掛けてくる…!!!

どこから取り出したのか、気付けばバーサーカーは弓を手にしていた。それも、通常の三倍程はあるサイズの。

アーチャーの使っていたものと比べれば、その差は歴然だった。常人には扱えない巨大弓。ならば、その弓に番える矢も、通常のもではないのも必然。

その矢とは、恐ろしい事に彼がさつきからずっと振るい続けていた大きな槍だった。矢として使うはずがないそれを、彼はさも当然というように弓へ番えた。

急速に集まる魔力。それほど巨大な弓矢を扱うその腕は、筋肉が膨張し、今にも血管がはち切れんばかり。

直感で分かる。アレはまずい。まともに受けたら確実に死ぬ。そ

う予感させるには十分な殺気と威圧感を放っている。

まさしく一撃必殺の大技だろう。おそらく、宝具ですらない攻撃だが、遜色ない脅威であるには違いない。

「アヴェンジャー！ 絶対受けちゃダメ!!」

「分かってる！」

受けるのではなく、避けるための構えを取るアヴェンジャー。

彼女が構えてすぐ、最大限に引き絞られた弓の弦がけたたましい音を鳴らして、巨大な矢と化した槍を射出した。

目にも留まらぬ豪速。空を切り裂き、音をも置き去りにする破滅の一矢。

それを避ける、なんて考えが甘かった。

「ーッツツ!!! あぐ、ウウウ?!?!」

目で追えぬそれを、回避出来るはずもない。避けようとした瞬間には、アヴェンジャーの左肩が文字通り、消し飛んでいた。

辛うじて腕は繋がっているが、もう動かせないのは明らかだった。

本来ここに居てはならない者の、その壮絶な苦痛から来る絶叫が決戦場に響き渡る。

「!!!」

悶え苦しむアヴェンジャーに、追撃を仕掛けようとバーサーカーが矛を振りかざして突進を開始する。

と同時に、いきなりバーサーカーはまるで弾かれたかのように、後方へと軽く吹き飛ばされた。

———なんとか耐えきった、のだろう。

私の乱入は明らかにルール違反だ。今のはおそらくセラフからの警告だろう。

警告があつた以上、戦いはここで停止させられるはず———

だが、その警告が起きた直後。更に事態は急激に動いた。

「———あ———」

ずっと、ずっと私たちやバーサーカーの動きを静観していた凜のサーヴァント———おそらくはランサー———が、動いたのだ。

ラニの体が、静かに倒れこむ。今のはランサーの槍だ。

ほんの一瞬、バーサーカーの意識が完全にアヴェンジャーに傾いた隙を突いて、遠く離れた位置から槍を投げ、ラニの胸を貫通させたのだ……！

「わりいな。あんまりおいしい隙なんで、切り札を使わせてもらったぜ」

「!!!!!!」

巨人が吼える。主の胸を貫いた槍兵に向けて堰を切る。

しかし――

赤い壁が行く手を阻む。自分が乱入したからか、それとも、セラフは今の一撃で勝ち負けを判断したのか。凜とラニの間には絶対障壁が下された。

「……！……！……！……！……！」

凜が何か叫んでいる。が、壁に阻まれてよく聞こえない。彼女はものすごい表情でこちらを指差して――

「……!!」

違う！ 凜が指差しているのは、ラニの背後だ！

赤い槍は確かにラニを貫いた。その槍の先には、爆発寸前の炉心がくくられている！

「逃げ……！ 早……く、強制退出ログアウト、しな……さ……！」

「いつ……、あの女の言う通りよ、マスター……！ 素直にセラフの、指示コマンドに従いなさい……！ このままだと、巻き込まれるわよ……!!」

アヴェンジャーが息も絶え絶えに怒鳴る。

強制退出に従え――。それは感覚で分かる。全身にまとわりつく重圧に逆らわなければ、速やかに校舎に戻されるだろう。

だが――彼女は どうする？

胸を貫かれ、地面に伏した彼女は？

ファイアーウォール

赤い壁は凜と彼女を隔てている。バーサーカーと戦った自分は、当然、倒れ伏した彼女――ラニの側に居る……！

「っ……、んっ……！」

生きている……！ 胸を貫かれてもラニは生きている！

「!? 待ちなさい、マスター！ うぐう……!!」

気が付けば走っていた。止めるアヴェンジャーの声は耳に届いていたが、走り出した足はもう止まれなかった。

ラニの背後、数メートルの所に突き刺さった槍。あと数秒で爆発する炉心。それを視界に収めながら、走った。

「ラニー！」

どうにか体を起こしたラニに駆け寄る。起こせたはいいが、顔色は悪く、またすぐに倒れてしまいそうにフラフラだ。

「どうし、て……。……もう、意味がない、のに……。あなただけでも、逃げ、ないと——」

知らない。理由なんて、今はどうでもいい。

ラニの独白を無視して抱き上げ、走り出す。セラフの強制退出勧告に身を任す。

……それも、無駄に終わった。一際眩い光を背中越しに確認できた。爆弾が臨界を超えたのだ。

本当に、コンマの差で間に合わなかった。セラフのログアウトより早く、一秒以下の速度で、ラニの心臓は決戦場を融解させ——

「  
!!!」

その、間に合わないコンマの差を、一人の巨人が埋めていた。

砕け、溶け、四散していく体。ラニのサーヴァントはこちらの盾になるように、心臓に向かって走り、消滅した。

……それは主を守る為の行為だったのか、単に、あの爆発を“敵”と認識しただけのものか。

ただ、最後に。

こちらに向けられた視線は、穏やかな武人のものであった。

……気がつけば、また視聴覚室に戻っていた。

左手には冷めた熱と共に、その数を減らした令呪。傍らには、力を使い深手を負って消耗したアヴェンジャー。そしてラニ。

「……………ここは……………どうして……………?」

彼女は呟いて、意識を失った。

その胸の傷は、もう塞がっている。胸を貫かれたばかりか、心臓を失っても彼女には命がある。

以前から自分たちとは違うものを感じていたが、彼女も特別なマスターであるようだ。

……ラニを看ながら、アヴェンジャーの応急処置を行い、そしてスクリーンに視線を移す。先程の融解によるものだろう。スクリーンに映るのは、ただ闇だけだった。

倒れたラニを保健室へと担ぎ込み、それからしばらく見守っていたが、彼女は寝かされたベッドで微動だにせず、覚醒する気配はない。

その瞳は、今もなお苦しげに閉じられたままだ。

その間に、アヴェンジャーも深い傷を治療してもらったが、また桜に怒られたのは言うまでもない。しかも、今回は理由が無茶過ぎる内容であるため、後で言峰神父からも小言を言われる羽目になった。

言峰神父の小言を聞き終えて保健室に戻ると、桜からラニが一度目覚めたと聞かされる。しかし、一度は目覚めたものの、またすぐに昏睡状態に陥ったとの事だった。

「バイタルに異常はありません。肉体的な異常は無いので、精神力の急激な消費が原因かもしれませんね。先輩、すみませんがラニさんを少し見ていてあげてくれませんか？ 運営委員会から召集命令が出てるんです。あまり時間は掛からないと思いますので……………」

「分かった。行っておいで、桜」

ぺこり、と行儀良く一礼して保健室を出ていく桜を見送る。



桜が出て行って小一時間ほど経った頃、ラニの長い睫毛が微かに揺れた。

「……………」

ゆつくりと目を開き、二、三度瞬く。

「ラニー！」

「……………わたしは……………まけた……………」

何の感情も籠らない、合成音声のような小さな呟き。

瞳には何も映っていない。ただぼんやりと、中空を見上げているだけだ。

それはまるで——いや、まるつきり壊れた人形だった。

ベッドの上に投げ出された細い手首をそつと握る。

「……………」

初めて触れるラニの手は、柔らかく、ひどく冷たく——。

力を入れると、ぽきりと折れてしまいそうなほど頼りない。

「……………」

しばらく握っていても、指先に暖かさが戻る事はない。

まばたきと微かな呼吸だけが、ラニを『ヒト』につなぎとめているようだった。

しばらくすると、ラニは再び双眸を閉じた。微かな息遣いが、穏やかな寢息に変わっていく。当分の間、起きるような気配はない。次に目覚めた時は、もう少し回復していると良いのだけど。

……………そういえば、あの救出から後、アヴェンジャーは一言も話そうとしない。やっぱり怒っているのだろうか。

「……………何か言いたそうな顔ね。大方、私が怒ってるんじゃないか？」

当たり前でしょう。命令だから従ったけど、その女に情けをかける理由なんてあった？ アンタと親しいってワケでもなかったのに。ただ助けてもらった恩があるから？ そんな下らない理由で、私たちは令呪を失った。聖杯戦争の切り札、たった二回しか使えない、その全てを——！

「……………それは、」

静かな激昂。これまで見てきた、どんなアヴェンジャーよりも怖く

感じた。アーチャーに罵倒された時の彼女の比ではない。沸々と込み上げる憤怒は、一時的に燃え上がったあの時の怒りよりも、遥かに底が知れない。

「言い訳は聞きたくありません。というか、聞く気もないわ。言っておくけど、私は根に持つタイプだから。許してほしいのなら、当分はアンタの焼きそばパンの半分を私に献上するコトね。私の機嫌が直るまで、アンタの指示は一切受け付けませんので、そのおつもりでー」  
言つて、アヴェンジャーは霊体化してしまう。

……怒りは大きいようだが、完全に嫌われた訳ではなさそうで、心底ホツとする。ただ、彼女がへそを曲げてしまったのは変わりなく、当面は彼女に貢ぐ必要があるだろう。

ひよつとすると、怒らせてしまった恋人へのご機嫌取りと似ているかもしれない。

しばらくして桜が戻ってきたので、私は保健室を後にする。

外には、いつから居たのだろう、遠坂 凜が壁に背を預け、待っていた。

「さて………どういう事か、説明してもらおうわよ」

睨み付ける。

その燃えるような瞳には、怒りと敵意。今までで一番激しい色をしている。

真剣勝負の場に割り込まれたのだから、このリアクションは当然と言えよう。ここが決戦場なら殺されても不思議じゃない。

いや、遠坂 凜ほどの魔術師ウィザードなら、ユリウスのように妙な空間に引き込んで、戦いを仕掛ける事だって出来るだろう。

それをしないのは、単に、殺しては説明が聞けない、というだけの事。あの目を見るに、そう考えてよさそうだ。

「他人の戦いに乱入できたら、聖杯戦争のバランスは完全に崩壊するわ。二人を相手に勝てるマスターは存在しない。でも……決戦場のセキュリティは最高レベル。たとえ令呪の奇跡があったとしても、戦いを見る事すら不可能なはずよ。それを可能にするような規格外の

魔術師、とはとても思えないし。どんなカラクリがあったってわけ？

……言っておくけど、話の内容によってはここで始めるから」

何を、と聞くのは無粋だろう。考えるまでもなく、今の私は凜にとつて排除すべき危険人物でしかないのだから。

「違法呪文を持ち込んだのは、ユリウスだけと思わないで。システムに目を付けられようが、こっちのリスク回避の方が優先よ」

校内での戦闘は出来ないはずだが、ユリウスの例もある。脅しとは思えない。

戦いになれば、おそらくどちらもただでは済まない。むしろ、彼女と争う気になれない。

ならば、戦いを避けるためにも、とにかく正直に話すしかないだろう。

「……実は、」

事のあらましを、なるべく事細かに説明する。

私が話している間、凜は口を挟まず、鋭い視線だけは私から離さない。ある意味、品定めされているような気分だ。

「……なるほどね、ユリウスの仕事か。まあ、あなたがあんな反則まがいをするなんて変だとは思ったけど」

戦闘の情報は漏れていない。凜のサーヴァントは依然、不明のままだ。

その事が分かって、彼女の態度は多少は柔らかくなった。

もつとも、向けられた敵意と疑念が完全に消えたわけではなさそう

だ。「でも、ユリウスもセキュリティは破れずに引き上げたのよね。なに、なんであなたはアクセスできたのよ。わたしも前に調べてみただけど、あの障壁を破ろうとすれば、攻性の呪いで逆に脳が焼かれるわ」

「攻性の、呪い……」

そういえば、そのような物には確かに遭遇した気がする。

けれど、しばらくしたら何事もなく治まってしまったのだが。

「それがあつたとは思う。でも、私は別に、今も何ともないし……」

「そんなはずないわ。たとえこつちの体は無事でも、本体の脳がとて  
も耐えられない……。……。あ、でも、そういえば……。確かあなた  
……。でも……。……」

少女の瞳が揺らいだ。そこに映るのは、敵意も忘れるほどの困惑。  
「……。ま、いいわ。今のは独り言だから、忘れて。どつちにしても、こ  
れからも戦い続ける気なら、わたしたちは敵同士。それは変わらないな  
い。覗ヒールンクきも、次にやったら見逃さないわよ。肝に銘じておきなさい」  
冷たく釘を刺し、凜は自分から去っていく。

……。ふと何かを思い出したように振り返った。

「……。ねえ、あなた。トワイヌ・ピースマンって名に、聞き覚えある？」  
「トワイヌ？」

思い返してみるが、まったく記憶にはない。いや、もしかしたら  
あったかもしれないが、まるでピンと来ない。

だが、その人物が何だと言うのだろうか？

「そう。知らないのなら、別にいいわ。あなたを見て、ちよつとそうい  
う人を思い出したってだけ。今のは忘れていいわ」

少女は今度こそ去り、自分は一人残された――。

第四章 『hiding/meet Fate for yours』

謎の美少女JK、現る

ラニ救出劇の明くる日の朝。ぼんやりと教室で待機していたら、無機質な電子音が私のポケットで鳴り響く。

『……2階掲示板にて、次の対戦者を発表する』

四度目の通知。それは、敵を倒すための七日間の始まりを告げる鐘。

再び、始まるのだ。この手は既に三度も血に濡れ、しかしこの場に立っている。

——そう、あんな小さな子どもありすの命を奪って。

自分が生き残っても良かったのか。その資格、生存の理由レゾンデートルは何だ？

慎二は死にたくないと言いきながら、最期まで生きること执着して、死んでいった。

ダン卿は、その真の想いがどこにあつたにせよ、戦うことに意義を見出し、覚悟を持ち、その結果を全て受け止め、果てていった。

ありすは——あの子はさびしかっただけだ。さびしくて、遊び相手が欲しいだけの、ただの子どもだった。

その全てを乗り越えて、この場に立っているのは自分。この手で……サーヴァントという刃を使って。

私には、彼らの命に釣り合うだけの目的があるだろうか。ただ、

——死にたくないという願望だけで。

ダン卿は言った。戦いに意味を見出してほしい、と。

そんなものがこの私に見つけられるのだろうか？

自分が誰なのかも分からない私に。  
学園生活せんを始めるとき消去されたという記憶が戻れば、私にも見つ  
けられるだろうか？

戦いの意味を——。

端末からの呼び出しに応じて、いつもの掲示板までやってくる。あ  
ちこちに貼られた無意味な情報を眺めていると、やがて雑多な文字が  
消え、ただ一つの有益な情報が浮かび上がる。

私の、次の対戦相手の名だ。それは——

『マスター：レティシア      決戦場：四の月想海』

名前からして、女性だろうか。そんな事を考えていると、

「貴方が次の対戦相手のようですね」

背後からの声は優しく、かつ凜とした芯の強さを感じさせる暖かさ  
と力強さを内包していた。

「……ふむふむ、なるほど。貴方の顔からは迷い、そして躊躇いが感じ  
られます。おそらくはこれまでの戦いを。そしてこれから先の戦い  
へも、それらは向けられている。貴方もまた、戦いとは無縁の世界を  
生きてきたが故に、なのでしょうね」

近寄ってきたその女性は、私の心の内を読んだかのように、私の悩  
みをズバリ言い当ててみせた。初対面であるというのに、だ。

いや、そんな事はどうだつて良かった。それよりも、私は自分の目  
を疑った。目の前に居る彼女は、どう見たつて——

「アヴェン……ジャー……!?!」

そうだ。目の前の彼女は顔も背丈も、体格も、その声ですらも。ア  
ヴェンジャーと完全に合致していた。

だが、全てが同じという訳でもない。強いて言えば、目の前の彼女は健康的な肌色に、煌めく長い金の髪を三つ編みにして、そして蒼い瞳を携えている。

「アヴェンジャーと比べれば、幾分か普通の西洋人の容姿と言えるだろう。」

「アヴェンジャー……。私は、サーヴァントではありませんよ。誰かと間違えたのでしょうか、世の中には探せば自分と似ている人物は意外と多いのですから、そんなに驚くこともありません」

そう言っただけに微笑む彼女だが、やはりアヴェンジャーの面影を感じてしまう。アヴェンジャーがこのような柔らかな笑顔を浮かべているなんて、想像すら出来ないのだが。

それにしただけで、だ。そんな相手が、今回の対戦相手だとは……。正直に言っただけ、とてもやりづらい。

「今回は顔合わせ程度。今日の夕方にも、アリーナでまたお会いしましょう。それにしても、貴方とようやく当たれました。主の導きに感謝ですね。最悪の場合、決戦までに当たれない可能性もありましたので。——やっと、目的が果たせます」

では、とレイシアは颯爽と立ち去っていった。彼女は一体何歳くらいなのだろうか。似合っただけに、身に纏った青いブレザーとミニスカは、どうにかギリギリで似合う感じがしていた。

「……アヴェンジャー。さっきの人、あなたにそっくりだったね。……アヴェンジャー？」

霊体化しているだろう彼女に話しかけてみたが、一向に返事はない。もしかして、今は一緒に居ないのかもしれない。

それにしても、レイシアの残した言葉が気になる。あの言い回しからは、以前から私のことを知っていたように感じた。

そして、私と戦いたかったのだと。一体、何故——？

「………………。どうして、アイツが」

対戦者も発表され、モラトリアム猶予期間も始まった。

しかし、それでも足が動かない。

自分は、一体なんだ？

どうしてここに居て、何故聖杯戦争に來たのか。そんな考えが頭にこびりついて、足を動かそうとしないのだ。

一回戦が始まった頃は、状況の理解で精一杯で、こんな事を考える余裕も必要性もなかった。

だが、一回戦、二回戦、そして三回戦と。誰かの命を奪う度に、頭は冷静さを取り戻していった。

彼らには願望があり、聖杯戦争に参加した。ありすだって、誰かと遊びたいという理由から、聖杯戦争に参加してしまったのだと、私でも分かる。

少なくとも、彼らは私なんかよりも聖杯戦争に意味を持って参加していたはずだ。

それらに触れて、改めて感じる。戦いの度に理由を正当化させて、これまで臨んできた私のどれほど空虚さである事か。

何かの切っ掛けで記憶を取り戻せたとして、それはいつなのか。それまでに私は生き残れているのか。

それとも——私が聖杯戦争に参加した理由は、本当に彼らほどに価値があるのだろうか？

終わらない自問自答。アヴェンジャーは未だに姿を見せず、誰も私に慰めの声を掛ける者もない。

動けずにいた私に、端末からの音で意識が引っ張られる。見れば、桜からのメッセージだった。

ラニが目を覚ました、と。

令呪を使い、両者の対決に割り込んで、結果を曲げてまで救った命。



——彼女は、無事だろうか？

目を覚ましたとの報せを受けても、昨日のあの様子から、どうしても心配は消えない。

それに。

自分勝手な都合ではあるが、会えば何かが変わるかもしれない。

ならば、保健室へ行ってみるとしよう。そうと決めると、さっきまで重かった足は、嘘みたいに軽く感じられた。

保健室へ到着し、桜に軽く声を掛けると、私はラニが寝ていたベッドの方へと向かう。

起きたと聞いていたが、あまりに気配がなく、また眠ってしまったのかと思っただが、意外にもラニの目は開いていた。

虚空のほかに映すもののない瞳——。

しばらくその瞳を見つめ、やはり何の反応もないのかと思いかけた時、突然ラニが口を開いた。

その目は相変わらず何も映していない。体も微動だにしない。

しかし口だけが別の生き物のように動き、無機質な、それでいて妙に透明な声が言った。

「何故、助けたのですか？」

感情のこもらない瞳を天井に投げかけたまま、ラニは繰り返し、呟くように言う。

何故——助けたのですか？

しかし、あのままでは電脳死を迎えていたのは明らかだ。

目の前で人が殺し合い、そして一方が命の火を消しかかっている。それを傍観できる人間が居るだろうか……？

……少なくとも、私には無理だった。

記憶はなくとも、この体は、そういう人間だったらしい。

「……………。傲慢ですね。私はもう、これで——師の願いを果たせない。アトラス院が作り出した、最後のパラダイマイザー並行変革機……。アレすら失っ

た私に、もう何の意義もない……」

淡々とラニは語る。

パラダイマイザー……と言うのは、彼女が暴走させようとした、あの心臓の事か。いや、心臓に見えて違う機能だったのだろう。そうでなければ、彼女が生きている理由がない。

以前から感情の波が感じられない少女だったが、その声は一段と無表情モクロームに感じられた。

「あなたは、何者ですか？」

「……………」

その問いに、思わず言葉が詰まる。

うわついた気持ちを確かにするために来た場所で、その核心に鋭く矢を射ち込まれたのだ。

むしろ、その答えが得られるかもしれないという淡い期待すら抱いていた私にとって、ラニの言葉はひどく重かった。

重い沈黙の後、それに答えを出せるはずもなく、ただ自分の名前だけを呟く。搾り出すように。

今の私にとって、この『岸波 白野』という名前だけが、ただ一つの存在証明だったから。

「岸波……白野……」

彼女は何やら反芻するように呟く。

「あなたは、私がここに居る唯一の理由——師から賜った使命を奪った。つまり、私にはもう生存の理由などないのです」

ラニはそれだけを言うと、口をつぐんでしまった。

その目は、それ以上の接触を拒絶するように、ただ虚ろに天井を見ているばかりだ。

生存レゾンデートルの理由の確認？

助けた命を見れば、それが分かる？

彼女にも、聖杯を求めるだけの理由があり、それは自らの命を懸けるだけの価値があったのだ。

私は、それに介入し、その理由に傷をつけただけ。

その事実を突き付けられ、黙っていると、端末からもはや聞きなれ

た、無機質な着信音が響く。

『……プライマリトリガー第一暗号鍵を生成。第一層にて取得されたし』

「……………」

今はただ、端末に促されるように、その場を立ち去る以外の選択肢が見つからなかった――。

「あ、先輩。ちょっと待ってください。えつと……」

逃げるように足早に出口を目指す私に、保健室の後輩から待ったをかけられる。何かごそごそと、備え付けの冷蔵庫から取り出すと、彼女は満面の笑みでソレを渡してきた。

「これ、お弁当です。いつもの支給品だと味気ないかと思って……。三回戦突破の記念に、良ければどうぞ。もちろん、この前よりも自信作です！ ……とは言っても、まだ練習中なんですけどね」

えへへ、と困ったように小さく笑う桜から、私はお弁当を受け取った。冷蔵庫に入っていたのに、不思議と冷たさを感じない。

謎と言うには小さなその疑問に、桜は聞くよりも早く答えた。

「冷蔵庫に入れてましたけど、防腐のために保存フリーズしていただけですから。冷たくはないはずですよ？」

「そういうこと。ん、ありがとう桜。あとでいただくね」

「はい。行ってらっしゃい、先輩」

今度こそ、私は保健室を後にした。

保健室を出てすぐの事だ。

昇降口の下駄箱前に差し掛かった時、

「……………つたく、見れば見るほど、間抜け面ねえ……」

前方から、失礼極まりない言葉を投げかけられた。

赤い少女、遠坂 凜だ。

「ま、それも、もう慣れたけど。真面目な話をするけど、いい？」

いつになく神妙な面持ちの彼女に、私も自然と佇まいを正して、頷

いて返す。

「あの一件はユリウスの仕掛けにただ乗りしただけだとしても、あなたが障壁<sup>ファイアウォール</sup>を破ったことは事実。そんなことできる魔術師<sup>ウィザード</sup>なんて他に聞いたことが無いわ。あなた……いったい何なの？ その答えを証明しないと、おちおちアリーナにも行ってられないわ」

凜の目付きがいつそう鋭くなる。それこそ殺意すら感じるほどに。だが、それが分かるのなら、こっちもここまで悩んでいない。

自分はいったい何者なのか。あの現場にいた二人共から、同じ事を問いかけられたのだ。ここまでくると、疑問というより不安になつてくる。

自分は、そんなに特異なマスターなのだろうか……。

ざわめきだした不安が、そのまま顔に出ていたのだろう。不意に凜の目から険が消える。

「はあ……本当、やる気を削ぐ顔ね……。いいわ、これ持って、アリーナにでも行つときなさい」

そう言つて、凜は何かを差し出す。

……宝石をあしらったペンダント？ どうしてこんなものを私に……。

「それを持って、アリーナの揺らぎに行きなさい」

「揺らぎ……？ それって一体——」

「揺らぎつてのは、アリーナを形成しているブロックとブロックの間。ムーンセルがセラフを創る際の不備よ。ま、世界の亀裂、境界と思えばいいわ。そういう所にはね、この階層にはない情報が漏れているの。規定外の情報、処理されない霊子。ま、残留魔力<sup>ノイズ</sup>ね」

「ノイズ……。それで、どうすればいいの？」

「簡単も簡単。その宝石は禁制の礼装だね。持っていればノイズと接続できるわ。ノイズは未知の情報だから、うまく利用できればあなたの悩みを解決できるかもしれない。やり方は至ってシンプル。残留魔力<sup>ノイズ</sup>の濃い場所に行けば、あとは勝手に魔力<sup>データ</sup>を取得するから。もし、私の仮説通りなら……、あなた自身のことを知る手がかりになるわ。きつと」

自分自身の事を知る手がかり――。それが得られるなら、願ってもない事だ。

ありがたく、受け取っておこう。たとえば、罠だとしても、自分自身の手がかりが得られるなら、危険を冒す価値はある。

とりあえず、お礼は言っておこう。

「ありがとう。助かるよ」

「ふんっ、相変わらずのお人好しね。魔力の濃い場所は光っているから、すぐ分かるはずよ。じゃあ、運が良ければ、また会いましょう」

もう話す事は無いとばかりに、凜は去っていった。

……これを持って、アリーナ内の光を放っている場所に行けばいいようだ。自分自身が何者であるかの手がかりを得るため、アリーナの魔力の濃い場所を探してみよう。

「……。それにしても、行くにしたってアヴェンジャーが居ないと、私だけじゃ危険だし……。どこに行ったんだろ……。？」

何度か話しかけても、全く返事はなかった。ひとまず、アヴェンジャーを探す必要があるだろう。

私は、彼女が行きそうな場所を巡って、校内を探し始めるのだった。

白野と別れてすぐ、凜はもはや定位置となった屋上へと足を運んでいた。

特に目的はなく、あるとすれば全方位に見通しが利き、襲撃に備えやすいという立地を好んで、ここを半ば拠点としていたのである。

レジスタンスという職業柄、どんな時でも敵を警戒する、凜らしいチヨイスと言えるだろう。

「……………さて、さっき渡したアレが吉と出るか、それとも凶と出るか。

我ながら、えげつないコトしてるわね……」

白野に渡した品物は、確かに凜の説明した通りの効力を秘めている。凜は嘘はついていない。ただ、そのデメリットの全てを話した訳でもなかった。

「ずいぶんと物騒な品を渡したのですね、遠坂さん？」

不意にかけられる声に、凜は意外な事に身構えなかった。

というのも、最初から、屋上に来た時点でその気配が既に有った事には気付いていたからだ。

その声の主に殺気が感じられなかった。故に、さして警戒するでもなく、自分に何か用事でもあったのか、程度に捉えていたのだ。

「別に。私には使えないけど、あの子には必要そうだったから渡した。ただそれだけよ。それにあの子の正体がもし、私の想像する通りなら、特に問題も無いでしょうし。……というか、あなた誰？ 初対面よね？」

屋上の入り口、その上に腰掛けていた女。

凜は彼女を知らない。四回戦にまで残った者ならば、もはや運が良かったでは済まされない。すなわち、現状で残った者は白野を除けば全員が相当の実力を有している。

残っているのは凜を含め、ユリウスやレオといった優秀かつ名を馳せた魔術師ウィザードばかりであるはずなのだ。

だと言うのに、凜はその女性の事を知らなかった。顔も初めて見るほどである。

その女性は、その場を立ち上がり、一足飛びで凜の近くに着地すると、堂々とした態度で答えてみせる。

「はじめまして。私はレティシア。四回戦で岸波さんと戦う者です」「レティシア……？ ふーん、ま、いいわ。それで、私に何か用でもあったワケ？」

名前を聞いても、やはり凜にはピンと来ない。正体の分からない、という点では、目の前のレティシアという女も、白野同様に底が知れ

ない不気味さがあつた。

だが、レテイシアの纏う空気からは、不気味さなど微塵も感じられない。むしろ、温和な雰囲気醸し出してさえいる。

凜の問いに対しレテイシアは、ええ、と短く答える。そして、更に付け加えた。

「あまり岸波さんに危険な事をさせないで欲しいだけです。私は、彼女と決戦場で相対する必要があるからです。それまでに、私の与り知らぬ所で命を落としてほしくはない……それだけの事ですよ」

金髪の乙女は笑顔を崩さない。しかし、その笑顔には有無を言わせぬ圧力のようなものが微かに感じられていた。

凜も、それが分からぬほど鈍感ではない。

「……はいはい。分かっているわよ。別にあの子が私の今回の対戦相手でも無し。こつちから積極的に排除しに掛かるつもりなんて、ハナから無いっての。今のところは、だけどね。今回は単に疑問を解消したかっただけ。あの子もそれを望んでみたいだったし、ほら、ギブアンドテイクよギブアンドテイク」

「貴方に悪意が無いのであれば、それはそれで構いません。ただ、私も目的が有ってこの戦いに臨んでいるのです。どうか、その妨げだけはなさらぬようお願いしますね」

ペコリとお辞儀をすると、彼女はそのまま跳躍し、屋上から一気に下へと飛び降りていった。

その芸当だけで、レテイシアがやはりただ者ではないと、凜は認識する。

「レテイシア、ねえ……。あの子、変なのばかり呼び寄せるわね。……これも才能、かしら。うわ、私だったら要らないわー、そんな才能」

ともあれ、白野に渡したあの礼装が、果たしてどのような結果をもたらすのか。

それにより、『岸波 白野』という少女の正体に、少しでも近付けるのは確かだろう。

そしてその瞬間は、間もなく訪れる事となる――。

## 漆黒の瞳を持つ女

アヴェンジャーの姿を探して、校内のあちこちを見て回る。教室、購買部、図書室、教会、弓道場——色々を見て回ったものの、彼女の姿はどこにも見当たらない。マイルームにも戻っていないようだった。

そして、これは図書室に立ち寄った時の事だ。

アヴェンジャーが居ないかと足を運んだ図書室だったが、やはり彼女はここにも居ない。一体どこに行ってしまったのか。

パスがまだしつかりと繋がっている以上、確かに存在しているはずなのだが……。

何気なく本棚に目を向けた時、ある本に目が留まった。

背表紙は真っ白で何も書かれていない。

なのに……何故か妙に心引かれる。

本を手に取り、開く。そこには、こんな事が書かれていた。

——発端は前世紀に遡る。ある時、ある場所で人類は巨大な構造物を発見した。

アーティファクト  
『古代遺物』。

それは遙か過去から存在していた、人類外のテクノロジーによる古代遺物。後に、それは聖杯と呼ばれるようになる。

だが、当時の人類にはその正体、構造、技術体系を解析する事は出来なかった。

そして、現在でも、未来においてすら、解析する事は不可能だと言われている。

それほど、聖杯を構成する技術は人類のものとは異質だった——

「おや、あなたも、その本を発見されたのですね」



——いつの間にか、目の前に、レオとそのサーヴァントが立っていた。

「それは、ある一定のレベルに達したマスターに開示される、聖杯に関する情報を記したもののようです。まあ、僕の事はお気になさらず、続きをお読み下さい」

——レオの事は多少気になったが、聖杯についてはもつと、気になった。続きを読む事にする。

……というか、これが読めるという事は私もマスターとして、そこそこ成長してきた証なのだろうか。

——しかしやがて人類は、その遺物が、“何をしているか”だけは知るに至る。聖杯は、地球を見ていたのだ。

そして遙か過去から地球の全てを記録し続けていた。

全ての生命、全ての生態、歴史、思想——そして魂まで。

やがて人類は、聖杯とは全地球の記録にして設計図。地上の全てを遺した神の遺物であると悟った——

「地球上の全てを過去から記録している……？　これは……また途方もない話だね……」

今までぎつくりとしか説明されていなかったが、ムーンセルの実態が、あまりに想像の範疇を超えすぎていて、内容を咀嚼するだけで精一杯——

「驚いておられるようですね。ですが、それは聖杯に関する知識の、ほんのさわりに過ぎませんよ。ハーウェイは聖杯の構成素材など、もう少し詳しい情報を持っています。興味があればまた、ここへ来て下さい」

レオとサーヴァントは去っていった。

それにしても、この本に書かれている事が、ほんのさわり？

だとすれば、彼は何を知っているのだろうか？

結局、アヴェンジャーは見つからないまま、とりあえずアリーナの入り口に来てみたのだが……。

「……」

「アヴェンジャー！」

壁を背に、不機嫌そうにしかめ面をした彼女が立っていた。

探し人がようやく見つかり、たまらず私は駆け寄る。

「どこに行ってたの？ けっこう探して回ったんだけど……」

「別に……。ちよつと野暮用があっただけ。それより、早くアリーナに行くわよ。アイツはもう先に行っちゃわ」

そう言つて、アリーナの扉をアヴェンジャーは睨み付けた。まるで親の仇でも見るかのような、鋭利な殺意の込められた視線。

アイツ——とは、おそらく今回の対戦相手であるレティシアの事を指しているのだろうか……。

レティシア。アヴェンジャーと瓜二つの顔を持つ女性。

やはり、二人には何か関係があるのだろうか？

四回戦のアリーナ、『四の月 想海』。

第一層はやはり無機質な視界が広がるばかりだが、アリーナに足を踏み入れた瞬間、言い知れぬ違和感が全身を襲った。

「……？」

体に纏わりつくような、粘質な空気がアリーナ中に充満しているように感じる。

それどころか、誰かに視られているような気さえする。しかし、辺りに人の姿はどこにも無い。先に入ったというレティシアも、この近辺には居ないようだ。

アヴェンジャーも私と同じ事を感じたらしく、周囲に視線を巡らせ、危険がないか探っているようだった。

「このネバツとした嫌悪感、私の憎悪に負けず劣らずの質ですね。お

そらく敵のサーヴァントの何かしらの能力でしょう。……多分、アリーナに入った瞬間から見られてるわね」

それは——何とも厄介だ。こちらの動向が相手に筒抜けとは。

もし接敵したとして、私たちが突然の遭遇である事に対し、向こうは予め知った上での対面となる。

準備が出来ているかどうかで始まる戦闘の差は、明らかに大きくなる。

「警戒だけは怠らないようにしよう、アヴェンジャー」

「そんなのは当たり前。サーヴァントへの警戒は私がするから、アンタは雑魚エネミーにだけ気を張ってなさい」

アドバイスに従い、私は視界に映るエネミーのみに集中する。

勝ち進む毎にアリーナも様相を変えるが、一つ気付いた事がある。第一層の景色が単調であるのは相変わらずだが、その構造は回を重ねる毎に複雑化しているのだ。

前は特にその傾向が顕著だった。見えない通路が無数に伸びており、逃げるありすを追うのも苦労したものである。

さて、気合いを入れて、なおかつ気を引き締めて行こう——

「なにこのアリーナしんどすぎ……」

一通り走り回った感想というか、第一声が我ながら情けない。

というのも、今回のアリーナ第一層は入り組んではない。いないのだが、範囲が広く、加えて坂道が多いのが難点だった。

二回戦の時も坂道が多かったが、ここは広いし距離もそれなりなので、緩やかに、そして確実に体力消耗を強いてくる。

一周して分かったのだが、マップから見て折り返しと思われる地点で、二手に分かれる道があるのだが、それを外すともれなくマラソンをさせられる事になる。

事実、ありすを追いかけ走った以来の疲労感に襲われている真つ最中だ。

「……体力付いたほうだと思ったけど、まだまだねマスター？」

アヴェンジャーは警戒を解かないまま、呆れた風のため息を吐いていた。

「くっ……反論できない」

少し休憩を挟み、改めて分かれ道の先を進む。何も険しいのは道のりだけではない。

エネミーの猛攻もこれまで以上に激しく、一体倒すだけでも一苦労。聖杯戦争も既に四回戦であり、七回あるうちの折り返しにまで来たというだけあり、配置されたエネミーのレベルも伊達ではない。

幾度となくエネミーに苦戦しながらも、私たちは開けたエリアに到達した。

レティシアと彼女のサーヴァントの姿は未だに無い。だが、やはり違和感は継続している。

と、そんな時だった。

ある地点で、ポケットに入れていた凜からもらったペンダントが、仄かに熱を発したのだ。

おそらく、ここが彼女の言っていた、魔力の濃い地点だろう。

「――！」

光に近付くと、強烈な頭痛に見舞われた。だが、それもすぐに治まる。

「ちよつとアンタ、大丈夫なワケ!？」

「うん、ちよつと頭が痛くなっただけ。もう大丈夫」

アヴェンジャーに心配されてしまった。

だが残留魔力とやらとの接続、取得はこれで果たした。この結果を凜に伝えれば、何か自分のことが分かる……のだろう。

さて、あとはトリガーを手に入れるだけだ。レティシアが気になるが、さっさと回収して帰還してしまいたい――

「そうは問屋が卸さぬのだ。敵対者よ」

冷たい声が私の頬を撫でた。

いや、実際に触れられた訳ではない。声だけで、そう錯覚させられた。

声の先へ視線を向ける。

未踏の通路への入り口、そこに、いつの間にかレティシアと、そして和装に身を包み、生気の薄い顔をした女が立っていた。

いや、待つてほしい。私はさっきの考えを口に出していない。だといふのに、彼女は私の思考を読んだかのような言葉を発した。

何故――

「分からぬか？ 分からぬならば、分からぬままで良い。分かる必要もない。理解せぬままでいれば良い。妾はそれを望む」

完全に思考が読まれている。サーヴァントらしき女は、こちらに興味無さそうに、漆黒の瞳で見据えていた。

――否。その瞳は、こちらに向けられているだけで、私なんて映していない。

彼女は岸波 白野という存在を認識しながら、私などその眼中には無いのだ。

「ごめんなさい、岸波さん。彼女は私のサーヴァントなのですが、どうも人間嫌いのようでして。彼女の無礼はマスターである私の責任です。重ねて謝罪を」

そう言つて私に頭を下げるレティシア。

マスターであるレティシアは、サーヴァントとは真逆で、私に無関心ではないようだ。

……まあ、私と戦いたかつたと言つていたので、無関心な訳が無いのだが。

「……敵のマスター様が簡単に頭を下げてんじやないわよ。ムカつくわ、イラつくわ、気分が悪いのよアンタ」

アヴェンジャーがレティシアの対応に、いつもよりも噛み付いていた。だが、あのサーヴァントへの警戒は全く緩まない。

今まで戦つた相手のサーヴァントの事を知っているようだったアヴェンジャーだが、今回ばかりは違つていた。

まさしく未知の人物なのだ、あの和装のサーヴァントは。

和装……というには、かなり古い印象を受ける。口調も尊大で、しかし育ちの良さも感じさせる。

誰だ？ あの女性の正体は、一体何だ？

「話には聞いていた。そして仮初めの瞳で見てもいた。こうして直に目にするのは初めてだが……、ふむ。竜の魔女よ、貴様、なかなか面白い霊基を持っておるな」

「……ッ！」

感情の抜け落ちた冷たい声があヴエンジャーを包む。漆黒の瞳が、あヴエンジャーの魂すらも覗き込むように、その姿を捉える。

あヴエンジャーは、彼女の言葉に犬歯を剥き出し、強い憎悪の視線を以て応える。

「黙れ！ 知りもしない赤の他人に、私の事を語られるなんて腹の底から気持ち悪いのよ！」

「短気は損気と言うだろう？ やはり、反転しているだけはある。根幹は同じとて、他の全てが異なっているのだからな」

……反転？ 何を言っているのか分からないが、あの女性はあヴエンジャーの何かを見抜いているのは間違いない。

私ですら知らない、あヴエンジャーの隠している何かを。

もはや一触即発だ。いつ堪忍袋が弾けてもおおかしくない程に、あヴエンジャーの敵意が増大している。

このまま戦闘になっても、心を読んでくる相手に敵うとは思えない。

できれば戦闘は避けたいが――

「キヤスター、あまり相手を刺激しすぎないように。私は、岸波さんとお話したいのです。彼女と対面できた事ですし、今すぐ陣を解きなさい」

「……まあ、良からうて。そもそも妾は他者に興味が無い。マスターの道楽に付き合うてやったまですよ」

レティシアに諷められたサーヴァント――キヤスターが、パン、と軽く両手を合わせると、途端に空気が軽くなったのを感じた。

アリーナに入ってから、これまでずっとのしかかっていた違和感

は、完全に消えている。

やはり、敵のサーヴァントによるものと判明したが、まさかいきなりそのクラスが判明するとは――。

改めて、私はレティシアと向かい合う。

彼女は私と話がしたいと言った。その真意は分からないが、何かしら得るものはあるだろう。

「アヴェンジャーも、武器を下ろして」

「……チツ」

敵意はまだ収まらないが、アヴェンジャーを軽く下がらせる。対話するのなら、最低限の礼儀は必要だろう。

「それで、話って？」

「貴方に、少し聞きたい事があつたんです。岸波 白野さん、貴方が月の聖杯戦争で戦う目的は、理由は何ですか？」

再三に渡り悩んできた内容を、今度は他人から突き付けられる。

それこそ、私自身でさえ、まだハッキリとした答えを持ち合わせていないというのに。言えと言われても困ってしまう。

「それ、は………」

生き残るため。……本当にそれだけ？

最初はたしかにそうだった。訳も分からず、過酷な生存競争の場に投げ出され、無我夢中で駆けてきた。

記憶も無く、空っぽだった私も、三度の戦いを経て戦う意味を考えるようになった。

私は、何故この聖杯戦争に参加したのか。失われた記憶に、その答えがあるのかもしれない。

私は、素直にそれを、ありのまま彼女へと伝えた。

「……そうですか」

慈愛に満ちた表情で私の言葉を聞き届けるレティシアは、まるで聖母かのようにさえ見える。そう感じさせる神聖さが、彼女にはあった。

「まだ戦いに意味を見つけれられていないのですね。願わくば、決戦の刻限までに見出だせていただければ幸いです」

——調子が狂う。

何なのだろう、彼女は。目的、そして意図がまるで読めない。

普通なら、対戦相手に敵意こそ示せども、親身になる事などあり得ないはずだ。

だというのに、彼女からは今のところ敵意すらも感じない。成長を見守る保護者の立ち位置のつもりなのだろうか？

……それとも、記憶を失っているせいで、私は彼女と知り合いだった事を認識できないだけなのか。

頭を悩ませる私の隣で、相変わらずアヴェンジャーはレティシアを鬼の形相で睨んでいた。

「余計なお世話よ。コイツの面倒は私が見るの。部外者のアンタなんか口出しされる謂れは無いわ。それとも何か？　今ここで、その清ました顔を火で炙ってほしいワケ？」

「今は戦うつもりはありません。今日はひとまず顔合わせだけのつもりでしたから、私たちはこれで退散するとしましょう」

——行きましょう、キャスター。

そう言い残し、レティシアはどこかへ転移する。おそらくは、アリーナを出たのだろうが、何故か、キャスターと呼ばれた女だけはまだ留まっていた。

他人に興味が無いと嘯いたはずの彼女は、先程と同じく感情の籠らない漆黒の瞳で、私の全身をまじまじと眺めている。

ひとしきり観察し、満足したのか、彼女はくるりと身を翻した。体の動きに追従するように、長く伸びた髪が棚引く。瞳と同じ漆黒の色をした長髪は、まるで夜の帳とぼりそのものだった。

「他者への興味は無いと言うたな？　それは今も同じだが、岸波　白野、と言ったか。貴様はなかなか業の深い事よ。いや、それはそんな竜の魔女が為の要因か。貴様自身は気付いておるのか？　底知れぬ悪意を、貴様の影から感じるぞ——」

言いたいだけ言って、彼女もまた遅れてレティシアを追うように姿を消した。

……本当に、何がなんだか分からない。彼女の言葉の意味も。レ



テイシアの目的も。

そして私自身の事も。

対戦相手は完全に撤収してしまったようで、一気に緊張が解れる。と、同時に、疲れもドツと押し寄せる。

もう少してトリガーを回収できる所まで来ているのだろうが、残念ながら私の気力が尽きてしまった。

さつきまでの状況は、言わばマラソンの後で面接させられるようなものだ。流石にもう足が棒な上に、レテイシアの言葉が頭に重くのかかり、これ以上は足を動かせる気がしない。

私の状態を理解したのだろう、アヴェンジャーは何も言わず私をおぶると、

「……とりあえず今日は帰るわよ。ほら、さつきと端末からリターンクリスタル出しなさい」

ぶつきらぼうな物言いだが、何気にアヴェンジャーにおんぶしてもらうのは初めてだ。

もう少しこのまま堪能していたいところではあるが、後で大目玉を喰らいそうなので我慢する。

端末操作し、リターンクリスタルを取り出すと、私はそれを握り潰した。

視界が光に包まれていき、やがてアリーナの景色は完全に見えなくなり――

そして、校舎へと戻ってきた私たち。

日は既に沈み、ロケーションは夜へと突入している。

何も食べる気にならなかった私は、そのままアヴェンジャーに運ばれマイルームへと帰還する。

おんぶは流石に解除され、私は足を伸ばすと、疲労の溜まりきった足を揉みほぐす。

アヴェンジャーも甲冑をポイポイと脱ぎ捨てると、すぐさまラフな格好に。

しばらく足のマッサージを続けながらも、アヴェンジャーの様子を

見ていたのだが、まだレティシアたちへ向けられた怒りは治まってい  
ないようだった。

「マスター」

「ひゃいっー」

と、こつそり見ていた事がバレたのかと思い、思わず声が裏返るが、  
アヴェンジャーは特に気にせず続けた。

「あの女——キヤスターが言った事は気にしなくていいわ。それ  
と、私についてアレコレ詮索するのも無しで。時が来れば私から話す  
から」

「……うん」

「そ。なら、よろしい。それと、これは文句だけど、アンタは敵に対し  
て気を許しすぎ。私が離れてる時にも何かあったでしょう。大方、遠  
坂 凜に何か入れ知恵でもされたってとこ？ あのペンダント、何に  
どう使ったかは知らないけど、リスクを冒してまで使ったんだから、  
それなりの等価交換になるといいわね」

ついでに、「あまり期待しても無駄かもだけど」と要らぬ事まで言っ  
てくる。

茶々を入れられるくらいには、アヴェンジャーの心も平静さを取り  
戻しつつあるらしい。

果たして、あのペンダントで私の何が分かるのか。

一抹の不安が拭えないままに、私は疲労から来る睡魔には勝てず、  
いつの間にか眠りに落ちていた。

『岸波 白野』とは――？

／ふと、夢を見た。

ネット上に無数に散らばった、どうでもいい動画の一つを見ている気分。

それは以前にも見た光景だった。

聖杯戦争の予選を突破し、眠り続けたその時に。

倒壊したビルの群れ。そこいらで燻る炎と、立ち込める黒煙。およそ人の気配は無いが、屍ならば至るところで散見でき、血と硝煙の匂いが蔓延している。

まさしく、人も建造物も滅んだ、文明そのものが死んだ都市と言える。

では、これが思い出せない過去なのか。あるいは、失った過去。頭脳は破損しても、体に刻まれた遺伝情報は消えないように。

／嘆きの声が聞こえる。

何故。何故。何故。

何故、憎みながら、こんなにも焦がれるのか。

何故、悼みながら、こんなにも愛しいのか。

災害を、紛争を、多くの無慈悲な死を睨みながら。

「」は何故、この景色に臨んでいるのか。

この不合理に解答を。

答えがないのなら、自らの手で目覚めなければ。

記憶はいらぬ。

過去もいらぬ。

ただ戦えと。

今は、幾たび呼び起こす声を聞いた。

『人間なんて、所詮は他人を犠牲にしないと利益を得られない生き物だもの。だから、人間は他人が居ないと生きていけない。だから、憎かろうと他人に焦られる。

愛憎とは表裏一体。憎い他人を殺すために。愛する他人を生かすために。人間は、他人を必要とするからこそ、戦い、壊し、殺す。それこそが、人間が紡いできた歴史。……ああ、人間はどうしてこんなにも——醜いのでしょうか?』

……目覚めると、そこは見慣れたマイルームだった。

欠けた夢を、見ていたようだ。

……今のは……全く覚えも実感もないが、自分の過去の夢だった。それだけは、はつきりと断言できる。

気にはなる、のだけれど。しばらく頭をひねってみても、何一つとして思い出す事はない。

気にはなっても、どうしようもない。何かを思い出すまで、放っておくしかなさそうだ。

「何? 怖い夢でも見たワケ? アンタ、寝汗ですごい事になってるわよ」

もう起きていたらしいアヴェンジャーが、コップ片手にコーヒを飲みながら、私へと指差してくる。彼女の指先を追うようにして視線を胸元へと下げると、ブラウスが汗で張り付き、全身がしっとりとした嫌悪感で満たされている事によく気付く。

うつすらと下着まで透けていたので、慌てて胸を腕で隠した。

「何よ。別に女同士だし、気にするコトも無いでしょうに。それに、恥じらいなんて捨てたもん勝ちよ」

「なにその妙な持論。いや、いくら何でもブラが透けて見えるのはヤらしすぎるでしょう？ 私、別に痴女じゃないし」

アヴェンジャーのおおざっぱすぎる持論をスルーして、私は端末から替えの服を取り出し、アヴェンジャーには背を向けて着替え始める。こういう時、電子世界は楽に着替えを用意する事ができるので便利である。

着替えを完了し、アヴェンジャーが鎧を纏うのを傍目に、私も遅れて朝食を摂る。焼きそばパンを急ぎ口に詰め込み、最後は苺ミルクを一気に飲み干す。

アヴェンジャーが先に起きていた事もあり、彼女の仕度が終わるまでに、私も出られるようにしておかないと、後から文句を言われるからだ。

……詰め込みすぎて胸が若干苦しいが、とりあえず私も仕度は整った。見れば、アヴェンジャーも仕度を終えたところらしい。

「ん。それじゃ、まずは遠坂 凜の所に行くわよ。昨日の残留魔力<sup>レイズ</sup>とやらは、一体どんな意味があったのか。それで本当にアンタの何か分かるのか。それを聞きに行かないとね」

……そうだった。あれで何が分かったのかを確かめないで。

たぶん彼女は、いつもの場所に居るだろう。保健室のラニも気になるが、あの頭痛の意味を凜に聞かなくては――。

凜を探して屋上にやって来た。やはり、彼女はいつものように、屋上の端で空を眺めていた。

彼女に近寄ると、凜はすぐに私へと振り返る。別段驚く素振りもなく、「また来たか」といった面持ちだ。

「……あら。ここに来たって事は……揺らぎには行った？」

「うん。なんとか探し出したよ。データを取得した時に軽い頭痛はしたけど。あれって何だったの？」

「頭痛だけ、ですって……？」

私の言葉に、凜は明らかに動揺を見せた。が、すぐに何かを悟ったように、静かに私の眼を見つめ返してくる。

「……そう。何らかの不具合は出ると予想していたけど、まさかそれだけなんてね。あのペンダントは確かに、残留魔力を取得できるものよ。けど——実はね。ノイズの取得は、使用者の脳に大きな負担を強いるわ」

脳に……負担——？

それは、どれほどの負荷として、のしかかってくるものなのだろうか。そんな疑問も、凜はすぐに解消してみせた。

「生身なら意識の断絶、魔術回路が無ければ死に至るほどのフィードバックがある」

——！！

背筋が凍る。

では、あれは畏だったのか？ 私はこの少女に気を許しすぎて……。

——いや、違う。

確かに私は昨日、ノイズとの接続を行った。しかし、こうして生きている。

これは——どういうことだ？

彼女が冗談を言っているのか？

私の胸中で渦巻く疑念は暗れる事もなく、更にトドメの一撃であるかのように、凜は爆弾を落とした。

「これで決まりね。あなた、普通の魔術師じゃないわ。下手すると、人間ですらないかもね」

「……何、て」

彼女は今、何と言った？

頭はまるでごちゃ混ぜにされたように、全く思考がまとまらない。胸が苦しい。呼吸は無意識に乱れ始めている。

茫然と立ち尽くす私に、凜は鋭い言葉の刃を尚も突き付ける。

「あなたは人間じゃないって言ったの。少なくとも普通の人間じゃな

い。脳改造か、あるいは半身半妖か。あのホムンクルスの娘と同じ。まっとうな生い立ちじゃないわね。あなたがこの世界へ来た時のこと、本当に何も覚えていないの？」

「分らない。ただ——」

「そう、身に覚えのない夢を見たような……」

「ただどしくはあるが、それを凜に伝えてみたところ、彼女はまた訝しいとばかりに、私を睨み付けた。」

「夢？ 電腦世界へ来た時に？ ありえない。だって理論的には、靈子ダイブそのものが夢と同じカテゴリなのよ？ ……夢の中で夢を見る、とか。まったく、どこまで謎の存在なのよ。アンタ」

「それだけ言い残して、遠坂 凜は去っていった。」

「通常の魔術師ではない？」

「まっとうな人間ではない？」

「まったくの他人事だ。」

「何故なら、私はそんな大げさな者ではない。記憶は無くとも、その事実だけは、はつきりと断言できるのに——」。

「自分の事がようやく分かると思った矢先に、私はまた自分自身が何なのか分からなくなった。」

『私』とは？

岸波 白野とは？

「一体、私の正体は何なんだろう……？」

結局、あれから私は自分が何者なのかという終わらない自問自答を続け、気付けば図書室の入り口前に立っていた。

「考えはまとまらず、自分に関する手がかりすらもまた闇の中へと消え、そしてふとレオに言われた事を思い出した。」

「聖杯戦争について、詳しく教える事が出来る。レオはそう言っていたのだ。」

「失った自らの手がかり、その喪失感を無意識の内に埋めようと、新たな知識——聖杯戦争という、未だに私の中では不確かである事柄——」

―を求めてここに辿り着いたのかもしれない。

図書室に入り、あの本を見つけた本棚の所まで向かう。すると、レオはそこに居た。まるで、私がここに来る事が分かっていたとでも言うように、彼は私を見かけると微笑みかけてくる。

「ようこそ、岸波さん。では、何をお聞きになりますか？」

私が口を開くよりも早く、彼はさも当たり前とばかりに、先に問いを投げ掛けてきた。なんだか、こちらの事が見透かされているような気分になるが、あえてそれには触れず、私は順に聖杯戦争について、その詳細を聞いていく事にした。

「そもその始まり、聖杯が見つかった経緯を知りたい。教えてくれる？」

「……発端は前世紀に遡ります。ある時、人間は巨大な構造物を観測、発見しました。遙か過去から存在していた、人類外のテクノロジーによる古代遺物を。それが聖杯——ムーンセルです」

前世紀……と言えば、有名どころだとファラオの下で栄えたエジプト文明や、人類最古の英雄王と称されるギルガメッシュ王が治めたバビロニアなどが時代としては当てはまるだろうか。

そんな、途方もなく昔から、このムーンセルは存在していたというのか。

「しかし、当時の人類には、その正体、構造、技術体系を解析する事は出来ませんでした。……いえ、現在でも、おそらく未来においてすら、解析する事は出来ないでしょう。それほど、ムーンセルを構成する技術は異質だったのです」

ムーンセルが人類外によって設置されたという話も頷ける。この電子の海を形作り、そこにデータ化した人間の魂を無数に招き入れた状態で、私たちの行動全てにおいてエラーすら起こさず運営しているのだから、オーバーテクノロジーどころの話ではない。

まだ霊子ハッカーも存在していないだろう古代に、ムーンセルという地球外の超大遺物を発見出来ただけでも、人類にとっては御の字と言えるだろう。

「ですが我々は、その機械が“何をしているか”だけは知る事が出来



ました。……ムーンセルは、地球を見ていたのです。瞬き一つせず  
に。そして遙か過去から、地球の全てを記録し続けていた。全て生  
命、全ての生態。歴史、思想——そして魂まで」

「魂、まで……、」

「ムーンセルとは、全地球の記録にして、設計図。七つの階層を持つ神  
の遺物。故に、人々はこう呼んだのです。奇跡の聖杯。この世の全て  
を解き明かす、セブンスヘブン・アイトグラフ 七天の聖杯と」

地球のこれまでの全て、そしてこれからの全てを観測し続ける——  
それはまさしく神の眼だ。

地球の全てを記録しているというのなら、ムーンセルならば私の失  
われた記憶についても記録しているのではないか？

ムーンセルにアクセス出来れば、私の記憶を取り戻せるのかもしれ  
ない。……その手段が有れば、の話なのだが。

「さて、聖杯発見の歴史については以上です。他に何か聞きたい事は  
ありますか？」

レオはまだまだ語り足りないようで、私なんて話に付いていくだけ  
でも大変なのに、彼は涼しい顔をしている。これが才能の差という事  
か……。

「それじゃ……、聖杯の素材、とか？」

「ふむ。素材、ですか。聖杯の材質自体は、地球上にもある物です。そ  
して、それが判明した時、僕たちは認めざるを得なかった……。それ  
ならば——その構造なら、全てを記録出来る」と

地球上に存在する物質で構成されているというのは意外だったが、  
それとは一体……？

レオの口振りからするに、人類に加工出来るような代物では無いと  
は想像出来るのだが。それが何かはまるで分からない。

「それを最初に発見したのは、巨人の穴倉——アトラス院でした。や  
がて、それは我々ハーウェイやトオサカリンの所属する組織などの知  
るところとなります。聖杯は、人類文明では考えられないほど、巨大  
なフォトニック純結晶で構成されたものなのですよ」

フォトニック純結晶……？

あまり聞き覚えのない単語だが、それほどまでに凄いのだろうか。「フォトニック結晶はナノ単位の治療により、光そのものを閉じ込められる鉱物です。その処理速度、記憶容量は、他を圧倒する。ハイウェイでも研究を進めています。未だ1センチにも満たない筐体きょうたいを作るのが限界という状況です。アトラス院は、もう少し大きなものを開発したようですが、それも3センチ角がいいところ……」

西欧財団やアトラス院ですらも容易に加工出来ない鉱物。それが聖杯の素材として使われている……？

いよいよ現実味が薄れてきた。ならば、一体聖杯とはどれほどの量のフォトニック結晶を使用しているのだろうか。

私の視線から、それを察したらしいレオが続きを語る。

「——けれど。ムーンセルの中核……いえ、聖杯は、そのフォトニック結晶そのものだった。聖杯とは、全長三千キロメートルものフォトニック結晶を利用して作られた、光を媒介にした演算・記憶回路。情報はおろか、情報を管理する筐ですらも光で構成された、高次元のシステムなのです」

三千、キロ……!?

アトラス院ですら3センチがやっとだというのに、ムーンセルはそれとは比べ物にならないほどの巨大さという事だ。

現代においてやっと到達したその最大値を、ムーンセルは嘲笑うかの如く遙か遠く上回る。人類では届かない神の領域。

異星のテクノロジーと呼ぶ他ないのも仕方ない。おそらく、人類にそこまで到達出来る未来は無いだろう。

「地上全ての資源を使っても釣り合わない、規格外のスーパーコンピュータ……。神の頭脳、と言われるのも当然です」

だからこそ、魔術師ウィザードたちは、それを求めてここにやってきたのか。勝者には栄光が——などといった生ぬるいものではなく、文字通り、この世の全てを手にしたも同然と言うべき賞品が与えられるのだ。

だからといって、私は死ぬ危険を冒してまで、聖杯を手に入れたとは思えなかった。

私には何かが欠落している。そんな気がしてならない。その欠落こそが、失われた記憶なのかもしれない。

「まだ時間に余裕がありますし、他にはありませんか？ 無ければ、僕の方から言いましょうか」

だんだんヒートアップしてきたのか、レオの言葉に熱が籠り始める。私が聞くまでもなく、レオは次の内容を話し始めた。

「では、聖杯の在処についてを語りましょう。聖杯の在処が分かった時、人々は、こぞって、そこへ到達しようと思いました。しかし、我々西欧財団は、それを差し止めた……。それほどの物がハーウェイ以外の人間の手に渡ると、無用の混乱を呼ぶと考えたからです」

なんともまあ、傲慢な……。だが、それも実力有ってこそ、か。凜から聞いた限りでは、西欧財団は地球上での最大勢力であるようだし、彼らからしてみれば、それが当たり前であり、普通であり、正しき在り方なのだろう。

なんとなく、凜がハーウェイを嫌っている理由が分かった気がする。

「ハーウェイは新しい技術開発を規制した。それは人類にはこれ以上のテクノロジ―は必要ない、という判断からですが——同時に、物理的に聖杯に至る手段を封じる為でした。率直に言えば宇宙開発です。そう。地上から38万キロの彼方にある衛星——月が、聖杯そのものだという事です。……ムーンセル、というくらいですから、知らなくても想像がつくでしょうが」

月。地球の衛星であり、夜の象徴。  
なんとなく納得がいく。地球全てを観測するならば、地球の全てを観測出来る位置として、地球の衛星であるという事は理に適っている。

一点に留まらず、地球の隅々にまで目を届かせる為には、衛星軌道に乗るのはもってこいだろう。

さて、そろそろ話が長引いてきたし、次の質問で最後にしよう。

このムーンセルに関して、最も私が知りたい内容。何故、こんな命懸けの戦いに臨んでいるのかという、一番の謎でもあった、この戦い

「聖杯戦争って、一体何なの？」

「そうですね……。我々西欧財団は、聖杯を知った時点で、何人も辿り着く事が出来ないよう、宇宙開発を規制しました。しかし、抜け道があった。それが霊子ハツカーによる侵入です。いえ、人類はずっと昔から、ムーンセルとコンタクトをとっていた。霊体、意識として、その内部に招かれていたそうです。おそらくは……ムーンセルにとって、人の精神だけは、観測出来ないものだからでしょう」

それは……確かにそうかもしれない。幾らムーンセルが地球の全てを観測し、記録するとしても、人々が何を思い、何を考えているかなど、分かりようがない。

行動の結果は分かっても、それに伴った人の心、感情の揺らぎまでは読み取れないのだろう。

「あらゆる自然現象を観測出来る聖杯も、形而上のものは観測出来ない。だから逆に招き入れて “教えてもらう” 事をムーンセルは選んだのだと、僕は考えています。……こうして、魔術師と呼ばれる者たちだけが、ムーンセルに触れる事になりました。ハーウェイによる管理を受け入れる事なく。そして、ここは、そんな魔術師たちとの接触用にムーンセルが作り上げた霊子虚構世界。serial phantom——通称S.E.R.A.P.H」

何度も耳にした名前だが、こうして改めて聞くと、自分の場違いさも浮き彫りになるような気がする。こんな壮大な話の中に、何故私は足を踏み入れてしまっているのだろう、と。

「聖杯戦争とは聖杯に進入した魔術師たちによる、聖杯の奪い合い。その目的は世界を——いいえ、世界に变革をもたらす古代遺物、ムーンセル・オートマトンを、管理下におく事なのです」

レオは言い終わると、満足したように息を吐き、再び私と視線を交差させた。

「おおよその説明は以上でしようか。まだしはらくはここに居ますので、また聞きたくなればお越し下さい」

では——とだけ言い残して、レオはさっさと本棚へと向かって行っ

てしまった。貴重な時間を割いてまで、私の為に説明してくれた事に感謝するが、それにしたつて内容があまりにも深すぎるため、頭の中を整理するだけで精一杯だった。

気を紛らわしたかったからこそ、レオの元へと話を聞きに来たはずなのに、今の話を聞いて余計に頭が痛くなる。

どうして私は聖杯戦争なんかに参加したのだ。

結局のところ、私は私が何者であるのかという問題から目をそらす事は許されないのだと、改めて思い知らされたのである。

重い頭を抱えながら、同じく重い足取りで保健室へと私はやってきた。目的は言うまでもなくラニに会うためだ。

昨日と同じようにそっとカーテンをめくり、ラニのベッドサイドに行く。

ラニは目を覚ましていた。その目は昨日と変わらず何も映さず、体は起こしてこそいるが、身じろぎもしない。

しばらく黙ってラニの顔を見つめていると、彼女は不意に口を開いた。

「壊れた道具を眺めていて、楽しいですか？」

——道具？

ラニの台詞が気になったが、言い返しができず、黙って彼女の言うに任せる。

ラニは、こちらの意を察してか、そのまま言葉を続ける。

「私は聖杯を得るために生まれただけに生まれた道具。師のために聖杯を得る。そのためだけに生きてきました。でも、私はその目的を失った。だから、ただの壊れた道具。塵は塵に、星は星に還るが宿め」

淡々と、抑揚も無く語る彼女の目からは、生気がすっかり消え失せていた。

己をただの道具だと言い、聖杯戦争の資格と共に、生存の理由さえ

も失ったと語る彼女。

それを見ていて、一つ聞きたくなくなった。

彼女の師と言う人は、一人の人間を、ただ聖杯を手にするためだけに育て上げたというのか？

それでは、あまりに彼女の意思が存在しないではないか。

「ラニ、あなたの言う師って、あなたにとってどんな人なの？」

「——師、ですか？ 師は、私の全て。この世に私を生み、慈しみ、知識を授けてくれた。その師が聖杯を欲するのであれば、私はそれを叶えるだけ。それが、私の存在理由だから」

——じゃあ、ラニは聖杯に何を願うのか。

命を懸けて、師のために尽くして、ラニの願いは何も無いのか。

ラニの言葉を聞いていたら、何だか無性に腹が立った。師が死ぬと言ったら、この娘はきつと、そうするのだろうか。

「これで分かりましたか？ 私にとって、師の言うことは絶対です。

あなたには関係の無いこと」

初めて、ラニが言葉を荒げる。感情らしいものが少し言葉に乗り、その目にうつすらと光が宿る。

「出て行って下さい。そして、私にはもう——構わないで」

昨日の拒絶とは、明らかに少し、違った。

もし……この娘の心を開けるのであれば、それが少しでも助けになるのなら、明日もここに来てみよう。

その行為が自己満足なのだということは分かっている。そして、自分は何者か分らないという悩みから逃避するための口実であるとも。だが、それでも、私は保健室へと通い続ける事を止めない。

それが「助けた」者の役目かもしれないから。

だから私は、何度でも彼女に会いに行くのだ。

## 午後は優雅なお茶会を

「結局、何も得るものは無かった訳だけど。はあ、呆れた。無駄に踊らされただけじゃないの」

アリーナに降り立ったと同時に、先程まで全く口を挟んで来なかったアヴェンジャーだったが、開口一番にため息と共に愚痴をこぼした。

「……そうだね」

「……………、ああもう！ 少しは反論くらいしなさいよ！ 分からないのに変わりは無いけど、代わりにアンタが普通じゃないって事は分かったでしょう!? ヒントも何も無いけど、もしかしたら、それこそアンタの正体に繋がる重要なフアクターかもしれないとは思わないワケ!」

離し立てるように、捲し立てるように、アヴェンジャーは弱気な私に怒号を飛ばす。その苛つきは彼女の言葉だけでなく、表情や雰囲気からも伝わってくる。

悲嘆なんてしてる暇はない。そんな暇があるなら、その余力を次に活かせ、と遠回しにはあるが、彼女なりに檄を飛ばしてくれているのだろう。……多分。

「まあ、ともあれ今は、この戦いを勝ち残ることに集中しなさい。癪だけど、本当に癪に障るけど！ 恐らく、この四回戦は私たちにとって最大の鬼門となるわ」

初めての事に、私は少し面食らう。

だって、辛辣に人を見下す傾向にあるあのアヴェンジャーが、過剰なまでに今回の対戦相手を高く評価しているのだ。

いや、高く評価しているというよりは、強く警戒していると言ったほうが正しいかもしれない。

でも、どっちにしたって珍しい事に間違いない。

私は驚いた顔を隠せていなかったのか、アヴェンジャーはより機嫌を悪くしたように、こちらを睨んでくる。

「……何よ、何か言いたげな顔をして」

「いや、珍しいなって。アヴェンジャーがそこまで警戒する相手って、これまで居なかったから」

ありすの時ともまた違う感じだ。あの時は、アヴェンジャーはありすやキャスターという存在そのものに驚いているように見えた。

けど、今回はそうじゃない。アヴェンジャーは最初から、敵としてレイシアとそのサーヴァントを意識しているし、初対面からその敵意は非常に強いものだった。

それは、慎二やダン・ブラックモアと戦った時とも違い、レイシアに向けるのは濃厚な殺意と憎悪を、必要以上に煮詰めたモノというか……。

とにかく、今までに無い程までにドス黒い負の感情を、アヴェンジャーはレイシアたちに対して抱いているように感じた。

そんな相手を、見下すのではなく強く警戒する発言のみに留めている事実には、私は違和感を抱く事を禁じ得なかった。

「警戒ね……。そりやするわよ。あのマスターが本物かどうかは知らないけど、アイツのサーヴァント——キャスターが誰なのかを私だつて知らない。これまでは私は知ってて、アンタは知らない英霊ばかりだったけど、今回ばかりは勝手が違う。私も、本気で真名明かしに臨む必要があるし。それに、あのキャスターからは……私に近い何かを感じる」

アヴェンジャーに近い何かを持つ、謎のキャスター……。

あの姿から推測するなら、日本の英霊。それも巫女なのではないかと思う。前に推察したように、日本の古い時代を生きた巫女ではないだろうか。

キャスターであり、日本の出身であり、巫女である英霊……。後ろ二つは私の勝手な推測なので、まだハッキリした事は言えないのだが。

キャスターが西洋の英霊で無い事だけは確かだろう。顔付きが西洋のソレとは全く違うのだし。

とりあえず今日は、昨日は取得できなかったトリガーの入手を第一



としよう。幸いにも、今のところはサーヴァントの気配は感じられない。

また遭遇する前に、早くトリガーを手に入れなければ……。

警戒しながら進む私たちだったが、思いの外あっさりと目的地にまで辿り着く。エネミーの強さが階層を進む毎に上がり、容易に倒せないくらいには道のりも険しくなってきたが、それだけだ。

進めど進めども、レティシアたちが現れる気配は一向になかった。「この静けさが逆に不気味ね。……エネミーどもは、わんさかと湧いて出てたけど」

確かに、と同意しつつ、私はトリガーが収納された緑のアイテムフォルダに手を伸ばす。

——、無事に『トリガーコードイーター』を手に入れる事ができた。ひとまず、先延ばしにした課題はこれで達成できたので、少し安堵できるというものだ。

今更ながらではあるが、これまで取得してきたトリガーの名前を見ていて、繰り返すが私は本当に今更ながら気付いた。

最初から順に、『アルファ』、『ベータ』、『ガンマ』、『デルタ』……と、トリガーコードにはギリシヤ文字があてがわれているようだ。

聖杯戦争は全七回戦である。ならば、今しがた手に入れたトリガーコードでちょうど半分は取得した事になる。

ここが、本当の意味で、長きにわたるこの聖杯戦争の折り返し地点。私は、ようやく半分まで歩んで来れたのだ。

だが、残り半分は、これまで歩んできた半分よりも更に過酷である事は間違いない。

残っていくのは、より強き者たちのみ。故に、戦いは苛烈さを増していくのは必然なのである。

「いよいよ半分、だね。でも、まだ残り半分でもある」

「そうよ。なに？ アンタも分かってきたじゃないの。聖杯戦争も後半戦に入って、ようやくマスターとしての自覚が芽生えてきたってところ？」

からかうように、悪戯な笑みを浮かべて私に軽く肘打ちしてくるアヴェンジャー。ちなみにアリーナでは、当然の如くフル武装しているらしいのだが、その事を彼女は忘れているのだろうか？

その肘打ちは、鎧が当たって地味に痛いので止めてほしいと切に願うばかりだ。

「さて、目的は果たしたのだし、今日はもう帰りましょうか？ エネミーは狩り尽くしたみたいだし、それにアイツらが来るまでいちいち待つてられないっての」

レテイシアとの遭遇に身構えていた分、肩透かしを喰らった気分だが、確かに彼女をただ待つていただけなのは時間が惜しい。

限られた猶予期間だし、大事に消費すべきだろう。

「じゃあ、帰ろうか」

少し疲弊している事もあり、私はリターンクリスタルを使ってアリーナから帰還する。帰り際にレテイシアと遭遇して、最悪そのまま戦闘になるのだけは避けたかったからだ。

相手の手の内も分からない状況に加え、こちらが消耗している状態での戦闘は、下手をすれば決戦日を迎える前に敗退決定してしまう恐れがある。

……まあ、単純に疲れたから楽をしたかった、というのが大きな理由でもあるのだが。

「そんな訳で、お茶会をしましょう！」

いや、どんな訳で!?

朗らかに笑うレテイシアに両手を握られ、私の頭はカオス神に見初められたが如く混乱を極めていた。

というのも、アリーナから帰還した直後、アリーナの入り口で待ち構えていたらしきレテイシアに捕まってしまったのだ。

レテイシア曰く、

『お茶会を開けば、互いの事を理解し合えるのです。私の友人もお茶会を開いては、相互理解を深めていました(多分)。なので、私たちもお茶会をしましょう!』

とのお達しである。

レテイシアの勢いに押され、私は断るタイミングを逃してしまった。それを肯定と踏んだのか、ぐいぐいと引っ張られていき、連行された先は教会前の噴水広場だった。

簡易的のだが、テーブルと四つの椅子が用意されており、既にキャスターは腰掛けて待ち構えていた。

「……ふむ、ようやっと来よったか。少しばかり待ちくたびれたぞ」

ズズツとお茶を啜りながら、キャスターは前回と変わらない、感情の籠らない漆黒の瞳を私に向けていた。

私が連れ去られて間もなく、追いかけてきたアヴェンジャーも到着し、すごい剣幕でレテイシアから私を引たくる勢いで引き剥がす。

「この人拐いが! アンタどこまで頭ぶっ飛んでるワケ!? 第一、お茶会とか何を呑気な事を抜かしてるのよ!? アンタとコイツは殺し合う! 殺す相手と仲良しこよしとか、脳ミソ沸いてんじやないの!?!」

「いいえ。もちろん、仲良くしたいとは思っていますが、それだけじゃありません。私が本当にしたいのは、他でもない、貴女を問い質す事ですよ、アヴェンジャー?」

さつきまでの和やかな様子が一変、レテイシアは強い意志の宿った目で、アヴェンジャーを見つめていた。

それに呼応するように、急に辺りの空気が重くなったように感じた。静寂に支配され、噴水の音だけがやけに耳に響く。

人の声は無く、校舎からも賑わいは聞こえない。人が減ったとはいえ、NPCだって校舎には居て、多少は活動音が聞こえてもいいはずなのに、だ。

「不思議そうな顔をしておるな、岸波白野。何故、これほど静かなのか、それが気になるのだろうか?」

そんな疑問に、聞いてもいないはずなのにズバリ言い当てたキャス

ターに、私はギクリという音が聞こえるのではないかと思うくらい驚き、視線が彼女に向かう。

相変わらず瞳に感情が感じられないが、その口元は微かに緩んでいるように見えた。

「別に減るものでも無し。教えてやるとも。なに、これはこの周囲に結界を張っただけの話よ。お主らが来た時点で、結界と同時に人払いも掛けてある。魔術師どもには効果が薄かろうが、NPCどもは気付くまい。他者に聞かせたくない話をする分にはこれで十分よ。多少の気休め程度にはなるであろうさ」

とても饒舌に語るキャスターを見て、以前に彼女が言っていた言葉を思い出す。

他人には興味が無いと、彼女は言っていた。であれば、この手の話題こそがキャスターにとって好物なのだろう。何というか、如何にもキャスターというクラスらしいと言えらばらしい性格をしている。

そんな私とキャスターのやりとりを見向きもせず、アヴェンジャーはレティシアと睨みあつたまま動かない。レティシアもまた、アヴェンジャーと同じような状態だった。

これでは埒が明かない———と思つた矢先、レティシアの纏う空気が軟化し、彼女は自らのサーヴァントの隣席へと腰掛けた。

「せっかくこうして席を設けたんです。どうせなら座つて話をしましょう？　名目上、お茶会なんですから」

そう言つて、空いた席に座るよう勧めてくるレティシア。相手はキャスターという搦め手を得意とするサーヴァントを従えており、普通に考えて何らかの罫であるという可能性が高い。

しかし、当人であるキャスターは我関せずとばかりにお茶菓子にも手を伸ばしており———振る舞いが上流階級のそれである事は容易に理解できる———菓子を黙々と食べていた。

「案ずるな。妾は何も仕掛けておらぬ。マスターが手を出すなど喧しいのでな、この茶と菓子で丸め込まれてやった」

……本当に、彼女<sup>キャスター</sup>は人の心が読めるのだろうか。

彼女が嘘を言っているようには見えないし、レティシアもうんうん

と頷いて、座るよう促してくるので、諦めて彼女らと対面する形で席に着いた。

「ほら、アヴェンジャーも」

「チツ。……言っておくけど、何も答えるつもりはありません。黙秘権を主張しますので、お生憎さまね」

渋々ではありながら、ドカツと態度悪く乱暴に椅子へと座るアヴェンジャー。機嫌の悪さは最高レベルにまで達していそうだ。

後が怖い……。どうかマイルームで八つ当たりされませんようにと祈りつつ、私はアヴェンジャーと共に、レティシアたちへと向き合う。

「では、お茶会を始めましょうか。岸波さんは紅茶でよろしかったですか？ 購買で色々と仕入れてきたので、お菓子もありますよ」

言つて、レティシアは端末からお菓子を呼び出すと、山のような量の菓子が小さな丸テーブルと共に出現した。

おおよそ、女性一人が食べていいような量では決していない。カロリーを気にする女子なら、これは麻薬にも等しい禁断の誘惑と言える。

電脳世界では太らないという過信故の爆買いなのだろうか。そんな疑問を抱きつつも、私は紅茶とクツキーをいただく事にした。

「紅茶ですね。クツキーは自由にお取り下さい。それと、食べきれずに余ってしまったても構いませんよ。後で私が美味しくいただきますので」

え？ 値段にして軽く1万P.T.T（現実換算しておおよそ3万円分ほど）に届くのでは……くらいの量があるのだが。これを一人で……？

細い体の何処にそんな量が入るのかと、軽い衝撃を受ける私を他所に、アヴェンジャーは鼻で嗤い、キャスターは素知らぬ顔で茶を飲んでた。

「うちのマスターがそんなバカみたいな量を食べられるはず無いじゃない。これだから、脳ミソの隅から隅までお花畑なヤツは嫌いなんだよ」

「あら？ 黙秘するのではなかったですか？ ですが、こちらとしても会話してもらえただけで助かりますが」

「……ツチ」

ニコツ、とレティシアはアヴェンジャーへと微笑んだ。皮肉とか、そんなのではなく、心の底からありがたいと思っているのだろう、穢れなき笑顔だと感じた。

アヴェンジャーは「しまった」とばかりに、あからさまな悪態を見せる。もしかすると、アヴェンジャーよりもレティシアのほうが舌戦では一枚上手かもしれない。

「で、結局どうしてこんなお茶会を開いたの？　今回は私じゃなくて、アヴェンジャーに用があつたんだよね？」

こちらとしては、アリーナ帰りから直ぐ様ここに連行され、本音を言えば早くマイルームに戻って休みたいところだ。

しかし、対戦相手であるレティシア当人から、この戦意無き誘いを受け、まさしく彼女らの情報を得るまたとない機会でもある。

疲労は有るが、ここは無理を押しでも通るべき局面だろう。

私の問い掛けに、レティシアは微笑みを崩す事なく、事も無げに答えた。

「岸波さんが月の聖杯戦争に臨む理由は既に聞きました。記憶を失ったが故に、今はただ生き残る為だけに貴方は懸命に戦い続け、そして生き残ってきた。確固とした目標が無くとも、それは素晴らしい結果と言えるでしょう」

飾りの無い賞賛に、私は少し顔が熱くなる。比例するように頬は赤らんでいる事だろう。

——けれど。

彼女はそう前置きをして、アヴェンジャーに向き直る。その顔からは微笑みは消え、それこそ糺すように彼女はアヴェンジャーを見据えて、言の葉を紡ぐ。

「アヴェンジャー。貴方はどうですか？　貴方は何故、この月の聖杯戦争に参戦したのです。岸波さんと違い、貴方は記憶を失ってなどいないでしょう？　貴方は自らの意思でこの戦場に立っている。何故、この戦いに臨んだのか。私はそれを貴方の口から聴きたかったのです」

アヴェンジャーと瓜二つの少女は、アヴェンジャーにとってこの戦いがどういう意味を持つのか。どんな願いを胸に戦うのか。それを問い質す。

ただ真摯に。どんな答えであろうとも、それがどんなに自分勝手に愚かしくとも。アヴェンジャーの答えを、ありのままを受け止めようとしている。そんな純粹かつひたむきな気迫を感じた。

その時、私にはレティシアがまるで聖女であるかのようにさえ見えただ。

錯覚である事は分かっている。だけど、そう思わざるを得ない貴さを、私は目の当たりになっているのだ。

アヴェンジャーはその問い掛けに対し、レティシアに呪いでも掛けるかのような目で一瞥し、すぐ視線を逸らす。

直後、視線は逸らしたままで彼女は口を開いた。

「何の為に戦うか、ですって？ それをアンタが私に聞くワケ？

ハッ！ 馬鹿にするのも大概にしろ。どうせ聞くまでもなく分かってんでしよう？」

「それでも、です」

「……チツ。……私はね、私自身の手で私を上回る。贋作が真作を哀れみながら見下す様を、世界に見せ付けてやるだけよ。そら、これで満足？ ならいい加減、この甘ったるい空間から帰らせてもらおうよ」

もう用は済んだのなら、早く帰らせろと宣うアヴェンジャーだったが、私はそうは思わなかった。だって、今の発言を聞いた私は、彼女とは全然違った心持ちになったから。

まるで、自分が贋作とでも言わんばかりの台詞だ。その言葉に、私は明確な違和感を覚えた。

アヴェンジャーが贋作、偽物だとして、彼女にとっての本物が何処かに居る？

いや。何処か、ではない。

目の前。アヴェンジャーと瓜二つな少女が、此処に居る。

本当に、二人は他人の空似なのか？

そんな言葉で簡単に終わらせてしまっただけは良くないだろう。だって、この二人のやりとりは私の心をざわつかせる。

昔から知っているよう口振り。互いが初対面ではなく、少なくともアヴェンジャーはレティシアを嫌う程度には、その人となりを知っているのだ。

こと此処に到って、初めて私は、自分のサーヴァントの正体不明さによろやく悩まされる事になる。

——アヴェンジャー。復讐者のクラスを戴くサーヴァント。『竜の魔女』を自称する貴方は、一体誰なの……？

「それが、貴方の答えなんですね。アヴェンジャー」

私が自らのサーヴァントへの猜疑心に取り憑かれているとも知らずに、レティシアは穏やかな視線でアヴェンジャーを見つめていた。それは、可愛い妹を見守る姉のような、そんな暖かさを感じる。

「……いいでしょう。貴方の目的は分かりましたし、これでお茶会はお開きでも構いませんよ。もつとも、まだまだお茶菓子は残っているので、好きなだけ召し上がっていただいてから帰ってもらっても良いのですが。岸波さんも遠慮なさらずに。アヴェンジャーも——」

どうですか？ と、レティシアが聞くよりも早く、彼女はさつさと霊体化して姿を消してしまっていた。

そういえば、いつの間にか異様なまでの静けさは消え、校舎からちらほらと話し声が聞こえてくる。

おそらく、話が着いたタイミングでキャスターが結界を解除したのだろう。

「逃げられてしまいましたね。残念、もつと他愛ない話もしたかったのに」

そう不満を口にするレティシアは、本当に残念そうにしている。きつと、本心からの言葉なのだろう。

寂しそうに紅茶を啜る彼女を見ると、なんだか席を立ち辛い。アヴェンジャーはもう居ないだろうし、私も追うべきなんだろうし



ど、それより先にここでしなければならぬ事がある。

「レテイシア。あなたは、アヴェンジャーがどんな英霊なのか知ってるの？ それに、どうしてあなたとアヴェンジャーは同じ顔をしているの？ 所々は違うけど、どうしても私はあなたにアヴェンジャーの面影を重ねてしまう」

レテイシアがアヴェンジャーにしたように、私もレテイシアを問い質す。たとえ納得のいく答えが返って来なくとも。私にはその権利と、義務があるはずだ。

私の問いに対し、レテイシアは静かに、そして困ったように微笑んだ。

「……なるほど。という事は、あの子は岸波さんに自分の真名を告げていないんですね。うーん、だとすると、おいそれと私が語って良い事でもありませんし、どうしたものでしょうか……。キャスター、どうしたら良いと思いますか？」

「どうしたもこうしたもあるものか。それを教える必要も、道理も、義理も無い。この娘は敵対者なのだぞ？ 戦う相手の手助けをするなぞ、愚行にも程があるうに。そも、それを語れば此処から退去させられるのを忘れた訳ではあるまいな？」

「うっ、それは、そうですね……」

レテイシアに助けを求められたキャスターだったが、助け船を出すどころか、バツサリと切り捨てた。

だが、普通はそれが当たり前だろう。敵に塩を贈るなんて、馬鹿げている。しかも、そこが命のやり取りをする戦場なら尚更である。

……どうやら、やはり教えてはもらえないようだ。元より、そう簡単に知れるとも思っていなかったが。それに、何やら彼女らにも込み入った事情があるらしい。

「ゴメン。変なこと聞いた。今のは忘れて。アヴェンジャーは私のサーヴァントだもの。これは私とアヴェンジャーの問題だし、それを他の人に解決してもらうのは、やっぱり違うと思うから」

そうやって私は飲みかけの紅茶を一気に喉奥へと流し込み、じゃあ、とだけ伝えて私もその場を後にする。

喉を通り過ぎた紅茶は、既にすっかり冷めてしまっていた。

「焦らずとも良いのだ、岸波白野よ。どうせ、この戦いを通して、否が応でも貴様はそれを知る事となるのだから」

「あら。それはお得意の占いの結果ですか、キャスター？」

「さて、どうであろうな……？　ところでマスター、思った以上に菓子が余ったようだが、まさか本気で全て喰うとは言うまいな？」

「もちろん、食べますが。それが何か？　たとえば電子の海の世界であろうと、たとえこれらがデータに過ぎずとも、食べ物を粗末にはいきません。ええ、主に誓って、全て美味しく頂きますとも」

「ええー……先程までのシリアスな空気は何処いずこに……？」

## 希望の糸を、手綱へと

レティシアたちとのお茶会を切り上げ、アヴェンジャーを追いかけたは良いのだが、アヴェンジャーは完全に機嫌を損ねてしまっており、「いま話し掛けたら焼き殺す」とばかりに不穏なオーラを放っていた。

話をしたかったが、きつとろくに会話もできないだろう。

アヴェンジャーとレティシア。二人の因縁は気になるが、そればかりを気にしている余裕は、私には無い。

正体不明のサーヴァントと、そしてそのマスター。それは、対戦相手にだけ当てはまるのではない。

他ならぬ私たち自身にも、同じ事が言えるのだ。

「……これじゃまるで、自分自身の真名を探ってるみたいだ」

私に構わず、不機嫌なままマイルームに戻るアヴェンジャーの後ろ姿を見ながら、私はポツリと誰に聞かせるでもない自虐の言葉を吐くのだった。

結局、あまり寝れずに次の日の朝を迎えた。

相変わらず、頭の中はぐちゃぐちゃのまま。何から手を付ければ良いのやらという具合である。

アヴェンジャーの正体、そして自分の正体……。それらがどうしても気になってしまい、敵の情報収集に身が入らない。

昨日のお茶会は絶好のチャンスであったというのに、結局それも上手く活用出来ず終いだった。

こんな事では駄目だと分かっているのだが……。

「どうしたのです？ お顔の色が優れませんね」

乱れた心に、日が差すような声を掛けられた。

ふと気が付けば、私は廊下のだ真ん中で思考に没頭していたらし

く、そこへ通り掛かったレオからの呼び掛けで、思考の海から引き戻される。

「申し訳ないと思ったのですが、昨日のあなたとミス・トオサカとの会話、たまたま聞いてしまいました。図書室ではあなたの聖杯戦争への興味を優先したのですが、今日はどうにも曇った表情をされているので、もしや、と」

聞かれていたのか、あの会話の内容を……!?

だが、だからといって、それでどうなるという事でも無いのだが。レオにしてみれば、私がどんな存在であれ関係ないのだろう。ただ乗り越えていく障害の一つでしかないのだから。

もしくは、私ごときでは、乗り越えるべき壁とすら思われていないかもしれない。

謝罪しつつも威厳に満ち溢れる空気を纏う彼は、やはり王者の風格を持つと言わざるを得ない。謝られているのに、むしろ恐れ多く感じてしまう。

「僕もあなたは他のマスターと少し気配が違うと思っていましたよ。……あなたの様子から察するに、その事で悩んでおられるのですか？」

そう——その通りだ。

私は、悩んでいる。自分の正体が何か。自分が何者であるのか。

『岸波 白野』とは一体何なのか。

悩む私へ、今はまだ小さな王は、事も無げに一蹴する。

「自身の不明……。それは、そんなに思い悩むことでしょうか。自分が何者なのかを心得ている人間など、そう多くはないと思いますよ。それに、それが分からなくとも相応に出来る事はあるのではないですか？」

「出来る事……？ いったい、どういう——」

「それは僕が答えるべきではないでしょう。あなた自身で見つけるべきです。そうでなくては、意味がない。与えられてばかりではいけない。ここは本来、戦場であるという事を忘れてはいけません。戦場において何が出来るのか、何をすべきか考え、そして行動に移し、答

えを得る事。その行程にこそ、意味があるのだから」

彼の言葉を深く考える暇も無く、レオはごきげんよう、と去って  
いってしまった。

「……………」

去り際、彼のサーヴァントがこちらに視線を送った。その目に敵意  
はない。

「あるじ主の言葉を、どうか無駄にしないように」

そんな騎士道精神に満ちた、憐れむような視線だった。

悶々と、胸の内でもヤモヤとした何かがつつかえる感覚がある。レオとの会話を終えてから既にかかりの時間が経過していたが、未だにぐるぐると頭の中で先程の会話内容が渦巻いていた。

どうにも、レオの言葉が引つ掛かる。

今の自分に出来ること――

私は――

そうだ、少なくとも今、私は聖杯戦争に参加しているマスターだ。それが唯一の手がかり。

今の自分に出来る事は、その手がかりを最大限に生かすこと。

他のマスターの事を思い返してみるのがいいだろう。彼らと自分の違いがヒントになるかもしれない。

――慎二のことを思い出してみる。

リアルな彼はアジアのゲームチャンプにして霊子ハッカー――  
年齢は八歳だったらしい。

そして、予選の学園生活で、私の友人という役割を与えられていた。同時に私は、彼の友人という役割をロール与えられていた。

今になって思えば、よくあの高慢な慎二と友人関係を継続していたものだと言え……………？

……本当に？

慎二の友人だったのは本当に私か……？

何故、そう思ったのか。私にもよく分からないが……。

駄目だ——上手く思い出せない。記憶が靄もやに覆われている。それ以上進もうとすると、柔らかいが、断固たる力で押し返されてしまう。

結局……何も思い出せないのか……。

——ダン卿のことを思い出してみる。

彼は某国の軍人にして、霊子ハッカー。そして騎士だった。

礼を重んじ、不義を良しとせず、堂々と正面から、自分に立ち塞がってくれた。

記憶のない私に、師と呼べる人がいるとすれば、それは彼の事だ。

今でも、彼の最後の言葉に背中を押される。

後悔も、迷いもない。ただ、自分の通った道行きだけは否定するな、と。

……そうだ。記憶が曖昧でも、戦う意義が未だに見出だせなくても、その言葉は胸に刻める。

……けれど、それだけ。

どんなに前を見つめても、過去だけは取り戻せない……。

いや、もしかすると……そもそも、私には……？

——ありすのことを思い出してみる。

彼女はある意味、被害者だった。

ネットゴースト。帰り道も分からず、遊び相手も居ない。寂しがり屋の、何処にでも居る子どもだったのだ。

この無慈悲な月の電脳世界で、戦場とは唯一無縁であったはずの幼子。あの子と接している時だけは、戦いという厳しい現実と直面しないで済んでいたように思える。

もっと彼女と話をしておけば良かった——。

今更ながらに悔やまれる。自分の記憶とは別のところで、彼女とはもっと分かり合いたかった。

「お姉ちゃんはわたしと同じだね」

一人きりで寂しかっただろうに、強がって笑っていたあの少女と。しかし、もう遅い。

彼女は消えてしまった。いや、違う。この手で、消してしまった。砂糖菓子のように脆く、儂かった少女の幻は、永遠に失われてしまった。他ならぬ、私自身の手によって。

手がかりは、手のひらで受け止めた雪のように溶けてしまったのだ。

結局……何も分からないのか……。

「……何よ。これまた深刻そうな顔をしてるわね」

ふと声が掛かった。朝から姿を見せなかったアヴェンジャーが、いつの間にか目の前に立っていた。

「どうせ、私とアイツの関係とか、私の正体とか……それか、アンタ自身の正体について悩んでいたんでしよう？ ……ハア」

アヴェンジャーはため息を吐く。それは決して呆れから来るものではなく、私や彼女を取り巻く現状へ対してのものであるように感じられた。

そして、観念したかのように口を開くと、意外にも謝罪から始まった。

「……悪かったわね。私はアイツと顔を合わせると、どうしても苛立ちを隠せないし、燻る憎悪の炎を抑えきれなくなるのよ。アンタに八つ当たりする気は無かったけど、無意識にやってたみたい。……ゴメン」

はつきり言って、その謝罪に度肝を抜かれたと言っても過言ではない。

彼女の方から謝ってくれるなんて、普段の彼女を知る私にしてみれば、まさしく驚天動地のレベルでの異変と言える。

だが、もしかすると——それだけ私という存在が、アヴェンジャーの内で大きくなっているのかもしれない。そう思うと、胸の奥がジンと熱くなってくる。

私とアヴェンジャーは、しっかりと絆を結んでいる。それが、これまでの何より嬉しく思えた。

呆然となる私に、もしくは知らずの内に目を潤ませていたかもしれない私に、アヴェンジャーは気恥ずかしげに口を尖らせる。

「べ、別に謝ったのはアンタの為につてワケじゃないから！　ヘソを曲げられても困るし、仕方なくよ!?　分かったら返事！」

「……うん」

「分かればいいのよ。私の真名は——まあ、今すぐには無理だけど、必ず教える。アイツとの関係についても。それに、ここまで来たらもう腐れ縁みたいなもんだし、アンタが何者なのか、それを知る手伝いだつてしてやるわよ。お互い正体不明同士の仲つてヤツ」

「何それ……ふふっ」

二人で笑い合う。そうだ、私だつて正体不明。アヴェンジャーはそんな得体の知れない私と契約してくれたのだ。

彼女に疑念を抱くなんて、お門違いにも程があるう。

「……ありがとう、アヴェンジャー。ちよつと元気出たよ」

「それは何より。で、早速アンタのお悩み相談もとい解決に乗り出してやるわ。ほら、保健室に行くわよ。あの女、せつかく助けてやったんだから、せめて有効活用してやろうじゃない」

うん、ちよつとその言い方はね……。

でも確かに、アヴェンジャーの言う通りかもしれない。他者の話を聞けば、自分を見る、そのきっかけ程度にはなるかもしれないのだ。

ひとまず、保健室に行つてみよう。ラニの具合も気になるし、何が分かるかも知れないから。

保健室へやって来た。ベッドの設しつちえてある一角に行く……彼女とは相変わらずの硬い表情をこちらに向けた。

だが、幾分かその目には感情の色が乗っているだろうか。

「——また、来たのですか？」



ラニは、棘のある言葉で歓迎する。その声色トーンに少し戸惑いを隠せな  
いでいると、彼女は澄ました顔で続けた。

「師を悪く言う人とは、話すことなどありません。……出て行つてく  
ださい」

「待って。凶々しいとは分かつてる。それでも、聞いてほしい事があ  
るの」

ラニの拒絶を半ば無視して、言葉を被せる。ラニの感情ほんねをもう少し  
引き出すのなら、自分の考えを述べるのが筋だと思ったのだ。

まあ、自分語りをする事で、自分自身が落ち着きたかったのかもし  
れないが。

「……………」

ラニはそれ以上は何も言わず、じつと私を見つめてくる。諦めの悪  
さに呆れているのか、それとも、何か思うところがあつたのか。

だが、聞いてくれる気であってくれようだ。

ポツポツと、私はここ最近で私に起こった事を話し始めていく。

——どうやら、私は人間ではないらしい。

遠坂 凜の装置によって、自分が人間とは違う——何か、別のもの  
であること。

そして、自分が何者かすら分からない事などを、ただ、独り言のよ  
うに語る。

ラニはその間、ただじつと見て黙ってこちらの話を聞いてくれた。

ラニはそんな、何も無い自分とは違う。だから何故、『師の言葉』に  
そこまで縛られているのか——。

そんな疑問を口にした時、ラニは静かに、しかし優しい口調で返し  
た。

「師は……私の全てです。私を導き、生み出してくれた」

「……そうなんだ。ねえ、ラニの話も聞かせてほしい。その師って人  
が、どんな人だったのか、教えてくれる?」

少し師の話を聞いてみたくなり、それを伝えると、ラニは嬉しそう  
に話を続ける。

「私は、師によって生み出された道具。それなのに、師は人間ひととして私

を育ててくれました。けれど、私には感情なにかみが無かった。だから……せめて師の期待に応える事で、私は満たされていた……のだと思います」

大切な宝物を胸に抱えるように、懐かしい思い出を語るように、瞳を閉じて話を続けるラニ。すると、彼女は不意に顔を上げるや、私と視線が交差する。

「そう——岸波さんと私は同じ、空虚な器なのかもしれませんね」  
ラニと、同じ……。

それはどういう——  
そう視線で問うと、少女の瞳が揺らいだ。

ラニは暫し逡巡した後、まっすぐにこちらを見て、残酷な真実を口にした。

「先程の遠坂 凜との話を聞いて、ある仮定に至ったのです。岸波さんは、本体が無いのでは、と」

本体が……無い？  
あまりにも予想外の言葉に、理解が追いつかない。

「……言葉通りの意味です。残留魔力を取得しても、脳に負担が掛からない……それはあり得ません。肉体を持つ霊子ハッカーなら、どうしてもダメージを負うもの。それは私でさえ例外ではない」

待って。待って待って。いや、意味が分からない。

それだと、私は人間ではないどころか、その存在自体がそもそも無いようなものではないか。

私の混乱も治まらぬ内に、ラニは更に追い打ちを掛けるように、冷酷な現実を突き付けた。

「……ですから。もう結論は、一つだけなんです。肉体が無いなら、肉体へのダメージは通らない。岸波さんは、いま、データでしかない存在なのではないでしょうか」

——いや。

待ってくれ。いくらなんでも、それは、待ってほしい。

「……………っ、はあっ、はあっ！」

息が詰まる。呼吸が上手く出来ない。全身からぶわつと汗が湧き出る。

——お前は、人間ではない。

——私は、人間じゃない。

信じていた全てが、足元からガラガラと音を立てて崩れ去っていく。 “私” という土台が失われていく喪失感——否。

これは絶望だ。記憶喪失ではなく、人間では無かったのだから、元からそんなものは存在しなかった。

私は、本当の意味でからっぽだった……？

私の様子を見て、彼女にしては珍しく、慌てたようにラニが言葉を取り繕う。

「い、いえ、誤解しないでください。本体が無い、というのは、繋がっていない、という意味です。予選を通過した時にトラブルがあった、と聞いています。その時に、リンクが途切れてしまったのではないのでしょうか。それなら記憶が曖昧なものも当然です。自分のデータベースである肉体と接続が途切れているのですから」

ベッドから身を乗り出して、宥めるように私の背を撫でるラニ。病み上がりで自分の身体とて辛いだろうに。

そのおかげもあつてか、私は次第に落ち着きを取り戻していく。……しかし、なるほど。

記憶は思い出せないのではなく、肉体から引き出せなかっただけ、なのか。

となると、後は途切れたリンクを回復させるだけなのだが……。

「……どうすれば、リンクを繋ぎ直せるの？」

「……岸波さんでは困難だと判断します。ですので……わ、私でよろしければ、お手伝いする選択も、ありますが」

ラニが肉体とのリンクを手伝ってくれる……!?!

それが本当なら、こんなに頼もしいコトはない。思わずラニの手を握って、ありがとう、と熱弁してしまった。

「は、はい—— 乗り掛かった、船ですから。時間を作って、確実に、完璧なプランのもと、地上にある岸波さんの身体を、見つけだします

ので」

良かった……これで記憶が戻る。記憶が戻れば自分が何者なのかもはつきりする。

何故この戦いに参加したのか。自分はどんな経歴を、どんな人生を歩んできたのか、知る事が出来る。

そうすれば——自分もやつと、胸を張って戦えるはずだ。

そんな思いを見透かしたように、ラニは柔らかく笑う。

「やっぱり、岸波さんは同じです。私も……ずっと探していたから。今——思い出しました」

それは、何を？

と問うたが、ラニは風のように微笑むばかり。

こちらの困ったような顔を見て、楽しんでいるとでも言うのだろうか。

戸惑いを隠せずにいると——

「少し、疲れました。それと……邪険にしたこと、お詫びします。明日も——お話出来ますか？」

ラニの言葉に、反射的に首を縦に振る。

「もちろん。私も、まだまだラニとは話し足りないと思ってるから」  
ラニは満足そうに見つめ、「約束ですよ」と告げて眠りについた。

身体が癒えていないのに、無理をさせてしまっただろうか。今はそつとしておこう。アリーナの探索もあるのだ。

私はラニを起こさないように、静かにその場を離れる。

部屋を出ようと振り返ると、保健室の主である桜が心配そうにこちらを窺っているのが見えた。

「あの、大丈夫ですか？ センパイのバイタルが急に不安定になったので、心配したんですが……」

「もう大丈夫。心配してくれてありがとう、桜」

ホッと胸を撫で下ろすように、安堵のため息を吐く桜。

不要な心配をさせてしまったようで、申し訳ない。

「聖杯戦争もこれで四回戦と、もう後半戦に突入しています。保健室のAIとしては、誰か一人のマスターに肩入れするのは規則に反しま

すが……せめて心配だけはさせてください。どうか、気を付けてくださいね、センパイ。いま残っているマスターは、その全てが優勝候補と言える人ばかりです。無理だけはしないでください」

「うん。肝に銘じておくね。それと、何かあつたらまたお願い」

「はい！ その時は、保健室の担当として、精一杯お助けさせていただきますね！」

花開くような満面の笑みを受けながら、私は保健室を後にした。

気が楽になった私は、その足でアリーナ探索に向かおうと足を運ぶ。

そして扉の前に来たところで、ちょうど探索を終えたらしいレティシアと鉢合わせた。いつもの明るさは少し影を潜めており、何やら疲れた顔をしているのが少し気になった。

「まあ、岸波さん。あなたもアリーナへ行かれるのですか？ 私たちは今しがた帰ってきたところですよ。トリガーの取得は済んでいるのですが、鍛練をと思ひまして。もしやそちらも？ でしたら、お互い精が出ますね」

先程僅かながら垣間見せた疲れ顔から、一瞬で元氣そうに装うレティシア。ただし、装うという文字通り、完全には疲労を隠し切れていない。

「なんだかお疲れみたいだけど、何かあつたの？」

「いいえ。何もありませんよ？ むしろ元氣いっぱい元氣ハツラツ！  
くらいには元氣が有り余ってます!!」

アハハハ、と彼女はいかにも嘘臭い笑い方をしており、絶対に何か誤魔化そうとしている。

「アハハハハ………ハア」

「いや明らかに疲れてるよね？ 全然隠し切れてないからね？」

隠し通せないと分かったのか、レティシアは腕をだらんと垂らすように、その場で脱力しながら立ち尽くす。



すぐさま警報が鳴り響き、レティシアとキャスターへとステータスダウンのペナルティを下すアナウンスが流れる。その影響なのか、キャスターは少しずつおとなしくなり、最後には完全に沈黙化され意識も失ったようだった。

「……やつと落ち着いてくれたようですね。お騒がせしてしまい、ごめんなさい。信じていただけないとは思いますが、こちらに攻撃する意思はありませんでした。完全にこちらの配慮不足です。本当にごめんなさい」

血塗れの腕でキャスターを背負うレティシアは、少しふらつきながら去っていく。多分、マイルームで休むのだろう。

「……何よ、アレ。アレがキャスター？ あんなの、どう見たってバーサーカーじゃない。どんな悪い冗談よ」

アヴェンジャーは、キャスターの豹変ぶりに気圧されたのか、レティシアへの憎まれ口すら出て来ないようだった。

あまりに突然すぎて理解が追い付かないが、場が落ち着いた事で、ようやく私は状況の整理を行える。

まず第一に、キャスターに見られた異変。

本来、キャスターというクラスは接近戦を得意としない。魔術による攻撃、または搦め手を主な戦法とするのが定番だ。

前回戦った、ありすのキャスターも例に漏れずの戦闘方法だった。

しかし、先程のレティシアのキャスターは、手先はまるで鋭利な刃物が如く、触れたもの全てを切り裂くような印象を受ける、非常に攻撃的な手だった。

ユリウスのアサシンに近いものがあるかもしれない。あちらが拳アサシンで敵を粉碎するのに対し、こちらは爪キャスターで敵を引き裂く。そんな感じだった。

キャスターの持つ美しい漆黒の瞳は狂気に染まり、思い返してみれば、瞳孔は縦に割れていたような気がする。猫科の獣が持つ瞳——それに近い目だ。

そして、最も見逃すべきではない点が一つ。私がレティシアに取り押さえられた彼女を目にした時、どうしてもそこから視線を外せない

かつた箇所。

普通の人間にあつて良いはずが無いソレ。いや、英霊とて、真つ当な存在なら有るはずが無いモノが、彼女の額にあつたのだ。

それは――

――天を衝かんとばかりに、彼女の額から真つ直ぐに伸びた、漆黒の角である。



## 新たなる共犯者

レティシアが去るのを見届けた私たちは、その後、予定通りアリーナの探索へと向かった。

……のだが、やはり先程見たキャスターの姿が脳裏から離れず、探索に身が入らなかつた。エネミーとの戦闘では問題なく対応出来たものの、それまでだ。

戦闘以外の事柄では集中出来ず、どうしても意識が散漫としてしまう。

——鬼。

一言で言えば、あのキャスターの姿はまさしく、そう言い表す他ない。言い得て妙というか、それ以外の表現が出来ないというか……。キャスターが和装という事もあり、今やそうとしか思えなくなっている。

古き日本に存在したという怪異、平安の世を脅かしたとされ、日本各地の伝承にも多く知られる妖怪の一種である、『鬼』。

うん。やはり、そうとしか思えない。

だが、そうなるとキャスターの正体——真名は何なのだろうか？

鬼、そして女性。それらが当て嵌められるとして、有名どころでまず思い浮かんだのは『鬼女 紅葉』。

彼女の逸話からして、キャスターのクラスであったとしても、おかしくは無いただろうが……。そうだと決めつけるのは時期尚早だろう。

紅葉と言えば、彼女は仲間に『鬼のお万』という、もう一人の鬼女が居たそうだが、そちらは怪力で知られており、キャスターっぽく無いので除外出来そう。

別の可能性として、鬼で有名なのは酒吞童子や茨木童子。平安時代に京の都を荒らして回ったとされ、傍若無人の限りを尽くしたとか。

女性かと言われれば、正直微妙な線なのだが、茨木童子の方は美しい女性に化けたという伝説もあるし、可能性としてはギリギリ無くは無、といったところか。

いずれにせよ、あの角は見せかけのものでは無いだろう。正気を失ったように、狂ったように暴走していたキャスター。そんな状態で露になった角は、むしろ普段は隠していたものである可能性が高い。

あの暴走は予期せぬもので、レティシアの言葉から推測するに、それを抑える為にアリーナに行っていた。その帰りに私たちと遭遇し、完全には抑え切れていなかったキャスターの狂乱が、レティシアの気の緩みで暴走してしまった——といったところだろうか。

謎に包まれたキャスターの素性だったが、今回の一件は、彼女の真名に近づく為の大きな一歩であるのに間違いない。

「……考察に耽るのもいいけどね。ちよつとはアリーナ探索にも身を入れなさいよ。そういうのはマイルームに帰ってからでも出来るでしょうに。とりあえずこのトリガーはもう確保済みだし、今回は特別に許してあげましょう。ただし、今回だけだから。私、自分以外のしてる舐めた態度とかは嫌いだから。覚えときなさい？」

「ごめん。確かに、エネミーもどんどん強くなってきたし、油断大敵だもんね。アリーナで深く考察するべきじゃなかった。……ひとまず、今日はそろそろ引き上げよう。エネミー狩りも一段落だし、明日からは第二層が開放されるはずだから、明日に備えて早めに休もう」

どうあれ、あの角はキャスターの正体を探る大きな手掛かりに違いない。マトリクス埋めが僅かにだが、確実に進歩したのだ。思わぬ得をしたと思っておこう。

アリーナから帰還した私だったが、二階へと上がろうとした瞬間、ガシツと肩を掴まれた。

なんとというか、油断していると予期せぬ厄介事イベントが飛来するのは、もはやお約束なのだろうか。

「ナーイスタイミング!! ねえ、岸波さん。緊急事態なの! 先生のお願ひ聞いて!」

例によって例の如く、藤村先生タカイガイが目をうるうるさせながら私を捕ま

えてきた。経験則が言っている。断つてもロクな事にならない、と。  
「というか、もういい加減慣れました……。」

「イエス、ママ」

「ありがとう、助かるわ！　なんでそんな返しなのかは気になるけど！　それでね、何があったかかって言うと、先生久しぶりに腕によりをかけて料理を作ったのね——」

え、先生って料理とか出来たの?!　という言葉をギリギリ飲み込み、続きを聞く。

「それが、できた！　と思つたら、データバグだつて言われて、どつかに転送されちゃったのよ」

……あー。なるほど。なんとなく、オチが読めてしまった。というか、作った料理がバグ扱いって……。

「そういうデータつて、アリーナで消去待ち状態になつてるらしいの。たぶん今日中に回収しないと、バグとして消されちゃうわ。だから、急いで回収してきてほしいの。お願いね！」

やはり、探し物系のお使いクエストだったか。基本、こういうお願いしかされてない気がするが、この先また探し物とは違った事を頼まれる事はあるのだろうか。

「ん？　……料理？」

そういえばアリーナで変なものを拾ったのだが、それを確認しようと思つた時には、既に目の前に藤村先生は居なかった。風のように去りぬ、とばかりの早業である。

「もう居ない……。おっと、アイテム確認アイテム確認、と」

端末を操作し、一覧から今日拾得したアイテムを確認していくと、一つ異質なモノが交ざっていた。キャスターの角について考えすぎていたから、アイテムフォルダから拾った時は気にも留めなかったが、今更ながらよく見てみれば、どう考えても本来アリーナにあるべきではないものだった。

「かに、玉……。え、これが？　え、なんかお好み焼きに見えるんだけど。……表記ミスじゃなくて？　え？　ホントにバグってない？」

「かに玉って……。私の知ってるかに玉と全然違うんですけど。まだ

料理がダークマター化してないだけマシだけど、それでもぶっ飛んでるわね、あのタイガー……」

レベル違いにも程がある異形のモノを前にして、アヴェンジャーも堪らず霊体化を解き、もうここには居ない藤村先生へと苦言を呈す。

いや、その感想は尤もだが、間違っても本人を前にして言わないよう、後で釘を刺しておこう。

藤村先生の探し物を知らぬ間に手に入れていたが、当の依頼主が姿を消してしまつては、どうする事もできない。仕方ないので渡すのは後日にしよう。

……得体の知れない物体を持ち続けるのは、正直避けたいところではあるが。

ようやくマイルームに帰ってきた。

色々とおつた一日だった。それはもう、本当に。

ありがたい事に、ラニに私の記憶を取り戻す為の協力を取り付ける事ができた。ようやく記憶の糸口を掴んだのだ。今度こそ、空振りにならないように祈る。いや、空振りにしてなるものか。それくらいの心意気でいるべきだろう。

そして、もう一つ忘れてはならない事がある。キャスターに見られたあの異形の角について。

疲れた体だが、甘やかさずに私は横にならずに、椅子に座つて思考に耽る。

「アヴェンジャー。角のある存在といえ、何を思い浮かべる？」

「アリーナの続き？ そうね………、西洋でいえばオーガとか一部のドラゴン。でも、あのキャスターはアンタと同じ極東出身つて雰囲気だし。……となると、やっぱり『鬼』かしらね」

「やっぱり、そう思うよね」

アヴェンジャーも私と同じ意見のようだ。この際、キャスターは“鬼に連なる英霊”だと仮定して話を進めよう。

今あるヒントは、日本の英霊、巫女（？）である事、鬼のような角がある事……くらいなもの。

ここからキャスターの正体の候補を絞り込めそうな気もするが、それはまだ早い。もう少し、穴を埋めるためのピースが欲しいところだ。

「鬼、鬼ねえ……。でも、あの感じはなんというか……」

「何か気になる点でもあるの、アヴェンジャー？」

私の問い掛けに対し、少し濁すような形で、彼女は答える。

「いや、鬼って言えば確かに荒れ狂う感じはあるかもだけど。でもキャスターよ？ あの女はキャスター、それでいて巫女として呪術も扱う。なのに、あの時の暴走はどう見てもバーサーカーだった。バーサーカー以外のクラスでも、その逸話から狂化スキルが付与される事はあるわ。でも私の知る限り、それはあそこまでの暴走を引き起こすようなものじゃないのよね」

アヴェンジャーが言うには、たとえセイバーやアーチャーのクラスであつても、その英雄の伝説や逸話から、召喚される際にスキルとして狂化を所持している場合があるという。

しかし、それは思考や行動に偏りが表れたり、何かを切っ掛けに歯止めが利かなくなるといったもの。

だがキャスターのアレは、そういった感じではなく、バーサーカーの暴走と変わらないように見えた……という事らしい。

「確かに狂化スキルによる暴走はある。それがセイバーにしろ、アーチャーにしろ、ね。でも、理性ばかりか思考能力まで失う暴走っていうのは、バーサーカーとしか思えない。さて、ここで疑問があります。キャスターなのに暴走する程の狂化スキルを持つとして、私たちが初めてアイツと邂逅した時、そんな様子は微塵も無かった。あれ程の暴走だもの、普段どうやって狂化を抑えていたのかしらね？」

「……自身に何かの魔術を施していた？ キャスターとしての能力で、狂化を抑え込んでいたとか？」

「そうだとすると、普段は微塵も感じさせないあの強い衝動を、自身で抑え込む事ができているのなら、高いレベルの呪術の使い手でしょう

ね。多分、相当に名の知れた力のある巫女よ、アイツ。それこそ、旧き時代——神代の魔術師に匹敵したりしてね」

神代——日本で言うならば、国産みの神話の頃が妥当か。だが、それほど遙か昔の日本に、有名な巫女など居ただろうか？

そもそも巫女という概念が生まれたのは、いつ頃なのかも分からない。多分、私が知る限りで日本最古の巫女と言え——邪馬台国の女王「卑弥呼」しか思い当たらない。

卑弥呼。未だにその全容が解明しきれていない、邪馬台国を治めたとする古の女王<sup>いにしえ</sup>。

しかし、キャスターの真名かと聞かれれば、そうだとは思えない。卑弥呼に角があった、卑弥呼が鬼だったなどという話を聞いた事がない。

恐らく、そんな話は学説に存在しないのでは無かろうか。

ますます謎を深めるばかりのキャスターの正体に、私の頭は思考を巡らせすぎて熱を帯びていく。知恵熱が蓄積しきる前に、今日は休んだ方が良さだろう。

明日はもうモラトリアムも4日目。四回戦目の折り返しとなる。おそらく、アリーナの二層目は明日開放されるはず。

経験則が言っている。きっと明日、マトリクスを埋める何か起きるはずだ、と。

「角のある巫女。今分かるのはそれだけ、か」

「そうね。さ、休むわよ。疲れた体で考え事をしたって、どうせ纏まらない。まだ猶予はあるんだし、真名明かしは情報をもっと集めてからで良いわよ」

アヴェンジャーはこれ以上考える事は放棄し、すぐさま休息に入る。私も椅子から簡易ベッドへと場所を変え、アヴェンジャーに倣うように、目を閉じて思考に蓋をする。

アヴェンジャーと話すべき事は話した。今は疲れた頭と心身を休めよう——。

——墜落の夢を見た。

見上げた空が、深く青い、海の色だったからだろう。

箱舟は鈍く光りながら高度を落として、緩やかに沈んでいった。

泳ぐような／溺れるような飛行。

その姿を見て、多くの人々が永遠を誤認した。

星の上つ面を巡る衛星きかいと同じだ。音の無い宙そらでぼんやりと、いつま

でも、凍りついた文明にんげんを眺めている。

炎が踊る。／その手には鋼。

大地が割れる。／その手には毒。

海が枯れる。／その手には、(四億)分の熱量。

血塗れの夢を見る。／多くの人間は疲れている。

食い尽くす夢を見る。／多くの賢人は諦めている。

夢の無い夢を見る。／多くの私は、未来そのものに飽きている。

主よ、嘆きたまえ。人間は、こんな筈ではなかったのだ、と。

『さあ、ずっと隠されていた事実を提出しよう！ 世界はとつくの昔に袋小路で、この未来はデッドエンドなんだって！ 人類は何百年もかけた宿題を果たせず、見苦しくも志半ばで終わるのだと！』

——そう、この世界に、未来に、希望なんて残っていない。僅かに残された一握りの価値ですら、とうの昔に焼却された。

結局のところ、人間は、人類は、愚かしくも自分たちで課した重荷に耐えきれなかったってコト。なんとまあ、無様な事か。

嘆きの声を聞かせてほしい。壊れた歴史をいじり続ける。

間違っていたと叫んでほしい。砕けた地表を検分してみる。  
勝利したと笑ってほしい。多くの過ちを経て、我々はようやく、人間同士の争いから解放された。

『だが、それが何を生んだ？ 恒久！ 永遠！ 幸福！ 停滞！ 見ろ、夥しい屍者の群れを。聞け、あの苦悶のごとき訴えを。誰も未来を望まない、誰も変革に興味はない。だいたい——我々はもう十分に幸福だ。これ以上の進歩なんて、それこそ不要なものだろう！』

——愚者は望まぬ変化に順応できない。人間は、変化を許容する生き物だけれど、それは妥協の上での話。多くの人間が、幸せを望んで時代の流れ——変化に身を任せただけれど、それは本当に望んでいたのだった？

仕方なく、他の人もそうしているから、自分もそうしよう……そんな、流動的な決定が、人類の歴史には山のように積み重なってきた。何かを自分の意思で決めるのは、王や国の代表といった、一握りの指導者だけ。そしてそれが、変革を望まぬ愚者の群れを作り上げたとは知りもせずに。

愚かで、哀れ。そのくせ、幸せを望むくせに変化は嫌って、でも仕方なく許容はする。それが、人間だものね。人間という種の、特性だものね？

争いのない家路、温かな窓辺の明かり、貧困のなくなった、平等なユートピア。

——だが。

もう一度だけ、答えてほしい。

炎は踊る。／我が手には鋼。

大地は割れる。／我が手には毒。

海は枯れる。／我が手には（四億）分の熱量。

この未来を。誰も望んでいなかったと、声高らかに謳うがいい。

……かつて生命は海から生まれた。その母なる海はとうに無い。



今は電子の世界に、その痕跡を残すのみだ。

我々は地上に広がり、大地をより豊かにし、優れた文明を築き上げた。

何のために。

この疑問に解答を。

——是非を問え。その繁栄に、果たして、千年の価値はありや。

「そんなもの、決まっている。価値なんて、ある筈が無いじゃない。でしょう？ ——岸波白野？」

——ふと、目が覚めた。

欠けた夢を、見ていたようだ。

重い体を無理矢理に起こす。瞼はまだ重い。まだ不完全な覚醒ではあるが、この微睡みに身を任せてしまいたくなる衝動を必死に堪える。

頬を軽く叩き、緩やかな覚醒から、一気に意識を目覚めへと引き上げる。

「……。またあの夢……なのかな？」

凜やラニは、霊子状態の人間は夢を見ないと言っていた。そもそも、夢とは本人が蓄積した記憶から形成されるもの。

肉体と繋がっていない今の私に、過去からの検索はないはずだが……。

……しかし。

これは確かに、自分の夢のような気がする。あの光景を、私は確かに経験している。

それは一体、何を意味するのだろうか……？

「ようやくお目覚め？ アンタが呑気に寝てる間に、ちよつと面倒な事になってるわよ」

既に支度を整えたアヴェンジャーが、マイルーム入り口にもたれながら、そのイラつきを隠そうとはしていなかった。

面倒、とは何ぞや？

「それは自分で確かめなさい。というか、黙っていても向こうから来るでしょう。クソ迷惑なダニ神父め、これだから愉悦信奉者は嫌いなよ……！」

言峰神父が何かをしでかしたようだが、とても嫌な予感がする。

具体的には、何か面倒事に巻き込まれそうな……。

手短に朝の支度を済ませ、マイルームから出る。アヴェンジャーは霊体化しており、部屋を出る時にはもう姿は無かった。

アリーナに行く前に、まずは保健室へと向かう。

ラニの様子が気になったからだ。私が行ったところで、何も出来ないかもしれないけれど、昨日は、私を少し受け入れてくれたような気がした。

だから、今日も行って話をしてみよう。夢の事も、誰かに話しておきたいし。

幸いにも、言峰神父に捕まらずに保健室へと到着出来た。タイガーも姿が見当たらなかったので、謎の物体X（かに玉）を渡すのはまた後にする。

今朝見た夢の事。それが自分を理解<sup>み</sup>する切っ掛けになるかもしれない。そんな思いが頭から離れないままに、保健室の中へと入っていく。

ラニはこちらの訪問を知ると、待ちかねていたように、にこりと笑い、ごきげんよう——と頭を下げた。

その声は昨日のような棘はなりを潜め、しかし初めて出会った時とも違う、柔らかな鐘のようだ。

「あ……約束……守ってくれたんですね」

少しはにかんだような表情。顔は相変わらず無表情に見えたが、明らかに違つて見えた。表現が難しいが、今の彼女は例えるなら、冷たい機械に僅かながらも心が芽生えた……ような。面と向かつて告げるのは失礼極まりないので、間違つても口にはしないが。

こんな顔も出来たのか、と思わず黙っていると、ラニは用意していたのだろう言葉を紡ぐ。

「昨日、岸波さんは言いましたね。自分には、中身が無いのだと」  
そう、私はそれを探したい。これは記憶の有る無しとは別の問題だ。

慎二も、ダン卿も、ありすも持つていたであろう、自分の芯になるべき願い。自分の在るべき、存在の理由を。

「思えば、師はいつも言っていました。私を生み出した後、魂は入れられなかった、と。昨日は、それを思い出したです。何故でしょうね、師とは違うはずのあなたと話していたら——」

目を閉じ、何か大切な記憶を懐古するように、かつての温かみを噛み締めるように、ラニは続けた。

「岸波さんの姿が、師と重なってしまつて。話しているうちに、体内の温度の上昇を計測したのです。身体機能は回復しつつあり、決して異常ではない筈。胸が熱い。けれど、気分は軽やか……。このような事、初めてだったのです」

自らの胸に手を当て、その熱を初めて感じたと言う彼女の姿が、何故か、自我が芽生えたばかりの幼子のように見えた。

「ラニ……。それが、心だと思うよ」

確かに、最初は心が無かつたのかもしれない。だが、この数日を通して彼女とふれ合い、私は確信を持つて、これだけは言える。

ラニ、君に心が無いだなんて事は、決してないんだ。

「心——これが、ななみ？」

沈黙。しかし、それはラニの顔を見ていれば幸せの消化時間に違ひなかつた。眼を閉じ、何度も眩き、ラニはそれを飽きるまで繰り返した。

「師よ——。これが……。これが、そうなのです。器を満たす清水。

なんて——なんて暖かい……」

ラニはもう一度そう言うと、顔を再びこちらに上げて——  
「ありがとうございます。そして、次はあなたの番。せめてものお礼です。私に出来る事はありませんか？」

と、真剣な眼差しを向けた。遠慮しておこうかとも思ったが、その目の真っ直ぐさに、つい口を開く。

不思議な夢を見た。いや、あれが夢であるか断言は出来ないのだが……。

「電脳が見る夢……ですか。それも、他人事のように実感のない夢——」

あれが私が過去に経験した夢きろくであると、根拠は無いものの、確信だけはあつた。でも、それでも、何故。そこに他人の意識のようなものが介在するのか。それだけは、得心も納得も理解も出来なかつた。

「夢というのは、睡眠中に脳の情報整理をするために、記憶が呼び出された結果認識されるもの。……ですが。今の岸波さんに、過去の記録を整理する事は出来ないはずですよ。その光景は、あなたの魂に焼き付いた原風景なのかもしれません。夢というよりトラウマの類いですね」

トラウマ……。確かに、あの光景は見ていて気持ちの良いものではない。まるで世界の滅亡を見ているかのような光景。人類の破滅を物語るかのような語り草ナレーションとしか言えなかつた。

夢にナレーションがあるのも、殊更におかしな話ではあるのだが……。

「……それと。その内容も、興味深い。抽象的にして、観念的——。意識の地平を越えた、認識の世界。人面鳥の空行くが如く、掴みどころがない」

「確かに、夢の事を思い返してみても、相変わらず、私が何者なのかつて答えは出ないんだ。いったい、私は何者で、何のために、この聖杯戦争に参加したのか……」

ラニも、凜も、ダン卿も、レオも。そして、レティシアも。

全員が、強い意志を持ってここに来ている。

いずれにしても、聖杯を使つてでも実現したい強い願望があるのだろう。それに比べて私は――

「……………」

俯いて、マイナス思考に落ち込みそうになっている私に、ラニは言う。

「このような時、何を言えればいいのか、私には分かりません。ただ……あなたに何かを言いたいという衝動だけが湧いてくるのです。そしてあなたには、そんな顔をして欲しくないと思う私があります」

ラニは私の手を取り、思わず視線が彼女へと向く。そこには、真剣な顔で、今までに無く強い光を瞳に宿した、無垢なる少女の姿が在った。

「あなたは私を助けた。助けて……くれた。だから、私もあなたを助けたい。こんな事、初めてなんです。師の指示ではなく、課された使命の為でもなく――誰かの為に。私自らが、自分の意思で、あなたのために行動を起こしたいと、強く思ったのです」

それは――。

「岸波さん。あなたの対戦者のこと、調べてみようと思います」

「――いや、待って。いくらなんでも、それは危険すぎる」

「心配には及びません。星の廻りを知る者は、その力の及ぶ限りも知っています」

「いや――でも……」

「……………」

ラニに見つめられる。一点の曇りもない瞳だ。

「……分かった」

ラニの真剣な目に負けて、承諾してしまった。カッコつけたがりのアヴェンジャー風に言うなら、これでラニは私たちの「共犯者」"となつてしまった訳だ。

と、ラニの表情が僅かに緩む。

「それでは、今分かっている事を教えて下さい」

敵のサーヴァント……キャスターに関して今、分かっている事――

彼女のクラスと、アリーナで垣間見せた呪術らしきものと、昨日目にした決定的な異形の証——天を衝くように額から伸びた、漆黒の一本角。

「和装の女性で、呪術を扱い、額には角が生えていた。キャスターであるはずが、バーサーカーのように荒れ狂う姿も見られた……ですか。思っている以上に、情報が集まっているようですね。……分かりました。調べてみましょう」

ラニに危険な事はして欲しくないが、彼女の気持ちは本当にありがたかった。

だが、くれぐれも気を付けて。そう言っつて、保健室を出る事にした。

「異形の角。呪術を扱う女性……。日本で言うところの鬼。化生の女怪？　まずは当てはまる過去の人物から調べ、次に年代を絞り込んで……」

岸波白野の去った保健室で、彼女と協力者——共犯者となつたらニは早速動き出す。

ともすれば、彼女自身がまだ聖杯戦争に参加するマスターであった頃よりも、その顔にはかつてなく輝きで満ち溢れていた。

## 傍迷惑な神父からのありがた迷惑な試練

保健室を出てすぐ、アリーナへ行こうとした時だった。端末が廊下に音を響かせ、新たな暗号鍵トリガーの生成を告げる。

『第二暗号鍵セカンダリトリガーを生成。エリア2にて取得されたし』

今や私も場数を経て、やはり今日が第二層目の開放される日だったと予想が当たる。

一つ気になるのは、四日目を迎えるにあたり、一つ目のトリガーを取れていないマスターに第二層へと入る資格は与えられるのか、という事だが……。

当然、自分でそれを検証するつもりは毛頭ない。そんな馬鹿げた事をする暇があるなら、一目散にこの戦いを駆け抜けた方がいい。

「順調に歩んでいるかな、若きマスターよ？」

端末から目を上げると、ちょうど職員室の前辺りで言峰が立っているのが見えた。

彼の見つめる先には私しか居らず、こちらに話しかけてきているのは明白だった。

それにしても、向こうから声を掛けてくるとは珍しい。一体何の用——いや、そういうえば今朝、アヴェンジャーが何か言っていたような……。

それを思い出すよりも先に、言峰はこちらへと歩み寄り、言葉を続ける。

「何、ちよつとした通知だよ。君たちもそろそろ、単純な探索だけでは飽きてきたかと思つてね。私から、少し違う趣向を用意させてもらった」

趣向？

一体、何をさせようと言うのだろうか。ただ、あまり嬉しく無い事のような予感があった。

「なに、単純な話だ。この試合、君たちマスターに特別ルールを一つ追

加させてもらう。それぞれのマスターには別のルールを追加しているのだが――。そうだな、君は『大物狩獵』モンスターハントでどうだろう」

「……えつと。それは何を？」

「モラトリアム猶予期間の残り2日間、君には大型の敵性プログラムエネミーを狩ってもらうという趣旨だ」

とんでもなく、要らぬお節介なのだが!?

迷惑そうな顔をしていると、言峰は何か気付いたように、大きさに肩を竦めた。

「これは失礼。重要な事を忘れていた。報酬の話をしようか。この追加ルールだが、6日目、クエスト達成者には対戦相手の戦闘データを一つ、開示しようと思う。どうだね、悪くない報酬ではないかな？」  
うーん、それは確かに美味しい話ではあるが……。大型のエネミーって、もしかして普段倒してるエネミーなんかでは話にならないレベルで強いのでは？

え？ 私、それに勝てるの？ 自信無いんですけど!?

――おつと。

そう言つて、指をパチンと鳴らす言峰。すると、何故か急にアヴェエンジャーが現界した。

急にどうしたんだと思つたが、アヴェエンジャーの顔を見ると、彼女もいきなりの事で何が何やら、といった具合に混乱した様子だ。どうやら、自分の意思で霊体化を解いた訳ではないらしい。

「は……？ 何なの、勝手に現界させられたんだけど!？」

「失敬。実はまだしなければならぬ事が残っていてね。サーヴァントにトに霊体化されたままでは少々面倒だったので、こちらで現界を強制執行させてもらったよ」

流石、上級A Iなだけはある。運営のためなら、サーヴァントにすら干渉出来るとは……。

でも、多分だけど、干渉出来てもせいぜいは今のような事くらいだろうが。そうでなくては運営側のやりたい放題になってしまう。

管理の怪物であるセラフが、NPCの暴走を許すはずも無いが、もしもがある以上、恐らくある程度の制限は課されているはずだ。



言峰はおもむろに、アヴェンジャーの頭に触れない程度の距離で手を翳す。

反射的に体を背けるアヴェンジャーだったが、本当に一瞬の事で、言峰はすぐに手を下げた。

「これで準備は整った。では、アリーナに向かいたまえ。このクエストは第二層で行われる手筈になっている」

「ちよつと待ちなさい。あなた、私に何をしたの？　というか、何で無理矢理に現界させられたの!？」

納得がいかないと、アヴェンジャーは言峰を睨み付ける。が、復讐者の鋭い視線を受けて尚、この神父は怯むどころか、堪えた様子を微塵も見せない。

「どれだけ肝が据わっているんだ……」

「簡単な話だ。君に合ったエネミーを用意しただけの事だよ。スキヤンの結果から用意した君たちが倒すべき大型エネミーは、運が良ければ霊基再臨に必要な素材をドロップする。そういったエネミーでも用意しなければ、大型を狩るに際し、大いに意欲的になつてもらえないだろうからね」

この神父、やり口がゲームマスターじみている。試練を用意し、見事クリアした暁には、マトリクスだけでなく、有用なアイテムまで手に入るよう仕向けるとは。

運が絡むようだが、それでもサーバーアントを強化出来る可能性があるなら、挑まない手はないだろう。

どうせ挑まないといけないのに変わりないし、文句を言つても仕方ない、か……。

こちらに選択肢など無い、という事だろう。

「では、今度こそ。アリーナへと向かい、一狩り行ってくるがいい。さて、通達は君が最後だったのでね。私は、戻つて再び暇潰しゲームに興じるでしょう」

言うだけ言つて、言峰は去つていった。

神父だつて人間なものね。ゲームだつてするよね。

でも、まさかとは思うけど、自分が今してるゲームに影響されて、こ

の試練って事はないよね？

やたらクエストだのと言っていたが、それもゲームの単語が関係してるとか、無いと思いたい。……切に。

「面倒だとは小耳に挟んだけど、思った以上みたいね。……チツ。セコいやり方だったらないわよ！ ……報酬まで用意してるところが余計にいやらしいわ……!!」

地団駄を踏むアヴェンジャーを引つ張りながら、私はアリーナへ向かう。

と、そこへ、職員室から出てきた藤村先生とバツタリ出くわした。

「あら、岸波さん。もしかして……」

「先生、ちようどいいところに。こちらをお納めください」

端末を操作し、藤村先生へと疑惑のかに玉を返却する。これで、こちらのクエストは達成出来た。

「あー！ 先生のかに玉！ 回収してくれたのね。ありがとうー！」

かに玉を受け取り、まるで子どものようにはしゃぐ先生。

「ちよつと、小麦粉が入ってるくらいでデータバグだなんて、ひどいと思わない？ 思うよねー」

いや、料理に関する知識はあまり無いので、断言は出来ないのだが、でも言いたい。普通は、かに玉に小麦粉って入れるものなの？

「ま、それは置いといて。あと、もう一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

追加依頼と来たか……。ええい、ここまで来たらせつかくだ。受けてやりますとも！

「ドンと来い、ですー！」

「さっすがー！ 頼りになるわ。でね、実は誰かが公然と私の事、その……タイガーって呼んでるらしいの！ これは放置出来ない事態よ！ 悪の芽は早めに摘んでおかないと、その子の為にならないでしょ？ だから、その子を見つけ出して、先生の所に来るように、言ってくれないかしら？ こういうのは、早い対応が肝心よ。悪の華なんか絶対成長させちゃダメ。だから、四回戦のうちにはお願いね」

な、何とも、耳の痛い依頼内容だ。藤村先生、自分がタイガーって

呼ばれてる事、知ってたんだ……。

いや、この場合は初めて知って、それを止めさせたいのか？

藤村先生が居なくなつたのを確認して、アヴェンジャーは私の頭をポンポンと叩きながら、わざとらしく言った。

「アンタ……。そういえば、たまにあの教師の事、タイガーって呼んでなかった？ あら、なら話は簡単ね。アンタをあの女の前に突き出せばいいだけの話じゃないの」

「いやいやいや。私だって弁えてるよ。決して公然の場では言つてません！ 多分、私の事じゃないよ」

犯人は私以外の誰か。そういう事にしよう。そうしよう。

犯人探しという新たなクエストが加わり、アリーナに行く前に調査だけでも先にしておく事にする。まだ午前だし、アリーナに行く時間は十分にある。

「聞き込み調査から始めるかな……」

「探偵ごっこでもする気？ 私はパス。そんな面倒事に頭と労力を使いたくないわ」

霊体化したアヴェンジャーは気にせず、私はまず教室へと足を運んだ。誰かしらマスターは居るだろう。

結果からして、聞き込みによる捜査は上手くいった。それらしき男子生徒——の姿をしたマスター——を見た事があると証言を得られたのだ。

そして、つい先程その男子生徒を校庭で見かけた……という情報を得た私は、すぐさまその足で校庭へと向かう。

そして、確かに「まったく、タイガーは朝から騒がしいぜ。なんだよ、別に校舎内で香を焚くくらいいいじゃねえか。サーヴァントが焚け焚けうるさいから、わざわざ屋上でやってたつてのに。それなのに校内は火気厳禁とか捲し立てやがって。くそ、タイガーめ……。あんなだからタイガーなんて言われるんだ！」と宣うマスターが居た。

「あのう……」

気が立っているようなので、正直あまり声を掛けたくないのだが、

臆しては事が進まない。諦めて、私はおずおずと声を掛けるのだった。

かいつまんで藤村先生から頼まれた事を説明するが、彼は怪訝そうな顔をして、

「何？俺がタイガータイガー言ってるのが、タイガーの耳に入って、呼び出しが掛かってる——？ふんっ、そんなものに応じる気はないぜ。フカヒレでも食わしてくれりゃ、話は別だけどな」

フカヒレ？ これまた突拍子もなく、意外な単語が出てきたな……。だが、どこで手に入れたらよいのか……。言った以上、彼は入手方法を知っているのかも。

「フカヒレか？ マスターたちの噂じゃ、アリーナの最深部のサメが泳いでる辺りにあるって話だな。それにしても、今日開放されたばかりかだつてのに、よくアリーナにそんなものがあるって見つけたよな。攻略早すぎだろ。……って事で、アリーナの最深部にあるっていうフカヒレを持つてくれば、タイガーの話を聞いてやらない事もないぜ」  
アリーナ最深部……。かに玉の時よりも大変そうだが、トリガーや大型エネミーのついでに探すくらいなら訳ないだろう。

回を追う毎に手間も掛かるようになってくるのは、本当にゲームでもしているような気分になる。

男子生徒の要望に従う為——という訳ではなく、そもそもの目的として言峰に課されたクエストのクリアを果たすべく、アリーナに進入する。

第二層に降り立った私たちの目の前には、広大な海が広がっていた。

一回戦では恐竜などの骨と漂う沈没船。二回戦では水没した古代都市。三回戦では氷海に浮かぶ城と、命の躍動感は感じられなかったが、ここは違う。

深海という程ではないが、海中であるのには変わりなく、外の景色には無数の魚が群れを成して、まるで道のように伸びながら泳いでいる。

マンボウが悠々と遊泳し、サメは我が物顔で海を回遊する。奥は海底洞窟になっており、そちらは魚の群れは居ないが、代わりにサメが複数匹で集まっており、おそらく洞窟内は彼らの縄張りとなっているのだろう。

現実なら恐ろしくて進めないが、あくまでエリア外の存在。実際に害を与えてくる事はない。景色だけを楽しむなら、地上ではまず見られない。そこは、まさしく海中の楽園。魚たちのパラダイス。

毎度ながら、二層目は必ずと言っていいくらい、細部に至るまでディテールが凝っている。管理の怪物でありながら、セラフは凝り性でもあるらしい。

「さてと。大型エネミーってくらいだから、アリーナの奥地にでも配置されてるのかしらね？ それと、分かっているでしょうけど、もし敵サーヴァントと遭遇しても戦わないわよ。今回の目標は大物だけに絞る。無駄な力は使わず、大物の為に温存する。そういう意味では、雑魚のエネミーも今日は無視。お分かり？」

うん、とアヴエンジャーに頷いて返す。ラニがキャスターについて調べてくれているし、無茶は控えた方が良く。大型エネミーがどれほどの強さか分からないし、消耗した状態で戦うのは得策とは言えない。

アリーナを駆け抜ける。エネミーは可能な限りスルーし、かわしきれなかったものだけを対処する。初めて見るエネミーは避けるようにルートを選び、奥へ奥へと進んでいく。

走りながら、時折遠くで戦闘音らしきものが聞こえてきており、どうやらレティシアたちもアリーナに来ているらしかった。彼女らも、言峰に課された試練の消化中なのかもしれない。

幸いにも、音は遠くで聞こえており、進行方向とは真逆のようだ。今のところはレティシアたちに遭遇する心配はないと見た。

だが、だからといってモタモタしている訳にはいかない。時間を掛ければその分だけ、レティシアたちとバッタリ出会す、なんていう最悪な事態に陥る確率が上がるからだ。

走り続ける事、15分。海底洞窟のエリアを抜けた先に、開けた空

間が現れる。そしてその中央。明らかに他のエネミーと比べても異質な存在が、私たちを待ち構えていた。

「アレは……!!」

アヴェエンジャーが目を見開き、強く噛み締めた犬歯により唇は軽く裂け、血が地面へと滴り落ちる。

そこに在ったのは、恐怖の塊だった。

無数の骨が積み重なり、巨大な一つの個を構築した、実体の無き亡霊。サイバーゴースト<sup>サイバーゴースト</sup>と脳<sup>ゴースト</sup>とは違った、紛れもない悪霊。

風に乗って漂ってくるのは、あの巨大なゴーストからの感情か。強い恐怖、不安、絶望、嫉妬、憎悪といった負の感情が凝縮された、人間の悪感情の吹き溜まり。まさしく、あのゴーストはそう例えるにふさわしい。

——痛い痛い痛い怖い怖い嫌だ嫌だ死にたくない死にたくない死にたくない助けて助けて助けて助けて憎い憎い憎い憎いどうしてどうして!!

——あの女のせいだ。あの女のせいだ! あの女のせいだ!!!

——異端者め、異端者よ! 神を冒瀆せし魔女よ! 殺してやる、殺してやる、殺してやる!!!!

言葉にならぬ魂の叫び。それは、私ではなく、アヴェエンジャーへと全て注がれていた。私の事など、あの巨大なゴーストは意識すらしていない。

アヴェエンジャーは、一瞬驚いた顔をしていたが、すぐに平静さを取り戻し、悪態を打つ。

「……ハッ! あの神父の仕業か、コレは! また鬱陶しいのを再現したものです。本当、見るに堪えないこの汚物を、また私の前に呼び出すなんてね!!」

巨大ゴースト——エンシェントゴーストの威圧感をものともしない様子で、アヴェエンジャーは旗を翳す。その黄金の瞳には、久方ぶりに怨敵と相見えたかのような、黒き復讐者の憎悪が宿っていた。

「いいわ。何度でも煉獄へと墮としてやる。たとえ単なる再現体だとしても、二度と再現出来ぬよう、その薄汚いデータを奈落の底まで叩き落としてやるわ!!」

アヴェンジャーの咆哮が空間に轟く。それはエンシエントゴーストの腹の底まで響くような怨嗟の呻きよりも濃い、どす黒い悪意に満ちていた。

……あの感じからして、アヴェンジャーはこのエンシエントゴーストを知っている。エネミーとして、ではない。それ以外の何かとして知っている。もしくは認識しているのだ。

彼女の過去と関係しているのかもしれないが、今はアレを倒す事だけを考えないといけない。

絶対に倒さなければならぬ理由が他にもある。何故なら、アレの後ろには――

「アヴェンジャー、アイツの後ろに暗号鍵トリガーがある!」

「分かってる! アイツを殺す! それで終わり! 今はそれだけよ!!」

アヴェンジャーの掲げた旗に反応を示したのか、エンシエントゴーストが怯えるように後退り――と思いきや、その長大な腕を横風ぎに振り払う。

骨だけであっても、その巨軀から放たれる一撃は並のエネミーを一撃で葬り去る威力を有する。不意打ちを旗で受け止めるが、パワーに差があるために押し負けてしまう。攻撃を受け止めた旗ごと、アヴェンジャーは横に引き摺られる。

「この、クソッ!」

体への直撃は辛うじて防げているが、腕の駆動可能限界まで耐えた瞬間、逆の腕がアヴェンジャーへと伸び、その胴体を鷲掴みにした。肉の無い骨だけの指なのに、どこにそれだけの力を持つというのか。アヴェンジャーの体中の骨がミシミシと悲鳴を上げる。締め上げられ、このままでは内臓が粉碎されるのも時間の問題だ。

「アヴェンジャー!」

「ぐくつ……! うがああああああ!!」

憤怒の雄叫びを上げながら、アヴェエンジャーは炎を噴出させ、自らの体を巻き添えにしながらも、エンシエントゴーストの手を文字通り炎上させた。

——ギヤアアアアアア!!! 熱い熱い熱い熱い熱い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!

苦悶の叫びは、エンシエントゴーストから漏れ出たものだった。

しかし、全身を炎で包んだアヴェエンジャーの方が、もつと痛いはずだ。その絶叫は、お前なんか上げていいものじゃないはずだ。

骨の手が炎で怯み、出来た隙間からすかさず抜け出るアヴェエンジャー。後退した彼女の全身は焼けて、服が少し焦げ落ち、髪もプスプスと黒い煙を上げている。マントはボロボロの穴空き状態だ。肌は火傷で少し爛れた箇所もあり、彼女の白い肌には火傷がとても痛々しく映った。

「初手から大ダメージとか、虫酸が走るわ。あの雑魚をよくもここまですぐ違法改造してくれたわね、あのクソ神父……!!」

悪態を吐く余裕はまだあるようだが、ダメージが大きい事にならない。すぐにコードキャストで全回復させるが、魔力をかなり持つて行かれた。そう何度もダメージを受け続ければ、私程度ではすぐに底をつく。

「アヴェエンジャー、まずは防御に徹して。今はアイツの動きを観察しよう」

「癪だけど、仕方ありません。魔力を回しなさい、マスター！ 腕力にブースト！ それで多少はガードが活きる！」

言われた通り、なけなしの魔力を使ってアヴェエンジャーにコードキャストを掛ける。この腕力増強コードキャストを使つての様子見は一度きり。効果時間はおよそ3分。この短い時間で、敵の動きを見極めなければならぬ。

それが出来なければ、私たちは死ぬ。

エンシエントゴーストは炎を振り払い、その衝撃の余波が暴風と化してアヴェエンジャーに向けて飛来する。

衝撃波を力任せに旗で掻き消すが、すぐさま第二、第三の衝撃波が



殺到するように押し寄せる。

「手数が、多いわね!!」

連続して放たれる遠距離攻撃を強引にいなすアヴェンジャーに対し、エンシエントゴーストは6発目の衝撃波を放つたと同時に、アヴェンジャーに向けて突進した。

その両腕を左右に大きく伸ばし、目にも止まらぬ速さでアヴェンジャーを叩き潰そうする。

既に次の攻撃が見えていたアヴェンジャーは、最後の衝撃波を叩き潰すと、すぐさまその勢いを利用して、旗で棒高跳びの要領で宙へと身を投じる。

空を切った骨の手が、バキヤツという甲高い音を響かせた。骨と骨とが肉を介さず直接ぶつかり合う嫌な音に、私は思わず耳を塞ぐ。

だが、アヴェンジャーは不協和音を意にも介さず、エンシエントゴーストの顎目掛けて、旗を大きく振り上げた。

「砕けて死ね!!」

攻撃した瞬間に、その隙だらけの顔面に下からの強烈な一撃をまともを受けたエンシエントゴーストは、下顎を見事に打ち砕かれ、口から下が完全に消滅する。

——オオオオオオオ!!!

しかし、宙で攻撃したアヴェンジャーにも、攻撃後の隙が生まれるのは必然。エンシエントゴーストは顎が砕けながらも、旗による一撃で上向いた頭を一気に振り下ろし、アヴェンジャーは胸にまともな頭突きを受けてしまう。

「ガハッ——!?!」

敵も咄嗟のカウンターだったのと、それが打撃だった事もあり、ダメージは大きくはないが、地面に背面から叩き付けられたアヴェンジャー。

肺から空気が押し出され、呼吸もままならない。そこへ、逃がさんと追撃とばかりに、その巨体で押し潰そうと倒れ込んでくるエンシエントゴーストに、私はガンドを撃ち込む。

一瞬で良い。僅かでもアヴェンジャーが体勢を整える時間を作る

事が出来るなら――。

ガンドがエンシエントゴーストの脳天に直撃し、3秒ほど動きが止まるが、アヴェンジャーにはそれだけで十分だった。

手から炎を噴出し、ジェット噴射の如くの高速度で巨体の影から退避する。すかさず骨の手がアヴェンジャーを捕まえようと伸びるが、その手は虚空を掴むのみ。

勢いよく私の前まで戻ってくるアヴェンジャーだが、同時に強化の効果も消えていくのが分かった。

「いつも思うけど、人間<sup>その</sup>火炎放射器<sup>ス</sup>って色々と便利だよね」

「誰が火炎放射器だったの。まあ、否定出来ないけど……。それで、観察してみてください？ 何か掴めたんでしょうね」

「うん。粗方は見えた」

動きを見ていて分かったのは、エンシエントゴーストは巨体の割に動きが遅くない事と、その上でリーチが長いために広範囲をカバーしているため、懐に入って戦う必要がある。

そして、遠距離攻撃は腕を振った際に生じる衝撃波だけ。あとは主に肉弾戦を用いるのみ、という事。

まだ何か隠し玉を持っているかもしれないが、ここまで使って来ないなら、ダメージ上限が発動のトリガーになっているのかもしれない。

もしくは、本当にこれまでの動きのみがアレの取れる全てであるか。

「なるほどね。ま、妥当なところかしら。戦って分かったけど、多少強化されているとは言え、やはりアレは単なる再現データに過ぎない。アレの嘆きは、絶望は、憎悪は。空虚でしかない。形しかない。中身が伴っていない。そんな見せかけだけの木偶に、この私が負けるなんて事は許されない。許されないのよ――」

噛み締めるように言葉を紡ぐアヴェンジャー。その後ろ姿に、私は彼女の心の底が、本音が見えた気がした。

あのエンシエントゴーストは、私の知らないアヴェンジャーの過去そのものが発露した存在なのだろう。あのゴーストの元となったも

のの正体は分からない。けれど、きっと、アレを倒す事は試練がどうかではなく、アヴェンジャーや、彼女のマスターとなった私には必要な通過儀礼なのだと思う。

「アヴェンジャー。行ける？」

「当然。アレは私の記憶の再現、という事は、その動きも元々のものと変わらないという事。そろそろ勘も取り戻してきたし、一気に決めましょうか」

後ろからでも、彼女が不敵に笑ったのがなんとなく分かる。それだけ、アヴェンジャーと以心伝心が出来てきている証拠だろう。

アヴェンジャーの過去の一端、アレを倒す事で、私は彼女の真名に近付けるような——そんな予感があった。

## 真名開示：アヴェンジャー

敵の出方を窺うまでもなく、アヴェンジャーは走り出す。エンシエントゴーストはリーチが長い分、間合いさえ詰めればそのリーチを活かせず、体当たりや頭突き、のしかかりといった風に攻撃方法が単純化する。ならば、防御に回るよりも攻めに徹した方が、アヴェンジャーに分がある。

走り迫るアヴェンジャーに、衝撃波や腕を薙いで応戦するエンシエントゴーストだったが、アヴェンジャーは既にそれらを見切っていた。

走る足は止めずに衝撃波を旗で強引に打ち払い、押し寄せる骨腕には炎を放射する事で勢いを殺し、速度が落ちたところを弾き返す。

アヴェンジャーの猛追に、エンシエントゴーストは後退しながらの迎撃を余儀なくされるが、それはイコールとして、こちらが敵を追い込んでいるという事に他ならない。

「炎が怖いか！ 自らは異端者にそれを強いておきながら、いざ己が身にそれが迫れば、お前はそれに恐怖するのか！ ふぎける、どれだけ度しがたいというのか、この愚者が!!」

怒りの咆哮と共に旗を振るうアヴェンジャーの姿は、まさに復讐に猛る悪鬼のようだ。迫力だけで言えば、おそらくこれまでの戦いでは、これが一番かもしれない。

彼女にとつて、過去と相對するという事は、それほどまでに重きがあるのだろうか。

アヴェンジャーが指摘したように、エンシエントゴーストは炎を恐れている節があつた。炎、とりわけ痛みに対し、強い忌避が見られるのだ。

悪霊でありながら、痛みを恐れるあまり攻撃も雑多になりつつあり、アヴェンジャーはそれを見逃すはずもない。

大雑把な攻撃を次々と軽くいなし、かわし、受け流し、弾き——  
着実に距離を詰める。もはや敵に彼女を止める術はなく、瞬く間に工



貰ってるけど、必要数があとどれくらいなのかが分からないわね」

霊基再臨、か。魂の改竄と同じようなものなのだろうか？

前に説明された気がするが、まったくこれっぽっちも覚えていないです、ハイ。

結局、貰ってから他の素材を手に入れる機会が無かったから、私たちには縁がないものとはばかり思っていた。

けど、面倒な事をさせられたおかげで、途絶えたと思っていた強化への道が僅かながら繋がった。

その点に関してだけは、言峰に感謝しておくでしょう。

忌々しげに焦げた地面を見つめるアヴェンジャーを尻目に、私は暗号鍵トリガーの収められた緑色のアイテムフォルダを開く。

中から現れたのは『トリガーコード シータ』。手を翳すと、端末へと取り込まれていく。

これについて、聖杯戦争の前半から後半へと、完全に足を踏み入れた事になる。折り返しは終わり、より険しく厳しい戦いが待つスタート地点を、踏み切ったのだ。

「……存外に疲れたわ。今日はもう探索だなんて気分じゃないし、リターンクリスタルで校舎に帰りましょう。今、アイツらと鉢合わせるのだけは勘弁だし」

アヴェンジャーはこれ以上の探索は気分が乗らないようだ。多分、疲れだけが理由ではないだろうけど、それをここで追及すべきではない。あのエネミーとの戦闘に込み入った事情があったのは、考えるまでもなく分かる。

……この四回戦では、アヴェンジャーの過去に関わる事柄が多く見受けられている。何の根拠も無いが、アヴェンジャーの真名が分かる日が、そう遠くない——いや、もうすぐなのではないか。そんな期待と希望に満ちた予感があった。

アヴェンジャーの要望通り、リターンクリスタルを使用して私たちはアリーナから帰還した。

いつもより切り上げるのが早かったためか、時刻はまだ16時と、

夕方に差し掛かった頃。この余った時間をどうしようかと考えていると、アヴェンジャーから意外な提案があった。

「……アンタにちよつと話があるわ。さっさとマイルームに戻るわよ」

話とは多分、さっきの事なのだろう。

込み入った話なら、マイルームでするべきは当然。私は黙って、先を歩くアヴェンジャーについて行く。マイルームに戻るまでの間、一言も交わさない私たち。そのため、緊張感も比例するように高まっていた。

長かったようで短い道のりも終わり、マイルームへと入る私たち。アヴェンジャーはいつものように装備を外そうとはせず、そのままで机で作った壇上に腰を下ろした。

私もいつもの場所に座り、自然と彼女に正面から対面する形となる。

暫しの沈黙の後、とうとうアヴェンジャーはその重い口を開いた。

「今日倒したあのエンシエントゴースト、アレが私の真名に関与してるって事は……もう分かってるわよね」

「……うん。あなたと何か因縁めいたものがあるように見えた」

「因縁、ね……。あながち間違いないでしょう。アレはかつて私が殺した、とある人間の怨念みたいなもの。いいえ、多分それだけじゃない。その人間の魂を核に構成された、私に殺された者たちの集合体とも言えるでしょうね。まあ、データによる再現ではないけど」

「……アヴェンジャーの過去に何があったのか、彼女が何者であるのかさえ私は知らない。けれど、私は彼女がこう自称しているのを知っている。」

——竜の魔女。

自らを異端者であると自嘲する彼女は、復讐者のクラスとして現界を果たした。それが意味するのは何か。

文字通り、何かへの復讐を望む者。もしくは、それを成し遂げた者こそ、そのクラスに分類されるのだろうか。

あくまで予測の範疇を出ない。だって詳しい事は分からないのだから。

なにぶん、『アヴェンジャー』は既存七つのクラスのどれにも当てはまらないからこそ割り当てられる、例外中の例外とも言うべきクラスだ。

どのマスターも口を揃えて、「エクストラクラスとは何なのか。どのような英霊が、そこに分類されるのか」と疑問を上げる存在。それがエクストラクラスなのだ。

『復讐者』はそのエクストラクラスの中でも特に異例だと、いつだったか私のアヴェンジャーが言っていた気がする。

ともあれ、アヴェンジャーが復讐者のクラスであり、あのエンシエントゴーストが関係しているというのなら、アレこそが彼女にとつての復讐の対象であつたのかもしれない。

それを伝えたところ、彼女は否定するでもなく、どこか他人事のように続けた。

「そうね。確かに、アイツも私の復讐の対象だったのかもね。今となつては、私自身ですらよく分かつてないけど」

「それは、どういう……」

「私の復讐は、一個人に対するものじゃない。——私は憎む。フランスという国を。そこに住む人々を。神なんてあやふやなものに救いを継る人間どもを！……なんて、それが私の存在意義だった。でも、今となつては私でも分からない。私がサーヴァントとして成立してから、色々な事があつたりしたけど、その上で私は改めて思うのよ。私は何故生まれ落ちたのか。何のために存在するのか。私という個に意義なんてあるのか……」

……約一ヶ月の間、彼女と一緒に過ごしてきたが、ここに来て初めて、私はアヴェンジャーの抱える苦悩と葛藤を知った。

何かしら抱えているとは思っていた。だが、それがまさか自分の存在そのものに対する事だとは露ほども思わなかった。

アイデンティティに疑念を覚えたアヴェンジャー。そして、アイデンティティを喪失した状態で目覚めた私。



私たちには、どこか似通った点があったのだ。その点とは、己という存在への問いかけ、という事だったのだろう。

「サーヴァントとなった時、自らの在り方を結論付けたつもりだった。でも、こうして私だけの、唯一のマスターを得た上で聖杯戦争を勝ち進んでいくうちに、私はその在り方を見失っていた。フランスという国、神を信じる人間たちへの憎悪と憤怒、絶望で構成されたはずの私だったのに、今の私はそれが二の次になってる。……白状するけど、今の私が最も優先するのは、アンタにこの聖杯戦争で最後まで勝たせる事」

どこか悟ったような顔をする彼女は、とても穏やかに見えた。魔女などではなく、聖女が如き慈愛を感じられた。彼女の根底を垣間見たような。

「これも良い機会なのかもね……。もう、ここまで来たら言ってしまうでしょう。あのゴーストの元となった男の名は『ピエール・コーション』。そして、その男により異端の烙印を押されて火刑に処された女——それが私です、マスター」

ピエール・コーション……。

かつてのフランスで異端審問官として、世界で最も高名な聖女を火炙りにしたとされる聖職者の名前だ。

ならば、つまり、アヴェンジャラーの真名は——!!!!  
「ジャンヌ・ダルク……! 貴方が、あの救国の聖女!?!」

驚愕に震える私を、アヴェンジャラーは真っ直ぐ見つめている。私の反応が予想通りだとも言おうように。さりとして言葉にはせずとも、彼女の目がそう語っていた。

オルレアンの乙女。二十にも満たぬ歳で軍を率い、旗を掲げて味方を鼓舞した救国の英雄。その最期はあまりに悲しいが、その死後に聖人として認められ、フランスはおろか、世界で知らぬ者は居ない程の聖女。

……、でも、腑に落ちない。

アヴェンジャラーを信じていない訳ではない。今更、彼女が嘘をつく必要なんて無いし、真名の開示は私を信頼した上での事だろう。

なのに、頭に引つ掛かる違和感がある。それは彼女が『ジャンヌ・ダルク』であるという事に他ならない。

「ジャンヌ・ダルクがこんな邪悪な魔女である筈が無い……。そう思ったんでしよう、マスター」

私が抱いた違和感に気付いたのだろう。アヴェンジャーは自嘲の笑みを浮かべていた。

「そうよ。私は世界に名高い聖女様なんかじゃない。清廉でもなければ、善良でもない。神への信仰など、とうの昔に捨て去った。けれど、私が『ジャンヌ・ダルク』である事もまた事実。その点について話すのは……またの機会にしましょうか」

アヴェンジャーはそう言っ、それ以上は口を開こうとしなかった。まだその段階ではない、という事なのだろう。

でも、今はそれでも良い。だって彼女は私に真名を明かしてくれた。この真名開示は、私たちが築き上げた絆の証と言える。

アヴェンジャーの正体についての謎は深まりはしたが、大きな進展があったのは間違いないのだ。

「分かった。その時が来るのを待ってるね。アヴェンジャー」  
「……」

私が彼女を真名で呼ばなかった事に、今度はアヴェンジャーが驚いた顔をした。まあ、そりゃあ呼ばないだろう。自分の名前なのに、あんなに嫌そうな顔で話すんだから。

しばらく面食らった顔で固まっていたアヴェンジャーだが、動き出したかと思うとすぐに顔を背けてしまう。

「あつそ。まあ、呼び方なんてアンタの好きにしなさい。確かにこれまで通りのほうが、敵の前で真名を呼ばれるなんてヘマをされなくて済むでしょうからね。さ、疲れてるんだし早く寝るわよマスター」

そう言っ、鎧を速攻で脱ぎ捨て、寝入ってしまったアヴェンジャー。だが、私は見逃さなかった。一瞬だけだったが、彼女の口元が綻んでいた事を。

アヴェンジャー程ではないにしても、私も多少なりとも疲れが溜まっていたようで、気付けば次の日になっていた。アヴェンジャーの姿を探すが、彼女の寢床に「教会に行ってくる」とだけ書かれたメモが残されていた。けっこう達筆だなあ、と思いつつ、何故アヴェンジャーは一人で教会に行ったのだろうかという疑問が浮かぶ。

昨日の気恥ずかしさから、朝一番で顔を合わせ辛いのもかもしれないが。それにしたってアヴェンジャーは教会を嫌っていたというのに、何の用があったのだろうか？

アヴェンジャーは一人で行ったのだし、私が付いて行く必要は無いという事だろう。私も、アヴェンジャーと合流する前にラニの所に寄って行くとしよう。

四回戦も五日目となり、校舎内の空気もピリついている感じがする。どのマスターも、来たるべき戦いに備え何かしら戦略を練っているのだろう。すれ違うマスターのほとんどが、目付き鋭く端末とらめっこをしていた。それらを目にする、決戦が近付いてきているのが、如実に感じられる。

保健室に入ると、ラニは既に起きており、まるで私を待っていたとばかりに視線を向けてきた。

桜に軽く挨拶を済ませ、ラニの元へと向かう。

ラニとここ数日話をしていて、明らかに彼女の声が明るくなったのが、密かに嬉しかった。

初めは「自分が助けた」などと思ったりもしたが、実のところは、こうして話をする事で、救われたのは私かもしれない。

「どうかしたのですか？」

黙っていた時間が思ったより長かったのだろう。ラニは心配そうにこちらを見ていた。

そういえば、ラニはレティシアの情報を探ってくれると言っていたが、危険は無かっただろうか？

まだ、身体も万全ではないのだ。

「対戦相手の件、ですね。私は大丈夫です。ですが——やはりまだ情報が足りず、これと言いつ切るには難しい。幾らかアトラスの書庫内

から該当する者を候補に挙げられたのですが……」

それはすごい……！

実のところ、対戦相手の調査はほとんど進んでいない。それをラニはこの短期間で候補を挙げるにまで至るとは。さすが、アトラス院が聖杯戦争に送り出すだけの事はある。とんでもなく才女すぎる。

それを素直に伝えると、ラニにしては珍しく頬をほんのりと染めて、恥ずかしそうにしていた。

「い、いえ。私はただ、岸波さんの得た情報を元に調べ上げたに過ぎません。それで、候補なのですが、まず鬼を基軸として情報を集めました。その結果、絞り込めたのは4名の鬼です」

第一候補：茨木童子

これに関しては私も最初に思ったが、ラニの調べでは、茨木童子は？ 化の術を使う事ができ、普段から角を隠せていたのはそれが理由ではないか、という事。高貴な生まれであるという説もあるらしく、気品のある口調なのも頷ける。ただ、呪術を扱えるのかという点については怪しいのだそう。もしかしたら、史実に残っていないだけで、呪術を扱えたのかもしれない。

第二候補：鬼女・紅葉

私としては最有力候補なのではないかと思う人物だ。その生い立ち、逸話から呪術を扱ってもおかしくない。今のところ、キャスターの真名は紅葉なのではないかと、私も怪しんでいる。だが、まだ決め付けて掛かるには早いだらう。

第三候補：鈴鹿御前

第四天魔王の娘であり、伝説では天女や鬼、盗賊など数々の姿を持ち、非業の死を遂げる事でも知られる有名な女傑だ。大嶽丸を討つ為に妻となって潜り込んだはいいが、そのために最愛の人、坂上田村麻呂に誤解の末に殺されてしまう。

彼女ならば、呪術を扱えなくもない気がするが、果たして……。

#### 第四候補：橋姫

呪術という点で見れば、可能性としてはかなり高いかもしれないのが橋姫か。丑の刻参りは代表的な呪術の一つで、そのルーツが彼女にあるという説だ。源平盛衰記などにその存在を記されているそうだが、私も読んだ訳では無いので詳しくは知らない。

「——と、これらが現在候補として挙がっているのですが、如何ですか？」

どれも可能性としてはあり得る。しかし、これと決め打つにはどれも決定打に欠ける。

猶予は今日、明日だけだから、この二日間で更に情報を集める必要がある。

「……決め手に欠けるといふのは、私も同意します。実際、鬼をピックアップはしてみました、それらが巫女でもあるかと問われると、首を縦に振る事は出来ません。そもそも、魔の象徴たる鬼である事、魔を払う象徴たる巫女である事が、互いに相反し合っています。それらを同時に満たす過去の人物となると……私では見当がつかないので」

すみません、と項垂れるラニに、私は顔を上げるよう伝え、お礼を言う。ここまで調べてくれただけでも、私にとっては御の字なのだ。橋姫や鈴鹿御前など、私では候補にも挙げられていなかったのだから。

ラニはこの結果に若干だが不服そうにしつつも、メガネをクイツと上げると、

「ところで、岸波さんの方はどうなのでしょう。記憶に関する手掛かりなど、アレから何か進展はありましたか？」

進展か……。無い、けどアヴェンジャーの真名なら判明した。というか教えてくれた。でも、本人がここに居ないのに、真名を無断で他者に伝えるべきではないだろう。

「進展はしてないよ。何か取っ掛かりさえ見つかればいいんだけど」「そうですね。そちらも私の方で考えておきます」

何から何までラニに頼りきりで申し訳ない気持ちになるが、彼女の事を思えばこそ、その厚意に甘えるのが正解なんだと思う。

そのまま他愛ない話をしてしていると、不意にアヴェンジャーからパスを通して連絡が入った。

(マスター、もう起きてるわね？ こっちの用は済んだから、合流するわよ。聞いて驚きなさい、そして喜びむせび泣くが良いわ！ とつておきの朗報があるわよ)

(いつになく機嫌がいいね。分かった、すぐ行く――)

不意打ちとは、意図せぬ方向から来るからこそ。念話を切ろうとした瞬間、保健室に来訪者があった。

コン、コン、コンと小気味よいノックの後、聞き覚えのある声がして、その声の主が入ってくる。

「失礼します。ここにいらしたんですね、岸波さん」

それは、二日ぶりに聞くレティシアの声だった。といっても、アヴェンジャーと声の質すら寸分違わず、ある意味聞き慣れているので二日ぶりに感じられなかったが。

「先日はご迷惑をお掛けし、本当にすみませんでした。キャスターの暴走は私の未熟さ故。言い訳にしかありませんが、アレは決して私たちの本意では無かったのです。それだけはお伝えしたくて。私は正々堂々と、あなたとアヴェンジャーに向き合いたいと思っています」

律儀にも、それを伝える為だけに私を探していたのか。別に私も、アレが意図的なものだったとは思っていない。コントロール出来なかったからこそその暴走だろう。

(なに？ どうしたのよマスター。何かあったワケ?)

アヴェンジャーとの念話を切り損ねた事もあり、こちらで何かあったと思っただらしいアヴェンジャー。

(ちよつと。今レティシアが目の前に居る。多分、物騒な事にはならないと思う)

(ふーん。どうせアンタが居るのは保健室でしょ。私も向かうわ)

今度こそ念話が切れた。教会からなら、そう時間は掛からないだろ

う。

ん？ 何か違和感がある。何に？ それは、アヴェンジャー……。そしてレティシア。

——そうだ、そうだった！ 何故最初に思い至らなかったのか。アヴェンジャーとレティシアは知り合いだった。アヴェンジャーの真名はジャンヌ・ダルクだった。

なら、ジャンヌ・ダルクと瓜二つであるレティシアは何者だ？

そもそもサーヴァントと知り合いの魔術師ウィザードってどういう事なんだ。普通に考えておかしいだろう。

レティシアがジャンヌと縁深い事はまず確実だ。でなければ、細かな違いはあれど、ここまで容姿が同じなんて有り得ない。

「……どうかしましたか」

つい凝視していたようで、レティシアが居心地悪そうに尋ねてくる。聞かぬなら、今なんじゃないのか？

ここでなら、戦闘になる事は絶対がない。管理側のAIである桜の目の前で、まさか襲ってくるなどという無謀な真似は出来ないはずだ。

「初めて会った時に聞くべきだった。レティシア、あなたは私のアヴェンジャーの何？ どうして英霊と同じ姿なの？ 今を生きる人間のはずのあなたが!？」

私の問いに、レティシアは答ええない。微笑みを以て返すのみだった。

保健室を静寂が支配する。奇しくもこの現場に居合わせてしまった桜は、私とレティシアを交互に見て困惑している。

ラニは、私同様、静かにレティシアを見つめていた。

いつまで経っても問いには答えず、かつ微笑みを崩さないレティシア。加えて問い質そうとしたその時、ようやくアヴェンジャーが遅れて到着した。

「マスター！」

アヴェンジャーはすぐさま私の前に立ち、ちょうどレティシアと私の交差する視線を遮る形になる。

「……」

ただならぬ緊張感が漂い始める。まさに一触即発、何か些細な切掛でもあれば、地獄の蓋を開けかねない程に。

空気が重い。全身を水に包まれたかのような錯覚さえした。

アヴェンジャーとて、ここで戦闘を開始する事が愚行であると理解しているはず。それでも、一抹の不安が拭えない。それほどの圧力を、アヴェンジャーはレティシアに対して放っていた。

先に痺れを切らしたのは、意外にもレティシアだった。

「……ふう。慣れない事はするものではありませんね。私に隠し事は向いていないというのに。ですが、こればかりは私の口から伝える事は出来ません。私がそれをするのは筋違いというもの。筋を通すべきは貴方ですよ、アヴェンジャー」

「……分かつてるわよ。真名を伝えただけじゃ、ダメなんだって事くらい」

「！ 真名を……。そう、ですか。伝えたのですか」

何故だろう。優しい目でアヴェンジャーを見つめるレティシアが、なんだか急に彼女の姉であるかのように見えてきた。

「では、後は貴方の気持ち次第。私としては見守りたい気持ちではありませんが、それとこれとは話が別。私本来の目的とは関係ありませんから。岸波さん、貴方の質問に答えられないのは残念ですが、これで失礼しますね。アリーナで待っています」

一礼をして、彼女は去って行った。続きはアリーナで、という事なのだろう。

結局聞き出す事は出来なかった。かといって、アヴェンジャーから聞き出すにしても、彼女のタイミングを待つと決めればかり。謎は謎のまま。いずれ明らかになるのを待つしかないだろう。

ようやく保健室がいつもの穏やかな空間へと戻る。桜も肩を撫で下ろし、ホッと一息ついていた。

「あの女性が岸波さんの対戦相手なのです」

展開を見守っていたラニが口を開く。そういえば、助けてからずっと保健室に居たから、ラニがレティシアを見たのは初めてなのか。い



や、でも対戦相手でなくても、それ以前に見かけた事があってもおかしくない。

「いいえ。少なくとも、私は彼女を校内で見た事はありません。無論、すれ違ったりといった事も無いはずです」

それはどういう事だろう。四回戦まで残っているのなら、有力なマスターの一人に違いないと思うが……。

凜やレオにも聞いてみようか……。

とにかく、私たちもアリーナへ向かおう。アチラが待ち構えているのなら、情報を得るまたとない機会なのだから。

「行こう、アヴェンジャー」

「……そうね。鬱憤晴らしをしてやるわ」

あまり派手にやらないように、目を走らせておかないと。

保健室を後にし、私たちはレティシアの待つアリーナへと一路向かうのだった。

## マトリクス：アヴェンジャー

真名：ジャンヌ・ダルク  
クラス：アヴェンジャー  
マスター：岸波白野

ステータス

(4章、真名開放の時点)

筋力 B ↓

耐久 C

敏捷 C

魔力 B

幸運 D +

スキル

- ・自己改造 EX
- ・竜の魔女 EX
- ・うたかたの夢 A
- ・復讐者 B
- ・真名看破(偽) EX
- ・自己回復(魔力) A

竜の魔女「EX」……生まれながらにして竜を従える力を持つ。また、スキルとしても所持している能力であり、ランクとしてはEX相当。竜を従える者としての最上級のランクである。スキルとして使用した場合、味方の竜種や、竜の血裔の強化が出来る。

復讐者「B」……敵対者から傷を負わされる毎に、傷を負わせた敵対者に対しての与えるダメージが増大していく。憎悪を募らせ、その邪悪を敵対者は自らが負う事になるのだ。

自己回復（魔力）「A」……何もしていなくとも、自然と自身の魔力が回復していく。ランクAともなれば、マスターに頼らずとも、ある程度は自分で必要な魔力を生成出来る。宝具の使用は厳しいが、マスターの魔力消費を抑えられるという、節約出来るお得スキル。

自己改造「EX」……参照不能。

真名看破（偽）「EX」……本来の真名看破とは全く異なるスキル。自らの真名を隠匿し、暴かれたとしても彼女自身の真実を知る事は他人には絶対に不可能。本人、またはそれを知る者が口にしないう限り、他に知る術はない。

月の聖杯戦争に参加するにあたり、その出自から獲得した彼女の固有スキル。

うたかたの夢「A」……参照不能。

## 宝具

『○○○○○、○○○○○』……参照不能。

フェルカーモルト・フォイアドラツヘ  
『焼却天理・塵殺竜』……正式な宝具という訳ではなく、この霊基では本来扱う事のない宝具。真名隠しの為に三回戦では仮初の宝具として用いた。実際はスキルに分類され、無理矢理に擬似宝具として使用したもの。

三つ首竜のような形状の黒炎を放出し、敵に連続で黒炎竜が襲いかかる。その最後に、自身が止めの一撃を放つという、オーバーキルにも程がある攻撃となっている。名前の由来は、単純にカツコイイか

ら。

『デユランダール・ル・ノワール祖国断つ黒刃』……一回戦の際にエネミーからもぎ取った大鎌を、アヴェンジャーは自己改造スキルにより自身の武器として霊基に取り込んだ。その鎌を全力で振り抜き、生じた衝撃波は斬撃に。その斬撃に黒い炎を纏わせて放ったのが、この宝具。実際はこれも宝具というよりは、スキルという分類が正しい。

宝具の名前には皮肉が込められている。母国の言葉を用いながら、その母国を断つものこそが、この黒炎の刃であるのだとアヴェンジャーは声高々に叫ぶ。

## 強者への挑戦

「ところで、まだハンティングの期間は継続しているのだが、まさか忘れてはいないかな？」

保健室を出た直後、アリーナに向かう私の肩を男性特有の大きな手が掴み、歩みが止められる。この電腦世界においてセクハラもへつたくれもないが、世が世なら問答無用でセクハラ案件なので、みんな（？）はおもむろに女性の身体に触れちゃダメだぞ！

……一体、誰に対して注意を呼びかけているのだろうか、私は。

とにかく、私は言峰に行く手を阻まれ、出鼻を挫かれる形となったのである。

「え。あれって一体狩って終わりじゃなかったの？」

「無論、モンスターハントはまだ終わりではないとも。たった一体の強敵を倒した程度では、君もサーヴァントも物足りないだろう。私としては、マスター諸君にはこの試練を覆いに味わってほしいと思っているのでね。故に、何も君だけに限った話ではない。他のマスターも、まだ残りのタスクをこなしているところだ」

どうにも、この神父は私たちに困難と分かった上で、この厄介事をクリアさせたいらしい。つくづく侮れない人物だ。

マトリクス埋めが懸かっている以上、マスターであるなら言峰の課す試練を無視する事はできないのだから。

「では、行きたまえ。君のタスクは大型エネミーが残り一体。健闘を祈っている」

この神父に祈ってもらっても嬉しくないな……。どころか、逆に不運に見舞われそうで、できれば止めてほしい。聖職者なのに縁起悪い感じがプンプンするし。

本人も分かかってやっつてそうなのが、余計にたちが悪い。

『どうせ一体目の時みたいに因縁のある奴でもぶつけてきそうね。神父のクセになんて悪趣味だコト。やっぱ神に信仰を捧ぐような連中は嫌いね、私は』

なんとも聖女らしからぬ発言だが、アヴェンジャーは魔女を自称しているのだから仕方ないか。

さて、出鼻を挫かれたが、今度こそアリーナに急ぐとしよう。大型エネミーだけでなく、レテイシアも待ち構えているはずなのだから。

「!!」

アリーナへと入った瞬間、何の前触れもなく、私は強い寒気に襲われた。いや、いつもよりアリーナ中が熱く感じられる。だということに、何故か寒気はする。

理由は明白だ。何者かの存在に、私の生存本能が命の危機を報せているのだ。

サーヴァントとの戦闘時に感じる殺気に近くもあり、しかし、これまで感じたどんな圧迫感よりも尚重い気配が、アリーナ全体に充満している。

多分、この重圧は今回のターゲットが放っているものなのだろうが、直感的に分かる。昨日のエンシエントゴーストなんて、これの比じゃない。いや、比べるべくもない。

おそらく、本来なら関わるべきではない、関わってはいけない存在が、このアリーナに君臨してしまっている。

「——まさか」

アヴェンジャーもこの濃すぎる気配を察知しているが、やはり彼女にはその存在に心当たりがあるらしい。

「私の想像通りの奴がターゲットなら、竜の魔女たる私に対し、えげつないレベルの当てつけね。というか、上等よ。もしアイツだったらまた従えてやるだけの話だし」

不敵に笑うアヴェンジャー。だが、私はそれどころではなかった。重圧だと思っていたものは、多分そのエネミーから漏れ出た魔力だ。熱く、重く、どす黒い。廃油を煮詰めたかのような、ドロドロとして且つ熱すら内包する魔力は、空气中を瘴気のように漂っている。普段なら存在しないはずの熱気に、頬を汗が伝う。

この魔力の充満したアリーナには、あまり長く留まり過ぎない方が  
良い。並の人間では半日と経たずに、狂気に駆られるだろう。

結論から言つて、この重圧の主は後回しだ。これとやり合つて無事  
で済むとは思えない。最悪、こちらが死ぬ可能性の方が高い。勝てた  
として、疲弊しきつた状態でレティシアとキャスターを相手取るのは  
拙い。それこそ、強敵相手の二連戦なんて以てのほかだ。

それはアヴェンジャーも理解してくれているようで、レティシアを  
先に対処すると伝えると、二つ返事で応じてくれた。

「それじゃ、エネミーは後回しで。どうせハントは明日まで期限があ  
るし、今日じゃなくても構わないし。それに、キャスターと戦闘出来  
る機会を逃す手はないでしょう。むしろ、こちらの方が明日もまた機  
会が巡ってくる保証なんてないわ」

ごもつともな意見で。

よし、それじゃあレティシアたちを見つけよう。なるべく早々に終  
わらせたい。私の正気が保つ間に。

大型エネミーの姿は未だ捉えられないが、アリーナを進んで少しし  
て、目当てだった後ろ姿を視界に捉える。隣にはキャスターが控えて  
おり、今は暴走していないようだ。

待ち構えていた……というよりは、レティシアは何もせずにはんや  
りと立っていただけのようにも見えた。

「お望み通り、来てやったわよ」

威嚇増しませいのアヴェンジャーの声音に対し、レティシアは臆する  
でもなく、悠然とこちらに振り返る。

「決戦は明後日。本来であれば、相応しき場以外での戦いは私の望む  
処ではありません。ですが、岸波さんにはご迷惑をお掛けしてしま  
いました。故に、私はここで貴方たちと剣を交えましょう。それが貴方  
の望みでもあるはずですから」

それは確かに願つてもない申し出だ。今までのマスターなら、こち  
らが望むまいと出会えばすぐさま戦闘になっていたが、レティシアは

それを望まない。

だからこそ、この申し出は千載一遇の機会。彼女が対戦相手にできえ真摯であるが故の、またとない好機。おそらく、これが決戦までに情報を得られる最後の機会となるだろう。

「……さて、御託はその辺りで良からう。やるのならば疾く参れ。失態を見せたと言えど、貴様らは敵に変わりない。我がマスターの甘さに感謝するが良い。妾の本意ではない故に、手の内見せる気は無いが加減はせぬ」

キヤスターが構える。手にするのは以前目にした呪符ではなく、鏡だった。それも単なる鏡ではない。アレは銅鏡だ。

呪術に使うのか。それとも武器として用いるのか。こちらが深く考えるよりも先に、キヤスターが動いた。

「チイツ。気の早い女ですコト！」  
アヴェンジャーも即座に私の前に躍り出ると、鎌を取り出し迎え撃つ。

浮遊するようにして、高速で接近しながら、キヤスターは手にした銅鏡を力強くアヴェンジャー目掛けて投擲した。円盤投げもかくや、目で追えない回転数を伴いながら超速で飛来する銅鏡を、アヴェンジャーは鎌で打ち付け叩き落とす。

並走しているはずのキヤスターに目を向けたが、どこにも姿が見当たらない。銅鏡に気を取られ、キヤスターの姿を見失ってしまった。だが、それもほんの一瞬だ。刹那の間にキヤスターは私たちに気取られる事なく、その姿を消したのだ。

どこから来るか。周囲を見渡すが姿はない。と、アヴェンジャーの頭上がいきなり光り輝いたと思った次の瞬間、キヤスターが光の中から飛び出してきた。

「!? 上かー」  
「遅い」

光に反応して気付いたアヴェンジャーと違い、その輝きと同時に現れたキヤスターの方が圧倒的に速かった。アヴェンジャーが上を向いてすぐ、その頬にキヤスターの拳がめり込む。接近戦を苦手とする



『キャストター』とは思えぬ豪腕で、アヴェンジャーを殴り飛ばすと、キャストターは着地もせずそのまま追撃を仕掛けに行く。

彼女は移動時、完全に浮遊している。そうでなければ出来ない所業だ。

受け身を取るアヴェンジャーだったが、頭部への衝撃が思いのほか強すぎたためか軽い脳震盪に見舞われ、まともに武器を構えられない。足元も覚束無い様子で、遠くからでも分かる程度には頬が赤く腫れ上がっていた。

だが、そんな状態であっても、戦場では敵は待つてくれない。

アヴェンジャーの正面まで飛んで来たキャストターは、アヴェンジャーの腕を両手で掴むと、自分の体ごと思い切り振り回す。ブン回す、という表現がまさに相応しく、その凄まじい回転力を利用してアヴェンジャーの体を上空へとぶん投げると、いつの間にかキャストターの手元に戻っていた銅鏡も同様に上空へと投擲した。

「——ッ！」

どうにか持ち直したアヴェンジャーは、鎌で銅鏡を打ち返すと、そのまま反撃に転じる。鎌を消し、旗に持ち替えると、アヴェンジャーが得意とする火炎放射を、キャストターに向けて放出した。

——のだが。

「鏡よ、返せ」

銅鏡はアヴェンジャーに打ち落とされたが、途中でピタリと宙にて停止するや、火炎放射をその身で受け止め、そっくりそのまま反射した。

まさか跳ね返されるとは思わず、アヴェンジャーはガードする間もなく、自らの炎で全身を焼かれる。咄嗟に小さく炎を噴出させる事で横に逃れられたが、ダメージは無視出来るものではない。

着地もままならないで地面へと降り立つアヴェンジャー。全身の服は焼け焦げ、火傷も酷く、痛々しくてとても見ていられない有り様だった。

「ゲホッ……。なによ、反射って。反則でしょう、アレ!？」

まだ燃え続けているマントを破り捨て、悠々とこちらを眺めるキャ

スターに悪態をつくアヴェンジャー。

恐ろしい事に、たった2、3分の短い攻防だけでキャスターの強さと、私たちとの差を嫌という程に思い知らされた。

まだセラフからの強制終了は実行されていない。まだ戦闘は続いている。なら、もう少し情報を引き出したい。まだ戦闘は続いている。なら、もう少し情報を引き出したい。

それに、やられてばかりはアヴェンジャーの性に合わないはずだ。私だってキャスターに一矢報いたい。

(アヴェンジャー、やり返したいよね?)

(当たり前。復讐者をナメんなつての)

(よし。じゃあ、私に一つ案があるんだけど……、)

許された短い時間の中で、成果を得る為に私たちは作戦を開始する。

まず私が、走りながらで撃てるだけのガンドをキャスターに連射する。数にも限りがあり、また、銅鏡で弾かれるのは分かっている。ただ、僅かでも目くらましになるのなら、それでも構わなかった。

こちらの予想通り、キャスターは私のガンドを悉く弾き返す。その反射にも条件はあるようで、観察して分かったのは、反射したものの軌道を変える事は出来ないらしい。真っ直ぐ来たものをそのまま正反対に跳ね返しているのだ。

私は自分に跳ね返ったガンドに当たらないように、常に動き続けながらガンドを撃ち続ける。

鏡は自動で反射するが、その操作はオートではないらしく、アヴェンジャーに警戒しつつ私の対応しているといった感じ。

レティシアが手出ししてこないかとも思ったが、元々は彼女からの申し出という事もあってか、今は静観するのみだった。

アヴェンジャーには今のうちに魔力を装填させておく。これはタイミングが勝負の肝だ。全ては私が合図を出す瞬間に懸かっている。

そろそろ私の魔力も底を尽きかける。そしてアヴェンジャーと私が前後で重なったタイミングで、私はアヴェンジャーに呼び掛けた。

(今だ！)

アヴェンジャーは溜め込んだ魔力をありったけ使って、盛大に炎柱を立ち昇らせる。

巨大な炎柱は私たちだけでなく、キャスターの視界も遮り、すかさず炎柱目掛けて最後のガンドを撃つ。魔力を絞り出して何とか二発。ガンドは炎を抜けてキャスターに迫るが、

「何をするかと思えば、下らぬ目眩まし、芸にもならぬ」

さも当然とばかりに、二発続けてのガンドは鏡によつて反射された。

けれど、それでいい。私のガンドと、アヴェンジャーの黒竜炎は別々に放たれたのだから。

鏡がガンドを反射したのとほぼ同時、炎柱を喰らいながら現れたのは、三回戦でアヴェンジャーが見せた技である、  
フェルカーモルト・フォイアドラツヘ  
『焼却天理・塵殺竜』。

三つ首の黒竜炎は正面、左右にと三方向から、鏡を避けるようにしてキャスターに襲いかかる。

鏡の反射はガンドに対応してしまったため、どうやっても間に合わない。もし間に合ったとしても、三つ全てを同時に受ける事は不可能だ。残る二つの黒竜炎が容赦なく牙を剥くだろう。

炎柱を取り込んだ分、黒竜炎は更に肥大化し、呑み込まれたらひとたまりもない威力へと変貌した。キャスターは一瞬驚いた顔をして、その直後に三方からの黒炎によりその姿は見えなくなる。三つの黒竜炎はキャスターが居た場所で渦を巻くようにしながら、天へと立ち昇り消えていく。

キャスターが先程まで立っていた所には、何も残されていないかった。

「……………え。たおし、た？」

ダメージを与える事を目的とした作戦だったが、まさか倒せるなんて露ほども思っていなかった。決戦の日でもないのに、それにしただけで呆気なさ過ぎる。

「バカマスター！ まだよ！！」

アヴェンジャーの叱責で我に返る。そうだ、サーヴァントを倒されたというのに、レティシアは何一つ取り乱した様子はない。それどころか、消滅していく素振りも全くない。

という事は、まだ倒せていないという事。

そう思い至るとほぼ同時、アヴェンジャーの眼前で光の穴が開き、キヤスターが突進しながら出現した。

「フハッ！ 今のは肝が冷えた！ なるほど、マスターとの連携か。面白いではないか！」

美しくも寧猛な笑みを携えて、キヤスターは再びアヴェンジャーに殴り掛かってくる。今度は目の前で捉えたため、反応出来たアヴェンジャーは不意打ちを旗で弾くと、すぐに火炎放射を出しつつ後退する。

まともに炎を受けたキヤスターは、その勢いのままレティシアの手前まで押し出される形となる。あちらもまた巫女服が焼け落ち、場違いにも私はその妖艶かつ豊満な肢体に目を奪われた。

キヤスターは意外と着痩せするタイプだったらしい。いや、巫女服をしつかり着込んでいたから分らなかっただけか。

だが、真に驚くべきはそこではない。さっきまでは服で気付けなかったが、よく見ると彼女の胸元には何かの札が貼られており、それを彼女は躊躇なく破り捨てた。

すると、その額から先日目にした漆黒の角がズズツと伸び、火傷を負っていたキヤスターの肌は、みるみる回復していく。いや、どちらかと言えば再生という方が正しい。

人外の再生能力——鬼の一字が頭に過ぎる。今のを見て確信する。キヤスターは間違いなく「鬼」と呼ばれる、人ならざる者だ。

「よもや、手傷を負わされるとは思わなかった。マスターが気にかけてだけはあるという事か。貴様らとの戦いなど些事であると捉えていたが、認めよう。貴様らは、この忌々しい姿を晒すに相応しい敵対者である」と

角が発現してからのキヤスターの魔力は、アリーナに出現している大型エネミーにも引けを取らない重圧さで、プレッシャーに押し潰さ

れそうになる。どうか持ち堪えていられるのは、単純にこの聖杯戦争で鍛え上げられた根性のおかげだった。

キャスターは暴走した時と同じ姿でありながら、しかし狂気に支配されたようには見えない。暴走は何かしらのトリガーがあるのか、それとも定期的に来るものなのか。

とにかく、今のキャスターは濃い魔力を発しながらも正気を保っている。あの暴力の嵐のような状態を制御出来ているのなら、非常に拙い。

一触即発の状態だ。気を抜いた瞬間にやられる。

アヴェンジャーに次の指示を出そうとしたその時、セラフによる介入で戦闘が強制終了させられた。

武装解除により、興が醒めたとばかりにキャスターは踵を返し、レテイシアの隣に戻っていく。

正直、この強制終了は助かった。あのまま戦闘を続けていれば、こちらの命が無かったとさえ思える。そんな気迫がキャスターにはあつたからだ。

「この短時間で全てを読み取る事は出来ませんでした、それでも私には分かります。マスターとサーヴァント。その在るべき姿を体現しているような、素晴らしい戦いぶりでした。全てのマスターとサーヴァントが、貴方たちのようであればどんなに良い事か」

最後まで静観に努めたレテイシアは、先程の戦いを称賛するように拍手する。レテイシア的には、キャスターにダメージを与えられた事はさほど重要ではないらしい。

……何だろう。初めて会った時から、彼女には違和感を強く感じていた。アヴェンジャーに似ているというのもあるが、レテイシアからはマスターらしさが欠如しているというか、聖杯戦争の当事者ではあるが、根本からして私ほかのマスターたちと違うというか……。

レテイシアに対し懐疑的になる私だったが、それよりも戦闘が終了したという安心感と、気を張り詰め過ぎた事による疲労がドツと押し寄せ、その場に座り込んでしまう。

「腰が抜けたか。斯様に勝ち抜いて来ようと、所詮は年端も行かぬ小

娘よ。……勘違いするなよ？ 決して侮辱ではないとも。普通であれば、それが当然の反応というものよ」

キヤスターは軽く笑いながら、しかし、からかっているという風でもなく、純粹に私を褒めているような感じがする。

「さて……貴様ら。妾に封魔の呪符を解かせた事、明後日になり後悔しても遅いからな。征くぞマスター」

「ええ。さあ、決戦の日に暴走しないよう、今日明日は通して鎮めエネミー狩りの儀ですよ」

そう言つて、レテイシアたちはアリーナの奥へと去つて行つた。転移しない辺り、本当に今からエネミーと戦闘に明け暮れるつもりらしい。

体力オバケか……。

「……………」

そういえば、アヴェンジャーが静かだ。戦闘が終わり、彼女らの称賛に対し噛みつくかと思つたのだが、それもなかった。

「アヴェンジャー？」

「……ん？ ああ、ちよつと、ね。あのキヤスターの戦闘スタイル、何か引つ掛かるのよね……。知ってるような、見た事があるような……」

煮えきらない態度を示すアヴェンジャーだが、自己回復したキヤスターと違って、こちらは全身傷だらけなのに変わらない。

この状態で大型エネミー討伐など、まず不可能だ。

やはり明日、改めて出直そう。

アヴェンジャーに同意を得て、私はリターンクリスタルを使用する。

僅かな時間ではあつたが、今日の戦闘で得たものもある。

キヤスターは、あの角が証明しているように魔性の存在である事。光を通じて瞬間移動が出来る事。銅鏡を扱う事。肉弾戦を得意とする事。

果たして、  
これらが示すキャスターの真名とは如何に……？

## 運命／宿命の邂逅

そういえば、と私は足を止める。

アリーナから帰ってきた私は、ふと思いついた事があった。実は昨日、エンシエントゴーストを倒した後に、トリガーを入手してすぐにフカヒレを拾っていたのだ。

シリアスな場面であり、エンシエントゴーストの印象が強すぎたため、場面としては明らかに場違いなフカヒレに関しては完全に霞んでしまっていた。今日も今日とて、レティシアたちとの件もあり、そこまで頭が回らなかった。故に、忘れていた。

忘れていたのは私のせいじゃない。悪いのはエンシエントゴーストである。

そこっ。責任転嫁とか言わないように。

とにかく、男子生徒に依頼されていたフカヒレを届けるため、私は疲れた体に鞭を打つ。

校庭に出ると、前回と同じ場所に彼は佇んでいた。

「それは……フカヒレか！——よし分かった。現物を持って来られちゃ仕方ない。腹を括ってタイガーの呼び出しに応じるよ。でも後で行くから、とりあえず先に食わせてくれ」

男子生徒はフカヒレを受け取ると、一目散に校内へと駆け込んでいった。一応はタイガーからの依頼は達成出来たと見て良いだろう。

疲労困憊の私は、まだ日は暮れていなかったがマイルームへと真っ直ぐ戻る。私はともかく、アヴェンジャーは疲れだけでなく、かなりのダメージも受けていたので、早く休ませたい。

戻るなり、私は倒れ込むように机へとしなだれかかった。堅い机が少し痛い、そんな事はどうでもいい。

どうにも、あの戦いでは決戦の時並みに神経を擦り減らしていたらしく、極度の疲れから眠気すら出始めている。思考が弛むが、姿勢を正し頬を叩いて気を引き締める。

今日の戦いで判明したキヤスターの特徴や戦い方、それらを吟味し



なければならぬ。

アヴェンジャーには休むよう伝えたが、このくらいの傷は平気だと強がりを持って、私の考察に付き合ってくれようだ。

「さてと。じゃあ、まず一番重要な点から。キヤスターは間違いなくヒトじゃない。少なくとも普通の人間とは思えない。あの角と、異常なまでの再生能力から見て、怪物に分類される英霊なんだと思う」

「そうね。あの巫女装束からして、おそらくは日本出身。そして日本で角のある怪物と言え、まず真つ先に挙がるのは〝鬼〟って妖怪だったかしらね」

日本の有する妖怪史において、鬼は外せないメジャーな妖怪だ。鬼といっても種類、分類は多岐にわたる。

たとえば、陰陽道に連なるものだったり、地獄の獄卒であったり。それこそ、平安の世を脅かした酒？童子などのような、怪異としての鬼であったり。

民俗学、仏教、山岳宗教など、様々な分野においても鬼は扱われており、その諸説も数多く存在する。

キヤスターが鬼であると断言すべきではないが、可能性はかなり高いと見ていいはずだ。

とすると、キヤスターがどの年代の人物であったのかが分かれば、おのずとその真名も見えてくるだろう。

「キヤスターは銅鏡らしきものを持っていた。銅鏡が主に使用された時代っていうと、弥生時代から古墳時代辺りだったかな？」

「ん、そこら辺は私じゃ分からないわね。聖杯から知識としては得てるけど、国も違えば時代だって違いすぎるし。まるでピンと来ないわ。でも、さっきも言ったけど、あのキヤスターには引つ掛かるとうか……。具体的にはあの戦い方なんだけど、既視感があるのよね……」

アヴェンジャーの所感はともかく、銅鏡の用いられた時代から考えると、女性で巫女なんて二人しか思い当たらない。

邪馬台国の王にして、日本最古の女王である〝卑弥呼〟。もしくは、その宗女であり王の座の後継者でもあった〝壹与〟か。

だが、そうすると鬼と巫女とが相反する要素となってくる。どちらかがキャスターだと仮定した場合、史実では語られなかったが本当は鬼だった……という事は考えられないだろうか。

……うーん。分からない。分かりそうで、あと一步届かない。決め打つには、あと少し材料が足りないといった具合だ。

「真名に関してはその辺で置いといて、次はアイツの戦闘スタイルへの考察と行きましようか」

「という……キャスターにしては、意外と肉体派だった事とか？」

「それもだけど。一番厄介なのは光を介した転移ね。光である程度のタイミングが計れるとしても、アドバンテージは常に向こうにある。対策を取ろうにも現状だと手が浮かばないわ。で、次点で鏡を使った攻撃の反射。遠距離攻撃だけに対応するのか、近接攻撃にも対応しているのか、そこはやってみないと分からない。ていうか、デフォルトで反射スキル持ちとか姑息よ！ 私なんて宝具の真名解放しないと出来ないのに！」

え？ アヴェンジャーも攻撃を反射出来る宝具とか持ってたの？  
初耳なんだけど。

私が驚いて彼女を凝視していると、気付いたアヴェンジャーはバツが悪そうに視線を逸らした。

「……真名を明かしたのは最近の事だし、宝具について言うタイミングが無かったのよ。宝具に関しては……明日、使う事になるかもだけど」

明日……？

あ、大型エネミーか。確かに、姿すら視認していないのに、これまでにない強敵だと理解する程の重圧の持ち主だ。普通に挑んでも勝てる見込みは無いかもしれない。

宝具の真名解放。サーヴァントにとって切り札と言うべき、そのサーヴァントを象徴するもの。

それさえあれば、逆転の可能性は見えてくる。……かもしれない。

「まあ良いわ。説明するよりも、実戦で見せてあげる。とりあえず今日はこの辺でお開きにするわよ。流石に私ももう寝たいし。アンタ、

気付いてないかもだけど、体が舟を漕いでるわよ」

言われて初めて気付く。頭はなんとか稼働しているが、体はもう限界が近かったらしい。明日も今日と同じ、もしくはそれ以上に大変かもしれないので、無理はせず休む事にしよう。

——夢を見ている。

自分が立っていたのは、辺り一面に広がる瓦礫の郡の中心。

無数の黒煙が空に立ち昇る。焼き付いた血の臭いと、焦げた鉄の匂いがする。

炎はまだ燃えている。家屋は焼け落ち、木々は燃え尽き、数多の間は既に息絶えている。

死の街だ。ここには「死」だけが蔓延っている。

中世のような街並みは、もはや見る影もなく破壊されていた。

ふと、空を見上げる。空には無数の何かが翔んでいた。

その姿をよく観察する。

ソレはほぼ全身が鱗で覆われていた。

ソレは凶悪な牙と鉤爪を備えていた。

ソレは、空想の中に存在するとされたモノだった。

ソレ——すなわちワイバーンが、空を覆わんとする程の大群で、

死の街を嘲笑うように飛翔していた。

これが夢でなくて、何だというのか。現実には存在しない生物が我が物顔で世界を謳歌しているなんて、あつていいはずがない。

夢だ。私は夢を見ている。

では、この夢は何だろう。何故、私はこんな悪夢を見ているのか。

思考は突如として鳴り響いた怒号のような咆哮で、強制的に中断させられる。

ワイバーンの群れを割くようにして、巨大な影が舞い降りる。それ

はワイバーンが霞んでしまう程の巨体さで、その姿を夢の中の私は知っていた。

ゆっくりと降下してくる影に、私は、意図せず口が動いていた。『喝采を。我らの憎悪に喝采を！ この世界に遍く全てを！ 私とお前の炎で灼き尽くす!! 復讐を!! 人間に、世界に、我々を排斥した全てに!! 与えられて然るべき権利を以て、我らは復讐する!!』手にした旗が風にはためく。竜を象ったような黒い紋章は、薄暗い空の中で異色の存在感を放っていた――。

――目が覚める。

悪い夢を見ていたようだ。

全身に汗を感じる。よほど悪い夢でも見ていたのか、気分があまり良くない。時間を確認すると、いつもより少し早い時間だった。

夢の内容をはつきりと思いつけないが、見覚えのある旗が出てきたような気がする。

竜の魔女の掲げる旗。アヴェンジャーの主武装である旗だったように思う。ならば、あの夢はアヴェンジャーの過去を映したもの……？

アヴェンジャーの方を見る。彼女は穏やかな寝息を立てており、まだ寝ているようだった。うなされていないようだし、あちらは悪夢は見えていないらしい。

急に何故、あんな夢を見たのだろうか。もしかして、昨日発生したという大型エネミーの影響か？

アリーナを埋め尽くすような圧迫感と、アヴェンジャーに縁のある存在だったから、あの悪夢を見てしまったのだろうか。

さつき見た悪夢に一抹の不安を感じながら、私は寝汗で気持ち悪くなった衣類を着替えていく。着替えが終了した頃には、アヴェン

ジャーも目覚めたようだった。

「……ん。良く寝た……。あら？ アンタにしては早いわね。もう支度も済んでるなんて」

「ちよつと夢見が悪くて。今日が猶予期間モラトリアムの最終日だし、絶対に大型エネミーを倒そう」

「はいはい。分かってるわよ。アイツ相手に負ける気はないけど、死ぬ気で臨むわよ」

存外に、そうでなければ勝てない、と言っているようなものだ。決戦前日に、私たちは決戦と同じくらいの心持ちで、準備を始める。

そういえば、アヴェンジャーは大型エネミーに心当たりがあるようだが、どんな敵なのか聞いていなかった。アヴェンジャーだけでなく、私も予め知っておけば、ある程度は有利に事を進められるかもしれない。

「次のターゲット？ ……エネミーとしては規格外もいいところね。でも、私の予想が合ってたらの話だから、実物を見るまでは断言しないでおくわ。いざ対面して違うヤツだったら、先に戦略なんて立てておいても無駄になるし」

む……。そう言われてしまうと、何とも言えなくなる。仮に、もし想定していた敵と違ったら、予め戦略を固めてしまうと逆に対応が鈍くなるのだと、アヴェンジャーは言いたいのだろう。

悪夢を見たせいも、嫌な予感がしてしまう。戦略を練っておきたいが、練ろうにも対策の立て様がない。

これまで私たちは行きあたりばったりでありながらも、幾度となく乗り越えてきた。不安は残るが、アヴェンジャーを信じるとしよう。

支度を済ませた私たちは、マイルームを出て一階に降りる。アリーナへと向かう前に、ラニの顔を見ておこうと私は保健室へと立ち寄る。アヴェンジャーはアリーナ前で待機するとの事。彼女を待たせると後が怖いので、早めに切り上げなくてはならない。

保健室に入り挨拶をすると、ラニは昨日より少しだけ元気そうに返事をした。体調も徐々に良くなっているのだろう。一週間前に比べ

ると、その顔色もずっと明るい。

昨日、あれから起きた事をラニに話す。この流れも、今や当たり前の事となっていた。

「銅鏡、光を介した瞬間移動、そして鬼の力の封印が解かれた……ですか。なるほど……」

ラニは目を閉じて考えている様子だった。暫しの沈黙の後、その双眸が開かれる。何かの閃きでもあったかのように、瞳に強い意思を宿していた。

「キヤスターは鬼であると断定して間違いないでしょう。気になるのは、その強大な力を誇示するでもなく、隠すように封じていたという点でしょうか。キヤスターが封印を解いたその姿を醜いと自嘲していたのなら、おそらく鬼の姿はキヤスターにとつて他人に見せたくない姿。そこに、彼女の真名を知るヒントが隠されているかもしれない」

「おお……！ 少ない情報で、更には聞いただけでそこまで推理出来るとは、なかなかの切れ者だ。探偵と名乗っても良いのでは？」

「いいえ。私はアトラスの錬金術師。それ以外の称号など、私には無用かつ不要です。ですが、褒め言葉として受け取っておきましょう」  
「敢えなく撃沈してしまっただけ。私との会話を続ける中で、少し人間味は見られるようになってきたが、まだ冗談などは通じないようだ。そこは追々、といったところか。」

キヤスターが何者なのか。それはまだ分からない。

でも、ラニと話して分かった事がある。

自分が何者なのか。

つまりは、何も無いという事を知ったのだ。その上、私にはラニが、そしてアヴェンジャーが居る。

だから、相手が何者であろうと、私は負ける気はない。共に歩み、戦う同士が居るのだから。

「——はこ」

ラニは、優しく笑ってくれた。

そう、私は一人じゃない。だから、負けるはずがない。

「やはり——あなただったのですね。師の言う事は、やはり正しかった。勝って下さい。勝って……またたくさん——お話をしてください」

ああ、もちろんだ。

相手が鬼であろうと、再びこの校舎に戻ってくるのは、私たち。

だから、猶予期間の最後の一日をしつかりと過ごそう。再び、ラニと話をするために——。

「岸波さん、ちょうどいい所に！ どうだった？ 例の子に話は通してくれた？」

せっかく良い感じになって、アリーナへ向かおうとしていた私の首根っこを捕らえたのは、凜猛なタイガーだった。

「ぐえつ。……は、はい。ちゃんと話は付けてきました。多分今日のうちに来るのではないかと」

「え？ 例の子に、私の所に来るよう言ってくれたの？ ありがとー！ じゃあ、お礼にインテリアをあげるわ。お部屋に飾ってね」

と、藤村先生は報酬として写真立てをくれた。どどんタイガーグッズがマイルームを侵食しつつある気がする。

「悪い子には、お仕置きが必要よね。何時間でも、お説教してあげるわ。じゃあ、アリーナ探索がんばってねー！」

意気揚々と、藤村先生はスキップしながら去って行った。怒ってたんじゃなかったのか。

……私も、タイガー呼びが先生にバレないように気を付けよう。何時間も拘束されるのは勘弁願いたい。

「話は終わったみたいね」

アリーナ入口に行くのと、アヴェンジャーが待ち構えていた。どうやら怒っていないようだ。

「……？　なんか疲れた顔してない？」

途中でタイガーに捕まった事を説明すると、アヴェンジャーは同情的な目で私を見ていた。

「愁傷さまな事で。大物狩りを前に災難に遭うなんて、アンタも運が無いわね」

藤村先生を災難呼ばわりとかだけは、本人の前では絶対にしないよ。アヴェンジャーに釘を刺しておく。もし耳に入ろうものなら、タイガー呼び以上の罰を下されるのは想像に難くない。

「ま、なんでもいいわ。じゃ、そろそろ行くわよ。決戦前日の大一番を取りにね」

アリーナに進入すると、昨日と同様、凄まじいプレッシャーを全身が襲う。改めて、よくこんな重圧の中でキヤスターと戦闘できたものだと思う。

逆を言えば、レティシアとキヤスターも平然とこの重圧を受け流していた事に驚きを禁じ得ないのだが。

大型エネミーの気配は、奥に進む毎に濃くなっていく。昨日はすぐにレティシアたちと邂逅したため気付けなかったが、気配が濃厚になるのに比例するように、外の景色も次第に色を失っていき、群泳する魚はおろか、エリア外の主である鮫でさえ姿を見せなくなる。

これらから推測できるのは、大型エネミーがアリーナそのものに影響を与えているのだ。そう考えると、なるほどトンデモナイ大物だ。テクスチャの書き換えにも匹敵する影響を及ぼしているのだから。

そして一昨日、エンシエントゴーストを討伐した地点までやってきたのだが、驚く事に、この前までは無かった道が出現していた。海中から海上を目指すように上に天へと伸びる坂道。暗い海中で、その道は海上の光を目指しているかのようだった。

私たちは意を決して、坂道を駆け上がる。

長く長く、どこまでも長く伸びる坂道。どれだけ走っても終わりが



無いかの如く。だが、確実に進んでいる。何故なら、進む毎に薄暗かった景色が光を取り戻しているからだ。

どれくらいの間を走っていたか。疲労が溜まり始めた頃、ようやく視界に決定的な変化が現れる。海中はもうほとんど明るくなり、見上げれば、もう間もなく海面に達するという深度まで達していた。

だが、あと少しで海上に出るところで、長い坂道はついに終わりを遂げた。

そして、私たちはソレを目にした。

登りきった先には、これまでの迷宮のようなアリーナには似つかわしくない程の、とてつもなく広大なエリア。その中央に鎮座するのは、とても大きな黒い塊だった。

——いいや。単なる塊ではない。

ソレには大きな翼があった。

ソレの全身は厚い鱗で覆われていた。

ソレは溶岩のような熱を吐き出していた。

ソレは——

——巨大な一匹のドラゴンだった。

「——ああ、やっぱりアンタだったか。久方ぶりね——」

——ファヴニール!!」

## 悪竜現象

私たちの姿を視界に収めた黒竜が、寝ていた体を起こして、天高くから私たちを見下ろす。起き上がった事で、その胸に淡い光を帯びた、紋章にも傷跡にも見える模様が頭となる。

その視線、その吐息、その魔力は、対峙した者をそれだけで殺してしまえるのではないか、そんな重みを感じられた。

何もかも、全てがまるで桁違いだった。

アヴェンジャーはと言えば、そんな有り得ないほど強大な敵を前に、負けずとも劣らない凶暴な笑みを浮かべて、竜紋の旗を掲げていた。

「ここで会ったが何とやら。生憎と昔話に興じている暇は無いの。この手でお前を討ち、竜の魔女の真の力を取り戻してやるわ!」

『————GUUUUUUUUUOOOOOOOOOO!!!』

威勢良く啖呵を切るアヴェンジャーに呼応するが如く、黒竜——

邪竜ファヴニールが轟轟と咆哮を上げる。まるで100門の大砲を一齐に撃ったかのような轟音に、空間は揺らぎ、地面が震動する。

咄嗟に耳を塞いだか、それでもジンジンと耳の奥にまで防ぎ切れないう轟音が響いてくる。下手をすれば鼓膜がやられていただろう。

咆哮は止み、戦闘態勢に入ったらしいファヴニールは四足歩行の姿勢になり、並んだ鋭い牙の隙間からは炎がチリチリと姿を垣間見せている。

ファヴニールといえば、『ヴォルスング・サガ』に登場するシグルドや、『ニーベルングンの歌』のジークフリートといった竜ドラゴンスレイヤー殺しに退治された事で有名な邪竜だ。

まさか、伝説に登場する存在を直接目にする事になろうとは、思いもしなかった。しかも、それを倒さなければならぬなんて。

言峰神父め、よりによってコレを討伐対象にするとか悪趣味も度が越えている。

ドラゴンとは、様々な物語において強大な存在であり、英雄にとっては試練の一つ、もしくは最後の関門として立ちはだかる事が多い。それだけ、ドラゴンを倒す事は困難を窮めるといふ事であり、それこそ英雄の所業と言えるのだ。

だというのに、数あるドラゴンの中でも明らかに最上位種であろうファヴニールが相手とか、悪夢以外の何物でもない。

邪竜を倒したシグルド、ジークフリートでさえ、物語の中では死闘の末にやつと辛勝する程だ。

そんな存在を、私たちに倒す事が出来るのだろうか。

加速した思考を中断し、すぐさま眼前の脅威に身構える。

巨体故に、敏捷性に乏しいようだが、如何せん攻撃範囲が広すぎた。腕を振り下ろしただけ。ただそれだけだということに、いとも容易く私たちの頭上にまでその大きな手が届く。そのまま押し潰そうと、巨大な壁にも等しい竜の手が迫りくる。

アヴェンジャーはそれを旗で受け止めるが、体躯の差はすなわち筋力の差でもある。

「く、ぐぐぐ……!!!」

アヴェンジャーの体が徐々に下へと押し込まれていく。魂の改竄でステータスも向上していたが、それでも巨軀から生み出されるパワーには勝てない。むしろ、それを抑えられているだけでも誉めて然るべき偉業だろう。

私はアヴェンジャーが攻撃を受け止めている間に、ファヴニールの手の下から転がり出て、すぐさまその顔へとガンドを撃ち込んだ。

ガンドは真っ直ぐに飛び、ファヴニールの鼻に命中する。しかし、痛くも痒くもないとばかりに、私には目もくれず、アヴェンジャーを押し込める手は一向に緩む気配がない。

「マスター、魔力を回しなさい!! 今すぐに!!」

「!! オツケー、了解!」

必死に堪えるアヴェンジャーにパスを通じて魔力を送り込む。アヴェンジャーが自前で溜め込んだ魔力に、私からの魔力供給で追加分が補充され、アヴェンジャーはそれを一気に解放させた。

瞬間的に炎による小規模爆発を引き起こし、それによりファヴニールの手が僅かに浮き上がった瞬間にアヴェンジャーも即座に退避する。

空振りとなった竜の手は、何も無いところを叩きつけたが、その風圧だけで小さな家一軒なら吹き飛ばせる程の威力を伴っていた。

「マスター、ちよつと離れてなさい。単純な叩きつけでさえアレよ。ブレスなんか来たら、アンタじゃひとたまりもないわ」

それはそうだ。ドラゴンだし、火を吐いて当たり前。さつきから、口からチロチロと炎が燻っている。

私は頷いて返し、エリア入口付近まで走る。

振り返りながら、コードキヤストによる筋力、耐久、魔力、幸運増強のバフをアヴェンジャーに掛ける。魔力をかなり持つていかれたが、出し惜しみしている場合ではない。

敏捷だけはまだ礼装を入手出来ていないため、強化出来なかったが、これが今の私に出来るアヴェンジャーへの最大限のサポートだった。

「この聖杯戦争に参加して初のバフの山盛りね。竜狩りにはちょうどいいわ」

駆け出したアヴェンジャーに対し、ファヴニールは大きな口を開くと、2メートル大の岩石程の大きさもある火球を連続で撃ち出した。

一発一発が必殺級の火球。だというのに、それが隕石の雨のようにアヴェンジャー目掛けて次々と降り注ぐ。

それらをアヴェンジャーは紙一重でかわし、時にブーストされた筋力にものを言わせて打ち返し、火球で火球を相殺する。

火球では仕留められないと判断したのか、ファヴニールは火球を吐き出すのを止め、口を閉じたかと思った瞬間、頬を一気に膨張させた。

あれは間違いなく、ドラゴンの代名詞とも言えるブレスの予備動作だ。

「アヴェンジャー！」

私が叫んだ直後、ファヴニールは口に溜め込んだ炎を解放させた。普段アヴェンジャーの放つ火炎放射など比べ物にならない、極大のファイアブレスが、アヴェンジャーを呑み込まんと、炎の波とって押し寄せる。アリーナの床を這うようして拡大する火炎は、エリア全てを焼き尽くす勢いだ。

「文字通り火の海ね！　でも、炎がお前だけの専売特許だと思っな!!」  
アヴェンジャーは咄嗟に宙へとジャンプし、火炎放射で滞空する事でファイアブレスから逃れる。

だが、ファヴニールとてそれを簡単には見逃さない。空中のアヴェンジャーへと狙いを定めると、首だけ動かしてブレスの射線をそちらへ変えたのだ。

ファイアブレスに対し、アヴェンジャーの火炎放射では拮抗すら不可能。即座にそう判断したアヴェンジャーは、下に放っていた炎を上へと切り替え、ブレスの射線から離脱する。

「出し惜しみ無しで行くわ！」

アヴェンジャーが着地した瞬間に、彼女の周りを剣や槍のような形状をした黒い物体が宙を舞うように現れる。

何も無かった空間から突如現れたソレらは、アヴェンジャーが走り出すと、それに倣うように併走する。

私も詳しくは知らないが、アヴェンジャー曰く、アレは宝具がもたらす副次効果のようなものらしい。あと、剣でも槍でもなく、杭をイメージしているようだ。

アヴェンジャーはサブ兵装でもある常日頃から帯剣する漆黒の剣を抜くと、その切っ先をファヴニールへと向けた。

それが合図だとばかりに、浮遊する黒い杭はアヴェンジャーを離れ、高速でファヴニール目掛けて殺到した。

魔力で編まれた杭は、ほとんどが鱗に弾かれるが、何本かは厚い竜鱗を貫通する事に成功している。だが、巨体相手に杭だけでは大きなダメージには成り得ない。

ファヴニールは杭が刺さろうと怯む事なく、迫るアヴェンジャーに

殴りかかる。溜めた分のブレスは出し尽くしたようで、再度のブレス攻撃には炎と魔力の装填を要するのだろう。

アヴェンジャーはファヴニールの前腕による単調な攻撃を難なく横に避けて回避するが、

「!!」

まるで回避されるのを読んでいたかのように、回避されるのが前提であったかのように、ファヴニールは空振ったはずの手を地面に着き、その手を軸に全身を大きく回転させた。

当然、その長い尾も体に追従するように振り回され、そこに遠心力までもが加わり多大な破壊力を伴った、強烈な尾の一撃がアヴェンジャー目掛けて放たれた。

全身を回転させる事で生じる尾による薙ぎ払い。それこそがファヴニールの本命の攻撃だった。

恐ろしい事に、ファヴニールは二段構えの攻撃——フェイントを仕掛けてきたのだ。それ則ち、ファヴニールがそれ相応の知能を備えているという事に他ならない。

予想も予測も、予期すらしていなかった完全な不意打ちに、アヴェンジャーは反応が遅れた。遅れてしまった。

全身に襲い来る打撃は、いとも簡単にアヴェンジャーの体を吹き飛ばす。勢いが強すぎて受け身を取る事もままならず、アヴェンジャーはアリーナの壁に思い切り叩き付けられる。

「……あ、ぐ」

大ダメージを受けたのは火を見るより明らかだ。私は急ぎコードキャストによる回復を掛けるが、全回復には程遠い。今の手持ちの礼装ではせいぜい中回復しか出来なかった。

「イッタ……!! 竜のクセにフェイントとか小賢しい真似を……!」  
起き上がるアヴェンジャーに、追撃の火球が飛来する。まだバフは切れておらず、アヴェンジャーは火球をファヴニールへと打ち返した。

だけに留まらず、杭を再装填するや、同時にファヴニールへと撃ち出す。

ファヴニールは打ち返された火球を避けもせず、胴に直撃するが傷一つ付かない。ドラゴン故に炎への耐性を備えているのだろう。だが、杭だけは違った。

『GRUUUUUUUUUU!!!』

先程は数本しか刺さらなかった杭だったが、今回は撃ち出されたその全てがファヴニールの竜鱗を刺し貫いている。それも、より深々と貫いており、肉にまで貫通しているのではないか。

その証拠に、ファヴニールは痛みに耐えるような苦悶の咆哮を上げていた。

アヴェンジャーはクラススキルとして『復讐者』を所有している。自身がダメージを負う毎に、ダメージを与えてきた敵に対し、こちらの与えるダメージも増大していくというものだ。

まさしく、『アヴェンジャー』というクラスに相応しいスキルであるう。

杭が先程よりも攻撃力を増しているのは、それが理由だった。

杭は消えずに刺さったままで、アヴェンジャーは重点的にその刺さった箇所へと追撃の杭を放つ。

既に着弾している所へのダメージの上乗せを狙っての事だろうが、狙い目がそこなのがアヴェンジャーらしいと言える。

ファヴニールは堪らず後退り、アヴェンジャーは好機とばかりに再び前へと走り出す。

距離を空けられてしまったが、ファヴニールはアヴェンジャーの杭を払い除ける事には手を取られ、アヴェンジャーの接近を阻止出来ない。

大ダメージを受けはしたが、逆にそれが功を奏した。ピンチは最大のチャンスとはよく言ったものだ。

アヴェンジャーは攻撃の手を緩めない。次から次へと杭を装填しては射出する。ファヴニールは杭を全ては防ぎきれず、全身あちこちに杭が刺さり、確実にダメージを与えられている。

そして、後退するファヴニールにアヴェンジャーは遂に追い付いた。

「今のアンタはまさに串刺しね。それも滅多刺し。自分でやっというアレだけど、イイぎまだわ」

悪辣に笑ってみせるアヴェンジャー。一足跳びでファヴニールの顔の前に飛び出し、これまでより一際大きな漆黒の杭を、容赦なく射出した。

眼に。顎に。首に。大きな杭が深々とファヴニールを穿つ。

竜とはいえ、顔は他の生物同様に急所。肉体で最も軟らかな瞳を抉られ、邪竜が悲鳴のような金切り声で叫ぶ。

行ける。このまま行けば勝てる。

私はアヴェンジャーの勝利を確信した。だって、あの凄惨な有り様を見て、そう思わないはずがなかったから。

異変は、すぐに起きた。

『○○○○○○○○!!』

ファヴニールの絶叫が終わる頃、その巨大な翼を大きく広げ、邪竜は空高く舞い上がった。重いはずの巨体を持ち上げ、空を翔んでいる姿は圧巻の一言だ。

ただ、ドラゴンが自由に翔び回る程の高さはなく、ファヴニールは一定の高さで上昇を停止、滞空する。

それでも地上から見れば、その高度はかなりのもの。月海原学園の屋上より遥かに高い。アヴェンジャーが火炎放射でギリギリ届かないだろう程度だった。

勝利を確信したのは私だけだったらしく、アヴェンジャーは既にファヴニールの次の動きに警戒している。

間違いだった。勘違いだった。思い違いだった。

ファヴニールはダメージを負いこそすれ、まだまだ戦闘続行を可能としていた。



邪竜の胸に煌めく紋様が、光を放つ。輝きは綺羅星の如く眩く、ともすればこの世の何よりも美しくさえ見えた。

その美しさに目を奪われる私と、反対に、苦虫を噛み潰したように輝きを見つめるアヴェンジャー。

「拙い、拙いわ。アレはヤバイ。再現体でも使えるワケ!? マスター、宝具級の攻撃が来るわよ!! 備えなさい、アンタの魔力を喰わせてもらうわ!!」

アヴェンジャーの怒号で我に帰る。気付けば、ファヴニールが大きく息を吸い込み、その胸が膨らむ程の空気を溜め込んでいる。

来る。明らかに先程までと様子が違う事から、ファイアブレス以上のものを放とうとしているのは間違いない。

「アヴェンジャー!!」

「真名解放——」

アヴェンジャーが何かの詠唱に入り、私がコードキャストによる耐久バフの重ねがけをした瞬間、ソレは解き放たれた。

青く、蒼く、どこまでも碧い劫火。

ファヴニールはその極上のブレスを、地上目掛けて放射したのだ。

先程のファイアブレスが火の海なら、こちらは煉獄。そう表現するしかない、圧倒的な炎の壁が、エリアーを蹂躪した。

離れていても伝わる高温の熱気。あわや、こちらにまで被害が及びそうな程の広範囲にわたるドラゴンブレスは、もしここに木々があれば一瞬で灼き尽くしていただろう。

蒼い炎の光が強すぎて、アヴェンジャーの様子が全く見えない。私はまだ生きているという事は、アヴェンジャーは消滅していないという事だ。それに、魔力を急激に持つて行かれた感覚がある。何かしらの対抗手段を用いたはず。

でも、だからといって、これを受けて無事でいられるとは到底思えない。

約5分間ほど続いたブレスが次第に勢いを失くし、ようやく視界が開けてくる。辺り一面を焼き払った蒼い炎が、まだチラホラと地面で揺らめいている。

まるで爆心地かのような地獄の中心で、アヴェンジャーは立っていた。

旗を正面に掲げ、彼女の正面にはボロボロになった杭が障壁のように積み重なっている。やがて杭の山は崩れ落ち、塵となって消えていく。

致命傷は避けられた。けれど、決して無傷という訳ではない。防ぎ切れなかった炎に肌は焼かれ、髪は焦げ、鎧も数か所が融け落ちている。

前に突き出していた腕は焼かれて血だらけになっており、黒く焦げ付いていた。無傷なのは彼女の持つ旗くらい。

そうだ。不自然なまでに、旗は綻びも、焦げ付きさえもせず、優雅に風に靡いていたのだ。

「……ギリ、間に合ったわ」  
全身から黒い煙を上げながら、しかしアヴェンジャーは得意気に言う。

「フフ、フ。我が宝具こそは呪われし復讐の御旗！ この紋こそは悪しき竜、すなわち邪悪の象徴なり!! さあ、覚悟しなさいファヴニール。私のモットーはやられたら何倍にもしてやり返す。今こそ復讐者の本懐を遂げてやるわ!!」

ボロボロの体で、竜の魔女は高らかに呪いの言葉を紡ぐ。

そこに一切の慈悲は無く、祈る余地など微塵も赦さない。掲げた旗を大きく振りかぶって、その穂先を邪竜へと向けた。

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……  
『ラ・グロントメント・デユ・ヘイン  
吼え立てよ、我が憤怒』!!!!」

## 邪竜よ、その心臓を捧げよ

アヴェンジャーの詠唱に呼応し、地面を這うように炎が噴出しながらファヴニールに向かって押し寄せる。アヴェンジャーがこれまでに見せた炎の中では、恐らくはかつて見た事もないほどにとてつもなく巨大な炎の柱が、空を征くファヴニールの全身を瞬く間に呑み込んだ。

炎に纏わり付かれたファヴニールは逃れようともがくが、更に上空からは逃さんとばかりに無数の杭が襲いかかり、抵抗も虚しく邪竜の巨体は地面へと撃ち落とされる。

そして落ちていくファヴニールの体は、トドメとばかりに地面から突き出てきた無数の大きな杭——もはや鋼鉄の槍——により、全身余すことなく串刺しにされた。

それはまるで、この世の地獄だった。

地獄と比喻しても遜色ない程に、凄惨で残酷で邪悪な光景に、私は戦慄する。

英霊が扱う宝具は切り札であると同時に弱点でもある。何しろその英雄を象徴する要素であり、真名を秘匿する聖杯戦争においては、自らの真名を露呈させかねないからだ。

だからこそ、宝具は確実に敵対者を仕留める事を念頭に置いた、一見必殺でなければならぬ。真名が明かされてしまうのだから、敵を取り逃がしてしまえば、そこから伝説や伝承から対策を立てられてしまう。

故にこそ、切り札でありながら弱点でもあるのが宝具。

そして、宝具がその英雄の象徴でもあるのなら、いま見せたアヴェンジャーの宝具はなんと邪悪なことか。

このジャンヌ・ダルクの過去を私は知り得ない。本来の史実のジャンヌとは到底思えない彼女の姿、言動、思考だが、今を見て完全に得心した。

竜の魔女を名乗るジャンヌ・ダルク。聖女には程遠い、昏き煉獄の

炎を携えた復讐の徒。

私の契約したサーヴァントは、おそらく本物のジャンヌ・ダルクではないだろう。

これほどまでに悍ましく深い闇を抱えている誰か。

ジャンヌ・ダルクであつてジャンヌ・ダルクではない者。

推測の域を出ないが、おそらく遠からずとも近からずといったところか。

確かに、彼女の宝具を見て恐ろしく感じた。

けれど、それよりも。驚く事に私は恐怖よりも頼もしさを強く感じていた。

あの絶望の塊であるかのような強大な黒竜を、アヴェンジャーは撃ち落とした。撃ち落としてみせた。

私が契約したサーヴァントは、こんなにも力強く、逞しい。それが何よりマスターとして誇らしく思えたのだ。

「フウ！ フウ……ガフツ！」

邪竜を見事撃ち落としてみせたアヴェンジャーだが、それまでに受けたダメージは無視出来るものではない。

満身創痍……を越えて、むしろ今の彼女は瀕死に近い、危険な状態だ。もう戦闘を継続していい段階はとつくに過ぎている。

後で知った事だが、アヴェンジャーが真名解放してみせたあの宝具は、敵の攻撃を何倍にもして跳ね返す効果を持つそうだが、あの特大ブレスの質量全てを反射する事は不可能だった。故に自身のダメージ覚悟で宝具を使用したらしい。

まさに捨て身の覚悟だ。一歩間違えれば、宝具を放つ前に自分が死んでいたのだから。

咯血が酷く、全身からの出血は今も続いている。放っておけば数分と保たずアヴェンジャーは死ぬ。

私は即座にアヴェンジャーの元へと駆け寄り、コードキャストで回復を――

「ツ！！ バカ、来んな!!!」

一瞬、何が起きたか分からなかった。

最初に、何かに突き飛ばされたような衝撃があった。それから間も置かずに、頬に熱く滴るものを感じた。

ネバこくて、鉄臭い——血の匂い。

訳も分からず、顔を上げると、何が起きたのかを理解させられた。

「あ、ああ、アア……………」

私の目の前には、腹を大きな竜爪に穿かれたアヴェンジャーが、私を庇うようにして立っていた。

ソレを理解した瞬間、頭の中が真っ黒になる。思考が回らない。脳の処理が致命的なまでに追い付かない。体が麻痺したように動かない。

「ハッ、ハッ…………油断、したつ…………」

口と抉られた腹から止めどなく血を垂れ流すアヴェンジャー。さつきまでの出血量など比にもならない程の失血量。

間違いなく致命傷だった。

「アレ、を…………喰らって、まだ…………生きて、たか…………ファヴ、ニール…………ゲボツ…………、やるわ…ね」

アヴェンジャーは死にかけているというのに、笑いながら邪竜に視線を送った。どこか狂氣的な筈の光景は、どこことなく穏やかな絵画にも映る。

ファヴニールは動かない。私を狙った攻撃は、おそらく最期の一撃だったのだ。今際の際に放ったマスターを殺す為の攻撃は、マスターを守らんと立ちはだかったサーヴァントにより防がれた。

その結末に、邪竜はどこか不満そうに、しかし誇らしげに、静かに臉を下ろし、永久に果てた。

ファヴニールの死と共に、その巨体も消滅する。そして、アヴェンジャーの腹を塞いでいた竜爪も同時に消え去り、支えを失ったアヴェンジャーはその場に崩れ落ちる。辛うじて血が溢れ出る事を防いでいたものが取り払われてしまったのだ、当然ながら流血が勢いを増す。

血がどんどん溢れ出る。血の海が彼女を中心に広がっていく。私では止められない。アヴェンジャーの顔色がどんどん土気色を帯びていく。

死がそこまで迫っている。避けようのない絶対の死。

彼女が死ねば、私も終わる。私たちの戦いは、ここで幕を下ろす事になる。

嫌だ。イヤだ。いやだ!!

まだ私はアヴェンジャーと一緒に戦いたい!

言いたい事も聞きたい事も、たくさん残っている!

あの時、こんな空っぽな私なんかの為に手を取ってくれた彼女の旅路を、こんな所で終わらせる訳にはいかない……!!

私はまだ、彼女へと何も報いる事が出来ていないのだ……!!

震える手で自らの頬を殴り、私は止まっていた脳を無理やり再稼働させる。

魔力はまだ有る。なら出来る事をやる。

回復のコードキャストを重ねがけ、治療を継続して行く。命を救うまではいかずとも、効果的な対処法を見つかるまでの延命にはなるはずだ。

その間に、何としてもアヴェンジャーを助ける方法を見つけなければならぬ。

何かないか。頭を動かせ。記憶を辿れ。利用出来るものを見つければ。たとえ私の命を削っても——!!!

「……………」

アヴェンジャーの呼吸が、心臓の鼓動がどんどん弱くなる。既に意識も無い。残された時間は僅か。

何か、何か手は……!!

……………、そういえば。

一昨日のゴーストは倒した際に何か落とした。もし、今回も同様に何か落としたのだとしたら。

それが、アヴェンジャーを助ける事が出来る可能性があるとしたら

！  
私はコードキヤストを止めず、邪竜の消滅した跡に目を凝らす。何か落ちていないかと一縷の希望を抱いて。落ちていてくれと必死に祈って。

「——っ、あ」

それは有った。人間のソレとは桁違いの大きさで、死してなおも脈打つ力強い鼓動。魔力を半永久的に精製し続ける炉心。

ドラゴンハート  
邪竜の心臓。

コードキヤストを一旦止めて、私は急ぎそのファヴニールの心臓を取りに行く。大砲の玉の5倍ほどはある大きなそれを胸に抱えて、未だ脈打つ不気味さを気にも留めずに、私は無心でソレをアヴェンジャーの元へと運んだ。

アヴェンジャーの体は既に消滅が始まっている。途中、急に力が抜けて転倒しかけた際に気付いたが、私の足も消滅が始まっており、既に感覚も無くなってきている。少しずつ存在が薄れノイズに塗れていくその様は、これまで私が屠ってきた対戦相手の消滅する時のアレによく似ていた。

つまり、もう猶予は僅か程も無い。

(この心臓を、どうする……?!? これをどうしたらいい……?!? どうすればアヴェンジャーを助けられる!?)

正常な判断が出来ない。猶予が無い事が、私をより焦らせる。

だから、だろうか。

常人ならまずしない事。考えもつかない事を——

——私は無意識のうちに、その竜の心臓に喰らいついていた。

口の中が血生臭い。吐きそうな程の鉄の味が口に広がる。魔力を精製し続ける程に常に躍動している邪竜の心臓は、まるで鉄のように硬い筋肉の塊だった。歯が折れそうになりながらも、そして折れようととも涙を堪えて、噛み千切った邪竜の心臓を口の中で必死に細かく分割し、それをアヴェンジャーに口移しで飲ませる。

特に考えがあつての行為ではなかった。本能的に、咄嗟に、コレを彼女に食べさせれば助かるかもしれない。そんな意味の分からない理屈で、体が勝手に動いていたのだ。

未だに魔力を滾らせながら脈打つ邪竜の心臓。コレを使うにしても、私には魔術師としてのスキルは無い。故に、直接アヴェンジャーにコレを摂取させるには、この方法しか無かった。

魔力炉とも言うべき竜の心臓を口にしたからか、口の中が焼けるように熱い。火傷で爛れたかのような酷い痛みに襲われるが、私はそれでも咀嚼を止めなかった。

可能性はもうコレしかない。コレに縋るしかない。コレに賭けるしかない。

神様でも仏様でもなんでもいい。この際、悪魔でも構わない。

ファヴニールという脅威を打ち払ったアヴェンジャーに、どうかその偉業を成し遂げた彼女に、それに見合っただけの酬いを。

死闘の末にこんな幕引きだなんて、あまりにも理不尽だ。

しばらく竜の心臓をアヴェンジャーに飲ませ続け、私の口の間が感覚が無くなってきた頃、異変に気付く。

消滅しかけていたはずの自らの体は未だ健在で、アヴェンジャーも同様に身体の消滅が止まっていた。

それどころか、大きく空いていた腹の傷も少しずつ修復されている。血色は悪いが、呼吸も落ち着いており、鼓動も戻ってきていた。

「——ッ!?!」

私はアヴェンジャーが一命を取り留めた事に安堵の息を漏らす。と同時に、声が出せない事に気付いた。

口元を触ってみると、手にはべつとりと血が付着し、その上で激痛が走る。口の中の感覚は失っていただけ。口から垂れている血は、邪竜の心臓から溢れた血だと思っていたが、実際は私も流血していたらしかった。

思い出したように、遅れて嵐のような痛みが口元を襲う。さっきまでは必死であったがゆえに、我武者羅に心臓に齧り付いていられたが、もう無理だ。我慢出来ない。



安心したせいで、緊張の糸が解れた私は、アヴェンジャーを救った代償とばかりに激痛に見舞われた。

「!!!」  
痛みのあまり、私はその場にのた打ち回り、そして痛みには耐えきれず気を失った。

薄れゆく意識の中で、最後に視界に映ったのは、半分以上食い千切られてなおも、未だ生きているかのように脈動する邪竜の心臓だった。

ふと、微睡みから目覚めた。

記憶が途絶えている。意識を失う直前までの私が何をしていたのか。

……そうだ。思い出した。

ファヴニールと戦って、宝具の真名解放で倒したと思ったら、結局は倒しきれてなくて。

私を回復させようと近寄ってきたマスターを、ファヴニールが死ぬ間際に道連れにしようとしたから、それを庇って……。

「マスター？ マスター!! 返事しなさいよ!!」

重い体をどうにか起こし、状況把握に努める。マスターは返事が無いので心配したが、私が消滅してないという事は、つまりそういう事だろう。

案の定、私のすぐ近くで気絶して倒れていた。口元は血塗れで、よく見ると口周りが焼け爛れたようになっていた。

マスターと私の間に挟まれるようにして、何かの臓器らしき肉塊が落ちており、私はその瞬間に何が起きたかを理解した。

「あー……。なるほど。やったわね、やったのねアンタ。よくもまあ、やってくれたわね」

あの致命の一撃を受けて、私がまだ生きている理由が分かった。竜の心臓を喰らったからだ。それも、竜種の中でも最高位に属する邪竜ファヴニールの心臓を。

とはいえ、ムーンセルが作り出した再現体ではあるが。本物までとは行かずとも、しかしその効力は人智の域を逸している。

体の内を流れる血液の全てが炎のように熱く、全身に魔力が漲っている。英雄シグルドは倒したファヴニールの心臓を喰らい、それにより無敵の力と大いなる智慧を得たと聞くが……。

「イツツ……。これは身体に慣らすまで結構掛かりそうね。にしても……」

死にかけて。恥ずかしながら切り札を切った上で邪竜を仕留めきれなかった。幾ら初期化されて霊基修復中の身とはいえ、我ながら情けないコトだ。

けれど、それでも得るものは確かにあった。

決戦を前にこのパワーアップは嬉しい誤算だ。恥を晒した上に死にかけて甲斐もあるというものだ。

「……………はあ」

どれだけ意識を失っていたか分からない。周囲に他の敵性体は存在しないと確認するや、気が抜けて体は再度倒れ込む。マスターを抱えて帰還しようかとも思ったが、それが出来る体力も最早残っていない。

仕方がないのでマスターが目を覚ますのを待つとしよう。

「——『竜種改造』。これから先、もはや私たちにまともな未来が待つ事は無いと思うコトね、マスター」

「…………、くくくッ!!」

痛みで目が覚める。

一瞬、何がなんだか分からなかったが、すぐに思い出した。

アヴェンジャーが助かったと思ったのも束の間、彼女を助けた代償に私も負傷して、その痛みで気絶していたのだ。

痛みがぶり返してくるが、もう気絶する程ではない。目覚めたら傷が治っているとか、電腦世界でも流石に無かった。

「起きたのね」

声に振り向くと、アヴェンジャーが片膝を抱えるようにして座り込んでいた。見える範囲では、大きな傷は塞がっているようだ。

「――、――」

良かった、と言いたいが口の痛みで言葉を出せない。

アヴェンジャーもそれが分かっているようで、私が返事をしない事を咎める事はなかった。

「話せないでしょう、その口の傷じゃ。傷を治す為にも、さっさと帰るわよ。ほら、リターンクリスタル使いなさいな。パキツと行ってパキツと」

なんなんだ、そのグイツといけみたいな言い回しは。

などと、しようもない事を思えるくらいには、私も余裕を持っていて。と言っても、痛みは全然引いていないのだが。

リターンクリスタルを端末から呼び出し、手の平の上で握り潰す。視界が光に包まれる中、私はふと邪竜の心臓が有った所を見た。

けれどそこには血の跡しか残されておらず、私が口にしたはずの心臓は、夥しい量の血痕を残すのみで、跡形も無くなっていた。

ある程度回復したアヴェンジャーと一緒に肩を寄せ合いながら、私たちは保健室へと向かう。足取りはまさしく瀕死のそれで、すれ違うNPCや他のマスターからはギョツとした視線を必ずと言っていいほど浴びせられていた。

目的地の保健室では案の定というか、桜からも、

「な、なんですか、その傷は!？」

私を見た途端、桜は顔を真っ青にして私の腕を強引に引き、ベッドへ横にさせられる。当然、隣のベッドに居たラニにも見られてしまう。

それはもう、目を見開いて、ラニにしては珍しく私の顔を驚いたような表情で見つめたままフリーズしていた。

「とりあえず口元の傷を治してやって。あとバイタルチェックも。コイツ、竜の血を少なからず飲んでるから」

遅れてベッド前に来たアヴェンジャーの言葉を聞いて、桜は卒倒しそうになるのをギリギリ持ち堪え、慌てて準備に取り掛かり始める。ラニも事態を呑み込めたようで、さつきまでの驚愕は消え去り、いつもの冷静沈着な彼女へと戻る。

「たしか、大型エネミーの討伐に行くのだとお聞きしていました。……。マスターである岸波さんまでも負傷するとは、それほど強いエネミーだったのですか？」

ラニの疑問に今の私は物理的に答えられない。なので、代わりにアヴェンジャーが返事をしたのだが、

「そうね……。コッチがマスター共々死にかけるくらいには強かったんじゃない？ でもま、竜退治なんてそんなモノでしょう？」

軽口を叩く風だが、なんとなくアヴェンジャーの声音からは清々しさを感じた。長年の憑き物が落ちたというか、そんな感じだ。

と、そこへ治療の仕度を終えた桜が割り込んでくる。アヴェンジャーは脇に避け、空いている椅子に適当に腰掛けた。

「それでは治療を始めます。あとアヴェンジャーさん、あなたも重傷だと思えますので、身体検査にバイタルチェックをさせていただきますから。明日は決戦なんですよ!？ それなのに二人ともこんな無茶をして！ 私だって、たまには怒りますよ、もう!!」

どうやら桜の逆鱗に触れてしまったらしい。

これは徹夜でお説教も覚悟しておいたほうがいいかも……。

結論から言って、私の身体は少し頑丈になっていた。

少しの血を飲んだ程度だが、相手が悪かった。邪竜の血は、他の竜種よりも遥かに濃い魔力を持ち、そしてその性質が原因との事だ。

邪竜ファヴニールは元々は人間から竜に転じた存在。つまり、人から竜に変質した存在だ。そんな竜の血を飲んだのだから、身体に変化が起きるのは当然と言えば当然の事だった。

少し頑丈になったと先程私は言った。それは間違いではない。でも、正確には少し違う。もっとはつきりと言おう。

私の身体は、竜化の傾向がある。

とはいっても、飲んだ血の量と、桜による早めの対処のお陰で、せいぜい皮膚に数か所ほど竜の鱗が生えた程度。もっと処置が遅れていれば、手足は完全に竜のものへと変貌していた可能性があったらしい。なにそれコワイ。

それで、血を飲むどころか、心臓を喰らってしまったアヴェンジャーはというと、私よりも竜化の傾向が強くなってしまった。

全身の皮膚の半分未満が竜の鱗に覆われ、右眼は獣の眼、とりわけ猫科のものに近い形状へと変質していた。竜眼、という竜種に特有の瞳なのだろうか。

だが、一番の変化は右側頭部から突き出るように生えたツノだった。

これに関しては、桜の診察中に突如生えてきたようで、どうにか竜化の進行を抑えているが、このままではやがて抑えきれなくなるらしい。

抑える方法もあるにはあるが、今の私たちには現実的な方法ではなかった。

霊基再臨を完遂する事。霊基さえ強化出来れば、身体を蝕む竜の因子に抵抗出来るだろうと桜は語った。

けど、それには素材が足りない。私たちが手に入れた再臨の素材は『虚影の塵』と『英雄の証』のみ。それだけでは、きつと霊基を最終段階にまで持って行けないだろう。

「どうしよう、このままじゃアヴェンジャーがファヴニールに……」

「あー……。あ。忘れてたわ」

ベッドでうんうん唸りながら心配する私を余所に、アヴェンジャーはポンと両手を叩いて一言。この一大事に何を呑気な事を言っているんだ。そう思いながらも、何を忘れていたのかと問いたですと、「霊基再臨。一回は出来るわよ」

などと抜かすのだった。

「はっ」

「ほら、昨日だかにとっておきの朗報があるって言ったヤツよ。あの後すぐにアイツらと一悶着あったから言いそびれて、そのまま忘れてたのよね」

「ハア~~~~~!!?!」

なんでそんな大事なコトを忘れてるのこの竜の魔女さんは!?

でも、それが本当なら光明が見えてきた。

「確かに。完全な竜化の抑制には最終再臨させる必要がありますが、一度だけでも再臨を果たす事で竜化を多少なりとも遅らせる事は可能でしょう。邪竜に完全に変貌してしまうまでの猶予は生まれるはずです」

隣で話を聞いていたラニも賛同してくれた。

誰かにお墨付きを貰えると嬉しいよね。

だがしかし、ここに来て、聖杯戦争を勝ち抜いていく他に、困難な素材集めも同時にこなしていけないといけないという、割とキツイ展開になっている事に、この時の私は浮かれていてまだ気付いていないのだった。

今日は疲労も大きいので、霊基再臨は明日の決戦前に行うという事に決めて、私たちはマイルームへと戻る。

なんだろうか、ここ最近毎日のように疲労困憊で一日を終えているような気がする。

「少し待ちたまえ」

——その道中で。

不意に言峰に呼び止められる。階段を上りかけていた私とほぼ同じ目線の高さで、あの胡散臭い神父の顔が目に入る。

身長の高さは即ち威圧感でもある。相変わらず妙に緊張させるオーラを醸し出す言峰に、私は何用かと問い返した。

「何の用か、と問われれば、それはもちろん決まっている。今回の趣向、楽しんでもらえたかな？ 若きマスターよ」

趣向……、その言葉で思い出すのは、あの厄介極まりなかったモンスターハントだ。

楽しかったかと聞かれれば、間違いなくNoだ。死にかけたのにアレで楽しかったと答える輩は戦闘狂くらいなものだろう。

と、それはさておき。重傷を負ったが、私たちは課された試練をなんとか乗り越えた。となれば、言峰が声を掛けてきたのは約束の報酬マトリクスをくれるとか、そんなところか。

「課題はクリアだ。おめでとう、とひとまずは言っておこう。では、ルール通り相手の情報を一つ開示する」

言峰が此方に手を翳すと、ポケットの中の端末が振動するのが分かった。データが送信された証だろう。

「さて、猶予期間も今日で終わりだ。明日の決戦に向けて、悔いの無いように最後の準備を整えてくれたまえ」

もう用は済んだとばかりに、神父はさっさと何処かへ去って行く。此方としても、もうスタミナ切れなので長話に付き合わされないだけ、ありがたかった。

端末は後で見るとして、階段を上りきり、そこからは邪魔も入る事はなく、ようやくマイルームへと戻ってきた。

アヴェンジャーは戻るなり装備を重そうに脱ぎ捨て、横になるや、すぐに眠りに落ちる。私やラニ、桜の前では気丈に振る舞っていたが、実際のところは、それだけ疲れていたのだろう。

まあ、無理もない話だ。何せ死闘の末に、本当に死にかけたのだから。九死に一生を得てピンピンしてたら、それはもう体力オバケである。

改めて、無防備に眠るアヴェンジャーの肢体に目を向けるが、やはり身体中に竜化の傾向が見て取れた。私がした事は、決して間違いはなかったと思うが、それでも大きな代償を伴っていたのだと、今更ながらに痛感させられた。

「…………ふあ。私も、眠い…………。…………。」

キャスターのマトリクスを見るつもりだったが、アヴェンジャー同様に私も既に限界だった。

一度体を横にしてしまうと、強烈な睡魔が私を眠りへと容赦なく誘う。マトリクスは真名を推理する時に見ようと決めて、私は微睡みを甘受する。

泣いても笑っても、明日で四回戦は終わる。

未だ正体が掴めないレイシアとそのサーヴァントとも、ついに雌雄を決する時が来るのだ——。

いつもの通り目が覚める。

決戦の日の朝。支度を済ませ、マイルームを出る。校舎は静寂に包まれている。マスターも、NPCも、生活音はその一切が消失していた。

この静けさにも慣れたもので、特に何も感じ入る事もなく、まずは教会へと足を向ける。昨日のアヴェンジャーの話が本当なら、霊基再臨が出来るはず。



決戦まで時間はまだある。先に済ませて、少しでも新しい霊墓の状態を身体に馴染ませてもらうのが目的だ。

「いよいよ決戦の日だが、準備は全て整ったかね？」

階段を降りてすぐ、背後からの声に振り返ると、いつものように言峰が立っていた。

「準備はまだあと少しつてところ。今から教会に行こうと思って」「なるほど。それはいい。出せる力の全てを以て決戦に臨む——それこそSERAPHが求める人間の在り方<sup>デー</sup>というものなのでね。では、準備が出来たらアリーナまで来たまえ。なに、急ぐ必要は無いとも。まだ対戦相手も来ていないのだから」

言うだけ言うと、彼は私の前を横切り、エレベーターの前で静かに佇んだ。いつもながら、本当に機械みたいな男だと思ってしまう。

言峰との会話も切り上げ、私は真つすぐ教会へと歩いていく。保健室は当然ながら閉鎖され、ラニに挨拶はもはや出来ない。

だが、約束した。勝つてまた会いに行くと。

ならば、決戦前の挨拶など不要だ。今生の別れにするつもりは欠片も無いのだから。

教会も静かだったが、校舎に比べると人の気配がまだあるだけマシか。

教会の奥、祭壇の前では蒼崎姉妹がいつも通りの場所で、いつものように退屈そうに座っていた。

私という来訪者が視界に入ると、姉妹はそれぞれ違った反応を示す。

姉の方は、チラリとこちらを一瞥するだけで、特に声を掛けてくるでもなく、黙々と煙草を吸っている。黙々と煙草……。モクモクと煙草を吸っている。別にオヤジギャグではない。決してない。

妹の方は、私を笑顔で出迎えてくれていた。だが、それは好意から来るとかではなく、単に暇潰しのオモチャがノコノコとやって来た……。のような感覚に近いだろう。

「やあ！ ちょうどヒマしてたところだったのよ！ それで、決戦前に最後の魂の改竄しに来たの？」

「えっと、今日はそれだけじゃなくて……」

意気揚々とコンソールを開きながら、指をウネウネとさせる青子だったが、魂の改竄以外にも用があったのが意外だったのかピタリと指が止まり、神妙な顔をしていた。

「他にも用事？ 何かしら」

「ふむ……。用件は改竄だけではない、と。……ああ、アレか。キミのサーヴァントに頼まれていた件だな。ならば不肖の我が妹に任せるのはいただけないな。決戦前にサーヴァントが炭化しては目もあてられない。どれ、幸いにも今は手が空いている。受け持ってやろうじゃないか、霊基再臨を」

青子はピンと来ていないようだったが、橙子は心当たりがあったらしい。自然な流れで貶された青子は、今にも殺しに掛かりそうな睨みを利かせた後、橙子からファイと視線を切る。

えらく不機嫌そうなので、魂の改竄は少し時間を置いてからにしたほうが良いだろう……

「さて、霊基再臨だな。本来なら、素材となるのは地上ではまず手に入らない代物ばかりだが、ここは電子の海だ。SERAPHのデータベースには、もはや地上からは失われた魔獣や竜種、霊魂などに依る貴重な素材も無論揃っている。かといって、それらが出力され物質化するのにはムーンセルにおいても稀な事だが……」

そう言つて、私をジツと見つめる橙子。普段なら軽い挨拶程度しかない橙子に見つめられて、少し居心地が悪くなる。なんというか、むず痒い。

「キミは運が良い。何せ、そんな超が付くほどに貴重な品を手にしたんだ。私がデータを閲覧した限り、過去に幾多と繰り返されてきた月の聖杯戦争において、霊基再臨の素材を己の力で得た事のあるマスターは、トワイヌという男がたったの一人だけ。それほどにキミは運が良いのさ」

そんなに豪運だったのか私…!!

でも、運をそこで使い果たしていいそうで怖くもある。勝負は時の運とも言うし、どうか使い切っていないでくれ、私の運……。

「ま、それでも霊基再臨したって負ける時は負けるし？　だからこそ『魂の改竄』は抜きがたくてね。ほら、さつさとそつちの用事なんて済ませて、おねーさんに改竄を任せなさいな！」

青子が縁起でもない事を言い出している。橙子はそれに大袈裟かつわざとらしい溜め息を吐くと、スイッチが入ったかのように目付きが変わる。

その見た目も相まって、仕事の出来る女オーラ全開といった感じだ。

「馬鹿が騒ぎ出すと煩わしい。どれ、手早く済ませてしまおう。持っている素材を出してくれ」

促され、私は端末から『英雄の証』と『虚影の塵』を取り出した。

改めて、私の持つ素材を横からアヴェンジャーが覗き込んでくるのだが、自分で霊基再臨が出来ると言っておきながらも怪訝そうな顔をしていた。

「それにしても、ホントにこれだけで再臨出来るワケ？　竜の牙とか要らないのかしら？」

「それは地上ならの話だ。ここは電子の海。データの世界。SERAPHに限って言えば、そこいらに漂う電子情報を基にして、必要な素材数はある程度の誤魔化しが利くのだよ」

「なにそれ便利過ぎない？　でも、不純物が混ざりそうでちよつと嫌なんだけど。……まあ、再臨出来るんならそれでいいんだけど」

橙子の説明に納得したのか、してないのかよく分からない反応で返すアヴェンジャー。

私としては、安全が保証されているなら、アヴェンジャーを強く出来るのだし問題ないのだが。

橙子に素材を渡し、彼女はそれらを祭壇に載せ、宙に浮かぶコンソールの操作を行う。置かれた素材は消え、代わりに祭壇を囲むように光の陣が現れる。

「……、よし。ではアヴェンジャー、祭壇の前へ。これより霊基再臨の儀を執り行う」

アヴェンジャーは指示された通り、祭壇の前——光の陣の中心で立つと円陣から眩い光が発せられ、瞬く間に円陣は光帯へと変化した。アヴェンジャーの全身も、光に覆われ目視出来ない。

橙子の方を見ると、特に変わった様子は見られないので、この現象は儀式の一環であるらしい。

「……それにしても。まさか本当に再臨用の素材を持つてくるとは。私は半ば冗談のつもりであの時『虚影の塵』を渡したんだがね」

少し呆れたように、しかし感心したように。

橙子は無表情のまま、コンソールを操作しながら眩いていたが、私には彼女の口元がほんの僅かにだけだが、綻んでいるように見えた。

——数分が経った。

光帯が収縮を始め、やがて消えていく。

光が消えた後に残ったのは、新しい力を手にしたアヴェンジャーの姿だった。

外見の変化と言えば、これまで身に付けていたボロボロに擦り切れたマントが無くなった程度で、然程変わりがないように見えるが、重要なのはそこではない。

以前のアヴェンジャーとは比べるべくもない程に、今の彼女は魔力に満ち溢れていた。ともすれば、精神力の弱い者では、この強大かつ邪悪な魔力にあてられ、意識を失ってしまうのではないか。

そう思わせるだけの力強さを、今のアヴェンジャーからは感じられた。

「……ん。どうやら問題無さそうね。再臨前の2倍くらいは強くなってるんじゃない？」

身体に不具合が無いか確かめながら、アヴェンジャーは祭壇から離れ、私の元へと戻ってくる。

「成功したようで何より。まあ、元より失敗する余地など無かったがね。今の姿を見るに、竜に関する厄介事を背負い込んでいるようだが……ひとまず、その竜化の進行も減退しただろうさ。さて、気紛れは

ここまでだ。そろそろ私も自分の要件に戻らせてもらう。あとはこの愚妹に頼んでくれ」

橙子はそれっきり、こちらに構う事なく、モニターで集中して何かを見ているようだった。

再臨も終えて、次は魂の改竄だ——というところで、ふと青子の方を見ると、そこに彼女が居ない事に気付く。どうやら不貞腐れて、再臨の儀式をしている間に席を外したようだ。

なんとも自由な人だなー、などと思っていると、教会の扉が開く音がした。そちらを見れば、何やら困ったような顔をして青子が戻ってきたところだった。

なんとなく、青子がそんな顔をするのは珍しいと思いつつ、私は魂の改竄を青子に依頼する。

「あ、再臨終わったんだ。んじや、サクツと終わらせちゃいましょ」  
すぐに明るい表情に戻ると、ツカツカとこちらに歩み寄るや否や、即座にアヴェンジャーを祭壇にぶん投げ、すぐ作業に入る青子。

前振りもなく、いきなりぶん投げられたアヴェンジャーはかなり不服そうだが、とりあえずは黙って施行を受けている。

さっきの青子の困った顔が気になり、このまま待っているだけというのもアレなので、何かあったのか聞いてみる事にした。

「さっき席を離れてる間に、何かあったんですか？」

「へ？ ああ、ほら私ってば此処にはキナ臭い未来を感じたから来たって言ったじゃない？ それで、ちよつとさっきにそのキナ臭い感じが外からしたから、見に行つてたワケ。でも噴水広場でマスターが一人座つてただけで、何も変わった事は無かったのよね。こんな辛気臭い教会でそのイカれ人形師とずっと居るせいで、私のリーダーも鈍ったのかしら？」

思い切り悪口を言われている橙子は、見事なまでに我関せずと、会話に一切入ってくる気配はない。多分もはや慣れっこなのだろう。

それにしても、キナ臭い未来が何かは分からないが、青子が気にするくらいだし、私も気になるな……。

少しして魂の改竄も滞りなく終了する。決戦前の下準備も、これで

後はキャスターの真名を明かすのみ。

「はい、お疲れさんつと。……あ、ちよつと待つて。これから決戦に赴く年若きマスターちゃんに、お姉さんから一つアドバイス」

さあ戻ろう、というところで、青子に呼び止められる。いつになく真剣な眼差しに、私は自然と佇まいを正していた。

「物事には何にでも表と裏があつて、普段見えているのは表でしかない。たいていは裏に本質が隠れているものよ。で、それは当たり前前のコトなんだけど、だからつて裏側だけがその全てじゃない。表裏一体つて言葉があるでしょ？ まさしく、表ありき裏ありき。どちらか片方だけを見ても、本当にその物事の本質を捉えられる訳じゃないつてコトを覚えておきなさい」

最後に人懐こい笑みを浮かべて、青子はコチラに手を振つて「頑張れ」とエールをくれた。

私は頭を下げ、それを背に受けながら教会を後にする。

多分、これから敵サーヴァントの真名を推理する私への助言だったのだろう。もしかしたら、私がまだキャスターの正体を掴めないでいる事が、顔に出ていたのかも。

表裏一体。確かに、キャスターの裏側が、あの鬼の姿であると仮定するなら、私はそこに思考が囚われ過ぎていたかもしれない。表側である、あの巫女の姿。アレも、彼女の本質……。

教会を出てマイルームに向かう。

と、出てすぐに、噴水広場のベンチに一人腰掛ける少女が居る事に気付いた。

そういえば、青子が先程マスターが一人居たと言っていた。きつと彼女の事なのだろう。

彼女は一人、何をするでもなく、ただジツと噴水を眺めている。

服装こそ私と同じだが、黒髪セミロングに、目を引く程度には整った顔付き。きつと凜やレオたちと同じく、カスタマイズしたアバターだ。

噴水を眺める彼女には、どこか底知れない冷たさを感じる。何故、

そう思ったのかは私にも分からないけれど。

「……………」

私は彼女に話しかけるでもなく、黙って前を通り過ぎる。

彼女も、私に気付いているはずだが、視線はそのまま微動だにしない。なかつた。

まるで、この噴水広場に最初から在ったオブジェのように。

私はそのまま校舎に戻る。少し後ろ髪を引かれる思いもあったが、向こうにも接触の意思が無いなら、無理に話し掛ける必要もない。

「……………」

マイルームに戻ってすぐ、私は端末に手を伸ばす。

マトリクスは一通り揃えた。これでキャスターの正体に辿り着けなければ、もうどうしようもない。

「……………」さっきの噴水広場に居たマスター以外は、やっぱり誰とも会わなかつたわね」

アヴェンジャーが呟くように口にした言葉に、そういえば、と私も思う事があつた。

もしかしたら決戦の日に言峰や対戦相手以外に会つたのは、初めてではないか？

教会は機構として動いているので別として、校内で決戦当日に他人の姿はおろか、声すら聞かないのに。

「……………」なんか、嫌な感じがしたのよね、あの女。何が、とかは分からないけど。…………悪かつたわね、口挟んで。とにかく今は、あの鼻につくキャスターの正体を明かしてやろうじゃない」

アヴェンジャーに促され、私も思考を一本に纏める。今は決戦の事だけを考えよう。それ以外の事は、勝ち残った後で考えればいい。

まず、対戦相手について、これまでに分かっている事を一つ一つ確認しよう。

今回の相手……見た目は深窓の令嬢といった風の美少女、レティシア。口調は丁寧だが、中身は令嬢というにはアクティブ過ぎる性格の持ち主だ。

そして、そのサーヴァントはとてつもなく強力だった――。

あの巫女装束を纏ったサーヴァント。彼女が得意とするのは――

――呪術、だ。

とは言っても一概にどんな呪術であるかと説明が出来る訳ではなく、その手法、用途は様々だった。

結界を張ったり、人払いをしたり、銅鏡を用いた戦闘方法に、光を駆使した移動手段を持ち、それらをひとえに呪術と呼んでもいいのかも分からない。だが、キャスターは呪術使いである事は間違いない事実だ。

――次に。

キャスターは和装であり、最初は普通の人間と同じ見た目をしていった。だが、ふとした時。彼女は何らかの理由で暴走し、彼女がひた隠しにしてきたであろうモノが姿を露わにした。それは――

――鬼のツノだった。

額から突き出た、異形の証。それが彼女を普通の人間ではないと証明している。

かつて、日本には鬼が居た。鬼は筋骨隆々なイメージもあるが、確かに女性の鬼も居た。

故に、彼女は日本出身のサーヴァントで、鬼に由来のあるサーヴァントではないかと思ったのだ。

そして、彼女は自身が鬼である事を忌避している様子だった。でなければ、自らツノを忌々しいと言ったり、あの姿を隠したりしないだろう。

日本の英霊、女性の鬼、呪術を扱うキャスター。

今のところ分かっているのは、これくらいか……。



正直、これだけで真名を判断するのは難しい。

ここでようやく、私は昨日獲得したマトリクスを確認する。

見れば、キャスターの所持するであろうスキルが3つほど、マトリクスに追記されていた。一つは最初のエネミーを倒した報酬で、更にもう二つもあるのは、ファヴニールという難敵を倒した褒美みたいなものなのかも。

「……………ふむっ。」

『領地運営A……陣地作成の亜種。自身が領地と認識するだけで神殿クラスの陣地として容易に確立させる事が可能』

これは、つまりキャスターが領土を治めていた、或いはそういう立場だった事の証左かもしれない。

言われてみれば、傲岸不遜ながらも気品のある言葉遣いだったような気がする。お姫様というよりは、女王様というか。

「ふーん？ 偉そうだったものね、あの女。で、次は？」

隣から端末を覗き込むアヴェンジャーに急かされ、私は画面をスクロールして、次の項を見る。

『偽装召喚A……召喚された際、本来のクラスを偽り、違うクラスとして振る舞う事の出来るスキル。偽る事の出来るクラスは、自身が元来資格として持つクラスのみ。本来のクラスを隠し、偽装したクラスを特性として併せ持つ事が出来る。これは自身を召喚したマスターにも適応され、サーヴァント自身が明かさない限り本来のクラスはマスターであつても知る事は出来ない』

「……………え？」

これは、このスキルは……………!!

今までの前提が覆る。覆ってしまう。

聖杯戦争において、サーヴァントのクラスを知る事は、真名を知る次に重要なファクターだ。

相手がセイバーであれば、最優である故に相応の対策も必要とな

る。アーチャーならば、遠距離攻撃に警戒しなければならない。アサシンなら、マスター殺しの危険が出てくる。

こういったように、クラス毎に対策や対応の仕方を考慮しなければならないが、このスキルはそれら全てを無視すると言っても過言ではない。

つまり、聖杯戦争においてこのスキルは宝具に匹敵する切り札と言いつつ、超抜スキルだ。

そして、エネミーハントによる報酬としてマトリクスを獲得していなければ、私では辿り着けなかった真実でもある。

「ちよつと待ちなさいよ。これ、つまりはアイツがキャスターじゃないってこと!? いや、違うわね。キャスターでありながら、キャスター以外のクラスも併せ持つ——マルチクラスってワケ!？」

アヴェンジャーの驚きも分かるが、マトリクスが事実なら、そういう事になる。

私たちがキャスターだと思っていたあの英霊は、単なるキャスターではなかった。

キャスターであり、他の何かなのだ。あの女性は。

「暴走……。そうか、そういう事だったんだ……」

あの時に見せた暴走は、彼女が本来隠していたクラスの影響だったのだろう。

そう、バーサーカーのような、ではなかった。

キャスターであり、バーサーカーでもあったのだ、彼女は。

「あく、アレか。なるほど、抑えきれない狂化の影響が溢れた結果が、あの暴走ってコトね。しかもあの感じからして、マスターの方はアイツがバーサーカーだって事も知ってそうね。記述が正しいなら、自分からあの鬼の姿を晒したって事になるわね」

そう。あの姿はキャスター／バーサーカーにとって余人には見せたくない姿のはず。それをレイシアに明かしたという事は、かなりの信頼関係を築いているとも取れる。

とにかく、キャスターでもあるが、本来の彼女はバーサーカーだ、という事が判明した。

あと少しで、真名に辿り着けそうな気がする。  
逸る気持ちで、私は次の項へと指を進めた。

『姿隠しの王政……固有スキル。人前に姿を見せる事なく国を運営していた彼女がその逸話から獲得した特殊なスキル。如何なるスキルであつても正体を暴けない。ルーラーであつても、彼女の正体は掴めず、クラスを把握出来るのみ』

……これは、なんともまあ、凶悪なスキルの組み合わせだ。

本来のクラスを偽装し、その上で聖杯戦争の仕切り役であるらしいルーラーですらも、その真名は分からない。

おそらく、クラスを把握出来るといつても、それは偽装したクラスだ。

聖杯戦争において、このバーサーカーは敵対者に自身の正体を一切悟らせない存在となる。姿、能力からだけでは、バーサーカーである事すらも知り得ない。

徹底した情報の隠匿に、彼女がそこまでして自身の正体を悟られないという、とてつもなく強固で堅牢な意志を感じる。

——以上から、私はなんとなくだがバーサーカーの正体が掴めてきた。

銅鏡を用いた時代の生まれで、日本人であり、本来はバーサーカーではあるがキャスターとしての資格を有する巫女。

決定的なのは、最後に確認したスキル。

姿隠しの王政。

王政を敷くという事は、彼女は女王だった。

そして——私が知る限り、日本において姿を隠して王政を敷いていた、女王かつ呪術師は一人しか心当たりにない。

そう、バーサーカーの真名は——

——邪馬台国の女王、卑弥呼。